

生活文化と世相の変容に
かんする研究

—20 世紀日本の高度経済成長期を中心に—

1998 年 11 月

武庫川女子大学

高田 公理

第1部 時代をつらぬく生活文化と世相の変化の方向

第1章 ジェンダーをめぐる生活文化と世相の変容

第2章 時代をつらぬく「情報（産業社会）化」の趨勢

第2部 食生活・食文化の劇的変化

第1章 食生活・食文化の欧化と「日本的洋食」

第2章 食生活の「簡便化」と「趣味化」

第3章 日本におけるコーヒー飲用の100年

補論 食生活・食文化をめぐる「情報（産業）化」
の諸相

第3部 家庭生活と地域社会

第1章 「家父長制」とマイホーム主義

第2章 「共同体」と情緒安定の装置・制度系

第4部 労働と生産の現場における生活文化

第1章 職場の人間関係——近代化の完成と再編成

第2章 人生の転機——内部指向から他者指向へ

第5部 「遊戯化」する都市の盛り場

序章 都市と盛り場の「祝祭性」

第1章 都市の盛り場——「みせ」から「劇場」へ

第2章 飲酒文化における「泥酔の美学」の退潮

第3章 賭博——その技術革新・制度化・装置化

第4章 多様な金融商品の誕生と日本人の金銭意識

第6部 定着と遊動——その相互関係と生活文化

第1章 定着と遊動の人類史と20世紀

第2章 「移民」という一般生活者の海外体験

第3章 あたらしい交通体系と生活様式の革新

第7部 現代日本における生活文化の課題

第1章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像 ——「好奇心」の進化論によせて

第2章 京都の全域を「世界水準の大学都市」に ——21世紀をひらく「ザ・ユバースティ ・オブ京都」構想

生活文化と世相の変容に
かんする研究

—20世紀日本の高度経済成長期を中心に—

1998年11月

武庫川女子大学

高田公理

生活文化と世相の変容に関する研究

——20世紀日本の高度経済成長期を中心に——

武庫川女子大学(教授) 高田公理

序 論 研究の目的と方法	1
本研究が成立するまでの経緯／特別研究「伝統と変容」の 目的／「世相史」という方法／アナル学派 vs 世相史・考 現学・比較文明学／本研究の目的と方法——文献資料調査 ・参与観察法・面接調査 【参考文献】	
第1部 時代をつらぬく生活文化と世相の変化の方向	
第1章 ジェンダーをめぐる生活文化と世相の変容	11
はじめに——「女と男」というテーマ	
第1節 問題意識と概念としての「ジェンダー」の発見	12
高度経済成長と性をめぐる緊張の度合の変化／後天的に変化 する性／セックスとジェンダー：1970年代の発見	
第2節 近代工業社会におけるジェンダー	17
第3節 1975年をさかいに変容するジェンダーの文化	18
たがいに浸透しあう女らしさ・男らしさ／「女の時代」とい うみかたの背景と底流／大学における家政学部の変容——ふ たつの側面／女と機械物、女と文明の装置・制度系	
第4節 「女らしさ」と「男らしさ」の微妙な差異	26
文明の装置・制度系への対応の男女差／本格化する情報産業 社会とジェンダー	

第5節	男の領分をおかす女たち……………	29
	「のむ」——性差と酒のみ行動／「うつ」——賭博をあそび はじめる女たち／「かう」——欲望の解放と性のモラル／男 女の性感をめぐる能動と受動／変容する男の能動性と女の受 動性／均質化するしぐさと言葉づかい	
第6節	現代社会における女と男の損得勘定……………	39
	時代の谷間の損得勘定／女と男の金銭観のちがいと自由時間 のすごしかた／夫婦と親子をめぐる意識と関係の変化／変容 する「はたらき、かせぐ女性」のイメージ	
第7節	ゆらぐ現代の女と男の関係——むすびにかえて……………	47
	ゆらぐ女と男の関係をめぐる模擬実験／いわゆる「妻という 立場」をめぐる女性の ^{アンバランス} 愛憎	
	【参考文献】	
第2章	時代をつらぬく「情報（産業社会）化」の趨勢……………	55
第1節	梅棹「情報産業論」を再読する……………	55
第2節	情報産業社会のその後……………	58
	情報生産とその効率をめぐる個人的体験／工業社会の効率化 と「情報のメッセージ性」／情報化の第2段階と「情報のマッ サージ性」／「モノ」がみな「情報メディア」になる時代／ 情報産業社会をささえる資源とメタ資源／あたらしい情報を 生産するための3つの条件	
第3節	情報をめぐる日本文化の伝統と変容……………	72
	近代日本社会における書籍の性格の変容と推移／近代化がも たらした情報感受性の変容／現代社会に氾濫するマッサージ 型の情報／電子テクノロジーが情報メディアにもたらす変化 ／「文明史曲線」と「遊戯化曲線」という仮説／日本の情報 産業社会の現代的な特徴／梅棹「情報産業論」を補強する3 つの視点	
	【参考文献】	

第2部 食生活・食文化の劇的変容

第1章 食生活の欧化と「日本的洋食」	91
「日本的洋食」という概念／はじまった「和洋折衷料理」の模索／いわゆる「日本的洋食」の成立と定着（カレーライス・トンカツ・コロッケ）／洋食材料としての肉類と西洋洋野菜／日本的洋食の普及と浸透／日本的洋食の普及に貢献した料理模型／ラムネとカルピス——欧米由来の飲料の日本的再編成	
【参考文献】	
第2章 食生活の「簡便化」と「趣味化」	106
インスタント食品の登場と普及／冷凍食品とレトルト食品の普及／総菜販売業や外食産業の繁栄／料理情報の浸透と普及／「料理は趣味」の時代へ	
【参考文献】	
第3章 日本におけるコーヒー飲用の100年	119
第1節 「文明のみもの」としてのコーヒー	119
向精神剤（ナルコティクス）としてのコーヒー／日本に到来する以前のコーヒー	
第2節 日本におけるコーヒー飲用の100年	122
「特別なのみもの」としてのコーヒー／コーヒーの到来から第2次大戦の終結まで／喫茶店とインスタントコーヒー／第3のチャンネル——コーヒー飲料	
第3節 コーヒー文化の現在——むすびにかえて	130
【参考文献】	
補論 食生活・食文化をめぐる「情報(産業)化」の諸相	133

第1節	食文化の日本の特徴とその「知識情報化」	134
	食をめぐる知識情報の量的・質的増大の文化的背景／江戸時代に本格化する食の知識情報化／食の知識情報化とそれがも とめられる理由／第2次大戦後における食生活・食文化の変 容と知識情報化／食の知識情報そのものをあそびたのしむ	
第2節	進行する食の「感覚情報化」	141
	日本人の食生活・食文化にみる「雑食性」／食の感覚をみが いた「接吻容器」という仮説／情報産業社会の到来と食の感 覚情報化／「物流」の時代から「情報流」の時代へ 【参考文献】	

第3部 家庭生活と地域社会

第1章	「家父長制」とマイホーム主義	148
	はじめに——問題意識と本論文の位置づけ	
第1節	家父長制の概念と日本のイエ制度	149
	家父長制の概念規定／日本のいわゆる「イエ制度」	
第2節	規範としての家父長制的イエ制度の成立	150
第3節	家父長制的イエ制度の「神話」性と近代日本の社会変化	151
	成立直後に解体にむかう家父長制「神話」（明治時代）／家 父長「神話」をささえる社会的条件の弱体化（大正・昭和初 期）	
第4節	家父長制「神話」の復活と強制（第2次大戦期）	154
第5節	家父長制的イエ制度の法的解体（昭和20年代）	154
第6節	家父長制「神話」からマイホーム「神話」へ（高度経済成長期）	155
	ゆらぐ父の座、家庭生活を支配する妻／マイホーム「神話」 の成立と母子癒着	
第7節	「神話」としてのマイホームの崩壊（高度経済成長期その後）	159
	近代家族そのものの崩壊のはじまり／「つよい父親」という 神話への憧憬	

第8節	脱「神話」化する家父長制——むすびにかえて……………	162
	【参考文献】	
第2章	「共同体」と情緒安定の装置・制度系……………	166
	はじめに——問題意識と本論文の位置づけ	
第1節	ゲマインシャフトとゲゼルシャフト……………	167
	無意味な類型——ゲマインシャフトとゲゼルシャフト／「選 択縁」という概念が提起した問題／ゲゼルシャフトとしての 前近代日本の農家と農村	
第2節	国民国家の成立と「演出される共同体」……………	169
	時間的に転移されたノスタルジー／前近代の都市「自治」と 近代国家／軍隊と隣組——国家が演出した「共同体」	
第3節	大衆社会化状況のもとでの「共同体」……………	172
	高度経済成長期の日本企業／国民生活審議会と「コミュニテ ィ」／「新しき村」「山岸会」から「オウム真理教」へ	
第4節	情報のマッサージ性と「共同体」……………	176
	形骸化する現代日本の家族と家庭／共感と情緒的安定を提供 する「情報のマッサージ性」／アイデンティティとメタモル フォーゼ	
第5節	企業と地域社会をめぐる日米の比較……………	179
	日本とアメリカで共通する条件／日本とアメリカで異なる条 件	
	【参考文献】	
第4部 労働と生産の現場における生活文化		
第1章	職場の人間関係——近代化の完成と再編成……………	184
第1節	「職場の人間関係」の定義と起源……………	184
	本論考における「人間関係」の定義／「発見」された「職場 の人間関係」	

第2節	現代日本における「職場の人間関係」……………	186
	『気くぼりのすすめ』（1982年のベストセラー）／「職場 の人間関係」における葛藤と精神疾患	
第3節	「職場の人間関係」の制度的成立とその条件……………	188
	「男の世界」としてのサラリーマン社会／終身雇用制度の 起源と成立／年功序列に基づくタテ型ヒエラルキー／「滅 私奉『会社』」の行動規範の成立／「生産性向上」を至上 目的とするスケール・メリット	
第4節	高度経済成長後の企業活動をとりまく条件変化……………	192
第5節	現代日本社会における「職場の人間関係」の変容……………	194
	キメこまかな対応のできる小規模組織の再評価／人的資源 の評価基準の変化と年功序列型の終身雇用制度／ひろがる 横断的人間関係と「滅私『奉会社』」の行動規範／円滑な 自生的人間関係の成立を阻害する条件	
第6節	「職場における人間関係」をめぐる今日的諸問題……………	197
	【参考文献】	
第2章	人生の転機——内部指向から他者指向へ……………	200
	はじめに——人生設計と転機	
第1節	人生とその転機——その近代化と現代化……………	201
	人生設計が可能となる時代／人生の近代化・現代化と「転 機の意味」の変化	
第2節	現代日本の産業人111人の「人生の転機」……………	205
	考察のための資料と方法／「転機」の主な「契機」と「変 化」／現代業人の「人生の転機」の特徴	
第3節	明治・大正・昭和のビジネス・エリートの人生の比較検……………	211
第4節	むすびにかえて……………	215
	【参考文献】	

第5部 「遊戯化」する都市と盛り場

序 章 都市と盛り場の「祝祭性」	220
第1節 都市と都市化をかんがえる視点	220
都市のモデルとしての酒場と「都市」の意味／神殿都市としての原初の都市／中世都市から近代工業都市へ／近代工業都市の生活文化	
第2節 都市化の時代としての20世紀	224
地球的規模で進行した「都市化」／都市化をもたらす都市の魅力／ハレの行事——都市の祝祭性の原型／都市と盛り場——近世から近代へ	
第3節 情報(産業社会)化と「生活の遊戯化」	228
繁華街と盛り場——「商品とサービスの感覚情報化」装置／近代日本社会における「目にみえる都市化」／進行する「目にみえない」都市化	
【参考文献】	
第1章 都市の盛り場——「みせ」から「劇場」へ	233
第1節 「盛り場」とは何か?	233
第2節 近代日本における盛り場の成立と展開	234
盛り場・浅草の成立と特質／明治・大正時代の近代的な盛り場としての浅草／近代日本を象徴する盛り場としての銀座	
第3節 盛り場の衰退と復興——第2次大戦を中心に	240
第4節 高度経済成長と盛り場の「現代化」	241
並列して多極化し競合する盛り場／第2次大戦以前の新宿——盛り場への発展過程／闇市から日本最大の盛り場へ——戦後の新宿／「近代」を集積し「現代」につなぐ盛り場・新宿／盛り場として発展する渋谷・原宿・青山	
第5節 盛り場文化の変容——その近代化と現代化	249
日常化・世俗化・個別化する「ハレのあそび」／盛り場の成立とその「近代化」／盛り場の「現代化」——高度経済成長	

以後

【参考文献】

第2章 飲酒文化における「泥酔の美学」の退潮……………	257
はじめに——柳田國男「酒の飲みやうの変遷」とその後	
第1節 日本人の飲酒量と日本人がこのむ酒の種類と品質……………	257
増加する日本人の飲酒量／酒の味覚の高級化・多様化・	
洋風化・再日本化	
第2節 日本人が酒をのむ頻度と機会の変化……………	263
柳田國男「酒の飲みやうの変遷」から／「ハレの酒・ケの	
酒・スキの酒」という仮説	
第3節 酒場における「居酒屋」の諸形態とその変化……………	267
「酒場の一般モデル」とその諸類型／キャバレー、バー、	
そしてスナック／カラオケ・ディスコ・ピンクサロン	
第4節 カフェバーの出現と「泥酔の美学」の退潮……………	274
補論 居酒屋・おはなし・やりとり考——智恵とアイデアは酒場に芽ばえる……	276
【参考文献】	
第3章 賭博——その技術革新・制度化・装置化……………	281
はじめに——「賭博」とはなにか	
第1節 カルタ伝来のぜんご——近代以前の賭博……………	282
第2節 賭博とそのとりしまりの「近代化」……………	284
——明治維新から20世紀の到来まで	
第3節 公営賭博としての競馬の萌芽とその解体……………	286
——第2次大戦終結までの20世紀	
第4節 賭博の行政的な制度化と装置化——昭和20年代……………	289
第5節 公営賭博の大衆的普及と隆盛——高度経済成長期……………	291
第6節 日本社会の近代化・現代化と賭博——むすびにかえて……………	293
日本社会の近代化と賭博／「遊戯化」社会の到来と賭博——	
高度経済成長期以後の動向	

【参考文献】

第4章 多様な金融商品の誕生と日本人の金銭意識……………	298
はじめに——「カネをかう」ということ……………	298
「人びとがカネをかい始める」まで……………	299
制度化された「カネをうる行為」……………	304
「情報化するカネ」と多様化する金融商品……………	305
「情報化・記号化」する消費とバブル経済……………	308
今様「カネのかいかた」と現代世相の行方……………	310
【参考文献】	

第6部 定着と遊動——その相互関係と生活文化

第1章 定着と遊動の人類史と20世紀……………	316
第1節 人間——旅行をする動物……………	316
現代社会において爆発するツーリズム／人間はずっと旅行を してきた／旅と宗教の同型性——想像力の問題	
第2節 旅行の文化史……………	319
旅行の起源と近代以前の旅／観光と近代的なパック旅行の成 立／周遊と滞在——快樂と快適	
第3節 日本人の旅行諸形態の変遷……………	324
観光旅行の普及と発展／観光開発がはらんでいる両義性／ネ オ・トラベリズム——あたらしい旅のかたち	
第4節 現代日本における旅行とその周辺……………	328
非日常性、自然、文化、そして人間／情報産業社会における 観光とその意味／適切なる「もうひとつのツーリズム」	
【参考文献】	

第2章 一般生活者の海外体験——「移民」を中心に……………	334
第1節 日本人にとっての海外体験の諸類型……………	334

第2節	近代日本の移民たちがたどった道……………	336
	明治元年のハワイ契約移民から「排日移民法」まで／ハ ワイ・北米から南米・満蒙・太平洋へ／食糧難時代からブラ ジル移民の終焉まで／海外渡航の自由化と〈海外体験熱〉 時代のはじまり	
第3節	移民から海外移住・海外旅行へ……………	342
	——第2次大戦後の日本における海外体験の変質 食糧難時代からブラジル移民の終焉まで／海外渡航の自由 化と「海外体験熱」時代のはじまり	
第4節	日本の一般生活者の海外体験の類型と推移……………	346
	——形式・対象となる外国・動機などをめぐって 【参考文献】	
第3章	あたらしい交通体系と生活様式の革新……………	353
第1節	昭和時代の新交通——自動車と航空機……………	353
第2節	「情報メディア」から「実用的輸送機関」へ……………	356
	威信の象徴、オモチャ、宣伝媒体／円タクと乗合バス—— 昭和初期の自動車	
第3節	戦争と「経済戦争」に奉仕した貨物自動車……………	360
	はじまった自動車の国内生産と第2次大戦／自動車輸送が 鉄道輸送を凌駕する／「マイカー時代」から「石油ショッ ク」まで	
第4節	国土構造と産業構造を変化させた自動車……………	365
	都市的生活文化を「運搬」する自動車／情報産業社会の開 幕をつける自動車の普及	
第5節	昭和の新交通と新しい遊動民の時代……………	369
	「遊戯化」する人の移動・物の輸送と情報産業／国土全体の 「都市化」と「文化の輸送」／よみがえる「情報媒体」として の自動車 【参考文献】	

第7部 現代日本における生活文化の課題

第1章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像……………	378
——「好奇心」の進化論によせて	
はじめに——野生動物をながめる旅から……………	378
『歴史の終わり』と「最後の人間」……………	380
人間の魂のもうひとつの要素……………	384
好奇心は歴史をうごかせるか……………	386
好奇心の拡張——表現的好奇心……………	389
カラオケナイゼーション（自己表現遊戯）……………	393
主導的産業としての旅と観光……………	395
観光現象から人類文明をとらえなおす可能性……………	396
【参考文献】	
第2章 京都の全域を「世界水準の大学都市」に……………	399
——21世紀をひらく「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想	
第1節 本構想の全体像……………	399
「京都の未来」を構想するにあたって……………	399
命題① 日本には「本格的な総合大学（University）」が存在 しない……………	400
命題② 京都全体の大学をみわたせば、あらゆる分野の学部・ 学科がそろっている……………	401
命題③ 企業や市民生活に視野をひろげれば、京都の文化蓄積 は、さらに広範囲にわたる……………	401
命題④ 閉校した小学校のほか、工場や町家や寺院など、潜在 する空間資源が積極的に活用できる……………	402
命題⑤ 既存の「学部（faculties）」にくわえて「学寮 （colleges=『教授団』）」を整備する……………	402
命題⑥ 世界最高水準の「京都高等学芸院（コレージュ・ド京	

都) 」を創設する……………	402
命題⑦ 以上の事業を、市民トラストと企業メセナを誘導しながら展開する……………	403
命題⑧ 京都市は「独立自治体」をめざし、地域自治拡充の先頭に立つ……………	404
命題⑨ 言葉の本来の意味での「観光都市」をめざす……………	404
命題⑩ 「21世紀」をこえる「あたらしい千年紀」の想像力を……………	405
第2節 本構想の背景と実現可能性……………	405
(1) 本格化する情報産業社会における都市活性化の戦略課題……………	405
20世紀人類文明の3つの矛盾と2つの課題……………	406
『歴史の終わり』と「情報産業社会」……………	407
「あたらしい歴史」のうけ皿としての「文化」……………	409
(2) 「京都＝世界水準の大学都市」がみたすべき条件……………	411
文化創出の力動性——伝統への挑戦と異質性のであい……………	411
京都がはらむ「世界水準の大学都市」への可能性……………	412
第3節 本構想実現のための諸条件と補足的提言……………	413
(1) 「本格的な総合大学(ユニバーシティ)」のイメージ……………	413
(2) 京都に所在する大学がはらむ総合的な潜在力……………	414
(3) 京都に潜在する文化的蓄積とその可能性……………	414
(4) 閉校した小学校と宗教施設の積極的利用……………	415
(5) 「カレッジ＝学寮」がはらむ文化創造力……………	416
(6) コレージュ・ド・フランスと京都高等学芸院……………	417
(7) 無理のない「町家」の保全と利用……………	417
(8) 京都の自由な都市的生活と市民自治の伝統……………	418
(9) 歴史都市の都市改造と景観保全……………	418
(10) 「あたらしい千年紀」への想像力につながる事業……………	420
むすびにかえて……………	421

序論 研究の目的と方法

本研究が成立するまでの経緯

国立民族学博物館では開館以来、2種類の「特別研究」を継続して実施してきた。そのひとつは1978年に10年計画ではじまった「日本民族文化の源流の比較研究」であり、いまひとつは1981年に、おなじく10年計画ではじまった「近代日本文化における伝統と変容」（以下「伝統と変容」と略称する）である。これらの特別研究は、毎年、同館に、その内外から研究者があつまってシンポジウムを開催するという形式ですすめられた。

特別研究「伝統と変容」のばあい、初年度は同館内において基本方針の決定がおこなわれ、最初のシンポジウムが開催されたのは1982年のことである。それから9年間、筆者は合計9回にわたるシンポジウムのすべてに出席し、報告をおこない、論文を執筆した。このシンポジウム全体の成果は全9巻の論文集として公刊されている¹。

本論文『生活文化と世相の変容にかんする研究——20世紀日本の高度経済成長期を中心に』は、それら9論文を中心に、関連する主題をめぐって、おなじ時期に執筆した合計15編の論文をもとにして、その全面的な補筆・訂正をおこない、あらたに編集したものである。

特別研究「伝統と変容」の目的

「伝統と変容」の研究対象にかんして1982（昭和57）年、当時の同館館長であった梅棹忠夫博士は、つぎの3点を列挙している〔梅棹、1992：p.506〕。

第1に、研究の対象とする時代は今世紀初頭から現在にいたるまでの時代……。第2には、われわれの研究対象の主眼を都市におく……。第3には、現代日本における文化の変容を記述するだけでなく、それをなんらかの理論的枠組みでとらえる……。

これにつづけて梅棹〔1992〕は、その目的を「柳田をのりこえる」ことだとのべる。ここでいう「柳田」とは、主として柳田國男の著作である『明治大正史 世相篇』〔1930〕を意味している。それは、「ちょうど明治期におこった日本文化の大変動が定着し、成熟

¹ 各巻ごとに編者および標題はことなるが、『現代日本文化における伝統と変容』という共通標題のもとに、全9巻がドメス出版から公刊されている。

した時期」〔梅棹、1992：p. 507〕に執筆された。いいかえれば、それは「明治期における近代化の大波（という近代最初の）大変革」であった。

それにたいして、もうひとつの大変革が第2次世界大戦後に発生する。それは「1960年代以降の高度成長期をへて今日にいたっている」のであり、「そのあいだに日本文化はさまざまな変容をとげてきた」という事実によってとらえられる。そこで梅棹〔1992〕は、「その変容ぶりをできるだけ具体的な事物についてあとづけ、記述したい」という研究目的をかかげる。しかも、その背景となった社会構造の推移、意識の変化、つまり「社会的、精神的な変容をも視野にいれて、この研究をすすめようとした」というのである。

こうした研究の対象と方法と目的にそって、筆者は1982（昭和52）年くらい、毎年ことなつた主題で9点の論文を執筆することになった²。

「世相史」という方法

その結果、筆者もまた当然、「特別研究『伝統と変容』の目的」にそうかたちで研究をすすめてきた。そこで参照すべきは柳田〔1930〕の方法と目的である。つまり、

打明けて自分の遂げざりし野望を言ふならば、実は自分は現代生活の横断面、即ち毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠つて、立派に歴史は書けるものだと思つて居るのである。……（そのさい）新聞の記録ほど時世を映出するといふ唯一つの目的に、純にして又精確なものは古今共に無い。……（ただし）現実の社会事相は是よりも亦遙かに複雑であつて、新聞は僅にその一部をしか覆うて居ないといふことである〔pp. 129-130〕。

筆者もまた、研究の主題に関係のふかい、主として昭和時代の新聞記事³、あるいは週刊誌や月刊誌の記事を参照しながら、近代日本文化の伝統と変容の様相を記述することをこころみだ。それは、たしかに迂遠な方法である。しかし、文字どおり「毎日我々の眼前に出ては消える事実のみに拠つて」も、立派かどうかは別にして「（生活文化と世相の）歴史は書けるものだ」という事実を再認識したといえる。

² その詳細にかんしては、本論文の各章ごとに、一定の説明がほどこしてある。

³ おなじ時期に筆者は、昭和の初（1926）年から同60（1985）年までの、主として社会面から、それぞれの時代に特徴的だともわれる、世相・風俗をめぐって報道された新聞記事を、1か月ごとにえらびだし、列挙して編集した全3巻の書物の執筆・制作に参加した。それらは、本序論の末尾の参考文献に掲載した加藤ほか〔1985、1986、1987〕として公刊されている。

たとえば、日本で最初の「男子普通選挙（第16回選挙）」が実施されたのは1928（昭和3）年2月20日のことであった。このことは、近代日本の政治史においても重要な意味をもつ。そのため、この事実はおおくの歴史書にしるされている。ところが、その5日まえの15日づけ『大阪朝日新聞』は、つぎのような興味ぶかい記事を掲載している。

高知県の一孤島幡多郡沖の島村では、県下はもとより関西に先駆して15日普選最初の投票を行なうことになっているが、その姉妹島である鞆米島^{うぐもじま}の漁民約50名は13日、不在投票をなすべき母島にある村役場の投票場に赴かんとしたところ、折柄の風雨に波高く上陸することができないため、一同はこの寒空を物ともせず素裸となつて海中に飛込んで村役場にたどり着き、完全に投票を済まして無事帰還した。

政治史の興味としては「たんなる些事」としかいいようのないエピソードである。しかし、このあと記事は、こうつづく。

同村は昨年の県会議員選挙に際し約四割の棄権者があつたが、この勇敢なる選挙のエピソードに感激して、棄権者は少ないであろうといわれている。

そこには、男子普通選挙という未曾有の事態に直面して、「なんとしても投票したい」とかながえた当時の一般民衆のおもいのあつさがうつつだされている。つまり歴史には、こうした民衆の思想と行動によっておおきく左右される局面が、たしかに実在しているのである。こういう意味において、既存の政治・経済史にくわえ、日常生活をめぐる些末な事実をとらえることによって、はじめて記述しうる「生活文化と世相の変容」にもすくなくからざる意味があるのだとかながえなければならない。

アナル学派 vs 世相史・考現学・比較文明学

そこでおもいだすのは、フランス現代歴史学におおきな影響力をおよぼしてきたアナル学派である。周知のようにアナル学派の名称は、1929年、フェーブル、L.⁴とブロック、M.（1886-1944）⁵の手によって創刊された雑誌『歴史経済史年報（Annales d'histoire

⁴ Lucien Febre（1878-1956）：デュルケームの社会学、P. ビダル・ド・ラ・ブラーシュの人文地理学などの影響を受けて、社会史という歴史学の方法を確立した。著書に『大地と人類の進化』（1922）、『フランス・ルネサンスの文明』（1925）、『16世紀における無信仰の問題——ラブレールの宗教』（1942）、『ミシュレ』（1946）などがある。

⁵ Marc Bloch（1886-1944）：おもな著書に『フランス農村史の基本性格』（次ページにつづく）

economique et sociale)』に由来している。それは一般に、つぎのような点において「あたらしい歴史学」の地位を確立したのだとされる〔二宮、1985：p. 336-337〕。

伝統的歴史学が、歴史の表層にしか目を向けず、訓古の学に終始していることを批判し、人間活動の総体を生きた姿においてとらえる視点の重要性を強調して、人間諸科学の交流のうえに立った「新しい歴史学」の創造を提唱した。

その先進性は、大著『地中海』の著者として著名なフェルナンド・ブローデル (Fernand Braudel：1902-) にひきつがれてきた。その業績の詳細にたちいることはしないが、現象的にはその結果、「日本でもここしばらくまえから『社会史』が話題になり、一種のブームといわれる傾きすらある」〔福井、1995：p. 7〕という状況もたらされるようになった。

では「新しい歴史学の先進性」とは、なにを意味するのか。福井 [1995] によると、「たえずみずからを更新してゆく姿勢、いわばそれ自身で完結しない、たえずつぎの問いと認識へと開かれてゆく歴史学をめざしている」点である [p. 8]。そして、さらにその具体的な内容にふみこめば、たとえば、つぎのような点が指摘できるという。

- ① (歴史学における) タブーの破碎：「F. ブローデルの言葉を引けば、『われわれが関心をもっているのは、歴史学そのものというよりも、こんにちではそれらの人間諸科学の総体なのである』」 [p. 10] という立場。
- ② (歴史学的認識の) 質的転換：「(たとえば第2次大戦後のフランスにおける) 歴史人口学は、人口学の成果にあらたな時間的・空間的ひろがりを与えることによって、さまざまな比較の可能性に道をひらき、たんなる人口の多寡の推移から、人口システムの把握へと進むことができた」。つまり、「人口システムは、社会のなかで他の諸要因から孤立して存在しているわけではないから、さらに一歩進んだあらたな問いへと問題を発展させてゆく可能性」 [p. 13] をはらんでいたということ。
- ③ 長期的な時間の枠組みの重視：「毎年の変化や個々人の一生の時間の経過からみれば、まったく変化を示さないようなことがら、あるいは、百年、何百年、場合によっては何千年もの時間の幅のなかで、きわめてゆっくりとしか変わることはないことがらを、社会のより基底にあって人と社会を規定している枠として重視すること」 [pp. 13-14]
- ④ 多層的空間への自覚：「国家や国民の起源論、ないし系譜論に集約されるとらえ

(1931)、『封建社会』(1939-1941) などがある。

方を否定し、歴史における時間と空間の多層性を認識の前提」とし、「生活の仕組や世界観をもふくめた広い意味での文化という領域」を重視すること [p. 20]。

- ⑤ 典型としての「民衆文化」研究：「人びとがその一生や一年のサイクルを、どのように送っていたか。日常生活の衣食住にまつわるさまざまな慣行。出生・洗礼・結婚・死をめぐる儀礼や慣行。一年の時間の流れにリズムをあたえる暦と祭礼。民間信仰や民間療法、家族をはじめとした人びとの結びつきの姿。こうした日常性にかかわる諸問題。さらに民衆蜂起や反乱など非日常的な出来事、マルジノー（はみだし者）や犯罪・暴力といった問題も歴史の対象としてテーマ化」すること [p. 27]。

こうした指摘は、さらにひろげ、ふかめることができる。しかし、さしあたり上記の点に注目してみると、それはアナール学派をひくまでもなく、じょじょに都市の生活と世相に関心の領域をひろげてきた日本民俗学、文字どおり「都市の民俗学」としての様相を呈する今 [1971] の考現学、梅棹 [1957]⁶ [1963]⁷などを嚆矢とする比較文明学など、20

⁶ 梅棹 [1957]（「文明の生態史観」）が発表された年は、日本が世界の先進国に伍して南極観測に参加しようと、最初の南極越冬隊をおくりだした年である。ただ、当時の日本の工芸技術や工業力は、いまだ未成熟で、観測船の「宗谷」が氷にはばまれて、容易に接岸できなかった。また同年は、1990年前後に崩壊した社会主義のソ連が、アメリカにさきがけて人工衛星の打ち上げに成功した年でもある。つまり当時の日本人のおおくは「社会主義の未来性」におおくを期待していたとあってよい。こうした時代に、イギリスの歴史学者アーノルド・トインビーが『歴史の研究』を上梓した。そこには、日本人には「挑戦的」とおもえる、つぎのような記述があった。つまり、極端に要約すると、

現代の世界には6つの文明がある。しかし健在なのは西洋文明だけで、日本は12世紀から衰退局面にはいつている。

むりもない。当時の日本は、いまだ第2次大戦の壊滅的な打撃からたちなおっておらず、体制側と反体制側とをとわず、こうした認識をうけいれざるをえなかった。じっさい体制側は、

「日本はすぐれたヨーロッパやアメリカの文明に敗北した。日本は後進国である」

と自信を喪失し、たほう左翼の文化人は、マルクスの社会主義を旗印にかけながら、

「資本主義は必然的に社会主義に席をゆずる。これが『歴史の法則』にほかならない」

とかんがえていた。そんな時代に発表された梅棹 [1957] は、歴史学、人類学、経済学などをふまえ、かつ、それらを超克する内容をはらんでいた。その要点を極端に要約すれば、つぎようになる。

あらゆる文明は、それをとりまく環境との相互作用の結果、それぞれに特（次ページにつづく）

有の生活様式をうみだす。環境が異なれば、そこには当然、形態も機能も異なる文明が誕生する。

けして日本が欧米よりおくれているわけではない。げんにユーラシア大陸全体を展望してみると、おおきくふたつの地域が区別できる。ひとつは20世紀に帝国主義的侵略をした西ヨーロッパと日本——これらは大陸の西の端に位置していて、高度に発達した産業社会を完成させた。それを「第1地域」と名づける。いっぽう第1地域にはさまれた広大な地域には、第2次大戦後に勃興しはじめた、ふるいタイプの国々がある。これを「第2地域」と名づければ、ユーラシア大陸の過去と現在と未来が簡単明瞭に展望できる。

ここでいう比較文明学は、この論文を嚆矢としているといつてよい。

⁷ 梅棹 [1963] は、その翌月、「情報産業論」の表題で『中央公論』に転載された。それが発表された1963(昭和38)年は「黒四ダム(黒部第4発電所のダム)」が完成した年である。それは、ようやく本格化しはじめた経済の高度成長を先頭にとって牽引する製造業、その製造業にとって必要不可欠な潤沢な電気エネルギーの供給が可能になりつつあることを雄弁にものがたるできごとであった。そんな気分が、ようやく世上にひろがりはじめた時代に、同論文はこれまた歴史学、生物学、人類学、経済学などをふまえて、総合的かつ超長期の人類文明史をふりかえりながら、「工業の時代のあとにやってくるのは情報産業の時代である」と宣言した。ただし、時期がはやすぎたのか、残念ながら、一般には正確に理解されなかった。なぜなら1981(昭和56)年にアルビン・トフラー『第三の波』が出版されて、ようやく「情報化社会」「情報産業」といった概念が人びとのあいだにひろがったからである。

では、梅棹 [1963] の独創性とはなにか。それを説明するために、論文の内容を極端に要約すると、つぎようになる。

これまで人類文明史は2つの革命を体験し、いま第3の革命を体験しつつある。第1は農業革命、第2は工業革命、第3は情報産業革命である。それは動物の発生学とのアナロジー(類推)をもちいと、つぎのように解釈できる。ここでいう「発生」とは、受精した卵細胞が分裂を繰り返して、内胚葉・中胚葉・外胚葉と名づけられた3つの部分からなる胚を形成し、やがて成体になるまでの過程を意味する。その過程を単純化していえば、内胚葉からは消化器官系が、中胚葉からは筋肉・骨格系が、外胚葉からは脳神経系と感覚諸器官が、それぞれ形成される。ならば、農業革命で達成された農業の時代は人間の腹のたし、すなわち内胚葉に由来する消化器官系の機能を充足させるという意味で、この段階の産業は「内胚葉産業」と名づけられる。同様に工業は中胚葉に由来する筋肉や骨格の機能を充足させるという意味で「中胚葉産業」と呼ぶのがふさわしい。そして最後に出現した情報産業の時代は脳神経系・感覚諸器官の機能を充足させる時代であ(次ページにつづく)

世紀日本の学者たちが、むしろ先鞭をつけてきた領域にほかなるまい。なお、これらのうち「考現学」について、その現代的な意味を解明した論考として梅棹 [1971] がある。

本研究の目的と方法——文献資料調査・参与観察法・面接調査

そこで本研究は、アナル学派の「社会史」に刺激されながらも、むしろ

- ① 柳田國男の世相史、今和次郎の考現学、梅棹忠夫の比較文明学などの方法を援用しながら、
- ② 20世紀の日本で進行した近代的工業化、とりわけ1955（昭和30）年における池田内閣の「所得倍増計画」によって解発（release）され、本格化した、いわゆる高度経済成長の過程に焦点をあてて、
- ③ それまでの伝統的な日本人の生活文化と日本の世相が、どのような変容の過程をたどり、
- ④ 日本文明、すなわち政治や経済や社会や文化をささえる装置や制度のシステムと、どのような相互関係をきりむすんできたのかを、
- ⑤ 可能なかぎり具体的にえがきだすこと

を目的としている⁸。

る。この段階の産業は、外胚葉に由来する器官の機能充足をめざすので「外胚葉産業」だといえる。こうしてみると情報産業とは、目や耳や鼻や舌や肌などの感覚器官に作用して、人間の心と体をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味や香りや肌ざわりなど、ひろい意味での「情報」の処理や伝達や蓄積などを、極限まで容易にし、ひろく普及させる産業だということになる。

⁸ ここでの記述における「文化」という単語は、「文化人類学的な意味での文化（culture）、すなわち、ひろい意味での生活様式と価値観」を意味している。それにたいして、「文明（civilization）」という単語は、「社会や生活をささえる多様な装置と制度のシステム化された体系」という意味を付与されている。こうした概念規定は、基本的に梅棹 [1984] の、つぎの記述に準拠している。

文明というものは、しばしば、機械文明、物質文明、技術文明というような言葉でしめされるように、われわれの生活をささえているさまざまな道具類、装置類をふくんでかんがえられているのであります。……さらに、それらの装置群を操縦し、生活してゆくうえに、さまざまなとりきめ、約束ごと、すなわち制度群が存在します。……このような、装置群と制度群を（次ページにつづく）

こうした目的を達成するために、本研究では、課題ごとに、もっとも適切な方法をもちいて、さまざまな資料収集をおこない、その分析と統合をこころみた。

これらの方法の最初は、文献資料調査である。ここでは、柳田 [1930] がもちいた新聞記事にくわえて、明治・大正・昭和の3代にわたって発行された多種多様の雑誌記事を中心に、大量の文献資料を収集し、その分析と統合をこころみた。

これにつづくのは、各種の野外調査である。この調査方法については、多少の補足的説明をくわえておくべきであろう。

まず、筆者には「日常生活体験そのものが野外調査としての意味をはらんでいる」という認識がある。なかでも1982(昭和57)年にはじまり、現在もつづいている女子大学における女子学生とのつきあい、その8年ばかりあとに本格的にはじめた「各地を旅行しながら同行の旅行者と現地でおこなう共同討議」などは、日常生活の延長線上に展開される野外調査にほかならない。じっさい、本研究の「第1部第1章 ジェンダーをめぐる生活文化の変容」は前者に、本研究の「第6部 定着と遊動——情報化と生活文化」と「終章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像」は後者に、おおくをおっている。

いまひとつ、筆者は1969(昭和44)年の年末から5年ちかくにわたって、京都市左京区吉田において小規模な酒場を経営していた。そこでの参与観察の結果は、高田 [1988] として公刊されている。本研究の「第5部第2章 うすれる『泥酔の美学』と情報化時代の社交」は、こうした「研究とはいいいがたい日常生活体験」をぬきにしては、執筆不可能であった。

さらに筆者は、1983(昭和58)年から3年間、日本全国の約30都市をおとずれ、その都市への最初の自動車の登場から現代にいたる自動車のつかわれかたを中心とした生活文化の変容を、主として訪問地における面接調査の結果にもとづいて雑誌記事にまとめる作

ふくんだ人間の生活全体、あるいは生活システムの全体のことを、文明とよぶことにすればどうか、というのが、わたしの提案であります。……それに対して、文化というのは、その全システムとしての文明のなかにいきている人間の側における、価値の体系のことである、といえはかがでしょうか。人間はつねに、つくられた環境に対応して、みずからの精神のなかでの秩序をつくりあげてゆきます。それが、価値の体系であり、文化人類学における通常の用例にしたがえば、これこそが文化であります [pp.13-14]。

ここでのべた「文化」と「文明」の意味内容の相違は、基本的に本論文の全体につらぬかれている。

業に従事していた。その成果もまた、高田〔1987〕として公刊されているが、その一部は、本研究の「第6部第2章 あたらしい交通体系と生活様式の革新」などにかかれている。

このように本研究の内容は、ひとつには既存文献調査に由来しているが、のこりなかばは、筆者の生活体験そのものを「一種の野外調査」とみたてることによってもたらされたものだといえることができる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・ 福井憲彦、1995『「新しい歴史学」とは何か——アナル派から学ぶもの』講談社
- ・ 加藤秀俊・井上忠司・高田公理・細辻恵子、1985『昭和日常生活史①モボ・モガから闇市まで』角川書店
- ・ 加藤秀俊・井上忠司・高田公理・細辻恵子、1986『昭和日常生活史②欠乏から消費の時代へ』角川書店
- ・ 加藤秀俊・井上忠司・高田公理・細辻恵子、1987『昭和日常生活史③高度成長から低成長時代へ』角川書店
- ・ 今和次郎・吉田謙吉、1930『モデルノロチオ・考現学』春陽堂
- ・ 二宮宏之、1985「アナルがくは（アナル学派）」『大百科事典①』平凡社
- ・ 高田公理、1987『自動車と人間の百年史』新潮社
- ・ 高田公理、1988『酒場の社会学』PHP研究所
- ・ 梅棹忠夫、1957「文明の生態史観序説」『中央公論』（2月号）
- ・ 梅棹忠夫、1963「情報産業論」『放送朝日』（1月号）
- ・ 梅棹忠夫、1971「考現学と世相史（上）——現代史研究への人類学的アプローチ」（京都大学人類学研究会・編）『季刊人類学』（2-1）社会思想社
- ・ 梅棹忠夫、1984「近代世界における日本文明」（梅棹忠夫・石毛直道・編）『近代日本の文明学』中央公論社
- ・ 梅棹忠夫、1992「現代日本文化における伝統と変容」『梅棹忠夫著作集 第19巻』中央公論社
- ・ 柳田國男、1930『明治大正史 世相篇』朝日新聞社（柳田國男、1970「明治大正史 世相篇」『定本柳田國男集 第24巻』筑摩書房）

第1部 時代をつらぬく生活文化と世相の変化の方向

第1章 ジェンダーをめぐる生活文化と世相の変容

第2章 時代をつらぬく「情報（産業社会）化」の趨勢

第1章 ジェンダーをめぐる生活文化と世相の変容

はじめに——「女と男」というテーマ

話としては、論理が逆転するが、「20世紀日本の高度経済成長にともなう生活文化と世相の変容」というとき、最初におもいだされる主題のひとつは、女と男をめぐる話題である。たとえば第2次大戦後、日本経済の高度成長への展望が可能になりはじめた1955（昭和30）年¹、ナイロン・ストッキングが女性の日常に定着し、「それが破れにくくなったところを、女権の拡張にかけて、『戦後強くなったものは女と靴下』という表現」〔森、1991：p.572〕が人びとのあいだにひろがる。そしてそれ以後も、この表現が示唆する生活文化と世相の変容の方向は、今日にいたるまでつづいてきたとあってよい。本章（第1部第1章）は、このことを具体的な事実にもとづいてあきらかにすることを目的としている。

本章のもととなる文章は、最初、1988（昭和63）年1月9日から同年7月16日まで、合計20回にわたり、「女と男」²という共通表題のもとに、毎週土曜日発行の『読売新聞』誌上に掲載された³。その内容は、基本的には現在なお、あたらしさをうしなっていないとおもう。そこで、本論文の冒頭に配置することによって、第2部以下の考察への導入の役割をはたさせることにした。ただし、そのためには、いくつかの資料をあたらしいものでおきかえ、あらためて資料の出所をあきらかにする必要がある。以下の文章は、その作業をへたのちに、相当程度の改訂をほどこして、あらためて執筆したものである。

¹ 1955（昭和30）年を、その翌年に発表される『経済白書』は、「回復を通じての経済の成長は終わった」とし、「こんごの成長は技術や産業の近代化によってささえられる」と将来への指針をしめして、「もはや戦後ではない」とむすんだ。その5年後に池田内閣が「所得倍増計画」を発表し、いわゆる高度経済成長が本格的にはじまる。

² ここで共通表題を、通常なら「男→女」とされる両者の順序を逆転させて「女と男」としたのは、奇をてらったわけでも、女権拡張の風潮に迎合した結果でもない。議論の進展とともに理解してもらえたとおもうが、工業社会のあとにくる情報産業社会においては、工業社会における「女らしさ」が重要な役割をはたすようになるという認識にもとづいて、あえて「女→男」という順序を採用した。

³ 『読売新聞』の掲載記事は、加筆訂正をへて翌1989年に『中央公論』に掲載されて高田〔1989 a〕となり、さらに高田〔1989 b〕に収録されて、同書の「第2章 『女と男』の現代世相」となった。

第1節 問題意識と概念としての「ジェンダー」の発見

高度経済成長と性をめぐる緊張の度合の変化

序論においてふれたように、いまだ筆者がちいさな酒場を経営していた1974（昭和49）年の流行歌のひとつに、小説家の野坂昭如がうたった「黒の舟歌」⁴がある。いわく、

男と女の間には ふかくて暗い 河がある

誰も渡れぬ河なれど エンヤコラ今夜も舟を出す……

それは当時、筆者の酒場をおとずれる30歳ゼンゴの客たち⁵の気持を、それなりにつよくとらえる力をもっていた。その背景には、おそらく彼らの年代の男たちの、性的なるものをめぐって、つよい緊張が存在していたという事実がある。

なぜなら、かりに当時30歳の男性を想定すると、彼が14歳という思春期を目前にひかえる年齢にたった1958（昭和33）年3月31日、すくなくともタテマエ上は一切の売春行為が禁止され、^{くろく} 玄人女性とのセックスの可能性が断絶されたからである⁶。しかも彼ら、思春期を目前にひかえた男性と同年齢以上の^{しろうと} 素人女性たちは、遊郭の存在、すなわち玄人女性とのセックスを許容する制度と、いわば裏腹の関係にあったがちがちの純潔教育をうけてそだった。当然、容易にはセックスの相手にならない。その結果、彼らは素人女性とのセックスの可能性をも同時に断絶されることになった。

そこでは当然、性行為の限界効用がいちじるしくたかくならざるをえない。だからであろう。当時のラブホテルは、「金銀財宝で大仰に飾られた〈桃太郎すごろく〉のアガリの場面のように、派手に装飾されたのではなかったか」〔高田、1991：p.143〕⁷。ところが、

⁴ 作詞は能吉利人、作曲は桜井順。のちに加藤登紀子も、この歌をうたうことになる。

⁵ 1974（昭和49）年に30歳であった人が生まれたのは1944（昭和19）年である。その3年後の1947年から1949年に生まれた約800万人を「ベビーブーム世代」や「団塊の世代」とよぶ。ここでいう30歳ゼンゴの客たちのおおくが、この世代にふくまれるとかがえてよい。

⁶ 売春防止法は1956（昭和31）年5月24日に公布され、翌1957年4月1日に施行。その1年後の4月1日から罰則条項が適用された。

⁷ 「当時のラブホテル」について、筆者自身がしるしたルポ風の記事に、つぎのような一節がある。

（名神高速道路一宮インターチェンジ周辺の冬がれの畑地のなかに）赤い（次ページにつづく）

高度経済成長の結果、人間のあらゆる欲望を大げらに容認しようとする社会の風潮が世相を風靡しはじめた。今どきの若者は「セックスなんてスポーツ感覚で楽しむものだ」とうそぶいている。それを恋愛すごろくに即していえば、セックスは決して〈アガリ〉の場面なのではなく、むしろ〈フリダシ〉の光景なのである。その結果なのであろう。若者をターゲットに定めた今どきのラブホテルは、ひと昔前のシティホテルのように、清潔で淡泊なデザインを好んで取り入れる。だから（1980年代なかばの名神高速道路ぞいの愛知県）一宮インター周辺でも、最近になって建設されたと思われるラブホテルは、白いタイルばりの簡素なデザインに仕立てあげられている。それは最近、ようやく多少の経済的余裕を持つようになった団塊の世代あたりが主なユーザーになり始めた、都心に建つ高級なシティホテルや、東京ベイエリアを始めとするアーバンリゾートに建つリゾート風のホテルが、彼らの世代の好みを反映して、昔のラブホテルにも似た豪華で俗っぽいデザインを好んで取り入れがちなのと、きわめて対照的であるような気がする〔高田、1991：p.143〕。

つまり、野坂昭如が「黒の舟歌」をうたった1970年代なかばから、わずか10年、1980年代もなかばになると、「性的なるものをめぐる緊張のつよさ」は、上記のラブホテルの意匠の変容に象徴されるように、急速にゆるんだのであった。そしてそれは、人びとの意識のなかに存在した「性をめぐる価値観＝文化」の変容を、たしかに表象していた⁸。

ねぎ坊主を頂いたイスラム寺院のような建物、ドイツ壁にステンドグラスをはめ込んだ西洋中世のお城風の建物、そうかと思うとパルテノンに屹立する古代ギリシャ神殿みたいな建物などが建っていて、それがみなラブホテルなのである。それはいささか異様な雰囲気だというほかない。実際、都市のビジネス街や普段の生活を営む住宅街では決して体験することのできない空気がそこには満ちている。そしてホテルの名称も〈ベルシャトー〉だの〈人形〉だの〈珊瑚礁〉……。なんだか気恥ずかしい、だが年がいきもなくメルヘンの世界へのあこがれを呼び起こされそうな、そんな名前が臆面もなく選ばれている。……そんなことを考えているうちに、これらのラブホテルの建設時期が気になり出した。調べてみると、それは日本経済が高度成長の絶頂をきわめた1960年代半ばに始まっていることがわかった〔高田、1991：pp.140-142〕。

⁸ ここでの「文化」という単語は、「文化人類学的な意味での文化（culture）、すなわち、ひろい意味での生活様式と価値観」を意味している。それにたいして、のちにもちいられる「文明（civilization）」という単語は、すでに序論で説明したように「社会や生活をささえる多様な装置と制度のシステム化された体系」を意味することになる。

後天的に変化する性

「性をめぐる価値観=文化」を話題にしたところで、それを生物の性一般にひろげてかんがえてみる。そこでおもいだすのは、1980年代における、性をめぐるあたらしい生物学的知見である。それによると、相当程度に高等な動物でも、オスとメスのあいだに、従来の常識が想定してきたほどは明確な区別のできない場合がすくなくない。

たとえば、海産の熱帯魚にアブラヤッコ属 (*Centropyge argi*) という一群がある。この魚は、通常は一夫多妻の集団で生活している。ところが、集団内のオスが死ぬと、メスのなかで最大の個体が性転換してオスになる。ときには、いまだオスが生存しているのに、はや手まわしに性転換して、独身のオスになってしまう個体さえいるという [モイヤー、1987: pp.120-147]。

そういえばミミズやカタツムリは、生まれつき雌雄の生殖器をあわせもって「雌雄同体」の名でよばれてきた。しかし、ここで話題にしているのは、ずっと高等な魚の一種、しかも、成体になってから後に、いわば後天的に性が変化するのである。じっさい、さらにくわしくしらべてくると、アブラヤッコとはぎゃくに、オスからメスに性転換するクマノミという魚がいたり、もともと性別が明確に区別できない魚がいたりするのだそうである [中村、1987: pp.48-76]。どうやら雌雄の区別というものは、通常かんがえているほど絶対的なものではないというのが生物学的事実であるらしい。

だからといってもちろん、このことがそのまま人間にもあてはまるというわけではない。人間の性別は、性染色体が XX 型なら女、XY 型なら男、というぐあいに、原則的には受胎の瞬間にきまってしまう。しかし、その後の母体のホルモンバランスのぐあいによって、染色体は XY 型なのに外見は女子がうまれてきたり、ぎゃくに染色体は XX 型なのに外見は男子がうまれてきたりといったことが、事例数はすくないが発生する。さらにごくまれに、性染色体自体が一部欠損した OX 型 (体は女性型) や一部過剰の XXY 型 (体は男性型) などがあらわれることもある。いずれも、いわゆる半陰陽^{みたなり}の性である。

これらはもちろん、現代医学の立場からは例外的な異常現象とみなされる。しかし、人間にもうまれつき性別の不明確な個体のあらわれることが、けして皆無でないことはたしかな事実である。しかも、女性から男性への性転換は、現段階では不可能であるが、染色体も外見も、あきらかな男性が、手術によって外見上は女性に性転換することは不可能ではない。さらに、性転換手術をうけるかどうかはべつにして、ホモセクシュアルの男性や

女性が相当数、実在していることもまちがいのない事実である。

そこで、身の周りの日本の現実を観察すると、服装や言葉づかいの男女差は希薄になるばかりである。こうした状況の変化もまた、前項でみた「性的なるものをめぐるつよい緊張」をゆるめる条件の一端を形成している。そして大切なことは、このような変化が、日本でも、世界の先進諸国でも、1970年代以降にいちじるしくなってきたという点である。興味ぶかいことに、魚類の性転換の研究も、おなじころに活発になっている。そこには、あきらかに当時の時代精神が作用しているようにおもわれる。

セックスとジェンダー：1970年代の発見

ところで、「性」を英語では「セックス (sex)」と表現する。その語源は、ラテン語のセコ (seco-)という動詞にある。「わける、きりはなす」という意味である。つまりセックスは、うまれつき異なる女と男、動物ならメスとオスの身体と生理を区別する言葉である。それに対応して、服装や言葉づかい、しぐさや仕事などにも「女らしさ」と「男らしさ」の基準がさだめられてきた。

ところが1970 (昭和45)年、アメリカ合衆国が「婦人参政権50周年」をむかえたのを機に、この年の8月、「性差別の告発」をスローガンにかかげて、はなばなしいデモ行進がニューヨークをはじめ、アメリカ各地で実施された。日本では大阪の千里丘陵において、日本最初の万国博覧会 (エキスポ '70) に6000万人をこえる人びとがあつまった年である。この年、日本でも11月に、東京・渋谷において、ウーマンリブ第1回大会が開催され、女性だけのデモ行進が銀座をねりあるいた。

こうして、女性のがわからの「性差別の告発」がはじまるのだが、その過程で「セックス」にくわえて「ジェンダー」という概念が提起される。では、ジェンダーとは何なのか。さきにのべたように、セックスとは「うまれつきことなる女と男、メスとオスの身体と生理を区別する」言葉であった。それにたいして、服装や言葉づかい、しぐさや仕事などの女らしさや男らしさは「うまれてからのちに後天的に身につく社会・文化的な性差」である。それをジェンダーとよぼうというのである⁹。

そこでおもいだすべきは、社会・文化的な約束ごとは、時代がうつり、地域を移動する

⁹ ジェンダー (gender) は、ほんらいフランス語やドイツ語で区別される「名詞の性」の意味でつかわれてきた単語でもある。

ごとに、多様なバリエーションをしめすという点である。したがってジェンダーもまた、時代と地域ごとに、多様なバリエーションをしめす。それは「ジェンダーの文化」とでもよぶべき、広範な領域にひろがる文化現象でもある。

では、ジェンダーの概念は、いつ、どこで、だれの手によって提起されたのか。それを上野〔1995〕は、つぎのように紹介し、解説する。

セックスとジェンダーのずれを問題化したのは、ジョン・マネーとパトリア・タッカーの『性の署名』（Money & Tucker, 1976）¹⁰であった。ジェンズ・ホプキンス大学の性診療の外来をうけもっていたふたりは、半陰陽や性転換希望者などの患者を相手にして、ジェンダーがセックスから独立していることをつきとめた。……（その経緯はつぎのようなものであった。すなわち）カウンセラーは当初、患者の生物学的な性別に心理的な性別を合わせようとする。そのほうが「自然」だからである。それだけではない。性転換には、苦痛の多い身体改造がとれない、時間もお金もかかる。かれらは現実を変えるかわりに、「気持ちの持ちよう」を変えるよう、患者にすすめたのである。だがかれらが発見したのは、患者の「性自認（ジェンダー・アイデンティティ）」はその年齢までに強固に形成されており、それを変えるのは容易でないこと、もしその「指導」を強制すれば、患者はアイデンティティの危機から自殺にさえ追いこまれかねないことであった。多くの患者は、豊胸術、ペニス切除、造陰術のような苦痛の多い手術をほどこしてまで、自分の「性自認」に生物学的身体のほうが合わせることを選んだ。つまり、セックスにジェンダーを合わせるより、ジェンダーにセックスを合わせるほうが、まだ抵抗が少なかったのである〔pp.4-6、（ ）内は筆者〕。

ところで、すでにみたようにジェンダーは、社会・文化的要因によって決定された。したがって当然、男女の性差別もまた、社会・文化的要因に由来していることになる。そのため、ジェンダーという概念は、そのまま高度経済成長期以降のウーマンリブ、あるいはフェミニズムと名前にかえた女性解放運動の理論的な根拠のひとつになっていった。ただ、これに関連する議論は、やたら難解な専門用語と論理を駆使して展開されたものがおおい。そこで、以下の記述にあたっては、現代日本、とくに1970年代から現在（1998年）にかけての具体的な世相や風俗や流行現象を素材にして、そこでの女らしさや男らしさ、女と

¹⁰ Money, John, & Tucker, P., 1975, *Sexual Signature: on Being a Man or a Woman Little*, Brown (浅山新一・訳、1979『性の署名』人文書院)

男の相互関係についてかんがえてみることにする。

第2節 近代工業社会におけるジェンダー

その最初は服装である。筆者の記憶によると、1980年代なかば以降、若ものがあつまる大阪のアメリカ村などで、「スカートをはいた、わかい男」の姿を目にするようになった。ただ一般には、いまなお「男がスカートをはくこと」はタブーの領域に属している。しかし、古代ギリシャや中世ヨーロッパでは、はなやかな色と形のスカートは男の衣装であった。現在でも、スコットランドにはキルトという男物スカートがある。

外国だけではない。明治維新以前の日本のわかい男たち、平安の貴族や江戸町人の衣装は、しばしば女装とみまごう派手なものであった。とくに元禄の武家や富裕な商人階層の若衆たちは、女のように前髪をゆい、うす化粧をして、色も柄も華麗なふり袖に身をかがった。そして、「どうすれば、みずからを愛してくれる年上の男が見つかるか」に心をそそいだという。もっとも、彼らも大人になると、前髪をそりおとし、ふり袖を筒袖にかえ、いったんは若衆を愛する役まわりをはたしたのち、女と結婚して異性愛の世界におちついた。しかし、それまでに彼らが同性愛を体験するのは、めずらしくなかったようである。

古代ギリシャなどと同様、思春期の少年と年上の男の「恋愛」は衆道とよばれて、異性愛よりも価値のある、むしろ高貴な体験とみなされていた。日本には「男が女にばける」歌舞伎という、世界でもめずらしい芸能があるが、近代以前には、そのような絵空事のなかだけでなく、現実にも女と男の区別に曖昧な部分があったのである。

それは、けして日本特有の現象ではない。人類史全体を一望してみると、男女の性のちがいに極度に神経質なキリスト教や近代社会のジェンダーのあつかいは、むしろ少数派に属する。のみならず、これらの少数派をのぞくと、両性のあいだを往来することは、しばしば人びとが理想とするところでもあった。たとえば、半陰陽を意味する英語のヘルマフロダイト (hermaphrodite) という単語は、ほんらい、ギリシャ神話にでてくる理想の男性ヘルメス (Hermes) と理想の女性アフロディテ (Aphrodite) をむすびつけた、いわば「理想の人間像」を象徴する言葉だというみかたもできないわけではない。

それが、日本の近代的工業化が本格化する明治維新をさかいに、一種の倒錯とみなされはじめる。女と男の神経症的な区別がはじまり、軟弱な男色は圧殺された。むりもない。日本が「富国強兵、殖産興業」を国家目標として、その実現に邁進しはじめたからである。

男たちは、それをになう軍人・産業兵士として、攻撃的な自我と直線的な論理、それをつらぬく強靱な意志と力にみちた「男らしさ」を身につけることをしいられた。くわえて、明治以降の近代化を推進した科学・技術や制度の相当部分が、禁欲的で性的緊張のつよいキリスト教世界から輸入された。その結果、明治以降の近代日本のジェンダーは、極度に男女差を強調し、女と男の関係に深刻な緊張をもちこむことになった。

それは同時に、女と男のあいだに明確な性差別をもちこみもした。これは日本だけでなく、近代的工業化がすすんだ地域全体にあてはまるようである。というのも、ヴェックス [1976] によると、母権社会の古代エジプトと父権社会の古代ギリシャをはじめ、膨大な数の彫刻作品や人体の写真の比較研究をしたところ、概略つぎのようなことが判明したからである。つまり過去 5000 年のうち、最近の 100 年間に「性的二型性」がいちじるしく拡大したのだという。つまり、そこに表現された女の体と男の体のおおきさの差は、他の時代にくらべてずっとおおきい。そこには、この時代の性差別のはげしさが、うつしだされているというみることもできるというのである。

ところが、日本の近代的工業化が最終的に完成する「高度経済成長」が絶頂をきわめた 1975 (昭和 60) 年あたりをさかいにして、女と男の区別や差は、じょじょに曖昧かつ融通無碍になり、相互のあいだの緊張がゆるみはじめたようにみえる。すなわち、ここ 20 年あまりの生活文化と世相における「女と男」には、近代的工業化がおわり、情報産業の時代が本格的にはじまった、そういう文明史的転換がうつしだされているとかがえられる。

第3節 1975 年をさかいに変容するジェンダーの文化

たがいに浸透しあう女らしさ・男らしさ

こうした変化を象徴する現象のひとつに、1975 (昭和 50) 年あたり以降、「ごきぶり亭主」という言葉が死語になったという事実がある。1977 (昭和 52) 年、40 人の会員で「男子厨房に入ろう会」が結成されるまで、成人男子が台所にはいることは、ぶざまな醜態とみなされていた。それが、この会の発足から 20 年あまり経過した 1990 年代末の日本においては、料理にはげむ男の姿がめずらしいものではなくなった。いまや「料理は男の基礎教養」とさえみなされている。じじつ「男の料理」を主たる内容とする『Dancyu』という名称の雑誌が公刊されているが、この名称は、さきの「男子^{なん}厨房^{ちゆうぶ}に入ろう会」に由来している。

また、1980（昭和55）年代には、作家の橋本治¹¹が、芸能人の姿や前衛的な抽象模様を
あみこんだ絢爛豪華な毛系のセーターのつくりかたを解説した『男の編み物、橋本治の手
トリ足トリ』を出版する¹²。あい前後して、1967（昭和42）年に大流行したフォークソ
ング「帰ってきたヨッパライ」で名をはせたグループ、フォーククルセダーズの一員はしだ
のりひこの「主夫体験」が、各種の女性ジャーナリズムで紹介されたりもした。さらに1986
（昭和61）年には、あらゆる家事をみずからこなす独身生活体験をつづったフランス文学
者・海老坂武の著書〔1986〕が出版されて人気を博すことになる。そして1990年代には、
料理のみならず、多様な家事にはげむ男が、テレビCMに登場するようになった。「ごき
ぶり亭主」どころか、炊事、洗濯、掃除、育児をこなせることが、わかい女性にとっての、
のぞましい夫の条件になりはじめている¹³。

それともなってテレビCMのなかの女性像も劇的に変化した。じじつ男たちがなお日
本の産業社会を牛耳っていた1975（昭和50）年前後、女は男に従属する役まわりばかり
を演じさせられていた。カメラのCMは「美人しか撮らない」とうそぶき、食品メーカー
のCMは「ワタシ作る人、ボク食べる人」といいはなっていたのである。しかしそれは、
おりからはげしくなりはじめたウーマンリブの運動の槍玉にあげられた。

「女性の価値を美醜ではかったり、差別の対象にするのはけしからん」

というわけである。ちょうどそのころ、女性の社会進出が緒につく。じつは1975（昭
和50）年は、それまで増加しつづけてきた既婚女性にしめる専業主婦比率が54.5パーセ
ントで極大値をしめし、以後、減少に転じる時期にあたっている。そして、7年後の1982
（昭和57）年には、「かせぐ既婚女性の比率」が「かせがない専業主婦の比率」を凌駕す
るにいたる。ここに「かせぎ、はたらく女性の時代」の幕がきっておとされた。

もっとも当初それは、「まるで絵にかいたような男まさりのキレル女」がマスコミをに

¹¹ 1968（昭和43）年、東京大学「第19回駒場祭」のポスターに「とめてくれるなおかさん……」とい
う文案を掲載して有名になった人物で、のち作家になる。

¹² 精神科医師なだ・いなだ氏も毛系の編み物が好きなのだという。精神科医師の業務には、他人の不快
な体験を聞くことがふくまれていて、それがつよいストレスとなる。それを、毛系のやわらかくて、あ
たたかい感触がゆるめて、気分をくつろがせてくれる。しかも、リズムカルに連針する手先に視線をお
としていると、患者との関係がなごみ、面接が円滑にはこぶのだという。

¹³ 1992（平成4）年以来、筆者が勤務している武庫川女子大学の学生談。

ぎわすことから始まった。1984（昭和59）年の秋に発行された『クロワッサン』（初出掲載誌紛失、高田〔1989：pp.31-32〕から再引用）に掲載された海老坂某氏の投書が、そのことをおしえてくれる。いわく、

自信に満ちあふれ、この世は私が動かしている！ と信じている女性ほどそうなのだが、
どうして彼女たちはしゃべる時、大口あけて歯グキまでみせるのだ。

当然、そんな女たちがテレビCMにつかわしいわけがない。この時期、健康そうな丸ポチャの「隣のおねえさん」のような熊本大学出身の宮崎淑子が、テレビCMでGパンをめぐ場面を演じて人気をアツめたのは、こうした風潮への反発であったのかもしれない。

ところが「男女雇用均等法」が成立した1985（昭和60）年ごろから、いわゆるキャリア・ウーマンのイメージが変化しはじめる。かせぐ仕事をもった女性の絶対数がふえ、そのほとんどは、さきの投書にえがかれたような、特別な女性でないことがわかってきたからである。ちょうどそのころ、日本の産業もまた、男にはおもいつくのがむづかしい、日常生活の要求に根ざした、女たちのありのままの知恵や感性を大切にようになる。がむしゃらに男のように突出したいという女の時代がおわりをむかえたのである。

こうなると、テレビCMに登場するキャリア・ウーマンの典型的なイメージも変化させる必要がでてくる。おなじ1985（昭和60）年、コンビニエンス・ストアのCMで、キャリアウーマンのケイコさんが、

「わたしは夜中に、とつぜん、いなりずしがたべたくなったりするわけです。こんな自分をかわいいとおもいます」

といたり、会社のエレベーターからおりに、

「シバづけ、たべたい」

といたり……ごくありふれた女性としてソフトにえがかれることで、人びとの共感をアツめるようになった。これらは、日本の「かせぐ女性」が「家事にはげむ男」たちとのあいだにうちたてつつあった、あたらしい関係を象徴しようとしていたのかもしれない。

「女の時代」という見かたの背景と底流

いずれにしろ、こうして社会にでてかせぐ女性が急速にふえた。その背景には、日本の産業の変化がある。じじつ1987（昭和62）年には、女らしい配慮をそえた、やさしい商品がたくさん登場した。同年のヒット商品のトップの座をかざったのは、松下電器産業の「自動パンやき器」である。その商品企画には、女性チームが大活躍した。そのすこしま

え、ちいさなハサミやホッチキスをかわいらしい小箱にいれて文房具のイメージを一新し、数百万セットをうりつくした「プラス・チーム・デミ」も、わかい女性のアイデアに由来している。この年に日本国有鉄道の分割民営化によって誕生したJR各社の駅の便所が急速に清潔になっていくのも、女性職員の雇用の開始と無関係ではないと推察される。くだって1996（平成8）年から翌年にかけて、大ヒット商品となった「プリクラ」や「たまごっち」も、わかい女性の企画したアイデアが成功をおさめた事例にほかならない。

かんがえてみれば、ふしぎはない。もともと各種の消費財を、日常生活のなかでつかってきたのは、主として女たちだったからである。その生活経験と感性が、あたらしい商品をうみだしたのである。だとすれば今後とも、女性の社会進出は、いっそう進行していくであろうことが予測できる。

そこで、ひるがえってみると、女性の社会進出は、なにも最近になってはじまったわけではないことがわかる。まず明治維新以前、人口の圧倒的多数をしめた農民の家族は、夫だけでなく、妻や子が力をあわせて生産にはげむ一種の労働団であった。商家や職人の家族も同様である。そこでは、女たちが社会的生産労働に参与し、かつまた家庭生活をもとりしきっていた。唯一の例外は武士の妻である。藤田まことが主演して人気を博してきたテレビ番組「必殺！ 仕事人」にみるように、武士の家庭では「婿殿」、つまり夫だけが登城して給金をかせいでくる。毎朝、それを見おくる妻は「奥さん」とよばれて、家庭内の消費生活だけをこなしていればよかったのである〔梅棹、1957：pp.56-62〕。

それが、明治維新をさかいに変化する。社会全体の近代化・工業化がすすみ、男たちが官吏や会社員など「つとめ人」になっていくからである。彼らが、毎日つとめにでることによって、彼らの家庭生活の型は、武士のそれによく似たものになっていった。そして、このころから、彼らの妻たちもまた「奥さん」とよばれるようになっていく。つまり、明治維新によって、日本社会からは武士という階層が消失した。しかし家庭生活の型は、やがて全国的に「武士のそれ」にちかづいていくという逆説が現実化する¹⁴。

とはいえ、それでも農民や商人のおおくは、なお男女のべつなしに、生産労働に従事しなければならなかった。あらたにおこった製造業の領域においても、第1次大戦がおわる1918（大正7）年まで、工場労働者の60パーセントは女性がしめている。

ところが、このころをさかいに、太平洋戦争の時期をのぞいて、

¹⁴ この点については第4部第1章および第2章において、関連する考察がおこなわれる。

「家庭の外にでて、社会的生産労働に従事するのは男の仕事である」

という風潮が、最初はじょじょに、ひろがっていく。そして、この傾向は 1960（昭和 35）年以降の高度経済成長期に頂点にたつする。その結果、女たちのおおくが家事労働に従事する「奥さん」、あるいは子そだてに専念する「母親」になった。つまり、彼女らは、国をあげての工業生産の時代に、もっぱら家庭での消費生活を担当することによって、その地位を安定させるようつとめたことになる。

それは、当時の日本の産業社会の要請にも合致した。鉄鋼・造船・重化学工業・建設など、高度成長期の産業は、女たちのきめこまかな感性よりも、近代の男たちが懸命に身につけてきた男らしさを最大限に吸収することで成長し、発展する性格をおびていたからである。そして女たちは、いわば「男たちをおだてながら生産労働におくりだす任務」をひきうけていたということになるであろう。

ところが、1975（昭和 50）年あたりから、日本の産業の重点は、いわゆる重厚長大産業から、各種消費財の製造や情報産業など「軽薄短小産業」に推移しはじめる。市場に流通する商品が豊富になり、消費者の要求水準も高度化・多様化し、モノやサービスの価値が、快適さ、たのしさ、おもしろさにおおきく左右されるようになっていく。その結果、すこし前にのべたように、女性の知恵とアイデアをいかした商品やサービスが市場をリードするようになっていった。

このことは、モノやサービスの企画や開発に、消費者の知恵と感性が要求されるようになったということでもある。それを A・トフラーは、「消費者（consumer）であると同時に生産者（producer）でもあるような存在、すなわちプロシューマー（prosumer）が活躍する時代」ととらえた〔トフラー、1980：pp.352-380〕。だとするならば「女の時代」は、産業社会のがわからみるかぎりにおいては「プロシューマーの時代のはじまり」であるともいえる。

大学における家政学部の変容——ふたつの側面

このことは最近、大学の学部、とくに家政学部の名称変更や改組転換の流行にも関連している。筆者の所属する女子大学¹⁵でも、1994（平成 6）年に、家政学部が生活環境学部に変更・転換された。その直接の動機は、「裁縫・料理・子そだてなど、花嫁修業のため

¹⁵ 兵庫県西宮市に所在する武庫川女子大学。

の『女の園』では、受験生があつまりにくい」という点にあったとおもわれる。

しかし、その背景と底流には、現代日本の社会変化がある。なぜなら従来、工学部や法学部や経済学部の学生のほとんどは男であった。そして工学部は社会的生産労働、法学部は社会秩序の維持、経済学部や経営学部は産業社会の活性化と企業経営への貢献を期待されていた。これらにくらべると、以前から女子学生の比率のたかかった医学部は社会的労働力の修復への貢献を期待されていたといえる。それにたいして「女の学部」であった家政学部への期待は「つとめにでる夫の疲労回復と次世代をささえる子供の養育」、いいかえれば、ひろい意味での「労働力の再生産」にあった。

ところが、そのかなりの部分が、高度に発達した家庭電化製品、あたらしい多様なサービス産業によってまかなわれるようになってきた。こうなると、従来は家政学部が提供してきた知識や技術が、家庭よりも、むしろ家庭電化製品のメーカーや各種のサービス産業によってもとめられるようになる。つまり、家政学部の名称変更や改組転換は、私学経営者の立場からみると、学生募集への適切な対応という動機に根ざしているにしても、より広範な視野からながめると、産業社会の変化への対応のこころみだといえる。

いまひとつ、家政学部をめぐる状況をべつの角度から考察しておく。それは、「わかることでわかる」とする、近代工業社会をささえてきた近代の科学・技術の「ものごとのわかりかた」¹⁶に関連している。じっさい、たとえば物理学は、物質をわけて原子¹⁷を発見し、さらに素粒子にまで探求の手をのぼしてきた。生物学も、動物と植物の区別にはじまる精密な分類学を基礎にして、はじめて成立しえた。このことは、近代という時代の日常的な常識にもあてはまる。心と体、仕事と遊び、男と女……など、いずれも、べつべつのことからだとかんがえられてきた。なかでも「男女は七歳にして席をおなじうせず」——学制が発布された明治初年をのぞいて、近世・近代の日本では、ながいあいだ男女別学の原則がづらぬかれてきた。それが第2次大戦後の教育改革で180度、完全に転換し、それ以後、男女共学がひろく普及するようになる。

ところが1986（昭和61）年現在、180万人にちかかった4年制の大学生総数のうち、4

¹⁶ 筆者の理解によると、近代科学の認識論的基礎は、①物質主義、②「分析」という方法、③因果関係論の構築にある。ここでは、そのうちから「分析」という方法に焦点をあてて議論を展開している。

¹⁷ 周知のように「原子」を意味する英語の単語はatomである。この単語には「これ以上わけることができない存在」という意味がある。

分の3をしめていた133万人が男子学生であったのにたいして、「家政学専攻の男子学生」はゼロであった。それが1987（昭和62）年に変化する。当時、筆者が勤務していた大学¹⁸の家政学部が、男子学生を受け入れるようになったからである。それは、文字どおり「家政学部の革命」とよばれるにふさわしかった。

だから当初は、応募者があるかどうかがあやぶまれた。しかし、31名の男子学生が応募して10人が合格——その後2年をへた時期の筆者のメモに、つぎのような記録がある。

1987年以来、家政学部には男子学生が入学して、現在（1989年）では、数十人の男子学生が、短大をふくめると千人をこえる女子学生がいるキャンパスで学生生活をおくっている。「家政学部には男子学生」というと、なお世間は奇異の目をむける。しかし、彼らの志望動機をきくと、ふしぎはない。ある学生は高校で専攻した食品化学をいかして栄養士の資格をとり、将来は食品工業の新製品開発分野にすすみたいという。服飾デザイナー志望、家業の呉服屋をつぐために、ひろく被服文化をまなぶのだという学生もいる。

いうまでもなく、栄養や被服、デザインをまなぶだけなら、従来も男子学生を受け入れる専門学校がたくさんあった。にもかかわらず彼らは、大学の家政学部をえらんだ。そこには専門の知識や技術以外の〈何か〉をもとめる彼らの気持がはたらいっているようである。じっさい、彼らと話をすると、わずか一年たらずではあっても、女子学生との共同生活のなかで、彼らが一種独特の〈やさしさ〉を身につけているようにおもえる。多数の女性にかこまれたさいに、わかい男たちがふりまわしがちな〈男の沽券〉というのか、強引に自分自身を顕示しようとする意志がやわらいでいて、さわやかでもある。そこには、彼らの学友である女子学生たちの指摘する微妙な心理のメカニズムがはたらいっているのだろうか。

「女ばかりの大学にはいるとなると、高校時代の友だちなどに、ひやかされるはず。それをのりこえようとした〈勇氣〉がえらい」

彼らはどこかで、世間の常識に挑戦し、そのハードルをこえることで女性一般とのあたらしい接しかたの芽をつかんだのであろう。それは従来、男女べつべつの伝承の系譜をかたちづかってきた知識や感性のあいだに橋わたしをすることで、男女関係の軋轢や葛藤に、さわやかな新風をふきこむ可能性を秘めている。しかもそれは、女性の社会進出がさかんになり、人びとの生活が日本の全体社会、さらには国際社会と直接にかかわらざるをえな

¹⁸ 愛知県岡崎市に所在していた愛知学泉大学。

い現代という時代にふさわしい、従来の枠をこえた、ひろい視野にたつ、あたらしい家政学をうみだす契機になるかもしれない。

女と機械物、女と文明の装置・制度系

男子学生が家政学部に入學する時代は、企業をはじめ、社会にでて、「かせぎ、はたらく女性」の数が、急速にふえる時代でもあった。ところが、彼女らがつとめる職場では、ひと昔まえの「ペンと帳簿とソロバン」にかわって、おびただしい種類と数の電子機器が利用されている。彼女らは、こうした機械物に、たくみに適応しえているであろうか。それというのも、現在なお、日本の常識の底流には「女は機械物によわい」という固定観念が実在しているようにおもえるからである。

じじつ、たくさんのツマミのついたステレオ、やたら操作が複雑な自動車などは、メカニックがだいすきな男たちのオモチャであった。ビジネスの世界でも、デザインや企画部門への女性の進出はいちじるしいのに、技術部門は管理部門とならんで、なお男のトリデダというイメージが濃厚である。しかし、すこしべつの角度からながめてみると、操作がむつかしすぎる複雑な機械や装置は、「文明の利器」として未完成だというみかたもできる。文明とは、ことさらに訓練をつまなくても、誰もがその恩恵に浴せる工夫をこらした装置と制度を意味するはずだからである。

という意味において、最近の30年たらずのあいだにコンピュータやワードプロセッサは、相当な進歩を実現した¹⁹。その内部で、なにがおこっているのかはまったくわからないが、とにかく画面の指示どおりにキイをたたいていくと、さしあたり必要な結果がでるからである。こうなると女性の反応ははやい。中年以上のビジネスマンの電子機器への不適応がささやかれているかたわらで、彼女らは容易にそれを駆使する能力を身につけてしまう。1986(昭和61)年の年末に、日本OA協会がおこなった調査の結果をみても、当時、社用とはべつに個人用ワープロを保有していたビジネスマンは全体の13パーセントにすぎなかったのにたいして、OLのばあいは23パーセントにたっていた(初出掲載誌紛

¹⁹ 1970(昭和45)年代のはじめ、プログラムが自作できない素人にコンピュータをあつかうことは不可能であった。当時、筆者の経営していた酒場をおとずれるコンピュータ技術者の会話をきいているかぎり、彼らには、門外漢に理解不能の専門用語を使用することをほこりにしているようなところがあった。

失、高田 [1989 : p.36] より再引用) ²⁰。

つまり、操作が容易になれば、男より、むしろ女のほうが、あたらしい機械への適応力はおおきいのかもしれない。ふしぎはあるまい。高度成長期以来、ひろく普及した各種の家庭電化製品を、日本の女たちはみごとにつかいまわすことによって、家事をはじめとする生活の合理化を実現してきたのである。しかも、会社では責任ある面倒な仕事をこなしているはずの中年以上の男たちが、配偶者が病気になるか、外出するかしたさいに、電気洗濯器ひとつ満足にあつかえずにあわてている姿を目にすると、「女は機械物によわい」という固定観念が、ある種の「神話」にすぎないとおもえてしかたがない。

とはいいいながら、他方において「機械物がだいすきだ」という男がおおいことも否定できない。ただし、彼らの興味は「完成途上のメカニズムの複雑さとたわむれること」にむかいがちである。それにくらべると女たちの興味は、完成されたメカニズムのつかいやすさと、それがもたらす恩恵にむかう。これまで筆者は、主として「女と男のちがいがいなど、とるにたりないちいさなものだ」という点を強調してきた。しかし当然、相互のあいだにちがいがいがないわけではない。そのちいさなちがいと、そのぶつかりあいが、ビジネスをはじめ、社会生活にもたらす「やわらかな緊張」をとおして、現代の機械文明全体を、よりのぞましい方向に再編成する可能性は、けしてちいさなものではないようにおもわれる。

第4節 「女らしさ」と「男らしさ」の微妙な差異

文明の装置・制度系への対応の男女差

そこでおもいだすのは、1987 (昭和62) 年12月22日から3日間にわたって国立民族学博物館で開催された「日本人と遊び」²¹のシンポジウムにおける、同館助教授 (当時) 栗田靖之氏と性文化研究家・山下諭一氏とのやりとりである。簡単に要約すると、

栗田：最近の山のぼりは「エベレストを酸素吸入なしでのぼろう」など、文明装置からの脱却をめざしています。それにたいして、おなじ山のスポーツでもスキーは、リフトやスキー板や靴など、このんで先端技術を取り入れるようですね。

²⁰ 1997年現在におけるワードプロセッサの保有率は男女とも、ほぼ50パーセントで拮抗している [サントリー不易流行研究所、1997 : p.35]。

²¹ 特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の第7回シンポジウムに相当する。

山下：なるほど、そやから山のぼりには男、スキーには女が熱心なんやな。文明装置をととのえるとファッションになるというわけですか。

そういわれれば、たしかに女性のすきなあそびには、豊富な装置系を必要とするものがおおい。男たちは、整備のゆきとどかぬ河川敷の草野球に熱中するのに、女たちは、ファッションナブルに整備されたテニスコートでのプレイをたのしみたがる。街なかをはしるジョガーのおおくが男であるのに、エアロピクスのジムで主流をしめるのは女たちである。さらに連想をひろげれば、東京ディズニーランドの巨大な装置系も、とりわけ、はたらきざかりの男たちの目には、しばしば「壮大で無意味な絵空事」とうつりかねないのに、女たちには、くりかえしおとずれたい「すてきな夢の遊園地」にみえるようである。

このような一種の文明の装置への親和性の男女差の背景には、おそらく、つぎのような事情がある。つまり、近代の男たちにとって、あらゆる文明装置は「工業の生産力をたかめる」という、明確な目的を達成するための手段であった。したがって、それはつねに「何かの役にたたないとぐあいがある」のである。それにたいして女たちは、あらゆる文明装置を「快適でたのしい生活を実現するために消費する」という以外、明確な「目的」意識をもつことなく、それらを受容してきた。彼女らは「無目的」……という表現が適切でなければ、本来的にそれ自体を目的として近代という時代に対峙してきたのである。

ところが、やがて1970年代に経済の高度成長がおわり、「生産性をたかめて、ゆたかな社会を建設する」という目標が達成されてしまった。日本の全体社会は、たしかな目的をうしなってしまったのである。そしてかわりに、最初は1964（昭和39）年の東京オリンピックにぎざし、そののち、数次にわたる国際博覧会や地方博覧会など、巨大な規模の文明装置を、いわば「消費」することであそぶ「まつりの季節」がやってくる。それはその後、あらゆる産業が「あそびに奉仕する」時代のはじまりにひきつがれていく。だからこそ、1990年代なかばの、きわめて深刻だとされる「平成不況」のさなかにも、1600万人以上が海外へ観光旅行にでかけ、国内でも、魅力さえあればコンサートや演劇、映画や各種イベントに多数の人があつまるといった状況がもたらされている。

それだけではない。今日では身体を保護する衣服が「ファッションという名のあそび」になり、生存を維持するうえでの基本となる食事行動さえも「グルメという名のあそび」になった。すこしまえまで、産業社会の効率をたかめるという目的をもっていたコンピュータまでもが、ファミコンをはじめ、オモチャとして利用されるケースが確実にふえている。あるいは1987（昭和62）年6月、総合保養地域整備法が施行され、人びとが自由時

間を享受するために、リゾートという名の文明装置を建設することが、とりあえず一種の国策とみなされるにいたった²²。

こうした趨勢を、筆者は「遊戯化」²³と命名する。というのも今日では、文明の装置・制度系が、人びとの横溢する生命力を受容することで充足させる以外の目的をもたなくなってしまったからである。いいかえれば、あらゆる文明の装置と制度のシステムは、それ自体を目的とするようになった。ここに、無目的にたえて人生をおくる能力をつちかって女たちが、現代文明の装置・制度系にたいして卓越した適応能力を発揮する理由がある。

本格化する情報産業社会とジェンダー

文明の装置・制度系のおおくが「あそびの道具」になった背景には、梅棹[1963]が指摘した「情報産業」社会の勃興と隆盛がある。それは、こんにち「情報化」をはじめとする、さまざまな社会変化を意味する概念と言葉を分泌しつつある。

そこで通常「情報化」という言葉が指定するのは、コンピュータや通信技術の発展とのふかい関連性である。そしてたいてい、なにかのかたちで経済社会の効率化を促進することへの期待がこめられる。工場に導入されたコンピュータは、情報管理をとおして生産効率をあげ、オンライン化されたコンピュータ・システムは商品流通の無駄をはぶくというわけである。電話もまた、迅速にビジネスをはこぶための便利な情報通信機械にはかならない。そこで、情報やその通信・処理・蓄積などの技術がはたす、このような機能的効用を、かりに「情報のメッセージ性」とよんでおく。

ところが、他方では文芸や映画、音楽や演劇、その他もろもろの娯楽や文化も、そのおおくは、なにかがしかの情報の創造と伝達に由来している。むろん文芸が、ふるい時代の制度や生活についてのメッセージをつたえてくれる場合もある。しかし、それにたいする読

²² ただし、日本各地で実際にはじまったリゾート建設のおおくは、建設業界に利益を誘導することに主眼をおき、日本人の自由時間を快適にすごさせるという目的をなおざりにしたうえ、1990（平成2）年ぜんごに、いわゆる「バブル経済の崩壊」がきざしたため、のぞましい成果をあげることのできないケースがおおかった。

²³ 「遊戯化」にかんして筆者は、高田[1987]を上梓した。ここでの「遊戯化」とは、ふつう「情報化」の名でよばれる「現代文明の装置・制度系の変容」が「人間の価値観」という平面に投影されたときにえがきだされる「文化変容の方向性」を意味しているとかんがえれば理解しやすい。

者の本来の期待は、「ああ、おもしろかった。感動した」と感じさせてくれること、いいかえれば、

「人の心と体をかきたて、たのしませてくれることにある」

といてよい。こうかんがえてみると、本来は明確な目的をもつ手段だとみなされてきた多数のモノやコトが、たのしみのための情報、ないしは情報の媒体になっていることがわかる。輸送機械であった自動車は、いまや所有者が社会的地位をアピールする情報媒体となり、あるいはドライブの快適さをたのしむ情報媒体として購入・保有されている。通信機械の電話も、愚痴や噂話をつたえあうことで、ストレスを発散するおしゃべり交換機械としてあそばれている。

そこで、これら「それ自体が目的であるような情報」の効用を、それが人の心と体を快適にマッサージしてくれるという意味で「情報のマッサージ性」の名でよんでみる。すると情報産業社会とは、マッサージ性を発揮する情報が際限なく増殖し、それ自体が生活の、もっとも重要な環境要素になる社会だということになる²⁴。

では、その恩恵を享受するには、どうすればよいのか。まずは、多種多様なマッサージ性の情報のシャワーに浴することをあそび、たのしむことであろう。そこで、女と男をくらべてみると、情報のマッサージ性への感受性は、男より女のほうがずっと鋭敏であるらしいことがわかる。映画館や音楽会、美術館や博物館、イベント会場や内外の観光地において、多数派をしめるのは女たちである。男が無味乾燥なビジネス情報にかまけているあいだに、女たちは心身をたのしませてくれる文化とあそびの豊饒を確実に享受しはじめていたのである。

第5節 男の領分をおかす女たち

第4節でのべた状況のもと、かつては「男のあそび」の典型とみなされた「のむ・うつ・かう」——つまり酒と賭博とセックスをめぐる生活文化が、劇的に変容しはじめ、そこに女たちが積極的に参与するようになった。第5節では、こうしたあそびの領域における女と男の対応のしかたを、1975（昭和50）年以降の世相とその変化のなかにさぐってみる。

²⁴ 「情報」の多様な意味や役割やその変容にかんしては「第1部第2章 底流における『情報化』という文明史的転換」で詳述する。

「のむ」——性差と酒のみ行動

すでにみたように「情報化」することで「あそび」になった生活領域の典型は食と衣である。そのいずれもの趨勢の先頭に女性がたっていた。ウィークデーの昼間など、ホテルのコーヒーショップや街角のレストランにたちよると、カジュアルにきかざったヤング・ミセスでいっぱいである。もちろん、夜は夜でエスニック・レストラン、風がわりな酒場に、女性の姿がめだつようになった。1983（昭和58）年ごろ、大都市とその郊外地にひろがったカフェバーブームを主導したのも、じつはわかい女性たちであった。それは、いささか大袈裟にいうと、日本人の酒のみ行動を根底から変化させた。まず、

「酒をのむなら、たがいの心がとけて、ひとつになるまでのむ」

という日本文化に伝統的な「泥酔の美学」とでもよぶべき習慣がうすれた。カフェバーは、ニューミュージックがながれる、洗練されたインテリア空間のなかで、おしゃれな会話をかわしながら、かるい食事とともに酒をのむ場所だからである²⁵。

こうしたあたらしい型の酒場の登場は、やがて週末の夜のさかり場の風景にも影響をおよぼすようになる。酩酊してケンカをする酒のみが減少したのは、そのあらわれのひとつである。そして同時に、他方では酒場やバーだけでなく、レストランでも食事とセットにして酒を提供する店がふえた。その結果、すこしまえまでは男にかぎられがちだった飲酒行動が、ひろく女たちにもうけいられるようになった。このことは1987（昭和62）年に総理府が実施した「酒類に関する世論調査」の結果にも、あきらかにしめされている〔総理府広報室、1989〕。

まず、上記の調査の時点で「酒をのむ」とこたえた人は全体の59.7パーセントである。その19年前の1968（昭和43）年における調査結果によると、ぎゃくに56.2パーセントが「のまない」とこたえているので、20年たらずのあいだに「のむ」が大幅にふえ、「のまない」人の比率と、ほぼ逆転したことになる。これを男女別にみると、男では「のむ」が78.3パーセントで、前回とくらべ、わずか4.7ポイントふえただけなのに、女のほうは

²⁵ 「泥酔の美学の退潮」については「第5部第2章 うすれる『泥酔の美学』と情報化時代の社交」を参照。なお、カフェバー以前の酒場での酒のみ行動の特徴には、①客は男、②接待するのは女、③そこで飲む酒類はビールかウイスキーなど、④つまみはあられやピーナツなど簡単なもの、⑤ながれている音楽は演歌が中心、⑥インテリアなどにはあまり注意がはられていない、などがあつた。

おなじ期間に、いっきに 24.0 ポイントふえて、43.2 パーセントが「のむ」とこたえるようになった。つまり今日、いちどに日本人がのむ酒の量は減少するっぽう、のむ人の層がひろがり、その主流を女性が占めているのである。このことは、「女だてらに酒なんか……」という制約と規範がよわまったという点では、このましい変化なのだとおもう。

しかしながら、中・高年女性などのばあい、子供の独立や夫の単身赴任をきっかけにして、さびしさをまぎらわせるために、自宅の台所で他人にかくれて酒をのみはじめ、ついにキッチンドリンクという名のアルコール依存症におちいるケースが増加していることも事実である。そのさい、はじめて酒をのんでから入院するまでに要する期間は、男が平均 20 年であるのにたいして女は平均 8 年だという〔高須、1987：pp.82-101〕。

その理由は、男女の身体的素質の差異に由来しているのだとされる。むろん、そうした要因も関与してはいるのであろう。しかし筆者のかんがえるところによると、わかいつきから酒ののみかたをおしえられ、仕こまれる男とちがって、女の子のおおくが、初歩的な訓練を受けることなく、酒をのみはじめるケースがおおいといった事情の作用も無視できないのではないかと²⁶。いまや日本社会では、男の子ばかりでなく、女の子にも酒ののみかたをおしえ、仕こまなければならない時代がはじまっているのである。

「うつ」——賭博をあそびはじめる女たち

「のむ」につづいて「うつ」賭博を考察の対象にする。そこで最初におもいだすべきは、賭博とは「未来の時間のなりゆきにかけるあそび」だという点である。サイコロやカルタ、競馬や競輪など、賭博はいずれも結果を予測したうえで、なにがしかの金品をかけ、ことなった予測をたてている他人と、その結果の当否をきそうことによって、はじめて成立するあそびである。そのさい、勘によるのか、緻密な推論によるのかはべつにして、予測の全責任は、本人自身が背おわなければならない。いいかえれば、自分自身の判断にたいする強固な自信が必要とされるのである。

「だから……」といえ、いささか語弊があるが、おそらくはこうした賭博のはらむ性格が作用した結果なのであろう。これまでの日本社会では、賭博はもっぱら、みずから金

²⁶ 話のレベルは相当ことなるが、イヌイットやニューギニアをはじめとする太平洋諸島など、伝統的な文化要素のなかに酒をもたなかった民族が、外来の酒をうけいれると、重篤なアルコール依存をおこし、それが深刻な社会問題になることなどが、このことを傍証している。

をかせぐことのできる「男のあそび」というイメージでとらえられがちであった。

残念ながら筆者自身は、サイコロやカルタの賭場に足をふみ入れた経験がない。したがって、これらの賭博については詳細をのべられない。しかし、競馬や競輪などの公営賭博、巷の麻雀屋やパチンコ店で圧倒的多数をしめているのが、男たちであることは認知している。そのかぎりにおいて、やっぱり賭博は男のあそびであるような気がしていた。

ところが、だとするなら女たちは「未来にかける」ことに興味がないのか。そんなことはあるまい。ただ、彼女たちのおおくは、みずから全責任を背おわなければならない賭博ではなくて、未来への関心を問のかたちで他人になげかけ、それにたいする返答をきかせてもらう「うらない」のほうがすきであるようにおもわれる。トランプや水晶玉、筮竹や誕生した月などを素材にして、将来の運勢を予測する多種多様のうらないへの関心は、一般に男より女たちのほうが、ずっとつよいとってよいのではなからうか。

すこしまえまで筆者は、このようにかんがえていた。ところが、これまた1980年代なかば以降、女たちの賭博への進出に無視できないいきおいがついてきた。1987(昭和62)年における全国遊技業協同組合の調査(初出掲載紙紛失、高田[1989:p.47]より再引用)によると、当時のパチンコ店の客の20パーセントが女性であった。しかもそこには、それ以前のように中・高年齢だけでなく、20歳代の女性の比率が増加しているとするされていた。「パーラー」という看板をかかげたパチンコ店が目につくようになったのも、増加しはじめた女性ファンを意識して、パチンコのイメージを変化させようとしたパチンコ店経営のこころみの結果なのである。

あるいは、中央競馬会主催の映画試写会をおとずれた、わかい女性を対象とするアンケート調査の結果でも、「競馬場にいったことがある」とこたえた人は31パーセント、「いったことはないが、一度はいつてみたい」という人が50パーセントにのぼっている(初出掲載紙不詳、高田[1989:p.47]より再引用)。

こうしてみると、男たちが妻や恋人をおきざりにして「賭博は男のあそびだ」とうそぶいていることのできる時代は、確実におわたったことがわかる。それは日本の女たちが、みずからの責任によって未来をきりひらこうとかがえはじめていることと、どこかでつながっているのかもしれない。そういえば1980年代後半に、賭博と紙一重の財テク、マネーゲームが大衆的に普及した背景にも、かせぐ女性や家庭の主婦たちの、未来を先どりしようとする積極的な欲望と意志が作用していたような気がしないでもない。

「かう」——欲望の解放と性のモラル

そして今ひとつ、最後にのこったのが「かう」あそびである。セックスの領域だけは、なお男のあそびのトリデでありつづけているのだろうか。そこで、歴史をひもといてみると1705（宝永2）年に出版された『当世乙女織』に、こんなことがしるされているのがみつかるとする [稲垣、1966：p.242]。

芝居といふものは、なんぢやおもやる。あれは男の傾城町（＝遊廓）ではないか。皆、女子の買うて、なぐさむものにこしらへたものなり。

もちろん、表現には一定の誇張がありはするのであろう。しかし、芝居の見物客は、宝永の直前の元禄（1688～1703年）あたりから女性のほうがおおくなったというのだから、男たちの遊廓での「遊女がい」とならんで、富裕な商人層の女たちのあいだでは、いわゆる「役者がい」がさかんにおこなわれていたようである。

ところが、明治時代がはじまると、維新政府は武家的な「貞潔の倫理」をあらたな国民文化として演出しはじめる。北村 [1892] が『新葉末集』のなかで「好色は人類の最下等の獣性を^{はいいま}縦にしたるもの、恋愛は、人類の霊生の美砂を発揚すべき者」とのべているのも、当時のインテリ層の性にたいするかんがえかたを雄弁にものごとくしている。そのうえ、性一般にたいして極度に緊張のつよいキリスト教を底流にたたえた西洋世界から、近代的なロマンティック・ラブ（＝いわゆる恋愛）と、それを根拠とする厳格な一夫一婦の婚姻規範がとりいれられ、姦通が犯罪とみなされるようになった。ただし、それが適用されたのは「二夫にまみえず」という言葉にしばられた女たちだけである。男たちは、なお遊廓や岡場所（女を）かうあそびにうつつをぬかしつづけた。

それから1世紀たらず、1957（昭和32）年に売春防止法が施行され、金銭による性の売買が全面的に禁止される。ところがこれだけは、いくら法律でとりしまってもどうにもならない。1950（昭和25）年ごろから、大都市のさかり場で開業しはじめていた「個室つき浴場」²⁷が、遊廓にかわって性的サービスを提供しはじめる。そしてその過程では、さまざまな性的技巧が開発されていった。まず、入浴後のマッサージにくわえて「スペシャル」という名の手淫サービスが登場し、それが1965（昭和40）年前後に、性交そのものにエスカレートしていく。さらに第1次石油ショック（1973年）のころには、現在の用語

²⁷ 周知のように「個室つき浴場」は、かつては「トルコ風呂」の通称でよばれていた。しかし、トルコ共和国の人びとの抗議にあい、1980年代なかばに「ソープランド」と自称するようになった。

でいうソープランド嬢が、全身にデンプン質の潤滑剤であるZローションをぬってサービスするボディシャンプーなど、きわめて多様な性的技巧が開発された。

それはまた、日本が高度経済成長を達成しながら、人間のあらゆる欲望を容認することによって高度大衆消費社会を実現する過程でもあった。とうぜん性の欲望も例外ではなかったのである。だとするならば、男たちだけでなく、同時に女たちの性的欲望が挑発されたとしてもふしぎはない。しかもこの間、最初はじょじょに、やがて急速に、彼女たちは社会進出をとおして、経済的自律に裏づけられたおおいなる自由を獲得しつつあった。

そんな時代の風潮の結果なのかどうか。1979（昭和54）年の春には、新宿歌舞伎町で女性を相手に性をうっていた男が「売春夫第1号」として、とりしらべをうけるという事件が発生している〔無署名、1979：p.23〕。むろん、それは例外的な事件であったとみてよい。しかし、やがて1980年代なかばになると、テレビ番組「金曜日の妻たち」の影響もあり、婚外性交を意味する「フリン（不倫）」が流行語になり、それが実体化するとともに、性をめぐる貞潔の禁忌は、女たちをまきこんで急速にうすれていった。

そんな時代にもなお、すくなくならざる男たちは、HIVウィルスや肝炎、各種性病への感染におびえながら「女をかい」つつけている。しかし、現代という時代が容認するようになった性のあそびの自由とひきくらべるとき、もはや、それは「男のあそびの最後の翳」とよべるほどの価値すらもたない、ある意味では、すぎさったふるい時代の遺物のようなものになりさがってしまっているのかもしれない。

男女の性感をめぐる能動と受動

こうしてこんにち、女をかうあそびは、どこかふるびたイメージをよびおこすようになった。しかし、その歴史、ことに個室つき浴場が開発してきた性の装置と技巧の変化のあとをたどると、それが日本人の性行動一般におよぼした影響は、けしてちいさなものではなかったことがわかる。たとえば、従来の常識によると、男の性的欲求はもっぱら能動的、ないしは攻撃的な征服欲の一変形であって、その性的快感は性器にのみ局在するとされてきた。だからこそ性器結合に、きわめてたかい価値がおかれてきたのである。

ところが、個室つき浴場でスペシャルという名の手淫サービスが提供されるようになってみると、客の男たちはすべてを女性にまかせて、せめよせてくる快樂にあそぶ「受動の性のファンタジー」にめざめるようになった。それがやがて、ソープランド嬢が全身をもちいてするボディ・シャンプーなど、多様な性的技巧に発展していったことは、すでにみ

たとおりである。その結果、男たちの性的快感も、じつは身体のあらゆる場所におよびうるということが判明した。筆者が、性文化研究家の山下論一氏から仄聞したソープランド嬢たちの証言によると、サービスのあいだ、ひたすら目をつぶって微笑し、乳首を硬直させて愉悦の声をあげる男たちもすくなくないのだそうである。

ところで、ここでたいせつなことは、遊廓とちがって、個室つき浴場においては性行為が入浴に直結しているという点である。ボディシャンプーもさることながら、入浴直後であるという条件が、性器の結合によって最高潮にたつするはずの従来性の行為に、オーラリズム（oralism：性行為への口の参加）やエイナリズム（analism：性行為への肛門の参加）を積極的にとりいれるという結果をもたらした。週刊誌をはじめとするジャーナリズムが、性をめぐる、より刺激的な情報の提供にはげんだという条件も無視することはできないが、個室つき浴場が、従来は非日常的であったこれらの性的技巧を男たちに体験させたことによって日本人の性生活一般はおおきく変化したのである。

しかもそれは、高度経済成長をつづける日本の住宅に、家庭用の浴室が普及し、日本式旅館にかわって、個室に浴場のついたホテル形式の宿泊施設が増加した時代のできごとでもあった。そのため、これらの性的技巧は、じょじょに恋人どうしや夫婦のあいだの性行為にも導入されるようになっていった。じっさい、1965（昭和40）年ぜんごの女性週刊誌をひもとくと、

「オーラル・セックス——唇による性感を新発見する（これからのラブ・テクニック）」
[1972、無署名：pp.182-191]

「（短期集中連載）リードするSEX——女性がする前戯術」 [1973、無署名：pp.48-52]

などといった特集記事が目をはく。まさにそれは、男たちが「受動の性のファンタジー」にめざめたのとは対照的に、女たちが「より能動的な性的快感」を発見する過程であったとみることができる。

むろん、ボディシャンプーはもとより、オーラリズムやエイナリズムが、当時どこまで日常化したのかは、さだかでない。しかし、1970年代以降、「男の能動性と女の受動性」という性一般をめぐる神話が崩壊したことだけはたしかな事実である。しかも、それは、性行為に性器以外の器官の参加をうながすことで、性文化に多様な豊饒をもたらしたようにもおもわれる。ただし、他方ではこうした変化の結果、女と男のあいだに演出される「恋愛」という名の、性をめぐる遊戯が、かつてはそれにともなつたはずの精神的高揚の度合

を低下させつつある²⁸。むかしは「性の売買」の場であった遊廓においてすら「初会から裏をかえし」、やがて性器の結合にいたる、疑似恋愛な社交の交換があそびの要素として重要視された。しかし、個室つき浴場は、そうしたいっさいのプロセスを省略した。ここでもまた日常生活のなかの性が「売買される性」を模倣しつつあるということになるであろう。

変容する男の能動性と女の受動性

「男は能動的で、女は受動的である」という固定観念がゆらぎはじめたことと関係があるのか。衣服やしぐさや言葉づかいにおける女と男の区別は、いよいよ曖昧になるばかりである。

まず1965（昭和40）年ごろ、ミニスカートが流行し、ホットパンツがブームになり、それがパンタロンにうけつがれるころから、女性のスラックス姿がめずらしいものでなくなった。これをもって「女の衣装の男性化のはじまり」ととらえるのは、現在になってみると、ふしぎな気がしないでもない。しかし、それ以前は「女はスカート」が常識であったことをおもうと、いわゆる衣装のユニセックス化の原点は、このあたりにある²⁹。

これにくらべると、男の衣装の女性化が本格化するのには、ずっとおそい。たしかに、いわゆるアイビー族³⁰の出現によって、男たちのあいだに「おしゃれの感覚」がひろがり、まもなくピンクやブルーのカラーシャツが流行して「ピーコック革命」とよばれたのは、ミニスカートの流行と、ほぼ同時期である。しかし、その後も「女性化」という視点にたつかぎり、男の衣装が劇的に変化することは、つい最近までなかった³¹。

²⁸ 1998年の年頭に週刊誌『アエラ』は、その巻頭に「20代女性 燃えない恋愛」〔藤生、1998：pp.6-9〕という記事を掲載している。

²⁹ 女性のあいだにスカートという洋装がひろがるのは関東大震災（1923年）後の都市においてであった。それ以後、スラックス型のもんぺが奨励された第2次世界大戦中をのぞくと「女性の下半身の着衣はスカート」だというのが常識であった。

³⁰ アメリカ東海岸ニューイングランド地方の「鳶（アイビー）のからまった煉瓦づくりの建物がならぶ大学」にまなぶ学生ファッションを「アイビー調」といい、その同調者が「アイビー族」とよばれた。

³¹ このことをめぐって高田〔1989〕は、「実際、1980年代の半ばあたりから、それまで女たちに独占されていたバーゲンに男の客が大量に殺到するようになった。中学生までもが仲間（次ページにつづく）

ところが、1980年代なかば以降、それまではタブーであったショッキングピンクの上着やスラックス、ごく少数ながらフリルのついたスカートなどを身につけ、リボンネクタイや髪どめにもちいる男たちが出現しはじめた³²。おなじころ、男性用化粧品だけでなく、男たちのための「全身美容」が登場して、人気をあっつめた。じっさい「入会金3万円、美顔・痩身・脱毛・育毛などのコース1回あたり5000～1万円の料金で、京都市内にオープンしたエステティックサロンでは、1988年春の時点ですでに、200人以上の会員が登録をすませた」という記録がある³³。もちろん、「顔をほそくしたい」「むだ毛やニキビをとりたい」などという動機をきくと、かならずしもそれを「女性化」という言葉で一括するのは無理がある。しかし、男たちが女たちとおなじく、「うつくしくなりたい」という願望をもちはじめたことだけは、たしかだといえる。

こうした状況の出現は、そのころまで「男の世界」としてきずかれてきた企業社会の規律、競争、多忙、葛藤によるストレスにたえてきた男たちを、そのきゅうくつさから解放するきっかけとなる可能性がある。なぜなら、おなじころから、ふだんは正常な異性愛の男たちがあつまり、女物の下着やドレスを身につけ、お化粧品をして、たまさかの女装にあそぶクラブが、大都市を中心に開業するようになったからである。その経験者の話を採集した渡辺〔1986：pp.48-99〕によると、女装体験者の男のおおくが、

「女としてふるまうと緊張がとける。おたがいに相手を『キレイだ』とほめあうことで、うっとりしたくつろぎの時間がすごせる」

とこたえるのだという。

たしかに現在のところ、それはいまだ少数派のあそびでしかない。しかし同時に、このことは、今後とも日常の衣装の男女差がいつそうゆるやかになっていくことを暗示している。そして、女と男のあいだの垣根を越境しようとするころみを、さらにひろげていくにちがいない。それを渡辺〔1986〕は、ギリシャ神話の両性具有神の名にちなんで「アンドロジナス文明」と名づけた。そこには、工業社会のあとに登場しつつある情報産業社会を、主としてこれまで女性が体現してきた、やわらかな、くつろいだ雰囲気でもたしたい

同士か、独りでやってくる。『キレイになる』ために化粧をする男たちも少なくない」〔p.148〕としている。

³² 1985年当時の大阪市内の通称「アメリカ村」における筆者の観察結果による。

³³ 『朝日新聞』1988年1月14日（朝刊）の記事による。

とする現代人の願望が、先どりされて投影されているようにおもえる。

均質化するしぐさと言葉づかい

衣装の男女差がうすれると、しぐさや言葉づかいの男女差も曖昧になる。そこでおもいだすべきは、人類学者のM・モースがかたったという、つぎのようなエピソードである〔野村、1983：p.58〕。

「君は御存知か。戦士の服にすっかり身を包んでいた俘虜ジャンヌ・ダルク——実際彼女は、戦士だったわけだ——が女であることを、イギリス人たちはどうしてさとったかを。いいかね、彼女は腰かけていたのだ。誰かが彼女の膝の上に胡桃くるみを投げたと思いたまえ。それを落とさないように、彼女は両膝をすぼめるかわりに広げたのだ。あたかも着けていた長衣をびんと張るためであるかのようにね」（マルセル・モースの談話）³⁴

ストラックスを身につけるのになれた現代のわかい女性なら、ぎゃくに両膝をすぼめるかもしれない。じっさい今日では、キュロット・スカートをはいているときでさえ、昔は行儀がわるいこととされていた胡坐あぐらをかくのが平気である女性がふえている。

しぐさだけではない。言葉づかいにおける女と男とのちがいも極度にうすれた。筆者が、そのことに最初に気づいたのは、1980年代の初期に、男っぽい声と身体のおおきさを強調して人気をあつめた「女番長」のあだ名をもつ和田アキ子が、これまた稲川淳二やせんだみつおを「よびすて」で「おまえよばわり」し、ときに、

「ばかやろう、文句あっか？」

など、男言葉をつかったのがTV放送をとおして放映されたころのことであった。それがその2、3年のち、かつては、

「よろしくおねがいしまーす」

など、「よい子ぶった言葉づかい」が当然であった女性アイドル・タレントにまでひろがっていく。無署名〔1985：p.40-44〕によると、たとえば小泉今日子などは、コンサートのさなかの、

「今日子ッ！」「キョンキョーン！」

といった会場のどよめきに、

³⁴ 原著は、ルイ・デュモン（菅野盾樹・訳）「実現しつつある科学」『マルセル・モースの世界』みすず書房。ここでの記述は野村〔1983〕からの再引用。

「ウッセーイ！ ふざけんじゃネーヨ！」

とこたえるようになったという。とくに、コンサートのじゃまになるようなヤジにたいしては、うたうのを途中でやめて、

「今度きたらヤキだよッ」

と、まるで男の子のようにどなる。これにつづいて、早見優や堀ちえみも「ボク、キミ」など、男の代名詞をつかいはじめた。そしてそれが若年層を中心に、ごく普通の女の子の日常にもとりいれられている。電車のなかや喫茶店で、わかいOLや女子学生の会話をきいていると、声の質がことなる以外、はなし言葉に男女差をみつけるのは不可能にちかい。

ところで、衣装をはじめ、しぐさや言葉づかいの男女差が曖昧になったのは、かならずしも1980年代が最初だというわけではない。近代以降に限定しても、ふるい雑誌のバックナンバーを年代順にながめていくと、大正デモクラシーがさかんになった1920（大正九年）前後と、高度経済成長が本格化する直前の1955（昭和30）年前後に、「男性の女性化、女性の男性化」を論じた記事が多数みつかると。たとえば、

「婦人の男性化」〔野上、1922：pp.105-110〕

「女性の男性化、男性の女性化」〔千葉、1925：pp.15-20〕

「オトコオンナ第一号の記——女は強く、男は弱し」〔松田、1955：pp.141-145〕

「風俗時評『W+M』時代——男のなかに女あり、女のなかに男あり」〔無署名、1955：pp.3-11〕

などの記事が、それに該当する。さらに、もっとふるい歴史をたどってみると、この章の冒頭ちかくでのべたように、平安時代や江戸時代もまた、風俗における男女差がちいさくなった時代であった。そこでひるがえってみると、これらはいずれも、国風文化や鎖国文化がさかえた平和な時代、第1次と第2次、ふたつの世界大戦直後の、これまた平和な時代であったことに気づかされる。だとすれば現代日本もまた、高度経済成長という名の「経済戦争」のあとにやってきた「平和の時代」だということになるのかもしれない。

第6節 現代社会における女と男の損得勘定

時代の谷間の損得勘定

しぐさや言葉づかいの男女差は、年齢層が低下するほど曖昧になるようにみえる。とくに声がわりするまえの小学生同士の性別を、会話だけから区別するのは至難の技である。

筆者の長女とその友人の会話の観察結果からも、そのことは明瞭である。1975（昭和50）年うまれの彼女が小学4、5年生であったころ、その友人から電話がかかってきたときのうけこたえに「ぼく」や「おれ」、さらには「わし」などという1人称の代名詞をつかうようになった。それが特別なことでないことは、後日、秋の運動会のさいに小学校へ行って判明した。男女とも友人の名はよびすてである。そして、男の子がすこしでも失敗をすると、女の子が、

「あほか、おまえ」

いわれた男の子は、

「ごめん」

と非常におとなしい。それ以来、興味をひかれて夕食のさいなどに、長女の学校生活をめぐる話をきくようになった。その結果、けんかをして、女の子がかつケースがすくなくないことがわかった。ことに「たたきあい」にでもなると、親にしつけられているのか、「女性の時代」という世のなか全体の雰囲気と同調してしまうのか、男の子は急におとなしくなってしまうのだそうである。それにたいして女の子は、腹がたつと、掃除用の箒をふりまわして男の子をおいかけたり、徹底的に相手をいいまかしたりする。そして結局は、またしても男の子の「ごめん」でけんかがおわりをむかえるのだそうである。

その長女が1988（昭和63）年に中学校へ進学した。そして入学そうそうの遠足のおりに、友だちといっしょに木のぼりをしたのだという。すると男の子たちは、

「おまえら、ようそんな、はしたないことするねえ？ まるでサルやんけ」

これにたいして女の子たちは、

「なにがサルやねん。おまえこそ、コロッケみたいな顔してるくせに」

その後は、どちらもが「サル」「コロッケ」でよびあいながら、男の子たちをなげかせていたようである。

「あーあ、おれらのクラスも、ついに完全に女の支配下におかれてしまったなあ」

というわけである。

そういえば、彼らの親たちのおおくは、はげしい競争にしのぎをけずらざるをえない団塊の世代に属している。そのためなのであろうか。しばしば男の子たちは、

「勉強して、一流大学に進学して、一流企業につとめて……」

という、おさだまりの要求をつきつけられる。それにくらべると、いくら女性の社会進出が活発になったとはいえ、女の子たちはピアノでもならうか、絵画教室にでもかようか、

無味乾燥な受験勉強よりはずっとたのしいお稽古ごとで放課後をたのしんでいる比率がたかい。

このあと「第1部第2章 時代をつらぬく『情報化』という文明史的転換」において詳述するように、今後の日本社会においては、通常のビジネス能力もさることながら、音楽や絵画など、芸術や芸能や各種スポーツに習熟していることが、ゆたかな人生をおくるうえでの必須条件となる時代がやってくる。しかもそれは、ときに収入をもたらす仕事に転化してしまう可能性さえはらんでいる。こうかんがえてみると、すくなくとも子供の世界における女と男の損得勘定は、女の子に有利にかたむいている。それは近代社会を支配してきた男性原理に、おなじ時代をべつスタイルでつらぬいてきた女性原理がとってかわる時代の谷間に顕在化した不均衡であるのかもしれない。

ところで、このことはたんに子供の世界にだけ、あてはまるのではなさそうである。総理府が1987（昭和62）年に実施した「女性に関する世論調査」の結果によると、「楽なのは男か女か」という質問にたいして、「女性」とこたえた人が約55パーセントであったのに対し、「男性」とこたえた人は約27パーセントであったという〔大蔵省印刷局、1988：p.184〕。また、ビジネス現場ではたらく女性の90パーセントが、「男性社員より気楽だ」と感じているというデータ（日本DEC社しらべ、高田〔1989：p.60〕より再引用）を目にしたこともある。むろん、だからといって職場における男女差別が逆差別に転じたということにはならない。ただ、現在という時代の先ゆきをとおく展望すると、女の立場をうらやむ男たちの数がすくなくなかったとしても、けしてふしぎはないといえそうにおもう。

女と男の金銭観のちがいと自由時間のすごしかた

「気楽さ」において女の立場をうらやむ男たち——それは、発展途上国にのこされている、のんびりした生活にあこがれる先進国の、富裕だが多忙な都市生活者の気分、にていなくもない。たとえば、概略こんなわらい話がある。

北イタリアは工業が発達してお金もちである。反対に南イタリアは、おくれてまずしい。そこで北の連中は、

「南の連中が、なまけ者ではたらかないから駄目なのだ」

という。すると南イタリア人が、北イタリア人にたずねる。

「お前さんたちは、何のためにそんなにはたらくのか」

「金をえるためだ」

「何のために？」

「いい生活をし、車をかい、夏にこうして南イタリアにきて、海岸でねころぶためだ」

「何だ。そんなことなら、われわれは一年中、ここでねころんでいるよ」

現代日本の女性が一年ぢゅう、ねころんでいるというのではない。また、かつては「はたらき中毒」として世界に名をはせた、われわれ日本人も、最近、とくにわかい年齢層ほど、仕事より趣味やあそび、社会より個人、会社より家庭を重視するようになった。にもかかわらず、すこし詳細に女と男の生活意識のちがいをくらべてみると、

「収入をふやして、ゆたかになる」

「仕事で充実感をえる」

などの意見に賛同する男性の比率は、女性より40パーセントもおおい（東海銀行、1987年しらべ〔日本能率協会、1988：p.104〕）。新入社員と対象としたべつの調査でも、男たちが、

「ビジネス上の技能や能力を身につけ、それを縦横に発揮すること」

に関心を集中するのにたいして、女たちは、

「お金をため、（そのお金で）知性や教養を身につけたい」

とこたえる（太陽神戸銀行、1985年しらべ〔日本能率協会、1988：p.20〕）。つまり、男たちは、

「仕事にうちこんで収入をふやし、ゆたかな生活を実現する」

という北イタリア人型の指向性をもっているとするれば、女たちの実現したいことは、きわめて直截なのであって、どちらかというとならイタリア人型の指向性をもっているといえる。こうしたちがいの背景には、おおくの男たちの心をとらえている、

「妻子をやしなうのは男の役目だ」

という脅迫観念が作用しているようにおもわれる。そしてそれは、仕事の選択のさいにもおおきな影響をおよぼす。じっさい男は何よりも、

「仕事の内容、会社の将来性や収入」

を重視する。しかしながら、女たちはまず、

「労働時間や休日の多寡」

を指標にして就職先を決定するというのである（日本能率協会、1985年しらべ〔日本能率協会、1988：p.20〕）。

それだけではない。仕事から解放された自由時間のすごしかたでも、はたらき、かせぐ女性の約70パーセントが、

「休日には仕事のことは完全にわすれる」(大安、1987年しらべ[日本能率協会、1988:p.37])

というのにくらべると、サラリーマンの4分の3は、

「会社で消化できない仕事を自宅にもちかえる」(レイク、1987年調べ[北出、1990:p.42])

とこたえている。よく似た傾向は、退社後の行動様式にもあてはまる。まずは女も男も、「ストレスの解消をめざす」

とこたえるものの、

「趣味・娯楽をたのしむ」

ことに話題がうつると、男は女の約3分の2に急減する[富士銀行広報部、1986]。さらに、その充実のどあいを質問すると、女性では肯定派が3分の2にたつするのにも、男性の肯定派は、およそ半分強にとどまるのである[住友銀行、1987]。しかも、わかい男女がデートをするばあい、男性の3分の2ちかくが、

「女性のまえて、かっこよくキャッシュで支はらう」

のにたいして、女性の約3分の1は、

「自分で支はらわずに、相手に支はらってもらう」[富士銀行、1986]。

もとより、デートのさいの支はらいをどちらがうけもつかで、女と男の損得勘定がきまるといふわけのものではなかろうが、職場をはなれた自由時間のすごしかたにかんしても、現代日本では、やはり「女のほうが気楽だ」という構造ができていようである。

夫婦と親子をめぐる意識と関係の変化

職場での仕事、自由時間のすごしかたのつぎに、家庭生活における女と男の意識と関係についてかんがえてみる。そこでの主人公は、母親と子供たちである。『昭和62年度青少年白書』(1987年)によると、

「子供たちは、父親よりむしろ母親にたいして『きびしい』イメージをいだいている」

という。むりもない。わかい層を中心にして、退社後の時間を夫婦でたのしむ男女はすくなくないが、やがて子どもが誕生すると、それもむつかしくなる。会社づとめの父親は家庭にいる時間がみじかいし、銀行振込の普及によって、むかしはたしかにあった「妻が

夫から給料をうやうやしくうけとる月1回の儀式」もみられなくなった。こうした状況のもとでは、父親の存在は希薄にならざるをえない。

しかし、これもまた、かならずしも最近になってはじまったことではない。家族が力をあわせて労働にはげんだ農家、家業をうけつぐ子供たちが仕事にはげむ父親をながめ、尊敬しながらそだった商人や職人の家族とちがって、父親だけが会社へはたらきにいくサラリーマン家庭が増加しはじめたころに、すでにみられた変化の当然の帰結だったのである。だからこそ、ぎゃくに日本の近代的工業化を推進した明治政府は、家長を中心とするイエ制度を、社会秩序の根幹として位置づけようとしたのである³⁵。昭和戦前期のサラリーマン家庭の父親が、かろうじて疑似家父長的権威を誇示しえたのは、その結果にほかならない。

ただし、それでも、主として農家の主婦がもっていた「シャモジ権」³⁶を継承したからであろう。当時から今日まで、夫が家計を裁量するヨーロッパ諸地域やアメリカなどちがって、日本のサラリーマン家庭では、家計の裁量権が主婦にゆだねられてきた。しかも大正デモクラシーの隆盛とともに、日本のジャーナリズムは「(家事にはげむ)細君に俸給を支払うべきか否か」といった特集をくむにいたっている³⁷。詩人の金子光晴が指摘したように、「女性をよろこばせ、彼女らと上手につきあう」ことに、日本の男たちが習熟していないことはあらためていうまでもないが、彼らはしばしば、からいぼりをくりかえしながらも、同時に妻であり、母であり、主婦である女たちを、それなりに尊重してきたといえなくもないのである。

にもかかわらず、1980年代なかばのテレビCMがいはなったように、「亭主元気で留守がよい」。さらには、

子供のいる主婦の労働時間に家政婦の時間給を乗じると、1年間あたりの家事労働の価格は、勤労者世帯の年平均実収入450万円の56%にもものぼる(1986年当時)。

といった指摘がおこなわれたりもする³⁸。

³⁵ この問題については「第2部第1章 『家父長制』とマイホーム主義」において、くわしく論じる。

³⁶ いうまでもなく「昔の日本の主婦がもっていた家族に食物を分配する権限」のことである。

³⁷ 『婦人公論』(1926年6月号)

³⁸ 外資系損害保険会社・A I U保険会社が、1986年6月におこなった試算によると、小学校就学前の子どもをもつ主婦のばあいなら、「1か月の労働時間×家政婦の時給」を計算すると(次ページにつづく)

しかしながら、こうした指摘がおこなわれているいっぽう、いったんは社会進出をめざして職業につく女性がふえたものの、1990年ぜんごには、ぎゃくに「男は仕事、女は家庭」というかんがえかたを支持する女性が増加するという時期があった。また、離婚率も1983（昭和58）年の人口1000人あたり1.51件をピークに、1990（平成2）年までは微減の兆候をしめしてきた。こうした状況のなかで、『昭和62年東京都子ども基本調査報告書』は、従来の「外出ずき」「自分の時間を大切に」「夫中心」「教育ママ」といった、なにかにつけてがむしゃらな4つのタイプの主婦にくわえて、

「料理が得意でいつもオシャレ、子供のしつけに自信があり、交友関係もひろい、いわば主婦・母親・趣味・仕事をバランスよくこなすニュー・マザー」

とでもよぶべき既婚女性が登場しはじめていると報告した。もしかすると彼女たちは、夫と適切な役割分担をしながら、子供たちをふくめて、もっぱらあそびとやすらぎを共有する、かつての日本には存在しなかった型の家庭生活と、それをささえるあたらしい夫婦の関係を創出しようとしていたのかもしれない。

変容する「はたらき、かせぐ女性」のイメージ

主婦・母親・趣味・仕事をバランスよくこなす「ニュー・マザーの登場」というものがたりは、家庭をでて、はたらき、かせぐ女性がめずらしいものでなくなったことの逆説的な結果だともかんがえられる。ここで筆者がおもいだしているのは、さきにすこしふれた野上[1922]の興味ぶかい一節である。すなわち、

高等教育を受けたもの（女）が家庭の事を嫌ふと言ふのは高等教育の罪では無くして、寧ろ高等教育の普及せざることの罪である。今日の如くに女子の教育程度の低い時には、一人の女が大学に入学すると世間が大騒ぎをして新聞に肖像を出したりするから、女子も自ら非常に偉いものと思つて、そのやうな誤つた考えを抱くやうになるのである。男の場合の如くに大学入学が日常茶飯になれば、昔の如きことは無くなるであらう [p.107]

よく似たことは、1970年代なかば以降の、いわゆる「女性の社会進出」にもあてはまる。それをテレビCMの文案のなかにかぎとってみると、1976（昭和51）年には、

「女性よテレビをけしなさい」（角川書店）

「女たちよ、大志をいだけ」（パルコ）

20万9398円になるという[AIU保険会社、1986：p.1]。

など、みょうに肩に力をいれて、キャリア・ウーマンをもちあげるものがおおかった。ところが、現実の社会に、はたらき、かせぐ女性がふえはじめると、

「一緒ならうまくいくさ」（1983年、西武流通グループ）

「すきで、一緒に」（1983年、丸井）

など、男とうまくやっていくことに興味がうつる。そして1985（昭和60）年ともなると、本章の第3節第1項で参照したように、

「わたしは夜中に、とつぜん、いなりずしがたべたくなったりするわけです。こんな自分をかわいいとおもいます」（セブン・イレブン）

といいはなつ女性が登場するのである。そこには、はたらき、かせぐことを、ごく普通にうけいれている現代日本のわがい女性たちの姿が彷彿とする。

ところで、女たちが家庭をでて、はたらき、かせぎはじめると、当然、相対的には家事がおろそかになる。それをどうして補償するのか。解決策のひとつは、これまた本章の第3節第1項で指摘したように、男たちが家事労働に従事することであった。しかし、それでもなお、夫婦がそろって多忙なビジネスにはげもうとすれば、快適な家庭生活は実現しがたい。そこに登場したのが、たとえばハウスクリーニングやベビーシッターや買物代行業などといったニューサービス産業である。

では、そのための労働力はどこから供給されるのか。いうまでもなく家庭でおなじ仕事に従事している「家事のプロ」である専業主婦がそれをになう。つまり、1980年代なかば以降に増加した女性の職場のすくなからざる部分は「家事を商品化」することによって生じた。だとするならば、かせぐ仕事をもつ女性と専業主婦とのあいだに、どれほどのちがいがあろうというのだろうか³⁹。

もちろん他方で、OA（オフスオートメーション）やマスコミ、ファッション、インテリアなどに関連する専門的職業につく女性がふえていることは否定しない。しかし、最近の女性むけ雑誌やTV番組に目をやると、彼女らと同等の立場で、料理や掃除やファッションやインテリアにひいでた専業主婦が登用されている。ふしぎはない。ニュー・サービス産業だけでなく、今日の企業が提供する商品やサービスのおおくは、住宅をはじめ、

³⁹ 本小論において、わざわざ筆者が「はたらき、かせぐ女性」という表現をもちいるのは、彼女たちを、たんに「はたらく女性」とよぶのは、専業主婦にたいする一種の差別表現だとかんがえるからである。

「かせがない専業主婦」もまた「はたらく女性」にほかなるまい。

家庭電化製品、衣料品、食品など日常生活を、よりおもしろく、かつ快適にたのしむためのものばかりである。現代日本のビジネスは、まさに専業主婦の経験と知恵を必要としているという面を閑却すべきではない。

そんな時代に、ビジネス現場の女と男のあいだの距離とともに、家庭の外ではたらき、かせぐ女性と、家庭の中ではたらく主婦の距離が、きわめてちいさなものになるのは、当然である。いやむしろ「遊戯化」という時代の趨勢のまっただなかにある現代の日本社会にあっては、自由な時間を存分にもち、夫の収入にささえられながら、それを利用して、ひたすら多様なあそびを堪能し、ときには、そのあそびを職業に転化してしまう機会と可能性を保留している家庭の主婦こそが、時代の先端にもっともちかいところにいるというみかたすら、できないわけではないのである。

第7節 ゆらぐ現代の女と男の関係——むすびにかえて

ゆらぐ女と男の関係をめぐる模擬実験

「にている、にっていない……」

「仲よし、仲たがい……」

まるで「恋の花びらうらない」のように、女と男の異同と相互関係をめぐる考察はとどまるところのない「ゆらぎ」の渦中をただよう。おそらくそれは、現代日本の現実が体験しつつあるシミュレーション（模擬実験）の反映なのである。ただ、それにしても「現実がシミュレーションである」とは、いったいどういうことなのか。現実とは「実在のできごと」、シミュレーションとは「絵空事の世界のできごと」を意味したはずではなかったか。

そこでおもいだすべきは、現代の科学・技術文明の巨大なインパクトである。たしかに、かつて日本人の現実の人生は、地域や階層など出自の条件につよく制約された。しかし今日、それは個人の欲望や目標にもとづいて「設計する」⁴⁰ことのできる、そのかぎりにおいては「シミュレーションのための白紙のキャンバス」になった。ありあまる「ゆたかな

⁴⁰ 「人生設計」という主題については、第4部第1章「職場の人間関係——近代化の完成と再編成」において、くわしく論じる。

社会」が多様なニッチェ⁴¹を用意したのである。くわえて、発達し普及した多様な情報環境が、絵空事の世界に仮想的な現実感を付与する。たとえば1985（昭和60）年に放映されて人気をあつめたTV番組「金曜日の妻たち」は、虚構の世界の話でありながら、現実の生活に「不倫の日常化」という影響をもたらした。

子どもたちの場合は、もっと極端である。友人の奥野卓司（情報人類学）の話によると、たんに芸能人の「おっかけ」をやっているにすぎない少女が、日記には「ロック歌手・某との性体験」を刻明にしるしたりするのだという。そこでは、想像力のえがきだす世界が、場合によると「なまの現実以上の現実性」をおびているということになる。

そこで、女と男の関係の原点にたちもどってみる。するとそれは、つい最近まで、一対をなすふたつの性の関係の持続と、それがもたらす妊娠・分娩・育児の過程として完結するはずのものであった。ところがこんにち、すくなくとも技術的には、人工受精や試験管内受精、子宮の貸与などが可能になった。それを前提として思考実験を展開すれば、極端な場合には、つぎのようなケースを想定することができる。つまり、

同性愛女性同士の「夫婦」の片方Aが卵子を提供し、それに任意の男性Cの精子を受胎させ、第三者の女性Dの子宮をかりてうまれた子どもEを、Aとその同性の配偶者Bとがそだてる。

こうした関係を想定すると、そこでの親のアイデンティティは、遺伝的な親（女A・男C）、生理的な親（女D）、社会的な親（女A・B）に拡散するとともに、女と男の役割や関係も、従来の秩序を逸脱せざるをえまい。当然それは、現代社会にいきる女と男に、あたらしいシミュレーションへの参与を要求する。その結果、現実の女と男の関係と異同も、複雑な「ゆらぎ」を体験することになるのである。

そのことを象徴するかのよう、最近、しばしば「成長後にジェンダーアイデンティティを変化させるトランス・ジェンダー」が話題にのぼるようになった。たとえば、大島〔1997〕は、「『少年』時代にはジョンとよばれ、現在はナンシー・ナンジェロニという名の女性コンピュータ技術者としてはたらくアメリカ人」を紹介している。また、蔦森〔1995：pp.133-150〕は、「男性として生まれ、しかし現在は頭髪から顔の化粧、衣服

⁴¹ ほんらいニッチェ（niche）とは「壁のくぼみ」を意味する。それが転じて「（生活の型の受け皿としての）生態的地位」を意味するようになった。それをここでは、さらに人間がつくりだす経済社会にあてはめて、産業や職業の多様化を「ニッチェの増大」という言葉でとらえたのである。

から声の調子まで、完全に女性になりきった自分自身の体験」を紹介している。

このようにのべたところで筆者は、人類学者レヴィ・ストロース [1988 : p.75] の、つぎのような指摘をおもいだす。

多くの社会で、耕作のように自然の分野に属する活動や手で形を作る土器づくりのように素材に直接触れる仕事は女性のものとしてされ、逆に同じような仕事でも道具や機械を用い、一定の複雑さをもつ仕事は男性のものとしてされるわけです。

もし、この指摘が適切であるとすれば、現代の女性にとっての「自然」とは、高度に発達した科学技術がもたらす、極度に人工的な現代文明そのものだけということになるのか。この疑問に筆者は、みずからが体験した、つぎのような挿話をもってこたえたい。

ある自動車販売店が、多数の新車がならぶ展示場でモダンバレエの上演をこころみたところ、あわてる男性ダンサーを尻目に、女性ダンサーのひとりは、

「あ、そうか、自動車を樹木にみたてて、森のなかでおどっているとおもえばいいんだわ」

といて、すぐにその舞台装置になじんだのであった。

際限のないシミュレーションのはてに、文明と自然、女と男の異同と関係は、どのような現実の未来図をえがくことになるのか。問題はきわめて興味ぶかい内容をはらんでいる。同時に本章の最初の部分では、もっぱら「文化」としてとらえられたジェンダーをめぐる諸現象が、議論をかさねていくうちに、じつは人間の生活と社会とをささえる装置・制度系、すなわち「文明」のシステムと相互にふかく関連していることがあきらかになった。第1編第2章では、こうした視点を敷衍して議論をすすめることになるはずである。

いわゆる「妻という立場」をめぐる女性の^{アンバランス}愛憎

ここまで、じつに多様な局面にわたって「遊戯化」の趨勢をたどる現代日本社会における「女と男の異同と関係」をめぐる考察を展開してきた。その結果あきらかになったことは、かつて小説家の野坂昭如が「男と女のあいだ」にイメージした「ふかくて暗い川」の随所に橋がかかり、そのあいだの緊張がゆるんできたということではなかったか。

生理的な意味での性的差異はおくとして、すくなくとも社会・文化的な意味での女らしさと男らしさは、ここ数年、きわめて劇的に変転してきた。かつては「女の園」であった大学の家政学部にも男子学生が入学するいっぽう、先端技術をとりいれた製品開発の先頭にたつ女性があらわれる。そうかとおもうと、ひと昔前までは男に専有されてきた「のむ・

うつ・かうあそび」に女性が参与しはじめる。そして、ドブネズミルック一色であった男の衣装が色あざやかになり、女性のしぐさや言葉づかいが男っぽく変化したりもした。

これらの変化は、もっぱら「工業生産性をたかめるために、勤勉に労働する」という気風にささえられた「近代的工業化のながれ」が、おおきなまがり角をむかえた当然の結果である。そして、工業にかわって台頭する各種の情報産業は、人間の心身の充足それ自体をめざし、現代文明は全体として快適さそれ自体をめざす「遊戯化」とでも名づけるべき趨勢を、その内側にはらんでいる。ただし、近代化を先導してきた男たちのあいだには、いまだに仕事や労働を神聖視する価値観が濃厚である。そのためによけい、おもしろさやたのしさにたいする女性の反応の敏感さがめだつ。そして、このことが現代を「女性の時代」ととらえさせる要因を形成している。

そんな状況のなかで、急速に発達する先端技術、なかでも人間の生殖にまで介入しはじめた生物・医療技術は、同時代の女と男を、あらたな異同と相互の関係に適合しようとするところみにかりたてる。では、それは今後どのような道ゆきをたどるのか。

そこでおもいだすのは、1995（平成7）年、通産省が15年ぶりにまとめた「男女3万人の身体計測の結果」⁴²である。それによると、過去15年間、女性の体のサイズはほとんど変化してこなかったのに、男の体は一方的に大型化してきたのだという。このことは、本章の第2節で紹介した、

「性的二型性の度合いが、その社会における男女の平等性・不平等性を象徴する」

とするヴェックス [1979] の仮説を前提にするならば、生活文化と世相の表層における平等化の底流に、それとはべつの不平等化の要因が存在していることを示唆しているということになるのかもしれない。

ただし、やや大胆な、べつの仮説を提示すれば、はたして体のおおきい性が、つねに体のちいさい性にたいして優位であるのかどうかを考察しなおす必要がある。従来「性的二型性」をめぐる固定観念じたいが、近代工業社会の論理に足をすくわれている可能性もなしとしないからである。そこで、世俗的にすぎるが、この問題の考察にかかわる手がかりをもとめれば、ふるくからある「^{うと}独活の大木」のイメージにゆきつく。いうまでもなく、それは「茎が長大でも、軟らかくて役に立たないことから、身体ばかりは大きい、役に立たない人のたとえ」 [新村出、1991：P.241] を表象する言葉である。つまり、やがて

⁴² 1995年6月1日のNHKテレビ「クローズアップ現代」で紹介された。

情報産業社会がさらに成熟する時代においては、身体がおおきいばかりが能ではなく、身体の大小が優位性の指標にはなりえない可能性が留保されるべきだともわれる。

ただ、しかしながら企業や大学、政治や行政など、明治以降の近代日本の屋台骨をささえてきた制度の根幹部分ほど、いまなお女性にたいして差別的であることは否定しがたい。欧米先進国、とりわけスカンジナビア半島などの北ヨーロッパの国ぐににくらべると、これらの領域において、日本の女性がはたしている役割が圧倒的にちいさいことは、あらためていうまでもない。また、たとえば某大手総合商社における、女性の賃金の男性の賃金にたいする比率が、25歳で80.1パーセント、30歳で61.1パーセント、45歳になると51.7パーセントというぐあいに、きわめてひくい状態におさえられているといった事実もある〔小野、1997：pp.11-13〕。

これは、ある意味ではふしぎな現象である。なぜなら通常、社会変化は、まず政治や経済の領域でおこり、生活や文化の変化は、そのあとにひきおこされるからである。ところが、本章では生活と文化を中心に話をすすめてきた。そこでは1975年以降、ほぼ一貫して女性の活力が増大し、女性が時代のながれを先導してきた。それにくらべると、企業や大学、政治や行政など、明治以降の近代日本をささえてきた制度の根幹部分には、どこもなくふるくさいイメージがつきまとう。おそらくそれは明治以降、近代的工業化という時代の慣性 (inertia) が、強引かつ強力に時代のながれをおしとどめているからである。

このことは、いまひとつ、これまた不可解なデータを参照すると、いっそう明快になる。そのひとつは1995（平成7）年の『国勢調査』の結果である。この調査によると夫、すなわち「配偶者のいる男」の数が32,015,000人であるのにたいして、妻、すなわち「配偶者のいる女」の数は32,055,000人である（ということになっている）。内縁関係は自由であるが、重婚が禁じられている以上、夫と妻の数は同数であるはずなのに、実際には妻の数が、夫の数より4万人もおおいのである。そこで、国勢調査が自己申告にもとづいておこなわれることをおもいだすと、この数値は、いささか微妙な立場にある女性が、

「世間体をかながえると、妻とかいておくほうが都合がいいな」

そうかながえて、実際にもそうかいた結果なのだ判断するほかない。現代日本では、いまだ「夫がいる妻」という立場への女性のおもいれがつよいのだということになるであろう。ところが、ぎゃくに高齢になると、妻の主導で離婚にふみきる夫婦、

「どんなことがあっても、夫の家の墓にだけははいらない」

と主張する女性の数がふえる。げんに比叡山の延暦寺大霊園の個人墓などでは、女性の

占める割合が、じつに90パーセントにもおよんでいるのである。

相互に矛盾をはらむこれら2種類の数量データは、世間にたいしては「夫のいる妻」であることをひけらかし、ぎゃくに老境、もしくは死をむかえる段階にいたれば、その役割から解放されたい。そんな現代日本の女性の「配偶関係を維持すること」への愛憎ともにある価値観を表象しているのだとおもわれる。このあたりに現代日本の「ジェンダーをめぐる生活文化と世相の変容」が現在なお、たどりつつある方向が示唆されている。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者のばあいは発表順）

- ・A I U保険会社、1986『主婦業の値段考』同社
- ・海老坂武、1986『シングル・ライフ——女と男の解放学』中央公論社
- ・藤生京子、1998「20代女性に広がる『低温恋愛』」『アエラ』（1月26日号）
- ・富士銀行広報部、1986『現代独身サラリーマン・OLの「アフター5」の過ごし方（FUJI NEWS RELEASE）』同銀行広報部
- ・橋本治、1983『男の編^{ミット}み物、橋本治の手とり足とり』河出書房新社
- ・稲垣史生・編、1966『江戸編年事典』青蛙房
- ・北出修平・編、1990『アンケートデータブック '90』日本能率協会
- ・Clade Levi-Strauss, 1986, *L'anthropologie face aux problemes du monde moderne*,
（レヴィ・ストロース、C.、川田順三ほか訳、1988『現代世界と人類学（第三のユマニスムを求めて）』サイマル出版会
- ・森彰英、1991「ナイロン・ストッキング」（石川弘義ほか編）『大衆文化事典』弘文堂
- ・モイヤー、J.T.、1987「キンチャクダイ科魚類の社会構造と雌性先熟」（中園明信・桑村哲生・編）『魚類の性転換（動物・その適応戦略と社会⑨）』東海大学出版会
- ・無署名、1955「風俗時評『W+M』時代——男のなかに女あり、女のなかに男あり」『週刊朝日』（5月8日号）
- ・無署名、1972「オーラル・セックス——唇による性感を新発見する」『微笑』（9月9日号）
- ・無署名、1973「女性がする前戯術」『ヤングレディ』（1月22日号）
- ・無署名、1979「警視庁保安一課の取調べを受けた〈売春夫〉第一号」『週刊文春』（5月10日号）
- ・無署名、1985「オトコ言葉DEおしゃれ」『週刊平凡』（11月15日号）

- ・中村将、1987「性転換の生理と組織」（中園明信・桑村哲生・編）『魚類の性転換（動物・その適応戦略と社会⑨）』東海大学出版会
- ・日本能率協会（編）、1988『最新アンケートなんでも事典』同協会
- ・野上ふみ、1955「オトコオンナ第一号の記——女は強く、男は弱し」『文芸春秋』（10月号）
- ・野上俊夫、1922「婦人の男性化」『太陽』（1月1日号）
- ・大蔵省印刷局・編、1988『統計よもやま話の本（絵で見る暮らしのデータバンク）』同局
- ・大島寿美子、1997「『性別』の境界を超える」『アエラ』（6月9日号）
- ・小野智美、1997「女が出世に惑う時（男女雇用機会均等法10年の現実）『アエラ』（2月10日号）
- ・サントリー不易流行研究所、1997『（現代人の生活意識と行動調査）時代の気分、世代の気分——〈私がえり〉の時代』同研究所
- ・新村出、1991『広辞苑（第4版）』岩波書店
- ・総理府広報室・編、1989『日本人の酒とたばこ』大蔵省印刷局
- ・住友銀行、1987『独身サラリーマン・OLの「オフ」生活アンケート調査』同銀行
- ・高田公理、1987『[遊戯化]社会を探検する——レトロ現象からエスニック気分まで』PHP研究所
- ・高田公理、1989 a 「遊戯化社会の女と男」『中央公論』（4月号）
- ・高田公理、1989 b 『「いまどき」の世相学』PHP研究所
- ・高田公理、1991『情報快楽都市——街を生かす空間美学』学芸出版社
- ・高須俊明、1987『酒と健康』岩波書店
- ・千葉、1925「女性の男性化、男性の女性化」『太陽』（9月1日号）
- ・Tofler, Alvin, 1980, *The Third Wave*, William Morrow & Com., Inc.（トフラー、A、1980（徳岡孝夫・訳、1982）『第三の波』中央公論社）
- ・蔦森樹、1995「ジェンダー化された身体を超えて——『男の』身体の政治性」（井上俊ほか編）『ジェンダーの社会学（岩波講座・現代社会学⑩）』岩波書店
- ・上野千鶴子、1995「差異の政治学」（井上俊ほか編）『ジェンダーの社会学（岩波講座・現代社会学⑩）』岩波書店
- ・梅棹忠夫、1959「妻無用論」『婦人公論』（6月号）中央公論社

- ・梅棹忠夫、1963「情報産業論——きたるべき外胚葉産業時代の夜明け」『放送朝日』（2月号）朝日放送
- ・梅棹忠夫、1984「近代世界における日本文明」（梅棹忠夫・石毛直道・編）『近代日本の文明学』中央公論社
- ・渡辺恒夫、1986『脱男性の時代——アンドロジナスをめざす文明学』勁草書房
- ・ヴェックス、M.、1979（「芸術と女性」共同研究グループ抄訳、1986）「古代エジプト及び古代ギリシャにおける男女のポーズと体型の歴史的変遷——『らしさ』のボディ・ランゲージ」『木野評論』（17）京都精華大学

第2章 時代をつらぬく「情報（産業社会）化」の趨勢¹

第1部第1章においては、20世紀日本における高度経済成長の過程で、女らしさや男らしさ、女と男の関係をめぐる価値観、つまりはジェンダーの文化が、どのような変容のあとをたどってきたかを考察した。その結果、それは日本社会全体の装置・制度系、つまりは文明のシステムと不可分の関係をきりむすんできたことが判明した。では、おなじ時期に、日本の文明システムそれ自体は、どのような変容を体験したのか。それを第1部第2章においては「工業社会から情報産業社会への推移」という視点でとらえて検討する。

ここで情報産業社会とは（情報産業の定義と順序があとさきになりはするが）、さしあたり、つぎのような属性をはらんだ社会を意味している〔高田：1998、p.2〕。

- ① 社会に流通する情報の量が増大し、政治や経済、文化や生活など、あらゆる局面で、情報のはたす役割が増大する社会。
- ② 情報の蓄積、処理、創造、提供、伝達などを本来の業務とする産業が社会や経済にとって基幹的な役割をはたす社会。

そこで最初に注目すべきは、戦後の日本社会における放送産業の隆盛に着目して、情報産業社会の到来と、その特質を厳密に素描した歴史的な論考としての梅棹「情報産業論」〔1963〕²である。

第1節 梅棹「情報産業論」を再読する

梅棹〔1991〕は、最初に「情報ということばを、もっともひろく解釈して、人間と人間のあいだで伝達される一さいの記号の系列」と定義し、「放送産業だけでなく、新聞、ラジオ、テレビなどという代表的マスコミのほか、出版業はいうまでもなく、興信所から旅

¹ 本章のもととなる論文は最初、国立民族学博物館の特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の第8回シンポジウム「日本人と情報」(1989年12月20～22日)において発表された。そのうち野村〔1992b〕に収録されて高田〔1992〕となった。

² ただし、本章における引用のためのテキストとしては、梅棹〔1963〕とおなじ内容の梅棹〔1991〕をもちいる。

行案内業、競馬や競輪の予想屋」、さらには教育・宗教までも「情報産業」という、みずからの造語によって一括し、それらが「物質としての商品とはいちじるしくことなるなにか」を販売することで成立している点を指摘した [p.25]。そのうえで、農業生産の開始以降の人類の産業史を概略、つぎのように展望する（文責は筆者）。

これまで人類文明史は2つの革命を体験し、いま第3の革命を体験しつつある。第1は農業革命、第2は工業革命、第3は情報産業革命である。それは動物の発生学とのアナロジー（類推）をもちいると、つぎのように解釈できる。ここでいう「発生」とは、受精した卵細胞が分裂をくりかえし、内胚葉・中胚葉・外胚葉と名づけられた3つの部分からなる胚を形成し、やがて成体になるまでの過程を意味する。その過程を単純化していえば、内胚葉からは消化器官系が、中胚葉からは筋肉・骨格系が、外胚葉からは脳神経系と感覚諸器官が、それぞれ形成される。ならば、農業革命で達成された農業の時代は、人間の「腹のたし」、すなわち内胚葉に由来する消化器官系の機能を充足させるという意味で、この段階の産業は「内胚葉産業」と名づけられる。同様に工業は、中胚葉に由来する筋肉や骨格の機能を充足させるという意味で「中胚葉産業」とよぶのがふさわしい。そして最後に出現した情報産業の時代は、脳神経系・感覚諸器官の機能を充足させる時代である。この段階の産業は、外胚葉に由来する器官の機能充足をめざすので「外胚葉産業」だといえる。

このことは人類の文明史に固有なものではなく、すこし視点をずらせると、動物の進化史や戦後日本の世相史にもあてはめることができる。

たとえば、もっとも単純な動物（たとえばイソギンチャクなどの腔腸動物）は、全身の機能が、ほぼ消化機能（＝胃と腸）に限定される。ところが、いますこし進化した動物（たとえばタコ・イカなどの軟体動物）は、これにくわえて運動機能（＝筋肉系）を発達させ、さらに進化した動物³は、高度な情報処理機能（＝脳・神経系）を発達させる。動物の発生現象を進化論的に解釈すれば、このような議論も成立しうるであろう。

あるいは、第2次大戦後の日本人の生活欲求の焦点の推移をふりかえってみる。たとえば昭和20年代の日本人は、「腹のたし」になる食物をもとめてやけ跡の闇市にあつまっていた。しかし昭和30年代になると、日常生活における筋肉労働を代替してくれる、つまりは「筋肉のたし」になるエネルギー変換型の家庭電化製品（たとえば電気掃除機や電気洗濯機な

³ サカナ→カエル→ヘビ→トリー→ケモノ→サル→類人猿、そして人間……という具合に列挙してみると、消化器系、筋肉骨格系にくわえて脳・神経系が進化していくプロセスが容易に理解できる。

ど)への需要がたかまる。それが昭和40年代には、日常生活にたのしきやおもしろさをもたらしてくれる、つまりは「脳と心のたし」になる視聴覚情報提供型の家庭電化製品(たとえばカラーテレビやステレオ)へ、さらに昭和50年代から平成にかけては、味覚を充足する美味しい食味、嗅覚を充足する脱臭剤や多様なかおり商品、触覚を充足する冷暖房機器や衣服の風あいなどへ拡大していくことになるのである。

ところで、梅棹[1963]が提起した人類文明史への展望は、トフラー『第三の波』[1981]をはじめ、ダニエル・ベルなど、複数の未来学者によって、すでに提出されていたのではなかったか。そこで気づくべきは、梅棹「情報産業論」が、これら欧米人の著作よりも、はるかにはやい1963(昭和38)年に発表されたという事実である。いらい今日まで、類似の議論が多数、発表されてきた。そしてそのおおくは、つぎのような特徴、すなわち、

コンピュータや通信技術の発展にともなって産業社会の効率がたかまった。この時代のながれにおくなくてはならない。

という傾向を濃厚におびているようにみえる。

しかし情報とは、じつは動物進化の途上において、さしあたっては無目的におおきくなった脳をはじめとして、動物や人間の脳・神経系と感覚器官が、みずからを環境に適応させ、あるいは充足させるために「発見」した、たとえばユクスキュル[1933]の表現をかりると「環境世界の属性」にほかならない。むろんそれは、情報の処理と操作に習熟した人間が、科学・技術の発達に代表される大量の情報を生産し流通させることによって、製造業をはじめとする近代工業の一層の精緻化と発展をはかるという役割をはたしもする。いわゆる技術革新は、このことを、べつの言葉で表現しているということになるであろう。

それだけではない。梅棹[1991]によると、

4 ユクスキュル[1933]は、客観的存在としてとらえられがちな「環境」から、動物によって認知される「環境世界」を区別して、つぎのようにのべる。

その人はもう動物を単なる客体としてではなく、知覚の行為と、作用の行為とをその本質的な活動として保持する主体と見なすであろう。こうなれば、環境世界へと通じる門はすでに開かれたのである。なぜならば、主体が知覚するすべての物がその知覚世界(Merkwelt)となり、主体がおこなう作用のすべてがその作用世界(Wirkwelt)となるからである。そして知覚世界と作用世界が一つのまとまりのある統一体、つまり環境世界(Umwelt)を作り上げるのである[p.9]。

ここで知覚と作用を媒介するのが「情報」であるということになる。

情報の時代、あるいは情報産業の時代こそは……人類史が到達しうる最終段階なのかもしれない [p.223]。

だとすれば梅棹 [1963] は、人類文明史をめぐる最後の包括的な議論となる可能性をおびていたことになる。この点にかんしては、本論文の「終章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像」においてふれるつもりである。なお、いまひとつ、梅棹 [1963] の指摘によると、情報産業の時代を支配する経済的原理は「市場原理」ではなく「お布施の原理」にちかいものになるという。ここでは詳述しないが、このこともまた現代の日本社会において、いよいよ現実性をましているようにおもえる⁵。

こうした前おきをのべたうえで、梅棹 [1963] とは、すこしことなる視点から、その妥当性を検証し、近世江戸の情報（産業）社会をひるがえったのち、いわゆる「情報（産業社会）化」⁶という現象が、20世紀日本の高度経済成長にともなう生活文化と世相の変容をつらぬく趨勢としての意味をはらんでいることを考察する。

第2節 情報産業社会のその後

情報生産とその効率をめぐる個人的体験

最初に「作文」という情報生産行為をめぐる個人的な体験を考察した文章を引用する。

ワードプロセッサを使って文章を書くようになって四年余が過ぎた。使い始めの頃は飛

⁵ 1995年1月17日に発生した阪神大震災はいらい注目をあつめるようになった「ボランティア活動」の活発化やNPO（非営利団体）のはたす社会・経済的役割の増大などは、従来の「市場型交換経済」より、ここでいう「お布施の原理」にちかい属性をはらんでいるともいえる。

⁶ 「情報化」という用語には、多岐にわたる意味が負荷される。それらを列挙すればつぎのようになる。

- ① 商品やサービスが、それに付加された情報ゆえに価値をもつようになる現象
- ② 風景や人間などの物体を、写真や映画やビデオ映像に撮影したり、文章で表現したりすること
- ③ 社会に流通する情報量が増大し、その社会的な役割が増大する現象
- ④ 経済社会における情報産業の比重が増大していく現象

本章では、①と②にたいしては「情報化」、③にたいしては「情報産業化」、④にたいしては「情報産業社会化」の用語を対応させることを基本とする。ただし、その正確な区別が容易でない場合には「情報（産業）化」「情報（産業社会）化」などの表現を、適宜あわせてもちいざるをえない。

躍的に生産性が上がった。だが、それから半年、推敲にやたら時間がかかる。原稿を読み返してみると、いくら手直しをしても不満な部分が残る。それを二度三度、繰り返すうちにまた時間が経つのである。

ぼくが書くのは大抵、締め切りのある「商品」原稿だ。いつまでも一つの仕事にかかりきりになっているわけにはいかない。推敲を重ねるほうが良くなることが分かっているけど、どこかでケリをつけざるをえない [高田、1988 : p.142]。

この記述は、情報生産一般にかかわる、ふたつの重要な問題を提起している。その第1は、文章をはじめとして、情報は一般に時間をかけるほど質が向上するらしいということである。第2は、ワードプロセッサをはじめとする、いわゆる情報機器は、情報の処理と生産を容易にすることで、人にそのことを気づかせるらしいということである。

だとするならば、多様な情報機器の発達は、場合によると、情報生産の効率を低下させる可能性がある。このことを示唆する事実には、情報の供給と流通コストと消費量の関係をしめした数量データがある。それをグラフ化したのが図1-2-1である。この図は、つぎの3種類の数量的データの年次推移（1975～1985年）をしめしている。

- ① あらゆる情報媒体をとおして社会に供給された情報の総量
- ② そのために必要とされた情報の流通コスト
- ③ 消費された情報の総量

この図からあきらかなように、ここに提示した10年のあいだに、

- ① 総供給情報量は約1.8倍に増加したのに対して、
- ② 総情報流通コストは2倍以上に増加し、にもかかわらず、

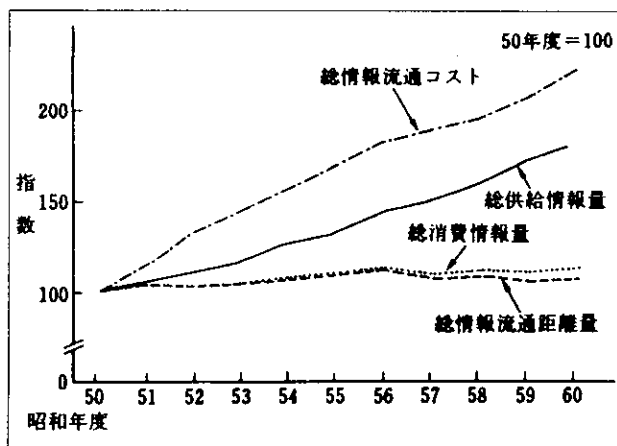


図1-2-1 情報流通量などの推移（資料出所：郵政省1986『通信白書』）

③ 総消費情報量は、わずかに約10パーセント増加したにとどまっている。

ここで、かりに「供給」を「生産」とよみかえ、その「効果」が「消費の度合」によって計測できると想定すると、単位情報あたりの「生産」の「効果」は、相対的に低下したことになる。ましてや、その流通コストが、それ以外の数値を大幅に凌駕して増大していることは、すくなくとも金銭的には単位情報あたりの効果が低減しつつけていることをものがたる。このようにかんがえてみると、各種の情報機器の技術革新に代表される、いわゆる「情報（産業社会）化」の進展は、そのどこかに、反効率性への指向性をはらんでいる可能性があるということになるであろう〔高田、1988〕。

工業社会の効率化と「情報のメッセージ性」

前項でのべたことは、こんにち、いわゆる「情報（産業社会）化」が、ふつうによびおこすイメージとは、相当ニュアンスが異なるといわねばならない。通常それは、

- ① 情報の処理・蓄積・加工・伝達の効率化をとおして科学・技術の発展を促進する。
- ② 労働力・原料・エネルギーの資源配分を合理化し、生産を自動化することによって、工業生産性をたかめる。
- ③ 流通にかかわる経費の削減とその迅速化によって物流を合理化する。

とかんがえられているからである。そこでは文字どおり「情報は効率」なのである。

むろん、このことにまちがいはない。1930（昭和5）年代以降、通信における雑音の低減にかんする研究の途上で、情報（information）を数量化可能な概念として定義しなおした通信技術者のC・E・シャノン、制御工学者のN・ウィーナーも類似のイメージをいただいていた。たとえば、1937年前後に情報理論の基礎をうちたてたとされるシャノンは、つぎのようにしている。

起こりうる事象がいくつか考えられ、そのうち、どれが実際に起こるかが不確定であるとき、その不確定性を減少させる働きをするものを情報という〔吉田、1985：p.12〕。

いいかえれば、ある目的をもった機能や行動の効率をたかめるのが情報の役割であるというのである⁷。いっぽう、ウィーナー〔1954〕は、つぎのようにしている。

⁷ ある日、家をでるまえに「雨がふる確率が極度にひくい」という情報を手にいれた人は、おそらく「傘をもたずに」外出する。天気予報がもたらす情報は、人間の行動の無駄をはぶき、その意志決定を合理化する。これと同様の思考実験は、いくらでも可能である。

情報とは、われわれが外界に対して自己を調節し、かつその調節行動によって外界に影響を及ぼしてゆくさいに、外界との間で交換されるものの内容を指す言葉である。情報を受けとり利用してゆくことによってこそ、われわれは環境の予知しえぬ変転に対して自己を調節していき、そういう環境のなかで効果的に生きてゆくのである [p.11]。

ここでは「調節」がキーワードになっている。ウィーナーは、照準装置の制御に必要な飛行機の手速や方向、高射砲の弾の初速や砲先の角度など、すべて数値で表現できるパラメーターを「情報」という概念で一括し、それを処理し、機能させる調節のメカニズムを、サイバネティクス (cybernetics)⁸と名づけた。

このように、情報をめぐる学問や技術は最初、通信における雑音の排除、高射砲などの武器の制御など、軍事的要請に触発されて発展の緒についた。1946 (昭和 21) 年、ペンシルバニア大学で完成した世界最初のコンピュータである ENIAC の開発の背景にも、あきらかに軍事的な目的があった。

このことは、すこしまえまでの「情報」という日本語の単語の使用法に整合する。梅棹 [1963] 以前にしるされた文書のなかの「情報」は、基本的に英語のインテリジェンス (intelligence) に対応する「軍事情報」の意味でもちいられている。のみならず、おなじ時期に印刷された書籍のなかに「外務省情報部」以外の使用例は皆無にちかい。

そこでつぎに、日本近代における情報という単語の使用例にかんする歴史的な考察 [久保、1992 : pp.158-192] を参照する。この論文によると、情報という単語の初出は、1876 (明治 9) 年に陸軍少佐・酒井忠恕が翻訳した『仏国歩兵陣中要務実地演習軌典』であって、「斥候、偵察、問諜などがもたらした地勢や敵情に関する報知」の意味でもちいられているという。そしてそれが普及するのは 20 世紀のことであった。軍医にして近代日本を代表した文学者の森鷗外が、1901 (明治 34) 年、軍事理論家クラウゼヴィッツの『戦争論』を翻訳するさいに Nachricht の訳語として「情報」の 2 文字をもちいたのである。その結果、要約すれば情報は、つぎのような意味をはらむようになった。

軍事的な戦闘に勝利するには、敵の状態を正確にしらねばならない。そのさい、敵の人数や兵器の数量もさることながら、それ以上に大切なのは、敵の兵士の士気 (モラル) を正確に把握することである。

⁸ サイバネティクスという名称は、「船の舵とりをする人」を意味したギリシャ語の単語 kybernetes からの造語である。

クラウゼヴィッツは、この点を強調した最初の近代的軍事理論家であった。それを森鷗外は、敵の兵力についての「報せ」と、敵の兵士の「情 = 士気」の両方の要素をあわせもった「情報」という単語に託した。こうして、本章のすこしまえにふえたように情報が、もっぱら軍事情報を意味する単語としてつかわれようになっていった。

ところが、のちに情報産業社会の到来の一面を、つよく象徴することになるコンピュータの嚆矢となったENIACが完成したとき、すでに第2次大戦は終結していた。そこでコンピュータをはじめとする各種の情報の処理・通信・加工・蓄積、自動制御などの技術は、科学・技術の開発、生産の自動化、物流の合理化など、産業社会の装置と制度の効率化に応用されることになる。なかでも、もっとも身ぢかな情報伝達装置としての電話がはたした役割にはめざましいものがあった。日本におけるその普及台数は、1955（昭和30）年前後に200万を突破し、要件伝達の高速化によって各種の事業所の事務効率を格段に向上させた。

やがて1970（昭和45）年代になると、最初は大型のコンピュータの普及が緒につき、さまざまな局面における情報処理の速度が大幅に上昇した。その結果、科学・技術の発展が加速化し、生産や流通の現場におけるビジネス効率が上昇した。おなじころ、すでに1955年前後から増大してきた各種の情報媒体をとおして、社会に多様なビジネス情報が氾濫して、「情報洪水」の語をうみだした。そして「情報（産業社会）化」におくれることは、熾烈な競争が展開されるビジネス社会からのおちこぼれを意味するという理解がひろがっていく。

こうして情報という言葉が、ひとことでいえば「量と速度と効率と機能」の代名詞としてもちいられる世相が形成されていった。もちろん実際に、それは人間が創出した装置・制度系である文明のシステム全体に作用して、その効率と機能をたかめる役割をはたしている。ただ、このような装置・制度系の効率と機能の向上は、ほんとうは情報がもたらす効用のなかばにすぎない。そこでかりに、文明の装置・制度系に作用して、その効率を上昇させる情報を、その有意味性に着目して、ここでは、かりに「メッセージ型の情報」、その属性を「情報のメッセージ性」とよんでおく⁹。

⁹ 「メッセージ型の情報」と「情報のメッセージ性」とのあいだには、前者の属性が後者であり、後者のような属性をはらんだ情報が前者であるという関係がある。これらの語彙は、文脈ごとに意味のある文を形成するように区別してもちいられる「おなじ意味をはらんだ言葉」である。

情報化の第2段階と「情報のマッサージ性」

ところで、高度経済成長が本格化する1960年代以降の日本では、情報という言葉が、「インフォメーション（information）」という意味をはらみながら、きわめて多義的に使用される。ただ、そこで最初におもいだすべきは、テレビやラジオに代表される放送メディアがもたらす情報であろう。そのうえに、それ以前から存在していた新聞や雑誌や書籍などがくわわり、社会に流通する情報量が、図1-2-1でみたように急速に増加した。

これらの情報のなかには、文明の装置・制度系に作用して、その効率をたかめる役割をはたすものもすくなくはない。しかし、現代社会において生産され、流通する情報の総量にしめるその割合は、かならずしもおおきなものではない。それよりは音楽やおしゃべり、芸能やスポーツなどに関連した音声や映像、あるいは新聞記事、雑誌や書籍に印刷される小説やエッセーなど、ひとことでいえば人間の心と体にはたらきかけて、それらをよるこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせることが期待される情報のほうがはるかに多い。そこでこうした情報を、かりに「マッサージ型の情報」と名づけ、それがはらんでいる属性を「情報のマッサージ性」とよんでおく¹⁰。

¹⁰ 「マッサージ型の情報」と「情報のマッサージ性」の関係は、注9にしるした「メッセージ型の情報」と「情報のメッセージ性」の関係と同様である。なお、この点に関連する問題提起として、梅棹[1988: pp.144-145]は「コンニャク情報論」を提起している。それを引用すると、

コンニャクという食品がある。……（その）コンニャクに栄養価がないことは、むかしから知られていて、腹のなかの砂をとるもの、などといわれていた。いわば一種の煙突掃除のようなものである。しかし、これの通過によって、消化器官系はおおいに興奮し、活動する。情報というものには、かなりの程度にこのコンニャクに似た点がある。情報をえたからといって、ほとんどなんの得もない。それは感覚器官でうけとめられ、脳内を通過するだけである。しかし、これによって感覚器官および脳神経系はおおいに緊張し活動する。それはそれで、生物学的には意味があったのである。

「情報のマッサージ性」は、ここでいう「コンニャク情報」にちかい概念である。ただ、情報がはたらきかけ、作用する対象を「文明の装置・制度系」と「人間の身体と精神」に分節化することによって、情報のはたす役割をも分節化し、より正確にとらえなおすために、筆者は「情報のメッセージ性」と「情報のマッサージ性」という概念を提起しておきたい。

なお、通常はメッセージ型の情報として機能する情報が、ときと場合によってメッセージ型の情報に転化することもある。たとえば、1991（平成3）年に勃発した湾岸戦争のニュースは、一部の企業人や行政担当者にとっては、そのメッセージ性に重要な意味があった。しかし、圧倒的多数の日本人は、おなじニュースを「戦争の実況放送」として、そぼくな好奇心からたのしみ、あそんでいた。彼らにとっては、湾岸戦争のニュースがメッセージ型の情報に転化していたと解釈することができる。つまり、いかに深刻な現実についてのメッセージ型情報であっても、メディアをとおしてつたえられる情報は、それとの直接の利害や機能的な関係をもたない人びとにとっては、そのメッセージ性だけがたのしまれ、あそばれる。野村〔1992a〕にそくしていえば、

情報化（という現象に）共通するのは「脱文脈化」という技術的原理であるように思われる〔p.13〕。

ということでもある。情報を「人間と人間のあいだで伝達されるいっさいの記号系列」と定義した梅棹「情報産業論」は、当時の人びとの社会意識とはほとんど無関係に、こうした状況が日常化する文明史的転換のまっただなかにおいて発表されたことになる。

そこで筆者は、やや唐突ながら、電話という情報メディアがたどった運命をおもいだす。周知のように電話は、1876年にA・グラハム・ベルによって発明された。ところが、発明された当初は、その社会的有用性がほとんど理解されなかった。普及率が極端にひくかったため、要件伝達のために利用できなかったのである¹¹。そこで電話が、音楽やニュースをながすなど、いわば有線放送的に利用された〔吉見、1989〕。ここにもまた、発明者自身は情報のメッセージ性への奉仕を期待した電話が、その意にはんしてメッセージ型の情報メディアに転化してしまったという興味ぶかい事実が観察できる。

それだけではない。いますこし電話について言及すれば、すでにみたように高度経済成長が本格化する1955（昭和30）年、その加入数が全国で200万をこえると、ビジネスにおける要件伝達が迅速化して、電話が社会全体の高速化と効率の上昇におおきく貢献しはじめた。その結果、電話の普及はさらにすすみ、わずか20年後の1975（昭和50）年には、

¹¹ このことは、双方向性の情報メディアには普遍的にあてはまる。じっさい、あるSF作家が、原稿の送付に利用しようと、発売されたばかりのファックスを購入した。しかし、出版社のがわにそれがなかったため、しばらくは利用できなかったという。電話も普及率がひくい状況下では、かならずしも有効に機能することができないのである。

普及台数が3000万台にたっするにいたる。

ところが、このころから事務用の電話をはるかに凌駕するいきおいで、こんどは家庭用の電話の普及がはじまった。その電話を最近の主婦やわかものは、極度に冗長な長ばなしに利用する。それが産業社会の生産性や効率の向上に貢献することは皆無にちかい。電話をとおして交換される愚痴やうわさばなしは、日常生活における瑣末な不満や不安を昇華してくれるだけである。つまり電話は、要件伝達というメッセージ型の利用法のはてに、その通話者が相互に心と体を、相互に「マッサージしあう」情報機器としての属性を濃厚におびるようになってきたのである¹²。

これとよく似たことは電話などの現代的な情報機器だけでなく、あらゆる人間のあらゆる情報活動にあてはまる。^{しょうと}素人の俳句や短歌の制作、楽器演奏、音楽鑑賞、絵をえがくことなど、あそびとしての情報の生産と消費は、過剰にあふれる生命力を吸収し、それにかたちをあたえることで、人間の心と体をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせることを、つまりは情報のマッサージ性を指向しているからである。

「モノ」がみな「情報メディア」になる時代

ところで、人間の心や体にはたらきかけて一定の作用をもたらす情報の種類は、きわめて多岐にわたる。言葉やイメージ、色やかたち、音や映像、さらには、味やかおりや肌ざわりなども、そのなかにふくめることができる。このようにかんがえると、ほんらいは情報メディアとして認知されることになった、あらゆる「モノやサービス」もまた情報メディアとしての属性をあらわにすることが判明する。

たとえば、人間の生存に必要な不可欠な食物は、味覚情報だけでなく、うつくしい色やかたちをつたえる情報メディアでもある。ほんらいは身体を物理的的刺激から保護する衣服も、色やかたちといったファッション情報をつたえる情報メディアにほかならない。それだけではない。家具や自動車や住宅など、現代人の身邊をとりかこんでいるものは、ほとんどすべて、その所有者のほこらしさや嗜好などを媒介する、マッサージ型の情報メディアであるとかんがえることもできる。こうした趨勢は「モノやコトの情報化」と名づけるの

¹² その後1990年代以降の日本では、電話のおおくが移動体通信の可能な携帯型に推移していく。その利用法もまた情報のマッサージ性にふかく関連していることは、つぎの書籍に詳細に示されている。

藤本憲一、1997『ポケベル少女革命』エトレ

がふさわしいようにおもわれる。

ただ、ここでひるがえってみると、情報は当初、軍事技術の高度化に奉仕し、やがては産業社会の効率の上昇に奉仕するという機能的な効用を期待され、実際にもその役割をはたしてきた。しかしそれは、時代のながれがはらんでいた「慣性（inertia）」がもたらした結果だったのではなかったか。すなわち、1930年代にエクスキュル [1933] やシャノン [1937] などが、情報の概念としての対象化をこころみていたころ、すでに時代は情報産業社会へのいりぐちに到達していた。ところが、文明史的に言えば、それよりひとつまえの段階を先導した「工業化」の慣性（inertia）が情報産業社会化の趨勢を篡奪した。こうした時代を筆者は、かりに「情報（産業社会）化の第1段階」とよぶことにする。

ところが、それから約半世紀、情報（産業社会）化を篡奪することによって急速、かつ高度に発展した近代工業社会の装置・制度系が「ありあまる社会（affluent society）」を実現してしまう。その結果、すくなくとも日本をはじめとする先進工業地域は、1975年ぜんごをさかいにして、「情報（産業社会）化の第2段階」に突入することになる。

それは、現象的には、こういうことである。かつてモノが稀少であった時代の、空腹になやむ者には、エネルギー源としての食物を供給すればことたりた。さむさをうったえる者にあたえる衣服は、防寒の機能をはたしさえすればよかった。ところが、ありあまるモノとサービスを享受しながら生活する現代人の心と体は、より快適でたのしく、おもしろい色やデザイン、他人とはひと味がう食味や姿かたちなど、ある種の付加価値をもった情報を付与されたモノやサービスを要求する。いいかえれば、

「腹はふくれていても、さらにめずらしい料理がたべたい」

「身体はあたたかくても、よりファッショナブルな衣服を身につけたい」

というわけである。それはモノやサービス、ひいてはそこに付与された情報が、ひとえに遊戯の対象になってしまったということである。こういうことが日常化した社会を、かつて筆者は「『遊戯化』社会」と名づけたことがある [高田、1987]。そこでは、社会に流通する情報が、極限まで多様化し、全体の情報量もまた膨大かつ急速に増大する。

その結果、情報の概念の理解にも、こうした状況に対応しうる変容と豊富化がもとめられるようになった。そして情報一般にたいし、機能的な効用を訴求したシャノンやウィーナーとは、まるでことなる視点にたつベイトソン [1979] が、まるでことなる情報概念の定義をこころみることになる。それを一言でいうと、

（精神内に）差異を生む差異はすべて「情報」である [p.312]。

そこには、あきらかに筆者のいう情報のマッサージ性が意識されている。同時に、シャノンの時代から約半世紀をへた 1979（昭和 54）年という、この書籍の出版年に注目すべきである。そこには、論者の視点のちがいととも、1950 年代以降の、一方における急速な工業化とそれにとまなう「ありあまる社会」の出現、他方における多様な情報産業の成熟がもたらした現代文明と人びとの価値観の変化、すなわち人間の文化の変容とが、ふたつながらに投影されている。

こうしてみると、概念としての情報を、あらためて定義しようとしたシャノンをはじめとする工学技術者たちのころみがか本来的にもっていた意味は、いったん情報とその質のあいだの関係をたちきることによって、その形式的な普遍性を抽出することにあつたことが判明する。その結果、言葉や映像や音楽など、それ以前には相互に無関係な記号の系列でしかありえなかつた多様な感覚刺激要因が、情報という単一のカテゴリーに一括されることになった¹³。そして、あらゆる情報を「0と1」のくみあわせに還元し、その量をビットという単位で計測することが技術上も可能になった。そのことをふまえてペイトソンは、約 50 年のちに、ふたたび「情報の内容（contents）」に注目して、情報を「差異」という視点からとらえなおしたのである。

情報産業社会をささえる資源とメタ資源

そこで、ふたたび梅棹「情報産業論」にもどって、文明の発展段階説の展開の方向を検討する。そのさいに重要なことは、農業革命・工業革命・情報産業革命の時期と、物質・エネルギー・情報という、人類文明をささえる普遍的な資源、あるいは環境世界の基本的な構成要素のカテゴリーの对象的発見の時期がかさなっているという点である。

たとえば普遍概念としての「物質」の对象的発見は、農業革命が国家を成立させた古代において達成される。こんにちの物質観からすれば、単純で未分化だといふほかないが、古代ギリシャのレウキッポスやデモクリトスは、「物質は粒子からなる」とする原子論を展開した。森羅万象を「地・水・火・風」に還元する古代インドのバイシェーシカ学派、

¹³ この問題は「普遍概念としてのエネルギーの発見」をおもいだすとわかりやすい。というのも、その発見以前には相互に無関係な事物や現象にすぎなかつた「もえる炎」「たかい場所に存在する水」「運動する質量がなしとげる仕事」などが、その発見以後、熱エネルギー、位置エネルギー、運動エネルギーなど、すべてエネルギー現象として一括できるようになったからである。

「木・火・土・金・水」の運動によって説明しようとする古代中国の五行説なども同様である。そこには、それぞれ姿かたちのことなる存在を「物質」という普遍概念で一括してとらえようとする意思がはたらいっている。こうした概念の構築は、農業革命に触発された物質（食糧）生産、その蓄積への情熱によってもたらされたと推測される。

では、物質とその生産をささえるメタ資源とはなにか。農業社会段階においては「広大な土地＝空間」であった。空間を考察の対象とする古典的な幾何学が、古代の地中海世界において発達したことも、当時の国家が巨大な版図の獲得をめざしたことも、このことを雄弁にものがたっているようにおもわれる。

それにたいして、普遍概念としての「エネルギー」の对象的発見は、産業革命のあとに実現された。もっとも、その萌芽は17世紀におけるガリレオ・ガリレイによる衝撃力の研究などにさかのぼれる。しかし、もえる炎がはっする熱、運動する質量がなしとげる仕事、重力にさからってたかい場所にある水のもつ潜在力などを「エネルギー」という単一の Kategorie によって一括できるという認識は、19世紀なかばの、L.von ヘルムホルツによる「エネルギー保存の法則」が定式化されたあとに、ようやく可能になった。それは、あらゆるエネルギー変換技術を演繹的に開発し、工業生産性をたかめる工学技術の発展に寄与することで、人類文明におおきな福音をもたらした。

では、エネルギーの効率的利用は、どのように人類文明の再生産に貢献したのか。それは、単位生産あたりの時間を短縮することによって空間の制約を克服するとともに、メタ資源としての時間を節約し、文明をささえる物質の再生産の効率を上昇させた。その点で、農業社会段階において土地＝空間が、物質のメタ資源とみなされたのとは対照的である。

これにつづいて20世紀の30年代、普遍概念としての「情報」が对象的に発見され、情報産業革命が緒につく。そこで、つぎにかんがえるべきは、情報という資源を再生産するために要求されるメタ資源である。おそらくそれは、「差異はすべて情報である」とするベイトソンの認識にかくされている。なぜなら「差異」とは「多様性」のべつの表現であり、多様性こそが、情報の再生産のメタ資源にほかならないからである。ここにきて、いわゆる情報産業一般が、はじめて無限の可能性を展望しうることになる。

なぜなら、農業を基本型とする産業の生産性は利用可能な土地のひろさに制約され、工業を基本型とする産業の生産性は利用可能なエネルギーの絶対量に制約される。それにたいして情報の多様性は、のちにみるように無限である。ただし、文明の装置・制度系の効率の上昇をめざすメッセージ型の情報は、市場経済システムのもとでは、時間コストと効

率に制約されて生産され、あるいは消費されるという資質をあらわにしめす。なぜなら、無限の人手と時間を投入するほうが、よりすぐれた情報が創出されることがわかっている。生産と市場の論理が、それをゆるさないからである。こうした局面に関連する情報の多様性は無限であるとはいいたい。

ところが、ころよさや感動など、人間の心と体の充足それ自体をめざすマッサージ型の情報は、これとはことなる方向を指向する。そのための情報の生産や消費は、より完成度がたかく、したがって、よりおおきな満足をもたらす情報それ自体の創出をめざす。その生産と消費のためになら人間は、精力と時間の投入をいとわない。げんに今日、市場性をもつマッサージ型の情報は、しばしば、そうして生産され、消費される。それを機能と効用の視点からみれば、際限のない冗長性と多様性をめざしているということになる。

そこで、たとえば長電話をとおして交換される愚痴や噂ばなしにおもいをはせてみる。それらも最初は、なにがしかの問題を解決しようとしてはじまるはずである。ところが、実際にはじまってみると、当事者は「問題の解決」など失念して、際限のない饒舌におちいりがちとなる。ここに、それ自体を目的とするマッサージ型の情報の特徴がある。そしてそれは、際限のない多様性をメタ資源として、あそばれ、たのしまれる。では、情報の多様性は、計算上、どの程度のひろがりをもつのか。高田 [1986] は、それを世界でもっともみじかい文芸である俳句を素材にして、概略つぎのように算出した [pp.215-216]。

俳句は、「575の音節のならば」でつくられる文芸である。その多様性は「575の約束」をまもっているかぎり有限である。しかし、その数は極度に巨大なものになる。たとえば日本語の発音を、かりに125種類とみつもり、無意味な音のならばをすべてふくめるとすると、区別が可能な俳句形式の文字のならばかたは、「あああああ……」から「んんんん……」まで、125の17乗（ $=4.44 \times 10$ の35乗）種類にたっする。つぎに、こうしてできた俳句を、1ページに18行の文字を印刷された文庫本に、1行あたり1首ずつ印刷すると、その文庫本のあつみは、使用する紙厚を80ミクロンとして、104兆光年におよぶ。さらにその重量は、文庫本のあつみ1センチメートルあたり125グラムとして、 1.23×10 の28乗トンにたっする。これは、じつは地球の重量を 6×10 の21乗トンとみつめれば、地球205万個分に相当するのである。俳句という、わずか「575」の17文字だけでできている世界最小の文芸にさえ、これだけの多様性が秘められている。そこに情報の世界に潜在する、極度に多様な可能性がよみとれる。同時に、より大切なことは、ここにしめしたような方法で作りだされる「俳句」のほとんどが、文芸としてはまったく無意味だとい

う点である。

ほかのさまざまな情報とその多様性も、これと同様に計測可能である。いずれにしてもこうして、情報の多様性に無限の可能性が潜在していることが判明する。ただし、他方でそこから意味のある価値を抽出するのは、つねに困難をきわめる。はやい話が、人の心にうたえる力をはらんだ、わずか一句の俳句を創出するにも、人はおおくの人生経験をつみ、場合によると、そのための旅行にでかけたりする必要にせまられる。つまり、つよいインパクトを発揮するマッサージ型の情報の創出には、膨大な物質と莫大なエネルギーの消費にくわえて、際限のない人間の精力の消費が要求されるのである。

こうして人類の3つの文明段階は、それぞれが対象的に発見した環境世界の構成要素と人類文明の普遍的な資源のカテゴリー、その背後にあるメタ資源とのあいだに、つぎのような関係を指定することができる。

表 1-2-1 文明の発展段階とそれが発見した資源カテゴリー

文明の発展段階	資源カテゴリー	メタ資源
農業段階の社会	物 質	空間（土地）
工業段階の社会	エネルギー	時 間
情報産業段階の社会	情 報	多 様 性

あたらしい情報を生産するための3つの条件

ここまで筆者は、情報をめぐる人間のいとなみを「生産と消費」という枠ぐみで論じてきた。しかしそこでは、ほんとうは従来の意味での「生産と消費」という枠ぐみ自体が解体する。それはほんらい、農業段階と工業段階の社会にのみあてはまる枠ぐみだからである。たとえば、狩猟や採集を生業とする自然社会における生活資源の獲得は、自然の供給にゆだねられている。そこには「消費」のいとなみが存在するだけで、「生産」といういとなみは基本的に存在しない。

これと対照的に、情報産業社会において生産された情報は、感覚器官をとおして人間の心と体によって享受される。しかしその結果、農業や工業の生産物が消費されるように姿かたちをかえることがない。言葉やイメージ、音や映像、色や形などは、たいてい比喩的な意味で「消費」されたのちも存在しつづける。ただし情報の生産には、農業と工業の生産物の大量の消費がともなう。学術・技術・芸術・芸能・デザイン・スポーツなどにおける、あたらしい情報の創出には、しばしば浪費ともみえる金銭が消費されるのである。

それはコーリン・クラークが提起し、かつてひろくうけいれられた第1次から第3次にいたる産業の重層構造がはらんでいる属性でもある。一般に第 n 次産業とは、第 $(n-1)$ 次産業の生産物を消費することによって、はじめて成立する産業だといえる。

つぎに、情報生産をささえる条件についてかんがえてみる。それが膨大な量の物質とエネルギーの消費をともなうことはすでに指摘した。このことが必要とされるのは、あたらしい情報を生産する主体としての人間が、いまだ体験せざる行為や情報との接触を必要とするからにはほかならない。あたらしい言葉やイメージ、智慧やアイデア、音や映像、味やかおりや肌ざわりなどは、そうした体験や情報との接触に刺激されて触発される場合がきわめておおい。ファッションデザイナーがこのんで、特有の色やかたちの衣服を身につけている人びとのすむ異文化地域を旅行するのは、その一例である。あたらしい智慧とアイデアの創出をめざすビジネスマンが、大量の情報収集に懸命になるのも同様である。

ただし、こうした情報体験がそのまま、意味のある情報生産に直結する場合はまれである。独創的かつ意味のある情報の生産には、既存の情報秩序の解体と再構築が必要不可欠だからである。こうした仕事は、しばしば人間の潜在意識にゆだねられる。つまり、日常的にはあらゆる体験のなかで、人間の意識に摂取された多様な情報とそのくみあわせは、既成のものにすぎない。それが意識から閑却されて潜在意識という混沌の海に下降し、そこで自由にうごきまわり、あたらしい秩序にくみかえられて、あるとき意識に浮上する。あたらしい情報の誕生には、こうした過程が必要不可欠であるようにおもわれる。

このことが実現されるためには、主体としての人間はしばしば、いっさいの情報刺激から断絶された環境を要求する。よくしられているように、あたらしい智慧やアイデアが夢のなかや入浴中に胚胎されやすいということが、このことを暗示している。だからこそ現代都市には、あらゆる情報刺激から断絶された環境を提供するサービス産業が成立するのである。たとえば、あらゆる心身への刺激を最小化するために、体温とおなじ温度の、比重のおおきな液体をたたえた「フローティング・カプセル」という名の棺桶状の容器に身体をうかべる体験を、有料のサービスとして提供する事業などはその一例である。多様な刺激にみちた都市のさかり場にかわって、しずかな郊外や大自然にかこまれた環境における休養が、都市生活者のあそびやたのしみとしてもとめられるようになったのも、これとよく似た要求の、べつのかたちのあらわれであるとかんがえられる。

こうして、あたらしい情報が生産され、それがあそび、たのしまれるための条件がきらかになる。つまり、

- ① 第1次・第2次産業の生産物である物質とエネルギーの消費
- ② 日常生活のなかでは、けしてであうことのない情報体験
- ③ あらゆる情報刺激の意図的な断絶

といった条件が、その内容を形成する。

第3節 情報をめぐる日本文化の伝統と変容

第2節まで筆者は、しゅとして20世紀の日本社会にそくして、情報・情報化・情報産業などの概念が、こんにち体験しつつある意味の転換、変容、倒錯などについて考察してきた。そのうえで第3節においては、20世紀日本の高度経済成長にともなう情報をめぐる生活文化と世相の変容のあとを考察する。

近代日本社会における書籍の性格の変容と推移

最初に考察の対象とするのは「活字」情報である。そのために、江戸時代から明治以降に人気をあつめた書籍の性格の推移を検討する。紀田〔1987〕によると、

最初に出現したベストセラーらしきものは寛永（1624～1644）から寛文（1661～1673）にかけて、200余種類が刊行された仮名草子で、初のベストセラー作家の榮譽をになうのは『狗張子』の浅井了意ということになるであろうが、部数的には数百部をこえなかったようだ〔p.665〕。

これにつづいて、京・大阪を中心として町人文化が成立する元禄（1688～1704）、出版の中心が江戸にうつる宝暦（1751～1764）、現代日本のベストセラーにつながる状況が出版の領域に観察されるようになる文化・文政（1804～1830）へと、時代をへるごとに、書籍の出版点数と出版部数は、急速に増加の一途をたどっていく。

つぎに、それぞれの時代に、人びとの人気をあつめた書籍の性格を比較してみる。すると、まず元禄期に人気をあつめた各種の「重宝記（＝ハウツーもの）」や「万宝（＝実用的な便覧）」をのぞくと、そのほとんどが、娯楽用のよみものであったことがわかる。なかでも、天和2（1681）年に3000部をこえる部数をうりつくした井原西鶴『好色一代男』にはじまる浮世草子の人気は、元禄時代になると一層さかんになり、元禄時代だけで約200点が刊行された。その後、18世紀なかば以降、これらに洒落本や黄表紙がくわわってブームをおこし、山東京伝『心学早染艸』^{しんがくはやくそめくさ}（1790年）などは、7000部以上をうりつくしたと

いう。さらに19世紀、文政12（1829）年から13年のあいだに、全38編172冊をかぞえた『にせならさきいなかびんじ修紫田舎源氏』は、各冊ごとに1万部以上がうれるという猛烈な人気をあつめ、やがて十返舎一九『東海道中膝栗毛』、幕末の寺門静軒『江戸繁盛記』などのベストセラーの出版へとひきつがれていく。

ところが、明治時代がはじまると、書籍の出版点数と出版部数は増加するものの、ベストセラーの性格が一変する。たとえば慶応2（1866）年の福沢諭吉『西洋事情』は15万部、『世界国尽』『学問のすゝめ』は30～40万部が印刷された。これらは、江戸時代の娯楽を中心とした書籍とは、まったく性格をことにする「硬派本」とでもよぶほかない書籍である。そしてこうした傾向は、明治3（1871）年に出版された内田正雄『輿地誌略』をはじめ、翌4年の中村敬字（訳）『西国立志論』（スマイルズ『自助論』の翻訳）、明治5年の『自由之理』（ミル『自由論』の翻訳）、さらには明治10年以降の矢野竜溪『経国美談』（1883年）、東海散士『佳人之奇遇』（1885年）などの人気へとつながっていく。

むしろ明治時代の初期に、他方では草双紙の伝統をひく通俗小説類も、最後の花をさかせている。しかし、出版文化の中心は、あくまで硬派の書籍にうつっていった。小説の世界でも、明治中期以降は「人間いかに生きるべきか」を、みずからの課題とする近代文学が成立して、その後の出版文化を方向づけていく。つまり、同義反復的な表現にはなるが、江戸時代に、あそび心にはたらきかけ、人びとをたのしませ、よろこばせ、おもしろがらせる「マッサージ型の情報」をつたえる書籍が主流をなしたのにたいし、明治時代には、あたらしい文明の制度・装置系を、どのように構築していくべきかをかたりかけるメッセージ型の情報をつたえる書籍に主流がうつったといえる。そのあいだ、教育の普及による読者層の増大、それにこたえようとする著者の出現、印刷技術の向上や流通機構の整備など、書籍にたくされる情報量とその流通量は急速に増大していく。しかし、他方では、そうしてつたえられる情報の性格もまた、明白に転換しつつあったのである。

なお、昭和初期には『現代日本文学全集』をはじめとする、いわゆる「円本」の普及がはじまり、発行部数はいっきょに各巻30万部をこえる。しかし、それも日中戦争が本格化することによって、出版文化全体の急速な逼塞をもたらした。その結果、書籍の大量出版・大量販売は、第2次大戦後の、とくに高度経済成長期以降にまたなければならなかった。そして、のちほど検討するように、それ以降の出版文化は、ふたたび江戸時代とよく似た遊戯性のつよいマッサージ型の情報を提供するメディアとしての性格を濃厚にしてい

く。

さて、そこでかんがえるべきは、江戸時代にはメッセージ型の情報への要請が皆無だったのかという点である。いうまでもなく、そんなことはない。商品流通、とくに米の流通の活発化にともなって、江戸と上方のあいだに、米の相場を迅速に伝達する必要が増大したことなどは、その一例である。そのため、17世紀に6日間を必要とした、江戸と上方のあいだを往来する飛脚の速度が、18世紀には2両3分で5日、3両1分で4日、さらに4両を支はらえば、3日半にまで短縮されたという〔森谷、1988：pp.76-82〕。

ただし、情報伝達の手、情報通信への需要が飛躍的に増大するのは、明治時代に郵便制度が創設され、東京と大阪のあいだをむすぶ陸上交通が78時間（3.25日）に短縮され、さらに電話の登場によって、それが瞬時のうちに可能になってからのできごとであった。

近代化がもたらした情報感受性の変容

江戸時代から明治時代にかけては、情報にたいする日本人の感受性が、おおきく変容する時代でもあった。まず、江戸時代に出版文化がさかんになったことによって、文字によって表現される情報にたいする日本人の処理能力（リテラシー）が大幅に増大した。その背景にはもちろん、17世紀後半に全国のおおくの藩が、武士の子弟を教育するための藩校制度をとりいれ、18世紀初頭からは、こうした武士階級のうごきに刺激されて、町人や農民のあいだに寺小屋教育が普及したという事情がある。このことはまた、情報を受容する視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のうち、主として視覚を重視する意識の傾向を、当時の文化全体にひろめた〔横山、1992〕。明治時代になっても読書にかんしては、なお黙読の習慣が人びとのあいだに急速にひろがることはなかったが¹⁴、情報の受容における視覚の比重が格段におおきくなったことはたしかであるといつてよい。

そして、その過程においては、視覚そのものの特性までもが変化した。このことをしめしているのが、つぎの図1-2-2～4である。これらのうち、1662（寛文2）年と1745（延

¹⁴ この点にかんしては、佐藤〔1992：p.74〕の指摘が興味ぶかい。いわく、

永井荷風が1909（明治42）年に発表した小説（注：「深川の歌」）に、市電のなかで誰かが報知新聞の雑報記事を（声をだして）音読しはじめるという場面がある。電車のなかでの黙読をみなれているわれわれの今日の常識からいえば、一瞬異様さを感じるけれども、それは近世の寄り合い所での読書の共同享受につづる習慣と位置づけなおすこともできる（傍点と（ ）内は筆者）。

享2)年にえがかれたも錦絵にはもちいられていない透視図法による遠近法が、1764（明和元）年にえがかれた錦絵には、明確に意識されている。17世紀初頭のヨーロッパで確立したこうした技法は、どうやら18世紀なかばの日本でもひろく普及した模様である。そして明治時代がはじまると、そうした技法に適応しうる視覚が、工業や建設事業の設計図制作に必要な不可欠な図学の発達に役だった。いわば「錦絵」というマッサージ型の情報が、近代的工業化の過程においてメッセージ型の情報の精緻化に寄与したのである。

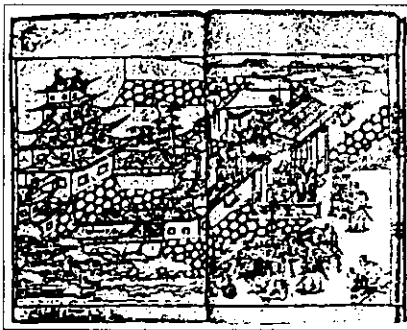


図1-2-2 江戸城（1662年）

資料：『江戸名所記』

（東京都公文書館蔵）

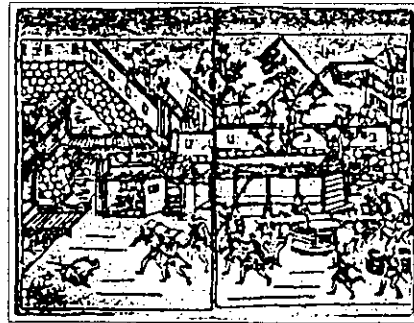


図1-2-3 江戸城城門の前（1745年）

資料：『江戸雀』

（東京都公文書館蔵）

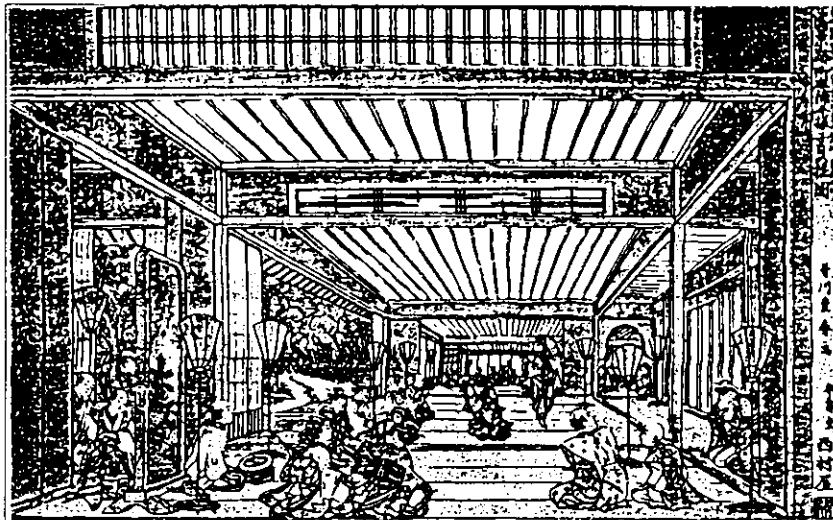


図1-2-4 豊春「浮絵和国景跡御座敷今様子日の遊図」（1764～72年）

（東京国立博物館蔵）

なお、やや蛇足めくが、近代という時代が視覚を重視するようになったことを傍証する

事例として、室町時代に誕生し、江戸時代に発展・普及した華道や茶道や香道などの室内芸能のうち、明治時代がはじまると、香道だけが逼塞していくのにたいして、華道や茶道が隆盛のあとをたどったという事実を想起しておくこともできる。

現代社会に氾濫するマッサージ型の情報

近代的工業化を推進するには、いくつもの条件が必要とされる¹⁵。そのなかでも重要なのは、エネルギー変換を中心とする科学・技術と労働価値説に立脚した勤勉の哲学を確立し、それらを身につけた労働力を教育し、組織し、社会秩序を維持する制度として定着させることであろう。すでにみたように、明治時代に硬派本が大量に出版され、かつ市場にうけ入れられたのも、こうした社会の要請の結果である。いいかえれば当時の時代精神が、近代文明の装置・制度系を、むだなく効率的に作動させるという目的に合致した勤勉の哲学と自然科学的思考法をつたえるメッセージ型情報の流布をもとめたのである¹⁶。

こうした趨勢はその後も、さまざまな紆余曲折をたどりながら、日本社会の近代的工業化を底流でささえてきた。ところが、1955（昭和30）年前後に本格化した日本経済の高度成長が、ほぼ20年のちの1975（昭和50）年ごろ、日本の工業生産力を極限まで増大させる。その結果「物質的によりゆたかな生活を実現する」という近代化の目標が達成されてしまった。こうして、最初は19世紀の30年代にきざし、明治維新によって本格化した日本の近代的工業化は目標をうしなってしまうのである。

ただ、こうした全社会的な目標を実現する国民的事業を成就するには、活字や電波をはじめとする多様な情報メディアをとおして流通する大量の情報と、それらを高速かつ効率的に処理・加工・伝達・蓄積する情報システムの発達と普及が不可欠であった。こうして、おなじ時期に社会に流通する情報は際限なく多様化し、その量も飛躍的に増大することになる。そのことを情報メディアの普及度合によってしめしたのが図1-2-5である。

これらの情報メディアが社会に流布する情報は、たしかに、一方で日本の近代文明の装置・制度系の効率をたかめるメッセージ型の情報としての機能を発揮する。しかし、他方では人間の心と体にはたらきかけて、それを充足させるマッサージ型の情報として

¹⁵ 「近代化」の条件とその達成度合については、第4部第2章において、くわしく論じる。

¹⁶ ここでいう自然科学的思考法を、いますこし分節的に説明すれば、①物質主義、②分析的原子論、③因果関係論などを列挙することができる。

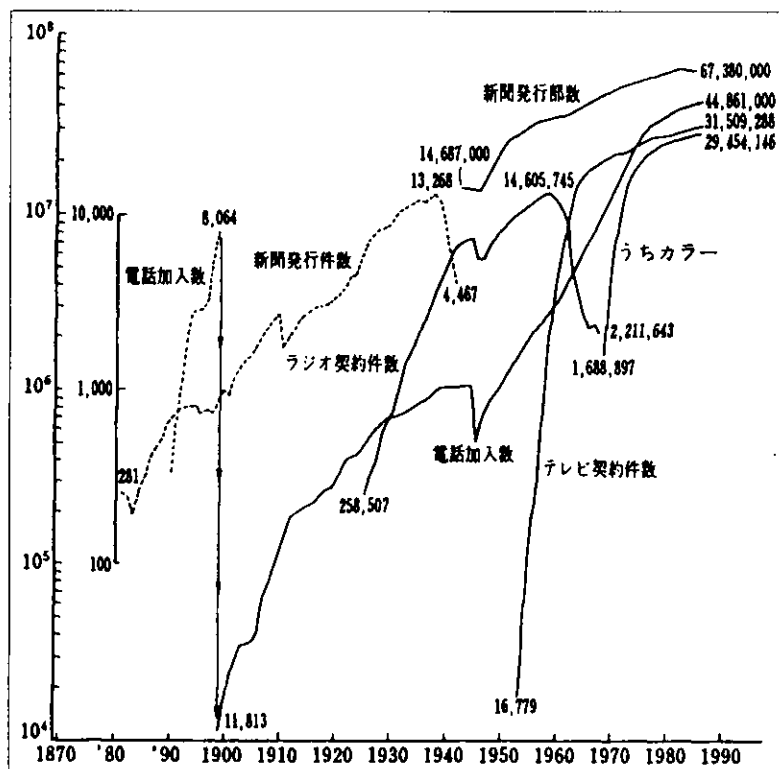


図 1-2-5 各種情報媒体の普及過程

(資料：東洋経済新報社『日本国勢総覧』)

日本人の日常生活に吸収されていく。

その過程では、本来は情報と無関係だとみなされてきた生活財や消費財が、情報のメディアに転化していく。かつてはエネルギー補給のために摂取された食物が、見た目や味や香りをつたえる情報メディアに姿をかえ、身体保護のために身につけるとされてきた衣服がファッション・デザインの伝達メディアとしてのみ市場性を発揮するようになった。というよりも、高度経済成長後の日本社会においては、モノやサービスのおおぐが、人びとにあそばれ、たのしまれるためのマッサージ性を発揮する情報メディアに変化したのである。

こうした状況のもと、電子テクノロジーの発達にささえられて、いわゆるマルチメディアが、あたらしい時代の技術・産業・生活をささえる基盤的な装置系としての意味を獲得していく。じじつ 1980 年代後半には、すこしまえまでは活字や音声や映像などに分節されてきた情報を一体化して提供する、あたらしい電子メディアが開発され、普及しはじめる。通信回線と直結し、TVの機能を取りいれたコンピュータ・システムは、書籍や映画、

写真やラジオ、テレビや電話やレコードなどの機能を、すべて統合してしまう可能性をはらみつつある。その背景には、すべての情報を「0と1の並び」によって記述できるとする情報理論とデジタル技術が、おおきな役割をはたしている。

そして現代日本人のおおくは、こうしたあたらしい情報メディアが提供する多様な情報の世界に、みずからの心と体のところよさとたのしみをたくしはじめている。というより現代日本人の生活は、多様な情報のシャワーをあびることを、生活環境のもっとも重要な要素としてとらえる方向にむかいつつある。それは、身近をとりまく多様な情報から、一種の「めまい（イリンクス）」の快楽を享受する生活の日常化でもある。という意味において現代の情報産業社会は「情報イリンクス社会」であるとみることもできる。

電子テクノロジーが情報メディアにもたらす変化

前項でのべた、いわゆるマルチメディアの特徴を整理すれば、つぎの3つの条件を列挙することができるであろう。

- ① 人間の複数の感覚器官を刺激する情報が、ひとつのシステムで提供できる。
- ② 双方向の情報通信が可能である。
- ③ 上記の機能を発揮するために、デジタル情報技術がもちいられている。

それだけではない。コンピュータを駆使すれば、現実には存在しないのに、あたかも現実に存在するかのような仮想の現実感（virtual reality）を提供する画像や音響を恣意的に創出することができる。そしてそれを、ふつうの生活者が「みずからの自己表現」のために利用できる可能性と現実性がひろがった。こうした状況が現実化した結果、さまざまな局面で日本文化は、劇的な変化を体験しつつあるようにみえる。

そのひとつは、かつては情報を受容することで充足していた人びとが、

「みずから情報を創出し、他者にむけて発信したい」

という欲求をもつようになった点である。それは最初、1970年代なかばにおける、いわゆる「カラオケ」の登場と普及によって触発された。ややおおげさだが、それは日本人の国民性をめぐる一種の「神話」をかきかえさせた。というのも、カラオケ以前の日本人は、

「人まえて歌などうたえない、はずかしがりの内気な国民だ」

ということになっていた。それがカラオケ以後は、きそって人まえて歌をうたうようになる。しかもそれは、歌のたのしみかたを根底から変化させた。カラオケ以前には、⁷⁰ 玄人の歌手がうたうのを、みたり、きいたりして満足していた日本人が、カラオケ以後は、み

ずから歌をうたってたのしむようになった。

これとよく似たことは、歌だけでなく、俳句や短歌、絵画や陶芸や音楽、あらゆる表現活動の領域に敷衍できる。じつはカラオケの発明とおなじ時期に営業をはじめた「朝日カルチャーセンター」に代表される多数のカルチャーセンターは「多様な表現活動をおしえる」というコンセプトによって、おおくの人びとの関心をあつめたのであった¹⁷。

こうした状況のなかで、^{アマチュア}素人の表現行為を極度に容易にする電子情報メディアが普及しはじめた。嘉田ほか〔1991〕が、その草創期について論じている、草の根におけるパソコン通信や電子メールの利用、最近ならインターネットの普及などを想定すると、そこでは参加者のすべてが、情報の受容者であると同時に発信者でもあるという事情がよく理解できる。そういえばワードプロセッサの普及が、かつての活字情報の受容者を、その提供者に変化させる作用もいちじるしい。新聞や雑誌の投稿欄の大幅な増加、出版会社による自費出版のすすめも、上記とおなじ文脈のうちにとらえられる。それは、カラオケにちなんで「カラオケナイゼーション」とでも名づけられる情報行動の今日的特色である。

こうした趨勢は、情報と人間とのあいだの関係にあたらしい局面をきりひらく。本章の冒頭ちかくで、野村〔1992a〕の「情報化（という現象に）共通するのは『脱文脈化』という技術的原理であるように思われる」という記述を引用したが、カラオケナイゼーションという名の情報の創出と発信は、

「脱文脈化された情報を、主体の意志にもとづいて、あたらしい文脈に再構成する」

という過程を必要不可欠とするからである。そうした時代に、脱文脈化された情報を、みずからの意思によって再構成し、あたらしい情報にくみかえることを可能にした電子テ

¹⁷ この点に関連する論考として梅棹〔1978：引用文献は1991〕が興味ぶかい。いわく、

教育というのはあきらかに人生におけるチャージであり、電池でいえば「充電」の段階である。教育は人生のポテンシャルをたかめ、のちの社会に役だつための充電作用ということができる。これに対して、文化というのは「放電」作用であり、ポテンシャルをさげるという行為である。人生というのは、どこかでつねに放電をしてゆかなければならない。いまのところ、日本国民は「電池」のボルテージがあがりすぎている状態にあるので、いわば教育でない逆方向の装置、放電の手段をかかえる必要がある〔pp.568-569〕。

ここでいうカルチャーセンターは、文字どおり「放電の方法」をおしえることをコンセプトとすることで、おおきな市場性を獲得した。

テクノロジーが誕生しつつあることは偶然の一致ではあるまい。なかでも、楽器を演奏したり、被写体を写真に撮影することなしに、コンピュータ・プログラムを操作することによって、自由に音声や画像を創出することのできるコンピュータ技術は、空間と時間に制約されてきた情報の世界の固有性を相対化してしまう可能性をはらみはじめている。

そこで注意をはらっておくべきことのひとつは、さしあたっては音声と映像が創出する擬似的な情報世界に没入することによって、実際の現実以上のリアリティを感じとる資質をもった人間が出現しはじめたことである。テレビ映像のなかに登場する女性への恋愛感情をあらわにする青年などは、そうした資質を内面化しているというほかない。のみならず、極微の素粒子や巨大な宇宙をえがきだすコンピュータ・グラフィックスの模擬（シミュレーション）映像が、ヨーロッパでは17世紀、日本には18世紀に定着した、3次元空間における透視図法に適應する、視覚上の遠近感という近代の人間の空間の観念を、仮想世界のかなたに拡散させてしまう可能性さえはらみはじめている。

ただし、現在の段階で、さしあたり電子メディアによって統合されたのは、実用的には視覚と聴覚に作用する映像と音声だけである。しかし、これらの視聴覚シミュレータに、たとえばおいや座席の振動などが付加されると、その効果は、いっそう現実感のあるものに発展する。やがて情報メディアは、こうした欲求にこたえるために、視聴覚にくわえて触覚や嗅覚や味覚までも、みずからの内部にとりこもうとするにちがいない。

それは、エスニック料理のレストランが、それにふさわしいインテリアや音楽などをとりいれ、さらに音声と映像をたのしむさいに多様な向精神剤がひそかに使用されたりしていることなどから展望される情報メディアの将来である。いや、すでに間欠的な音響の刺激によって、心と体の全体を興奮や弛緩にみちびく、たとえばシンクロ・エナジャイザーといった電子情報メディアなどは、単純なその先駆形態だとかんがえてよい。

このように従来は音声や映像などに分節されてきた多様な情報が、ほんらい「0と1のならば」だけで記述できるという発見は、人間の心と体の感覚全体を操作の対象としてとらえなおす、きわめて革命的な意味を、その内部にはらんでいたのである。

「文明史曲線」と「遊戯化曲線」という仮説

本章の議論をしめくくるにあたり、やや唐突ながら「自動車の近代史」を参照しておく。というのも、ふつう自動車というと、迅速なヒトの移動と大量のモノの輸送を可能にした近代的交通機関だとみなされているからである。しかし自動車は、他方において時代

の推移をものがたる能弁な情報メディアでもあった。その詳細は高田 [1987a] において論じておいた。

じっさい、はじめて日本の大地をはしった明治時代の自動車は、もっぱら都市のハイカラで裕福な人びとのステイタス・シンボル、あそびの道具として利用されたのである¹⁸。当時の首都・東京では、皇族や華族、政府高官や財界人、金もちの外国人などが、富と威信の象徴として自動車を購入し、成金たちがスピードに恐怖をいだく芸者をのせて、市街地をはしりまわるために自動車をもちいた。地方でも、旅館や花柳界が客の目をひく広告媒体として自動車を重用し、さらに坂道のおおい尾道などでは、アメリカ移民のひとりが自動車を成功の象徴としてもちかえり、ガソリンが入手できなかったこともあって、文字どおり「玄関のおおきな置物」として陳列したりしていたのである。

それが、鉄道網が壊滅的な打撃をうけた 1923（大正 12）年の関東大震災をさかいに変化する。この震災をきっかけにして自動車は、移動と輸送にきわめて便利、かつ実用的な交通機関であることが判明した。さらに昭和時代にはいと、軍事的に重用され、第2次大戦後も、経済復興と高度経済成長をささえる交通機関としておおきな役割をはたした。

ところが 1960 年代なかば以降、いわゆるモータリゼーションが本格化すると、自動車はふたたび所有者のステイタス・シンボル、あそびの道具としての性格を回復する。その詳細にたちいれば際限がないが、スピードそれ自体をたのしみ、音楽や各種の録音テープをきくために自動車を利用する人びとがふえていることは周知の事実である。

このような近代日本における自動車の運命は、すこし視点をずらすと、その普及過程における貨物自動車と乗用自動車の普及率の推移としてとりだせる。図 1-2-6（自動車に定める貨物自動車と乗用自動車の比率の推移）が、そのことをしめしている。つまり、近代工業社会において、本来ならより実用的な機能を発揮するはずの貨物自動車の比率が、たのしみやあそびに奉仕する乗用自動車の比率を凌駕した時期は、1937（昭和 12）年から 1967（昭和 42）年の 30 年間にかざられているのである。それは、まさに「戦争」と比喩的な意味での「経済戦争」の時期のできごとであった。

つまり自動車は、普及の当初はまずマッサージ型の情報メディアとしてあそばれ、やがて戦争と経済成長の時期には、メッセージ型情報に類似した、ややおおげさといえば文明の効率化に貢献する役割をはたし、しかし高度経済成長による「ありあまる社会」が完成

¹⁸ この話題の詳細は、本論文の第6部第2章で論じられる。

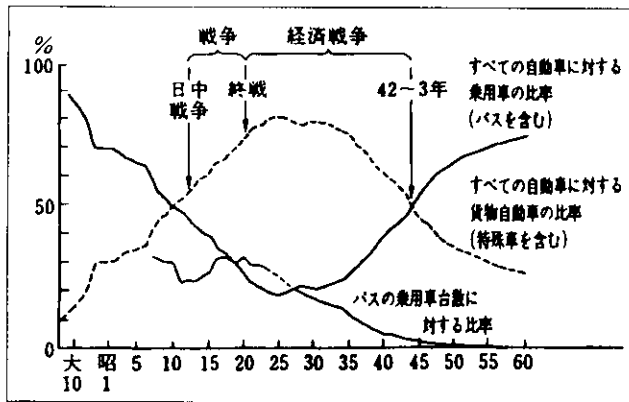


図1-2-6 自動車にしろる貨物自動車と乗用自動車の比率の推移

(出所：高田公理、1987『自動車と人間の百年史』)

にちかづくと、ふたたびマッサージ型情報の媒体に回帰したのである。

それは、これまでのにのべてきた日本文化における多様な情報の受容のされかたと、かなりの程度に整合する役割の変容であるといえる。ただし「回帰」とはいえ、まるで旧に復したわけではない。自動車にそくしていえば、その速度や性能、さらにはその普及率が格段に上昇したからである。しかも、草創期の自動車が、ごく限定されたゆたかな階層によってのみ享受されたのにたいして、高度経済成長後の自動車は、圧倒的多数の日本人大衆によってあそばれ、たのしまれている。

そこで筆者は、近代から現代にかけての日本の文明システムが提供した経済的なゆたかさに代表される、さまざまな「量的指標」の推移を大雑把に、しかし的確にしめした梅棹「文明史曲線」をおもいだす。それを梅棹 [1976 : p.205] はつぎのように説明する。

日本の現代史の傾向をグラフで表わすとどうなるか。横軸に年代をとり、縦軸にはなんでもいい、それぞれの事物の生産なり、消費量なり適当な指標をとることとすると、たいていものはグラフのように、初めはゆるやかに、あとほど急傾斜で上昇するカーブで表わすことができるのではないか。これを近代日本の文明史曲線（図1-2-7）とでも呼んでおこう。……（ただし）大東亜戦争の戦中・戦後だけが、異常に陥没しているのである [p.206]。

では、近代から現代にかけての日本文明が提供した、たとえば情報の質的側面は、どのような推移のあとをたどってきたのか。そこで筆者が想起したいのは、本章のモチーフのひとつであるベイトソン [1979] の「情報は差異である」という認識である。そのうえで、かりに情報に代表されるという前提のもとに、日本文化の質的変容をとらえるために、た

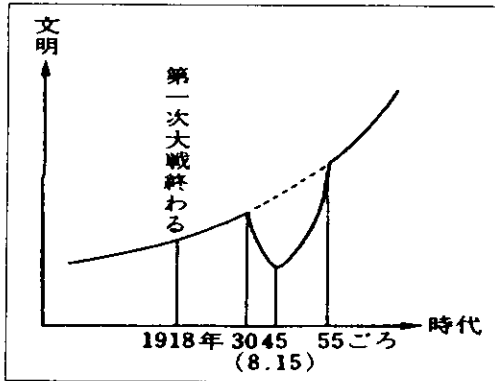


図 1-2-7 梅棹「文明史曲線」

(出所：林屋ほか、1976)

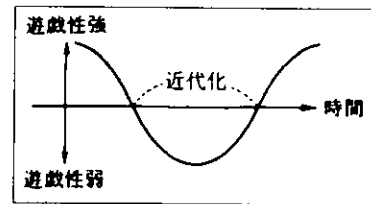


図 1-2-8 遊戯化曲線

(原図：高田公理)

たとえば図 1-2-6 から、時代の推移が自動車にもとめた、

「乗用自動車から貨物自動車をへて、ふたたび乗用自動車へ」

という質的変容をとりだしてみると、そこには

「マッサージ性からメッセージ性をへて、ふたたびマッサージ性へ」

という質的変容が投影されていることがわかる。それを、さらに単純化して「遊戯性の強弱」としてとりだし、図式化したのが図 1-2-8 の「遊戯化曲線」である。

このグラフのヨコ軸には「年代」が、タテ軸には「遊戯性の強弱（上にいくほど遊戯性がつよく、下にいくほど遊戯性がよわい）」がプロットしてある。こうすると、つよい遊戯性の周辺には「人間の心と体をあそび、たのしませる情報のマッサージ性」が、よわい遊戯性の周辺には「文明の装置・制度系の効率化を促進し、労働における勤勉さに貢献する情報のメッセージ性」が、それぞれ浮遊しているといえる。

日本の情報産業社会の現代的な特徴

そこで、つぎに「遊戯化曲線」を、高度経済成長期を中心とした「近代日本における情報（産業社会）化の質的推移」という文脈に投影してみる。すると、すでにみた電話や書籍が、それぞれの時代にあらわにした性格の変容の意味が、あらためてあきらかになる。ここでは再度、詳述することはしないが、同様のことは、野村 [1992b] のなかの複数の論文が議論の対象としている複数のトピックにも適用できる。

たとえば飯沢 [1992] によると、写真術が発明された当初の 19 世紀前半、その普及は

「趣味的なあそび＝情報のマッサージ性」に先導された。ところが、やがて戦争をはじめとして、その主眼は「事実の報道」というメッセージ型の情報を指向する。ところが、20世紀後半、写真術がひろく大衆の生活に定着すると、たとえば現代日本におけるように、マスコミ報道における写真すらもが、マッサージ性の濃厚なゴシップや美的鑑賞の対象になるのである。

このことは、そもそも「情報」という日本語そのものが喚起するイメージのたどった足跡だともいえる。久保〔1992：p.160〕の表1（「情報」という言葉の日本での歴史）によると、すでにみたように最初は1876（明治9）年における『仏国歩兵陣中要務実地演習軌典』のなかで「軍事情報」の意味でもちいられていたのが、1879（明治12）年の福沢諭吉『民情一新』においては「インフォメーション（information）」一般を意味する訳語としてもちいられ、しかし1902（明治35）年になると英和辞書『Dictionary of Military Terms and Expression』をはじめ、もっぱら「軍事的な意味でのインテリジェンス（intelligence）」を意味するようになり、やがて1960年代以降は、梅棹〔1963〕が提起した「コンニャク情報」までもふくむ、現在の中立的な意味での「情報（information）」に回帰したことが判明するからである。

つまり明治時代以降の日本社会は、江戸時代の遊戯性を低減させながら、軍事的膨張にささえられて近代的工業化をおすすめ、やがて1975（昭和50）年ごろに、その目標を達成することによって、情報産業社会への本格的な移行を日程にのせはじめた。しかし、近代的工業化を成功裏に推進するには、すでに1930（昭和5）年代に緒についた情報（産業社会）化の趨勢を、さしあたりは情報のメッセージ性に関心の焦点をしばらくしながら、みずからの慣性によって篡奪する「情報（産業社会）化の第1段階」を経験することが必要であった。それが、近代的工業化が一応の完成を達成する1975（昭和50）年以降は、もっぱら情報のマッサージ性に関心の焦点をうつしながら、より本格的な情報産業社会にむけて「情報（産業社会）化の第2段階」をあゆみはじめているということになる。

「モノの情報化」という現象についても、よく似たことがあてはまる。たしかに江戸時代にも、大都市のさかり場においては、食物や料理、衣服や芸能が一種の情報メディアとしておおいにあそばれた。それが近代的工業化の過程では、しばしば「贅沢は敵だ」といった価値観によって逼塞させられる。ところが、高度経済成長後の現代日本においては、あらゆる商品やサービスを情報メディアに転化し、それが発散する情報のマッサージ性をあそび、たのしむことが日常化している。しかもその過程では、情報の処理・伝達・加工・

蓄積など、電子テクノロジーに関連する未曾有の技術革新が進行した。その結果、現在なお情報・情報化・情報産業をめぐる状況の変化には、いちじるしく劇的な変化、おびただしい種類と数のあたらしい課題がのこされているのである。

これらの状況をふまえると、現代日本社会における情報・情報化・情報産業をめぐる状況は、ともに情報のマッサージ性（＝遊戯性）に関心の焦点がしぼられているという点で、江戸時代の近世日本社会への回帰であるという側面をはらんでもいる。しかし、さきに見た自動車への需要が「乗用自動車から貨物自動車をへて乗用自動車に回帰」したのと同様、江戸時代の近世日本社会への単純な回帰を意味しているのではない。なぜなら、おなじ情報のマッサージ性（＝遊戯性）の供給をささえる条件が、江戸時代と現代とでは、まるでことなっているからである。そのちがいを列挙すれば、つぎのようになる。

- ① 社会資源の再生産をささえる産業のちがい……江戸時代＝農業←→現代＝工業
- ② 情報（産業）化をささえる技術のちがい……電子テクノロジーの有無
- ③ 情報産業社会を享受する人口比率のちがい……江戸時代＝都市の一部の特権階層
←→現代＝圧倒的多数の大衆

梅棹「情報産業論」を補強する3つの視点

こうして「20世紀日本をつらぬく『情報（産業社会）化』の趨勢」をめぐる考察はおわる。そこで最後に、本章の議論の契機となった梅棹「情報産業論」[1963]に、いったい本章の考察は、どういう視点をつけくわえたのかをあきらかにしておきたい。

その第1は「人類文明史と動物の発生学のあいだの類推（アナロジー）」を、すこしずつらせて歴史的な観点をつけくわえた点である。そのひとつは、

「人類文明史とは、動物の進化史を、人間が身体の外に存在する装置・制度系として外在的に構築しようとした歴史である」

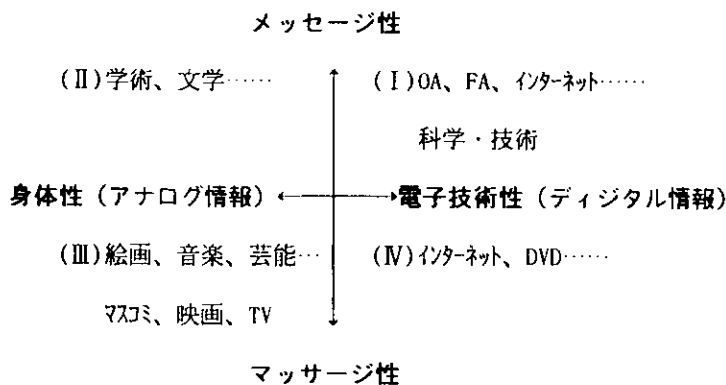
とかんがえる視点である。ただ、ここには人類文明史と動物の発生学とのあいだにおけるほど正確な概念と論理の対応関係は存在しない。にもかかわらず、それはいまひとつ、第2次大戦後の日本人の欲求の焦点の推移に敷衍できるといったひろがりをもたらす。つまり、梅棹[1933]の用語をつかえば、この時期の日本人の欲求の焦点は、

「内胚葉的なものから中胚葉的なものをへて外胚葉的なものへと推移してきた」
のであった。いったん深刻な荒廃を体験した社会は、人類文明史を短時間に圧縮して追体験することによって、はじめて復旧を実現するということになるであろうか。

その第2は、多様な情報をメッセージ型の情報とマッサージ型の情報に分節することによって情報（産業社会）化のさまざまな到達段階を、より正確にとらえることができるという視点を提起したことである。同時にそれは、きたるべき本格的な情報産業社会において、どのようなとなみやころみが重要性を発揮するのかという、ここでは考察の対象としなかった課題にこたえるきっかけになると筆者はかんがえている¹⁹。

そして第3は、第2の視点の展開型として、文明の装置・制度系が発揮する「代替」機能と「充足」機能を分離してかんがえるという視点である。たとえば、

¹⁹ くりかえし、みたように情報には、ふたつの機能がある。その第1は「情報のメッセージ性」であり、第2は「情報のマッサージ性」である。いっぽう人間の身体に作用する情報は、基本的に言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりなど、多様なアナログ情報型の形式をとる。それにたいして今日、急速に発達しつつある電子テクノロジーは、その蓄積・処理・加工・伝達などを、すべてデジタル情報に変換することで容易かつ効率的に行なうことを可能にする。してみると、情報をめぐる今日の課題は、つぎの4象限グラフに表示できる。



これらのうち、現代の日本社会において「情報化」のながれと、ふかく関連していると認知されやすいのは第1象限、つづいて第4象限の課題である。それにたいして第2、3象限の課題は考察の対象になる場合がすくない。しかし、とくに第4象限の課題の将来的展開を考えれば、じつは第2、3象限の課題に、よりふかい関心がはられる必要がある。そのことを「コンテンツ」という言葉への関心のたかまりが象徴する。ここでコンテンツとは、デジタル情報処理を可能にする（次ページにつづく）ハードウェアとソフトウェアを駆使して伝達される映画やアニメをはじめとする音響や映像を意味する。つまり今後、これらを制作する能力が、産業や経済、社会や文化、さらには政治や行政の局面をもふくめて、日本社会においておおきな意味と役割をはらむことになる。こうした視点を提起するうえでも、本文でのべたことの意味は、かならずしもちいさくはない。

「情報に関連した文明の装置・制度系の効率化に役だつコンピュータは、人間の脳・神経系の機能を代替する」

とかんがえるべきであろう。これを敷衍すれば、

「情報のメッセージ性とは、脳・神経系の代替機能である」

ということになる。いっぽう、

「それ自身があたらしい文明の装置・制度系の一角を形成しながら、たとえばゲームソフトをあそぶために使用されているコンピュータは、人間の脳・神経系を充足させる」

とかんがえるべきであろう。これを敷衍すれば、

「情報のマッサージ性とは、脳・神経系の充足機能である」

といえる。そして、すこしかんがえれば情報（産業）革命にさきだつ農業革命、工業革命がもたらした文明の装置・制度系もまた、それぞれに消化器官系や運動器官系の「代替機能」と「充足機能」を、それぞれふたつながらにはらんでいたことが判明するのである。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・ Bateson, Gregory, 1979, *MIND AND NATURE: A Necessary Unity*, John Brockman Associate（ベイトソン、G.、1979、（佐藤良明・訳、1982）『精神と自然——生きた世界の認識』思索社
- ・ 林屋辰三郎ほか、1976『日本史のしくみ』中央公論社
- ・ 飯沢耕太郎、1992「近代都市の成立と写真」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・ 嘉田由紀子・大西行雄、1992「野外調査と電縁ネットワーク——パソコン通信による地域情報の発信と咀嚼」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・ 紀田順一郎、1987「ベストセラー」『江戸東京学事典』三省堂
- ・ 久保正敏、1992「情報の価値と流通」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・ 森谷尅久、1988「情報は東海道五三次をいかに走ったか」『歴史街道』PHP研究所
- ・ 野村雅一、1992a「脱文脈化としての情報化」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・ 野村雅一・編、1992b『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版

- ・佐藤健二、1992「活字文化テクノロジーと近代読者」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・高田公理、1986『都市を遊ぶ』講談社
- ・高田公理、1987a『自動車と人間の百年史』新潮社
- ・高田公理、1987b『〈遊戯化〉社会を探検する』PHP研究所
- ・高田公理、1988「〈反効率経済〉の時代がはじまった——〈情報化〉の第二段階が意味するもの」『wi11』（8月号）中央公論社
- ・高田公理、1992「『情報産業論』の再考」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版
- ・高田公理、1998「食をめぐる『情報化』の現在」『生活情報研究』（第1号）武庫川女子大学生生活環境学部生活情報学科
- ・Toffler, Alvin, 1980, *The Third Wave*, William Morrow & Company Inc. (トフラー・A、1980（徳岡孝夫・訳、1982）『第三の波』中央公論社)
- ・Uexkuell, von Jakob & Kriszat, Georg, 1933, *Streifxuege durch die Umwelten von Tieren und Menschen Bedeutungslehre*, S. Fischer Verlag (ユクスキュル、J.von、1933（日高敏隆ほか訳、1973）『生物から見た世界』思索社)
- ・梅棹忠夫、1963「情報産業論——きたるべき外胚葉産業時代の幕明け」『放送朝日』（2月号）（梅棹忠夫、1991「情報産業論」『梅棹忠夫著作集（第14巻）』中央公論社）
- ・梅棹忠夫、1976（初出1970）「化政百五十年」『日本史のしくみ——変革と情報の史観』中央公論社
- ・Wiener, Norbert, 1954, *The Human Use of Human Beings: Cybernetics and Society*, Anchor Books (ウィーナー、N.1954（鎮目恭夫ほか訳、1979）『人間機械論——人間の人的な利用』みすず書房)
- ・横山俊夫・編、1992『視覚の一九世紀——人間・技術・文明』思文閣
- ・吉田貞夫・宮川清彦、1985『情報文化論』法律文化社
- ・吉見俊哉、1992「電話コミュニケーションの変容」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧日本人と情報』ドメス出版

第2部 食生活・食文化の劇的变化

第1章 食生活・食文化の欧化と「日本的洋食」

第2章 食生活の「簡便化」と「趣味化」

第3章 日本におけるコーヒー飲用の100年

補論 食生活・食文化をめぐる「情報（産業）化」
の諸相

第2部 食生活・食文化の劇的変容

第2部の主題は、食生活と食文化である。それは通常、他の生活文化領域にくらべると比較的「変化しにくい」とかんがえられてきた。このことにかんして石毛 [1989] は、つぎのようにのべている。

一般に食生活の変化というものは、世代単位に少しずつ変わる、きわめてゆるやかに流れの方向を変えていくものである。過去においては数世代、一世紀くらいの時間がすぎさって、ようやく変化があったことがわかるような、連続的な歴史であった。政治の歴史、社会の歴史のように、短期間にがらりとさま変わりをし、昨日の体制と今日の体制が異なるというような、歴史的亀裂をもたないのが、食の歴史のふつうの姿である。

しかし、われわれ日本人の食は、「文明諸国にはその例をみない」といわれるほど劇的な変化を二〇世紀後半におこしたのである [pp.10-11]。

ここでの指摘は「20世紀後半」に焦点がさだめられている。しかし、じつは日本人の食生活・食文化は、明治・大正時代にもそれなりに劇的な変容を体験してきたようにおもわれる。そこで、第2部においては、明治・大正・昭和の3代にわたって、つぎの点に焦点をしばりながら、その変容のいくつかの側面をえがきだすことにする。

- ① 明治・大正時代における日本人の食生活・食文化の「欧化」を「日本的洋食の成立」を中心に考察する。
- ② 第2次大戦以降の日本人の食生活・食文化の変容を「簡便化」と「趣味化」という対極的な変容の同時的な進行過程であるとかんがえながら考察する。
- ③ 江戸時代末期に到来した外来の飲料であるコーヒーに焦点をしばって、その普及の過程を考察する。
- ④ 上記のうち、①と②の論考を「情報化」という視点にたって補足的に再検討する。

【参考文献】

- ・石毛直道、1989「昭和の食——食の革命期」（石毛直道ほか編）『食の文化シンポジウム '89昭和の食』ドメス出版

第1章 食生活の欧化と「日本的洋食」¹

「日本的洋食」という概念

江戸時代の末期から明治時代にかけて本格化した日本社会の「近代化」は、欧米の文物の受容と同化を、その重要な内容のひとつとしていた。食文化もまた、その例外ではなかったとかがえてよい²。

じっさい「西洋的な食文化」の受容は、中国料理の受容よりも、むしろはやい時期にはじまったもようである。安政年間（1854～1860）に、在留外国人を顧客とする「横浜ホテル」が誕生したのをべつにしても、すでに1870（明治3）年、北村重威という人物が「築地精養軒ホテル」を開業して、西洋料理の普及の第一歩をしるしている。また、その2年後の1872（明治5）年には、三河屋久兵衛が、のちに福沢諭吉など、当時の日本の近代化を先導した人びとがでいりすることになる、日本で最初の西洋料理店を開業する。その後は、おなじ1872年に、仮名垣魯文が、110種類におよぶ西洋料理の「製方」を紹介した『西洋料理通』を出版し、「木挽町精養軒」が営業を開始している。さらに1876（明治9）年に「上野精養軒」が開業し、その翌年の1877年に「米津風月堂」がフランス料理を発売する。こうして1883（明治16）年における鹿鳴館の完成と、その後の「欧化」の一層の進行への序曲がかなでられるのである。

しかし、これらの、いわば「純粋な西洋料理」は、一般生活者にとって、いちじるしく高価であり、かつ、その食事作法にもなじみがなかったため、縁のとおい存在であった。つまり、これら純粋の西洋料理は、欧米の近代文明を尊崇し、それを日本社会に移植しようとかんがえていた高級官僚や政治家、財界人を中心とする、当時の上流階級にありがた

¹ 第2部第1章のもととなる論文は、高田 [1983] として公刊されている。

² このことは、傷病軍人を慰安する目的で、時局に関連する記事や図版をもりこんで編集された『風俗画報（増刊号）』（1871年）の巻頭をかざった口絵「龍宮祝捷会之光景（昭和女子大学蔵）」をみると、よくわかる。この絵には、1904（明治37）年から翌年にかけてたたかわれた日露戦争当時の世相が、竜宮城になぞらえてえがかれているが、タコがつかんでいるものに「ヨロカン、シヨムシ、ツクダニ」といった従来からの食品名のほかに「ビスケット、ヨムレツ、フライ、アンパン」などの名称がみえる。すでにこれらの食べ物が当時の一般生活者にしられていたことがうかがえる。

がられ、珍重されるにとどまっていた。このことは、いわゆる「鹿鳴館さわぎ」が一段落した明治20年代後半（1890年ごろ）に、客足がとおのいたために廃業する西洋料理店が続出したこと、東京のすべての飲食店の10パーセント以上が集中していたとされる庶民の町・浅草には、1897（明治3）年になっても、なお「純粹の西洋料理店」が1軒もなかったことなどによってもしめされる。

では、一般大衆は「西洋料理」に、まるで関心がなかったのかといえば、そうではない。ただ、彼らは「純粹の西洋料理」を、そのまま受け入れるのではなくて、それらを、いわば「日本的に再編成」することによって、みずからの食生活に受け入れようとした。その一例が「牛肉のすきやき（あるいは牛鍋）」である。そのことに関連して、昭和女子大学食物学研究室〔1971〕は、つぎのようにしている。

安政年間にはすでに福沢諭吉らにより肉食が勧められていたが、これは西洋料理が入ってくるよりもはるか以前のことで、その調理形態は醤油、味噌（のちに砂糖がこれにかわる）で煮るという極めて日本的なものであった〔pp.7-8〕。

いうまでもなく、ここにしている調理法は、牛肉のすきやき（牛鍋）の原型である。それを1868（明治元）年、高橋音松なる人物が「すき焼」と称して発売した。その結果こんにちでは、それは「日本料理を代表するもののひとつ」にかぞえられるにいたっている。しかし、殺生を禁じた仏教の伝来いらい、すくなくともタテマエのうえでは、肉食が禁じられてきた日本において「肉食が復活」したことは、牛肉を多用する西洋料理の影響を無視してはかんがえられない。そういう意味において「牛肉のすきやき」を、西洋料理の日本的再編成の一例としてとらえても、ふつごうはあるまい。

いまひとつ、これと同様の食品として「木村屋の餡パン」をあげることができる。それは1875（明治8）年、木村安兵衛が、麴^{こうじ}で発酵させたパン種に、中国料理の饅頭のよように「小豆のあん」をいれて、やきあげるといふ、いわば「和・洋・中」を折衷した食品であった。この「木村屋の餡パン」は、明治天皇の好物であったということもあって、当時の一般生活者の絶大な人気をあっめたという。

そして、こうした「和洋折衷」のころみは、牛鍋や餡パンだけにとどまらず、より広範な食物や料理の領域にひろがっていく。その結果、やがて「トンカツ、カレーライス、コロッケ」などに代表される、筆者の用語をつかえば「日本的洋食」とでもよぶべき料理の一分野を形成し、われわれ日本人の食生活・食文化に、ふかい根をおろしていくことになる。それは、西洋料理を調理するさいに、しばしば必要とされる洋風の調理器具である

天火はおろか、フライパンさえもたなかった明治時代の日本の一般生活者が、一方で日本の伝統的な食味への愛着を「西洋ふう」の料理に具体的にいかし、他方で日本料理に同化させようところみた努力のあらわれであったといえる。

はじまった「和洋折衷料理」³の模索

一般生活者の食生活・食文化における「和洋折衷」のころみは、料理店における「献立の和洋折衷」としてはじまった。たとえば1886（明治19）年に開業した新橋の「新富楼」では、パンと日本酒1本をそえた和洋折衷料理を1人前25銭でうりだしている。そのメニューをみると、「さしみ、酢の物、やき魚に、ソップ（スープ）、ピフテキ、フライなどをくみあわせて」に提供したほか、一品料理としても販売したという〔『朝野新聞』1986年11月6日〕。現代につながる大衆食堂の原型というべきであろう。

こうした動向のかたわらで「料理法そのものの和洋折衷」がすすんでいく。おなじ年に発行された『女学叢誌（39号）』〔1986〕は、「和洋合ひの子」料理と銘うって、たとえば「塩茹で鯛に刻み葱をふりかけ、別に酢、生姜、胡椒、醤油を煮立ててこれにかけ」といったいわしの調理法を紹介したりしている。こうした傾向は、1890年代なかばになると、いっそういちじるしくなり、われわれ現代日本人の目からみると、ちょっとおどろかざるをえない、さまざまな和洋折衷料理が雑誌記事をいりどるようになる。

たとえば『婦女雑誌』〔1893年5月号〕には、米津風月堂の主人であった米津松造が考案した「牛肉のかまぼこ」⁴「牛肉の茶碗むし」「かつおぶしのだしをもちいたライスカ

³ 明治時代の料理人のなかには、西洋料理の料理法、あたらしい素材を積極的にとりこむ努力をおしかなかった人のおおい。当時の『婦女雑誌』や『家庭雑誌』に、しばしば新料理として和洋折衷料理が紹介されている。これらのうち、トンカツやコロッケ、チキンライスやオムライスなどは、時代をこえて現代にもいきつづけているが、ころみられはしたものの、きえさった料理法もすくなくなかった。

⁴ この料理は「軽便料理法」のひとつとして位置づけられている。ここでいう軽便料理とは、天火やフライパンがなくても、従来の器具で調理できる料理という意味である。その調理法は、

油身なき牛肉一斤（筆者注：約600グラム）を最初包丁にて極細かにタタキ尚播鉢に入れ充分に摺りこなし夫へ玉子一ツの黄身と煎茶々碗に半杯程の醤油と一ツカミのパンの身を水に浸してしぼりたるを入れ再び摺り交ぜ斬くて小さき簾にて海苔巻の鮪を拵へる様に巻き其上を清き布にて包み熱湯に投じ四五十分間湯煮て冷へたるを切りて食すべし。（つぎのページにつづく）

レー」などの調理法が掲載されているし、新聞にも「ジャガイモのぬか味噌づけ」が「酒の肴に結構」[『九州日々新聞』1899年12月10日]と紹介されていたりする。

また、1904（明治37）年9月から翌年3月まで、清水鈴子という人物が雑誌『女鑑』に連載した「実験牛乳料理」と題する料理記事には、味噌汁・そばがき・白玉餅・芋かけ豆腐・山かけそば・マグロの山かけなどに「牛乳をもちいる」調理法がしるされている。

あるいは、大石禄亭という人物が『家庭雑誌』に発表した料理には「味噌を卵黄の代用にしたマヨネーズ」「カレー粉を入れた味噌汁」[同誌1904年5月号]、「牛乳をいれた汁粉」「マスタードをつけたうなぎの蒲やき」「糟づけのハム」「マヨネーズをかけたさしみ」⁵「ウニと海苔をかけたカレーライス」⁶[同誌1906年4月号]など、かなり過激な和洋折衷料理がふくまれているのである。

もちろん、これらのおおくは、日本の食生活・食文化の近代化過程に開花した一種の「あだ花」として、じょじょに淘汰されていく。しかし、こうした好奇心にみちた、エネルギーなところみがあったからこそ、現代のわれわれ日本人は、いちじるしい多様性にとんだ食生活を享受しえているのだということになる。

いわゆる「日本的洋食」の成立と定着

前項でみた「和洋折衷料理」は、その出現の当初から一般生活者の嗜好の試練をうけて、あるものは淘汰され、あるものはさらに洗練される宿命をおびていた。

じっさい、これらの和洋折衷料理は、その専門店だけでなく、1890（明治23）年の前後以降は、都市を中心に軒数が急速に増加しはじめたそば屋・牛屋・すし屋など、大衆的

この調理法における「醤油で味つけし、湯でゆでる」という日本流の方法が、肉になじみのなかった当時の日本人にうけいれやすかったのであろう。現代では「牛肉100パーセントのかまぼこ」は非常にぜいたくな料理だともいえる。

⁵ 「マグロのさしみにマヨネーズをかける」というアイデアは、筆者がためしてみたところ、和と洋を代表するこれら2種類の食品のくみあわせに、意外な適合性がある。現代の日本人にも、オードブル的な感覚で、抵抗なくうけいられるかもしれない。

⁶ 当時のカレーは、かつおのだし汁をたっぷりつかい、味づけには醤油もくわえた。そのテクスチャーは、味噌汁のようにさらりとしていて、カレーの辛味はわずかに感じられる程度であった。つまり、味は意外に水っぽく、それを不調和ともおもえる塩うにがひきしめるのに役だったとかがえられる。

な飲食店の品がきのなかに登場する。おなじころ、当時は「ライスカレー」とよばれていたカレーライスが、飲食店のメニューにも、『女鑑』や『婦女雑誌』などの家庭雑誌にもとりあげられる。もっとも、このころのカレーライスは、タマネギを日本ネギで代用したり、かつおのだし汁や醤油をつかったり、ぎゃくにコムギ粉やジャガイモはもちいなかったりしたものである。

いっぽう、20世紀が幕をあけると、つぎのような調理法が女性雑誌で紹介される。

「裏ごししたジャガイモに、肉のこまぎれをくわえてつくるコロッケ」 [『女学雑誌』 (1902年2月号)]

「パン粉をつけた豚肉を、たっぷりの油であげたポーク・カツレット」 [『家庭之友』 (1-10, 1904年2月3日号)]

ここに、さきのカレーライスにトンカツとコロッケをくわえた、筆者にいわせれば「日本の三大洋食」がでそろうことになる。

こうした状況のもとで、1901 (明治34) 年、東海道線の急行列車が洋食専門の食堂車を連結しはじめる。くわえて1903 (明治36) 年には村井弦斎が、ほとんど毎日、各方面の料理の名人をまねいてつくらせた、およそ700種類の料理 (そのうちの約4分の1は西洋料理であった) を試食しながら執筆したという、小説「食道楽」⁷を『報知新聞』に連載しはじめる。また、1911 (明治44) 年には、亀井まき子という人物が、全体の3分の1を「和洋折衷料理」の調理法に充当した『洋食の調理 (家庭百科全集・第30巻)』 (博文館) を出版する。こうしたうごきが相互に刺激しあうことによって、このころ、西洋料理一般への普及が、いっそう進行するようになった。

じっさい、明治時代末期の1910 (明治43) 年前後になると、どうどうと「和洋御料理」という看板をかかげた飲食店が、東京はもとより全国各地にみられるようになったという [昭和女子大学食物学研究室、1971 : pp.851-855]。そういう店では、めんどろな西洋式の食事作法をまもる必要もなく、しかも日本特有の調理法をもちいて日本風の味つけをした料理が提供された。こうした気楽さが許容されたことによって、一般の生活者のあいだにも、じょじょに洋食をこころみてみようとする気分がひろがっていった。

ところで、このころに開発された「日本的洋食」は、それぞれに興味ぶかいエピソード

⁷ 新聞連載小説「食道楽」は、のちに、それぞれ「春の巻」「夏の巻」「秋の巻」「冬の巻」という表題をつけた4冊の単行本として出版されることになる。

ドをとまなっている。ここでは、そのうちのいくつかを例示してみる。

カレーライス 明治時代の女性雑誌や料理本を参照すると、カレーライスは「ライスカレー」とよばれるのが普通であったことがわかる。ただ、日本のカレーライスは、さらさらの煮汁である本家インドのカレー、カレーソースに少量の米飯を添えるフランス風のカリ・オ・リのいずれともことなっていて、

「大量の米飯に、とろみをおびたカレーソースをかけてたべる」

日本特有の料理であるといつてよい。この点に関連して『女鑑』〔第95号、1903年10月5日〕には、

炊きたての米飯を深皿に入れ盛り、その脇にカレーを注ぎ大さじを添えて出す。

のが普通であったとしるされているし、『婦女雑誌』〔第19号、1894年10月1日号〕には、

洋食店にて飯と交混して出すことは西洋にてはなし。

という表現がみえる。いずれにしろカレーライスは、明治20(1887)年代に登場していき、家庭内と飲食店のいずれにおいても、「もっとも大衆的で人気のあるポピュラーな洋食」となっていた。このことは、はやくも1906(明治39)年に、神田の一貫堂が、いまでいう即席カレーにちかいものを「カレーライスのたね」⁸と称して発売し〔『時事新報』1887年10月5日〕、まもなく「ハヤシライスのたね」をも発売した〔『時事新報』1887年12月20日〕という事実によってしめされる。その後も、1914(大正3)年には、東京日本橋の岡本商店から、肉や野菜をいれると即座においしいカレーができるというふれこみの「ロンドン土産即席カレー」が発売されたり〔『婦人之友』8-6、1914年6月1日〕、1931(昭和6)年には、イギリスの「C&Bカレー粉」の中身を国産品につめかえるという事件が発生したり〔加藤、1977: pp.158-159〕、さまざまな話題を提供しながら、われわれ日本人にしたまされてきたのであった。

その点で、当時の新聞の、つぎのような将来予測は、みごとにはずれたというほかない。

西洋の文明と日本の文明が一箇の皿の上に交ぜ合はされて一種の風味を出して居る点、其処に過渡時代の哀愁が含まれてゐる。余り旨くも無くて、それで腹が膨れる工合は左程感心できぬ。ライスカレー文明は今後何時までつづくであらう〔『山陽新聞』1912年6

⁸ 「ライスカレーのたね」は、熱湯でとけばすぐたべられるように、カレー粉や肉を調合して乾燥した固形体であつたらしい。

月28日]。

トンカツ その名称じたいが「豚」という漢字の音と「cutlete (カトレット)」という英語の単語が日本語ふうになまった「カツレツ」との合成語である。料理法も、パン粉をまぶした肉を少量の油でやきつけるようにしてつくる欧米ふうカツレツとちがいで、天ぷらの伝統をうけついで、にえた大量の油のなかであげる(ディープフライ)。ただ、もともとは、牛肉や鶏肉を素材としたものが主流であつたらしく、豚肉をもちいたカツレツの調理法の初出は『家庭之友』[1903年6月3日号]あたりにずれこんでいる。

このころから、のちにみる図3-1-1にしめすように、豚肉の生産量が増加し、それを素材としたカツレツが普及していく。この間に「勝烈軒」という屋号の店があらわれたり、「勝列」「勝礼津」「佳津烈」などのあて字がもちいられたりした。その後、桜井ちか子『手軽に出来る家庭西洋料理』[1916]などが「ポーク・カツレツ(豚肉カツレツ)」という表現をもちいて、その調理法をつぎのように紹介するにいたる。

豚肉切身に塩胡椒を振り、粉を塗し、溶かした卵とパン粉をつけ、沸かしたラードで狐色にあげる。……酸味を有った掛汁類が多く用ゐられる。

なお、「トンカツ」という名称が考案されたのは、1932(昭和7)年ごろだったようである[加藤、1977: pp.159-160]。その命名は、もと宮内省の大膳職をつとめていた島田信二郎という人物が退職後に上野で「ぼんち軒」という名の西洋料理店を開業し、さまざまなくふうのすえ、ぶあつい豚肉を熱した油であげることに成功し、これを平仮名で「トンカツ」と表記して宣伝したからだとされている。また、「トンカツ」にキャベツの千ぎりをそえるようになったのは、東京銀座の「煉瓦亭」の発案だといひ、トマトは大正期に生まれるようになった(初出掲載紙不詳、[高田、1983: p.12・244]より再引用)。

コロッケ エビやカニ、鶏肉や牛・豚肉などをホワイト・ソースであえ、パン粉でつつみ、油であげてつくるフランス料理のクロケット(croquettes)が、日本語ふうになまったもので、もともとは前菜やつけあわせにもちいられた。それが日本では「うらごししたジャガイモ」を主体にして、もうしわけ程度に豚のひき肉をくわえてあげた小判形のそうざいとして、1900年前後をさかいに一般に普及した。とくに大正時代なかごろの経済不況のさなかに大流行し、当時の流行歌でも、つぎのような歌詞でうたわれた。

ワイフ貰ってうれしかったが、いつも出てくるおかずがコロッケ……

また、うらごししたジャガイモにいれる具として、豚肉のほかに牛肉ももちいられたし、めずらしいものには「鯛のコロッケ」などというものもあった。当時の料理書には

「牛肉をよくたたき、裏ごししたジャガイモにバターで炒めた玉葱を入れ……」 [『女学雑誌』1905年8月号] というぐあいに、ひととおり説明したあと、「和洋折衷であるからして……」という、やや弁解がましい記述がつづいている。

なお、ここにあげた「三大洋食」のほかにも、型おししたチキンライス⁹やハヤシライス、ケチャップいりのやきめしをうすやきの卵でつつんだオムライス¹⁰なども、筆者は、ここでいう「日本的洋食」にふくめてかんがえている。

洋食材料としての肉類と西洋野菜

ところで、日本的に再編成されたものであるとはいえ、西洋料理をつくろうとおもえば、それにふさわしい料理素材が必要になる。ところが、本章の冒頭にのべたように明治以前は、すくなくともタテマエのうえでは、日本人が西洋料理に必要な不可欠の獣肉を食べることが禁じられていた。という意味では、明治時代から大正時代にかけての西洋料理の受容と同化の歴史は、牛肉と豚肉の普及と連動していたとかんがえてよい。じっさい、たとえば牛肉は、1867（慶応3）年に、横浜・元町の中川屋嘉兵衛が、日本人を顧客とする商店としては最初の牛肉店として販売をはじめていらい、多少の紆余曲折はあるとはいえ、順調に消費量をふやし、やがて豚肉も、これをうわまわるいきおいで需要を拡大させていくことになる（図2-1-1）。

これと同様のことは、牛肉や豚肉だけでなく、各種の西洋野菜¹¹にもあてはまる。食味

⁹ 日本的洋食の特徴のひとつは、米のごはんをじょうずにつかって「洋風」料理にしたあげている点にある。鶏肉を米といっしょにたきあわせて、ケチャップで味つけたチキンライスなどは、もっとも手がるな、その典型である。

¹⁰ 1931（昭和6）年ごろになると、チキンライスをうすやき卵でつつんだオムライスが登場する [『婦女界』1931年1月号]。当初は「オムレツ・ライス」と称していたようで、鶏肉のかわりに牛肉をつかう調理法もあった。その後、「牛挽肉と玉葱のみじん切りを合わせて、たっぷりのバターで炒めておき、トマトケチャップを加へ、温める程度にさっと炒りつけます。次に別のフライ鍋に、玉子を薄焼きにししておき、御飯をのせて包みます。……上にトマト・ケチャップを少しかけます」という調理法も紹介されるようになる（初出掲載紙紛失、高田 [1983 : p. 245より再引用]）。

¹¹ 亀井まき子『洋食の調理』 [1911] の冒頭の口絵には、タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、芽キャベツ、ビート、アスパラガスなど、いずれも明治時代になってから日本人が（つぎのページにつづく）

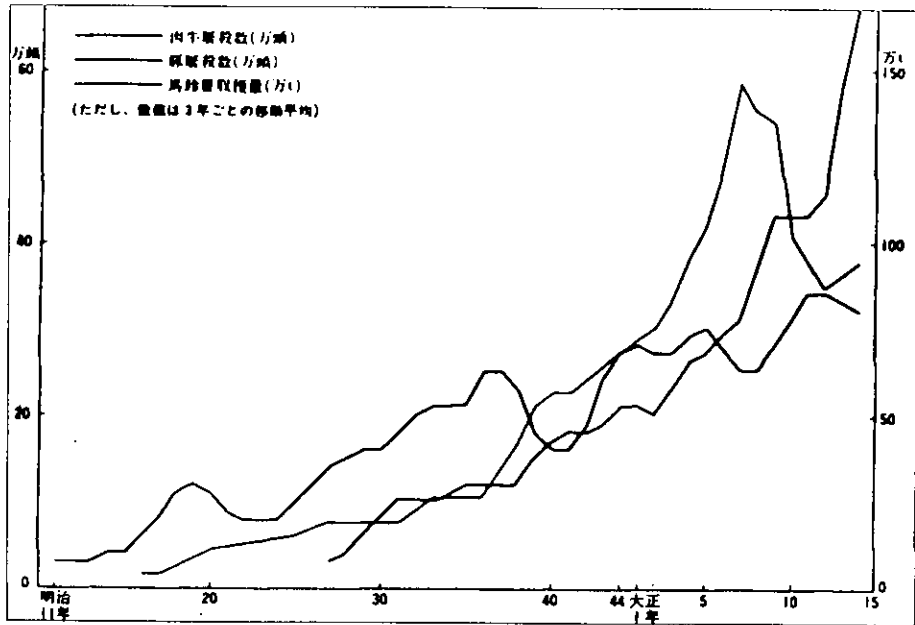


図2-1-1 肉牛、豚の屠殺数および馬鈴薯（ジャガイモ）の収穫量の推移¹²

（資料出所：『明治大正国勢要覧』東洋経済新報社）

が日本のネギににっていたためか、比較的はやい時期に栽培がさかんになったタマネギをはじめ、ジャガイモ、ニンジン、あるいは江戸時代に、すでに観賞用植物としては栽培されていたトマトやキャベツなどの、料理素材としての栽培が本格的にはじまるのは、明治時代以降にずれこむ。これらの西洋野菜の栽培と普及が、牛肉や豚肉と同時に進行したからこそ、ジャガイモのコロッケ、ジャガイモのほかにニンジンやタマネギが必要なカレーライス、キャベツのほそぎりをそえたトンカツ、トマト・ケチャップをかけたオムライスなどの日本的洋食が成立し、ひろく普及したのであった。

ちなみに、これら西洋野菜の普及の端緒となったできごととして、はやくも1874（明

たべるようになった西洋野菜がえがかれている。

¹² この図における数値は、いずれも3年ごとの移動平均による調整値である。牛は1885（明治18）年に、豚はそれより12年おくれて1897（明治30）年に、それぞれ屠殺数で10万頭をこえている。その後、1918（大正7）年に豚の屠殺数が急増したのち、牛の屠殺数を凌駕する。ジャガイモは1884（明治17）年の米の凶作のさいに、その価値が認識されてから全国に普及し、3年のちの1887（明治20）年には、収穫量で20万トンをこえる。西洋料理はもとより、日本的洋食が成立し普及するためには、これらの料理素材の生産のたかまわりが必要不可欠であった。

治7)年に勸業寮がキャベツの種子を導入し、その品種改良をこころみたこと、1882(明治15)年に復刻された高野長英の『勸農二物考』が、その2年後の1884(明治17)年における米の凶作時に、ジャガイモの価値を再評価させたことなどが列挙できる。

なお、やや蛇足めくが、話題を調味料の領域にまでひろげれば、イギリス特産のウスターソースを、醤油をベースとした日本独特の「ウスターソース」に再創造し、さらにそれを「トンカツソース」にまで改良してしまった明治・大正時代の日本人の、ふしぎな知恵とアイデアも「日本的洋食」の成立と普及におおいに貢献した。

日本的洋食の普及と浸透

いうところの日本的洋食は、いちおう明治時代に、その原型がほぼ完成する。しかし、それが一般の日本人の日常生活に普及するのは、都市への人口集中が加速する大正時代をまたねばならなかった。じっさい明治時代における人口の地理的分布をみると、なお人口の過半は農村地帯に分散して生活していた。ところが、大正時代も中期になると、東京・丸の内のオフィス街に鉄筋コンクリートの巨大ビルがたちならぶようになり、それにともなって、サラリーマンや労働者を中心とする都市生活者が増大しはじめた。郊外にむけて電車が運行をはじめ、都市近郊に住宅地が開発され、通勤者のむれが都市の市街を闊歩し、女たちが外出のたのしみをもとめて街をぶらつくようにもなった。そして「ハイカラ」な風俗が世相を先導するようになり、現代につながる、都市化された大衆社会が、じょじょにその姿をあらわにしはじめるのである¹³。

こうして都市にすむ人びとのあいだに、すこしずつ外食の習慣がひろがっていく。そうした需要をさきどりして、1907(明治40)年、当時の最新式デパートであった日本橋の三越が食堂を開業する。そして翌1908年に新館が完成すると、

「今日は帝劇、明日は三越」

という広告文案の古典的名作が一世を風靡し、外出をたのしむ有閑マダムや家族づれに格好の外食機会を提供するにいたった¹⁴。

¹³ その詳細については「第5部 『遊戯化』する都市の『第三空間』」で論じられる。

¹⁴ 正確にいうと、三越が食堂を開業した1907年当時、その正式名称はなお「三越呉服店」であった。その食堂では「洋菓子1皿10銭」「コーヒー・紅茶・和菓子は5銭」であった。非常に好評で、翌年に完成した鉄筋コンクリートづくりの新館にも食堂が開設された。

それだけではない。1918（大正7）年、当時、「簡易食堂」とよばれた公設の食堂が、神田をはじめ、九段・本所・浅草など、東京都内の数か所に設置されたほか、サラリーマンや労働者のための飲食店が、その数を急速に増加させた。じっさい1923（大正12）年には、人口が200万人あまりの東京市に、合計3万軒ちかい飲食店が営業していた。そのうちわけは、2万軒たらずの日本料理店を筆頭に、西洋料理店が5000軒、兼業料理店が1500軒、支那料理店が1000軒ほどである。そして、これらの飲食店のおおくが、手が届かぬにたべられるカレーライスやトンカツやコロケをはじめとする日本的洋食を提供することによって、その大衆的普及を急速におしすすめたのであった。

しかも、こうした趨勢は、おなじ1923年に発生した関東大震災によって瓦礫の山と化した東京を、当時の流行語にそくしていえば「文化的に再建・復興する」過程において、いっそう加速された。それ以前は、畳をしいた座敷に客をあがらせていたそば屋のおおくが、椅子とテーブルをもちいるようになり、あわせてカレーライスやトンカツを献立表にならべるようになる。また、公設食堂での販売記録によると、カレーライスのうれゆきが、つねに伝来の定食をうわまわるようになったという。そして関東大震災の翌1924（大正13）年に営業を開始した「須田町食堂」のような、一軒の店で、和食・洋食・中華料理など、あらゆる種類の料理が気がるにたべられる、あたらしいタイプの大衆食堂が、数おおく登場するようになる。

さらに昭和時代がはじまると、新宿の「中村屋」が、ごはんとカレーソースの容器をべつべつにサービスする高級カレーをうりだしたり（1927年）、すでにふれたように上野の「ぼんち軒」がトンカツの名称をはじめもちいたり（1929年）することによって、日本的洋食は日本人の食生活・食文化に、たしかな地歩をきずいていった。それはちょうど、銀座の街頭にモボやモガが姿をあらわして衣生活における洋風化がすすみ、東京の郊外住宅地に応接間をもった文化住宅が出現した時代のできごとであった。

日本的洋食の普及に貢献した料理模型¹⁵

¹⁵ きわめて写実的につくられた料理模型を、帰国のさいに「みやげ」として購入し、インテリア素材としてたのしんでいるアメリカやヨーロッパの観光客はすくなくない。日本でも1970（昭和45）年前後に、スーパーリアリズムの絵画や彫刻が流行した時期があったが、その最初のブームは1930年前後のアメリカにおいて発生した。それとおなじ時期に、みかたによれば、（つぎのページにつづく）

ところで、すでにみたようにトンカツ、コロケ、カレーライス、オムライス、エビフライなどの日本的洋食は、明治時代から大正時代にかけて、日本人があらたにくふうして創出した料理である。したがって、それらが都市の飲食店で提供されるようになって、それらが一体どういう料理であるのかを知らない一般生活者がおおかつたとしての不思議はない。そこで彼らに、これらの料理の実物をイメージさせ、食欲と好奇心をよびおこすくふうが必要となった。それが、きわめて写実的に料理を再現し、飲食店の店頭で陳列された「料理模型」である。この料理模型は、最初に開発されたころから1970（昭和45）年ごろまで、ろうを素材にして制作されてきた。その制作手順の骨子はつぎのとおりである（以下の記述は、1982年の冬季に、筆者が東京・浅草・合羽橋の食品サンプル専門店において、ききとり調査した結果による）。

- ① まず、本物の料理、たとえば「カツ丼」をつくる。これをもとに型をとるのだが、カツのころもの繊細な感じをだすために、できあがったトンカツのうえに、半熟卵はかけない。つぎに、どんぶりごとボール紙で円筒形にくるんで、ひもでしばる。
- ② できあがった「かつ丼」の表面に、寒天をながしこむ。そのさい、実物のかたちをくずさないように、いちど寒天をしゃもじにうけて、すこしずつ、しずかにながしこんでいく。寒天のあつさは3センチ程度で、およそ1時間がかたまる。そこでボール紙をはずし、寒天のうえに、たいらな板をあて、さかさにしてどんぶりをぬきとる。そうすると、どんぶりの中身は、そっくりそのまま寒天についてくる。
- ③ つぎに、寒天についてたごはんやカツを、細心の注意をはらいながら、とりのぞく。ころものパン粉や卵のくずなど、こまかいものも、ていねいに根気よくとりさる。こうして、ろうをながしこむ型が完成する。
- ④ 寒天の型に、着色したろうを、これまた注意ぶかくながしこむ。そのさい、型のまわりに、うすい寒天の板で土手をつくっておく。つぎに油えのぐで、カツ、卵、タマネギなどの色を、べつべつにつくって、型のそれぞれの部分にぬっていく。
- ⑤ つぎに、うす黄色に色づけした土台になるろうを型にそそぎこむ。このときのろうの温度の調整がむづかしい。寒天をとかしてしまうほど高温であってはならない。そ

「日本的スーパーリアリズム」ともよぶことのできる、きわめて写実的な実用看板として「料理模型」が制作された。背景には、本文でのべたように、みなれない日本的洋食の普及という条件がある。これらの料理模型は、業界では「食品サンプル」とよばれることがおおい。

れがうまくいくと、15分ばかりのち、周辺部からひえてかたまってくるが、いまだかたまっていない中心部あたりのろうを、ころあいをみはからってもとにもどし、全体を均一のあつさに仕あげる。

- ⑥ じゅうぶんに、ひえてかたまったら、ろうを型からはがす。この段階で、およその感じはでているが、さらに、しろく色づけしたろうを、かつのところどころにちらして、半熟の卵白の感じをだし、黄身の色も筆でぬりつける。そして、以上と同様の方法でつくったグリーンピースをちらす。そのさい、ころげおちないように、とけたろうを糊のかわりにもちいる。さいごの仕上げは、カツのころもの色づけである。ラッカーを筆でぬると、いかにもあげたてのかつのように、こうばしい色になる。

いうまでもなく、ここにしるしたのは、あくまで「骨子」であって、実際の制作手順には、さまざまなコツや工夫が必要とされる。また、すべての料理模型が、この手順でつくられるわけでもない。「そば」なら「ろうをしみこませたあんどん芯」がつかわれるし、「てんぷらのころも」は、つめたい水に、とけたろうをながしこんでつくる。しかし、いづれにしても料理模型は、手鍋とろうと若干の道具があればつくることができたという。

そのため、この技術が最初に開発された1930（昭和5）年ぜんごから、名もしられぬ職人たちが、材料と道具をもって東北地方や北海道などの遠隔地におもむき、その全国的な普及に貢献したのであった。もっとも、当時の職人の数は、東京全体でも5、6人にすぎなかった。とうぜん売価もたかく、トンカツが10銭であったとき、その料理模型は2円もの代価でとりひきされたという。

ちなみに、上記のような方法で料理模型（食品サンプル）を制作する技術は、むかしの小児科医院などに陳列してあった、病状ごとにことなる糞便の模型、人間の臓器や人体模型などを制作するろう細工に由来しているのだそうである。なお、こんにち（1983年当時）では、ごく少数の特殊な料理模型が、特別注文のろう細工で制作されるほか、ふつうは塩化ビニール系の樹脂を素材にして大量生産されている。そしてその写実性は、むかしのろう細工よりも、いっそう精密であるようにみえる。

ラムネとカルピス——欧米由来の飲料の日本的再編成

明治・大正時代の日本人が、あたらしい料理として開発した日本的洋食が成立し、普及したのとおなじ時期に、飲料の領域でも、和洋折衷的なさまざまな商品が、あらたに開発された。そのひとつに「レモネード（lemonade）」が日本語ふうになまった「ラム

ネ」をはじめとする清涼飲料水がある。

ラムネは、1873（明治5）年に、華人の商人であった蓮昌泰が製造・販売したのが最初であるとされるが、そののち、蜜柑水や檸檬水などとともに、当時の日本人の生活に急速に普及していった。とくに1886（明治9）年、岸田吟香が経営していた銀座の「精鑄氷店」から発売された檸檬水¹⁶は大評判となり、その翌年における東京での氷店の急増とあいまって、それまで夏の風物詩であった麦湯店をすっかりさびれさせたという〔『東京日々新聞』1877年7月20日〕。

こうした趨勢は、その後もつづいたようで、とくにコレラが大流行した1886（明治19）年の夏には、『東京横浜毎日新聞』〔1886年7月20日〕が、

「ガスを含有している飲料をもちいると、おそるべきコレラ病に感染しない」

という意味の記事を掲載したため、これをさかいにラムネの人气がいつそうたかまり、その2年まえには東京ちゅうで、わずか3か所にすぎなかった製造業者が、1890年代には80軒にまで増加した。その間、1888（明治21）年には、明治屋がラムネよりやや高級な「三ツ矢平野水」を発売すると、やがて「ダイヤモンドレモン」「シャンペンサイダー」などの商品が発売されるようになり、「サイダー」や「シトロン」という普通名詞でよばれながら、大正時代にはいると、ラムネの退潮をもたらすとともに、代表的な清涼飲料水の地位を確立するにいたる。なお、厳密にいうと、サイダーは、シャンパンとリンゴの風味をもつ炭酸飲料、シトロンはレモンの風味をもつ炭酸飲料につけられた通称であった。

いまひとつ、わすれてならないものに、三島海雲によって創製されたカルピスがある。彼は1898（明治39）年に内蒙古において、アメリカにヨーグルトという食品があること、それは蒙古人が常食にしている酸乳に類似したものであることをしらされる。そこで日本に帰国したのち、1916（大正5）年、生クリームで乳酸菌を培養して「醗酵味」を試作するのに成功した。ところが、生クリームではコストが高価につく。そこで、かわりに脱脂乳をもちいて同様の食品を製造し、これに「醗酵素」の名をつけて販売した。ところが、これは当時の人びとの味覚にあわなかったためか、あまりうれなかった。

そんな状況のもとで1919（大正8）年、のちにカルピス工業の常務になる人物が、脱脂乳に砂糖をくわえて来客にだし、それを失念したまま翌日をむかえたところ、コップにの

¹⁶ 精鑄氷店のレモン水は新聞記者たちの人気もあつめたようで、『朝野新聞』〔1877年7月18日〕には、「贈られし返礼におべっかで替るので有りません」という文言がしるされている。

こっていた前日の客ののみのこしが、非常に美味な飲料になっていることを発見した。そこで研究を開始し、約半年後にこれを商品化し、「カルピス」¹⁷という商品名で発売したところ、市場の好評を獲得することに成功したのであった〔加藤、1977：pp.142-143〕。

その成功に刺激されて、1925（大正14）年には明治製菓が「ラクミン」、1927（昭和2）年には森永製菓が「コーラス」という商品名で、カルピスに類似した商品を発売する。しかし結果的には、カルピスに社運をかけ、やがて「初恋の味」というキャッチフレーズの傑作をうみ、「くろんぼう」のアイキャッチャーをたくみにつかったカルピス工業の販売努力が実をむすんで、ついにカルピスは「乳酸飲料の代名詞」の地位を確立するにいたる。

こうして、明治・大正時代から昭和戦前期までの日本人の、飲料までをもふくむ食生活・食文化の変容のひとつの重要な側面をかたちづかったのが、筆者が「日本的洋食」とよぶ「欧米起源の料理や食文化の日本的再編成の過程」であったことが判明する。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表年代順。なお、本章の記述に必要な歴史上の事実をしめすために引用した雑誌の名称は、参考文献とはやや性格がことなるため、本文中の〔 〕にしるした）

- ・加藤秀俊、1977『明治・大正・昭和 食生活世相史（食文化の発見Ⅰ）』柴田書店
- ・昭和女子大学食物学研究室『近代日本食物史』（昭和女子大学）近代文化研究所
- ・高田公理、1983「日本的洋食の成立と展開」『週刊朝日百科「世界の食べもの・日本編」（39）現代の食生活』朝日新聞社

¹⁷ 「カルピス」という商品名は、牛乳にふくまれているカルシウムの「カル」と、「最上の味」を意味する梵語のサルピスの「ピス」をあわせて命名されたという。「初恋の味」という名キャッチフレーズ（1921年）とともに、カルピスのイメージと不可分の「くろんぼう」マーク（1924）は、第1次大戦後のインフレで困窮していた美術家を救済する目的で、ドイツ、フランス、イタリアの3か国において作品募集をおこなった懸賞から誕生した。応募作品1273点のなかからえらばれたのは、ドイツのオットー・デュンケルという人物の作品である。

第2章 食生活の「簡便化」と「趣味化」¹

1980（昭和 50）年の冬、筆者は、その当時、勤務していた京都に所在するシンクタンク（株式会社シー・ディー・アイ）が実施した調査研究のためにニューヨークをおとずれた。そのさいの面接調査をうけいれてくれた女性（当時 35 歳、某銀行に勤務）との面談中、きわめて興味ぶかい一言を耳にすることになった。いわく、

「わたしは、ウィークデーの夕食は、多忙で面倒だから外食ですまします。しかし、ウィークエンドの夕食には、自宅でたべることのできない、豪華なごちそうをたのしみたいので、レストランへでかけます」

彼女は、そういいはなって、にやりとわらったのであった。

つまり、当時すでにアメリカの、いわゆるキャリア・ウーマンのなかには、ほとんどすべての食事を「外食ですまします」という習慣を日常化している女性がいたのである。

そのことから筆者は、短絡的に現代日本人の食生活・食文化が、アメリカのそれを模倣しながら追随しているのだというつもりはない。けれども、彼女が口にしたアメリカ人の食生活・食文化の変容の方向が、ある面で高度経済成長を体験してきた日本人の食生活・食文化の変容にもあてはまるようにおもえる。その特徴をひとことで表現すれば、

「一方における『簡便化』と、他方における『趣味化・豪華化』」

である。本章においては、第2次大戦後に焦点をしぼって、われわれ現代の日本人の食生活・食文化が体験してきた変容の方向をえがきだすことにする。

インスタント食品の登場と普及

現代日本人の食生活・食文化の変容の第1の特徴としてあげた「簡便化」は、1955（昭和 30）年以降に本格化する、いわゆる高度経済成長のもとで、いちじるしく多忙になりはじめた、主として都市に居住する人びとの生活に対応して、まず

「家庭における調理の下ごしらえをはぶく」

という、当初は潜在していた需要を先どりすることからはじまった。そのことを 1958（昭和 33）年に発売された日清食品の、むしあげた麺にトリガラの味つけスープをしみ

¹ 第2部第2章のもととなる論文は、高田 [1983] として公刊されている。

こませたのち、油であげた「チキンラーメン」の広告文案が雄弁にものがたる。いわく、
「お湯をかけて2分間、ふたをしてむらせばたべられる」

というのである。それは、きわめて調理の簡便な食品であった。

発売当初、チキンラーメンの評判は、かならずしもよくなかった。ところが、なによりも効率性を重視するアメリカへ輸出したところ、これが大好評を博した。そのことから、デパートが宣伝・販売に力をいれるようになり、日本国内でも爆発的な人気をアツめる。これが、いわゆるインスタント食品の大衆的な普及の第1歩であった。そして翌1959（昭和34）年には、粉末スープをべつにそえたインスタント・ラーメンが発売されてブームはさらに過熱し、やがて300社ばかりのメーカーを続出させることになる²。

こうした状況のもとで、すでに昭和20年代から発売されていた「粉末ジュース」「即席しるこ」、すこしあとの1960（昭和35）年に発売されるインスタント・コーヒーなどが注目をアツめるようになり、このころ、「インスタント時代」という言葉が、一種の流行語になった。こうした傾向は、昭和40年代にはいってもつづき、1971（昭和46）年に、発泡スチロールの容器にはいったカップヌードル³が発売されると、おりから急速な普及の過程にあった自動販売機の「湯のでる機種」とむすびついて、歩行者天国での若者のあいだに、たったままの姿勢で食物をたべる、いわゆる「たちぐい」風俗をひろげるきっかけになった⁴。そして1970年代になると、カップめんをふくめて、インスタント

² 1958（昭和33）年における「チキンラーメン」の発売以来20年あまりが経過したころ、すでに1976年に発売されていたカップヌードルをはじめ、やきそばや日本そばやうどんの発売などが、あらたにくわわった結果、インスタントめんの多様化はいちじるしくすすんだ。やがて「めんもスープも本格派」であることを標榜する高級インスタントラーメン、「食味の地声色」を強調したローカルメーカーの製品などが登場するようになった。1980（昭和55）年当時の生産量は約38億5000万食で、年間の販売額はざっと2600億円にたっている。

³ カップヌードルとは、発泡スチロール製の容器に、めんとスープ、フリーズ・ドライ製法のかやくをいれたものである。1971（昭和46）年9月に発売されると、熱湯をそそいでわずか3分でたべられる手がるさと、フォークでめんを口にはこぶあたらしいスタイルが、わかもの層のあいだに爆発的な人気をよんだ。自動販売機の普及にともなって生産量も飛躍的にのび、1980（昭和55）年には年間に約14億食の生産数を記録した。

⁴ インスタントラーメンは「アウト・ドア・ライフ」に格好のたべもの（つぎのページにつづく）

ラーメンの年間販売数が約 33 億食にもおよぶにいたる。当時の新聞記事によると、しばしば「戦後最大のヒット商品」とよばれたものである。

ところが、1975（昭和 50）年がちかくなるころから、インスタントめんの消費は頭うちの時期をむかえる。ちょうどそのころ、おりからの「米のごはんの見なおしブーム」とあいまって登場したのが、「お湯をそそぐだけでOK」というふれこみの、赤飯やピラフなどのカップライスであった。これらもまた、インスタント食品のカテゴリーにふくまれることは、あらためていうまでもない。

冷凍食品とレトルト食品の普及

インスタント食品とならんで、簡便化されることで急速な成長をとげてきた食品に、エビフライ、コロッケ、シューマイなど、調理ずみの冷凍食品がある。最初に発売されたのは 1953（昭和 28）年であったが、発売当初の需要は、ほとんどが業務用にかぎられていた。ところが、1965（昭和 40）年に「2 ドア冷凍・冷蔵庫」と「家庭用電子レンジ」が発売されたことによって、冷凍食品の保存と、その簡便な調理が一般家庭においても可能になり、じょじょにその普及が加速していった。

さらに 1968（昭和 43）年、新製品としてチキンライス、やきめし、釜めしなどの冷凍ライス類が発売されて冷凍食品の種類が多様化し、あわせて、これらの市場に大手食品メーカーが参入するようになったことが作用して、1970 年代にはいると、冷凍食品を陳列したショーケースが、全国のデパートやスーパーでみられるようになった⁵。その結果、1958（昭和 33）年には、わずか 1591 トンにすぎなかった冷凍食品の生産量が、22 年後の 1980（昭和 55）年には、そのおよそ 350 倍の 56 万トンにおよび、調理ずみの冷凍食

である。じっさい、海外遠征の登山隊には必携品だといわれる。湯のでる自動販売機とむすびついたカップラーメンは、都市の若者たちの、あたらしいタイプの生活様式にも重用されている。

⁵ スーパーの料理ずみ冷凍食品売場では、エビフライ、コロッケ、ハンバーグ、シューマイ、ギョーザの、いわゆる「5 大品目」が過半数をしめている（1982 年当時）。かつて冷凍食品は、しゅとして水産会社によって供給されていたが、1970 年ぜんごからは大手食品メーカーが、この分野に進出し、メーカーの数が 300 社をこえるとともに、食品の種類も、ピザ、ハンバーガー、中華まんじゅうなどにひろがっていった。

品だけでも40万トンあまりにたつするにいたった⁶。

これらとならんで、いまひとつ注目すべき、簡便化された食品は、1968（昭和43）年に、最初は「ボンカレー」の商品名で登場したレトルト食品である⁷。正確な一般名称としては「レトルト・パウチ食品」とよばれるべきこの食品は、ポリエステルとアルミ箔とポリエチレンの3層からなる袋に、袋づめ（パウチ）されたのち、高圧蒸気釜（レトルト）で滅菌されたものである。その柔軟性にとんだ形状から、カレーをはじめとしてシチューやハヤシ、麻婆豆腐や各種の飯類など、半固形、あるいはねり状の食品によく利用されている。しかも、3分間あたためるだけで食べられたり、あわせ調味料が真空包装されていたりする。そのため、一流ホテルや高級レストランの食味が、ほとんどそのまま保存されるという特質にもめぐまれている。つまり、簡便性にくわえて、豪華な趣味性をも満足させることができるため、その後も今日まで、つよい人気をよんでいる。

ところで、これら各種のあたらしい食品の出現によって、省略可能となった家庭における料理の下ごしらえの手間は、社会的に外在化され、産業化されることによって、食品工業に未曾有の成長をもたらした。げんに食品工業の製造品の年間出荷額は、1975（昭和50）年に15兆円をこえ、全製造業の製造品出荷額の11.9パーセントをしめるにいたっている。

むろん、家庭における下ごしらえの手間をはぶく役割をはたしたのは、工業製品としての食品だけではない。そこで、つぎに、それ以外の要因を検討する。

⁶ 冷凍食品の人気がたかまった背景には、家庭生活の変化があるともいえる。1980年代以降、家庭でおなじ食卓についても、子どもと大人では、それぞれこのみがちがうため、べつべつの料理を食べる傾向が顕著になった。そんな状況のもと、デパートなどでは「個食の時代」といって、「1人前用の冷凍食品」の販売をはじめた。なお、冷凍食品全体でみると、日本の国民ひとりあたりの年間消費量は1979年には5.4キログラムで、アメリカ人の年間消費量38.4キロの約7分の1であった。これは、生鮮素材が入手しやすい日本の風土と流通機構、および日米の家庭生活の型のちがいに由来しているとかんがえられる。

⁷ レトルト食品はカレーで初登場したのち、ハンバーグという第2の人気食品をうみだすことで急速に市場規模をひろげた。その後、麻婆豆腐などの中華料理シリーズを好評を博するようになる。なお、レトルト食品には「3分間あたためるだけで食べられる完成食品」と「豆腐や野菜などをくわえ、あらためて調理するもの」とが区別される。

総菜販売業や外食産業の繁栄

そのひとつは、1975（昭和 50）年あたりをさかいに、デパートやスーパーマーケットのそうざい売場が目につくようになったことである。むろん、そうざい販売という業態は、てんぷらや各種の煮物、コロッケなどを、小規模にあきなう、ちいさな製造業をかねた商業として、江戸時代のむかしから存在してきた。しかし、ここでいうそうざい販売は、よび名も「デリカテッセン（＝「うまい物・甘味菓子」を意味するドイツ語）」とあたらしくなり、商品も調理ずみの刺身やたたき、ローストビーフやサラダなど、高級な食材や欧米ふうの料理をあつかっているという点で、伝来のそうざい販売業とはことなっている⁸。しかも、その販売額が、1970（昭和 45）年以降、毎年で平均で 20～30 パーセントの成長をつづけ、1979（昭和 54）年には、1 兆 2000 億円の規模にたった。これらの、いわゆるデリカテッセンもまた、皿にもりつけるだけで料理として完成するという点において、調理の手間そのものをはぶいてくれる食品であるといえる。

いまひとつ注目すべきは、一般に「ディナー・サービス」とよばれるようになった、家庭に料理素材を宅配する「そうざい宅配業」である⁹。これは、家庭の台所で、調味料などをつかって簡単にたたきができる寸前まで下ごしらえをすませた、いわば半加工の食品

⁸ デパートなどのコーナーだけでなく、デリカテッセンの専門店も都内にオープンした。調理ずみ冷凍食品やレトルト食品が「完成料理の長期保存」をめざすとすれば、デリカテッセンは「完全料理をもちかえてすぐにたべるもの」として、食事の「簡便性」と「趣味化・豪華化」という需要に、ともにこわえることをめざしている。

⁹ はじめて登場したころ、そうざい宅配業は「珍商売」として話題になった。その後、急成長はしなかったものの、食品産業の一角にそれなりの位置をしめるにいたる。主婦にとっては、買物の手間ははぶける、献立をかながえるなやみがなくなる、栄養のバランスがよくなる、献立表でレポートリーがふえる、食材の無駄がなくなる、などに利点があるという。1 世帯あたり平均の購入量と金額は、1970（昭和 55）年の時点で「3.3 人前で 1028 円」——ひとりあたりにすると 366 円という数値になる。なお、デパートでは、料理素材の宅配にかえて「グルメキット」と称して、中華料理素材を中心に、肉や野菜などの食材のセットをパックにして販売するようになった。主婦はそれを家庭にもちかえて下ごしらえをし、最後の調味はレトルト食品の「あわせ調味料」にまかせる。家庭の主婦の手づくり指向を満足させながら、かつ、専門家が調理した豪華な味覚をもあわせもつ簡便食品として人気をよんだ。

材料を、あらかじめとりきめられた予算にもとづいて、家族の人数に適合するようにつめあわせたものに、料理手順を印刷したカードをそえて各家庭の玄関先に配達する業態である。はじめて登場したのは1974（昭和49）年のことであった。ここでは、その全容についての詳細な報告をおこなうことはしないが、「調理の手間」のかわりに「買物の手間」をはぶくという、手間ははぶきかたの局面が移動しているところが興味ぶかい。

ところで、家庭における調理の手間の簡略化が極限まですすんだとき、食事を外食ですますという行動様式が解発（release）される。もっとも、そういう意味においてなら、時期を第2次大戦後にかぎっても、1949（昭和24）年に「飲料禁止政令」が解除されたときから、外食産業は存在しつづけてきたというべきである。しかし、今日いうところの外食産業の隆盛は、それがきわめて多数の現代日本人による外食行動の日常化にささえられているという点で、むかしの料理飲食店の存在とことなる意味をはらんでいる。じっさい『家計調査年報』〔総理府統計局〕によると、外食費の全食費にしめる比率は、1970（昭和45）年前後に10パーセントを、1978（昭和53）年には13.6パーセントをこえるなど、着実にその比率を増大させている。

こうした趨勢は最初、あいつぐ外資系の外食産業が営業をはじめたことで、そのきっかけがもたらされた。1970（昭和45）年におけるミスタードーナツ¹⁰とケンタッキー・フライドチキン¹¹の、翌1971年におけるマクドナルド・ハンバーガー¹²などの矢つぎばや

¹⁰ ミスタードーナツは、各種のドーナツのほか、コーヒーやジュースなどを販売品目としている。日本のミスタードーナツはアメリカの本社と技術提携でむすばれているだけで、資本も全額、日本企業の出資によって成立しているファースト・フード企業である。1981（昭和56）年の年間売上額は200億円。アメリカ本社の創設者は、

「アメリカで、いちばん成長してきたハンバーガーも、今（1981年当時）はのびがスローダウンしている。しかし、ドーナツはおとろえていない」

と豪語した。

¹¹ ケンタッキー・フライドチキンは、特有の香辛料をきかせた塩をまぶした鶏肉のからあげを中心に、サワーキャベツ、フライドポテト、パン、アイスクリーム、ルートビアなどを販売品目としている。店頭のカウンターやテーブルで安直に昼食や間食ができるほか、もちかえれば家庭や下宿での少人数のビールパーティーのおつまみにも利用できる。1981（昭和56）年の年間売上額は242億円。白とピンクのストライプを基本とした統一デザインは、店舗から食器にいたるまで徹底している。

な日本上陸が、それにあたる。とくに銀座・三越の1階に開店したマクドナルド・ハンバーガーの日本における第1号店は、開店日に、1個80円のハンバーガーを中心として100万円をこえる売上額を記録し、その後の破竹のいきおいにはずみをつけた。そしてこれらアメリカから到来した外食産業は、いずれも「注文すれば、ただちに料理が提供される」という意味で「ファースト・サービス・フード (fast service food)」、略してファースト・フードとよばれるとともに、すぐに多様な和風の料理をとりこんでいく¹³。

なかでも、コンベヤーによって回転する皿のうえの寿司をカウンターでたべさせる方式¹⁴、注文後30秒以内にテーブルのうえにとどけられる24時間営業の牛丼などは、まさに日本のファースト・フードとして全国にひろがり、かつ、ひろく海外にまで進出するようになった。また、寿司やおにぎりや弁当などの場合は、もちかえり (= キャリー・バックあるいはテイク・アウトともよばれる) 専門の販売形態に分岐したり、さらに自動車にのったまま飲食サービスが受けられるドライブ・スルー方式が出現するようになった¹⁵。このようなファーストフードの流行と繁栄は、高度経済成長とともに、いちじるしく多忙

¹² マクドナルド・ハンバーガーは代表的なアメリカ風ファースト・フードである。その年間売上額は、1981 (昭和56) 年に600億円をこえ、総店舗数で303店をかぞえるにいたった。販売品目が各種のハンバーガーやコーヒー、氷菓子のマックシェイクなど、比較的安価なものばかりであることをかんがえれば、その販売力のつよさに、あらためておどろかされる。

¹³ 和風ファースト・フードのなかで、ひろく普及したのは弁当屋である。チキンカツやエビフライ、てんぷらなどを中心に、何種類かのおかずをあしらった弁当は、すぐたべられる簡便食である。食事サービスのためのスペースと人員が不要なので、生産コストもやすく、したがって販売価格もやすい。そのため、サラリーマンやOL、さらには専業主婦の昼食用の需要をあてこんで、オフィス街や住宅地周辺の商店街に、弁当屋の出店がめだつようになった。

¹⁴ おなじころからデパートや商店街などに、もちかえりの外食としてすしの出店がならぶようになった。これらの店では、大量の需要にこたえるために、しばしばオートメーションのまきずし製造機を導入する。食品加工の機械化の波は、もともと手づくりの味をたのしむはずのまきずしにまでおよんだ。

¹⁵ 自動車の普及がすすんだことで、自動車が「第2の住居空間」となった。ならば、ドライブをしながら、ハンバーガーやフライドチキンをほおぼることに、ふしぎはない。ドライブ・スルー方式の店では、入口でこのみの品を注文し、ぐるっと建物を一周した出口で料理をうけとる (つぎのページにつづく)。こうして客は、迅速な食事サービスをうけることができる。

となった現代日本人の食生活を、するどく象徴してきたといえる¹⁶。

なお、ファストフード産業は、その経営形態として、つぎにのべるファミリーレストランとともに、フランチャイズ型、ボランティア型、レギュラー型など、さまざまな型のチェーン店展開を採用する場合がおおい。それは、チェーン店展開をするほうが、仕入れや調理加工をはじめとする経營業務を本部や本部工場に集中させることによって、コストダウンや品質・サービスなどの均質化と水準維持が容易だからである。

さて、ファミリーレストランにつづいて普及した外食産業にファミリーレストランがある¹⁷。それは、ファーストフードが、「はやい、やすい」食事サービスをうりものとしたのにたいして、

「適切な価格で、そこそこおいしい食事を、くつろいだ雰囲気の中であたべたい」

とする家族づれや夫婦やわかいカップルなどの、いわば「たのしみとしての外食」をもとめる需要のうけ皿として、1977（昭和 52）年あたりから登場した。当時の世相がマイホーム主義¹⁸をめざすことによって、さらにすすんだ人口分布のドーナツ化現象に対応して、その立地は郊外住宅地である場合がおおく、店内のしつらえもフロアがひろく、インテリアにもおしゃれなくふうがこらされているといった特徴がある。

またその献立は、ハンバーグ、ステーキなどの肉料理を中心に、スープ、サラダ、ピザのほか、多様な洋風料理を網羅しており、従来は敬遠されがちであった魚介類のフライや

¹⁶ 自動車の普及が進行したことで出現した「飲食店」のあたらしい業態のひとつに、国道ぞいなどにみかけるようになった「24 時間営業の無人の自動販売機店」がある。コーヒーやジュース類からうどんやラーメンまでそろっていて、若者たちの利用がおおい。1980（昭和 55）年代には、「客にはなしかける自動販売機」も登場した。おなじ年の自動販売機の総数は 421 万台、年間売上額は 2 兆 5600 億円（1 人当たり約 2 万 3000 円）におよんだ（ただし、食品以外の自動販売機をふくめた数値）。

¹⁷ 高度経済成長以降、日本人の家庭生活における夕食を中心とした一家団欒の習慣は、かなりうすれた（この点については第 3 部第 1 章と第 2 章でふれる）。しかし、やっぱり家族は、ともにくらすなければならぬし、食事をともにすることは、その象徴でありつづける。しかも、やすくておいしいものがたべたい。こうした条件をみたすものとして、いわゆるファミリー・レストランでの食事がひろがるようになった。だからファミリー・レストランのメニューには、夫・妻・子どもたち、みんながよろこんでたべられる料理がとりそろえてあって、わかりやすい写真をそえたメニューがととのえられている。

¹⁸ 「マイホーム主義」は第 3 部第 1 章の主題のひとつになっている。

グラタンなどをふくめて、全体で 100~150 種におよぶのがふつうである。とくに週末や休日には、子どもづれの顧客でにぎわう店がおおい。

なお、農林水産省および外食産業総合調査研究センターの推計によると、1980（昭和 55）年における日本の外食産業の売上総額は、バー・キャバレーなどの風俗営業店をのぞいて、11 兆 2794 億円にたっするにいたっている。

料理情報の浸透と普及

インスタント食品にはじまり、ファースト・フードの普及によって日常化した、現代日本人の食生活の「簡便化」は、1970 年代なかばに出現したファミリー・レストランが人びとに受け入れられたことによって、「趣味化・豪華化」の契機をはらみはじめる。しかし、こうした趨勢は、みかたによる、すでに敗戦直後の昭和 20 年代に最初の兆候が観察されるのであって、それ以来の底流であったとみることもできる。

その根拠のひとつは、日常の食事にもことかくのが常態であった 1948（昭和 23）年に、第 2 次大戦後の家庭電化製品の第 1 号としてミキサーが登場し、その効用をといたアメリカの栄養学者ハウザー博士のベストセラー『若く見え長生きするには』に刺激されて、爆発的なヒット商品になったことについて、各種の調理用家庭電化製品が、急速に普及したことにみいだすことができる。なぜなら、これらの家庭電化製品の普及は、台所における家庭の主婦の家事労働の「簡便化」に役だつという理由だけではなく¹⁹、より豪華にたのしく、さまざまな料理をつくりたいとする日本の生活者の欲求にささえられてこそ、実現可能であったとかがえられるからである。

いまひとつの根拠は、1955（昭和 30）年前後から、さまざまな情報メディアをとおしてつたえられる多様な料理情報が、食事の「趣味化・豪華化」にたいする日本人の欲望と知識を刺激しつづけてきたことである。たとえば、1957（昭和 32）年になると、すでにその 4 年前からはじまっていたテレビ放送をつうじて、日本放送協会（NHK）が「きょうの料理」と題する料理番組を放映しはじめ²⁰、やがてこれに、民放各社が類似の番組企

¹⁹ この点については、すでに第 1 部第 2 章において論じた。

²⁰ NHK「今日の料理」は 1957（昭和 32）年いらいの長寿番組である。その視聴率のたかさから、首都圏のスーパーマーケットでは、「これが『きょうの料理』です」と、テキストどおりの材料一式 4 人分をそろえて販売するところまで出現した（1971 年当時）。家庭の主婦（つぎのページにつづく）

画をもって追隨する。また、日本放送出版協会では、NHKのテレビ番組とおなじ名称の雑誌『きょうの料理』を発行し、当初から主婦層の人気をあつめ、やがて1978（昭和53）年の末には、それが100万部をうりつくすベストセラー雑誌に成長していく。こうした状況のもと、テレビ番組の放映回数も1日3回にまで増加し、しかも、そのいずれもが5パーセントちかい視聴率を記録する人気番組となった。

それだけではない。1975（昭和50）年をすぎるところから、テレビの料理番組は、ただたんに料理の手順を提示して説明するだけのものから、おもしろさやたのしさを提供するために、さまざまな工夫をこらしたものと多様化していった。たとえば有名人のゲストが自慢の料理を披露して出演者全員が舌つづみをうつもの、調理のポイントをおわらいタレントのギャグのあいまにはさみこまれる娯楽色のつよいもの、おいしい料理を提供する店を探訪するものなどが登場して、たべることのたのしみが強調されるようになる。その結果、このころまでは主婦にかぎられがちであった料理番組の視聴者が、サラリーマンはじめ、独身の男性にまでひろがっていった。

さらに、テレビをつうじてひろく世間にしられるようになった料理指導の講師が主宰するものを中心として、調理師学校や料理学校が急速に発展しはじめる。これらのうち、調理師学校とは、多数の人に飲食物を提供する飲食店をはじめ、学校や病院などで調理業務にたずさわる専門の料理人を養成する学校である。そのため、教科内容も衛生法規・公衆衛生学・栄養学・食品学・社会・食品衛生学・調理の7科目をふくむ多様な授業が、1200時間にわたっておこなわれる。これを卒業すると、ヨーロッパやアメリカの高名なレストランへ修行にでかけることも不可能ではないというので、海外に夢をいだく多数のわかもの人気をよぶことになった。

いっぽう料理学校は、花嫁修行の女性や主婦などのアマチュアに、すぐに役だつ料理技術を、実践的にかつ手軽におしえることを目的とする学校である。そのため、教科内容も、学校ごとに個性をきそいあうかたちで、日本料理や西洋料理や中華料理などのコースをもっているもの、フランス料理やスナック、菓子のコースを区別しているものなど、さまざまなタイプの料理学校が林立した。

にとって、テレビの料理番組をとおしてバラエティーにとんだ料理をつくるたのしみを味わうメリットは、きわめておおい。

ちなみに、1958（昭和33）年には、調理師学校²¹と料理学校²²の生徒数は合計しても1万8000人にすぎなかった。それが10年後の1968（昭和43）年には、7万8000人にたっする。ただその後、これらの学校の生徒数は減少に転じ、1979（昭和54）年には4万7000人になり、そののち安定的に推移している。

なお、余暇開発センターの『余暇の需要に関する研究』〔1981年〕の指摘によると、対象をアマチュアに限定するかぎりにおいて、「料理教室・学校」は「テニススクール」とならぶ、もっとも将来のたかい教育サービス産業の分野であるとされていた。

「料理は趣味」の時代へ

こうした状況のもとでは、書籍や雑誌といった印刷媒体もまた、料理情報の提供に積極的になっていく。1965（昭和40）年以降、その直前に海外旅行が自由化されたこともあって、カラー写真と調理法をしるしたレシピを満載した、主としてフランス料理の豪華本が出版された。たとえばタイム・ライフ社の『世界の料理』、パリのコルドン・ブルー校校長の『現代フランス料理全書』、『ラールス料理百科事典』などの翻訳出版は、その一例である。さらに1970年代になると、日本の代表的な料理人の手になる『お料理しましょう（全4巻）』などが刊行され、「料理は趣味である」という認識がひろがっていった。さらに5、6年のちには、『プーさんの料理絵本』などが登場し、料理本は子どもむけの出版市場までもを席卷するにいたるのである。

それだけではない。料理情報というと、つい調理法がおもいうかぶが、けしてそれだけ

²¹ 調理師学校では、「コックの卵」たちが、純白のユニフォームと帽子、それに独特のネックチーフを身につけ、プロのシェフをめざして調理実習にはげむ。いまや日本の洋食調理技術は世界でも一流のものとなった（と筆者はかんがえる）。それは1972（昭和47）年に開催された第14回料理オリンピックに初出場した日本チームが金メダルを獲得して、世界の料理界をおどろかせたという事実にもしめされている。調理師の社会的地位も上昇し、大学卒男子をふくむわかものあいだで、調理師学校への進学志望者は着実に増加してきた。

²² 調理師学校とちがって料理学校では、カラフルな衣装とおもいおもいの割烹着を身につけた家庭の主婦や結婚まえの女性たちが調理実習をたのしんでいる。家族や、おりにふれておとずれる友人や知人に、おいしい家庭料理をサービスしたいというねがいとともに、教室での女どうしのおしゃべりやつきあいのたのしみが、料理学校の繁栄の一因となっている。

に限定されるわけではない。文化人や食通が執筆した食味随筆やエッセー、味のよい料理を提供する飲食店案内、さらには食物史や食物をめぐる文化論などもまた、料理情報のカテゴリーにふくめてかんがえるべきである。じっさい今日では、これらの出版物が、こまかい料理の手順や料理法をしるした、いわゆる料理本とともに書店の一角を占領している。

そのうえに料理情報を専門に提供する雑誌類がある。さききのべた『きょうの料理』をはじめ、あらゆる新聞や週刊誌、はては総合雑誌にいたるまで、料理情報をはじめ、食生活や食文化に関連した記事を掲載していない雑誌はめずらしい。こうした状況のなかで、ついに1978（昭和53）年には、東京に「料理書だけを専門店に販売する書店」が出現した。ここには内外の料理書4500点の在庫があり、料理の専門家のほか、主婦やわかい女性、食道楽の紳士などが、すくなくとも1983年ごろまでは多数おとずれていた²³。また、1980（昭和55）年前後には、「納豆スパゲッティのつくりかた」などの料理情報が、少年漫画雑誌の巻頭グラビアをかざるということがあったことも記憶にのこっている。

このようにみえてくると、われわれ現代日本人が、みずからの食生活・食文化、あるいは料理技術にかんして、それをよりゆたかに、しかも豪華なものに変容させようとしてきた情熱が、あらためてよくわかる。しかも、かつては第1部第2章でもふれたように、「ごきぶり亭主」とさげすまれないように、けして台所に足をはこばなかった成人男子までもが、食生活や料理にふかい感心をしめすようになってきた。1977（昭和52）年、わずか40人の会員で発足し、5年後の1982年には会員数を600人あまりにまでふやした「男子厨房に入ろう会」の急速な発足と発展²⁴、1979（昭和54）年の出版界においてベストセラーのひとつにかぞえられた『男の料理』の成功などが、このことをものがたる。つまり、現代の日本社会では、男たちもまた、週休2日制の普及などで増大した自由時間

²³ 1980（昭和55）年に東京で開業した「料理書だけをあつめた専門書店」においては、原書をふくむ世界中の料理関係書4500余冊が常備されていた。専門の調理師を相手に開店したつもりが、ふたをあけてみると素人の顧客が多数おとずれるようになった。開店当時は、一般にフランス料理関係の書物がよくうれたようであるが、その後、海外に赴任する友人や知人へのおくりものとして、さまざまな民族（エスニック）料理の書物がうれはじめる。なお、わかい女性はお菓子づくりの本、食通の紳士風は食味随筆やうまいもの案内の本などに、主たる興味をしめすという。

²⁴ 「男子厨房に入ろう会」では、ときに帝国ホテルの村上信夫常務取締役のような著名な講師をむかえ、「男のフランス料理」などと銘うって、たのしい雰囲気なかで、さまざまな料理実習をこころみる。

を利用して、趣味をかねた豪華な男の料理をたのしみはじめていたのである。

しかし、他方では、われわれ現代日本人が、みずからの日常生活における現実の食生活におもいをはせるとき、さまざまな情報メディアをとおしてつたえられる食生活・食文化や料理にかんする情報とのあいだに、相当の落差があることに気づかされる場合がすくなくない。その点で「男子厨房に入ろう会」の設立趣旨が、

インスタント食品やレトルト食品で荒廃した台所を再建し、わが家の味の復興と創造を！

と、たからかに宣言していることは、ある意味で示唆的である。さらに今なお、いわゆる「男の料理」のホンネの部分に、

「単身赴任したときに、こまらないように」

という、一種の哀切のねがいがこめられているようにみえることも否定できない。というのも、現代の日本社会に流通している食生活・食文化・料理情報のおおくには、しばしば、ただ「見聞する」ことによって、いわば「食への欲求」を代償的に純化するという役割をおびているからである。この点については、つぎの第2部第3章の末尾において、若干のコメントがくわえられる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表年代順。なお、本章の記述に必要な歴史上の事実をしめすために引用した雑誌の名称は、参考文献とはやや性格がことなるため、本文中の〔 〕にしるした）

- ・加藤秀俊、1977『明治・大正・昭和 食生活世相史（食文化の発見Ⅰ）』柴田書店
- ・昭和女子大学食物学研究室『近代日本食物史』（昭和女子大学）近代文化研究所
- ・高田公理、1983「食生活の簡便化と趣味化」『週刊朝日百科「世界の食べもの・日本編」（40）現代の食生活』朝日新聞社

第3章 日本におけるコーヒー飲用の100年¹

第1節 「文明ののみもの」としてのコーヒー

向精神剤（ナルコティクス）としてのコーヒー

熊倉 [1996 : pp.13-14] は、ふるい日本語の「のむ」という語について、概略つぎのようにのべている。

大和言葉の「のむ」は、液体、個体、気体から、得体のしれないものまでのむ、神にふれる（注：「祈る」にも「のむ」という訓がある）というように、かなり広い意味をふくんだ言葉であった。つまり日常的な世界から、非日常的な世界へトランス（移動）させる役割を「のむ」という行為はそなえていた。酒や茶やタバコや薬などをのみ、（神に）祈ることは、人の精神を日常から離れた非日常世界へ飛翔、転移させる役割をもっていた。

「人間の精神を非日常的な状態にみちびく効果のある飲食物や医薬品」は、一般にナルコティクス（向精神剤）の名でよばれる。地球上の諸民族文化は、かなり普遍的に、なにがしかのナルコティクスを、その文化要素にふくんでいる。

それらは、覚醒や睡眠、緊張や弛緩、酩酊や幻覚など、人間の精神にさまざまな作用をもたらす。なかでも、こんにち、酒・タバコ・コーヒー・紅茶などは、きわめてひろく普及している。その精神への作用は、一般に「酩酊」の名でよばれる。そして、酒による酩酊は「しめった酩酊」、タバコやコーヒーによる酩酊は「かわいた酩酊」とよばれて、区別されることがおおい。

なぜ人間はナルコティクスをもとめるのか。この設問にこたえるのは容易ではない。しかし、その背景に、たとえばゾウリムシの生殖行動に原初的に観察される「自己同一性の維持と主体的な変容」という、生命や文化が同時にはらんでいる、相互に矛盾した属性が

¹ 第2部第3章のもととなる論文は最初、1992（平成4）年5月17日から19日までの3日間、UCC コーヒー博物館の主催のもとに神戸において開催された「国際コーヒー文化会議」において、「缶コーヒー文化論」という表題のもとに口頭発表され、のちに高田 [1994] として公刊された。その後、加筆訂正をへて高田 [1996] として公刊されたものに、さらに加筆訂正をほどこしたのちに完成したのが、本章の論考である。

存在しているようにおもわれる。

周知のようにゾウリムシは、つうじょう細胞分裂によって増殖する。そこでは遺伝的な自己同一性が保障される。ところが、分裂をくりかえすか、生活環境が悪化すると、2匹の個体が「セックス」をする。つまり、一時的に他の個体と合体し、その遺伝情報を取りこむことによって生命力を回復する。ここには、生命現象一般に観察される、一方における「自己同一性＝アイデンティティの貫徹」と、他方における「他からの影響による変身＝メタモルフォーゼ」という、相互に矛盾した指向性が、ふたつながらにみとめられる。

それは、たんに遺伝現象だけでなく、とくに人間のぼあい、生理的現象からは外在化された文化的ないとなみにもあてはまる。おりにふれてもよおされる年中行事や通過儀礼、日常生活から離脱して異界をめざす旅や旅行、異民族文化の受容などには、いずれも、これら相互に矛盾した作用と効果が期待されている。ナルコティクスをもちいることによる精神の変容もまた、これらに似た作用への個別的な期待だといえる。

ところで、覚醒した意識を酩酊にさそうナルコティクスの使用は、人間を社会規範から逸脱させる危険性をはらんでいる。そのためにナルコティクスは、社会や文化にとってプラスとマイナス、いずれもの結果をもたらす両義的（アンビバレント）な意味をもつ。酒が一方で「百薬の長」とよばれ、他方で「気がい水」とみなされるのは、ときと場合によって「のぞましい効果」や「のぞましくない効果」をもたらすからにほかならない。

そのためであろう。ナルコティクスの使用にさいしては、共同体の規制が介入する場合がおおい。たとえば昔の日本の村落共同体において、酒をのむ機会は、①あらかじめ日時と場所をさだめ、②おなじ共同体に属する複数の人びとがあつまり、③彼らが共有する信仰の対象＝神をまつり、④みんなで御馳走をたべながら、⑤かたり、うたい、おどり、たのしみながら、⑥参加者が（かりそめにでも）ひとつ心につながる「ハレの行事」の機会にかぎられていた。そこには共同体の規制が関与していたのである。

こうした機会にもちいられるナルコティクス（向精神剤）は「一種の薬」であったともいえる。ところが「薬としてのナルコティクス」は一般に、時間の経過にともなって、やがて一種の「嗜好品」となり、さらには「常用品」としての性格をあらわにしめすようになる。茶やタバコなども、日本に到来した当初は「万病の薬」であった。それがまもなく嗜好品から日用品へと、その役割を変化させていった²。このことは、この小論が考察しよ

² たとえば茶は、平安時代初期に入唐僧によって、はじめて日本につたえられ（つぎのページにつづく）

うとする「コーヒー」にもあてはまる。

日本に到来する以前のコーヒー

飲料としてのコーヒーの原料になる植物は、アラビアコーヒーノキのほか、コンゴコーヒーノキ、リベリアコーヒーノキなど、いくつかの種に区別される。ただ、世界生産の90%はアラビアコーヒーノキがしめている。その原産地はエチオピアである。ここにはふるくから、日本の茶道に似た「カリオモン」とよばれるコーヒー飲用の儀式があった。儀式のまえに香をたき、女性がそれをつかさどる。カップにのこったコーヒー滓でうらないをすることもある。つまり、もともとコーヒーはエチオピア文化の一要素であった。

それがアラビアにつたわり、イスラム教の神秘主義的な一派であるスーフィズムによって「ねむらずに、いのる」ために重用される。15世紀には「カフワ」とよばれて、ひろく普及した。その覚醒効果は、メッカのカーバ神殿のかたわらにあった「ザムザムの聖水」にも匹敵するとされたという。ただし、カフワという呼び名は、それまでは「白ワイン」の意味にもつかわれている。しかも、みたところ煤煎したコーヒー豆は、『コーラン』がたべることを禁じてきた「炭」に似ている。これらが正統的なイスラム教の信者たちの神経をさかなでした。一時的にはあったが、コーヒーはイスラム世界で敵視されることになる〔臼井、1992：pp.24-31〕。

しかし、おしゃべりをしながら飲むコーヒーの魅力はすてがたい。16世紀のアラビア諸地域において、大都市周辺の風光明媚な場所で「コーヒーの家」が営業をはじめると、「公の世界」からも「私的な家族」からも、男たちが解放感があじわえる場所として、おおいににぎわったという。

それが17世紀、市民社会を成立させつつあったヨーロッパにつたわった。1652年、ロンドンに最初のコーヒー・ハウスが開業すると、都市的社交をもとめる市民が多数つどう

たとされる。しかし、喫茶の習慣がひろがるのは、12世紀末に禅僧の栄西が茶の木の種類をもちかえってからである。その栄西が『喫茶養生記』に「(茶は)養生の仙薬、延命の妙術」であるとするしているように、最初は「医薬品(ないし、それにちかいもの)」と認識されていた。それが室町時代以降の茶の湯の発展などにより「嗜好品」に変化し、今日では「常用品」になった。もっとも、その時期は比較的小さいとみるのが適切であろう。明治時代には茶が、生糸や絹織物と並ぶ重要な輸出品の地位を占めていたし、その輸入量が輸出量をうわまわるのは1960年代にまでずれこんでいるからである。

ようになる。その数は四半世紀後に3,000軒、18世紀初頭には8,000軒をかぞえた。それは同時に、世界中に交易のためにでていた大英帝国の船舶の状況をめぐる情報を交換し、相互にたすけあう保険業、それにかんする情報をつたえる新聞という新しいメディアの揺籃ともなる。

ところで、ロンドンのコーヒー・ハウスにあつまった客のおおくは、すでに近代をよびよせる革命を体験した市民としての自覚に目ざめつつある男たちであった。彼らは、妻や家庭から解放されて、そこでの社交にうつつをぬかした。その結果、女性たちの反感をかうことになり、やがて家庭では女性たちをまじえて、コーヒーのかわりに紅茶をのむ習慣がひろがり、定着していった。

これにたいして、いまだ革命前のフランスにつたわったコーヒーは、ルイ王朝のサロンにうけいられる。そこではコーヒーが、男女の貴紳をまじえた宮廷の社交に奉仕した。それが市街地にすこしずつにじみだし、フランスに典型的なカフェの文化をうみだす。おなじコーヒーが、イギリスとフランスでは、ことなった運命をたどったのである。

だとすれば、アメリカにおけるコーヒーにも言及しておくべきであろう。周知のようにイギリスの植民地であった時代のアメリカの家庭には、紅茶をのむ習慣がひろく定着していた。ところが、紅茶のたかい関税にたいするいかりに端をはった独立戦争（1766年）の結果、今度はコーヒー飲用の習慣がひろがっていく。

それだけではない。「コーヒー栽培は一定の資本の蓄積を前提にしてはじめて可能であり、その意味ではコーヒーという商品は最初から資本と歩みをともしする必然性が刻印されている」〔臼井、前掲書：p.41〕。こうしてみるとコーヒーは、文字どおり「文明ののみもの」であるといえる。あたらしい都市的社交や近代産業の揺籃となり、近代国家の革命や独立にふかく関連するとともに、消費地では生産できず、植民地の温帯や熱帯で生産され、ながい距離を輸送されたのち、ヨーロッパではじめて消費されたからである。

第2節 日本におけるコーヒー飲用の100年

「特別なのみもの」としてのコーヒー

「文明ののみもの」としてのコーヒーは当初、日本人に「特別なのみもの」としてうけいれたとおもえるふしがある。たとえば約30年前、筆者は京都の街の片隅でちいさな酒場を営業していたが、ここをおとずれる酒のみの客たちは、しずかにコーヒーをのみ

ながら、男と女が仲むつまじく話をしている風景が大きらいであった。やや極端に言えば、

「コーヒーをのんで覚醒するなど、だんじてゆるせない。コーヒーは敵だ」

酒の「しめった酩酊」とコーヒーの「かわいた酩酊」という対比には、それなりの意味が、かくされていたといってもよい。ただし、泥酔のはての夜があけると、彼らもまたコーヒーを必要とした。頭をすっきり覚醒させて、あらためて夕方からの暴飲・泥酔にそなえるためである〔高田、1988：pp.86-87〕。

いまひとつ、かつてコーヒーは自分でいれてのむより、喫茶店でのむほうが格段に美味であった。理由のひとつは、ちいさなピッチャーにはいった濃厚な乳製品の生クリーム（注：現在は植物油を界面活性剤で乳化したものがおい）にある。子供のころ、ときにつれていってもらった喫茶店のコーヒーの味は、わすれがたい記憶となって、筆者の脳裏に鮮明にのこっている。それに、たいてい喫茶店には、なにがしかの音楽がながれていた。クラシックやジャズなどを、当時としては最高級の音響装置でかかせてくれる喫茶店が、1970年ごろまで日本の都市には、たくさん営業していたのである。

ただし、個人的には「夜の音楽であるジャズとコーヒーのくみあわせ」に、なじみにくいものを感じる。たとえばアメリカ人が、ジャズをききながらのむのは酒類である場合が、圧倒的におい。ほんらいジャズは「しめった酩酊」にこそふさわしい。それが日本では、コーヒーの「かわいた酩酊」にむすびついた。その背景には、日本人にとってのコーヒーが、1970年前後まで、ある種の特別な「ありがたみ」をはらんでいたという事情があるのではないかとおもわれる。

このことは、物理学者であるとともに随筆家でもあった寺田寅彦が、吉村冬彦〔1933：pp.112-117〕の筆名をもちいて執筆した「珈琲哲学序説」によみとれる。そこでの記述によると、彼は子どものころに「一種の薬」としてミルクをのまされたのだそうである。ところが、ミルクだけでは、くさくてのみにくいので、医師がコーヒーの粉をいれてくれた。それ以来、彼にとってのコーヒーは、どこか特別なのみものになる。いわく、

凡てのエキゾチックなものに憧憬をもつて居た子供心に此の南洋的西洋的な香気は未知の極楽郷から遠洋を渡つて来た一脈の薫風のやうに感ぜられたものゝやうである。……（長じてからもコーヒーだけは）引き散らかした自宅で飲んでもおいしくない。……矢張り人造でもマーブルか、乳色硝子の卓子の上に銀器が光つてゐて、一輪のカーネーションでも匂つて居て、さうしてピユツフエにも銀とガラスが星空のよういきらめき、夏なら電扇が頭上に唸り、冬ならストーブがほてつて居なければ正常のコーヒーの味は出ない。

また、仕事がゆきづまってどうにもならないとき、しかるべき場所でコーヒーをのむと、
 コーヒー碗の縁が正に唇と相触れやうとする瞬間に、ぱつと頭の中に一道の光が流れ込
 むやうな気がする。と同時に、やすやすと解決の手掛りを思付くことが屢々あるやうであ
 る [p.116]

ともいう。この文章の著者にとって、コーヒーが「特別なのみもの」とみなされていた
 ことはうたいがいあるまい。

コーヒーの到来から第2次大戦の終結まで

そのコーヒーに、はじめて日本人がであったのは17世紀なかば、鎖国がはじまったば
 かりの長崎出島のオランダ商館であったとされる。ただ、それを実際に口にしたのは、役
 人や商人や遊女など、ごくかぎられた人びとであった。

これについて、たしかにコーヒーをのんだ最初の経験の記録を、1804（文化元）年に長
 崎奉行所に派遣された随筆家の太田蜀山人が『瓊浦又綴』^{じゆうぽうえい}にしるしている。いわく、

紅毛船にて〈カウヒイ〉というものを勧む。豆を炒りて粉にし、白糖を和したるものな
 り。焦げくさくて味ふるに堪えず。

こうした記述を勘案すると、日本でコーヒーが一般にひろがり始める時期は、19世紀
 のおわりだとかんがえるべきである。つまり、「はじめて18トンのコーヒーが輸入され
 た」という記録がのこる1877年あたりをさかいに、日本はコーヒー消費国になりはじめ
 る。そして1888（明治21）年、東京の下谷黒門町に「可否茶館」^{かふひーちやかん}が、コーヒーを主力商
 品とする喫茶店の第1号として開店したのであった。

こうなると、あたらしいものがだいすきな、われわれ日本人のやることははやい。明治
 中期以降、フランスふう「カフェ」と名づけられたコーヒー店の開店があいつぐ。浅草
 の「ダイヤモンドコーヒー店」、大阪の「カフェ・キサラギ」、銀座の「カフェ・パウリ
 スタ」や「カフェ・プランタン」「カフェ・ライオン」など、ひろく名をしられた店がふ
 えてくる。

それが大正年間における第1次大戦後の好景気と、いわゆる大正デモクラシーのモダン
 で自由で都市的な風潮のなかで、コーヒーをのみながら社会や文学や芸術を論じる「サロ
 ンのような場」を提供する。さきに紹介した寺田寅彦（=吉村冬彦）のコーヒー体験も、
 だいたいこの時代に一致するとみてよい。

それは、「コーヒーハウスの歴史がイギリスの風俗、道徳、政治の歴史であった」とい

われた17、8世紀のロンドンにおいてコーヒーハウスがはたし、フランス革命の前後に本格化したパリのカフェがはたした「政治家や芸術家や文化人のサロン」としての役割に、よく似たものであった。

ただし、昭和時代が始まると、日本のカフェは、夜に女性が接待して酒をのませる一種の風俗産業に変化する。そして本来のカフェは「純喫茶」と名をかえて、急速な都市化の影響によって増加するサラリーマンに、都市的ないこいとくつろぎを提供する、みぢかな社交場の地位を確立していく。「それは去年のことだった……」という歌詞ではじまる流行歌「ちいさな喫茶店」が一世を風靡した時代のできごとであった。

そして、戦前と戦後を通じて日本経済が、もっともたかい成長率をしめした1937（昭和12）年には、年間約850トン、14万袋のコーヒーが輸入されるにいたる。ところが、日中戦争から太平洋戦争へと拡大していく戦時体制のもとでは、コーヒーをのむ習慣がいったん、ほぼ完全に逼塞した。それがよみがえるには、戦後も1950年あたりまでまたねばならなかった。もちろん、それ以前にも、大都市の焼跡の闇市にはコーヒーをのませる店が出現してはいた。しかし、正式にコーヒーの輸入が再開されるのは1950（昭和25）年にまで、ずれこんだのである。

喫茶店とインスタントコーヒー

第2次大戦後、コーヒーの飲用が再開された時期は、ようやく日本が戦後の復興を本格化しようとする時期でもあった。1956（昭和31）年、『経済白書』は「もはや戦後ではない」と宣言する。ここにきて、ようやく戦前の1937（昭和12）年の水準にまで日本の経済社会が復興した。そしてその後は「奇跡」とまでよばれた、怒涛のような高度経済成長が進行していく。

その結果、最初はずこしずつ、やがては大量に、農村人口がふるさとの村をはなれて、東京をはじめとする大都市に移住しはじめた。いうまでもなく、そのほとんどが企業につとめるサラリーマンやOL、工場労働者などの雇用者になっていった。そしてコーヒーをのませる喫茶店は、戦前にもまして彼ら都市生活者に、たまさかのいこいとくつろぎと社交の場を提供することになった。

このころ、つまり1960年前後の週刊誌を参照すると、「喫茶店のラッシュ・アワー」[A、1959：p.24]、「有史以来のコーヒーの飲み量です」[坂崎ほか、1962：p.38]などの記事が非常におおいことに気づかされる。コーヒーの消費量が、毎年1000トンずつ

増加し、喫茶店の数も全国で10万軒にちかづいていく。しかも、東京や大阪などのビジネス街の喫茶店は、昼やすみと仕事がおわる夕方に満員になった。たとえば、

昼食を終わったサラリーマンやBGたち（現在の言葉でいえば、OLたち）がどっと押しかける。それはラッシュ・アワーの車内風景の再現だ〔A、前掲：p.24〕。

このように第2次大戦後の日本でも、コーヒーをのむ習慣は、まず喫茶店からひろがっていった。それにともなって、じつに多彩な喫茶店が出現する。純喫茶やコーヒー専門店はもとより、クラシック音楽を専門にきかせる名曲喫茶、ジャズを専門にきかせる喫茶店などである。そうした喫茶店の多様化のはてに、たとえば1979（昭和54）年の京都には、「超ミニスカートをはいた女性が、下着を身につけずにウェイトレスとしてサービスするノーパン喫茶」が出現し、日本全国にひろがるといった場面さえ現出した。

ほかに、ふしぎな話はたくさんある。1975（昭和50）年、加古川市には「1杯10万円のコーヒー」が登場したという。ここでは、18世紀フランスの、こまかい細工をほどこした銀製コーヒーわかしでブルーマウンテン・ブレンドをいれ、イギリスのスポード窯で1820年に焼成された草花紋のポーンチャイナのカップで、それをのませてくれたという〔無署名、1975：p.142〕。なお、カップは記念に贈呈されたようであるが、1杯10万円のコーヒーに客がついたという事実には、さきに示唆した「日本人のコーヒーへの特別なおもいいれ」がうつしだされているのではなかろうか。

そして1970（昭和45）年、大阪・千里丘陵で日本最初の「万国博覧会エキスポ'70」が開催されると、いよいよ絶頂をきわめる日本経済の高度成長のもと、奇をてらわずに本格的なレギュラーコーヒーを提供する専門店がブームになった。コーヒーの味それじたいを大切にする人びとがふえたということになる。こうして1980年代前半にむけて、喫茶店数が最大になる時期をむかえる。じつ、この時期には喫茶店の店舗数は16万店あまりにまで増加し（図2-3-1）、その総売上額は2兆円ちかくにまでたったのである。

こうして喫茶店がふえてくると、人びとは家庭でも手軽にコーヒーをたのしみたいとかがえはじめる。こうした需要にこたえたのが、1960年前後に輸入が自由化されたインスタントコーヒーであった。それ以前、インスタントコーヒーは「舶来物のイメージ」が濃厚な、高級かつ高価な商品だとみなされていた。それが自由化によって、いっきよに身ぢかな商品に変化したのである。しかも、インスタントラーメンが発売された1958（昭和33）年ごろをさかいに、緒についた経済の高度成長の影響で、急速に多忙になりはじめた日本人のあいだに、手軽なインスタント食品の人气がたかまりはじめた。こうした時代の

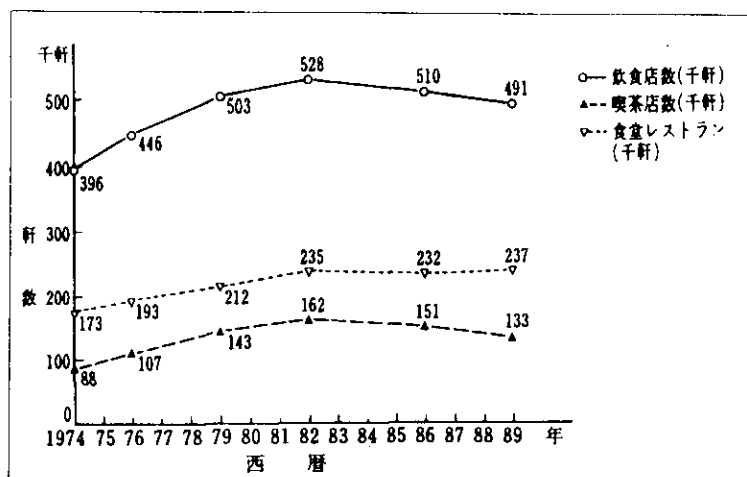


図 2-3-1 喫茶店などの件数の推移

(資料：通産省『商業統計表』)

風潮がインスタントコーヒーの普及に拍車をかけた。

そこでおもいだすのは、インスタントコーヒーの最初の発明者が日本人の加藤某であったという事実である〔加藤、1977：pp.107-108〕。彼はコーヒー抽出液の水分を真空容器内で蒸発させものに「ソリュブル・コーヒー」の名前をつけて、アメリカで1901年に発売している。もっとも、現在のインスタントコーヒーは、のちにアメリカ人がべつつの製法によって特許を取得したものである。とはいえ、それにさきだち、よく似た製法によって類似の製品を発明した人物が日本人であったという事実は、われわれの「お手軽ごのみ」を感じさせて興味ぶかい。

さて、手がるにコーヒーがのめるということになると、今度は、

「すこしばかり手がこんでも、より本格的でうまいコーヒーがのみたい」

こり性とでもいうのか。これもまた、われわれ日本人の、もうひとつべつつの側面である。インスタントコーヒーに触発されて、コーヒーにたいする需要が増大したのにもなって、コーヒー液の浸出方法やコーヒーの飲用方法が多様化していく。とくに1970年代、コーヒー専門店の増加にもなって、以前はインスタントコーヒーにかぎられがちであった一般家庭にもレギュラーコーヒーが着実に普及していった。

そこで「種類別コーヒー消費量の推移」を示した図 2-3-2 を参照すると、インスタントコーヒーの消費量は、1970年代の年間2万トン前後が、1980年代には2倍の4万トンに増加し、1988（昭和63）年にピークを記録したあと、横バイないしは減少傾向をたどって

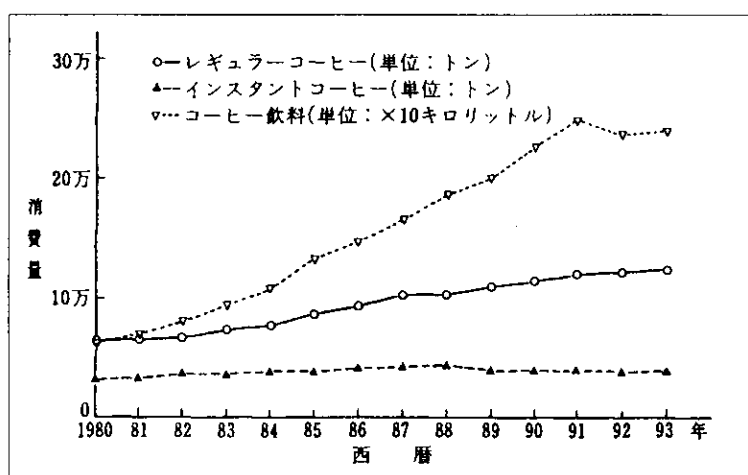


図2-3-2 種類別コーヒー消費量の推移

(資料：全日本コーヒー協会『コーヒーの需要動向に関する基本調査』)

いることがわかる。それにたいしてレギュラーコーヒーは、1970年代の5万トンから1980年代に着実に増加し、1990年代には12万トンをこえて、なお増加の傾向をしめしている。

その背景には、電気式の自動コーヒーメーカー、それにコーヒーミルをそなえたものなどの普及がある。これらコーヒーメーカーは、1990(平成2)年において、およそ「4世帯に1台の割合」で普及している。それが全国規模の数字であることをおもうと、おどろくべき普及率のたかさというべきであろう。

量だけではない。食生活一般をめぐって「おいしくて個性的なものが食べたい」という欲求がひろがるにつれ、コーヒーにもそれと同様の質がもとめられるようになった。たとえばブルーマウンテンやエメラルドマウンテンやクリストバルなどの高級コーヒー、カカオやマカデミアナッツのかおりを付加したフレーバーコーヒーなどが注目をあつめるようになり、あわせて「炭やきコーヒーがおいしい」「高温高圧の蒸気でいれたエスプレッソがこのみだ」などという人びとが増加してきた。

こうしたうごきが、たがいに刺激をおよぼしあうことで、日本のコーヒー消費量は増大の一途をたどり、こんにちではフランスをおいこし、アメリカとドイツにつぐコーヒーの大量消費国に位置づけられるにいたっている。

第3のチャンネル——コーヒー飲料

ところで、いまひとつ注目すべきは、アルミヤスチールのカン、ガラスびんや紙パックなどの容器にいて販売される、いわゆる「コーヒー飲料」である。これらの消費量はレ

ギュラーコーヒーのそれを凌駕して増加しつづけている。その原型は、しずかにのみつづけられてきた「コーヒー牛乳」である。さきに寺田寅彦が、牛乳をのみやすくするために医師にコーヒーをいれてもらったエピソードを紹介したが、筆者じしんにも、よく似た経験があり、それがコーヒー飲料の普及という現象につながっているようにおもう。

戦後まもない1950年前後の小学校給食には、ガリオア・エロア資金で導入された脱脂粉乳が多用された。これは非常にまずいうえに、タバコのヤニのようなにおいをはなつので、のむときには鼻をつまんでのむ子どもがすくなくなかった。ところが、ときにそれにコーヒー味のついているときがある。すると、おなじ牛乳とはおもえないほど、おいしく感じられる。コーヒーとは、なんと不思議なのみものであることかとおもわされたものである。

これとおなじころ、砂糖で味つけたピンづめのコーヒー牛乳が市場にでた。近隣のパン屋で菓子パンといっしょに、そのコーヒー牛乳をかってきて朝食をすます。それが朝食のたのしみであった。親や兄弟につれられていく映画館や旧国鉄の駅の売店でねだったのもコーヒー牛乳である場合がおおかった。喫茶店でのむコーヒーやインスタントコーヒー以上に戦後の日本人が、もっとも身みぢかに、かつ手軽にコーヒーの味に接したのは、牛乳ピンにつめて販売されていた「コーヒー牛乳」だったのである。

ところが、ガラスびんには、われやすく危険だという欠点がある。じじつ1965（昭和40）年前後、旧国鉄の駅の売店で販売されていたコーヒー牛乳のガラスびんが、列車の窓からなげすてられて人身事故をひきおこすという事件が発生した。そのため旧国鉄は、ピンづめのコーヒー牛乳の販売を禁止する。ところが、コーヒー牛乳そのものの人気がおとろえることはなかった。そこで1969（昭和44）年、UCC上島珈琲が世界最初で日本特有の「缶コーヒー」を発売することになる（UCCコーヒー博物館³・館長の諸岡博熊氏の話による）。

それが翌1970（昭和45）年、春から大阪千里丘陵で開催された日本最初の「万国博覧会 エキスポ'70」において爆発的な人気をあつめた。これをきっかけにして喫茶店と家庭にくわえ、どこでも、いつでものめる「コーヒー飲料」が、名実ともにコーヒー普及の第3のチャンネルを形成することになった。そしてこんにち、減少しつづけるインスタント

³ 神戸市のポートピア・アイランドにある。コーヒーの歴史や文化にかんする興味ぶかい展示がおこなわれている代表的な企業博物館のひとつである。

コーヒー需要にたいして、これらコーヒー飲料は、レギュラーコーヒーを凌駕するいきおいで増加しつづけるコーヒー需要をささえている。

なお、その過程では、かつて日本人のコーヒー需要の増加を先導した喫茶店が、1980年代前半をピークにして、あきらかに減少傾向に転じる（図2-3-1および図2-3-3）。

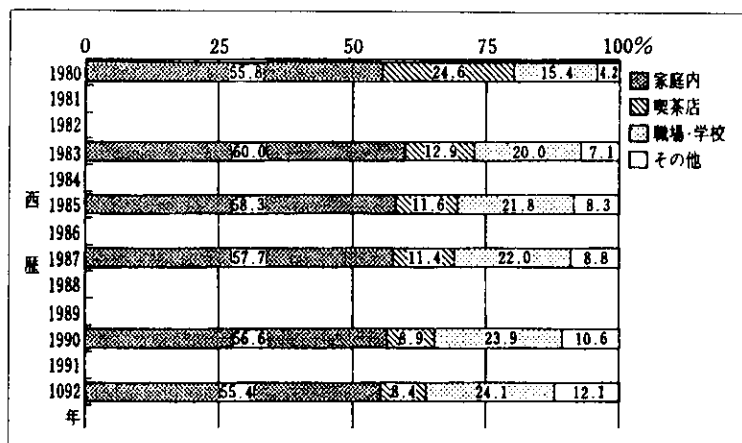


図2-3-3 コーヒーの飲用場所別比率の推移

(資料：図2-3-2に同じ)

その背景には、これとおなじ時期に、いわゆる「バブル経済」が頂点にたっし、大都市を中心として地価が急騰したために、客単価の比較的やすい喫茶店の経営が困難になったという事情があるようにおもわれる。同時に、どこでも、いつでも簡単にコーヒーがのめるようになったことにくわえて、人びとの日常的な社交の様相、それにたいする嗜好の変化が影響をおよぼしているといった事情が関与しているようにおもわれる。ただし、ここでは、そうした事実をのべるにとどめ、その解釈については他日を期したい。

第3節 コーヒー文化の現在——むすびにかえて

こうして「日本におけるコーヒー飲用の100年」と題した報告が、いちおう完結する。そこから、いったい、どのような特徴や傾向がよみとれるのか。

まず第1は、日本のコーヒー飲用の歴史に「簡便化と高度化（＝趣味化・高級化・豪華化）」という正反対の傾向が、ふたつながらにつらぬかれていることである。とくに第2次大戦後は、喫茶店の増加に刺激されて「簡便な」インスタントコーヒーが普及する。と

ころが、やがて需要の中心は「より高級な」レギュラーコーヒーにうつっていく。ただし、他方では簡便そのもののコーヒー飲料の需要が増加し、しかし、それにも現在では「よりレギュラーコーヒーにちかい高品質」の味わいがもとめられるようになっている。

第2は、1980年代なかば以降の「喫茶店の凋落」と「コーヒー飲用場面の多様化」である。その背景には、大都市を中心とした地価の異常な値上がり、簡単にレギュラーコーヒーがいれられるコーヒーメーカーの家庭への普及、人びとがもとめる都市的社交への欲求の変化などが作用しているとかんがえられる。

ついで第3は、コーヒー全般の需要の増加のかたわらで、それ以上に増加するコーラや紅茶をはじめとする、その他の清涼飲料の需要の増加である。そこには飲料への嗜好の変化や多様化がよみとれる。ただ、個人的な見解をのべれば、コーヒー用の「生クリーム の代用品＝界面活性剤で乳化した植物油」が、喫茶店のコーヒーの味をいちじるしく低下させたことが、こうした傾向に拍車をかけているのではないかとおもう。

そして最後に、コーヒーがたどる未来的な運命を展望すると、今後いったい日本人は、どのようなタイプの「酩酊」をもとめることになるのかという問題がおもいだされる。それは、酒に代表される「しめった酩酊」なのか、タバコに代表される「かわいた酩酊」なのか、それとも、そのいずれともことなる「あたらしい酩酊」なのか。社会生活の多忙化とそこでの軋轢や葛藤が解消しないかぎり、なにがしかの「酩酊」への需要が逼塞することは、けしてあるまい。同時に、かつては「向精神剤（＝一種の医薬品）」であり、やがて「嗜好品」となり、現在ではすっかり「常用品」となったコーヒーに、いったい人びとは、なにをもとめているのかという点にも興味はつきない。

このあたりに、コーヒーをめぐる現代的な興味の焦点が存在している。

【参考文献】（著者のアルファベット音順、同一著者の著作は発表順）

- ・ A、1959「あなたはコーヒーを飲みすぎる？」『週刊サンケイ』（7月19日号）
- ・ 加藤秀俊、1977『明治・大正・昭和 食生活世相史（食文化の発見Ⅰ）』柴田書店
- ・ 熊倉功夫、1996「『のむ』文化」（熊倉功夫・石毛直道・編）『日本の食・100年く のむ〉食の文化フォーラム』ドメス出版
- ・ 無署名、1975「一杯十万円という破格のコーヒー」『週刊大衆』（2月6日号）
- ・ 高田公理、1988『酒場の社会学』PHP研究所
- ・ 高田公理、1992「缶コーヒー文化論」（UCCコーヒー博物館・編）『コーヒーという

文化（国際コーヒー文化会議からの報告）』柴田書店

- ・高田公理、1996「日本におけるコーヒー飲用の100年」（熊倉功夫・石毛直道・編）『日本の食. 100年〈のむ〉（食の文化フォーラム）』ドメス出版
- ・臼井隆一郎、1992『コーヒーが廻り世界史が回る——近代市民社会の黒い血液』中央公論社
- ・吉村冬彦、1923「珈琲哲学序説」『経済往来』（2月号）
- ・坂崎担ほか、1964「週刊談話室——珈琲、香飛、コーヒー」『週刊朝日』（1月26日号）

補論 食生活・食文化をめぐる「情報（産業）化」の諸相¹

いうまでもなく第2部の本来の目的は、日本における食生活・食文化の劇的な変容のあとを、20世紀という時代を中心にひるがえることにある。しかし、第1部第2章において筆者は、時代をつらぬく生活文化と世相の変化の方向を「情報（産業）化」という[★]概念[★]でとらえる論考を展開した。ではそれは、日本における食生活・食文化の劇的な変容にもあてはめられるのか。そこで、第2部全体の記述と考察をおぎなうために、補論として「食文化をめぐる『情報（産業）化』の諸相」について考察しておく。

「知識情報」と「感覚情報」²

本補論の目的は、人間の日常生活に必要な不可欠な「食」に関連する「情報（産業）化」を考察することにある。それは、つぎのふたつの側面にわけてかんがえることができる。

第1は、たべもの自体の、みだ目のうつくしきさや色や形、味やかおりなど、人間が五官を総動員してうけとる「情報」である。そこでの情報は、人間の心と体をよろこばせ、たのしませるマッサージ性が卓越する。それは、食をめぐる「感覚情報」とよばれるのがふさわしい。

それにたいして、食にかんする多様なメッセージをつたえる「知識情報」が区別できる。こんにち、それは書物や雑誌や新聞、ラジオやテレビなどのマスメディアのほか、料理学校や日常会話のなかで話題にのぼせられる機会がふえている。そこで、本補論の第1節においては「食をめぐる知識情報化」について考察する。筆者のしるかぎり、日本ほど食にかんする知識情報が大量に流布している地域は、世界でもまれだとおもわれるからである。その背景には、日本の食文化のいちじるしい多様性が関与している。

¹ 第2部補論のもととなる論文は、高田 [1997] および高田 [1998] として公刊されている。ここでは、それらのうちから、第2部の第1章および第2章の内容と重複することのない部分を取りだして編集・執筆した。

² ここでいう「知識情報」には「メッセージ型の情報」が、「感覚情報」には「マッサージ型の情報」が、それぞれ意味の同等性によって対応しているとかんがえてもよい。ただ、文章表現のうえで、第2部補論においては、第1部第2章とは、ややニュアンスのことなる単語をもちいることにした。

第1節 食文化の日本の特徴とその「知識情報化」

食をめぐる知識情報の量的・質的増大の文化的背景

日本の食文化の多様性に関連して最初におもいだすのは、青森市郊外で発掘され、人びとのつよい関心をあつめている、2000年以上もむかしの縄文時代に入びとがくらしていた三内丸山遺跡である。これまで縄文時代といえば、せいぜい

「小動物の狩猟、魚介や木の実の採集などによって、かろうじてくいつないでいた、まづしい時代」

というイメージがつよかった。ところが、三内丸山遺跡の発掘調査の結果、こうした縄文イメージが根底からくつがえされた。現在からかぞえて5500年まえから1500年ものながいあいだ、たしかに人がすんでいた広大な遺跡からは、いちじるしく多様、かつ大量の食材がみつまっている。縄文人たちは、食生活にかんするかぎり、相当程度にゆたかな生活を享受していたのである〔岡田ほか、1996〕。

たとえば主食には、クリやクルミのほか、ナラなどのドングリ、くわえてヒエやアワ、さらにはコメをたべていた形跡がある。なかでも、たとえ開始されていたとしても、従来は幼稚な段階にとどまっていたとされてきた農業が、約500人がすんでいたと推定される集落の規模から、かなり高度に発達していた可能性がでてきた。

それだけではない。出土品のなかには、副食に供したのであろうノウサギやムササビ、シカやイノシシなどの獣の肉、さまざまな貝類のほか、サケ、マグロ、マダイ、ヒラメ、ブリ、ニシン、サバなどの魚、マメ、ヒョウタン、ゴボウ、エゴマといった野菜、甘味料のヤマブドウやハチミツ、香辛料のキハダ、シソ、サンショウ、さらに酒づくりにもちいたと推定されるニワトコなどが多数ふくまれている。しかも土器や調理用具などから、肉と野菜のポトフ、魚のすり身料理、パンケーキなどの料理がおこなわれていたらしい。つまり、三内丸山の縄文人の食卓は、想像以上にゆたかなものであった。それを何人かの考古学者や民俗学者は「五つ星レストラン」にたとえたりしている〔小山ほか、1996〕。

周知のように、日本で本格的にコメの栽培がはじまるのは、縄文時代のあとの弥生時代である。しかし、すでにそれ以前の日本列島にも、多種多様な食材にささえられる、ゆたかな食文化が成立していた。おお昔から、この列島には、なんでもたべる雑食の民がすみついていたということであろう。

江戸時代に本格化する食の知識情報化

現代につながる日本文化の原型が、かたちをととえたのは16世紀の室町時代であるとされる。それを基礎にして、17世紀に江戸という当時の世界で最大規模の都市が成立する。その人口は18世紀なかばで約80万人をかぞえた。これだけ多数の人間が、せまい都市空間でともに生活するには、きわめて高度な社会システムが必要だったはずである。

その江戸のまちで1643（寛永20）年、『料理物語』という書物が出版されている。そこには魚90種、鳥18種、獣7種、青物77種の料理素材が紹介され、それらについての解説が付されている〔平田、1991：pp.43-55〕。日本人特有の、おどろくほど多様で精密な食材のカテゴリー区分だというほかない。

それというのも、たとえばアメリカ人に、

「昨夜は、なにをたべた？」

と質問してみるとよい。かりにマグロをたべたのなら、たぶん答は

「シーフード（海産物）」

である。

「もっとくわしく」

と、といつめても、せいぜいが、

「フィッシュ（魚）」

粗雑というか、大雑把というか。まことにたよりない。

『料理物語』とあい相前後して出版された、諸国の名産品を紹介した書物に俳諧書の『毛吹草』がある。現代なら、さしずめ『一村一品名鑑』といったところであろう。

「大和（現在の奈良）の名産は味噌、漬物、饅頭、素麺……」

といったぐあいに、お国じまんの名物を紹介している書物である。これは、全国でおよそ250にのぼる藩が、それぞれの風土に根ざした特産品を商品化することによって殖産興業にはげんだ成果でもある。

こうした条件にささえられて、会席（懐石）料理に象徴される和食のゆたかな伝統がそだっていった。多様な食材をもちいて、丹精と洗練をこめて調理した料理を少量ずつ、かたちも色も図柄までもがうつくしくデザインされた器にもり、同時、かつ、いっせいに食卓に供して、視覚、嗅覚、味覚でたのしみながら箸をうごかす。そんな献立が、ヨーロッパ人やアメリカ人の目には「オードブルのシリーズ」に見えるのだという。それは、くだ

って 20 世紀なかば、フランス料理におおきな影響をおよぼし、フランスの地において、いわゆるヌーベル・キュイジーヌ（新フランス料理）が成立するのに刺激をあたえることになる。

いっぽう、江戸時代の日本には、外国からあたらしい食材や食文化が到来した。南アメリカ原産のトウガラシ、日本で卓袱料理^{しっぽく}をうむことになる中国の普茶料理^{ふちや}、イベリア半島のカステラやフリッター、さらにコーヒーといった飲料などである。これらを日本人は、すぐにとりいれた。その好奇心の旺盛さは、われわれには極度に保守的とみえるヨーロッパやアメリカをはじめ、世界の諸地域の伝統の食文化へのこだわりにくらべると、おおらかというか食欲というか、やっぱり相当に特異な国民性だというほかない。

同時にそれは、食をめぐる知識情報の増大をもたすことになる。「おふくろの味」を相続するだけでは、多様化していく、あたらしい食材や料理法にかんする知識や技術が身につかないからである。じじつ、この時代、江戸のまちを中心に、ひろく食文化に関連した多数の書物が出版される。1633（寛永 10）年の『日用食性』をはじめ、『料理物語』『古今料理集』『本朝食鑑』『料理通』『豆腐百珍』など、その種類は、じつに多岐にわたる〔田中、1993：p.11〕。こうした状況は、明治維新以降にもうけつがれていく³。

食の知識情報化とそれがもとめられる理由

このように日本では、ややおおげさにいえば縄文時代にはじまる雑食性のゆえに、いまひとつには、たべものにたいする旺盛かつ遊戯的な好奇心のゆえに、日常生活の時空間をふくめて、食文化がきわめて多種多様な要素を、そのうちにはらむようになった。

このことは 20 年ちかくむかしに、約 2000 種類の生活財のリストを作成して、ロンドン、パリ、ストックホルム、ボン、ニューヨーク、東京において実施した一般家庭の「保有生活財の調査」⁴の結果からもあきらかである。その成果をしるした書物によると、欧米諸国にくらべると、日本の家庭の保有生活財の種類は圧倒的におおい〔CDI 編、1980〕。理由は、はっきりしている。食器ひとつをとっても、日本の家庭には、たいてい和・洋・中の食器がワンセットそろっている。そんな家庭は、まず世界のどこにも存在しない。欧米なら、大中小の皿とスープ皿、それにサラダボールとコーヒー紅茶用の茶碗

³ この点にかんしては、すでに第2部第1章で、詳細に論じた。

⁴ この調査には、筆者じしんが調査研究プロジェクトの一員として参加した。

があればことたりるからである。

いまひとつ、日本の食文化には、飲食店のありかたに関連した特殊性がある。これまた江戸時代の江戸・京・大坂などの大都市においては、ヨーロッパの都市にさきがけて飲食店が営業をはじめ、その隆盛を一般庶民がささえた。これにくらべると、たとえばパリでレストランが成立するのは、フランス革命後にまでずれこむ。それ以前に王侯貴族につかえていた料理人が失業して、大衆相手のレストランが登場するまでまたなければならなかったからである〔石毛、1982：pp.98-102〕。

このことは、ヨーロッパのレストラン料理が王侯貴族の文化に先導されて発達したことをしめしてもいる。ところが日本では、江戸・京・大坂の一般庶民が、寿司やうなぎなどを、ざっかきな屋台や料理茶屋でたべるようになり、それがじょじょに洗練されて、現代につながる料亭の料理にそだっていった。その過程では、味覚の変化が準備されてもいく。たとえば、伝統的な日本料理には油脂をもちいた料理が極度にすくない。もっぱら和食のうま味は昆布やカツオブシのだし、つまりはアミノ酸に依存していた。これにたいして、欧米の料理では油脂のうま味がおおきな役割をはたす。そのため、幕末から明治初期に欧米人がやってくると、急速に牛肉や豚肉をたべる習慣がひろがり、やがて日本人も油脂のうま味にめざめはじめるのである。

こうして、もともと多様性にめぐまれていた日本の食文化は、明治以降さらにそれをきわだたせる。それが新聞や雑誌など、さまざまな情報メディアをとおして全国につたえられた。ここにもまた、食生活・食文化の知識情報化が、いっそうおしすすめられる要因があった。その詳細については、すでに第2部第1章において論じておいた。ここでは、その要点を簡条がきにして以下に提示し、概要を想起する。

- ① 明治時代の食生活・食文化の歴史をたどると、「欧化」の影響がいちじるしい。しかし、このことは一般生活者のあいだに、欧米の食文化が、純粹にそのままのかたちで普及したことを意味するわけではない。
- ② そのかわりに一般生活者は、明治時代の後半から大正時代にかけて、欧米の食生活・食文化に必要な不可欠な肉類や西洋野菜類をとり入れた牛鍋（すきやき）をはじめ、さまざまな「和洋折衷料理」をあらたに考案した。そのなかには、カレーライス、コロッケ、オムライスに代表される、筆者の用語をつかえば「日本的洋食」とでもよぶべき料理がふくまれている。
- ③ ところが、うえにのべた食材や調理法は、日本伝来のものではない。したがって、

これらの食材や調理法が一般生活者の日常に普及するには、それらにかんする情報がひろく伝達されることが必要不可欠であった。そのため、明治時代から大正・昭和時代における食生活・食文化の劇的变化には、女性むけの雑誌や新聞などによる食生活・食文化の知識情報化がともなわざるをえなかった。

- ④ それだけではない。日本的洋食をはじめとする、あたらしい食文化は最初、明治時代の末期から大正時代にかけて、人口の集中がすすんだ都市の飲食店で提供されることによって、じょじょに人びとに認知されていった。ただ、みたことも、きいたこともない料理を人びとにこころみさせるのはむづかしい。そこで昭和時代のはじめになると、それらの料理の実物を彷彿させる、きわめて写実的な「料理模型（食品サンプル）」が制作されて、あたらしい料理の普及に貢献した。これもまた「模型」にたくした食の知識情報化の一例にほかならない。
- ⑤ こうしてみると、明治維新以後の近代化過程にあっても、本補論の最初にのべた縄文時代以来の多様な食物や料理にたいする好奇心、くだっては江戸時代における多様にしてあらたな食材や料理の開発と普及といった食生活・食文化の日本の特徴とその知識情報化が、あたらしいかたちに姿をかえて今日まで、うけつがれてきたことがわかる。

第2次大戦後における食生活・食文化の変容と知識情報化

前項でのべたことは、さらに姿をかえて第2次大戦後の日本にもあてはまる。それを、これまた第2部第2章で考察した内容の要点を箇条がきにして以下に提示して概要を想起しておく。

- ① 第2次大戦後の日本人の食生活・食文化を象徴的につらぬいてきたのは、一方における「簡便化」と、他方における「豪華化・趣味化」という趨勢であった。なかでも先行したのは、高度経済成長にともなって多忙化しはじめた日本人の生活に対応する「簡便化」の趨勢である。こうした趨勢を代表した現象として、
- ・ チキンラーメンに代表されるインスタント食品の開発と普及
 - ・ 調理の手間をはぶくレトルト食品や冷凍食品、おそうざい（デリカテッセン）の多様化と普及
 - ・ 購買行動の手間をはぶく、そうざいの素材配達業のはじまり
 - ・ マクドナルド・ハンバーガーに代表されるアメリカ産ファースト・フードの日

本上陸と人気のたかまり

などを列挙することができる。

- ② 調理の手間をはぶく「簡便化」の到達点のひとつは、調理済みのおそうざいの利用である。ところが、これがデリカテッセンと名をかえて普及するころから、より「豪華で趣味的な」調理済み食品への関心がたかまりはじめる。さらに、食生活のさらなる「簡便化」の一形態として「食事を外食ですます」という行動様式が、ファースト・フードの普及によって解発（release）されると、適切な料金で、もうすこし美味しい料理を、快適な空間で提供するファミリーレストランが登場する。こうして「趣味化・豪華化」が「簡便化」とならぶ日本人の食生活・食文化の趨勢のもうひとつの側面を構成しはじめる。そしてそれは昭和時代のおわりごろから今日にかけて、「高級レストランや高級割烹の豪華な料理をたのしみたい」とする一般生活者を増加させつづけている。
- ③ ところで、上記①と②の変化もまた、食の知識情報化を、さまざまなかたちでもなわざるをえなかった。そこで最初に想起すべきは、「インスタントラーメンの発売」と「テレビ放送の開始」が、くしくも1953（昭和28）年という、おなじ時期に実現したという点である。かつて存在しなかったインスタントラーメンを消費者に告知するには、広告・宣伝やPRなど、その商品の知識情報化と伝達が必要不可欠である。その役割を、おりから急成長しつつあった新聞や雑誌やラジオにくわえて、おなじ年に誕生したテレビという情報メディアがになうことになった。という意味で、インスタントラーメンとテレビは高度経済成長を体験しつつあった日本社会がうんだ「一卵性双生児」であるともいえる。
- ④ テレビ放送がはじまるとともに、コマーシャル映像を放映することができないNHKが『きょうの料理』という番組の放映をはじめた。それは、同時に発売された同名の雑誌とともに、あたらしい時代にふさわしい、栄養のあるおいしい料理にかんする知識情報を伝達することで、ゆたかな生活の実現に貢献しようとするところみでもあった。こうしたながれのなかで、出版業界もまた、最初はフランス人の料理人の、やがては日本の料理研究家の手になる多様な料理本や食文化に関連する書物を出版しはじめる。さらに、料理学校や調理師学校などが、たくさん開校し、食の知識情報化は、いっそう進行していく。
- ⑤ それだけではない。②でみたように、「高級レストランや高級割烹の豪華な料理

をたのしみたい」という要求がひろがると、飲食店それぞれがもっている特徴を中心に、値段や雰囲気や場所などを紹介する、いわゆる「たべあるき情報」への関心がたかまってくる。それを雑誌や新聞やテレビなどが提供する。こうした趨勢もまた食の知識情報化のひとつの領域を形成してきた。

食の知識情報そのものをあそびたのしむ

上記にのべたようなかたちで進行してきた食の知識情報化のはてに、今日では、食物や食事行動それじたいとはほとんど無関係に、食をめぐる知識情報そのものをあそびたのしむ、ある意味でふしぎな、あるいは過激なところみが出現しはじめた。

たとえば 1990 年代なかばに放映がはじまったテレビ番組のひとつに「料理の鉄人」というのがある。この番組においては、たしかに食物や料理をめぐる、さまざまな知識情報が提供される。しかし、それは視聴者の食欲や味覚とは、ほとんど無関係なのであって、番組の内容は「料理技術の格闘技」とでもよぶべき様相を呈している。

これは一種の倒錯であるというほかない。なぜなら、食材や調理法や食文化をめぐる従来の知識情報は、テレビでも雑誌でも、さしあたっては日常生活における現実の食生活に活用されて役だつメッセージ型の情報として機能することをめざしてきたからである。それにたいしてテレビ番組の「料理の鉄人」は、食物や料理を素材にして、ひたすら視聴者をあそばせ、おもしろがらせることだけをめざしているようにみえる。つまり、「メッセージ情報＝知識情報が、視聴者にはマッサージ情報＝感覚情報として受容されている」のである。このことによしあしを論じようというのではない。しかし、それは一種の倒錯的な現象であるといわねばならないとかがえるだけである。

そういえば「食」となる人間の、もうひとつの根源的な欲望である「性」の領域でも、よく似た傾向が観察される。はやい話が、遺伝的に人間にちかいとされるボノボなどの類人猿でも、彼らのセックス・シーンを集録した「ポルノ・ビデオ」映像によって、彼らの関心をひくことはむつかしい。ところが人間だけは、それを熱心に視聴して、ときに現実の性行動の代償としたりもする。のみならず現代日本の、とくに男子の若者のなかには、現実の女性には無関心で、劇画やアニメなど、2次元世界に登場するかわいい女の子にだけ欲情する男たちが出現していて、その心理状態が「2次元コンプレックス」の名でよばれたりしている。それは今日の電子テクノロジーがもたらすマルチメディア世界が、もうひとつの仮想的な現実、すなわちバーチャル・リアリティ（virtual reality）の世界を構

楽しつつあるとする時代認識につうじるエピソードでもある。

してみると、どちらかといえば量的に過剰な食物摂取が常態となった、いわゆる「飽食の時代」の日本人が、現実に食物や料理を食べること以上に、そうした場面を、おもしろおかしく映像化したテレビ番組の視聴をあそび、たのしむようになるのも、もしかすると当然の結果であるのかもしれない。このあたりに、文字どおり、現代の日本社会における食をめぐる、より一般的、かつ多彩な情報（産業）化の到達点が垣間みえている。

第2節 進行する食の「感覚情報化」

ところで、食生活・食文化に関連する、本来はメッセージ型の情報を、マッサージ型の情報として受容し、あそびたのしむと同時に、食物や料理の味覚をはじめ、そのかおり、みだ目のうつくしさ、それを食べる空間のインテリア、そこにながれる音楽やおしゃべりなどを全体として、あそびたのしもうとする風潮もまた、現代日本社会における食生活・食文化の重要な一側面を構成している。それは、食物や料理、食事の場面そのものの「感覚情報化」であるとかんがえるのが適切である。そこで本補論の第2節では「食の感覚情報化」という趨勢に焦点をあてて、日本の食生活・食文化の特質と変容を考察する。

日本人の食生活・食文化にみる「雑食性」

最初に、「日本人は米を主食とする米食民族である」という命題を、あらためて検討してみる。そのとき参照すべきは、たとえば『国民生活白書（平成7年版）』〔経済企画庁、1996〕である。その記述によると、「日本人が米飯を食べる機会は平均1日1.4食であり、3食のうち、主食に米の御飯を食べるのは半分にすぎない」という。

これでは、米を主食とする米食民族であるとするのはむつかしい。では、これはあたらしい現象なのか。そうではない。民俗学者の柳田〔1930〕も、

（明治中期）米は全国を平均して全食糧の五割一分内外を占めて居る。

と述べている。単純化すると、米食の比率は100年前と現代とで、ほとんど変化していない。むしろ米以外の、のこり半分の食材はおおきく変化した。じっさい現代では、パン・麺類・パスタなどが日常化したという意味において、食材はいちじるしく多様化している。それにたいして100年前には、白米のごはんが、ほとんどの日本人にとって「ハレの日のごちそう」であった。つまり日常的には、麦飯のほか、ヒエやアワなどをま

ぜた^{かてもし}糍飯をはじめ、大根飯や雑炊などを食べていたのである。

では、当時の米の貴重さの度合はいかなるものであったのか。そこでおもいだすのは、たとえば「いまわの米粒」「いまわのふり米」といった言葉である。臨終がまちかい年よりの耳もとで、白米のはいった竹筒をふり、その音をきかせてあげると、おだやかにあの世にいけるとかながえられていたという。それほど白米は、ありがたい存在であった。つまり、古来から日本人の常食は米であったとかながえられがちであるが、ほんとうは米以外の多様な食材をとり入れるほかなかったのである。

このことが日本人の雑食性をつよめた。そのことがまた、第2部の第1章と第2章でみたように、異文化の食材や調理法を積極的にとり入れ、あるいは独自の工夫によって、その再編成をこころみる資質をそだてたのだとおもわれる。げんに現代の日本は「世界の食のるつぼ」の観を呈している。一般家庭のおおくに、和食・洋食・中華料理用の食器が、ひとつおとりそなわっているのも、このことをものがたっている。これほど雑食性のつよい民族は、世界でもめずらしいといえるであろう。

食の感覚をみがいた「接吻容器」という仮説

このように日本人は、ふるくから、あたらしい食材や調理法など、さまざまな食文化を平気でとりいれてきた。それは日本人が、ふるくから「味覚」という、食物に関連した一種の感覚情報にたいする順応性と積極性をそだててきたということでもある。これまた、すでに第2部第1章でのべたところであるが、たとえば明治維新以前の日本では、仏教の影響から、すくなくともタテマエのうえでは肉食が禁じられていた。それが明治時代のはじまりとともに、「牛肉は滋養になる」と新聞が報道すると、急速に牛肉料理が一般生活者のあいだにひろがっていった。もとより「薬ぐい」と称して、ひそかに動物の肉がたべられていたという事情はある。しかし同時に、動物の肉の味への順応のはやさの背景には日本人の雑食性が関与しているようにおもわれる。

いまひとつ重要なことは、日本人が、料理をもちつけた食器に唇を直接、接触させてたべることに抵抗感がないという点である。これは、かなりのていど独特の食習慣であるといえる。そのことに、はじめて言及したのは神崎 [1996: pp.36-42] である。そういわれれば、コーヒーや紅茶をのむ場合をのぞくと、ヨーロッパやアメリカ、あるいはアジア各地においても、食事のさいに食器に唇を接触させる作法は、あまりみかけることがない。

では、なぜ日本人だけがこのような「たべかた」をするのか。これまた神崎 [1996]

によると、むかし、麦やヒエやアワのまじった、ねばり気のない雑飯をこぼさずにたべるには、飯碗を口につけてかきこむほかなかったからだという [pp.36-42]。

こうして日本では、飯碗が「接吻容器」とでもよぶべき様相を呈するようになった。それを神崎 [1996] は、「うつわを食らう」という卓抜の表現でとらえたのである。こうして極度に敏感になった唇や舌が、日本人の味覚をふくめた食にかかわる多様な情報感覚をとぎすまず役割をはたした。仮説の域をでるものではないのかもしれないが、このことは、きわめて興味ぶかい、かつ魅力的な仮説であるようにおもわれる。

情報産業社会の到来と食の感覚情報化

前項でのべたような意味において、味覚を中心とする敏感な情報感覚をそだててきた日本人が、1975（昭和50）年あたりをさかいにして体験しつつあるのが、第1章第2節で論じた、いわゆる「情報（産業社会）化」の趨勢である。そうした時代に日本人は、意識するといなどにかかわらず、食物や料理そのものを情報メディアとしてあつかう習慣になじんできたといえる。すでに本補論の第1節でもみたように、それを象徴するのが、このころから顕著になりはじめた食物の味覚への関心のたかまりである。

そして1987（昭和62）年ともなると、めずらしい食味を提供する世界各地のエスニック（民族）料理が人びとの人気をあつめるようになり、美食をたのしむグルメが日常の話題にのぼるようになった。このことを高田 [1987] は、「エスニック気分からレトロ現象まで」という、その副題に象徴させて表現している。これをひとことでいけば、

「満腹感はみたされた。ならば、それにくわえて、おいしくて、めずらしい料理の味やかおりやテクスチャー、さらには、みだ目のうつくしさをたのしみたい」

ということになる。しかも人びとは、料理をもちつける食器のデザイン、食事をする場や空間の、さまざまな情報環境にも興味をしめすようになっていった。おしゃれなデザインの食器類、うつくしくて快適なインテリア、そこにながれる音楽やおしゃべりのたのしみなどが、その内容を形成している。こうしてついに、食事という生活行動は、味覚だけではなくて、人間の心と体、つうじょう5種類に分節される感覚⁵のすべてを充足させることをめざす感覚情報体験としての側面を極限まで肥大させるにいたった。

そのことを傍証する事実として、1990（平成2）年前後に、一躍おおきなブームになっ

⁵ いうまでもなく、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚を意味している。

たスナック菓子やインスタント食品に極端に刺激のつよいトウガラシのからさを付与した商品が人気をあつめて「激辛ブーム」とよばれたり、独特の歯ざわり^{テクスチャー}そのものを訴求するナタデココといった商品がヒットしたり、料理にかおりのアクセントをそえるハーブに関心があつまったり、さらにはそこから、かおりの作用をたくみに利用した健康法としてのアロマセピーが派生したりしたことなどがあげられる。そしてこれらは、いずれも人間の5種類の感覚を充足させる感覚情報を商品化した結果だといえる。それを筆者は食生活・食文化にそくして「食の感覚情報化」という言葉でとらえておきたい。

「物流」の時代から「情報流」の時代へ

食生活・食文化をめぐるこうした変化は、食糧を供給する産業としての農業や漁業や畜産業にも影響をあたえている。たとえば、コシヒカリやササニシキなどの銘柄米の栽培に熱心な農家は、かつて昭和20年代のように「食糧増産」をめざしているわけではないことに注意すべきである。彼らは「銘柄」という情報、「おいしい米の食味」情報の創出にはげんでいるのである。

これとよく似たことは、最初は1980年代なかばに当時の大分県知事が提唱して、じょじょに全国各地にひろがっていった、いわゆる一村一品運動にとりくんでいる農山漁村における農林漁業にもあてはまる。1985（昭和60）年代以降、生産者の名前と写真をそえた、野菜をはじめとする食材を販売するデパートや商店がめずらしいものではなくなったが、これらのころもまた「食の情報化」という趨勢にふかく関連している。

そういえば、食材を運搬するトラック輸送の意味と役割も変化した。というのも、1980（昭和55）年以前にあっては、なによりもそれは効率的で迅速な大量の物量輸送の実現をめざしていた。ところが1980（昭和55）年ぜんごに宅配便⁶、すなわち30キロ以下の小口の貨物輸送サービスが商品化されると、その個数は急速な増加のあとをたどり、ついに1995（平成7）年には14億個を記録するにいたっている。

そこでひるがえってみると、宅配便が運搬しているのも、文字どおりの「物量としての食糧」ではないことに気づかされる。つまり、宅配便が運搬しているのは、じつは、しば

⁶ 宅配便の最初は、1973（昭和43）年に熊本の九州産交が開始した「産交ふるさと便」であるが、時期尚早のため、あまり普及しなかった。それが急増するのは1980（昭和55）年以降、大和運輸が「宅急便」という商品名を採用してからである。

しば消費者に名前を顕示しようとする生産者が工夫し、丹精をこめて作りだした「味やめずらしさ」なのであり、それをおくろうとする人の「相手への気もちやおもい」といった、これまた情報としかよぶことのできないものにほかならないからである。

こうしてみると、現代の日本社会における食生活・食文化にかかわるあらゆる要素が、きわめて広範な意味において「情報化」しており、そのおおくが感覚情報化の過程を体験しつつあるといえる。だとすれば食事場面こそは、さまざまな情報、なかでも人間の感覚器官に作用して、それをあそばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる感覚情報、べつのことばでいえばマッサージ型の情報をつたえる、マルチメディアそのものだとかんがえることもできるというわけである。

1995（平成7）年に、いわゆるインターネットの日本社会への普及が加速化しはじめて急速に注目されるようになったマルチメディアとは、一般には、

「①文字・音声・映像など複数の種類の情報を同時に伝達する、②双方向型の、③電子的デジタル技術をもちいた情報メディア」

という意味でつかわれている概念である⁷。しかし、上記の定義のうちから、①の「複数の種類の情報を同時に伝達する」という、マルチメディアという単語の、ほんらいの含意だけをとりだすと、より高度な完成度をほこるマルチメディアのモデルは、ほかにもいくつでもみつけられることに気づかされる。

そこでおもいだすべきは、カソリック教会や仏教寺院である。たとえば、平安時代に藤原頼道が極楽浄土を模して建設した宇治の平等院鳳凰堂は、

「現世に出現した^{ファンタジック}仮想的な極楽浄土」

にほかならない。それは、建築それ自体はもとより、装飾や仏像やろうそくの光といった視覚情報をはじめ、読経の声や鐘の音、そこでたかれる香のにおい、ながれる風の感触などによって、人びとに極楽浄土をイメージさせるマルチメディア装置そのものである。してみれば食事場面も、多様な感覚を伝達することをとおして、人間の心と体をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせるマルチメディアそのものだということになる。

むろん、そこでもっとも重要な役割をはたす要素は、舌が感じる食味そのものである。

⁷ そのため、現代日本において「マルチメディア」という用語は、コンピュータと通信の電子テクノロジーに限定してもちいられている。

しかし食味には、その第1次周辺感覚とでもいうべき、食材のテクスチャーがもたらす歯ざわり舌ざわり、鼻腔が感じるかおりをはじめ、食味の第2次周辺感覚としての料理の色やかたち、食器のデザインやインテリアやエクステリア、さらには部屋の気温、そこにながれる音楽、かわされるおしゃべりなどが、無視することのできない影響をおよぼすことはよく知られている。そういう意味において、食事場面は、きわめて多様な感覚情報がおりなすマルチメディア世界だというほかなくなる。

こうした視点は、将来における日本人の食生活・食文化、あるいは電子テクノロジーの世界におけるマルチメディアの可能性を、ふたつながらに拡張する契機をみつけだすことにつながるかもしれない。第2部の最後に、補論としてかかげた「食生活・食文化をめぐる『情報（産業）化』の諸相」という主題は、そういう意味をはらんでいる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表年代順）

- ・CDI編、1980『生活財生態学』リプロポート
- ・平田萬里遠、1991「料理観にみる形式から実質への軌跡——再び技巧的些末主義の危険」（熊倉功夫・石毛直道・編）『食の美学（食の文化フォーラム）』ドメス出版
- ・石毛直道、1982『食事の文明論』中央公論社
- ・神崎宣武、1996『「うつわ」を食らう——日本人と食事の文化』日本放送出版協会
- ・小山修三ほか、1996「縄文まほろば博記念シンポ——縄文の食・グルメな縄文人」『朝日新聞』（7月30日）
- ・岡田康博・小山修三、1996『鼎談 三内丸山の世界』山川出版社
- ・高田公理、1987『「遊戯化」社会を探検する——レトロ現象からエスニック気分まで』PHP研究所
- ・高田公理、1997a「情報化社会の飲食文化」『食生活研究』（6月号）
- ・高田公理、1997b「食をめぐる『情報化』の現在」『生活情報学研究（第1号）』武庫川女子大学生生活環境学部生活情報学科
- ・田中優子、1993「江戸の食事」『ART-TASTE』（02・JULY）三永源エフ・エフ・アイ株式会社
- ・柳田國男、1930『明治大正史 世相篇』朝日新聞社（柳田國男、1970「明治大正史 世相篇」『定本柳田國男集 第24巻』筑摩書房）

第3部 家庭生活と地域社会

第1章 「家父長制」とマイホーム主義

第2章 「共同体」と情緒安定の装置・制度系

第3部 家庭生活と地域社会

第1章 「家父長制」とマイホーム主義

はじめに——問題意識と本論文の位置づけ

社会人類学者のマードック [1978] は、人類の社会生活の基礎となる4つの機能、すなわち「性、経済、生殖、教育」をあげ、この機能をはたす最小の単位は家族以外に存在しえないことを強調した。それから10年前後、エチオピアのハダールで、人類学者のジョハンソンとホワイトは、約300万年まえのヒト科の13体の化石を発見して、それを「最初の家族」と名づける [ジョハンソンほか、1986]。こうしてみると「家族」は、人間の本質にもっともふかく根ざした制度のひとつだといえる。

ただし、社会制度としての「家族」には多様な変異がある。その系譜は父系と母系に、その支配の様式は父権と母権に、さらに居住単位は夫婦家族制、直系家族制、複合家族制に類型化できる。それはまた、おなじ地域にあっても、時代がうつりかわると微妙に変容する。

いっぽう、家族によく似た言葉に家庭がある。ここでは「家族」を「配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係でむすばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」、「家庭」を「家族が生活する場」といった程度に、ゆるやかに定義しておく。そのうえで日本の家族と家庭が、高度経済成長期にどのような変容を体験したのか。このことをあきらかにするのが、第3部第1章の目的である。

本章のもととなる論文は最初、国立民族学博物館主催の「現代日本の『神話』」と題するシンポジウム(1987年2月18~20日)¹で発表された。ふつう「神話」は、辞典的知識によると、「現実の生活とそれを取りまく世界の事物の起源や存在論的な意味を象徴的に説く説話。神をはじめとする超自然的存在や文化的英雄による原初の創造的な出来事・行為によって展開され、社会の価値・規範とそれとの葛藤を主題とする」²と説明される。こ

¹ 国立民族学博物館の特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の第5回シンポジウムに相当する。そこで筆者が発表した内容は、高田 [1989] として公刊されている。

² 新村出(編)、1991『広辞苑(第4版)』(岩波書店)による。

うした意味をふまえながら、しかし、このシンポジウムの実行委員長であった中牧〔1989：pp.12-14〕は、ここでの「神話」の意味を、つぎのように規定した。

「神話」にはふたつの意味がある。ひとつは「神話と儀礼」という脈絡で考えられるものである。……（そこには）神話が儀礼の背景となり、儀礼が神話の表現であるような関係（がある）。……（そこでの）「神話」とは規範、原理、モデル、理念型、世界観、人生観、パラダイムなどを意味（する）。……もうひとつは「神話と事実（現実）」……というような対比でとらえられる「神話」（である）。この場合には、両者のギャップが問題となる。それはたとえば家父長的イデオロギーと双系的先祖祭祀とのギャップをどう認識するかというような問題である。

そこで筆者は、近代日本における「家族」をめぐる「規範としての『家父長制』神話」が、じつは「虚構としての神話」にすぎなかったのではないかという仮説を出発点として、それが高度経済成長期にたどった運命をあとづけることをこころみた。

第1節 家父長制の概念と日本のイエ制度

家父長制の概念規定

「家父長制 (patriarchy)」とは、「古代のギリシャやローマやゲルマンなどに典型的にみられる、最年長男子が支配する家族形態とその制度」である。その特徴は一般に、家族の系譜のみならず、財産の大半が父から男の長子へと継承される「父系制」と、家父長が公法・私法上の権利・義務や財産権など、家族内の権威を独占的に専有する「父権制」とにある。その背景には、明確な世襲規制の伝統があり、しばしばそれを祖先崇拜の統制原理がささえてきた。なかでも、子供の社会化の過程において、父親の権威が認識されることを保証するために、子どもが父親の職業を継承することが重要な条件であった。また、家父長の権威が強大なものとなるためには、家族を構成する人員が多数にのぼる必要があった。支配権は通常、支配される者の数に比例して強大となるからである。

こうした家族制度との比喻から、「家父長」である君主が、「子」である臣民にたいして無制限の支配権をふるった戦前の日本の天皇制のような家産国家における政治制度のほか、家父長制家族に内包されている「男による女の性支配」までもが「家父長制」の名でよばれることもある。

日本のいわゆる「イエ制度」

近年まで、日本の家族制度の理念的規範だとみなされてきた、いわゆる「イエ（家）制度と家長制」もまた、家父長制の一形態であるとかんがえてよい。ただし、たとえば柳田 [1931 pp.307-325] の指摘によると、イエ制度に一貫してみられる、もっとも基本的な原則は、「イエを家族成員の世代をこえて永続させたいとする理想であり願い」であった。家長は、そのねがいを実現するために、共同体としての家族の生活を統率する役割をになう存在だったのである。

したがって日本の家長制は、すでに1908（明治4）年に藤井 [p.34] が指摘しているように、家長個人の恣意的支配が伝統によってみとめられる本来の家父長制とはことなり、イエという制度の永続のために家長自身が家族成員に率先して貢献することがもとめられた。それを中根 [1977, p.102] は、すこしこととなった視点から、つぎのように説明する。

権威のある父親というものは、日本社会では……父親なるがゆえに権威があったのではなく、家長なるがゆえにです。事実、家長権を息子に譲ったのちの父親は権威がなくなり、いわゆる隠居の身分となり、家族の頂点としての地位から退かなければなりませんでした。

イエ制度をより強固にするために「養子制度」が普及したことも、そのことを傍証する。そこでは、本来の家父長制に特徴的な「世代をこえて継承される血のつながり」よりも「イエの系譜の永続」こそが重視されているからである。

とはいえ、イエ永続のために家長の地位は、主として長男によって継承された。また、本来はイエに所属する家産や家業をはじめ、出自をしめす氏・家姓・家紋・氏神、祖先の祭祀など、イエの伝統的権威の象徴もまた長男によって継承された。イエの権威と権力が家長の地位にある者に集中したことも、たしかな事実である。こうした側面に注目するなら、日本のイエ制度と家長制度もまた家父長制の一形態であるとみなすことができる。

第2節 規範としての家父長制的イエ制度の成立

日本社会において、①家長の絶対的権威、②長男による家督と財産の相続、③男尊女卑の身分規定、④近世の寺請制度にともなって慣習化した祖先祭祀などを、おもな内容とする家父長制的イエ制度が成立したのは、分割できない家産（農民の場合は土地）と、それをもたらした戦国末期の、祖先の功績によって地位の安定を保障された近世武家の家族においてであったとされる。それが明治民法の成立によって、単一の階層ではなく、すべて

の日本人の家族の理念型になった。

じっさい、すでに近世なかば 1714（正徳4）年に、杵築藩の儒者であった綾部綱斎があらわした『家庭指南』のなかに、つぎのような記述がある。いわく「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あるは、これすなわち人の道なり」〔加藤、1986 pp.124-130〕。それが明治時代にはいり、家父長制的イエ制度にもとづく社会秩序維持のためのイデオロギーとしてひろくゆきわたる。つまり、

我国は祖先教の国なり。家制の郷なり。権力と法とは家に生れたり。……氏族と云ひ国家と云ふも家制を推広したものに過ぎず。而して之を統一して全かしむるものは祖先教の国風にして公私の法制習慣之に依るにあらざれば解すべからず。万世一系の主権は天地と共に久し其の由る所或は祖先の教法家制に渉るなきか〔穂積、1885：p.87〕。

これにくわえて、男尊女卑のイデオロギーを標榜する、つぎのような指摘も目につく。

女は保守にして男は進取なりと云ふ。而して進取の保守にまされりと云へる理由は之れあるなく二者共に入要なるは表と裏と内と外との如き関係にして何れを劣れりと云ふ可らずとは云へ若し一家を為すと云ふの上より考ふときは勢ひ主権でふ者を一点定めざる可らず。於此乎裏は表に副ひ内は外に従ふの理に由りて女は男に従ふべき事となるなり〔巖本、1885：p.76〕。

こうして家父長制的イエ制度は、明治時代の社会規範の重要な一翼を構成するようになった。とくに近世なかばに全国にひろがった先祖祭祀の慣行は、昭和になってもなお強固に人びとの心のなかに根づいていた。柳田〔1931〕が「家永統の願ひ」にしるした「四十五枚の位牌を背に負うた老人の話」〔p.307〕は、そのことを雄弁にものがたっている。

第3節 家父長制的イエ制度の「神話」性と近代日本の社会変化

成立直後に解体にむかう家父長制「神話」（明治時代）

理念的な社会規範になったとはいえ、日本の家父長制的イエ制度は、いくつかの局面で多様な民俗的伝統と矛盾する側面をはらんでいた。民俗的にはむしろ「男女は対等」であったし、長男と二、三男の権利上の差別も顕著なものではなく、全国各地には末子相続をはじめ、多様な家族慣習が行なわれていたからである〔米山、1986a：pp.72-73〕。しかも、明治以降の社会変化は、当初からそれをささえる条件をよわめる方向にすすんだ。

まず、明治維新によって身分制度と世襲制度が解体した。その結果「車夫馬丁の子弟と

雖も、高位栄爵の地位を得ることが出来る。之に反して幾ら名門に生れた者でも、其才能凡劣であつたならば、社会の下層に沈淪して居らなければならぬ」〔藤井、1908：p.36〕という状況がもたらされた。くわえて移住の自由が保障される。その結果、「家風の授受と云ふことが頗る困難にな」り、「若夫婦が自分等の考で、乃至大きく言へば自分の理想で家政を料理して行くと云ふことになると、縦し其名目は自分は其家を相続した者であると云つても、それは単に空名に過ぎないので、實際は新に家を興したと同じやうになる」〔藤井、1908：pp.40-41〕ということにもなった。

さらに、財産所有や近代産業社会の成立にかかわる雇用契約をささえる法律や社会制度が、かつてのように「家と云ふものを土台にせずして、人と云ふものを基礎として」〔藤井、1908：p.41〕成立するものとかんがえられるようになる。「西洋文明は一言に之を評せば如何にしても個人的文明であるといふてよい」かどうかには疑問がのこるが、家族主義的なタテマエが個人主義的な指向性によって蚕食されたことは否定できまい。そのうえ、役人や会社員などの俸給生活者が増加すると、それにともなつて家族の規模は縮小傾向をたどった。

つまり、明治政府が標榜した「イエ制度」を基礎とする家父長制的「規範」は、いったん国民文化の一翼になうかのように演出されながら、実質的にはその根柢をほりくずす社会変化の渦中にとりこまれることによって、成立の当初から幻想的な「神話」性をはらまざるをえなかったのである。

家父長「神話」をささえる社会的条件の弱体化（大正・昭和初期）

こうした趨勢は大正時代に、いっそう顕著になる。たとえば、丹後国由良川沿岸のある村で「家族制度の維持と崩壊」の実態を調査した三浦〔1915〕は、つぎのように指摘する。

部落に踏止つて居る一家の人々の間には家族的専制の色彩が次第に消え去ると共に、いつしか共和的色彩が目立つて見え出したのである。例へば先祖祭についても、20年前まで争はれた座次は今互譲に依つて決せられ、講席を営む家が抽選にて廻り持となり、此席とする別家の披露が貧富の差別なく酒一升の持参で済むことなど、其最も顕著なるものと謂はねばならぬ。……平産主義が行はれる自然の結果であらう。今後人々の増殖と外界殊に都会の誘惑を加へる暁には、更に一層の変化を受くべき運命を有すると覚悟せねばなるまい〔p.111〕。

平産主義のために「家族的専制」、つまりは家父長制的専制の色彩がよわまったという

のである。そして、この引用の最後にしるされた予測は、おりから増加しはじめた都市のサラリーマン家庭にもあてはまる。「親子同居」の理想にたいして、「親子は別居せざるをえない」とするかんがえかたが芽をふきはじめてからである。

職業の範囲広く、職業のある所に住居する今日は、新夫婦のみが任地に行つて、両親は郷里に残ることも少なくないから、別居せざるを得ない事もある。同居説はこの時代の趨勢に逆行するもので、国家社会の発展を阻むものではあるまいか〔下田、1919：p.4〕。

俸給生活をいとなむサラリーマン家庭は「家父長制的直系家族」から、いわば「マイホーム型の核家族」に推移することを、あらかじめ予定されていたといえよう。大正時代も末期になると、こうした家族のありようを積極的に受容しようとする言説が目につく。

センチメンタルな議論を避けて、冷静に事実の真和を察すると、家名の存続にも、祖先崇拜にも、人間本能の上にある根拠をもつてあるとは考える。然しながら、社会の事情が変化すると共に、この思想も何時か変化することがないとは云はれぬ。（これらを勘案すると現在の）家族及び親族間の共同の目的は、第一に、一族の教育の上に置かれなければならない。第二には、幼年者の養育の上に置かれなければならない〔春山、1926：p.56〕。

そこにはもはや、ある種の「神話」としてではあれ、明治の国民文化が標榜した家父長制的イエ制度をささえる理念をよみとることがむづかしい。こうした変化の背景には、いわゆる大正デモクラシーの過程において、女子教育の普及がそれなりに進行し、それともなつて、かなりの程度まで女性の社会的地位が向上したという事情がある。長谷川〔1925〕のつぎの指摘は、そのことを的確にとらえている。

婦人が経済上の独立を与へられたならば、誰も婦人解放を叫ばなくとも婦人は自ら解放される。乃ち近代社会の産業状態は自ら婦人に経済上の地位を与へることになつて、男子専制の社会組織が男女共同の組織に進みつつある。……今日の婦人は恰度、この新たな経済上の地歩を占める過渡的の時代に居るのである〔p.35〕。

それだけではない。大正時代末年の『婦人公論』は「『細君の俸給』問題是非」〔無署名、1926：pp.32-41〕という特集をくんで、この課題にたいする当時の知識人の応答を掲載する。家父長制的イエ制度のもとでは、その経済的価値が、かえりみられることなどけしてなかった妻、あるいは主婦の家事労働が、あらためて評価されるようになったことを示唆する点で、この特集はきわめて興味ぶかい。

第4節 家父長制「神話」の復活と強制（第2次大戦期）

ところが、やがて昭和の10年代、日中戦争に端を発する軍国主義的色彩の濃厚な時代が始まると、家族制度をめぐる明治民法の精神の復興がさげられる。

今日資本主義が社会の隅々に浸潤して、小家族に分裂しても、単一家族内の秩序は矢張り古来の家族制度の思想が一貫してこれを維持してゐるのを見る。家族制度の思想的根拠をもつと発揚し闡明することが即ち日本精神の高揚に一致する所以である[今、1940:p.9]。こうした思潮は学校教育にも浸透していく。文部省教育局編纂の『戦時家庭教育指導要綱・家の道』を参照すれば、そのことが判明する。

我が国の家の社会的意義・我が国ニ於ケル家祖孫一体ノ道ニ則ル家長中心ノ結合ニシテ、人間生活ノ最モ自然的ナル親子ノ関係ヲ根本トスル家族ノ生活トシテ情愛敬慕ノ間ニ人倫本然ノ秩序ヲ長養シツツ永遠ノ生命ヲ具現シ行ク生活ノ場ナリ [米山、1986b: pp.74-75]。

『家の道』は、これにつづけて、「敬神崇祖、祖孫一体ノ道ノ中枢タルベキモノナリ」「家長ヲ中心トシテ親子・夫婦・兄弟ノ序ヲ正シクスルコトハ家庭生活ノ根本ナリ」と説くのである。とはいえ、第2次大戦にむけて戦時色が農耕になると、やがて実際には夫も父も、青年男子たる者はその多くが、兵士として出征せざるをえなくなった。そのため家庭から「家長・家父長」の姿がきえる。かわりにこのこされた女たちが、家庭の内外において「銃後のまもり」をかためたのである。いささか皮肉な見方をすれば、この間に日本の女たちは、やがて終戦後の高度経済成長の後半の時期に家庭をはなれて社会に進出するための基礎訓練を蓄積していたとみることもできる。

第5節 家父長制的イエ制度の法的解体（昭和20年代）

やがて1945（昭和20）年、ながくみつもれば15年の長期にわたった戦争が終結する。その瞬間、ジャーナリズムや進歩的知識人は、いっせいに「家族制度の民主化」をうったえはじめた。もちろん議論の方向は、論者によって多様なバラエティをしめしている。たとえば中野 [1946: pp.31-35] は、「制度としてのイエよりも個々の人間を尊重すべき」であるとする。これにたいして川島 [1946: pp.27-37] や末川 [1947: pp.44-49] は「家族内における財産権をはじめとする諸権利の平等が実現されるべきだ」という点を強

調する。また、松本〔1946：pp.11-17〕は「上における天皇制」を批判しながら「イエ制度下の男女差別の不合理」をとく。

しかし彼らの論調はすべて、①家父長制的イエ制度を解体し、②民主主義の原理にもとづく家族制度をうちたてるべきだとする点で共通している。そして実際それは、1947（昭和22）年における新民法の成立によって現実のものとなる。家長の絶対的権威にかわって「個人の尊厳」が、長男による家督と財産の相続にかわって「均分相続」が、男尊女卑の身分規定にかわって「両性の本質的平等」が、それぞれ新民法の原則となるのである。

ここに、家父長制とよぶには重大な脆弱さをはらみながらも、近代初期には、すくなくとも理念的規範として全社会的に受容された家父長制的イエ制度が、たんに制度としてだけでなく、理念としても解体されるにいたる。

第6節 家父長制「神話」からマイホーム「神話」へ（高度成長期）

その後の社会変化もまた、法制度として確立したあたらしい家族の理念をはげます方向に進行した。まず、戦後の経済復興から昭和30（1955）年代にはじまる高度経済成長期にかけて、「夫が俸給生活者として企業や官庁に勤務し、妻が家事従事者として家庭生活をとりしきる」という家庭生活の形態が一般化していく。そして1956（昭和31）年ともなると、勤労者人口に占める俸給生活者の比率が50パーセントを凌駕するにいたる。

そこでつぎに、その後の高度経済成長の、おもに前半期に注目しながら、家族のありかたをめぐる日本人の社会意識の転換の過程をあとづけてみる。

ゆらぐ父の座、家庭生活を支配する妻

高度経済成長の本格化にともなって、いっそう比率を増加させた俸給生活者である夫や父親は、勤勉かつ猛烈に仕事にはげむようになる。その結果、しばしば彼らは「非在の家族成員」としての属性をあらわにしめさざるをえなくなる。しかも、その職業は世襲によって伝承されるのではなく、自由意志とおかれた環境の偶然的な条件によって決定される。つまり「職業教育者としての父親の地位は大揺れに揺れ、そして遂には消滅してしま」わざるをえなくなったのである〔大熊、1958：p.95〕。

その結果、「一家のあるじ」としての夫や父親は、家族成員の目から見ると、たんに家族の消費生活をささえる俸給の運搬者としてしか評価されなくなる傾向をあらわにする。

さあれ、現在の家のおさは孤影悄然として淋しい。家に在っては「主人」で無く、「下宿人」である。月給袋が薄かったら、妻の顔色をうかがいながら収入をさし出すあわれな下宿人である。子が、もっと上の学校にゆきたい、何かを買って欲しいといえ、妻は、父に云え、という。彼は家の中で地獄を感じる [p.103]。

そこには、家長としての夫や父親の権威などというものは存在しない。かつての夫や父親が、心のなかに達成すべき、なにがしかの「理想」をほんとうにかくしもっていたかどうかは別にして、俸給の額にきゅうきゅうとする男の姿は、職業教育者としての父親の地位の喪失とあいまって、妻や子供たちに「理想像をもたない父親」のイメージを刻印したようである [大熊、1958：pp.94-95]。いささかの誇張があるとはいえ、当時の週刊誌をひもとくと、しばしば、つぎのような報道記事が目につくのもその証左である。

ある中年の父親は、「ぼくはときどき、たくましく成長したセガレをじっとみつめながら、こんなことを考える。『うっかりへたなことをすると、殺されるかもしれないゾ』…そして、思わずゾットする」と述懐している。いささか大げさだが、こうなるとまさにりっぱなセガレ・ノイローゼだ。また、ある家庭の子供は父親を「春吉、春吉」と呼び捨てにし、父親がしかると「何だ、お前なんか実家に帰れ」と反対にどなりかえす始末だという [無署名、1959：p.72]。

こうした状況のなかで、おりから開催されるようになった母親大会にことよせて、むしろ「父親大会こそ開催されるべきである」 [重松、1958：pp.73-77] といった主張が登場する。あるいは、冗談なのか本気なのか。「日本夫権を守る会の設立」がよびかけられたりもする [十返、1959：pp.224-229]。こうした趨勢は、高度経済成長期をつらぬくことによって、やがて昭和 50 (1975) 年代、つぎのような慨歎に収束する。

「お前たちが成人になる 21 世紀は、こんなすばらしい世の中なんだよ。だから 21 世紀の担い手として、私たちはお前たちにこんな人間になってほしいんだ」と、未来への見取図と期待する人間像をはっきりと手渡してやることのできるものは、ほとんどいないのではないか。むしろ社会と人生について、誠実に考え対処している人ほど、文明と人類の未来について、安易なバラいろの見通しを描けなくなっているともいえるだろう [高山、1980：p.114]。

それにたいして妻のほうは、もっぱら家事労働に従事することで家庭生活をとりしきり、子そだてとその家庭内教育を全面的に担当する「奥さん」という名の専業主婦としての地位を確立していく。むろん彼女たちが従事した家事労働は、生産労働ではありえないとい

う意味において一種の「擬装労働」であるとみることもできる〔梅棹、1959a：pp.58-64〕。しかし、上記のような役割分担が、いったん制度として成立すると、それは家庭生活のなかで確固とした地位をしめる。そして家族内における男の地位と役割を、いよいよ低下させる方向に作用することになる。

その結果、昭和30（1955）年代には、女たちに「あなたの夫は何点か」といかける記事〔無署名、1957：pp.62-64〕、「揺らぐ父の座」といった特集（『婦人公論』1958年12月号）などが、ジャーナリズムにとりあげられる。これらの記事をうけいれる社会意識は、家父長制などというものとは無縁であるというほかあるまい。

そのうえ、このころから「家つき・カーつき・ババアぬき」という言葉が、結婚をまえにした女たちの現実感覚の表現として市民権を獲得しはじめる。かつての直系家族にかわって、核家族が理想的な家族形態とみなされるようになる。それにともない、現実にも家族規模がちいさくなる。当然、かつての家父長制的イエ制度を側面から強固にささえたイデオロギーとしての祖先崇拜や、習俗としての先祖祭祀がおろそかにされるようになる。家父長制は「神話」ですらなくなりはじめたのである。

マイホーム「神話」の成立と母子癒着

それは、家族の生活の場としての家庭が「主婦と子供」の専有物となり、家父長制的イエ制度にかわって、いわゆるマイホーム（ないしはマイホーム主義）があたらしい「神話」として浮上してきたことを意味する。ここでいう「マイホーム主義」とは、いうまでもなく一般的には、高度経済成長にともなって出現した大衆消費型の私生活優先主義に根ざした家族観と家庭観を意味している。その萌芽はしかし、ふるい文献をひもとくと、すでに明治時代に胚胎していたことが判明する。

妻子あり、父母あり、兄弟あるの一家にして、団欒和楽、人生の幸福の源泉となり、花
 笑ひ、鳥歌ひ、蜜流れ、蝶舞ふの団欒は、ひとり此の家庭の裡にありと迄に感覺せらるゝ
 に於ては、家を懐ひ、家族を思ふの至情は、あらゆる放埒、我慢の邪心を抑へて、人をして
 謹慎、正直、堅固、爽快なる人物とならしむべし〔巖本、1896：p.218〕。

ところが、この引用にしるされるような家庭生活を実現するには、たんに私生活を優先するという指向性だけでなく、ほかにもいくつかの条件をととのえる必要がある。そのひとつは、ゆたかな経済的基盤である。そしていまひとつは「近代」を象徴する民主主義的な家族成員間の関係である。つまり、理想的なマイホームの実現には、第2次大戦の終結

にともなうイデオロギーとしての民主主義の広範な普及と、高度経済成長にともなうゆたかな消費経済が必要不可欠であった。それが昭和30(1955)年代に達成される。こうして家族は、いみじくも端[1987: pp.41-55]が指摘したように、消費生活とその過程での、あそびを共有する「共遊体」としてのみ存続することが可能な時代をむかえるのである。

そこで、高度経済成長が一応の終焉をむかえた1974(昭和49)年に実施された主婦たちの座談会記録[下村, 1974]を参照してみる。それによると、マイ・ホームを実現する夫の条件は、「①入金の義務、②帰宅の義務、③セックスの義務」の3点に集約される。これにたいして「夫の要求」は、「①わたした範囲で何をしようとする自由だが、お金がたりないといわないこと、②帰宅時間についてとやかくいわないこと、③あんまりセックスの要求をしないこと、④ただし、不貞をはたらいたら即刻クビにする」なのだという。

そこには、夫の収入にたよりながら、夫婦の結合関係をセックスで確認し、そのあとは家族の団欒をたのしみたいとする家庭婦人のマイホームへの期待が鮮明にえがきだされている。同時に、そうした期待を否定的媒介としてはじめて夫、つまりは男の家庭生活への要求が成立する事情がよみとれる。その背景には、近代の男たちがたどらざるをえなかった、つぎのような運命がみえかくれしている。

私生活というものこそは人生にとって、一つの極限の価値であるという思想。われわれ日本人に欠けているのはこの思想なのです。私生活を公生活から区別し、私生活を擁護しなければならぬという思想は、深く「家庭」の観念と結びついたものですが、我われ日本の男性はそれを学んだことがないのです[大熊, 1958: p.97]。

こうして家庭生活の主導権は、妻ないし主婦に所属し、夫ないし男は、それに従属する「女性主導型のマイホーム主義」が高度経済成長期以後の日本人の家庭生活を支配することになる。ところで、いったんはずみのついた社会変化は、さらにそれを加速する。マイホームを支配した女性は、そこで必要とされる家事労働を徹底して合理化することによって自由とヒマを手中におさめるようになった。松田[1974]によると、

(現代の主婦は)自由である点では、そとではたらいっている男よりもはるかに自由である。物価の値上りで生活が窮屈になっている面があるにちがいないが、電気製品の普及で彼女たちは家事労働をミニマムに少なくしている。生産力がすすむほど、人間は自由に近づくとする仮説は、男にはあてはまらなかったが、女には事実として現われてきた[p.107]。

では、その結果として手にいれた自由とヒマの受け皿は何であったのか。梅棹[1959b]は、それを「母として子育てにはげむこと」だという。

サラリーマン型家庭では、ひまになればなるほど、母の意識は子供のことで占められることになる。余剰エネルギーはいっさい、子供の上にふりかかる。そういう家庭ほど、いわゆる教育熱心であり、教育熱心な家庭ほど、母が子にベッタリと密着している。……現代の家庭の男は、あまりにも「父」でなさすぎるかもしれない。しかし、現代の家庭の女は、おおむねあまりにも「母」でありすぎるように思うのである [pp.63-64]。

高度経済成長期に「日本人のマイホーム」は、子供とそれに密接に癒着した妻＝主婦＝母によって支配される度合をいっそうつよめていく。それが終焉をむかえるころ、1959（昭和34）年における梅棹 [1959ab] の予言的な当時の現状認識がみごとの中する。

（連合赤軍の家族が浅間山荘にやってきて）わが子に涙ながらの呼びかけを行うのだが、われわれの注意をひいたのは、呼びかけたのはすべて母親ばかりで、父親の姿はほとんど見かけもしなかったという点だ [宮本、1973：p.120]。

第7節 「神話」としてのマイホームの崩壊（高度経済成長期以降）

近代家族そのものの崩壊のはじまり

マイ・ホーム主義の成立とその現実化は、一方では「夫が俸給生活者としてかせぎ、その収入によって妻が家庭をとりしきる」近代家族の理念型のひとつでもあった。しかし他方、明治の国民文化が指向した家父長制的な側面は、その成立過程において、ほぼ全面的に無意味化していく。しかも、マイホーム主義という名の近代家族の理念型は、成立と同時に深刻な崩壊の危機に直面することで、これまた、みずからの「神話」性を暴露しなければならなかった。

昭和40（1965）年代にはいると、「女性上位時代」という言葉が登場し、その自由と権利への意識はさらにたかまり、ひろまっていく。たとえば週刊誌の記事は、つぎのようにしるす。

20歳代の後半から30歳代の前半で女は徐々に変わっていくという。夫離れ、子離れ、そうして女がえり……。妙な自我とやりにめざめて、「妻であるよりも、母であるよりも、あたしは女でありたい」と言い出す。だが、その女であることに、亭主はイイ顔をしない。女であることとは、いったい、どういうことなのか [青木、1974：p.128]。

このように問いかけたうえで、みずから「家事や料理はふたりで」「主婦業にはあまじられない」という女たちの返答を紹介する。マイホームをきりもりする妻であり、主婦

であり、母であった女たちが、さらに自律的な個人としての地位をもとめはじめたのである。それは、いくつかの局面で近代家族の破綻を表面化させることにもなる。当時のジャーナリズムに目をむけると、「妻の家出」や「蒸発」が、けしてめずしいものではなくなっていることがわかる。

(昭和) 40年代にはいって、家出があらたなうねりとなって発生しつつある。この時期は、いみじくも「にげた妻のあとをおう夫の時代」として特徴づけられる。家庭の実質上のかなめといえる妻の、それも原因不明の失踪、というこの不気味な社会現象のさなかに今われわれはたたさされているのである。……しかも注目されるのは、女性の家出人の数のふえ方が著しく、40年代にはいってついに男子のそれを凌駕するにいたっている〔富岡、1972：p.87〕。

それはさらに「こどもを置き去りにして『蒸発』」する若い母親が、とくに都会でふえている」という状況をもたらす〔無署名、1967：pp.12-16〕。こうして、近代家族のひとつの理念型として成立したマイホーム主義は、それが現実化すると同時に、みずから風化せざるをえない状況に直面したのである。

「つよい父親」という神話への憧憬

これまでののべてきたような状況のもとでは、家父長制的な社会規範が、人びとの社会意識にたしかな地歩をたもつことはできない。それは「神話」ですらなくなってしまった。たとえば、日本青少年研究所とアメリカ児童発達研究財団が発表した『子供のしつけ・日米比較調査』〔1978〕によると、「一番こわい人は誰か?」という問にたいして、日本の小学生たちの29パーセントが「母親」とこたえるのにたいして、「父親」とこたえるものはわずか13パーセントにすぎない。学校日記にしるされた「中学生が持っている父親のイメージ」も、家庭における父親の権威のなさを彷彿させる。

「即答できぬくらい存在意識がうすい。母親の半分も接触がないから、仕方がない。空気がたい(女生徒)」「別に尊敬はしていない。ただのサラリーマンで私たちを食べさせてくれるだけの存在だ(女生徒)」「自分の考えを人におしつけるオヤジ。子供を信用しないオヤジ。プライバシーを傷つけるオヤジ。その三要素を含んだぼくのオヤジなんてキライ。大キライ(男生徒)」「私にとって、史上最高のエゴイスト」(男生徒)〔PHP研究所、1983〕。

「お父さん」という言葉から連想する語の調査結果も興味ぶかい。

「月給」「おみやげ」「眼鏡」といった連想語を記入したものが、圧倒的に多かった。また「お父さんのイメージ」を形容詞で書かせると「やさしい」が断然トップで、以下「気前がいい」「おもしろい」「信頼できる」「教育的」といったイメージ・プロフィールが浮かび上がってくる。「きびしい」「こわい」といった、かつての家父長的権威を象徴する形容詞は、ぐんと下位に位置している〔高山、1980：pp.109-110〕。

父親は子どもたちにとって「日曜日の人」〔無署名、1975〕とよばれ、ぎゃくに妻であり、主婦であり、母親である既婚女性は、子供のしつけと教育を一手にひきうけることで、いっそう権威と存在感を肥大させていく。そのことをある精神科医師は、登校拒否児や自閉症児のいる家庭にたいする面接治療の経験をとおして、つぎのように説明する。

両親が子供を連れて相談に来る。喋るのは主として母親である。万事にイニシアティブをとっている。たまに父親がおずおずと発言しても、あなた、ちょっと待ってよ、と発言をさえぎって、たちまちにして主導権をとりもどしてしまう。（そして）夫の生い立ちから、結婚から、今日に至るまでの夫の欠点を洗いざらい述べたて、あの人はほんとにしやうがない人でございますわと鼻をうごめかしてちょっと得意然とした顔をみせて立ち去る。欠点のないのは自分一人だけで、自分がいないと一家の生活が成立しないという状況をひけらかしているという印象をあたえる〔斎藤、1973：p.77〕。

こうした状況のもと、昭和50（1975）年代になると、今度はぎゃくに「強い父親への待望」や「父性原理の復権」などが、まじめな議論の対象としてジャーナリズムをにぎわし始める。それは、さきの精神科医師の議論にも示唆されているように、おりから社会問題化しはじめた登校拒否や家庭内暴力など、子そだてにともなう困難な諸問題が、過剰な母子癒着と父性原理にもとづく家庭内教育の欠落に由来するのではないかという認識に触発されたようである。

つまり、これらの問題は、現代日本の子どもたちが、「①規範的世界をシンボライズする『規範』者、②旧世界秩序を強制的に固定化する『桎梏』としての力、③子供の自立への歩みを守り導く『支柱』としての性質」〔松本、1975：pp.62-65〕を内容とする「父性原理」の洗礼をうけることなくそだった点に存在しているというのである。そのことを、たとえば田島〔1972〕は「強い父親」という「神話」的な幻想への憧憬に転換して、つぎのようにのべる。

父親はもっと威張るべきです。我を通すべきです。もっと自分をたいせいつにすることです。妻や子のためヒトのため気を使うより、まず自分中心に考え、白は白、黒は黒と、

いつもはっきり断定することがたいせつです。なんてたって、父親は一家の「長」なのです。頼りがいのある強さ、信条に忠実で、行動力のあるたくましさ。男の魅力は、努力、体力、実行力にあるのです。だから「断絶」をおそれてはいけません。それにつけても、ちかごろよく聞く「家庭サービス」というコトバは、気色のわるいコトバです。毎日曜を「家庭サービス」につとめたとしたら、いつかは「蒸発」したってもふしぎはないでしょう。あなた自身「父親である以前に男であれ」と叫び、人間回復を宣言すべきかもしれません [pp.107-112]。

昭和50(1975)年代なかばになって、菅原文太や八代英太、ガッツ石松や加藤芳郎などが結成した「雷おやじの会」[加藤、1982: pp.82-83]のころみも、類似の憧憬をはらみながら、子そだてに「つよい父親」が関与すべきだということをうたっている。しかし、ひるがえってみると、「つよい父親」の必要や、それへの願望があらためてかたられるのは、じつは「つよい父親の非在」という現実への反作用そのものだというほかないのである。

第8節 脱「神話」化する家父長制——むすびにかえて

近世なかばから今日までの日本社会において「家父長制的なるもの」がたどってきた変転の過程をめぐる記述はいちおう完結した。それを、つぎに簡単に総括しておく。

- ① 日本社会における「家父長制的なるもの」は、近世の武家社会の「イエ制度」と「家長制」として成立した。やがてそれは明治維新とともに近代日本の国民文化の一翼をになう社会規範として制度化され、全国的に敷衍されていく。
- ② しかし、それは「家長という役割」にわりあてられる権威でしかなかったという点で、古典的な意味での家父長制とは、もともとことなるものであった。しかも、そこには日本の民俗的伝統と矛盾する側面がはらまれてもいた。そのため日本の「家父長制」は、成立の当初から幻想的な「神話」性をあらわにせざるえなかった。
- ③ そのうえ、明治から大正にかけての近代化は、そもそも「家父長制的イエ制度」の社会的基盤をほりくずす方向にすすんだ。俸給生活者の増加、婦人の地位の向上、近代的個人主義の普及と定着などが社会変化の趨勢を先導したからである。
- ④ ただし、昭和10(1935)年代にはじまった第2次世界大戦の時期はべつである。この時期には一時的に、家父長制的イエ制度が息をふきかえし、国民に強制される。

- ⑤ そして戦後、社会の潮流は「家族制度の民主化」を指向し、法制度もまたイエ制度を解体して、民主主義の原理にもとづく家族制度を確立することになった。
- ⑥ やがて昭和30（1955）年代に高度経済成長がはじまると、男たちのおおくは俸給生活者になった。家族の形態も直系家族から核家族に移行する趨勢をあらわにしはじめた。家庭は、家事労働と子そだてを掌握することで、たしかな地歩を確保した妻・母親の支配するところとなった。その結果、「家父長制的家族」という「神話」は、「マイホーム（主義）」という「神話」にとってかわられていく。
- ⑦ ところが、マイホーム（主義）もまた、成立と同時に、みずから風化せざるをえない状況の変化に直面した。自由とヒマを手にいれた妻であり、主婦である女性が「自律」への指向性をあらわにしはじめたからである。いっぽう、家庭生活における夫であり父親である男性の地位と権威は、いよいよ空文化し、いまや「家父長制的なるもの」は幻想的な「神話」ですらなくなってしまった。「つよい父親」の必要性やそれへの願望が、あらためてかたられるという現状が、そのことを逆説的に、しかし雄弁にものがたっている。

では今後、日本人の家族はどんな形態と機能をしめすことになるのか。この問題は本小論の守備範囲をこえる問題である。しかし、すくなくとも近代初期に、明治政府によって国民文化の一翼をになうものとして演出された、規範としての「家父長制的なるもの」の復権がありえないことだけはたしかであろう。これまでに通覧してきた歴史の趨勢もさることながら、現代日本社会における男らしさや女らしさの差異がうすれ、女性が経済的自律を達成し、人びとが「まさに個々人の生活」を重視している現在の風潮をみると、こうした結論以外に想定できる家族の将来はありえないとおもわれるからである。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・青木、1974「ご用心！ 女35歳は亭主離れの年」『サンデー毎日』（6月9日号）
- ・綾部綱斎、1714『家庭指南』（加藤〔1986〕所収）
- ・藤井健治郎、1908「家族主義に対する疑問」『中央公論』（9月号）
- ・春山作樹、1926「我が国将来の家族主義」『太陽』（1月1日号）
- ・長谷川如是閑、1925「過渡期における一時的現象」『婦人公論』（11月号）
- ・端信行、1987「共同体から共遊体へ」（栗田靖之・編）『現代日本文化における伝統と変容③日本人の人間関係』ドメス出版

- ・穂積八束、1885「民法出でて忠孝出ず」『法学新報』（5月号）
- ・巖本善治、1885「婦人の地位」『女学雑誌』（第5号）
- ・巖本善治、1896「家族の団欒」『太陽』（5月20日号）
- ・ジョハンソン、D.C.、エディ、M.A.、1986（渡辺毅・訳）『ルーシー——謎の女性と人類の進化』どうぶつ社
- ・加藤秀俊、1986『家族の本質』放送大学教育振興会
- ・加藤芳郎、1982「『雷おやじ』よ、もう一度！」『文芸春秋』（3月号）
- ・川島武宜、1946「日本社会の家族的構成」『中央公論』（6月号）
- ・今日出海、1940「日本の家族制度・序説」『文学界』（11月号）
- ・松田道雄、1974「『格子なき女の牢獄』からの解放」『潮』（4月号）
- ・松本清張、1958「かなしき家の長たち」『婦人公論』（11月号）
- ・松本滋、1975「新しき父親像を求めて」『中央公論』（8月号）
- ・松本慎一、1946「男女の平等と家の民主化」『女性改造』（8月号）
- ・三浦周行、1915「家族制度の維持と崩壊」『太陽』（6月1日号）
- ・宮本忠雄、1973「人間の内面生活と家族」『中央公論』（1月号）
- ・文部省教育局（編纂）『戦時家庭教育指導要綱・家の道』
- ・無署名、1926「『細君の俸給』問題是非」『婦人公論』（6月号）
- ・無署名、1957「あなたの夫は何点か？」『週刊読売』（1月13日号）
- ・無署名、1959「ぐらつく『父親の権威』」『週刊読売』（6月28日号）
- ・無署名、1967「若い母親にふえている『蒸発』——簡単にわが子を手放す女ごころと夜の誘惑」『週刊サンケイ』（11月27日号）
- ・無署名、1975「日本の父親たちの『甘えの構造』」『宝石』（9月号）
- ・マードック、G.P.、1949（内藤莞爾・訳、1978）『社会構造』新泉社
- ・中牧弘允、1989「現代日本の『神話』」（中牧弘允・編）『現代日本文化における伝統と変容⑤現代日本の「神話』』ドメス出版
- ・中根千枝、1977『家族を中心とした人間関係』講談社学術文庫
- ・中野好夫、1946「家族制度と家族主義」『女性改造』（6月号）
- ・日本青少年研究所・アメリカ児童発達研究財団、1978『子供のしつけ・日米比較調査』（宝石特別取材班、1983「「親父の権威」よどこへゆく？」『宝石』5月号所収）
- ・大熊信行、1958「核時代の父親の条件——揺らぐ父の座」『婦人公論』（11月号）

- ・ PHP研究所、1983『父さんは空気?』（宝石特別取材班、1983「「親父の権威」よどこへゆく?」『宝石』5月号所収)
- ・ 斎藤茂太、1973「父親はどこへゆく」『婦人公論』（1月号)
- ・ 重松敬一、1958「『日本父親大会』を提唱する」『婦人公論』（7月号)
- ・ 下田次郎、1919「日本の家庭制度の現状を論じて若夫婦同居の可否に及ぶ」『新小説』（3月号)
- ・ 下村満子、1974「四分三九秒に一件、離婚急増時代に亭主を脅かす妻の不満」『週刊朝日』（3月15日号)
- ・ 末川博、1947「なくなる家と家督相続」『改造』（11月号)
- ・ 高田公理、1989「『家父長制』神話の軌跡」（中牧弘允・編）『現代日本文化における伝統と変容⑤現代日本の「神話」』ドメス出版
- ・ 田島義雄、1972「父ヨ アナタハ強クナレ」『人と日本』（9月1日号)
- ・ 高山英男、1980「おやじよ、二人目の母親になるな」『現代』（9月号)
- ・ 十返肇、1959「『日本夫権を守る会』設立宣言」『婦人公論』（4月号)
- ・ 富岡倍雄、1972「風化する結婚制度と蒸発」『現代の眼』（4月号)
- ・ 上前淳一郎、1975『現代』（10月号)
- ・ 梅棹忠夫、1959a「妻無用論」『婦人公論』（6月号)
- ・ 梅棹忠夫、1959b「母という名の切り札」『婦人公論』（9月号)
- ・ 渡辺恒夫、1987『脱男性の時代——アンドロジナスをめざす文明学』勁草書房
- ・ 柳田国男、1931『明治大正史 世相篇』朝日新聞社（1970、『定本柳田國男集 第24巻』筑摩書房)
- ・ 米山俊直、1986a「家から家庭へ——家族から家庭へ①」（加藤 [1986] 所収)
- ・ 米山俊直、1986b「家族の析出——家族から家庭へ②」（加藤 [1986] 所収)

第2章 「共同体」と情緒安定の装置・制度系

はじめに——問題意識と本論文の位置づけ

本章のもととなる論文は最初、国立民族学博物館主催の「共同体の二〇世紀」と題するシンポジウム（1996年11月7日～9日）で発表された¹。このシンポジウムの目的や「共同体」の概念規定などをめぐって、同シンポジウム実行委員長の中牧弘允〔1996：pp.1-4〕は、概略つぎのようにのべている。

議論したいことは、主に2つある。第1は、ここ100年くらいの間に人びとの生活を物質的にも精神的にも束ねてきたさまざまな共同体が、本質的にどのような変容をとげたかという問題である。第2は、20世紀にあらたに生まれた共同体が、どのような意図と必要によって生じ、いかなる意味をもってきたかである。共同体は研究者の関心にしたがってさまざまに定義しうる。民族学・文化人類学ではコミュニティーを「対面的な関係のなかで共住する人びとの最大の集団」（マードック）とする立場がある。そのようなコミュニティーはひとつの全体社会をささえる典型的な社会集団としてとらえられる。ちなみに、20世紀の日本における共同体の変遷をおおまかに整理してみると、その質的变化はおよそ3段階になる。すなわち、地縁共同体から社縁共同体を経て「消費縁」共同体ないし「ヴァーチャル」共同体へという道筋である。

いっぽう米山〔1994：pp.112-124〕は、人間関係と人間集団を、もっとも基本的なものから、社会発展の段階を考慮しながら順番に「①血縁、②地縁、③社縁」という3種類のカテゴリーによって類型化することを提案している。そこでふりかえてみると、第3部第1章で筆者が考察したのは、じつは「20世紀の日本社会における血縁集団をめぐる生活文化と世相の変容」という課題であった。それにつづく第3部第2章においては、

¹ 国立民族学博物館の特別研究「20世紀における諸民族文化の伝統と変容」の第5回シンポジウムに相当する。なお、この特別研究は、1981年から1990年にいたる10年間、同館で継続的に実施された特別研究「現代日本文化における伝統と変容」をひきつぐものとして、1991年から、おなじく10年計画ですすめられている。そのさいの筆者に与えられた論題は「大衆社会化のなかの共同体——日本とアメリカ」〔高田、1996〕であった。それをのちに改題して完成した論文は、高田〔1998〕として公刊されている。

「20世紀の日本社会における地縁集団をめぐる生活文化と世相の変容」を中心に「共同体」全般の変容を展望しながら、現代日本における人間関係と人間集団が体験しつつある変化とその方向性をえがきだすことにする。

第1節 ゲマインシャフトとゲゼルシャフト

無意味な類型——ゲマインシャフトとゲゼルシャフト

最初に「共同体」の含意について検討する。たとえば石川〔1984：353〕は「共同体」を「生活の共同性がいちじるしい社会集団」であるとする。この定義は無意味にちかい。「いちじるしさ」の度合をゆるめれば、人間集団のほとんどが共同体になり、つよめれば、共同体とよべる人間集団が存在しなくなる。そこで人間集団の類型化がこころみられる。

そのなかで最古のものひとつが『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』〔テンニース、1887〕である。この書物は「実在的・自然的な本質意思（Wessenwille）」と「観念的・作意的な選択意思（Kurwille）」を区別し、前者がうむ人間集団の契機をゲマインシャフト（Gemeinschaft 基礎集団＝共同体）、後者がうむ人間集団の契機をゲゼルシャフト（Gesellschaft 利益集団＝共同体からの派生社会）と定義した。そして、前者の典型として「成員の同等関係（Genossenschaft）がうみだす相互的共感にささえられた親縁集団や近隣集団」を、後者の典型として「成員の優越・従属関係（Herrschaft）がうみだす目的合理的志向にささえられた企業」を想定する。それは同時に、近代化がもたらす人間集団の歴史的発展の過程でもあるとかがえられてきた。

「選択縁」という概念が提起した問題

それ以来、多様な人間集団の類型化がこころみられる。それを上野〔1987：p.229〕は表3-2-1のように整理した。同時に、血縁に由来する親縁集団、地縁に由来する近隣集団、社縁に由来する企業集団などが、いずれも成員の主体的な意思によっては「選べない縁」であるのにたいし、現代の日本社会には、成員が自由意思によって「選べる縁」にむすばれた人間集団が簇生していると指摘する。その特徴は、①加入・脱退が自由で拘束性がなく、②メディアに媒介される場合がおおく、③過剰な社会的役割からきりはなされて、④趣味、ライフスタイル、価値観、イデオロギーなどを共有する、⑤現段階では女性主導型の人間集団だという点にある〔pp.229-232〕。

表 3-2-1 縁の諸類型

米山俊直	血縁	地縁	社縁	
テンニース	ゲマインシャフト		ゲゼルシャフト	
マッキーバー	コミュニティ		アソシエーション	
クーリー	第一次集団		第二次集団	
磯村英一	第一空間		第二空間	第三空間
望月照彦	血縁	地縁	値縁	知縁
上野千鶴子	血縁	地縁	社縁	選択縁
	(選べない縁)			(選べる縁)
網野善彦	有縁			無縁

では、こうした人間集団は「共同体＝ゲマインシャフト＝コミュニティ」なのか、それとも「利益集団＝ゲゼルシャフト＝アソシエーション」なのか。そこでテンニースの類型の概念構成にもどると、「選択できる縁」がうむ人間集団は、観念的・作意的な選択意思によって形成され、かつ目的合理的志向を充足する点では利益集団である。しかし、成員の同等関係がうむ相互的共感にささえられている点では共同体だということになる。

ここにきてテンニースやマッキーバーなど近代西洋の社会学者の、機能に根拠をおいた人間集団の類型のころもまた、ほとんど無意味であることが判明する。どうやら彼らは、近代の工業化過程で、経済的利益の追求という目的合理的な意思を契機として編成された企業組織が、社会における支配的な人間集団の地位を確立することへの違和感と近代以前の「共同体」へのノスタルジーから、こうした類型化をころみたらしい。じっさい、ふたたびテンニースにもどると、彼は近代以前の親縁集団や近隣集団の「同等関係」や「ふるき、よき（と幻想される）伝統」にささえられた相互的共感と情緒安定機能によい憧憬をいだいていたようにみえる。

のみならず、上野の「選択できる縁」という概念もまた一種の自己撞着におちいる。日本語における「縁」は「人為的にえらべない」ことが前提だからである。それに、血縁はえらべないにしても、地縁や社縁には、部分的ではあれ「個人が主体的にえらべる可能性」が留保されている。という意味において「選択の可否」は、機能に根拠をおいた人間集団の類型とは位相を異にする関係や集団の類型化の方法だとみるべきであろう。

ゲゼルシャフトとしての前近代日本の農家と農村

ところで、富永 [1990 : p.257] が「ヴェーバーになって家ゲマインシャフト」とよんだ、近代以前の農業社会における「家計と経営が未分離な制度体」について、梅棹

[1987] は、つぎのようにのべる。

もともと、少なくとも日本の家族というものはゲゼルシャフトであって、利益団体としての財産なり、さまざまな権益を守るために、みんなが契約を結んでやってきた。…農業というものはゲゼルシャフトでなければできない。……それが崩壊した。戦後ゲゼルシャフトとしての家は崩壊した。ここでいよいよ本音でものをいわねばならなくなった。しかし、そこにたってじつはいうことがないんですね。そこで問題が起こっている。……（他方）なぜ日本でこれだけうまく株式会社が運営できるのかといえ、はじめからゲゼルシャフトであったからだ [pp.264-265]。

では、なぜ近代西洋の社会学者は、ある意味で無意味な、さきのような類型化をこころみたのか。背景には、西洋近代に顕著な二元論がある。それが「ひとつでしかありえない人間の意思」を、観念的かつ作意的に「実在的・自然的な本質意思と観念的・作意的な選択意思」に分節する思考を合理化したのではないかとおもわれる。

第2節 国民国家の成立と「演出される共同体」

時間的に転移されたノスタルジー

近代以前の「家・村ゲマインシャフト」は、農業生産のための利益集団として成員の生存を保証するゲゼルシャフトでもあった。ただし、それは農業生産組織であると同時に、生活資源にかんして自給自足的であり、衣食住のほか、あそびや信仰など、あらゆる生活領域をおおう自己完結性をはらんでもいた。しかも、ヨーロッパでも日本でも、所属する集落以外の場所にでかける機会は限定された。当然、そこでの人間関係は固定的で粘着性がたかく、かつ全人格を包摂しようとする傾向がつよい。それが個々の成員の思考と行動を制約する。リースマン [1950] が指摘したとおり²、当時の人びとは「伝統」の命じる

² ここでいうリースマン [1950] の指摘とは、彼が提起した「社会的性格の3類型」を意味している。つまり、「（工業化が本格化する以前の）高度成長潜在的な段階」には「伝統指向型の社会的性格」が、「（工業化が本格化する）過渡的成長の段階」には「内部指向型の社会的性格」が、「（高度大衆消費が優位となる）初期的人口減退の段階」には「他人指向型の社会的性格」が、それぞれ卓越するという議論である [pp.3-25]。

ところにしがっているかぎり、安定した人生がおくれたのである。

それが日本のばあい、20世紀に本格化する「都市化」と「工業化」の過程で変化する。たとえば1920（大正9）年には、総人口に占める市部人口の比率はわずか18パーセントであった。それが1995（平成7）年には80パーセントにちかづく。4分の3世紀の間に、郡部人口の比率と逆転してしまったのである。むろん、この間に町村合併など、行政区画の再編成がおこなわれた。しがって表面上の数値が、そのまま都市化の指標になるわけではない。しかし、まちがいなく人口のおおくが、村落「共同体」から都市の「大衆社会」に移動した。

ここでいう大衆社会とは、「①（家や村など）共同体から孤立した個人が、②国民国家レベルの社会にほうりだされ、他方、③これら両レベルを媒介する地域社会や自発的結社が虚弱化し、④社会規範が脆弱になった社会」といった程度の意味である。

その背景には「工業化」にともなう産業構造の転換があった。産業別就業者の構成比率の推移を示した表3-2-2によると、第2次大戦を間にはさむ1940～55（昭和15～30）年を例外として、ほぼ一貫して村落でいとなまれる第1次産業の従事者が減少し、主として都市でいとなまれる第2、3次産業の従事者が増加してきたことがわかる。

表3-2-2 産業別就業者数の構成比率の推移（注：単位は％）

（資料：「国勢調査」、出所：（財）矢野恒太郎記念財団〔1986：p.57〕）

西暦	元号	第1次産業	第2次産業	第3次産業
1920	大09	54.9	20.9	24.2
1930	昭05	49.8	20.3	29.9
1940	昭15	44.6	26.2	29.2
1947	昭22	54.2	22.5	23.3
1950	昭25	48.4	22.0	29.7
1955	昭30	41.0	23.5	35.5
1960	昭35	32.6	29.2	38.2
1965	昭40	24.6	32.3	43.0
1970	昭45	19.3	34.2	46.5
1975	昭50	13.9	34.2	52.0
1980	昭55	10.9	33.6	55.4
1985	昭60	9.3	33.0	57.6

つまり、この間に人びとは、仕事と収入をもとめて村落から都市へと仕事場と住居をうつした。しかも彼らのおおくは、やがて都市での生活が、粘着度のたかい村落での生活に

くらべて、ずっと自由であることを実感する。ふるいドイツの格言どおり「都市の空気は自由にした」のである。

前近代の都市「自治」と近代国家

しかし、自由が保障され、その恩恵を享受するには「自律的な自由の規範と自治能力の共有」が必要不可欠である。たとえば近代以前、天領であった京都の場合には、それが保障されていた。じじつ「(京都の)行政は江戸時代、京都所司代、京都町奉行がおこなっていたが……洛中の庶民の自治は、従来各町の町組が処理するならわしであった」〔CD I、1973：p.389〕という。このように近代以前の日本の都市にも、警察や消防や教育などをふくめた自治機能をまっとうする地域ごとの人間集団が実在していたのである。

ところが明治維新以降、まず町組の機能が、あらたにもうけられた市町村や府県などの広域行政機関に移管され、急速に地域の自律性が低下する。そこに村落から都市をめざすあたらしい住民が、最初はすこしずつ移住しはじめた。この趨勢は、ずっとくだって第2次大戦後の1955(昭和30)年から1975(昭和50)年前後にかけて展開される高度経済成長の時代に頂点にたつする。こうして日本の都市は、めざましいいきおいで膨張する時期をむかえた。

それは近世の封建制度のもとで、それぞれに殖産興業にはげんできた小地域が、全国的規模の工業化にまきこまれながら、近代的な国民国家に統合されていく過程でもあった。こうした状況のもとで、国家という全体社会の末端に位置する地域社会は、さきにみたように、さまざまな形態の再編成を経験せざるをえなかった。

くわえて、もっとも基本的な人間集団である家族のありようが変化する。近代以前のそれは、農業や手工業・商業など、生業活動をともにする生産集団でもあった。それが近代化・工業化にともない、本論文の第3部第1章第6節でみたように、家計を家族の誰か、たいていは企業や役所に勤務する夫(=父)がかせいでくる俸給に依存する、いわば消費生活だけを共有する人間集団に変化していく。

こうなると家族成員が、より大幅な自由を要求しはじめる。それを実現するには、家族間の上下関係が単純で、成員数もすくない核家族が指向されるようになる。同時に、家族の紐帯は、たとえば大正時代に都市の中産階層がめざした「一家団欒」に象徴される成員相互の共感と情緒安定機能に依存する度合をつよめる。現代の「共同体」イメージが、成員相互の共感と情緒的安定に傾斜するのも、こうした趨勢の結果である。テニニスやマ

ッキーバーが、ある意味でノスタルジックに、家族や村落共同体などをゲマインシャフトやコミュニティと名づけたのも、よく似た文脈のうちにとらえることができる。

軍隊と隣組——国家が演出した「共同体」

それだけではない。近代化の過程で農村から都市に居住地をうつした多数の日本人、彼らに相互の共感と情緒的安定を供給することで都市と国家の安定をはかろうとした国家権力や近代的企業の意味にも、このことは敷衍できる。

たとえば天皇を頂点とした「八紘一宇」を標榜した昭和終戦前期までの国民国家は、日本はおろか、さらに大東亜共栄圏という幻想の「共同体」を実現しようとした。それを軍事的にささえる軍隊は、あきらかに戦争での勝利という目的にむすばれたゲゼルシャフトである。しかし同時に、青年男子に「共死」をしいることで、かりそめの情緒的結合の醸成をめざしました。これと同様に1938（昭和13）年、「防空、防火、防諜、防犯、国民貯蓄、物資配給の円滑化」を目的に制定された「隣組」制度も、他方では「緊密な人間関係の美風」をうたいあげている。これらはいずれも「体制が演出しようとした共同体」とよばれるのがふさわしい。

第3節 大衆社会化状況のもとでの「共同体」

高度経済成長期の日本企業

こうした「共同体」をめぐる構図は、第2次大戦後、軍隊や隣組が解体されたのちも、すこし形をかえて継承される。そのひとつが、1955（昭和30）年前後に本格化する高度経済成長をささえた日本的経営を指向する各種の企業である。それは企業本来の「利潤の追求」という目的をめざすと同時に、高田〔1987：pp.147-165〕がのべたように、①終身雇用制度、②年功序列にもとづくタテ型ヒエラルキー、③企業別組合に象徴される「滅私奉公」の行動規範に支えられて、④生産性の向上を至上目的としてスケール・メリットを追求する、⑤「男の世界」という特質をあらわにしめした³。

ところで、こうした現象が観察された1970（昭和45）年前後、筆者は京都の街の場末で酒場を経営した経験をもっている。そこに展開された風景には、つぎのような意味がか

³ この問題については本論文の第4部第1章において、くわしく論じられる。

くされていたようにおもう。つまり、

当時の日本には、酒をのむなら泥酔するまでのむという、一種の泥酔の美学がたしかにあった。それは日本のむらの伝統的な酒のみようでもあった。つまり日本のむらでは、その共同性を高めるために、日時と場所をさだめ、たくさんの人があつまり、神をまつり、御馳走をたべ、かたり、うたい、おどり、たのしみながら参加者が「かりそめのひとつ心」にとけあっていくためにこそ酒をのんだのである。それが高度成長期の企業にうけつがれた。そのころの日本の基幹産業は、製鉄や造船、家電や自動車などであり、それらを製造する企業は、少品種の製品を大量に生産し、大量に販売することで発展した。そこでは、社員や同僚が、たがいに腹の底までわかりあい、ひとつ心にとけあうことが不可欠であった〔高田、1995：p.8〕。

むろん当時の企業は、まず製造コストを低減して製品の市場性をたかめ、企業利潤を最大にする大量生産・大量消費の実現のために「モーレツかつ勤勉にはたらく」利益集団であった。しかし同時に、その結果もたらされる多忙や人間関係の緊張を、たとえば酒場とともに泥酔することで緩和し代償する、サラリーマン相互の共感と情緒安定のための「共同体」としても機能していたのである。

国民生活審議会と「コミュニティ」

これとおなじころ、国民生活審議会コミュニティ問題小委員会は『コミュニティ——生活の場における人間性の回復』〔1969〕を発表する。小学校区程度の地域社会を「コミュニティ」ととらえ、それを「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として、地位規制と各種の共通目標をもった、解放的でしかも構成員相互の信頼感のある集団」と定義し、現代社会におけるコミュニティ形成を促進しようとしたのである。

それは、男たちが企業に生活のあらゆる局面を依存する傾向をつよめ、あわせて既婚女性に占める専業主婦比率が瞬間的に54.5パーセントというたかい数値をしめす1975（昭和50）年にむけて、経済の高度成長が絶頂をきわめようとする時期でもあった。そんな時期に行政は、おもに家庭にのこされた主婦のために「地域コミュニティ」という名の「共同体」を提供しようとかんがえたわけである。

しかし、そこには昔の村落のような、①土地とむすびついた生業の共通性、②定着生活にともなう村落という人間集団へのつよい依存性、③それに由来する全人格的包摂をしい

る必然性などは存在しない。その結果、行政が主導する「地域コミュニティづくり」の構想は「おおきな世話」の域をでなかった。そのかわりに彼女たちをとらえたのが、①（たいていは夫の仕事と無関係な）趣味や価値観の多様性、②電話や自動車など通信や輸送の手段がもたらす情報伝達や移動の利便と自由、③人格の一定の側面だけを共有する気らくさなどが享受できる、冒頭で紹介した上野〔1987〕の言葉をかりれば、「選択縁」にむすばれたあたらしい型の人間集団であった。

もっとも、第2次大戦の前後をとわず、国家や企業や行政が演出しようとした「共同体」のほかにも、随時・随所で大小さまざまな「共同体」を建設することが、あたかも時代のおおきなながれに姿をあらわす波頭のようにこころみられる。

「新しき村」「山岸会」から「オウム真理教」へ

それはこういうことである。ほんらい、近代以前の共同体は、その成員を物心両面から充足させる条件を提供しながら、その全存在を共同体の存続のために供託することを要求する人間集団であった。ところが近代的工業化の結果、さしあたり物質的充足の主体が従来の共同体から外在化された各種の産業に転移する。そしてやがては高度成長期の日本企業のように、それが精神的な充足の条件までもひきうけるようになる。

ところが、このように体制化された組織をとおして近代化の恩恵を享受できなかった人びと、あるいは、そうした時代のながれに敵対する立場を選択した人びとは、前項にのべたのとはことなった場所に、みずからを供託するほかない。たとえば制度化された社会規範とは別種の規範にむすばれて高度経済成長期に巨大な組織にそだつ暴力団、おなじ時代に当時の若者の一定の支持をあつめた、いわゆる「新左翼」集団などはその一例である。あるいは、近代以前の村落共同体をモデルに、生活のあらゆる局面を包摂した生活共同体の構築をめざした運動もすくなくない。

たとえば、白樺派の文学者・武者小路実篤が提唱し、1918（大正7）年に宮崎県児湯郡木城村に建設した「新しき村」は、そうした生活共同体のひとつである。その精神は、自他を犠牲にすることなく自己をいかすことにあり、村民は自分の労働によって自分の生活をささえ、自由をたのしみ、個性をいかす生活をめざした。背景には、その前年におけるロシア革命の成功と社会主義思想の普及、日本国内の政治や経済の混乱、大正デモクラシーの高揚などがある。そうした状況下で、トルストイのつよい影響を受けた実篤の白樺派人格主義の実践のこころみが青年層におおきな反響をよびおこしたのである。創設当初の

参加者は、実篤とその妻のほか約 20 人であった。ただ、やがてダム工事で農地の大半が水没することになり、1939（昭和 14）年、埼玉県入間郡毛呂町に「東の村」を建設する。そして 1948（昭和 23）年に財団法人の認可をえたあと、埼玉では養鶏に主力をそそぎ、幼稚園や陶磁器制作のための窯や印刷所などをもうける。その後 1984（昭和 59）年現在、日向の村に 4 名、埼玉の村に 57 名が在住していたという。

いまひとつ、第二次大戦後の典型的な事例として 1953（昭和 28）年、「無所有一体社会」の実現をめざして三重県阿山郡伊賀町川東に山岸巳代蔵が創設した「山岸会」がある。その思想であるヤマギシズムの核心は「自己は他によって生かされている」という信念にささえられた「個人の我執の放棄」にある。ここでいう「他」とは、人間以外に動植物など、あらゆる自然をふくむ。その理想は自然と人為とが一体となった社会の実現である。また、ヤマギシムには楽観的な科学への期待、それがもたらす快楽・快適の享受があり、人間の理想を「快さと遊び」の一元的な達成であるとかんがえた。その実現のために養鶏を奨励し、賛同する農民を結集し、設立から 6 年目の 1959（昭和 34）年には、財産の団体への寄進をめぐって「山岸会事件」と称される社会問題が発生して有名になった。巳代蔵の死後、会は分裂するが、その思想を継承する「護教派」が主流派となり、1984（昭和 59）年現在、全国に 22 か所の実顕地と 1000 人以上の定住者を擁し、養鶏を中心に酪農から農業全般、最近はその 2 次加工にも着手している。1960（昭和 35）年末の大学闘争後には相当数の青年が流入し、コミュン運動の典型のひとつとして注目された。

ここでは 2 事例にとどめるが、類似の「共同体」のころみはおおい。「一切の存在を神意によるとかんがえ、どんな人でもうけいれる」信念から奈良市大倭に矢迫日聖が設立した大倭紫陽花邑。「許されて生きる」ことをさとした西田天香が 1905 年、京都市山科四宮に開設し、農業や印刷業、幼稚園から短大までの教育施設、演劇集団などを擁し、数十家族が共同生活する一灯園。天理教からわかれて村八分にあった尾崎増太郎など 5 家族が、奈良県宇陀郡榛原町笠間にはひらき、農業とふすまつくりをおもな生業に、共同生活する心境部落などが、そこにふくまれる。

ところで、これらのうごきには、いくつかの共通点がある。①指導者の内部に芽ばえた「信念」が集団の成員の共感の中核にある、②農業を中心に共通の生業に参加しようとする、③私有財産制度にかえて共有財産制度を志向すること、などである。

そのうち、①の「指導者の内部に芽ばえた信念とそれへの帰依」とは、ふたたびリースマンの指摘を借用すれば、彼が「羅針盤」にたとえた「人口増加期＝工業化の時代」の社

会的性格に顕著な「内部志向」にはかなるまい。ただし、それは時代の趨勢である「工業化」ではなく、②にのべたように、それに先行した「農業」への憧憬をあらわにしめす。そこには「自給自足による自己完結性」を可能にする条件をみたく必要にくわえて、すぎさった農業の時代へのノスタルジックな退行の影が感じられる。そしてそれは、③に示唆されるように、さらにふるい太古の原始共産制を夢想するいっぽう、1917年のロシア革命のつよい影響をうけているようにもみえる。

なお、やや蛇足めくが、極度に自閉的な志向性のはてに、毒物サリンによる大量殺戮の実行主体として瓦解したオウム真理教も、うえにのべた「共同体」に似た属性をはらんでいた。ただし、彼らが構築した化学工場にも似た施設群をみると、無意識のうちに彼らは、農業ではなく工業に依存する「共同体」の建設を妄想していたらしい。そこで1995（平成7）年が、インターネットの普及をはじめ、さまざまな局面で社会の情報産業化が加速した年であったことをおもうと、ここにもまた「現実からの退行」という色彩が濃厚によりとれる。

第4節 情報のマッサージ性と「共同体」

形骸化する現代日本の家族と家庭

こうして、日本における20世紀の共同体を「『前近代ノスタルジー』の精神安定装置」ととらえる問題提起は完結する。しかし、ほんらい「共同体」とは、冒頭に引用したように、「生活の共同性がいちじるしい社会集団」ではなかったか。それをここでは、衣食住などの物質生活における共同性を捨象して、主として成員の共感と情緒的安定をはかる装置としてとらえてきたのはなぜなのか。

それは近代、とりわけ20世紀に工業化と都市化が進行したからである。その結果、本来は育児からはじまり、教育、生産労働、消費生活、儀礼、遊びなど、基本的な生活の全領域を包括し、さまざまな葛藤や軋轢をはらみながらも、成員の共感から情緒的安定までをもひきうけていた家族と村落が、変質を余儀なくされた。つまり、生産労働は企業に、教育は学校に、育児と消費生活は家庭と地域社会に、主としてゆだねられ、儀礼やあそびなどは、恣意的に場所と日時を定めておこなわれるようになった。こうした状況のもと、社会と家庭の両面における男女の性別分業が、とくに日本では極端なかたちですすんだ。それは、明治時代の「男が外でかせぎ、女が家事を分担する」という通念の成立以来、と

くに第2次大戦後の急速な工業化＝高度経済成長の過程で現実化した。そして、企業は「男の」、家庭と地域社会は「女と子供の」、それぞれ別の特徴をもつ世界となった。

その結果、家庭と地域社会における消費生活は、男がかせいできた金銭と女の家事労働にささえられ、そこに子供たちをくわえていとなまれることになる。しかも、多忙化する男たちの職業生活は、確実に女・子どもとの接触の機会や時間を減少させる。その結果、男・女・子供のいずれもにとって、相互の共感と情緒的安定の場を見つけるのが困難になった。それが男の場合は企業に、女の場合は地域社会に仮託された。

ただ、主として女の場合、こうした要請に地域社会がじゅうぶんにはこたえられなかった。そこで実際には「選択縁でむすばれた人間集団」が簇生する。さらに、そのいずれにも充足されなかった人びとのむれもすくなくなかった。そのことを本章第3節にのべた、いくつもの「共同体」のころみかものがたっている。ただ、そのおおくは、おおきな潮流にならず、オウム真理教のような巨大化のころみは瓦解するケースがおおい。ならば今後、人びとの相互的強化と情緒的安定の機能は、どのようにみたされるのか。

共感と情緒的安定を提供する「情報のマッサージ性」

そこで最初におもいだすべきは、現代という時代における情報産業の本格的な開花である。そのおおくは、人間相互の共感と情緒的安定という課題にこたえることを期待されている。なぜなら、情報のはたす機能は、すでに第1部第1章でもみたように、つぎの2つに類型化することができるからである。

つまり、コンピュータや通信技術の発展がもたらす情報化は、まず社会や文明の装置と制度に作用して、その効率をたかめる。こうした情報の機能を筆者は「情報のメッセージ性」と名づけた。しかし同時に情報には、人間の心身に作用して、それをよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる機能がある。こうした情報の機能は「情報のマッサージ性」とよばれるのがふさわしい。それを相互に交換する人間のネットワークが形成されて適切に運用されれば、それは当然、人間相互の共感と情緒的安定という課題にこたえる可能性をはらむことになる。

アイデンティティとメタモルフォーゼ

そこで、物心両面から人間の生存とその情緒的安定を保証した共同体のありようの推移を、人類史のなかにたずねてみる。すると、おおまかに血縁集団に依存するほかに生存

が維持できなかった狩猟採集の時代、それに地縁集団がかさなった農業の時代、さらに企業に代表される社縁集団への所属が必要不可欠であった工業の時代が区別できる。そこでは、人間相互の共感と情緒的安定もまた「所属する共同体」によって供給された。

しかし、社会の情報（産業社会）化が本格化すると、「一定の価値や関心への準拠」を前提とするネットワーク型の人間関係がしばしば、あたらしい型の一種の「共同体」として、これを代替する可能性が芽ばえる。コンピュータ通信をはじめ、従来以上に自由度のたかい選択性に由来してむすばれた人間の相互関係の一般化が、それを予感させる。という意味において、「所属する共同体」は、その歴史的な役割をおえつつあるのかもしれない。

それは、高田保馬〔1921〕が提唱した「人間と人間の関係の多さと深さの積は一定である」とする「結合定量の法則」の作用だとかんがえれば理解しやすい。つまり、農村から都市へ、工業から情報産業へと時代が推移することで、人びとが関係をむすぶ相手の数は確実に増加する。当然その反作用として、相互の関係はうすれるほかないからである。

こうした時代に、他者との関係を円滑にする方途は、みたびリースマン〔1950〕を参照すると、内部に強固な「羅針盤」をそなえて直進することではありえない。それよりは、あたかも「レーダー」を装備しているかのように、つねに周囲の状況をモニターしながら他者に接する「他者志向型」の社会的性格を身につけることが要請される。いわば強固なアイデンティティ（自己同一性）に固執するより、メタモルフォーゼ（変容）をくりかえしつつ、他者との関係を調整しつづけることが、相互の共感と情緒的安定の条件となる。そういう意味において現代は、「風とおしのよい多重人格の時代」とでもよばれるのがふさわしい。

いまひとつ、そこでは仕事よりあそびにちかいいとなみの共有が重要な意味をはらむ。「ひと昔まえの仕事は、つぎの時代のあそびになる」という傾向が顕著だからである。かつて近代という時代に「共同体」を志向した集団も無意識のうちに、このことを認知していた。じじつ農業がはじまるまで、動物の狩猟や魚つりや植物採集は生存のための労働であった。それが農業の開始にともなって娯楽に転化する。やがて工業の時代には、農業のまねごととしての園芸があそびになった。そして今日、仕事のおおくが情報処理にうつるにつれて、各種の工作など「ミニチュア化された工業」がたのしまれる。

これと同様、工業化が進行する近代日本では、人びとのおおくが、ひと昔まえに人びとの生活をあたたくつつんでいたはずの「共同体」を、イメージのうちで理想化しながら

ら、そこへの回帰にあこがれてきた。それが今日、情報（産業社会）化という時代のながれのまっただなかで基幹的な性格をつよめつつある情報産業が「あそび」を指向する。ならば今後、人間のあらゆるいとなみがあそびとして演出され、たのしまれるようになることはあきらかだということになるろう。

こうした状況下において端〔1987〕は、かつて生活の全領域を支配した家族や家庭は「あそびを共有する共遊体」に変容しつつあるとのべた。そうであるのならば、家族や家庭は人びとに、相互の共感と情緒的安定を供給する未来的な役割をはたすはずである。ところが現実には、最近、むしろその崩壊が話題にのぼる。これはいったい、どうしたことなのか。

たぶん家族や家庭という人間集団を「共同体」として制度化しようとする視線が、よりたかい年齢層の成員の価値観を支配しているからである。そのために家族や家庭が、容易に「共遊体」になれない。さらに、父・母・子供たちが形成する核家族を想定したとき、それぞれの生活領域があまりにことなるために、たとえば話題の共通性がみつからないといった固定観念が作用している可能性もある。

しかし、すこし見方を変えれば、相互にことなってきた知識やかんがえかた、感じかたをもっている「異人」どうしであるからこそ、話をかわすのがたのしく、ともに時間をすごすのがおもしろいのではないか。人間関係が多様化し、希薄化することによって、「共同体」が歴史的な役割をおえる時代には、こうした人間関係にみずからを投企することで、そこから相互の共感と情緒的安定を享受することがもとめられている。

第5節 企業と地域社会をめぐる日米の比較

日本とアメリカで共通する条件

こうして 20 世紀の日本における「共同体」がたどった運命にかんする論考が、いちおうおわる。では、第 2 次大戦後、つねに日本とふかい関係をもちつつ、おおきな影響をあたえてきたアメリカ社会において、共同体がどのような運命をたどったのかをめぐって、ごく簡単な比較をこころみておく。

まず、相互のあいだには類似した条件がすくなくない。①都市化と工業化、②大衆社会化の進行などが、それにあたる。その結果、アメリカにおいても、こうした時代のながれのなかで制度化された社会規範とは別種の規範にむすばれた多様な「共同体」建設のここ

ろみがおこなわれた。

近代的工業化に対抗し、徹底的に伝統的な生活様式に固執して「擬似的な民族集団」の様相を今なお呈しつづけているアーミッシュ、1920年代のシカゴを中心に、当時の体制が用意した「禁酒の規範」を逆手にとって「暴力的共同体」として隆盛をきわめたギャング集団、狂信的な信仰にむすばれながら集団自殺によって自己崩壊した人民寺院など、その事例はすくなくない。このことは20世紀のアメリカにおいても、日本と同様、かつて物心両面にわたる人間の生存、相互的共感と情緒的安定を提供した「共同体」が「大衆社会」に溶解する過程が進行したことをしめしている。

日本とアメリカでことなる条件

しかし他方、日本とアメリカでは条件のことなる側面のあることもわすれてはならない。

第1に、持続的発展を重視することで「共同体」としての性格を濃厚にした日本の企業にくらべて、アメリカの企業は、資本にとっての利潤の確保を第一義的に追求する「利益団体」に徹した。その背景には、日米の企業風土の相違が作用している。すなわち、①終身雇用↔️随時雇用、②年功序列↔️能力主義、③企業別労働組合↔️産業(職能)別労働組合、④滅私奉会社↔️私生活主義、⑤スケールメリット↔️効率重視、⑥「男の世界」↔️「能力があれば女でも」——これらの点で日米の社会は、きわめて対照的である。

第2に、ふるい伝統ゆえに流動性がひくく、所与的な規制のおおい日本の地域社会にくらべて、アメリカの地域社会は、17世紀における植民の開始以来、相互扶助をめざす成員の意志によって形成され、しかも移動にともなう流動性がたかかった。こうしたアメリカ社会の特質が、工業化・都市化以後も保存され、利益団体に徹する企業にかわって、その構成員に一定の相互的共感と情緒的安定をもたらす役割をはたした。そのため日本のように、行政がコミュニティ形成を先導しなくても、都市近郊の近隣住区においてコミュニティが生活単位のひとつとして機能しえたのである。

そして第3は、実際には異民族が混住しているにもかかわらず、おおむね均質とみえがちな日本社会にくらべて、アメリカ社会は、世界中の多様な異民族がそれぞれに自己主張する、まるで「サラダボール」のような相貌を呈している。そこでは文化を共有する民族集団(エスニックグループ)が、一種の「共同体」としてのおおきな役割をはたしてきた。それがまた、見方によっては神経症的なままでにつよい個人や集団のアイデンティティ(自己同一性)の追求を人びとに課しているようにみえる。

ただし、日本においてもアメリカにおいても、「共同体の二〇世紀」という話題は「都市的大衆社会化」にともなって増大する不安を「前近代へのノスタルジー」に託して補償しようとする人びとの願望とふかくむすびついていることだけは、相互に共通するたしかかな事実だといえるようにおもわれる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・ 端信行、1987「共同体から共遊体へ」（栗田靖之・編）『現代日本文化における伝統と変容③日本人の人間関係』ドメス出版
- ・ 石川栄吉、1984「きょうどうたい 共同体」『大百科事典（4）』平凡社
- ・ 加藤秀俊、1967『アメリカ人——その文化と人間形成』講談社
- ・ 中牧弘允、1996「問題提起」『国立民族学博物館特別研究「二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容」シンポジウムV「共同体の二〇世紀」』国立民族学博物館
- ・ リースマン・D、加藤秀俊・訳、1964『孤独な群衆』みすず書房（原著：Riesman, David, 1950. *The Lonely Crowd——A Study of the Changing American Character*. New Heaven)
- ・ 千石保・ロイズ・デビッツ、1992『日本の若者・アメリカの若者——高校生の意識と行動』日本放送出版協会
- ・ 高田公理、1987「職場の人間関係——その『近代化』の完成と再編成」（栗田靖之・編）『現代日本文化における伝統と変容③日本人の人間関係』ドメス出版
- ・ 高田公理、1995「居酒屋・おはなし・やりとり考」『サントリークォーターリー』（48号）サントリー株式会社・東京広報部
- ・ 高田公理、1998「『前近代ノルタルジー』の精神安定装置——日本とアメリカにおける大衆社会化と共同体」（中牧弘允・編）『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容⑤共同体の二〇世紀』ドメス出版
- ・ 高田保馬、1921（1971復刻）『社会学概論』岩波書店
- ・ テンニエス・F、1887（杉之原寿一・訳）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念（上）』岩波書店
- ・ 富永健一、1990『日本の近代化と社会変動（チュービンゲン講義）』講談社
- ・ 上野千鶴子、1987「選べる縁・選べない縁」（栗田靖之・編）『現代日本文化におけ

- る伝統と変容③日本人の人間関係』ドメス出版
- ・梅棹忠夫ほか、1987「Ⅷ 総括討論」（栗田靖之・編）『現代日本文化文化における伝統伝統と変容③日本人の人間関係』ドメス出版
 - ・米山年直、1994『（新版）同時代の人類学——21世紀への展望』日本放送出版協会

第4部 労働と生産の現場における生活文化

第1章 職場の人間関係——近代化の完成と再編成

第2章 人生の転機——内部指向から他者指向へ

第4部 労働と生産の現場における生活文化

第3部第2章において筆者は「表 1-2-1 縁の諸類型」を提示しながら、あらゆる人間集団の類型化のこころみを相対化する思考実験をおこなった。しかし、それでも血縁・地縁・社縁という人間集団の編成の契機を類型化する古典的な図式は、血縁を「出生と婚姻」に、地縁を「近隣居住」に、社縁を「結社」に、それぞれ由来する人間集団の編成の契機であると定義しておくかぎりにおいては正確かつ有効でありうる。

そのうち、20世紀の日本社会において卓越したのは、さしあたっては労働と生産と利潤追求を目的として編成された結社の一形態としての「会社・企業」という名の人間集団である。それは20世紀初頭における日本における資本主義的生産活動の確立のあと、2度にわたる世界大戦、高度経済成長期から1970年代なかばにかけて、さまざまな局面をふくめて劇的な変容を体験してきた。第3部では、この時期における、企業社会を中心とした労働と生産の現場における人間関係の変容、そうした場所に、主たる生活の基盤をおいた人びとの人生への対処のしかたの変容を考察の対象としたい。

第1章 職場の人間関係——近代化の完成と再編成

第1節 「職場の人間関係」の定義と起源

本論考における「人間関係」の定義

近代以降の人間には「個性」がある。それは、生活様式および価値観の差異としてあらわれる。つまり、個性は「個人に特殊な文化」であるともいえる。

つぎに、さしあたり「人間関係」を、個人と個人のあいだの「文化的変異の対立と調和のメカニズム」であるとかんがえる。それは、個性をもった複数の人間がであったときに「自然に発生する」という意味で「自生的人間関係」であるといつてよい。

これにたいして、労働や生産や利潤追求を目的として編成された会社や企業社会に代表される職場にあっては、それらの目的を達成するために、社会化された雇用関係や職制といった「制度的人間関係」のシステムの確立が必要不可欠である。そして、制度的人間関係は、それぞれに個性のことになった複数の個人のあいだの「地位と役割の対立と調和のメ

カニズム」として機能することが期待される。

第4部第1章における「職場の人間関係」とは、「自生的な位相」と「制度的な位相」に分節化されることによって、それぞれ上にのべたような意味をはらんだ現象である。

「発見」された「職場の人間関係」

「職場の人間関係」が注目をあつめるようになるのは、1920年代のアメリカの産業社会においてである。そのきっかけは、1924年にG・E・メイヨーらがはじめたウェスタン・エレクトリック社のホーソン工場における「生産性向上のための環境条件の研究」と、それにつづく一連の産業社会学的研究にあった。

これらの研究は最初、「工場における生産性は作業現場の照明度に依存する」という仮説にもとづいて設計される。ところが、調査がはじまってみると、照明をくらくしても生産性は上昇することがわかった。そこでメイヨーらは、照明以外に、休憩時間や作業者の位置関係などを変化させながら生産性向上の条件を検討した。その結果、調査がおこなわれているかぎり、作業条件の変化とは無関係に生産性が上昇しつづけるという、おどろくべき事実が判明した。なぜ、このような結果が生じたのか。

研究者たちが得た結論は、被験者である女工たちの「態度の変化」ということであった。彼女たちは、お互いに親密になり、仕事および監督者に対する態度も、従来よりも目立ってよくなってきた。とくに、重要な点は、「わたしたちは、会社が（おこなっている）、わたしたちの幸福のために役立つような、なにかしら大切な研究のために選ばれたものである」、こういう自負心と責任感に燃えていたことであった〔田崎、1963：pp.17-18、（ ）内筆者〕。

研究はさらにつづけられた。その結果、つぎのような事実があきらかになった。

（工場での作業をともにする）少人数の集団は、メンバーの積極的意志によってえらばれたリーダーのもとに、一種の自然発生的なチームを形成していることがわかった。これらのリーダーは会社側から一定の権限を委ねられた人びとではないにもかかわらず、集団内において、公式的権限をもった人びとよりもずっと大きな統制力をもっていた〔関、1968：pp.180-182、（ ）内筆者〕。

こうして、工場における労働生産性は個人の主体的満足度に依存し、かつ個人の主体的満足度はインフォーマルな自生的人間関係の円滑さの度合によって決定されることが判明した。それ以来、職場における人間関係の研究は「ヒューマン・リレーションズ (Human

Relations) 」とよばれる研究分野を確立し、円滑な自生的人間関係を効果的に醸成する制度的人間関係の開発をめざすようになった。

ところで、職場における人間関係をめぐる、以上のような知的探求の歴史をながめながら、それを思考実験をとおして考察してみると、そこにはつぎの4つの意味がはらまれているようにおもわれる。

- ① 自生的位相と制度的位相のいずれにおいても、人間関係一般は、前近代の人びとの人格や行動様式を制御していた共同体の規範と慣習にかわるものとして「個人の個性」を対置した近代社会の「発明」である。
- ② それが「職場の人間関係」という形態をとるようになった背景には、工場労働と近代的企業の成立といった条件が存在している。
- ③ 職場の人間関係にたいする、対象化された関心は、のちほどみるようにアメリカと同様、日本でも1930（昭和5）年ごろに芽ばえはじめている。
- ④ 職場におけるこのましい人間関係は、自生的人間関係の自然なありかたに適切に対応する制度的人間関係の成立によってもたらされる。

第2節 現代日本における「職場の人間関係」

『気くぼりのすすめ』（1982年のベストセラー）

1930年から約半世紀をへた現代日本で、職場の人間関係は、どのような状況の変化をたどりつつあるのか。ここではそれを、勤労者人口の圧倒的多数を占める給与生活者としてのサラリーマンと、彼らが形成するサラリーマン社会に焦点をあてて考察する。

その最初に、やや唐突ながら1982（昭和57）年の秋に発売され、またたく間にミリオン・セラーになった鈴木〔1982〕の『気くぼりのすすめ』をとりあげて、その内容と販売状況を検討してみる。この書物は、著者の言葉をそのまま借用すると「人間関係を円滑にするためのヒントを展開しているだけ」であり、まるで興味ぶかい書物とはいいがたい。

ところが、その書物が爆発的なベストセラーになった。筆者が電話でインタビューした講談社の担当編集者・古谷信吾氏は概略つぎのようにのべた（1985年2月18日）。

（公称）実売部数は1985（昭和60）年2月15日現在で326万部。返信用読書カードの集計結果によると、おもな購入層の職業はサラリーマンとOLであった。その点で、おなじころ家庭の主婦を中心に全国民を巻きこむ空前のベスト・セラーとなった『窓ぎわの

トットちゃん』[黒柳、1981]とは、きわめて対照的である。購入層の性別は、発売当初は男性が多かったが、100万部を超えたころから女性がふえ、結局ほぼ同数となった。年齢別の購入者数は20代、40代、30代の順でおおかった。読書カードの記述において特徴的であったのは「ハウツウものとしてよりも、人生訓として役にたった」という意見が大勢をしめた点である。

つまり1980年代の日本のサラリーマンやOLのおおくは、つねに他人との関係の形成にかんして「気くばり」という、すぐれて個別的で非制度的な注意をはらうことに相当の関心をそそいでいたらしいことがうかがえる。

「職場の人間関係」における葛藤と精神疾患

それは、人間関係が一般に「やっかいで面倒なもの」だからである。そのことにかんして加藤[1966]は、概略つぎのようにしるしている。

人間関係は無秩序に広がってゆく[p.125]。ミードのことばを借りれば、(そのとき)「人間は知り合いの相手によって、あらゆる種類の異なった自我にみずからを分割する」。そのすべての結節点でなめらかに「理解」しあい、矛盾なく自分の内部で統合するなどは無理な話である。どこかで、われわれは、ぎくしゃくとした葛藤を経験する。そのかぎりにおいて、われわれは例外なく潜在的に神経症患者であるかもしれない[pp.124-125]。ところが、日本のサラリーマンのあいだに「流行」した精神神経的疾患の歴史を追跡してみると、そのすべてが、かならずしも直接に、人間関係の葛藤に由来する神経症ばかりではなかった。たとえば井村[1953]や野田[1984]は、つぎのようにのべる。

戦争の末期には、神経衰弱100にたいしてヒステリーは250前後の数をしめしていた。戦後は、最近の3年間についてみると、ふたたびヒステリーが減少してきているようである[井村、PP.182-184]。

終戦後の混乱の時期には、人々は遮二無二働き、生き抜いておればよかった。おそらくこのころは、梅毒による進行性麻痺のように器質性の精神病をのぞいて、精神病の発病は少なかったのではないか。(ところが)高度経済成長期に入ると、努力すれば目に見えて生活が豊かになる。このような社会での精神的な挫折の形は、小市民的な上昇志向からはずれ、不定形な被害妄想や幻の声に脅やかされ、敗北の悲願に自閉化することだった。また、抑制の強い型のうつ病も徐々にふえていった。そして高度経済成長が一定の高原状態に達した都市社会(の)心の病は「生きることに疲れる」ということであろう。ここにあ

るのは、努力への不安であり、生存の拡散である。成熟社会では、すべての人が他人への配慮の中に生きる。会社ではさまざまな役割、地位の人に配慮し、子供に対してもこんなことを言って亀裂ができないかと気を配る〔野田、pp.14-15、（ ）内筆者〕。

こうしてみると、『気くばりのすすめ』がベストセラーになった1980年代の状況は、それ以前の時代とことなり、人間関係における葛藤とそれを回避するための配慮、すなわち「気くばり」の必要性が、特殊な深刻さをおびはじめた結果もたらされたものだといえる。このことは、NHK世論調査部〔1984〕が、

心配ごとの第一は東京圏、大阪圏ともに「仕事の上の人間関係」で、サラリーマンが仕事の中味より仕事をしていく上での人間関係に一番苦勞している様子がみられる〔p.20〕。

とししていることとも合致する。それは、もしかすると現代の制度的人間関係のシステムが、その背後にかくされている自生的人間関係の現実に適合しない側面をほらみはじめた結果であるかもしれない。

第3節 「職場の人間関係」の制度的成立とその条件

近代から現代にかけての日本における「職場における制度的人間関係」のシステムは、意識的であると否とにかかわらず「近世日本社会に成立した武家の家中＝藩」をモデルとして形成されてきた。その原理は、次の5つに集約される。

- ① 「男の世界」
- ② 終身雇用制度
- ③ 年功序列にもとづくタテ型のヒエラルキー
- ④ 企業別組合に象徴される「滅私奉『会社』」行動規範
- ⑤ 「生産性の向上」を至上目的とするスケール・メリットの追求

第3節においては、それが制度化されてきた過程をふりかえってみる。

「男の世界」としてのサラリーマン社会

サラリーマン（つとめ人）階層の成立は明治の初年にさかのぼる。それは明治維新政府の官僚、半官半民の国策産業会社の社員として萌芽的に登場し、日清・日露の両戦争の過程で近代産業が発展したのにもとない、定着した。ただし当時は大宅壮一が、

大宅 あのころは、実業という言葉がはやった。それから、成功という言葉がはやった。

すべてみな成功につながるものであって、当時はサラリーマンという意識はなかった。みな成功したいと思っていたんでしょうね [大河内ほか、1965：pp.148-149]。

とかたると、現代的な意味での「サラリーマン意識」はいちじるしく希薄であった。ところが大正中期、おりから勃発した第1次大戦をきっかけに賃金労働者が急増しはじめる。その結果、企業における管理・計画の職務が増加した。こうして事務職員数が急増し、はじめて「サラリーマン」という言葉が、一般につかわれるようになった¹。

じつ 1919（大正8）年、物価高騰のさなかでサラリーメンズ・ユニオン²が結成される。また、第1回国勢調査が実施された1920（大正9）年には、つぎのような状況がもたらされた。

全職業人口中、サラリーマンは5～7%、151万人をしめし、一つの階層となっていることがわかる。一次大戦の前（大正2年）と後（大正9年）とでみると、会社職員は、2～3倍の増加である [山田、1972：p.106]。

いうまでもなく、ここでいうサラリーマンのほとんどは男である。たしかに当初、日本の近代産業における工場労働力の主力は女子労働力であった。第一次大戦のはじまった1914（大正3）年においてなお、官民営工場の労働者の60パーセントちかくは女性であった。これが逆転して、男性が過半を占めるようになるのは大戦の終了後である。また、大正後期に職業婦人が増加し、その後も、第2次大戦中に出征した男たちにかわって「銃後の女」たちがオフィスでの仕事にはげんだという事実はある。

しかし「管理的・事務的あるいは技術的給与生活者」の圧倒的多数は、明治の初期から一貫して男性であった。大正時代後期に増加した職業婦人も、そのほとんどがタイピスト、事務員、デパートガールなどの店員であった [山田、前掲書：p.109] し、戦時体制下でも、管理的職業にかんするかぎり、女性のしめる比率は24パーセントあまりにすぎない。まして戦後の1950（昭和25）年ともなると、その比率はじつに4.6パーセントにまで低下するのである [今田、1985：p.42]。

つまり、日本のサラリーマン社会は、まちがいなく「男の世界」として成立してきた。もっとも、日本人全体のサラリーマン化が完成にちかづくのは戦後も1955（昭和30）年以降である。この年になってはじめて、給与型生活者（雇用者）の数が、農業や自営業従

¹ 「サラリーマン」という語は、大正中期から使用されるようになった和製英語である。

² 日本語の表記は「俸給生活者同盟」、略称は「SMU」である。

事者などの生業型生活者の数を凌駕し、就業人口の半数以上をしめるにいたるからである。

終身雇用制度の起源と成立

終身雇用制度は、従来から日本に特殊な雇用関係として注目されてきた。しかし、その理念はふるい。たとえば二宮 [1972] は、つぎのようにのべている。

終身雇用制の母体は、明治以来の、いや、もっと古くさかのぼることも可能な、経営家族主義である。旦那さまは父親、使用人はその家族という精神が、やがて財閥系大企業に受け継がれた [p.169]。

このような意味で、その淵源は近世武家の主従関係にある。ただし、明治時代のそれは「理念的な規範」ではあっても、現実の雇用制度としては一般化しなかった。たとえば、

士族出身の官公吏でも明治初期には民間に転じ、民間でも自己の能力に応じて会社から会社に移ることは珍しくなかった。いまの世にいう愛社心、企業一家意識などは後世（とくに昭和10年以降）になって一般化したもので明治のサラリーマンには転職・転社を考える方が、企業に我慢するよりも楽だった [孫田、1981：p.253]。

じっさい、つぎのような記述を参照すると、昭和時代にはいっても、なおサラリーマンは「首と失業」におびえていたことがわかる。

サラリーマンの究極の目的は「給料」と「地位」である。（そして、その）意識の基調となって居るものはおしなべて「奴隷魂性」であり「女郎根性」である。果して何がサラリーマンをしてかくも見下げ果てた奴隷魂性になさしめたか。積極的には給料と地位であり、消極的には首と失業である [前田、1931：pp.122-123、（ ）内筆者]。

こうして終身雇用制度の確立の経緯が判明する。つまり、

明治末期にスタートし、大正末年ころ形成をみた「終身雇用」は、長期勤続の理念型であって、使用者にとっては解雇は自由であったから、現実に定年まで勤続したものは少数であったし、定年制自体が昭和に入ってようやく一般化したのである。その点でいえば、「終身雇用」は戦後労働運動の圧力のもとで確立されたものである [隅谷、1981：p.9]。このように実質上の終身雇用制度は、戦後になってはじめて確立したのであった。

年功序列に基づくタテ型ヒエラルキー

終身雇用制度と表裏一体の原理に「年功序列にもとづくタテ型ヒエラルキー」がある。これも淵源をたどると、近世武家社会に確立した「長幼の序」の規範秩序にさかのぼる。

しかし、これまた明治時代の初期には、企業社会のなかに定着することがなかった。

明治初期には……能力のあるものは職務も地位も上昇し……能力主義だから、高給者は、
(給与が)高い上に抜擢で収入が動いた〔孫田、前掲書：pp.250-251、()内筆者〕。

というのが実状だったからである。ところが、明治時代末期から大正時代を経て昭和時代が始まると、じょじょに年功序列のタテ型ヒエラルキーへの指向性が増大する。それについて大河内ほか〔前掲〕は、つぎのようにのべる。

郷司 年功序列制度は、やはり封建時代の大家族主義が企業のなかに復活したものだと思えますが、しかし、それが普及したのは昭和8年ごろですね。それまで、第1次大戦前は能力主義の人事が行なわれていた。(それが)昭和8年ころから日本経済が停滞期にはいると、こういった固定した慣行というものが復活してきたのではないかと〔p.153〕。

こうした趨勢が戦後にうけつがれた。戦後の混乱した世相のもとで、サラリーマンがねがったのは、なによりもまず「安定した収入」だったからである。つまり、

戦後に労働組合が(賃金)配分についてほとんど唯一の原理としたのは、生活費論である。いうまでもなく生活費は、一般的に年齢の上昇にともなって増大する。(その結果)労働組合が日本の賃金体系が「年功制賃金」であることを自覚していたわけではないが、「年功制賃金」の確立に力をかすことになった〔隅谷、前掲書：p.8〕。

さらに昭和20年代も後半になると、やがて30年代に本格化する高度経済成長の初期微動として、労働力の逼迫がきざす。その結果、終身雇用制度と表裏をなす年功賃金制を中心とした年功序列のタテ型ヒエラルキーにたいする労使の利害が合致した。それがサラリーマン社会の制度的人間関係の一要素として定着したのである。

「減私奉『会社』」の行動規範の成立

年功序列にもとづくタテ型ヒエラルキーと終身雇用制度のもとでは、会社(あるいは、それに準ずる団体)が、その雇用者にとって運命共同体としての意味をもつ。しかも、

(戦後に)再建された日本経済は、戦前の大財閥の独占的支配体制とは異なるものであった。それは一言でいえば競争的寡占と規定される経済体制で(あった。こうした状況の下では、当該企業の組合がどれほど組織と戦闘力の強大を誇っても、企業経営の競争力という制約を破ることはできない。この競争体制下で労働条件の改善をはかる途は、同一産業の寡占企業労組が共同し、統一的な賃上げとそれを貫徹するための統一スト(を実施する企業別組合の連合による春闘方式以外にない)〔隅谷、1981：PP.5-7、()内筆者〕。

こうして企業別組合が一般化した。その結果、サラリーマンのあいだに「滅私奉『会社』」の行動規範が確立する。そうした事例の典型は、高度経済成長が緒につく1960年に発売された源氏鶏太『新サラリーマン読本』などに顕著である〔坂上、1968：pp.273-274〕。

「生産性向上」を至上目的とするスケール・メリット

では、こうして成立した日本の職場における制度的人間関係の目的は何なのか。いうまでもなくそれは「近代化」の目標である「労働の効率化による工業生産性の上昇」であった。このことは戦後日本の企業活動をめぐる、つぎの指摘をみてもあきらかである。

これら寡占企業は、市場のシェアをめぐる激しい競争を展開し、一方ではこの市場競争にたえぬいていくため、他方ではようやく眼前に展開されてきた世界市場に復帰してゆくため、国家資金を導入しながら合理化をおしすすめた。このような動きは、労働運動をも巻き込んだ形での生産性向上運動として展開され、昭和30年の生産性本部に結実した〔隅谷、前掲書：p.6〕。

このことは、それ以後、どのような条件をもとにして実現されていくのか。そこで想起すべきは、日本の近代的工業化を牽引した産業分野が、戦前は繊維・鉄鋼・造船、戦後はこれにくわえて家庭電化製品に重点をおく電機・自動車・石油化学などであったという点である。これらはいずれも、膨大な設備投資とふだんの技術革新を必要とする。いわば巨大な企業規模を実現することによってはじめて、労働の効率化と生産性の向上を実現することのできる産業分野であった。

ならば職場における制度的人間関係もまた、「生産性向上を至上目的とするスケール・メリットの追究」という大目的に合致する方向をめざすほかない。そしてそれらはいずれも、高度経済成長の達成の過程ではじめて完成の域にたったのであった。

第4節 高度経済成長後の企業活動を取りまく条件変化

高度経済成長が絶頂期をとおりすぎ、日本社会が成熟するのにもなって、企業を取りまく環境条件はおおきく変化しはじめた。当然それは、企業社会を中心にして、職場における人間関係に深刻な影響をおよぼす。そこで、高度経済成長のあとの現代日本の企業を取りまく環境条件の変化を列挙しておく。

- ① 高度経済成長は「ゆたかな社会＝ありあまる社会（Affluent Society）」をもたら

した。それは生産財と消費財の両方にあてはまる。その結果、1975（昭和50）年あたりをさかいにして、日本社会は「モノを製造すればうれる時代」ではなくなっていく。その結果、単純な「スケール・メリットの追究による生産性の向上」という方向をめざすことが、かならずしも得策であるとはいえない状況がもたらされた。

- ② こうした状況下で、さまざまな局面における「情報（産業社会）化」の趨勢が支配的になった。それを、すこしくわしく説明すれば、あらゆる商品にたいする消費者の訴求内容が、ほんらいの機能的効用から色や形といった象徴的効用に転換しつつあること、モノにたいするニーズが逼塞し、かわって情報やサービスへの欲求が増大しつつあること、産業構造そのものが第2次産業主導型から第3次産業主導型へと推移しつつあること、などといった変化がおもいうかべられる。その結果、現代の企業は、たんなる大量生産とちがって、よりキメのこまかい「多品種少量生産」、あるいは「サービス産業化」への傾斜をあらわにしている。
- ③ しかも②の傾向は、生産過程そのものにまで浸透することによって、高度経済成長期をも凌駕する技術革新への指向性をたかめるようになった。バイオ・テクノロジーやコンピューター・サイエンスなど、今日のソフト・テクノロジーの発展には目をみはるものがある。こうした状況下で、技術革新をめぐる企業間競争が、さらにはげしくなる様相をみせている。
- ④ くわえて「貿易の自由化」にはじまった日本経済の国際化が、企業間競争を国際的なレベルに拡大し、貿易摩擦をとおして企業活動にたいするあたらしい外圧を形成するようになった。その結果、すぐれた商品を製造し、それが諸外国の消費者に受容されたとしても、経済原則だけで供給を拡大しつづけることができない状況に現代日本の企業はおいこまれている。
- ⑤ そして最後に、高度経済成長期に拡大した産業廃棄物による環境汚染の進行、さらには工業生産をささえる地球資源の有限性が、無制限な生産の拡張にたいする制約要因としてたちだかるようになった。こうした状況下で、都市化された大衆化社会にそだってきた若年層を中心に、従来とはことなる生活意識と価値観がひろがりつつある。それは消費者だけでなく、従業員の行動様式をも劇的に変化させはじめた。急速に進行する高齢社会化の趨勢も今後、とりわけ雇用形態などをめぐって深刻な問題を提起することにならざるをえない。こうした社会変化が、それにたいする企業の対応にいっそうの機動性とスピード・アップを要請しはじめている。

第5節 現代日本社会における「職場の人間関係」の変容

これまでののべてきた現代日本の企業をめぐる環境条件の変化は、職場の人間関係にいかなる影響をおよぼしつつあるのか。ここでは、それを検討してみよう。

キメこまかな対応のできる小規模組織の再評価

「生産性の向上を至上目的とするスケールメリットの追究」という目標が絶対性をうしなうことで、それに対応して形成されてきた職場の制度的人間関係のシステムが変更をせまられている。このことは、高度経済成長の過程で巨大化した企業組織のすくなからざる部分が、独立採算やコスト・コントロールをとまなう事業部制を採用し、それぞれの独立性と自発性をひきだす努力をはらってきたことなどに象徴的にしめされる。

この過程では、従来タテ型組織原理であるラインにくわえて、スタッフとよばれるヨコ型の組織要因が導入され、職能の分化と組織の合理化がはかれるようになった。もちろん、こうした組織形態は、すでに昭和20年代に萌芽的に労務、資材・購買、渉外などのスタッフとして、昭和30年代には企業規模の拡大基調のなかで企画室、社長室、調査室などの名でよばれるマネジメント・スタッフとして採用されてきた。しかし、そうした動向が本格化し、焦眉の課題となったのは、昭和40（1965）年前後の不況をさかいに、少数精鋭主義による経営体制づくりがさげられるようになったためである。たとえば、

少数精鋭化は、二つの方向からすすめられる。一つは「組織の効率化」の路線であり、一つは「人材の効率化」の路線である。……部門の廃止・統合、課制の廃止、プロジェクト・チームやタスク・フォースの導入等は前者の路線である。一般に「能力主義による管理」とよばれるものが、後者の基本路線である〔岩崎、1971：p.82〕。

それは、経営の効率化といった企業の内的要請に対応するだけではなく、情報化や技術革新の加速化、消費者ニーズの多様化といった外的要因に機動的、かつキメこまかに対応する必要がたかまってきた結果でもある。しかも、たんに巨大化した企業組織のありように変更を示唆しただけではなく、コンピューター・ソフトやファッション製品、あるいは出版や広告プロダクションなど、小規模だが付加価値のたかい情報生産を実現する多種多様なベンチャー企業を簇生させることにもなった。たとえば伊丹〔1985〕などは、

日本もアメリカも企業戦略の課題が新事業開発にあるという時代に入った。多くの日本

企業にとって昭和六〇年代の最大の戦略的課題は国際化でも、高齢化でも、財テクでもなく、新事業開発なのである。

という。従来のようなタテ型の巨大組織における制度的人間関係のシステムが、かならずしもつねに有効ではありえない条件が醸成されつつあるのだというほかあるまい。

人的資源の評価基準の変化と年功序列型の終身雇用制度

さらに、企業が雇用する人的資源の価値の評価基準も変化しはじめている。かつては「経験」をつんで老成した人材がたかく評価された。しかし、情報化や産業領域のクロス・オーバー、急速な技術革新など、はげしく変化する現代社会では、それに迅速かつ円滑に対応できる「能力」をもった人材への評価がたかまる。年功序列のヒエラルキーがもっていた意味がうすれ、ひいては終身雇用制度の再検討が現実の課題になっている。

それは、サラリーマンの意識にも影をおとしている。たとえば 1971 (昭和 46) 年、日本生産性本部が新入社員を対象にして実施した「働くことの意識調査」の結果は、つぎのような事実を指摘している。

大卒、高専卒の回答だけをピックアップしてみても、「この会社でずっと働くか」との質問に対し、「定年まで働く」と答えたのは、全体の 27% しかいない。「とりあえずこの会社で」「状況次第でかわる」「わからない」と答えた者は実に 72% にものぼっている [二宮、前掲：p.176]。

また、1984 (昭和 59) 年に発売された『冬の時代の管理職』 [江坂、1984] は、

サラリーマンの世界も、昔とちがってずいぶん居心地が悪くなっている。なかんずく、日本の経済成長を支えてきた中高年の経済戦士が、低成長と減量経営の企業の中で、苦しい目に会っている [p.223]。

としるしている。つまり、従業員の意識だけではなく、企業経営の実情そのものが年功序列型の終身雇用制度の継続的採用を困難にしているのである。こうした状況は、1947～1949 (昭和 22～24) 年うまれの、いわゆるベビーブームの世代が、企業社会のなかで「中堅の団塊」を形成することによって、一層のはげしさをおびてきた。つまり、

高度成長時の真ただ中であつた昭和 45 年の大卒 35 歳は、課長 23 パーセント、課長代理・補佐 35.8%、係長 32.1% の役職分布で、なかには部長、部次長もいた。……それが一転して、約 10 年後の (1983 年) 現在は……課長代理・補佐が 45.6%、係長 25.0%、主任・係長代理 16.2% どまりで、課長はわずか 13.1%、部長にいたってはゼロである [長尾、

1983 : pp.24-25]。

しかも、高齢社会化の趨勢が顕著になるにつれて、一方で定年制の延長が話題にのぼり、他方では、45歳でいったん退職し、あらためて就職先をさがす「45歳定年制度」などの実施が現実化しつつある。こうした状況をみれば、経済評論家の飯塚明男が、つぎのようにのべるのも不思議はない。

（それは）終身雇用、年功序列の日本的・藩型・サラリーマン社会が崩壊する兆候です。一挙にアメリカ型にはゆかないまでも、少なくとも一過性の現象ではなく、流動化はさらに進むでしょう [酒井、1984 : p.20、（ ）内筆者]。

ひろがる横断的人間関係と「滅私『奉会社』」の行動規範

年功序列型・終身雇用制度の崩壊は、他方で「滅私奉『会社』」の行動規範をうすれさせる。それは、企業におけるスタッフ制の採用が、経営や技術革新に直接かかわるスペシャリストに有利に作用したことで加速された。なぜなら、スペシャリストは自己の存在理由を、所属する企業よりも、自分じしんの専門性にもとめる傾向をあらわにするからである。1980年代に、ビジネスマンやOLが単一の企業の枠をこえてあつまり、ともにまなぶ、いわゆる異業種研究会が盛んになったのも、こうした趨勢の影響であった。

しかも、都市的大衆社会にそだった若年層を中心に、社会や会社といった集団より家族、さらには自分ひとりの利益と幸福に価値をおく生活意識がひろがった。げんに、

大都市圏のサラリーマンのうち3人に2人までは、会社人間型の人が減り、また仕事中心型の人も少なくなったと思っている。（とくに）販売・サービス職や作業・熟練職といったブルーカラー層と比べて、事務・技術職や管理者といったホワイトカラー層で（この傾向がいちじるしい）。かつてのように社員が一丸となって企業のために尽した、いわば「滅私奉『会社』型サラリーマン」の姿をみることは少なくなった [NHK世論調査部、前掲 : p.56、（ ）内筆者]。

こうした趨勢のなかで、すぐれた人材を発掘してひきぬき、転身のあっせんをする中・高年のリクルートを事業とするヘッドハンター会社が増加しつつある。たとえば、

日本コーン・フェリー（設立は1973年）新井昭社長は、昔を振り返りながらその成長ぶりを語る。「……75年度は30件の扱い件数だったのが、昨年（1983年）は60件と着実に増え、その90%以上は成功しています。今年度（1984年）はいまのところ、前年比で43%になっています」（中略）。（そして）スカウト会社設立の労働省許可件数を見て

も、昨年末で48件を数え、3年前より15件増となっている〔酒井、前掲：p.19〕。

ただし、「プラスの転身ばかりではない。中高年がダブっている大企業では、その処遇に困り、間引くための『転職』を真剣に考えている」〔酒井、前掲：p.20〕。

企業社会の「滅私奉『会社』型サラリーマン」の減少をもたらす要因は、ほかにもある。30余年間を商社マンとしてつとめあげたのち、参議院議員に転身し、それを従来の「タテ型出世」にたいして「ヨコ型出世」と名づけて著書の標題にした八木大介の『ヨコ出世のすすめ』〔1984〕などという書物が出版されたりしたのも、その影響であろう。

なお、蛇足ながら、高度経済成長の過程で企業がまきちらした公害、あるいはロッキード事件のなかで露呈した企業エゴイズムにたいする食傷もまた「滅私奉『会社』型サラリーマン」の減少の要因だとかんがえられる。

円滑な自生的人間関係の成立を阻害する条件

「職場における人間関係」をめぐる変化は、その自生的な位相のなかにもみいだせる。たとえば、パート・タイマーや単純労働力としてだけでなく、各種の専門職や管理職の位置につくキャリア・ウーマンとよばれる女たちの数が増加しつつある。このことは、これまで「男の世界」として推移してきたサラリーマン社会に、是非はべつとして、さまざまな形の混乱をもちこみ、それを変質させつつある。

げんに男たちのあいだではこれまで、「女たちが職場に進出するのはけっこうなことだが、上司として君臨されるのはこまる」といったアンビバレントな反応が一般的であった。昭和ヒトケタ世代、団塊の世代、クリスタル世代、ポスト・クリスタル世代などの名前でよばれる「世代グループ」間の生活様式や価値観のちがいも問題になるであろう。

もちろん、こうした世代グループの実在性にはすくなくとも疑問がある。しかし、すくなくとも「高度経済成長をささえてきた近代的規範のもち主たち」と「それによって実現されたゆたかな社会のなかでそだってきた若年層」とがとりむすぶ自生的人間関係に、深刻な葛藤やあつれきが生じていることは否定できない。現代日本のサラリーマン社会には、きわめて多様な生活様式と価値観、すなわちサブカルチャーが混在することによって、円滑な自生的人間関係をとるむすぶうえで障害となる条件が存在している。

第6節 「職場における人間関係」をめぐる今日的諸問題

第4部第2章をおえるにあたり、その概要を整理しながら、若干の問題点を提起しておく。

- ① わが国の企業社会における制度的人間関係は、明治以来の近代化過程において形成されてきたものである。それは、近代の気風を表象する「生産性の向上」を至上目的とする企業のスケール・メリット（規模の利益）を追究してきた。そのために「年功序列にもとづくタテ型のヒエラルキー」と「終身雇用制度」を基礎にし、「滅私奉『会社』」の行動規範にみちびかれる「男の世界」としてのサラリーマン社会の確立をめざしてきた。そのモデルとなったのは「近世の武家の家中＝藩」の制度であり、行動規範であった。
- ② ただし、上記の制度的人間関係の「理念型」が、現実に達成されるためには、1960（昭和35）年以降の高度経済成長の実現をまたねばならなかった。この時期にこそ、就業人口の過半が「生業型生活者から俸給型生活者へ」と変化し、「生産性の向上とそれをもたらすスケール・メリット」が極限まで追究されたからである。
- ③ しかし、わが国の明治以来の「近代化」が目標としてきた高度経済成長が実際に達成され、それをささえてきた企業社会の制度的人間関係の理念が確立してみると、そこに完成した成熟社会は、その瞬間に現代日本の企業にたいして、それに適合し、それをささえるまったくあたらしい制度的人間関係を要求しはじめた。しかもそれは、いくつかの局面で「近代」が理想とした制度的人間関係の対極に位置するような性格をおびている。
- ④ くわえて今日のサラリーマン社会では、円滑な自生的人間関係の醸成が困難になってきた。それは、男と女、あるいは新旧世代のあいだの、いささかおおげさといえば「異文化接触とそれによって生じる文化的葛藤」によってもたらされている。「気くばり」という名の過剰配慮が必要とされたのも、こうした状況の結果である。
- ⑤ いっぽう、すでに現代の日本社会には適応が困難になりつつある近代の制度的人間関係とそれをささえる行動規範が、脆弱化しつつも頑強に残存している。しかも他方では、あたらしい制度的人間関係をうちたてるころみが活発におこなわれている。いいかえれば「現在」という時点は「制度的人間関係の『近代』から『現代』への転換の時期」にあたっているのである。

だからこそ、こうした「ふたつの制度的人間関係の葛藤」にまきこまれた現代日本のサラリーマンのすくなからざる部分が、さまざまな形で発現する深刻な精神神経的疾患にさ

そいこまれるのであろう。それを克服するには、「気くばり」といった「個別的で^{インフォーマル}非制度的な努力」によって、より円滑な自生的人間関係をつくりだそうとする努力は、あまりおおきな意味はもちえない。それよりは冷静に、きたるべき時代の企業社会にふさわしい制度的人間関係を構想することのほうが、はるかに重要であるとおもわれる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・江坂彰、1984『冬の時代の管理職』講談社
- ・今田高俊、1985「階層と社会移動」『月刊NIRA』（7・2）総合研究会発機構
- ・井村恒郎、1953「ノイローゼ——神経症と社会不安」『改造』（6月）
- ・伊丹敬之、1985「六〇年代は起業家の時代」『日本経済新聞』（3月23日）
- ・岩崎隆治、1971「サラリーマン・イメージの戦後史」『中央公論経営問題』（夏号）
- ・加藤秀俊、1966『人間関係——理解と誤解』中央公論社
- ・黒柳徹子、1981『窓際のトットちゃん』講談社
- ・孫田良平、1981「明治・大正月給史」牧野喜久男（編）『一億人の昭和史④三代の男たち（上）明治・大正編』毎日新聞社。
- ・前田一、1931「サラリーマン意識論」『経済往来』
- ・長尾三郎、1983『団塊世代まかり通る！——日本を動かすミドルパワー』グリーンアロー出版社
- ・NHK世論調査部（編）、1984『日本の大都市サラリーマン』日本放送出版協会
- ・二宮欣也、1972「終身雇用制の行方を探る」『中央公論経営問題』（夏号）
- ・野田正彰、1984『日本カネ意識——欲求と情報を管理するクレジット社会』情報センター出版局。
- ・大河内一男・大宅壮一・尾高邦雄・郷司浩平・前田一、1965「ビジネスマンの百年を回顧する（座談会）」『中央公論』（6月号）
- ・酒井啓輔・石渡明、1984「華麗なる転身時代」『サンデー毎日』（2月12日号）
- ・関計夫、1968『人間関係をよくする』講談社
- ・隅谷三喜男、1981『現時の労働問題』日本労働協会
- ・鈴木健二、1982『気くばりのすすめ』講談社
- ・田崎 仁、1963『職場心理学』朝倉書店
- ・八木大介、1984『ヨコ出世のすすめ』講談社

第2章 人生の転機——内部指向から他者指向へ

第4部第1章では、20世紀の日本社会における企業を中心とした「職場における人間関係」の変容について考察した。これにつづく第2章では、そうした企業社会に所属するサラリーマンの人生観の変容を、彼ら自身が「人生の転機」としてとらえた事象にたいする彼らの対応のしかたの変容を考察することによって、あきらかにすることをめざす。

この小論の内容は最初、1984（昭和59）年2月8日から同10日まで、3日間にわたって国立民族学博物館で開催されたシンポジウム「日本人の人生設計」（特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の第2回シンポジウム）において発表された。その成果は端 [1986 a] として公刊されている。そのなかで端 [1986 b] は、シンポジウム全体の目的と「人生と転機」という課題について、つぎのようにのべている。

現代のさまざまな文化現象の伝統（性）や変化のあり方を、「人生観」の視点から記述・分析するということは、言いかえれば、現代日本の社会経済的变化の中で、人びとがどのような生き方をとるようになってきたかという視点から記述・分析することである [p.15]。

ひとりの人生がひとつの人生観で貫かれることは、きわめて稀なのではあるまいか。むしろさまざまな〈転機〉に軌道を修正していくのが現実であろう。そのように考えると、どのような要因が〈転機〉になるのであろうか。あるいは、人生の〈転機〉となる要因に、時代による変化は存在するのであろうか。このセッションでは、人との出会いから海外移住までをとりあげ、人生における〈転機〉の伝統と変容を明らかにする [p.162]。

こうした問題提起をうけた筆者は、高田 [1986] を提出した。本論文の台4章第2節は、それに大幅な加筆訂正をほどこしたものである。なお、上記の文中の「海外移住」については、大給 [1986] が考察の対象としたのであって、この小論の考察の対象とはなっていない。

はじめに——人生設計と転機

辞典的知識によると「転機」とは、「物事のかわるべき機会。転換の時機」 [1955、新村：p.1491] だという。それをここでは、人生設計との関連において検討する。そこで、かりに「人生設計」を「自分の人生にたいする欲望や目標を変更し、環境条件を検討しながら実現するシナリオを作成し、現実化していくプロセス」と定義する。こうすると「人

生における転機」は「人生にたいする欲望や目標の変化の時機」だということになる。

では「人生の転機」は、どのように生起し、その後の人生にどのような変化をもたらすのか。それを本小論は、つぎの段階をおって検討する。

- ① 人生の転機のありかたを、おおまかに「近代以前、近代、現代」という3つの時代相のあいだで比較する思考実験をおこない、仮説的な枠組を設定する。
- ② 現代日本の産業人に焦点をしぼり、彼らが、みずから人生の転機としてとらえたできごとその後の変化を、複数の視点から分析・整理する。
- ③ ついで明治・大正・昭和の3代にわたるビジネス・エリートの人生にかんする既存の統計資料をもちいて時代ごとの意味の変化をさぐり、①の仮説にこたえる。

なお、ここで「近代以前、近代、現代」という時代区分は、かつて桑原武夫が提起した「近代化」の指標を援用して加藤 [1968: pp.124-129] がおこなった「現代化」の指標の定義に由来している。これら2つの指標を一覧して併記したのが、つぎのページの表4-2-1である。つまり、「近代以前、近代、現代」という時代区分は、これら2種類の指標の実現度合にもとづいている。

表4-2-1 近代以前・近代・現代（脱近代）

対象とする領域	近代化の指標	現代化の指標
① 経済における	資本の蓄積	大衆消費の優位
② 技術における	工場生産のはじまり	情報産業化
③ 政治における	民主主義の成立	大衆民主主義。身分制の完全な崩壊
④ 教育における	普通義務教育の普及	高等教育の大衆化
⑤ 軍事における	国民軍の成立	—
⑥ 意識における	共同体からの解放	国民の均質化

第1節 人生とその転機——その近代化と現代化

人生設計が可能となる時代

さきにのべた意味で「人生を設計すること」が可能になったのは、比較的あたらしいできごとである。その前提として、個人が人生の欲望や目標を自由意志で設定し、それを実現する経済的・社会的・文化的な条件が必要不可欠だからである。

たとえば、近代以前の階層社会における人の一生を想像してみる。そこでは、自分自身

の所属する職業階層から離脱するのがむつかしかった。村落共同体に所属していれば、そこでのさまざまな規制に制約された生活様式から逸脱することも容易でなかった。明治時代以降の近代社会においても、政治的な自由が標榜されはしたものの、多数の一般生活者が自由意志で人生を設計する経済的・社会的な条件が成熟していなかった。

じっさい「自由な人生設計」を阻害する要因には、さまざまなものがある。個人の自由を制約する家族制度、それが要求する家族内での役割分担、人生を自由に設計するのに必要な知識や情報の不足、それらを主体的に取捨選択しうる知的な能力と経済力の欠如などを克服しないかぎり、自由な人生設計は不可能である。

こうしてみると、だれもが自由に人生設計ができるようになったのは、日本社会が「現代化」を達成した後であることが予感される。それは祖父江・杉田〔1984〕がしているように、「私的なものの居直りというものが近代日本を貫いて流れている」〔p.372〕とする時代の潮流への見方とも整合する。

人生の近代化・現代化と「転機の意味」の変化

こうして社会の「近代化と現代化」が、人生設計を可能にしたらしいことがわかる。このことを、いますこし精密にかんがえるために、リースマン〔1964〕が提起した「伝統指向型、内部指向型、他人指向型」という3つの社会的性格を、それぞれ「近代以前、近代、現代」という時代区分に対応させ、この間の人生のありかたと、そこでの人生の転機の意味の変化を、さしあたり仮説的に想定してみる。

まず、近代以前に対応する「高度成長潜在的・伝統指向型の社会的性格」についてリースマン〔前掲〕は、概略つぎのようにのべる。

近代以前の社会での個人は、生活は改革によってでなく、適応によって扱うべきだということ学ぶ。そこでの個人の同調性は、特定の年齢集団、氏族、カーストなど、固定した集団の一員としての同調性というかたちをとる。彼は、過去何世紀にもわたって、ほんの少ししか修正をうけずにつづいてきた行動様式を理解し、それに満足することを学びとる。そこでは生活のなかでの重要な関係が、注意深く、かつ厳格なエチケットで統制されており、成年に達する以前の子ども時代に、そのエチケットが教えこまれる〔p.9〕。

伝統指向型の社会的性格が卓越する近代以前の人びとは、所属する社会階層をはじめとする社会集団ごとに、伝統がさだめる人生の設計図にもとづいて一生をおくるのが普通であった。むろん幼児期から少年期・成年期・壮年期をへて老年期へとむかうたびごとに、

社会的な役割や生活目標などは変化する。それは「人生の転機」とよべる変化でありうる。しかし、これもまた通過儀礼をはじめ、伝統的な社会規範にくみこまれており、それぞれの社会的地位ごとにやたす役割をまっとうするように制度化されていた。ぎゃくにいうと、人生の欲望や目標を、自由かつ主体的に設計することは許容されていなかったのである。

つぎに、近代に対応する「過渡的成長・内部指向型の社会的性格」についての記述の概略を引用する。

西洋史のなかで、ルネッサンスと宗教改革とともに出現し、いまや消え去ろうとしている社会は、内部指向を同調性の基本とする社会の具体例である。そこでは、個人の起動力になるものが「内的」である。幼少年期に年長者によって起動力がうえつけられる。その目標は一般化された目標であり、かつ、宿命的にのがれることができない。内部指向に依存する社会の人びとは、目標をひろい範囲内から選択できるようにみえるが——たとえば、金銭、所有物、権力、知識、名声、善など——じつは、これらの目標は観念のうえでは関連しあっており、ひとりの個人のおこなった選択は、その一生をつうじて比較的かわることがない。（そこでは）あたらしい心理的メカニズムが「発明」される。そのメカニズムをわたしは、心理的ジャイロスコープ（羅針盤）と表現してみたい。この装置は、まず両親や親戚によって個人のなかに据えつけられ、内部指向の個人を「針路上」にのせておく役割を果たす。そこでは、伝統が立ちほだかっても、かれは意に介せず、針路をくずさない [pp.12-13]。

「近代人の誕生」である。彼らは、自分自身が主体的に選択した「内的価値（＝イデオロギーや信念）」にみちびかれて、それぞれの人生の設計図を作成し、それにもとづいて一生をおくる。それは、近代に普及した普通義務教育をはじめとする学校教育、そこでつちかわれる読書の習慣によって充填される。

したがって人生の設計の可能性は、近代に顕現したとみることもできる。しかし第3部第1章でみたように、そこには「工業生産力の増大」という「一般化され、宿命的にのがれられない目標」——いわば普遍的な「公の価値」——が実在し、それを逸脱するのはむづかしかった。その結果、個人が選択する内的価値も、それに制約されざるをえなかった。それは「一生をつうじて比較的かわることがなかった」のである。

もっとも近代には、内的価値を主体的にえらぶ自由が個人に保証される。それは、伝統指向型の社会的性格が卓越する社会の人びとの生活を変化させた通過儀礼や年中行事より

も、もっとおおきな変化を人生にもたらす場合があった。主体的選択によってイデオロギーや信念、人生の欲望や目標が変化すれば、劇的な転機がおとずれざるをえないからである。

では、現代に対応させた「初期的人口減退・他人指向型の社会的性格」とは、どのようなものであるのか。これまた概略を引用する。

他人指向と名づける性格類型は、近年になって大都市の上層中産階級のあいだに出現した。そこに共通するのは、個人の方向づけを決定するのが同時代人だということである。直接の知りあいでも、友人やマス・メディアをつうじて知っている人物でもかまわない。ただ、同時代人を人生の指導原理にすることは幼時期からうえつけられているから、その意味で、この原理は「内面化」されている。しかし、他人指向型の人間の目標は、同時代人のみちびくままに変化する。生涯をつうじてかわらないのは、こうした努力と他者からの信号にたえず注意を払うプロセスである。他人指向型の人間のもっている一番重要な心理的レバーは不定型の「不安」である。この制御装置は、ジャイロスコープではなく、レーダーにたとえるのが適切である [pp.15-21]。

そこには現代という時代の日本人の人生が彷彿する。つまり、おもにマスメディアがつたえる膨大な情報のなかに「さまざまな人生の手本＝設計図」をみつけようとする。しかも、そこでは近代がめざした「工業生産力の増大」といった目標が、全社会的には無意味になってしまっている。その結果、人びとは「公の価値」をはらむ目標や欲望、あるいは無目標をもたずに、自分自身の私的な動機によって人生の設計図をえがくようになる。

のみならず、その動機が唯一である必要はまるでない。場合によると、偶然にであう相手のパーソナリティ、その場の状況に応じて、かりそめの人生を演出することさえありうる。否むしろ、人生にたいする多様な欲望や目標をもつ多様な人びとが共存する現代社会に適応するには、そのほうがのぞましい。

じっさい、現代のように、技術革新と生活様式の変化がいちぢるしい時代には、「同時代人を人生の指導原理」とする柔軟な資質、それを可能にする性能のよい「レーダー」を準備する以外、へたに頑固な一貫性は、かえって足かせとなる場合がある。多種多様な商品と情報が流通する「ゆたかな現代」にあって、近代以前の村落共同体、近代の強固な家族や企業社会の規制や慣習から解放されて「私的な幸福の価値」を追求するには、つねに同時代の他人を参照しながら、みずからの進路を展望するほうがこのましい。

こうした状況のもとでは、人生の目標や欲望をふくむ生活の変化が常態化する。むろん、

なかには「人生の転機」とよばれるにふさわしい変化も起こりうる。しかし現代人の人生は、生活の変化そのものの多重性によって、はじめて現実性をおびるのである。そうだとすれば、そこでの人生の転機は、文字どおり「日常化」することによって、かつて、それが人に感知させた実存的な意味と役割をうすめつつあるといわざるをえない。

第2節 現代日本の産業人 111 人の「人生の転機」

考察のための資料と方法

第1節では「人生の転機」のありようを「近代以前、近代、現代」という3つの時代相にそくして比較する思考実験をおこない、仮説的な枠組を設定した。つづく第2節では、現代日本の産業人が、自分自身の「人生の転機」としてとらえたできごとを、いくつかの視点から分析し、そこにはらまれている意味を考察する。

もちいられる資料は、1982（昭和57）年1月から1983（昭和58）年10月31日までの期間に、断続して『日経産業新聞』に掲載された「転機」という連載記事のうちからえらんだ111例である¹。これらはいずれも現代日本の大・中・小、さまざまな企業でビジネスにはげんできた経営者（一部、中間管理職をふくむ）が、同紙の編集部の依頼で執筆した「転機」というテーマの800字前後の随筆である。個々の記事には「転機」という共通タイトルのほかに、その内容にふさわしい表題²がつけられている³。

つぎに分析方法をしるす。まず、図4-2-1にしめす「転機の機能構造の一般図式」を、あらかじめ想定したうえで111例の随筆を個別に精読し、変数として図式にしるした「C1、C1'、R、C、F、M」⁴それぞれ該当する記述をぬきだし、個々のケースの図式を作成したのち、変数（ないしは、その相互関係）ごとに単純集計をおこなうのである。な

¹ この記事の連載回数は、すでに500回をこえており、すべてを分析することは困難である。そこで、およそ1週あたり、1例ずつを機械的に考察の対象としてとりあげた。

² ごく一部を紹介すると、「一言『ウチに来ないか』」だの「ブリュッセルの休日」などがある。

³ 分析の対象としてとりあげた記事の表題や著者名などをしるすと、あまりに繁雑となるので、それらが掲載された新聞の発行年月日だけを、参考文献の項に列挙しておいた。

⁴ （ここにしめした変数の記号は、それぞれつぎのようなニュアンスを仮託されている（C：Condition、T：Turning Point、F：Factor、M：Moment））。

お、ここで「人生の転機」とおなじ機能構造がとりだせる「年中行事」や「通過儀礼」とのアナロジーをこころみしておくことは無駄ではあるまい。それぞれの特徴的な点を列挙すると、つぎのような相違が想定できる。

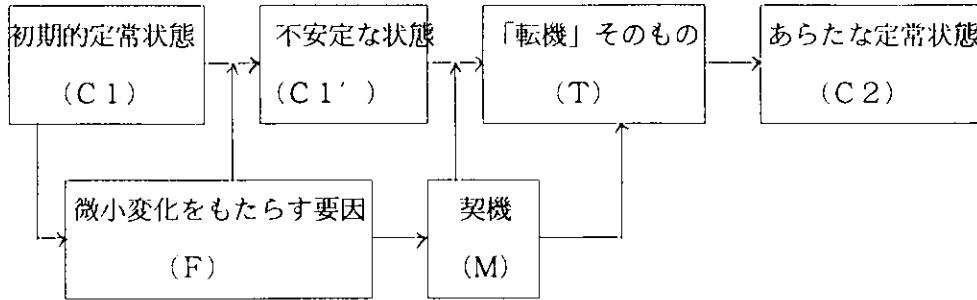


図4-2-1 「人生の転機」の機能構造の一般図式

- (注) ① 年中行事の場合：基本的に $C1 = C2$ となる。
 ② 通過儀礼の場合： $C1 \rightarrow C2$ の変化が「制度化」されているので、変化が予測可能である。
 ③ 「転機」の場合：一般には $C1 \rightarrow C2$ の変化の結果は予測不可能である。
 なお、詳細については本文を参照のこと。

- ① 「年中行事」の場合は、変数Tに「なにがしかのイベント (E)」を代入すればよい。そのときは「 $C1 = C2$ 」となり、初期的定常状態とあらたな定常状態とのあいだに変化が生じることはないのが普通である。
 ② 「通過儀礼」の場合も、変数Tに「なにがしかのイベント (E)」が代入すればよい。この場合は、 $C1 \rightarrow C2$ となり、初期的定常状態とあらたな定常状態のあいだに「変化」が生じるのが普通である。ただ一般にその変化は、伝統的な社会慣習によって制度化されており、たいていは予測可能である。
 ③ それにたいして「人生の転機」の場合は、 $C1 \rightarrow C2$ となり、初期的定常状態とあらたな定常状態とのあいだに変化が生じるうえ、予測不可能であるのが一般的である。

「転機」の主な「契機」と「変化」

前項の方法で作成した現代日本の111人の産業人の人生の転機の機能構造図式をもとに、

「それをもたらした契機」と「その結果もたらされた変化」をぬきだして一覧したものが表4-2-2である。この表をもとに、彼らの「人生の転機」の特徴を列挙してみる。

まず「転機をもたらした契機」の1位は「①友人や知人の言葉」で32例である。これに「④近親者の言葉（7例）」をくわえて「他人の言葉」に一括すると39例となり、全体の35パーセントを占める。つづいて2位は「②（駐在、留学、旅行をふくむ）海外体験」の14例、3位は「③病気・ケガ・事故」で8例である。いっぽう「⑦事業の不振、⑧会社

表4-2-2 現代日本の111人の産業人の人生に転機をもたらした契機とその結果もたらされた変化

(変化をもたらした) 契機	事例数	(結果としての) 変化	事例数
① 友人や知人の言葉	32	① 視野がひらけた、実力がついた	17
② 海外体験	14	② 事業展開や仕事に変化が生じた	17
③ 病気・ケガ・事故	8	③ 会社をかわった(転職をふくむ)	15
④ 近親者の言葉	7	④ 人生観が変化した	12
⑤ 技術革新との出会い	5	⑤ 事業観が変化した	11
⑥ 戦争体験	4	⑥ その後の進路が決定した	11
⑦ 事業の不振	4	⑦ 官界から民間へうつった	6
⑧ 会社の倒産	3	⑧ 就職した	5
⑨ 宗教との出会い	3	⑨ 独立した	5
⑩ 転職(そのもの)	3	⑩ ライフスタイルが変化した	4
⑪ 道楽との出会い	2	⑪ 合併、系列化を体験した	3
⑫ 出向	2	⑫ 会社設立を体験した	3
⑬ 紛争	2	⑬ 自分の職種が変化した	2
⑭ 組合運動への対応経験	2		
⑮ その他	20		
合計	111	合計	111

(注：左欄の「契機」と右欄の「変化」のあいだに「一対一」の因果的關係は想定されていない)

の倒産、⑩転職(そのもの)、⑫出向、⑬紛争、⑭組合運動への対応経験」などは「職業生活上の非日常体験(合計16例)」と一括できる。これらすべてを合計すると77例となり、全体の70パーセントを占める。

こうしてみると彼らの「人生の転機」は、他人の言葉との出会い、海外体験にともなう異文化接触、病気・ケガ・事故などのさいの心身への省察と沈潜、職業生活上の非日常的体験など、いずれも「それ以前の人生においては関係がなかった体験」によってもたらされたことがわかる。

第2に「結果としてもたらされた変化」の1位は「①視野がひらけた、実力がついた」の17例である。これに「④人生観が変化した(12例)」「⑩ライフスタイルが変化した(4例)」をふくめて「内面や実存に直接かかわる変化」と一括しても、その総数は33例で、全体の30パーセントにすぎない。それにたいして、のこりの77例(全体の70パーセント)は、すべて「効を奏した職業生活上の変化」である。つまり、彼らの人生の転機は「人生にたいする欲望や目標、すなわち内面と実存にかかわる変化」であるよりは「職業生活上の地位や能力の変化、とくにそれらの向上」としての意味を濃厚におびている。

こうしてみると、この小論の冒頭に示した「人生の転機」の定義が、現代の産業人にはあてはめられないように見える。しかし彼らの内面と実存が、ほぼ全面的に「職業生活上の成功」という目標に支配されているのだとかがえれば、そこに「人生の転機」が認知されるのは、むしろ当然だということになる。

つぎに、人生の転機に関連する「契機」と「変化」のあいだの因果関係についてかんがえてみる。そのための資料は、よく似た因果関係があるとおもわれる3例以上の事例を一覧した図4-2-2に示されている。

「契機」	→	変化
④ 近親者の言葉	A (4)	③ 会社をかわった
	B (7)	
① 友人・知人の言葉	C (3)	⑦ 官界から民間へうつった
	D (4)	
	E (5)	⑥ その後の進路が決定した
⑤ 技術革新との出会い	F (7)	① 視野がひらけた、実力がついた
③ 病気・ケガ・事故	G (3)	④ 人生観が変化した
② 海外体験	H (4)	⑩ ライフスタイルが変化した
	I (3)	
		⑤ 事業観が変化した

図4-2-2 「契機」と「変化」のあいだの主な因果関係

(注) (1) ()内の数字は、該当する因果関係の出現頻度をあらわす。

(2) その前のアルファベットは、因果関係のタイプをしめす記号である。

この図によると、さきに「内面や実存とかかわる変化」と一括した「①視野がひらけた・実力がついた、④人生観が変化した、⑩ライフスタイルが変化した」といった変化をもたらす契機は「①友人・知人の言葉、⑤技術革新との出会い、③病気・ケガ・事故、②海外体験」に限定され、その合計は15例である。それにたいして「③会社をかわった、⑦官界から民間へうつった、⑥その後の進路が決定した、⑤事業観が変化した」といった「職業生活上の変化」をもたらす契機は「④近親者の言葉、①友人・知人の言葉、②海外体験」に限定されている。そこで興味ぶかいのは、「④近親者の言葉」が彼らの内面や実存に影響をおよぼさず、「⑤技術革新との出会い、③病気・ケガ・事故」が職業生活上の変化をよびおこさないことなどである。

なお、上記の分析と記述の基礎資料とした「現代日本の産業人の人生における転機の機能構造図式」のうち、典型的なものを5例えらびだしたのが図4-2-3である。

現代産業人の「人生の転機」の特徴

これまでの分析と記述から、現代日本の産業人の「人生の転機」の、どんな特徴がよみとれるか。最初に注目すべきは、転機にさきだって「物事が円滑にはこぼない」など、日常生活にある種の違和感をとまなう不安定な状態のきざす場合がおおいことである。

そうした状態のなかで、「他人の言葉」をはじめ「海外体験」や「病気・ケガ・事故」など、それまでの人生には「関係がなかった何か」が、目のまえにたちあらわれる。それらは一種の「非日常体験」であり、やや大げさにいえば「異文化との接触」でもある。しかし、まもなくそれへの適応がはじまる。そこに「人生の転機を形成する変化の内容」が現出する。ここで「他人の言葉」の役割がおおきいという事実は、現代日本人が「他人指向型の社会的性格」をおびていることと、まるで無縁ではあるまい。

ところで、ここで紹介した「人生の転機をもたらす契機」「その結果もたらされる変化」は「人生における欲望や目標の変化」というほど、おおげさなものではないことがわかる。なぜなら、おおむね転機の結果は「視野がひらけた・実力がついた」「事業展開や仕事に変化が生じた」など、主として「職業生活が以前よりも円滑にはこびはじめた」という程度の変化である場合がほとんどだからである。

しかも、それらはいずれも、きわめて個人的なできごとと関心に終始している。はやい話が、伝統的な社会慣習にくみこまれていた通過儀礼のような演劇性もなければ、わずか4例の「⑥戦争体験」をのぞけば、社会変化が影をおとすこともない。つまり、現代日本

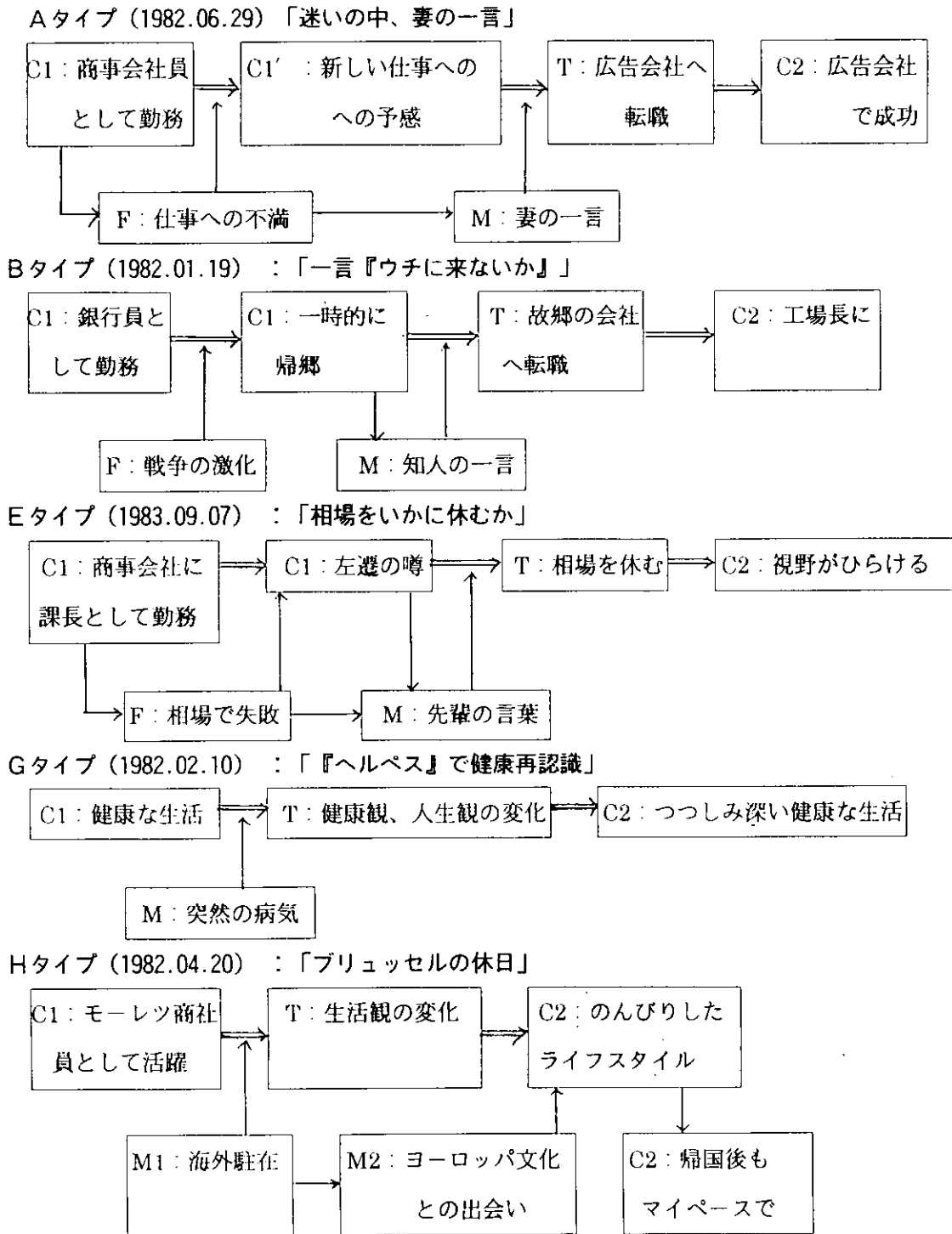


図4-2-3 現代日本の産業人の「人生の転機」の機能構造図式の典型的事例

- (注) ① 図中の「タイプ名」は、図4-2-3のそれを準用。
 ② () 内の日付は資料としてもちいた随筆の掲載日
 ③ 「 」は随筆の表題

の産業人の人生における転機は、その契機も、その結果もたらされる変化も、第三者の視点からすると、日常生活の一変化としてとらえるべき私的で些細なものとしがたい。そこには、あきらかに「日常生活における変化の常在性」と「人生における転機の意味の希薄化」が観察されるようにおもわれる。

なお、ここで紹介した事例は、すべて転機がプラスの変化をもたらしている。それは『日経産業新聞』が、産業界で「功なり名をとげた」人びとの体験をあつめて掲載したことの当然の結果である。マイナスの変化をもたらす人生の転機の考察については他日を期したい。

第3節 明治・大正・昭和のビジネス・エリートの人生の比較検

つづいて第3節においては、明治初期・大正期・現代という3つの時代を区別しながら、対象をビジネス・エリートにかぎって、彼らの人生のありかたを考察しながら、その変化の過程をあとづけてみる。そのための既存資料を萬成 [1965] にもとめる。それは、明治のビジネス・エリートの特質を、概略つぎのようにとらえている。

商人出身者を中心とするが、武士や農民からの流入者もいる。彼らは地域性や教育歴を超えた人びとで、地方の前近代的な商工農から身をおこし、近代以前的な徒弟教育を受け、旺盛な企業家精神を培ってビジネス・エリートへの道を切り開いた。それは現代のビジネス・エリートの「固定化」と対照的である。また彼らは、流動性を特徴としている。既存の封建的社会・経済秩序とは異なる新しい可能性を感知するとともに、何らかの方法で伝統に反抗した。新時代の企業家は、過去との関係を断絶した人びとのなかからあらわれている。伝統や家憲にしばられて仕事をする世襲者よりも、無一文の裸一貫から、意欲と実行力を資本に、企業家となるほうが楽であった [pp.76-77]。

同書は、こうした人の典型として渋沢栄一をあげ、彼は「90年におよぶ長い一生のあいだに、農民であり、商人であり、武士であり、官僚であり、実業家であり、教育家であり、社会事業家でさえあった」としている [p.46]。

つづいて大正のビジネス・エリートの特質について、概略つぎのようにとらえる。

この時代、日露戦争と第一次世界大戦をへた日本は政治的、経済的に実力ある地歩を築いた。大正期ビジネス・エリートは、大正デモクラシーのもとで日本資本主義の全盛時代をリードした。明治以来、新しい産業社会で大をなした財閥をはじめとする大企業主の子

弟は、近代的なフォーマルな教育をうけ、親から継承した事業の発展に強力な指導力を発揮した。また、みずからは企業を創設したのでもなく、資本を所有するのでもない、経営能力によってトップの地位に達した専門経営者の一群が登場した。財閥二世、専門経営者たちは、高い教育をうけ、海外に学び、海外視察に出かけ、国際的視野を身につけていた。しかし、この時代にはまだ企業を創設する機会も残されていた。とくに高い教育をうけることもなく、野心と実力によって企業をおこし、名をなした人びとがあった [pp.99-100]。

(じっさい) 明治期ビジネス・エリートの中なかで、「起業家」は70%を占めていた。大正期になると、企業を創設する機会が少なくなっているが、なおビジネス・エリートの三分の一はこのタイプに属する [p.93]。

これにたいして昭和のビジネス・エリートは、相当におもむきがことなる。その特質についての記述の概略を引用すると、つぎのようになる。

現代のビジネス・エリートのほとんど半数は東京大学の卒業生で占められている。それを別にしてもビジネス・エリートの出身大学には特殊なかたよりがある。東京所在の大学が全体の70%。それにたいして京阪神の大学出身者は15%にすぎない。また、官公立大学の出身者が約80%を占めている [p.126]。(いっぽう) 大正期のビジネス・エリートの多くは、海外留学の経験をもっている。半数以上が洋行し、しかもその多くが2年以上滞在している。(ところが) 現代のビジネス・エリートで海外経験をもつものは3%にすぎない。わが国は、大学制度の整備を完了したのち、急速にエリートの養成をこれら国内機関にたよるようになった [p.129]。現代では創業型経営者は全体の10%にすぎない。おそらく、ビジネス・エリートの地位に登れるチャンスは、創設の機会の減少につれ、大学教育をうけた企業の高等職員のあいだにいつそう大きくなっていくだろう [pp.132-133]。

引用がながくなったが、これらの記述からビジネス・エリートの人生が、明治・大正・昭和で、おおきくことなることが推測できる。そこでつぎに、いくつかの統計資料を参照しながら、上記の内容から推察できる彼らの人生のありかたをえがきだしてみる。

まず「日本のビジネス・エリートの出身階層別の分布」をしめした表4-2-2によると、明治・大正・昭和の3代にわたって、それほどおおきな変化のなかったことがわかる。いづれの時代も、その約半数は「企業主や管理者の子弟」であり、のこり半分を「農民階層の出身者」と「ホワイトカラーなど、サラリーマン階層の子弟」が二分している。

しかし、その学歴や海外留学体験や職業経歴ごとの分布の推移を参照すると、この間に

おおきな変化の生じたことがわかる。

まず「学歴別分布の推移」をしめした表4-2-3によると、明治初期には半数以上が初等教育だけであるのにたいし、大正期には大学卒がなかばちかくを、現代になると大学卒が71パーセント、これに専門学校をくわえると90パーセント以上が、なにがしかの高等教育をうけていることがわかる。

つぎに「ビジネス・エリートの海外留学体験別の分布の推移」をしめした表4-2-4によると、明治初期において6パーセント、大正期においては22パーセントが、それぞれ海外留学という異文化体験をもっている。それにたいして現代は、わずか3パーセントが、こうした体験をもっているにすぎない。

表4-2-2 日本のビジネス・エリートの出身階層別の分布（単位：％）

父の職業	明治初期	大正期	現代
I 大企業主・管理者（父子同一会社）	10	20	18
大企業主・管理者（父子異会社）	9	12	15
小企業主	31	17	19
	50	49	52
II 地主	17	15	18
自小作農	5	1	16
	22	16	24
III ホワイト・カラー	2	2	9
官公務管理者	—	7	9
専門職	3	7	5
武士	23	19	1
	28	35	24
合計	100	100	100
実数	200	200	207

資料出所：萬成 [1965：p.120]

図4-2-3 日本のビジネス・エリートの海外留学体験別分布の推移

留学先の国名	明治初期	大正期	現代
アメリカ	3	25	2
イギリス	5	12	3
ドイツ・オーストリア	2	3	0
フランス	1	2	0
その他	1	1	1
合計	12	43	6
全体に占める割合（％）	6	22	3

資料出所：萬成 [1965：p.128]

表 4-2-5 日本のビジネス・エリートの経歴別分布の推移（単位：％）

経歴のパターン	明治初期	大正期	現代
企業の創設者	57	32	10
地位の世襲	23	24	18
（大企業の地位の世襲）	(10)	(20)	(18)
（小企業の地位の世襲）	(13)	(4)	—
専門的官僚制的経営者	20	44	72
合 計	100	100	100
実 数	200	200	207

資料出所：萬成 [1965：p.132]

そして最後に「ビジネス・エリートの職業経歴別の分布の推移」をしめした表 4-2-5 によると、明治初期には 60 パーセントちかくをしめた企業の創設者が、大正から昭和へと時代をくだるにつれて 10 パーセントにまで減少し、ぎゃくに専門的・官僚制的経営者のしめる比率は、当初の 20 パーセントから、約 4 分の 3 にあたる 72 パーセントにまで増大することがわかるのである。

こうしてみると、社会の近代化・現代化が進行する過程で、ビジネス・エリートにもとめられる資質は、つぎのような変化のあとをたどってきたことが判明する。

- ① 生来の意欲と実行力 → 制度化された教育歴
- ② さまざまな「関係あらざる体験」との劇的な出会い → 正統的で洗練された業務上の経験の蓄積
- ③ ダイナミックな達成動機・あたらしい仕事に挑戦するバイタリティ → 予定調和的な未来予測能力を武器にしてヒエラルキーをのぼっていく真面目さ

当然これは、日本人全体の人生のありかたを一覧した資料にもとづく結論ではない。また「明治初期、大正期、現代」という時代区分が「近代以前、近代、現代」という時代区分に正確に対応するというわけでもない。しかしそこに、社会の近代化・現代化の過程で、それと同時に進行してきた、一方での大衆社会化、他方での管理社会化という趨勢を象徴する変化が投影されていることはまちがいない。その結果、近代初期には、たとえば渋沢栄一の生涯を典型のひとつとする「大きな転機が断続する人生」が可能であったのにたいし、今日ではそれがきわめて困難になっているといえることができる。

なお、ここで考察の対象とした資料は、最新のものですら 30 年以上も昔の 1965（昭和 40）年のものである。しかし、その後の日本社会の趨勢は、高度経済成長期の終焉とともに、いくつかの点で方向転換をしいられたとはいえ、第 2 節でみたように「大衆社会化」

と「管理社会化」の同時的進行が特徴づける趨勢の延長線上にえがくことができる。

第4節 むすびにかえて

本論文の第4章第2部では、最初、日本の近代化と、それにつづく現代化の条件に注目した。それを、その後の論考の文脈にひきよせながら再掲すれば、つぎのようになる。

- ① 「大衆消費の優位」を可能にする「ゆたかな社会」の実現
- ② 手がるに「人生の手本」が参照できる「情報産業化」
- ③ 広範な「個人の自由」を保証する「大衆民主主義と身分制の完全な崩壊」
- ④ 時代の変化に対応する「広範な知的能力」を分配する「高等教育の普及」
- ⑤ 「国民の均質化」とともに保証される「自由な人生設計」

そして、こうした状況のもとでは「人生の転機」のもつ意味がうすれるのではないかという仮説を設定して、その帰趨を論じてきた。というのも、大衆社会化と管理社会化が同時に進行する企業社会にあっては、職業生活が俸給生活者の生活と実存の意味のほとんどを吸収し、そこでは微小な生活変化が日常的に生起するだけで、草創期の資本主義社会のような劇的な「人生の転機」がおとずれることはまれなのであって、その結果、それがもたらすインパクトもまた希薄化せざるをえないというわけである。

そこでおもいだすのは、こうした事情を寸言で描写する、つぎのような記述である。

わたしは、現在、日本で展開しつつある傾向を社会の高密度化、ということばで定義してみた。わたしのみるところでは、高密度社会の根本問題は、身うごきの幅の問題である。それが企業であれ、個人であれ、高密度社会の構成要素は、身うごきの自由度が低いのである。わたしは十七、八世紀のアメリカを、相対的には拡散した社会として考える。さまざまな利害をもったさまざまな集団や個人は、勝手にこの大陸をうごきまわり、好きなところに定着すればよかった。心理的・社会的にも、身うごきのゆれ幅はほとんど無限にみえた。「機会」は、いくらでもあった。それをフロンティアと呼ぶ。これにひきかえ、高密度社会には、身うごきの余地がない。うごくスキ間が用意されていないのである。拡散社会的な「自由」やら「個人主義」やらは、神話としては生き残りえても、現実的な原理としては、もはや機能しえなくなっているのだ〔加藤、前掲書：pp.36-37〕。

ここでいう「17、8世紀のアメリカ」は「明治初期の日本」に似ている。拡散した社会では、比喩的に人はどんな方向にも、すきな方向へ、どこまででもあるきつづけられた。

それが気にいらぬのなら、方向を自由にかえられた。意識すると否とにかかわらず、いわば「人生の転機」を自由にえらぶことができたのである。

しかし、今日のような高密度社会では、かぎられた時間と空間のなかで、微少な方向転換を、こまめにつづけないかぎり、おなじ時間と空間を共有している他人とぶつかってしまう。そういう意味で現代日本人の人生の転機は、内面的要因よりは外的要因によって制御される、やむをえざる生活変化だということができるかもしれない。

では、どんな転機のむかえかたが、人間の人生をゆたかにいどるのか。こうした設問にこたえるのは容易でない。しかし一般に、どんな現象でも生起する回数がふえるほど、1回あたりのインパクトは低減する。だとすれば、日常生活が微少な転機にみちている現代日本人の人生において転機のもつ意味は希薄化しつづけるほかあるまい。

こうした状況のもとで日常化する転機への適応を、ゆたかな人生の条件のひとつだとかんがえているようにみえる2人の著者の2冊の書物が目をひく。

そのひとつは、わずか26歳で、難解なベストセラーの著者となった浅田彰の『逃走論——スキゾ・キッズの冒険』である。その著作にいわく、

ここで「住むヒト」にかわって登場するのが「逃げるヒト」なのだ。家財をためこんだり、家長として妻子に君臨したりはしてられないから、そのつどありあわせのもので用を足し、子種も適当にバラまいておいてあとは運まかせ。たよりになるのは、事態の変化をとらえるセンス、偶然に対する勘、それだけだ。すなわち、「パラノ人間」から「スキゾ人間」へ、「住む文明」から「逃げる文明」への大転換が進行しつつある。この大転換を全面的に肯定せよ！ [浅田、1984：pp.3-4]

いまひとつは、本小論のもととなった論文 [高田、1986] の執筆当時 (1986年) に初老をむかえ、それでもなお、彼自身の作中人物のように大活躍している「ギャグマンガの創始者」赤塚不二夫の『変態しながら生きてみないか』である。彼はいう。

ぼく自身のことに関していえば、この十年間で、また変態した。ひとくちにいつてしまうと、マンガ家として、マンガを描く人間から、自らがマンガそのものとなってしまったのだ。思えば、ぼくの人生は変態の連続だった。『笑わずに生きるなんて』という、自叙伝を書いた時、それを読んでくれた人が、赤塚不二夫という人間は多重人格者だと看破したが、ぼくは多重人格者であると同時に、変態者でもあるのだ。イモ虫がサナギに変態し、サナギが蝶に変態するように、はたまた、ヤゴが銀ヤンマに変態するように、ぼくは変態しつづけてきたのだ [赤塚、1984：「クーダラナイまえがき」]。

これらふたつの文章は、年代も専門分野もことなる、ふたりの人物によってしるされている。しかし、いずれもが共通してかたりかけているところは、人生における日常的な生活変化を所与のものとして受容し、それらに過大な実存的意味づけをしないことが、現代社会に巧妙に適用する生活への対処の方法だとしている点である。とくに赤塚〔1984〕は、ありふれた、しかし辛辣な両義性を秘めた「変態」という単語をもちいて「人生の転機の日常化」をいつくしんでいるようにおもわれる。

こうしてみると現代は、人生設計が可能となる時代であると同時に、その達成のためには、日常化し矮小化した「人生の転機」に、なれしたしむことがもとめられる時代だということになるかもしれない。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・ 赤塚不二夫、1984『変態しながら生きてみないか』PHP研究所
- ・ 浅田彰、1984『逃走論——スキゾ・キッズの冒険』筑摩書房
- ・ 端信行（編）、1986 a『現代日本文化における伝統と変容②日本人の人生設計』ドメス出版
- ・ 端信行、1986 b「『家庭』＝『社会』系の成立」（端信行・編、1986）『現代日本文化における伝統と変容②日本人の人生設計』ドメス出版
- ・ 加藤秀俊、1968『比較文化への視角』中央公論社
- ・ 萬成博、1965『ビジネス・エリート——日本における経営者の条件』中央公論社
- ・ 『日経産業新聞』 1982（昭和57）年1月7、13、19、25、29日、同2月4、10、17、23日、同3月1、5、11、17、22、30日、同4月2、8、14、20、26日、同5月1、8、14、20、26日、同6月1、7、12、18、23、29日、同7月5、10、16、22、28日、同8月3、7、13、19、24、30日、同9月4、10、16、22、27日、同10月2、8、14、20、26日、同11月1、6、12、18、24、30日、同12月6、10、16、22、1983（昭和58）年1月4、11、17、21、27日、同2月2、8、14、19、25日、同3月15、21、26日、同4月1、7、13、19、25、30日、同5月13、19、25、31日、同6月6、11、18、24、30日、同7月6、12、18、23、29日、同8月4、10、16、22、27日、同9月2、7、8、14、20、26日、同10月1、7、13、19、25、31日の各号
- ・ 大給近達、1986「集団に転機はあるか——ブラジルにおける日計コロニアの変貌」（端信行・編、1986）『現代日本文化における伝統と変容②日本人の人生設計』ドメス出版

- ・ Riesman, David, 1960, *The Lonely Crowd*, Yale University Press, New Haven (リースマン・D、1964 (加藤秀俊・訳) 『孤独な群衆』みすず書房)
- ・ 新村出、1955『広辞苑』岩波書店
- ・ 祖父江孝男・杉田繁治(編)、1984『暮らしの美意識——現代日本文化における伝統と変容①識』ドメス出版。
- ・ 高田公理、1986「現代日本人の人生に『転機』はあるか」(端信行・編、1986)『現代日本文化における伝統と変容②日本人の人生設計』ドメス出版

第5部 「遊戯化」する都市の盛り場

序章 都市と盛り場の「祝祭性」

第1章 都市の盛り場——「みせ」から「劇場」へ

第2章 飲酒文化における「泥酔の美学」の退潮

第3章 賭博——その技術革新・制度化・装置化

第4章 多様な金融商品の誕生と日本人の金銭意識

第5部 「遊戯化」する都市と盛り場

序章 都市と盛り場の「祝祭性」¹

第5部においては、都市における生活文化と世相の変容、とりわけ盛り場や酒場や賭博など、都市のあそびとたのしみを考察の対象とする。そのために序章においては、都市一般を、その祝祭性に焦点をさだまえてとらえなおすことにする。

第1節 都市と都市化をかんがえる視点

都市のモデルとしての酒場と「都市」の意味

むかし筆者は、京都の場末の学生街で、ちいさな酒場を経営していたことがある²。それは都市のモデルとして適切な空間でもある。その理由は、つぎのとおりである。

- ① 酒場には、職業や性別など多様な人びとがあつまってきて、
- ② 酒をはじめとする飲食物のほか、酒場がそなえ、提供する食器や音楽のほか、みずからの衣服や金銭を、いわば「消費」しながら、
- ③ しばしば歌やおどりをまじえて、たがいに、さまざまなかたちで情報を交換し、
- ④ その過程を、酒のよいとともにあそび、たのしみ、
- ⑤ ときに、あたらしい智恵やアイデアをうみだしもする、

じっさい、ここに列挙した酒場の属性は、そのまま都市、なかでもとくに都市の盛り場にあてはまる。

では、都市とは何か、都市の盛り場とはなにか。このことにかんして石毛〔1995：p.202〕は簡潔に、しかし的確に、つぎのようにしるしている。

昔から都市というものは祝祭空間としての性格をもっていた。都市はにぎやかであり、そこには、いつも出来事があった。農村からすれば、いつも祭りがある場所のようにみえ

¹ 第5部序章のもととなる論文は、高田〔1995〕として公刊されている。

² この酒場にかんするモノグラフは、つぎの文献として公刊されている。

高田公理、1988『酒場の社会学』PHP研究所

たのが都市である。日本の近世都市で、盛り場とよばれるものが出現した。都市の擬似的祝祭空間の装置としての盛り場を支えるのが飲食業である。

この引用の意味を、いますこし詳細に考察するために「都市」という日本語についてかんがえる。それは、明治時代中期以降に使われはじめた urban area という英語の日本語訳である。これに似た英語の単語に、city (市)、town (町)、village (村) などがある。これらにくらべると都市は、やや意味が非限定的である。そこで urban の反意語をさがす。rural (田園的) が適切であろう。「都市」は「田園」に対立する概念なのである。

いっぽう、日本語の都市は「都＝ミヤコ」と「市＝イチ」に分解できる。ここでミヤコとは、一定のひろがりをもつ地域の政治的・文化的な中心を、イチとは、周辺地域で生産された多様な産物を交換する場所を、それぞれ意味している。そのさい、ミヤコ内のイチは「ミヤコのありがたみ」を付加価値としてそなえた商品やサービスを提供する機能をはたすことになる。このあたりに日本語の「都市」の意味がある。

神殿都市としての原初の都市

では、原初の都市は、どのように成立したのか。この間に具体的、かつ実証的な答を提出するのはむづかしい。しかし、生活資源の余剰と一定の場所での定着生活の成立が、その前提条件であることはまちがいない。そこで典型的な事例を想定すると、保存可能な穀物栽培の起源が、都市の誕生に関連している。穀物栽培がはじまったことによって、有閑階層と労働階層の分化が生じ、有閑階層の居住場所として都市が誕生した。その時期は、最大限およそ1万年ちかく前までさかのぼれる。つまり、紀元前5000年前後に成立したメソポタミアのジャルモやヨルダン川西岸のイエリコをはじめ、すこしおくらせて成立したインダス川右岸のモヘンジョダロ、ナイル河畔の諸都市、中国の黄河中流域の殷などが、そこにふくまれる。そして時代がくだると、古代ギリシャや古代ローマの諸都市、ヨーロッパの中世都市、近世日本の城下町などが、これらを継承していく。

それは、たがいによく似た形態と機能をあらわにした。

まず、これらの諸都市は、中心に神殿や宗教塔などの象徴的な建築物をもち、周囲を城壁でかこまれている場合がおおい。ただし、日本やイギリスなど、城壁の欠如している場合もすくなくない。それは、ユーラシア大陸から海によって隔絶されていたなど、特殊な地理的条件が作用したためであるとかんがえられる。

ついで、これらの諸都市は、その周辺や遠隔地で生産された物資の集積と交易のための

イチの機能をもっていた。同時に、それらを消費することによって、宗教をはじめ、芸能・芸術・学術・技術・デザイン・スポーツなど、多種多様な文化を創出し、人びとに提供する機能をはたした。そのうち宗教は、超越者の威光によって、相互に未知なる人びとのあいだに交易の公正を保障するとともに、その他の文化領域と相補的な関係をうちたて、そのありがたみとおもしろさによって、都市の多数の人びとを吸引した。神殿や宗教塔などは、こうした機能を象徴する形態をあらわにしめしている。それは、本序章の冒頭に引用した石毛〔1995〕の記述がしめすように、まわりの「農村からみれば、いつも祭りがある擬似的祝祭空間の装置」にみえたにちがいない。

なお、原初の都市を支配した最初の有閑階層は、神官（ないしは僧侶）と軍人であった。当然であろう。農業社会に安定をもたらす天候は、超越的存在、すなわち神の意思をききとどけ、神に人間の願望をつたえる神官（ないしは僧侶）の仕事であった。また、農業の収穫物を異人の掠奪からまもるのは、軍人の仕事であった。こうして彼らは、直接の生産労働から解放され、文化の創造者としての地位を確立したのである。

中世都市から近代工業都市へ

ところが中世をへて時代が近代にうつると、ヨーロッパでは田園地帯で芽をふいた産業革命が、多様な工場建設を促進し、18世紀以降、大量の人口が集中する工業都市をうみだす。やがて化石燃料の利用が本格化し、さらに工業生産性がたかまると、かつては物質とエネルギーを集中して消費し、芸能や芸術をはじめ、文化と情報をうみだす場であった都市が、資本と原料と労働力を投入して、各種の工業製品を生産する空間に転化した。それは、「工場という名の産業社会の田んぼ」³を集積した「倒錯した都市」の姿である。それを都市学者のL・マンフォードは、労働力への収奪が日常化し、劣悪な生活環境が支配する「非情なる産業都市」とよんだ。

こうした事例のひとつに、たとえば日本の大阪がある。それはかつて歌舞伎や文楽に代

³ 梅棹〔1973〕は、この点について、つぎのようにのべている。

わたしの以前からの持論であります、工場というものは現代の「田んぼ」なのです。農業時代にはおもな生産は田んぼでおこなわれた。工業の時代にはおもな生産は工場でおこなわれる。しかし、街のなかに田んぼをつくるアハウがありますか。それを戦後の大阪はやろうとした〔pp.137-138〕。

表される世界性をはらんだ芸能、ファッションとグルメと園芸の文化を育てることで、近世までは諸外国からの訪問者によって「日本のパリ」と評価されていた⁴。ところが近代、とくに1920（大正9）年代以降、みずから「東洋のマンチェスター」を名のる「煙の都」として繁栄し、1980年代には「痰壺」とあだ名されるにいたった。

とはいえ、大量の人口が集積することによって、都市では一般に道路や鉄道や港湾などの交通や上下水道などの社会基盤施設、あるいは教育・医療・福祉・マスコミなどの都市的サービスが提供され、そこでの生活の利便は確実に向上した。都市は一方で、生活福祉上のプラス面を、他方で労働時間の延長や生活環境の劣悪化といったマイナス面を、ふたつながらにあわせもつ存在として、近代以降、隆盛の時期をむかえたのである。

近代工業都市の生活文化

近代工業都市は、そこでの生活文化をどのように変容させたか。

第1は「職住の分離」である。近代以前、農業従事者をはじめ、都市の小商業従事者の職業生活と家庭生活は、原則として近接した場所でいとなまれていた。ところが、近代工業が発達すると、人口のおおくが工場労働者をはじめ、家庭から職場へと通勤する俸給生活者に変化しはじめる。その結果、第2の変化、すなわち家庭内における性別分業がもたらされた。職住が近接している場合、夫と妻はいずれも、社会的生産労働に従事しつつ、容易に家庭内家事労働がこなせる。しかし、夫が通勤者になることによって、妻は専門的に家庭内家事労働に従事せざるをえなくなった⁵。

いっぽう、近代的工業化は、あらゆる消費財と生活財の商品化をもたらす。このことが

⁴ このことに言及した論考として、谷 [1992] がある。そこには、つぎのような記述がある。

幕末に日本を訪れたイギリスの外交官のローレンス・オリファントという人は、「江戸が日本のロンドンだとすれば、大坂はパリに相当するようである。ここにはもっとも有名な劇場やもっともぜいたくな茶屋、もっとも広い庭園がある。そこは奢侈と富裕の地であり、また快樂と遊興とに時を費やそうとしてくる当世風の日本人の遊び場所である」と記している。

⁵ このことは日本では、近代以前に唯一の通勤者であった武士の家庭生活の型の全国民への普及を意味した。つまり近代化は、武士階級を消滅させた。しかし同時に、近代工業都市の住民の家庭生活の型は、武士階級のそれを踏襲する方向に変化するという逆説を現実化させたのである。

他方で、都市社会における職業的ニッチ⁶を増大させた。同時に、商品化の趨勢は、従来は家庭内で提供されたサービスの商品化をもたらす。育児や洗濯や医療などのサービスなどがそれである。こうして家庭（内生産）機能が、じょじょに社会的に外在化される条件がととのえられる。これが近代的工業都市における生活文化の第3の特徴となる。

しかし、企業が生産する商品やサービスを販売するのは容易ではない。そのためには、消費者＝生活者に商品とサービスの魅力を実感させる必要がある。このことが「都市のなかの都市」としての繁華街や盛り場の形成に関連している。繁華街や盛り場は、多様な商品やサービスに、うつくしさ・快適さ・おもしろさなどの付加価値をそえることによって、その販売を促進したのである。それはまた「非情なる（近代）産業都市」のなかで、芸能・芸術などの文化の創出と享受を、祝祭性に託して都市生活者に提供したという点でも「都市のなかの都市」としての意味をもつ空間となったといえる。

第2節 都市化の時代としての20世紀

地球的規模で進行した「都市化」

近代的工業化とともに本格化した「都市化」は、やがてそれ以外の要因を契機とするものをふくめて、地球的規模で進行しはじめる。そのかぎりにおいて20世紀という時代は「都市化の時代」であった。その背景には、工業化と近代化がもたらした死亡率の低下、労働市場と消費市場の拡大を無意識のうちに先どりしようとする出生率の上昇などにもなう、地球規模の人口爆発がある。じじつ、17世紀なかばに5億人前後であった世界人口は、そののち急速に増加率をたかめ、わずか300年ばかりのちの1987（昭和62）年には、その10倍の50億人を突破するにいたった。

こうして増大した人口が、重層的なニッチを内にはらむ都市に集中した。20世紀以前には、工業化が進行した欧米と日本において、20世紀になると、工業化とは相対的に無関係に、発展途上国においてより急速かつ大量に国内人口が、主として首都に集中した。たとえばコートジボアール、アルゼンチン、ペルー、チリなどでは、国内人口の30パーセン

⁶ 原義は「（壁などの）くぼみ」の意。転じて「生態的地位」を意味する。ニッチが多様化すると、一定のひろさの空間に生息できる生物の種類が増加する。それから連想すれば、職業的ニッチの多様化は、一定のひろさの土地に生活できる人口の増加をもたらす。

ト以上が首都に集中している。

やや異なった視点から観察してみても、都市への人口集中はいちじるしい。たとえば、地球人口にしめる都市人口の比率は、1801（享和元）年には、わずか1.7パーセントであった。それが20世紀最初の（1901）年には5.5パーセントにたっし、1950（昭和25）年には13パーセントに増加した。20世紀末までには、これが75パーセント前後に達することが予測されている〔米山、1981：p.34〕。

都市化をもたらす都市の魅力

急速な都市化をもたらした要因は何か。それは近代都市が、かりに「非情なる産業都市」であったとしても、その「非情」をおぎなっており、あまりある実質的な、あるいは幻想的な魅力が、それにそなわっていたからである。それをここに一覧して整理してみる。

まず第1は、すでにくりかえし示唆してきたように、工業化が進行することによって経済的ニッチェが重層化されるという点である。

「都市にいけば、いま以上の収入が手にはいる。より快適でゆたかな生活が享受できる」しばしば幻想でしかなかったとしても、こうした思惑が人びとを都市に吸引した。

第2は、都市的匿名性が保障されるという点である。「都市の空気は自由にする」という言葉がしめすように、村落共同体のきわめて粘着性のたかい人間関係から解放された都市では、生活の自由度が格段にたかまる。このこともまた都市の魅力のひとつであろう。

第3は、これまたすでにふれたように電気・ガス・水道・交通など、整備された社会基盤の恩恵に浴しながら、とくに20世紀後半の日本の都市では、各種の家庭電化製品ははじめ、先端的な生活財をもちいた快適で便利な生活が享受できるという点である。

そして第4は、「都市のなかの都市」としての繁華街や盛り場を中心にして、多様な芸能や娯楽のほか、あそびとしての食事や衣生活がたのしめるという点である。

とはいうものの、これらの魅力は、つねにその裏側に都市生活のマイナス面をかくしもっていた。村落共同体から出奔してきたばかりの人びとにとって、「砂のごとき」都市的人間関係は、しばしば味気ないものにみえる。孤独感にさいなまれることもあるし、はげしい競争にやぶれて貧困化せざるをえない場合もすくなくない。また、大量の人口が集中する都市の治安は、かならずしもよろしくない。このように都市は、つねに両義的である。にもかかわらず、その魅力、とりわけ祝祭性の魅力が強烈であるために、20世紀的世界においては、たゆまぬ都市化が進行しつづけることになった。

ハレの行事——都市の祝祭性の原型

では、都市の繁華街や盛り場が提供する祝祭性は、いったい何に由来するのか。それをあきらかにするために、日本の伝統的な祝祭をひるがえってみる。それは、つぎにあげる要素によって特徴づけられる。すなわち、

- ① あらかじめ日時と場所をさだめ、
- ② おなじ共同体に所属する多数の人びとがあつまり、
- ③ 日常とはことなるハレ着を身につけ、日常とはことなるハレの御馳走を準備して、みずから酒をかもし、
- ④ にぎやかに歌舞音曲をはじめとするさまざまな芸能を演じて、
- ⑤ それらを、彼らが共有する信仰の対象＝神に奉納してまつり、
- ⑥ そのあとで参加者がともに飲食し、あそび、たのしみながら、
- ⑦ かりそめの「ひとつ心」につながりあっていく行事、

である⁷。それは「神をまつる神聖なハレの行事」であるとともに、ケの日常が継続することによって衰弱した人びとの生命力を、「富の蕩尽」という一種の贅沢⁸によってよみが

⁷ いうまでもなく「ハレとケ」という日本人の生活の時空間秩序のもととなる概念対立の様式は、日本民俗学によって提起され、確立した。そのうち「ハレ（晴）」については通常、つぎのような説明がなされる。

日常的な普通の生活や状況を指すケ（曇）に対して、あらたまった特別な状態、公的な、あるいはめでたい状況を指す言葉。ハレ着、ハレの日、ハレの門出、ハレの場など、このような特別な状態を表現する様式が発達している。ハレ着は通常的生活で着る衣服とは異なる形や色、柄、素材をもって作られ、（ハレの）食事は餅や赤飯、酒などが定められた方法や形式で料理され供される。（中略）具体的には、通過儀礼と呼ばれる、人間の一生のうちでたどる重要な折り目、たとえば誕生、成人、結婚、厄年などのおりには、その当人や近い関係の人々はハレの状況にあるといえるし、正月や神社の例祭などの年中行事に際しては、その社会全体がハレの状態にあるといえる〔波平、1985〕。

⁸ 余剰がゆたかでない社会においては、御馳走や酒を消費し、うつくしい衣服に身をかざって芸能に興じることは「富の蕩尽」をとともなう一種の贅沢であった。

えらせる、あそびとたのしみの機会でもあった⁹。こうした機会は、人口集積が比較的ちいさく、日常的に贅沢ができるほどゆたかでなかった昔の村落社会においては、一定の日時にしかゆるされなかった。そこでは、あそびとたのしみの演出する祝祭性が「時間によって管理」されていたのである。

都市と盛り場——近世から近代へ

ところが、時代が近世になると、江戸・京・大坂の三都のほか、各地に城下町や門前町などの都市が誕生する。これらの都市には、やがて商店が軒をならべる繁華街、芝居小屋があつまる興業街、飲食店や性的サービスを提供する遊郭に代表される歓楽街が形成されていく¹⁰。それらをここでは、かりに「盛り場」の名で一括する¹¹。

それは、ふだん勤勉に仕事にはげむ都市生活者にむけて、かつて村落社会がハレの日にかぎってゆるした祝祭のたのしみを、商品やサービスとして提供する都市空間であった。つまり、盛り場とは「ハレが日常化した空間」「ケハレ、すなわちケの領域にハレの要素が浸透し融合する空間」であるといえる〔神崎、1993：pp.202-208〕。

ところが、質素儉約の生活規範と身分秩序の維持を重視する徳川幕藩体制にとって、すくなくともタテマエのうえで盛り場を歓迎することはできなかつた¹²。そこで、盛り場は「悪所」の名でよばれ、一定の地域にかこいこまれ、しばしば都市の周縁へとおいやられ

⁹ 「ケ（衰）」は「生命力＝元氣」を比喩する「氣」という文字に由来する言葉であるともいわれる。その「ケ（氣）がかれる」と「ケガレ」状態となる。そうした状態に、あらためて「生命力＝氣（ケ）」をふきこむのが「ハレ（の行事）」であり、その結果、ふたたび生命力にみちた「ケの状態」がもどてくるといふ解釈がなりたつ。

¹⁰ 東京の両国広小路や浅草周辺、大阪の難波新地、京都の四条河原町なども、近世なかばに繁華街、盛り場としての相貌をあらわにしはじめる。

¹¹ かりに都市の生活行動が「いこい・しごと・くらし・あそび」に類型化できるとすれば、盛り場とは「あそびが卓越する地域」だといふことができる〔上田ほか、1970：pp.190-191〕。

¹² なぜなら、これらの場所では、①贅沢な飲食や放縦な性的遊戯などがあそびたのしまれたため、武家的な質素儉約の生活規範は無視され、しかも、②金の力がすべてを支配することにより、富裕な商人がまずしい武士をないがしろにすることが常態となる傾向がいちじるしかったからである。

た¹³。このことは明治維新以降、近代的工業化が本格化した時代にもあてはまる。「殖産興業、富国強兵」をスローガンにかかげる明治維新政府もまた、勤勉と質素儉約を標榜しつづけたからである。こうかんがえてみると、かつて村落社会においては「ハレとケ」という秩序に託して「時間によって管理」されていた祝祭性が、近世から近代にかけて成立・発展した近代的な都市社会においては、

「都心から周縁においやりながら、同時に一定の地域にかこいこむ」という方法によって、いわば「空間秩序によって管理」されるようになったといえる。

第3節 情報（産業社会）化と「生活の遊戯化」

繁華街と盛り場——「商品とサービスの感覚情報化」装置

繁華街や盛り場は、どのようにして人びとをあそばせ、たのしませる祝祭性を演出するのか。それを筆者は「情報化」という^{★-コンセプト}鍵概念によって説明したい。ここでいう「情報」は、一方で未来の巨大産業として期待され、他方では、みてたのしい、きいておもしろい、インターネットやマルチメディアに関連して、しばしば現代の日本社会において話題にのぼる「情報」である。ただ、注意すべきは、すでに第1部第2章においてのべたように、情報のはたす役割には、ふたつの側面があるということである。

そのひとつは、「社会や経済や産業に正確なメッセージ（しらせ）を提供して機能と効率をたかめる役割」である。軍事をはじめ、FA（工場の自動化）やOA（事務所の自動化）に関連して情報がはたしている、このような役割を筆者は「情報のメッセージ性」とよんできた。それにたいして、歌舞音曲に代表される芸能、ファッションデザイン、食物や料理の美味やみだ目のうつくしさ、絵画や小説、インターネットやマルチメディア、その周辺情報など、目や耳や舌や鼻や肌などの感覚器官に、まるで「マッサージのように」はたらきかけて、人間の心と体をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりなどの作用は「情報の

¹³ 1617（元和3）年に現在の東京都中央区日本橋人形町あたりに成立した吉原遊郭は、1657（明暦3）年には浅草寺裏の田んぼに、かえ地されて移転している。これと同様のことは、江戸城に近接した中橋から瀬田町、堺町、葺屋町へ、さらに天保（1830～1843）末年には浅草へと移転を余儀なくされた芝居町（興業街）にもあてはまる。

マッサージ性」とよぶことができる。

ただし、以下の記述においては、簡略化のために、主としてメッセージ性の比重のたかい情報を「知識情報」、主としてマッサージ性の比重のたかい情報を「感覚情報」として区別する。と、のべたところで話題は、都市の盛り場にもどる。なぜなら、繁華街や歓楽街など、盛り場と一括した都市空間は、あらゆる商品やサービスや人間の行為などを「感覚情報メディアに転換する」こと（以下「感覚情報化」と略記する）によって、そこをおとずれる人びとを、あそばせ、たのしませていると解釈できるからである。

それはこういうことである。たとえば、芝居の舞台にたつ俳優の行為も、それ自体は日常の行為から極端に逸脱することはない。そうでなければ、芝居の現実感がうしなわれるであろう。ところが、一定のシナリオにそって、それが演じられると、そこに、なにがしかのものがたりや意味が発生する。観客は、その筋がきを「感覚情報」として観照することによって、喜怒哀楽や感動をあそび、たのしむのである。

あるいは、盛り場で提供される御馳走や酒、繁華街で販売されているおしゃれな衣服についてかんがえてみる。

むろん御馳走は、いっぽうで「腹のたし」になり、身体にカロリーを供給してくれる。そのかぎりにおいて、御馳走は食物であり、エネルギー源でもある。しかし、盛り場で御馳走をたべる主たる目的は、そこには存在しない。そうではなくて、その美味やよいかおり、みだ目のうつくしさや食事をする雰囲気をつたのしむことに本来の目的がある。

おしゃれな衣服も同様である。それは、あつさ・さむさをはじめ、物理的な刺激から身体をまもってくれる物質であり、生活用具である。しかし、繁華街で購入するおしゃれな衣服の主たる目的は、そこには存在しない。そうではなくて、そのうつくしい色や形やファッション性をたのしむことに本来の目的がある。

つまり、盛り場や繁華街で提供される商品やサービスは、感覚器官に作用して、人間の心と体をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりなど、それらに付加された「感覚情報」にこそ意味がある。そういう意味において繁華街や盛り場は、商品やサービスを「感覚情報化」することによって、かつてはハレの時空間が提供し、あそびやたのしみを提供して祝祭性を演出する「ケハレの都市空間」であるといえる。

近代日本社会における「目にみえる都市化」

そこで話を、近代日本における工業化と都市化にもどす。その過程では、文字どおり「目にみえる」めざましさで農村から都市への人口集中が進行した。それを市部人口と郡部人口の対比でとらえると、たとえば1920（大正9）年に、わずか18パーセントにすぎなかった市部人口が、1985（昭和60）年には76パーセントに増加している¹⁴。ただ、もっとも急速に都市化が進行したのは、1955（昭和30）年ごろにはじまり、およそ20年間つづいた高度経済成長期である。じじつ、市部と郡部の人口比率が50パーセントでいれかわるのは、『経済白書』が「もはや戦後ではない」とのべた1955年前後のことであった。

いっぽう、このころから日本社会は、さまざまな局面で「情報（産業社会）化」の趨勢をあらわにする。テレビをはじめ、さまざまな情報メディアが普及し、繁華街や盛り場を「悪所」とよぶ人がじょじょにすくなくなっていく。しかも、おなじ時期に膨大な人口が都市へ集中したために、都市が急速に肥大し、その結果、かつて「周縁」においやられていたはずの盛り場が、あたかも都市の「中心」であるかのような相貌を呈するようになる。これら一連の変化は「目にみえる都市化」とよばれるのがふさわしい。

そこには、最新のファッション・デザインの衣服やアクセサリーを販売するデパートや商店、昼夜をわかつた多種多様な料理を提供するレストランや飲食店、映画や演劇などの芸能を上演する興業施設が店をひらき、はなやかなにぎわいがかもしだされた。夜は夜で、多種多様な酒場が店をひらき、酩酊とともに、おしゃべりやカラオケなど、あらゆるたのしみがあそばれる。そして人びとは、おしゃれな衣服に身をつつみ、あたかも都市を劇場とみているかのように、みずからの存在を顕示しながら盛り場の街区を闊歩しはじめる。

こうして都市の盛り場は、いよいよ、むかしの村落社会においては「ハレの行事」においてしか許容されなかった祝祭性にいろどられていく。

進行する「目にみえない」都市化

それだけではない。やがて日本の近代的工業化がクライマックスをむかえる1975（昭和50）年には、日本の既婚女性にしめる専業主婦の比率が54.5パーセントでピークをむかえる。それは、社会的生産労働と家庭内家事労働の分離、つまりは男女の性別分業が極限的

¹⁴ ただし、この間には数回にわたる市町村合併が行われた。そのため、行政区画上の市部と郡部の区別が、そのまま都市と農村に正確に対応するわけではない。しかし、田園地帯の人口の相当部分が都市的地域に移動したことは、あきらかな事実である。

な状況にたったということである。また、このころから、「モノのゆたかさよりココロのゆたかさ」を重視する生活意識をはじめ、生活文化の色彩がおおきく変化し、都市への人口集中が適塞しはじめる。「目にみえる都市化」が、おおきなまがり角をむかえたのである。そして、「目にみえない都市化」の時代がやってくる。それは、物理的に都市化された地域だけでなく、田園地帯をふくむ国土のあらゆる場所に、近代的で都市的な生活様式が普及していくことを意味した。

こうした変化は、じつは1960（昭和35）年代以降、すこしずつ進行してきた。囲炉裏が石油ストーブに変化し、土間がなくなって台所が近代化され、アルミサッシが普及した。テレビや雑誌や電話などの情報メディア、自動車をはじめとする交通機関が発達して、田園地帯が都市と同様の生活文化を享受できる場所に変化したのである。

その結果、今日では、先端的なファッション、各種商店や飲食店など、東京をはじめとする大都市圏の詳細な情報が、全国で販売される雑誌や全国に放映されるテレビをとおして容易に入手できるようになった。つまり、もはや「都市に所属」していなくても、情報さえ入手すれば、さしあたり「都市（的生活文化）に準拠」した生活が享受できるのである。それは、人口の集中によって都市が目に見えて増殖した、かつての都市化とはことなる「目にみえない都市化」であるといわねばならない。

そのことを1980年代の後半に、地方都市で開催された兵庫の公園都市博、名古屋デザイン博、横浜みなとみらい博、岐阜の未来博、福岡よかとぴあなど、一連の地方博覧会が象徴する。これらはいずれも、都市の繁華街や盛り場にもいた、祝祭性にみちたにぎわいとたのしさを、一時的にでも「わが町や村において実現したい」というねがいに根ざしている。という意味においては、たんに盛り場が大都市の中心に位置するようになっただけでなく、かつて「悪所」とみなされた盛り場の祝祭性が国土の全体にひろがる傾向が顕著になったということでもある。

それは、この間に進行した「情報（産業社会）化」の過程で、あらゆる商品やサービスが「感覚情報化」した当然の結果である。げんに、これとおなじころから、日本各地の町や村で「一村一品づくり」がさかんになっていく。それは、かつてのように「物量としての食糧や生活資源」の生産をめざすいとなみではない。そうではなくて、ひと味ちがう美味やめずらしさ、生活を快適に、たのしく演出する姿かたちやデザインなど、それぞれに感覚情報化された御馳走の素材をはじめ、うつくしきやおもしろさやめずらしさそれ自体を創出し、それらを消費することによってなりたつ人びとの生活にあそびとたのしみ、つ

まりは祝祭性をもたらすころみにほかならないといえる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表時期の順）

- ・石毛直道、1995「都市化と食事文化」（高田公理・石毛直道・編）『都市化と食（食の文化フォーラム）』ドメス出版
- ・神崎宣武、1993『盛り場の民俗史』岩波書店
- ・波平恵美子、1985「はれ」『大百科事典（12）』平凡社
- ・高田公理、1988『酒場の社会学』PHP研究所
- ・高田公理、1995「都市化と生活文化」（高田公理・石毛直道・編）『都市化と食（食の文化フォーラム）』ドメス出版
- ・谷直樹、1992「浪花のにぎわい」『都市はステージ——大阪の魅力』サントリー株式会社不易流行研究所
- ・上田篤ほか、1970『フィールドノート都市の生活空間』日本放送出版協会
- ・梅棹忠夫、1973「文化開発の課題と方法」（大阪文化振興研究会・編）『大阪の文化を考える』大阪府（ただし引用文献は、つぎのとおりである。梅棹忠夫、1993「文化開発の課題と方法」『梅棹忠夫著作集（第21巻）』中央公論社）
- ・米山俊直、1981『地球時代の人類学』日本放送出版協会

第1章 都市の盛り場——「みせ」から「劇場」へ¹

第1節 「盛り場」とは何か？

すでに第5部序章でのべたように、盛り場とは、商業・飲食・娯楽施設などが集中し、恒常的に人が多数あつまる都市の地域類型のひとつである。そこでは人びとは、地位や役割を明瞭にさだめられた家庭や職場とちがって、匿名的な群衆となる。

都市の生活行動が、かりに「いこい、しごと、くらし、あそび」に類型化できる〔上田ほか、1970：pp.190-191〕とすれば、盛り場とは「あそび」が卓越する地域である。ここでは「まつりと旅」という、伝統的な村落社会におけるふたつの典型的なあそびが、時間的・空間的に凝縮されて提供されるといいかえることもできる〔高田、1986：p.52〕。それは文字どおり「ハレを日常化する」、あるいは「ケハレの」空間なのである。

都市にこうした地域類型が登場するのは、近世なかばのことである。その背景には、近世日本の諸都市に常設劇場が成立したことに関連して守屋〔1985〕が指摘する、つぎのような事情があった。

京都の四〇万、大坂の三〇万、江戸の五〇万といわれる町方人口が、それをささえたのである。それらの町人のかなりの部分が、遊芸をたしなむ、遊里にあそぶ、そして芝居にかようことのできる経済的・文化的水準に達していたことが重要であろう。私は、元禄期をさかいにして、日本の大都市には都市的大衆社会の形成が見られた、とかがえている〔p.60〕。

じっさい、江戸の両国広小路、浅草寺周辺、上野山下、大阪の難波新地、京都の四条河原町なども、近世なかばに、はじめて盛り場としての相貌をしめしはじめている。こうした認識を基礎にして、第5部第1章においては、江戸・東京における4つの典型的な盛り場（浅草・銀座・新宿・渋谷）をとりあげ、その変化の過程を記述することをとおして、近代日本における盛り場と盛り場文化の変容過程をあきらかにしたい。

¹ 第5部第1章のもととなる論文は最初、1986年1月22日から3日間にわたって開催されたシンポジウム「日本人と遊び」（国立民族学博物館特別研究「現代日本文化における伝統と変容Ⅳ」）において発表されたのち、高田〔1988〕として公刊された。

第2節 近代日本における盛り場の成立と展開

盛り場・浅草の成立と特質

盛り場としての浅草の歴史は、江戸城下のにぎわいとともなって、浅草寺の境内と参道の露店が恒常化することによって誕生した仲見世に端緒がある。まもなく、これに吉原遊廓と興行街がくわわった。その経緯は、つぎのとおりである。

まず1657（明暦3）年に発生した江戸の大火をきっかけにして、それまでは人形町に所在していた吉原遊郭が千束に移転し、2000～3000人の遊女と、ここをおとずれる遊蕩客でにぎわうようになった。つづいて1841（天保12）年、江戸の街の随所に立地していた芝居小屋が、現在の浅草・猿若町にあつめられた。歌舞伎の市村座や中村座や河原崎座、あやつり人形の薩摩座や結城座などである。

それは、経済力をつけてきた町人が、「浮世」とよびならわされた盛り場を、みずからの版図として確保したことを意味する。そこでは、徳川幕藩体制をつらぬく、一般に「士農工商」の名でよばれてきた身分秩序が、かりそめにはあれ、相対化されることになった。そこで彼らは、「浮世くるひのなりゆきは、かくなりしものとしりながら……」現実原則からみれば、ほとんどのものの役にたたない「意気」や「粋」や「通」などという言葉で表現される美意識を追求した。その結果、遊郭には南蛮渡来の珍物や珍酒があつまり、芝居小屋では旧来の身分秩序を超越する社交が芽ばえ、あたらしい町人文化が形成された。そのうちの遊郭については、佐々〔1920〕が、つぎのような記述をのこしている。

浅草は先ず仏寺（浅草寺をはじめ、本願寺、報恩寺、清水寺など）の霊地として栄え初めた。いつの頃からか、その並木の間には桜が植ゑられた²。（しかし）この花より先に、浅草名物は既に出て来てあて明暦の新吉原の建設、これが爾来浅草の中心となつて、流石の観音様も歌舞の菩薩にはその光を譲らねばならぬ〔p.11、（ ）内筆者〕。

いっぽう、芝居にかんしては三田村鳶魚が『芝居風俗』のなかに、「木戸口へ出るを見れば、百人の内、六十人は女、女中がちなる物見なり」とするし、1705（宝永2）年に刊行された随筆集『当世乙女織』が、つぎのように描写している。

芝居といふものは、なんぢやおもやる。あれは男の傾城町ではないか。子供でも立役

² この桜は、1733（享保18）年に吉原の遊女が寄進したもので「千本桜」とよばれた。

でも皆女子の買うて、なぐさむものにこしらへたものなり〔稲垣、1966：p.242〕。

それは、武家の儒教道徳からみれば「悪所」以外のなにものでもなかった。したがって、遊廓も芝居小屋も、江戸城からみれば「墨田川のむこうの周縁」へと駆逐されたのである。そこには、浅草寺をはじめとする、いくつもの宗教施設があった。このようにみると、盛り場・浅草は、いわば「聖なる宗教」と、飲食や性などの「俗なるあそび」がであり、たくまざる安定をかもしだす、興味ぶかい均衡のうえに成立した街であったとみることもできる³。そのことを加藤〔1979〕は、つぎのように表現している。すなわち、

聖域はその内部にきわめて世俗的なものを保護育成し、聖俗まったくわかちがたいものとなっていた。俗と聖とは緊密な相互依存関係のうえに、ひとつの特殊な広場を形成したのである。

明治・大正時代の近代的な盛り場としての浅草

浅草は、やがて近代的工業化のきっかけとなる明治維新以降も、江戸の伝統を継承する東京の代表的な盛り場として存続しつづける。1973（明治 6）年に日本最初の都市公園となり、1984（明治 17）年に、いわゆる（浅草）六区のうめたてが完成するころには、あたりに銘酒屋とよばれる居酒屋をはじめ、多種多様な飲食店が開業するにいたった。

そうした状況のもとで2年後の1986（明治 19）年、根岸浜吉という人物が、六区で「道化おどり」と称する見世物興業をはじめている。ただ、これは直後に、東京府と警視庁によって禁止された。ところが、翌1987（明治 20）年になると、その禁止がとかれ、20世紀がはじまると、浅草六区は、猿若町とは性格を異にする新型の興行街へと発展していく。つまり1903（明治 36）年、ここに日本最初の映画館である電気館が、松竹映画の封切館として開業し、これに帝国館や東京館や富士館や三友館などの開業がつづくことによって、映画の興業街としての地位を確立し、やがて大正時代には、1917（大正 6）年における、いわゆる「浅草オペラ」の初演へとひきつがれていくのである。

くわえて、1887（明治 20）年には、寺田為吉という人物が、観覧にもちいる目的で、たかさ 36 メートルの「富士山」を建造して人気をよんだ。そして、こうした高所からの眺

³ ここでは、かりに「聖なる宗教」と「俗なるあそび」という性格づけをしたが、あそびがしばしば宗教行事としてのたのしまれたことをおもいだすと、とくに遊郭などは「聖なるあそび場」であったというみかたもできないわけではない。

望をもたらす一種の塔づくりの伝統は、おりしも浅草を中心に開催された第3回内国博覧会のあと、人びとに「十二階」としてたしまれることになる「凌雲閣」の建設へとうけつがれ、それが関東大震災によって倒壊するまで、遊園地の花屋敷とともに、浅草の象徴として人びとの耳目をあつめる役割をはたしつつけた。その一方で遊廓の吉原も、あらたに誕生した東京各地の花柳界と競合しながら、むかしながらのにぎわいをほこった。こうしてみると浅草は、明治時代において、膨大な娯楽施設をはじめ、飲食・商業施設がひとつおりそろった日本の代表的な盛り場としての地位を、すでに確立していたことになる。そして、それを可能にしたのは、莫大な投資をとまなう大規模な各種の施設建築であった。そのことを初田〔1982〕は、つぎのようにしるしている。

明治末から普及し始めた映画館（は）、……できるかぎり洋風意匠を施して人々の好奇心を映画に向けさせることをねらっていた。この一種異様な町並みは、アメリカで行なわれた博覧会を見たオーナーが、人を引き寄せるには建物で驚かすのが早い、という信念をもったことによって生まれた。

しかしながら、同時に浅草は、他方において広津〔1926〕がしるすように、ふるきよき江戸の伝統をひく盛り場でもあった。

（浅草の風物には）一つとしてこの大東京のやけくそと現世的な享楽と悲惨とを語つてゐないものはないが、併しそれをもう少し深く見ると、その表面のみだりがまじさの底に、浅草には又不思議に澄んだ、真実な、江戸の伝統が残っている〔pp.138-139〕。

その浅草に1927（昭和2）年、上野とのあいだをむすぶ日本最初の地下鉄が開通した。こうして浅草は、近代的な交通の便にめぐまれた近代的な盛り場になっていく。そうした盛り場としての浅草にたいして、明治時代の知識人たちは一体、どのような印象をもっていたのか。ふたつの事例を、つぎに紹介しておく。

（浅草公園は）至るところ悪魔の巣にして妖気ふんぷんと棚引いてゐる。一度魔窟に足を入れたら血は吸はれ肉は殺がれ、果ては罪惡の空氣に感染して遂に魔道に陥り、再び真人間として社会に起つことの出来なくなるもの多く、商家の子弟雇人等は帳尻の満着し、一身の方向を誤り、詐欺をする、拐帯をする、書生側では詐欺と窃盜に落ち、職人側では窃盜となる動機は、この魔窟の空氣に感染するが原因となる〔二葉生、1905：p.89〕。

劇場は、もと勸善懲惡を目的とする者なれども、俳優と観客との如何に依りては、却て反対の結果を生ずることあり。男女兩性の關係が、誤解せられたる遊戯娯樂に濫用せられて、女性が男性を誘惑し、男性が女性を玩弄し、風紀紊亂、惡風造出、病毒製造、浪費濫

耗、種々の悪結果を生じつつある〔麹町坊、1910：p.202〕。

そこには「悪所」とよばれたとおり、盛り場一般にたいする、きわめて否定的な文言がかきつらねられている。つまり浅草は、近世以来の伝統のうえに、近代日本を代表する盛り場の地位を確立しながら、なお江戸時代の武家の儒教的、あるいは禁欲的なタテマエを継承する当時の知識人にとっては「悪所以外の何ものでもない」と認知されていた。

近代日本を象徴する盛り場としての銀座

麹町坊〔1910〕が、浅草の悪所性についてしるしたときから10年あまりのちの1923（大正12）年、関東大震災が発生し、浅草を象徴する「十二階」が倒壊した。それが直接の原因ではないが、このころから浅草の盛り場としての地位は相対的に、じょじょに低下していく。そのことを酒井〔1927〕は、つぎのようにえがきだしている。

震災前には浅草へ行けばきつと寄つたカフェ・アメリカ改めオリエントも、とんと近頃ではご無沙汰勝ちだ。浅草にはその他聚楽を初め小さなカフェは沢山あるが、興味を持てるやうなところはないやうだ。女が直ぐ寄つて来て、皮膚の荒れた不景気な顔をつん出して、注文を煩く催促などすると全く助からない〔pp.127-128〕。

ちょうどこのころ、江戸時代には、場末の露店街でしかなかった銀座が、東京を代表するあたらしい盛り場として浮上しはじめる。じじつ銀座には、そこが貨幣の鋳造所の所在地であったというほか、浅草の観音さまに対応するような明確な信仰の対象が存在しなかった。そのためか、江戸時代の末期までは、文字どおり「江戸の周縁」にほかならなかったのである。

その銀座について、稲田〔1927〕は、つぎのような記録をのこしている。

御一新前の銀座は突にどうも話の外で、百鬼夜行どころの沙汰ではなく、辻斬り、試し斬りなどは毎夜のこと、京橋の欄干には、毎朝人間の生首が二つも三つもさらされる。夜など菓子を買ひに横丁へ入ると、雨が降りもせぬに足許がぬらぬらする、提灯の光ですかして見ると、四辺一面は血の海で人間の胴体が真二つになつて倒れてあるといふ有様〔p.8〕。

そんな銀座の街に、近代的な都市化の波がおしよせはじめた。たとえば、

東京府は（銀座大火のあった1872（明治5）年の翌3月）市街地の再建を布告した。それは「類焼之町々道路取広ケ、家屋ハ煉化石ヲ以テ早速建築取掛リ候」ようにという布令で、道路改正と焼失地の買収により煉瓦町の建設を実現しようというものであった〔東京

都、1979：pp.928-929]。

こうして、いわゆる「15間道路」と、それに面して家いえが軒をならべる煉瓦街の建設がはじまった。1874(明治7)年には、街路にそってガス灯が設置され、その3年後の1877年には、360戸のあき家をのこしながらも、総戸数1400戸にのぼる、堂々たる煉瓦街が完成した。さらに1880(明治13)年ともなると、のちに銀座を象徴することになる柳が植樹されて並木道の景観がととのい、その2年後には、日本最初の馬車鉄道が開通するなど、ヨーロッパ由来の文物をとりいれた近代的な街なみづくりが進行していく。

こうした変化にともなって銀座の街には、多種多様な飲食店や商業・娯楽施設が集中しはじめた。たとえば、はやくも1872(明治5)年には日本最初の西洋料理店・精養軒が木挽町で営業をはじめ、やがて20世紀もまじかい1897(明治30)年には日本最初の洋風酒場・バー函館屋が尾張町で、その14年のちには東京で最初のカフェ・プランタンが京橋で、それぞれ開業するなど、銀座には「日本最初」がいくつも誕生する。こうして銀座は、つぎに引用する魯庵生[1929]がしるすように「味覚極楽」を現出した。

新橋のトバ口からして青柳があり千疋屋があり、一軒置いて支那料理の彩華が東側の秀華と相對し、五歩に珍肴、十歩に美釀、三十歩に喫茶店、五十歩にレストランといふが銀座である。(また)西条八十の『虎と獅子とが酌に出る』銀座の二大女国の一のライオンが東側の一角にあり、斜向ひにタイガーが軒の虎のコミカル・サインポールドで客を呼んでいるのを初め(きわめて多数の飲食店が軒をならべた) [魯庵生、pp.155-156]。

飲食店だけではない。魯庵生[1929]は、右の記述につづけて、

西側は食味の町であるが、東側はドチラかといふと買物町である [p.156]

とのべたあと、松屋、松坂屋、服部時計店、天賞堂、浜松楽器会社、日本蓄音器会社、洋風食器の十一屋、文房具の伊東屋などを列挙している。銀座はまた「買物遊獵家の獵場」でもあったということになる。なかでも、20世紀の到来を目前にひかえた1900(明治33)年に、日本橋の越後屋三井呉服店から発展した日本最初の百貨店・三越呉服店をはじめ、複数の百貨店が、つぎのような繁華街の風景を現出した。

高級、中級、低級を問はず、また有閑、無閑を問はず凡ゆる種類と階級の婦人をしてその全感覚を向けしむるに十分なる魅力をもつ欲望充足の殿堂である。若し将来最も大衆化された大学が設立されるならば、それは必ず籠を百貨店に取るであらう[小汀、1932：p.32]。

これにくわえて各種の興行施設が、街のにぎわいにさらなる花をそえた。1889(明治22)年に歌舞伎座が新築・開場したのをはじめ、1908(明治41)年には純洋風の高等演芸場・

有楽座が数寄屋橋に、本格的洋式劇場・帝国劇場が丸ノ内に、それぞれ新築・開場して、近代的な一大興行街を形成した。そして1916（大正5）年ともなると、

「今日は帝劇、明日は三越」

という広告文案の傑作がうみだされ、銀座の街路は多数の都市生活者でにぎわうようになった。こうしてみると銀座という街は、「浅草の観音さまのありがたみ」のかわりに、「欧米の近代文明のありがたみ」が、比喩的な意味での宗教性を発揮したのだといえる。そのことは、つぎの広津〔1926〕の記述からもうかがえる。

三度か四度あの道を行ったり来たりして、二軒か三軒、カツエでカツヒーを飲んでればそれでいい。昔煉瓦地と云ったものだが、その名称通りに、西洋文明を片つばしから鞆呑みにする日本の現代を代表するために生れた街で、一軒の店で仏蘭西製の新香水を売ってあれば、その隣りでは独逸製の強精薬を売ってある。そしてモダン・ガールとモダン・ボーイとが、腕を組み合つて、レコードから覚えた外国の歌を口笛で吹きながら歩いて行く〔p.39〕。

それは、いいかえれば銀座が、近代化の途上にあつた日本社会全体にとって、いわば「文明開花のショーウィンドー」としての地位をしめたことを意味してもいる。そのことを三須〔1922〕は、つぎのようにしるしている。

銀座は明治大正の文化を象徴して居るといつてもよいのであります。その道路、その店舗皆東京の精であります。そして銀座は将来日本文化の中心となるであります。それだから、初めて東京へ行つた人でもたとひ浅草を見ない人があつても、銀座は必ず見物するのであります〔p.5〕。

このことは、東京の銀座をモデルとした「地方銀座」が、全国の中小都市の多数の盛り場のニックネームとしてひろく普及したことによつてもしめされる。それは、関東大震災で各種施設が壊滅的な打撃をこうむつたのちに、いっそう顕著なものとなつた。カフェ・バー・大衆食堂・レストランなどの飲食施設をはじめ、劇場・映画館などの興行施設、百貨店をはじめとする各種商業施設が、震災直後に、すばやく復旧にとりかかっただけでなく、日本最初の新劇の専門劇場・築地小劇場が創立され、さらに白木屋・松坂屋・松屋などの百貨店があらたに進出するなど、旧に倍する繁華な盛り場となつたからである。そこで、みたび広津〔1926〕をひけば、そのありさまがつぎのようにえがかれている。

東京の目抜き場所といふ場所が、あの震災で焼き払われてしまつた時、自分達は、毎日銀座の復興を見に行つたものだ。（大正12年の）大晦日に銀座に出た人は、地震後

四月目であの銀座が華々しく復活した事に、みんな狂喜したものだつた〔pp.137-138〕。

そこには、かつて明治初年、盛り場の浅草をめぐってかたられた、おそらくは「武家の規範に由来する禁欲のすすめ」が力をうしなうと同時に、江戸の町人文化にささえられて成立した盛り場とそこでの娯楽が、あたらしい時代の洗礼をうけて近代的な相貌をあらわにしながら、都市の習俗として容認されるようになった事情が彷彿する。

第3節 盛り場の衰退と復興——第2次大戦を中心に

大正時代になって、そこでのあそびやたのしみが容認されるようになった盛り場は、実質経済成長率が23.7パーセントという未曾有の高率をしめした1937（昭和12）年にむけて、順調に発展していく。とくにこの年の1月には、第1次大戦以来の好景気がおとずれ、浅草六区に出没する遊興客は、1日あたり平均30万人におよんだという。

しかしそれは、日本が日中戦争に端を発する泥沼の戦争に突入していく時期でもあった。この年の7月に、その宣戦が布告されると、銀座や浅草はもとより、日本全国の盛り場にも軍国調のファッションがあふれはじめ、わずか5か月後の12月には、カフェやバーなどの新規開店が禁止される。さらに2年後の1929（昭和14）年には、お茶屋・カフェ・料理屋などの営業時間がいっせいに短縮され、翌1930年には、百貨店の食堂にまで代用食が登場し、1931年における娯楽映画の全面禁止、1944（昭和19）年における芸伎屋・待合・高級料理店・飲食店・カフェ・喫茶店などの全面的な休業へとつづいていく。そして、これらにかわって雑炊食堂が営業を開始し、明治時代における近代化の本格化とともに、はなばなしく日本の都市に出現した盛り場と、そこでのあそびやたのしみは、昭和10年代にいったん全面的に逼塞したのであった。

それが1945（昭和20）年8月15日の終戦とともに復興の緒につき、それ以後、日本全国の都市に急速にひろがっていく。まず最初は、東京や大阪などの大都市を中心に、戦災をうけたやけ跡に、いわゆる闇市がおこり、バラック建築の飲食店が店をひらく。あわせて同年10月には、待合やバーの閉鎖が解除され、飲食店や酒場が軒をならべる盛り場風景が復活し、各種のあたらしい型の飲食・遊興施設が姿をあらわすようになった。

こうしたもののひとつに、1950（昭和25）年の大阪・千日前にはじめて出現し、すぐに東京をはじめとする全国の都市にひろがっていったアルバイトサロンがある。これとよく似たことは興行施設にもあてはまる。1947（昭和22）年に新宿の帝都座ではじめて上演さ

れた、半裸の女性が登場する、いわゆる「額縁ショー」は、やがてストリップショウとして全国各地にひろがっていく。映画の普及もいちじるしく、シネラマがはじめて上映された1955（昭和30）年ごろから、文字どおりの黄金時代をむかえることになった。

もちろん、最初はやけ跡の闇市に芽をふいた商業一般の復興もわすれてはいけない。それは、やがて大都市を中心とするデパートの再建につながり、1955年以降の繁華街や盛り場には、それぞれに客をさそうネオンサインがかがやきはじめる。そして『経済白書』が「もはや戦後ではない」と宣言した1956（昭和31）年、日本の大都市の盛り場は、戦前をもしのぐ繁栄をとりもどす。それは、日本人が終戦後の10年間をかけて、明治時代以来的の、いわば「盛り場の近代史」を、あらためて追体験する過程でもあった。

第4節 高度経済成長と盛り場の「現代化」

並列して多極化し競合する盛り場

終戦後の盛り場の復興過程を、ひとことで表現すると、「盛り場が並列しながら多極化し、競合する」過程であったといえる。もちろん、第2次大戦以前の東京にも、浅草や銀座をはじめとして、複数の盛り場が存在した。しかし、もっともつよく人びとの人気をあつめ、しかも繁栄したのは、明治・大正時代なら浅草、大正・昭和戦前期なら銀座であったといってよい。なかでも銀座は、すでに示唆したように、もっとも典型的な盛り場として、全国の地方都市の盛り場のモデル、ないしはお手本として模倣された。

それにたいして、第2次大戦の終結から高度経済成長期にかけて、東京には複数の盛り場が並列的に簇生し、それぞれに個性を発揮しながら、たがいに競合する状況が現出する。こうした競合は、1959（昭和34）年に、地下鉄丸ノ内線が開通することで顕著になった。なぜなら、銀座と新宿が地下鉄で直結されたことによって、これら2つの盛り場のあいだに、訪問客の争奪戦がはじまったからである。それを「丸ノ内線開通で転機に立つ銀座と新宿」と題する無署名〔1959〕の記事は、つぎのように解説する。

片や伝統ある都心中の都心、片や新興めざましい都心きっての副都心。かねてから東西両横綱の格で対立していたのだが、地下鉄丸ノ内線が直結したところからガブプリ四つに組んでの取組みとはなった〔p.28〕。

こうした変化をさかいにして、東京における盛り場の並列的な競合は、渋谷・赤坂などをまきこんで、いっそう熾烈になっていく。

第2次大戦以前の新宿——盛り場への発展過程

とはいえ、盛り場が多極的に並列する傾向は、かならずしも戦後になってはじめて現出したというわけではない。昭和戦前期にあっても、つぎのような現象が観察された。

東京は主として西郊へと伸びていく運命を有つてゐる。私がこゝに「西郊」といふのは、大体に於て、南は目黒蒲田電車の目黒駅から丸子多摩川に至る線と、北は池袋駅と川越市とを結びつける東武鉄道の東上線とに依つて堺せられる地域を指して居る〔松川、1927：pp.129-130〕。

さらに、これよりもっと昔の明治時代にあっても、1889（明治22）年に、のちの国鉄中央線・甲武鉄道が吉祥寺まで開通し、1904（明治37）年に追分を終点とする日比谷ゆきの市電が、1915（大正4）年には京王電車が、それぞれ開業し、1925（大正14）年には山手線が環状の運行を開始したことによって、東京の西郊の人口が増加しはじめてゐる。しかし、このころの新宿は、『豊多摩郡誌』〔1916〕がしるしているように、いまだ街道ぞいの閑散とした宿場でしかなかつた。すなわち、

本町（内藤新宿町）は甲州青梅街道の合流地として府下西北部の咽喉をやくし、地形頗る勝あれば、百貨集散商業股賑の地たるべきに拘らず、事実全く之と異なり、商況振わず、街頭閑寂にして全町の氣勢また甚だ揚らざるものあり。蓋し町中枢要の土地は多く白昼なお戸を鎖せるもの、高楼数町にわたりて、市況の賑盛を妨ぐる事少しとせず。

その新宿が、都心のビジネスセンターと郊外の住宅地をつなぐ公共交通機関のターミナルとして本格的に発展するようになったのは、関東大震災によって壊滅した都心の人口が郊外に移動しはじめたところからである。こうして大宅〔1951：pp.18-19〕が、つぎのように指摘する「新宿のつよみ」が本領を發揮しはじめる。

震災に焼けなかったのが（新宿の）何よりも強味で、昭和初期のダンス全盛の時代には新宿と国華の二つのホールがあつて、赤坂のフロリダの向うをはつていた〔pp.18-19〕。そして新宿は、昭和時代の初年ともなると、郊外の住宅地を後背地とする盛り場としての地位を着実にたしかなものにしていくことになる。すなわち、

郊外住宅地の発展につれて新宿一帯の繁華、殊に、三越の新宿分店が、食糧品に力を入れて売つて居るのは一寸目につく。食糧品といふより洋食折詰、各種料理の折詰その他、高等漬物屋とでもいふ感じ。カツレツやコロツケを箱につみあげて箸で包んで居るのなどは、現代式漬物屋である〔三宅、1927：p.122〕。

くわえて、のちに伊勢丹に発展するほていやをはじめ、中村屋・高野・白十字などの菓子屋やフルーツパーラー、武蔵野館や新宿ホテル、ミュージック・ホールのムーランルージュなどが開業した。その結果、つぎのような状況がもたらされる。

ともかく帝都座のもつ現在唯一の資本が、新宿駅から新宿二丁目に至る舗道に行進をつづける、おびただしいタクシーと人間を満載した乗合自動車と電車、あの舗道の人間の氾濫だと断言することができる〔吉行、1931：p.181〕。

にもかかわらず、やっぱり昭和戦前期の新宿には、いまだ垢ぬけしない泥くささがのこされていた。そのことを久野〔1932〕は、つぎのようにえがいている。

新宿は、コティの匂ひのする銀座のやうな垢ぬけのしたところがない。中央沿線から吹きつける、野良の野菜の匂ひが、ともすれば風の向き加減でする〔p.97〕。

闇市から日本最大の盛り場へ——戦後の新宿

その新宿が第2次大戦後、まずは巨大な「やけ跡の闇市」として発展する。つまり、

一ヶ月にすれば一千万円の新円が動くのだから、尾津傘下の露店商三百名、全市を走り廻るジェラルミンの「尾津な輪タク」三百台などと共に、その勢力は恐るべきものがある。この外に和田組傘下の仮設飲食店街や駅西側の安田組大マーケット街の奇跡的出現も見落してはならないし、更に目下建設中の元遊廓跡の「新新宿」さては新興行街として早くも評判の高い劇場群、地球座、自由劇場その他の落成も間近に控へたこととて、これらが一斉に完成した壮観を思ふとき、新宿こそ東京都最大の歓楽街となるものとおもはれる〔倉本、1947：p.44〕。

この予言は的中した。まず1952（昭和27）年に西武新宿駅が開設され、ターミナルとしての新宿の比重がたかまる。そして1955（昭和30）年以降、すでにみたように地下鉄丸ノ内線が開通して銀座と直結され、客の争奪戦がはじまる。さらに日米安保条約の改定に反対する運動が頂点にたった1960（昭和35）年には、新宿西口一帯を再開発する、いわゆる「副都心計画」が策定され、その5年後には、道路が立体交差する新宿西口広場が完成し、ここに当時の日本の世相を表象したヒッピーやアイビールックのわかものたちが集結して闊歩する、集積規模において日本でも最大級の盛り場が現出した。じじつ、

新宿には「日本一」が2つあった。150万人と14万8000平方メートル。前者は国鉄・新宿駅の1日の平均乗降客、そして後者は小田急百貨店の総面積。（このほか私鉄、地下鉄、バスなどをあわせると）新宿駅周辺の1日の通過人員は延べ350万に達する〔無署名、

1968 : p.20]。

それは『国民生活白書（昭和42年版）』が「国民の90パーセントが中流の暮らしをしている」と表明したころのできごとである。こうして新宿は、第2次大戦以前に、前掲の吉行〔1931〕が、「もとより新宿を醸成するものは中間階級だ」〔p.182〕と看破したとおりの、都市的な大衆文化の渦まく盛り場になった。そのことを、無署名〔1968〕は、すこしべつの角度から、つぎのように表現している。

銀座のクラブ・ホステス、S・Tさん（22歳）は「銀座に勤めているけど、自分で遊ぶとすれば新宿ね。とっつきやすいもの」〔p.21〕。

「近代」を集積し「現代」につなぐ盛り場・新宿

ところで新宿は、高度経済成長の過程で急増した都市の中産階層の、それなりのゆたかさによってささえられると同時に、これまた高度経済成長にともなってあらわになりはじめた管理社会化の趨勢と、それにたいする都市の中産階層の反発をバネとして繁栄する盛り場でもあった。それは、こういうことである。

「西口に副都心とやらができるんですって？ ますます新宿はコンクリート化するわけですね。たしかに、コンクリートの物量作戦が存在するところから文化は始まるわけでしょうが、ぼくらはそれをどうはがい締めにするか、というところから出発する」（唐十郎）〔無署名、1968 : p.23〕。

「生活や組織の機械化、合理化が進むと、人間はその非人間的な機構から逃げ出して逸脱したいという気持ちにかりたてられる。だが、しょせん、人間は大きく逸脱できない。ところが新宿は、ちょっと逸脱するにはもってこいの場所だ」（アートシアター新宿文化劇場支配人葛井欣四郎氏）〔無署名、1968 : p.25〕。

じっさい新宿は、安保闘争をはじめとして、昭和30、40年代にかけて、あらゆる反体制運動が胚胎するルツボのような様相を呈した。たとえば1955（昭和30）年に新築されたあと、当代の先端的な風俗の体现者たちが蝟集した風月堂は、ベトナム反戦兵士の脱走の舞台となった。また、いわゆる「大学闘争」が全国の116大学にひろがった1968（昭和43）年には、花園神社が「アングラ演劇のメッカ」として注目される。そして新宿周辺を、1970（昭和55）年における、再度の安保条約の改定に反対するデモ行進が最高潮にたった翌1969（昭和44）年には、新宿西口に7000人の群衆があつまる大規模なフォークソング集会が開催されたり、ファッションに託して時代のながれに「ノウ」をつきつけた

膨大な数のヒッピーたちが集合したりした。こうして新宿は、着実に市民権を獲得しはじめた当時のわかものたちのサブ・カルチャーが怒濤のようにながれこみ、渦まく盛り場としての相貌をあらわにしていく。そのことを、たとえば無署名〔1968：p.22-26〕などは、

紀伊国屋書店の客の80パーセントは学生。映画館も「日活名画座」をはじめとしてアート・シアター「新宿文化」など学生相手の「名画座」が多い。

とのべたあと、「満員御礼アングラ演劇のメッカ／ヌードと前衛の同居／おおっぴらになった倒錯／男性ハントのアマゾン族／ハレンチなオアシスだよ」といった表題をかけた記事のなかで詳細に報告している。このように新宿は、先端的なファッションをはじめ、各種の飲食店や酒場、商業施設、さまざまな型のセックス産業など、高度経済成長期の日本に開花した、あらゆる新風俗と都市のあそびが集中する巨大な盛り場としての地位を不動のものにした。それを要約すると、つぎのように表現できようか。

外人も男も水中ショーもある。ノーパンからトップレスパブ、女子大生クラブまで最先端のアダルトタウン。なかでも歌舞伎町はゴツ煮の味とでもいうのか、いろいろな要素で人をひきつける〔栃久保、1981：pp.186-1〕。

ただ、しかしながら今ひとたび、ひるがえってみると新宿はまた、そこに渦まく「反体制のエネルギー」すらをも凌駕する日本の高度成長経済が、みずからを顕示する盛り場でもあった。そのことを、1971（昭和46）年に完成した京王プラザホテルをはじめ、その後、あいついで完成した超高層ビル・ラッシュと、それらのビルに集中したビジネス社会の繁栄が象徴的にものがたる。このことは、すこし視点をずらせば、近世から近代にかけて、盛り場という名の都市空間の繁栄をささえてきた、あそびとたのしみの快楽を追求する無規範的なホンネと、それをなんとか安全に管理しようとしてきた武家的な禁欲と秩序をめざす規範的なタテマエとのあいだの熾烈なまでの「せめぎあい」⁴そのものであるとみるこ

4 すでにみたように、明治時代の知識人には、盛り場での各種娯楽の氾濫をこのましくないものとみなす傾向が顕著であった。しかし、結局は明治・大正・昭和の各時代をつうじて、それはさかんになるいっぽうであった。ただ昭和10年代に日中戦争が勃発し、軍国主義が時代の趨勢になると、盛り場のあそびは、ほぼ完全に窒息させられる。しかし、第2次大戦が終結するやいなや盛り場はすぐに息をふきかえし、そこでは戦前にもまして無規範的な猥雑と喧騒がかもしだされた。ところが、そういう状況がもたらされると、一定の時期において、制度化された行政が、かならず何がしかの規制措置をこころみる。昭和30年代における売春行為の非合法化、東京オリンピック前後における（つぎのページにつづく）

ともできる。そのことを、どちらかという「無規範的なホンネのがわ」に身をおく新宿PR委員会の「新宿メディアポリス宣言」（1968）の、つぎのような文言が暗示している。すなわち、

この都市には実体がない。新宿は、すべての人にとって青春なのだ。青春を動かすものは、権力でもない。金でもない。それはメディアだ。ここでは、なんでも試みることができる。人々のまなざしが流行を生み、人々のことばが文化を作る。それが新宿メディアポリスなのだ。

こうしてみると高度経済成長期の新宿は、さまざまな公共交通機関が集中する日本で最大のターミナルとして、超高層ビルに象徴されるあらゆる近代的施設を集積した「近代の盛り場の到達点」であるとともに、それを超克していく「より現代的な盛り場」としての属性をもはらんでいたということになる。そして、この「宣言」の一節にさしはされられた「メディア」という言葉が、この時代に急速に進行しはじめた日本の全体をおおう情報（産業社会）化の趨勢を彷彿させる。

盛り場として発展する渋谷・原宿・青山

ところで、新宿と同様、公共交通機関のターミナルとして発展した、東京を代表するもうひとつの盛り場に、渋谷とその周辺地域がある。ここは近代以前にあっては、周囲に多数の大名屋敷をひかえる、茶の産地として有名な、ちいさな街道集落であった。明治時代がはじまっても、1882（明治15）に日本最初の公営墓地である青山霊園が整備されたほどの、閑散とした郊外地であった。

ところが、その3年後の1885（明治18）年、JR山手線の前身である品川鉄道が開通して、渋谷がそのターミナルとして発展する基礎がうちたてられる。それにともなって青山学園、国学院、日本赤十字病院などが移転して、明治時代も末期になると、円山町を中心とする渋谷花街が誕生した。さらに1920（大正9）年、原宿に明治神宮が完成し、表参道にケヤキの植樹がなされる。そして関東大震災後、表参道ぞいに同潤会アパートが建設され、さらに昭和時代がはじまると、東急電鉄の前身であった東横電鉄の玉川線、京王帝都の前身であった帝都電鉄の井の頭線にくわえ、地下鉄や市電やバスなどの路線が集中す

酒場や風俗営業にたいする規制の強化などが、そのことを雄弁にものがたる。こうした「せめぎあい」は、現在もなお、盛り場という都市空間を中心に、はげしく展開されている。

る一大ターミナルとなり、1932（昭和7）年に東京市に編入されるころには、東横百貨店が完成するほか、道玄坂方面にむけて繁華街がひろがるようになった。

それが、第2次大戦後にもうけつがれる。つまり新宿と同様、最初は闇市が開設され、飲食店をはじめとして、各種の商業施設が急増し、やがて進駐軍の居住地であった原宿のワシントンハイツ周辺に、進駐軍の兵士たちを主な顧客とする商店が店をひらくようになる。とはいえ、当時の渋谷は、けっして今日のようなファッション・タウンであったわけではない。そのことを丹羽〔1952〕は、つぎのようにつたえている。

渋谷の朝は、二コ四⁵からはじまる。まだうす暗い六時前から、電車のつく度にその数をまして、吐きだされたその群は、間断なく、駅前の広場を黒つぼい色で覆つてしまふ。ひとりひとりちがつてゐるのだが、男も女も一様に黒つぼく見える〔p.144〕。

それが、高度経済成長が緒につく昭和30年代に、おおきく変化する。まず1957（昭和32）年、渋谷駅前に地下街が完成する。その3年後には、新宿が安保闘争でゆれているのを尻目に、渋谷の隣接地域に、いわゆる「六本木族」が登場し、ファッションにささえられる、あたらしい型の盛り場として頭角をあらわしはじめた。じっさい1964（昭和39）年における東京オリンピックの開催をきっかけにして、のちに代々木公園となるワシントンハイツ跡にオリンピック選手村が建設され、さらにNHK放送センターが設置されると、公園どおりは多数のファッションをあきなう繁華街になっていった。これとおなじころ、青山・原宿から六本木にかけての地域に、あいついで高級マンションが建設され、オリンピック道路の完成によって、麻布から青山をへて原宿へとつづく、自動車でおとずれるのに便利、かつ快適なファッション関連のショッピング地帯が忽然と出現する。しかも、周辺地域には、テレビ局をはじめとするマスコミ情報産業が立地するようになった。その変貌の経緯を、当時のジャーナリズムは、つぎのような表現でとらえる。

（六本木は）「東京租界」さながらの生態——二四時間営業致します／お客は外人ばかり／若手文化人の巢／常連・俳優座面々／若さと異国情緒〔無署名、1960：pp.26-29〕。

高級車がズラリと並び、ハデな芸能人のグループ、外国人らをふくめ、ちょっとした「植民地的雰囲気」もある。ここに出没するハイティーンたちのグループを「六本木族」という〔E・K、1961：p.20〕。

⁵ ここでいう「二コ四」は、当時の「日やとい労働者」を意味している。「日給が240円」といった程度の意味である。

こうした趨勢は、1968（昭和43）年における、西武資本の渋谷への進出によって決定的となった。ヴィア・パルコの建設を契機として、渋谷とその周辺は、かつての「ブルーカラーの街」から「教養と文化を商品化する山の手の高級ファッションと飲食の街」へと変貌していく。そのことを、つぎの引用文が雄弁にものがたる。

ミッシー、ちょっとお金を持った中流の娘さんたちとでも申しませうか、そんな人たちの散歩道にお似合いの町が渋谷の一角につくられつつあるのです。それは、たくましく生きた、ここらの男たちとは無縁のものでした。そして「戦後」とは、はっきり切れた町づくりなのでした。渋谷・西武の、そしてパルコのイメージ作りに参画したかたがたははっきりと、言っております。

「私たちは、渋谷はカルチュアタウンであると思っております。新宿にかつてあったその可能性は、えたいの知れない群衆の集まることによってついでました」

すでに「ブティックの町」に変身している青山通りから表参道をつなぐ、大きな円環のファッションの町ができあがるのでありませう。新しい道には、生活必需品などは何も売られていないのです。ただひたすら肉体を、部屋を、知性を「外から飾るもの」が、ウインドーのなかに並びつづけるのです〔森、1973：pp.153-154〕。

こうした状況のなかで、1970（昭和45）年には、青山・原宿・六本木周辺に、パリでうまれたあたらしい娯楽施設としてのディスコティークが、さらに昭和50年代になると、これまたパリでうまれた高級洋装品店を意味する多数のブティック⁶が開店しはじめる。ファッション・ショップを核とするあたらしい型の盛り場が出現したのである。

それは「カジュアルな（＝なにげない）」あたらしい都市のファッションが成立する時期でもあった。そんなファッションにいろどられた衣服を身につけた若者たちは、おりから営業をはじめたカフェバーにあつまり、サブ・カルチャーというよりは、もはや当代の日本の大衆文化の主たるにない手となった若者の文化を謳歌しはじめる。そうした雰囲気、当時の流行語をまじえてえがきだした田中康夫の風俗小説『なんとなくクリスタル』〔1971〕は、こうした時代の気分をとらえて一大ベストセラーとなったのである。

いまひとつ、従来は頑丈な近代建築にかこいこまれるのが普通であった商業・飲食・娯楽施設のアウトドアへの進出が、こうした時代の気分を象徴した。1970（昭和45）年以来、

⁶ 「ブティック」は、ほんらい「倉庫」を意味するフランス語の単語である。それが、この時期にファッションショップのあたらしい一般名称としてもちいられるようになった。

銀座や新宿、池袋や浅草などでこころみられるようになった歩行者天国が、原宿や青山にまでひろがっていくと、それ自体が盛り場を形成する要素のひとつとして、重要な意味をはらむようになる。こうした趨勢を先導したのが、1978（昭和53）年、原宿で開業したブティック「竹の子」にあつまった、いわゆる「竹の子族」であった。彼らは、だぶだぶの衣服を身につけて、代々木公園を中心とする屋外空間で、さまざまなパフォーマンスを演じることによって、都市空間そのものを「一種の劇場、ないしは舞台」とみたと、都市の盛り場のあらたなあそびかたとたのしみかたを開発していくのである。

もちろん、いまなお渋谷にも、ふるくから存続してきた商店や飲食店や娯楽施設がある。しかし盛り場としての渋谷は、これらの施設を、かならずしも銀座の水準に合致させようとする視点からは意匠しようとしていない。そういう意味では、1975（昭和50）年あたりをさかいにして、盛り場の標準モデルはなくなったといってもよい。盛り場をめぐる、こうした状況の変化を、当時の雑誌記事にもとめてみると、たとえば、

ひとりの東京の「プレイタウン」といえば文句なく「銀座・赤坂・六本木」だった。それがいつのまにか「麻布・青山・六本木」ということになっている。（それは）例のTOKYOオリンピックのうちに貫通した幹線道路のおかげもあって、いまどき珍しいマイカーによるショッピング可能地域だし、なによりもこのあたり、緑ゆたかな環境とあいまって、空気の澄んだタウンというのが魅力である〔成城、1972〕。

といった表現に遭遇する。つまり渋谷は、都心のビジネス・センターと郊外の住宅地をむすぶターミナルとして発展したという点では新宿とよく似た発展過程をたどった。しかし同時に、新宿とはまるでことなるいくつかの属性をおびてもいるのである。

第5節 盛り場文化の変容——その近代化と現代化

日常化・世俗化・個別化する「ハレのあそび」

ところで、筆者は本章の冒頭に、つぎのようにしるした。

そこ（盛り場）では「まつりと旅」という、伝統的な村落社会におけるふたつの典型的なあそびが、時間的・空間的に凝縮されて提供されるといいかえることもできる。それは文字どおり「ハレを日常化する」、あるいは「ケハレの」空間なのである。

その結果、かえって村落共同体が、ほんらいのハレの行事を開催する条件と、それが人間の心と体の生命力を再活性化する力を、ふたつながらに、うすれさせてしまった。その

背景には、つぎのような条件の変化がある。

- ① 都市化の進行にともなって、村落共同体が崩壊、ないしは変質した。その結果、祭礼をもよおす人びとの共同体的連帯が、いちじるしくうすれてしまった。
- ② 社会の近代化を促進した「科学的であろうとする指向性」が、伝統的な宗教の力を減衰させた。このこともまた、村落共同体の祭礼をささえる力をよわめた。
- ③ しかも、高度経済成長の達成によって、いつでも御馳走や酒が消費できる物質的なゆたかさが達成された。その結果、わざわざ日時をさだめて、御馳走や酒をたのしむために祭礼をもよおす必要性が、ほとんどなくなった。
- ④ ハレの機会における飲酒や性的体験など、脱日常の快楽を制約する武家的な社会規範にかわって、それらを許容する町人的な脱規範の行動様式が、人びとの気もちをとらえるようになった⁷。そもそも高度経済成長それ自体が、人びとのあらゆる欲望を開放し、はげますことによって、はじめて実現されたのである。
- ⑤ その過程ではまた、歌やおどりなど、芸能の商品化が進行した。その結果、地域ごとに実在していた「芸達者な人びと」にかわって、最初は都市の、やがては日本人全体を観客とする「専門の芸能人」の数が増加し、テレビをはじめとする情報メディアの発達と普及によって、彼らの上演を鑑賞する機会がふえた⁸。

こうした変化の結果、かつてハレの催事がもたらした効用の一部をになう、日常生活の局面がもとめられるようになった。それが、都市の盛り場が提供するあそびやたのしみであり、そこにただよう祝祭性にほかならない⁹。そして、ここで享受される祝祭性には、定

⁷ 国立民族学博物館の特別研究シンポジウムにおいては、明治維新によって武家的規範が国民文化となっていく過程を「サムライゼーション」、それにあらがう町人的脱規範の進行を「チョニナイゼーション」とよんでいた。一種の「学術的俗語（スラング）」である。

⁸ さらにその後、その洗礼をうけた日本人全体が、みずから「芸能人化」しつつあるというのが現状である。こうした現象は、第1部第2章で論じた、1970年代なかば以降、活発になったカラオケの流行やカルチャーセンターの普及と軌を一にしているとおもわれる。

⁹ それは、場合によると一定の限定をくわえただうえで、ハレとケの概念対立の様式とは、やや性格を異にする「数奇＝好き」につうじる「スキ」とでもよぶべき生活の領域を意味しているのかもしれない。このことをめぐって筆者は、かつて、つぎのようにしるしたことがある。

スキ（＝数奇＝好き）は「風流をこのむ」ことを意味することばであり（つぎのページにつづく）、

常的な日常生活の連続に切断をもちこむことによって、その生命力の再活性化をになうことが期待される。都市の盛り場の発展とひろがり、その全国土への普及には、こうした意味がはらまれている。

盛り場の成立とその「近代化」

そこで最後に、高度経済成長の前後における盛り場の変容を比較しておく。そのために、高度経済成長期までを「近代化の時代」としてとらえることにし、その過程で都市とその盛り場が体験してきた変容の意味をかんがえてみる。

それは、近世中期から近代初期にかけて、たとえば浅草なら浅草寺、上野広小路なら湯島天神といった、ある種の宗教的磁力をもった場所の周辺で営業をはじめた露天商や小商業施設、飲食店や興行施設を、恒常的に立地させる都市空間として、都市の周縁地域に誕生した。それは、めずらしくてうつくしい商品、酒や御馳走、芝居や映画などのたのしみ、さまざまな性的遊戯、各種の社交など、一般の生活者が日常的にはであえない祝祭性を、そこでだけ提供する都市のあそび場であった。

ところが、いったん盛り場が形成されると、ほんらいの宗教的磁力は、むしろ希薄化していく。そして、その役割を、そこで提供されるモノやサービスが発する感覚情報それ自体がにないはじめる。たとえば、明治時代になって建設・整備された銀座は、いわば欧米の近代文明のありがたみを仮託された商品やサービスを大量に陳列することによって、擬似的な宗教性を発散したのだとかんがえることもできた。ただ、その宗教性はあくまで「擬似的」である。その結果、盛り場の祝祭性を秩序づける規範性は閑却されがちとなる。こうして盛り場は、ひたすら快楽を追求する無規範的な側面を増大させていく。

こうなると、それを安全かつ秩序化して管理しようとする、主として体制のがわからの規制の意志が顕在化する。放縦な性的遊戯的商品化、際限のない酒類の提供などにたいして、たとえば売春防止法をはじめ、各種の風俗（産業）の跳梁をとりしめる法令が制定さ

その出自の領域や歴史性ととも、ほんらいは範疇化の位相をも異にする概念である。したがって、それらをいっしょくたにして、ハレ・ケ・スキ、などと相互に対立的に使用するの、かなり乱暴な話であるといわねばならない [高田、1977 : p.131]。

ここでいう「スキ」という概念をつかえば、都市生活の近代化と現代化を、すこし別の角度から説明できる可能性があるようにおもわれる。

れてきたことが、このことをものがたっている。しかし、それらもまた、盛り場にあつま
る人びとのあそびとたのしみをもとめるパワーのまえに、すぐに空文化させられてしまう。
明治時代以降、盛り場では、こうした規制の意思とそれからの逸脱の指向性が、これまた
際限のないせめぎあいをくりかえしてきた。こうした盛り場の典型のひとつとして、高度
経済成長期に隆盛をきわめた東京の新宿をあげることができる。

このことは、盛り場をふくむ都市空間全体に視野をひろげたときにもあてはまる。まず、
盛り場の商店や飲食店、歓楽施設や興業施設は、その経営主体にしばしば、きわめて効率
よく多大の利潤をもたらす。そのため、これらが立地する土地は私的にかこいこまれ、そ
こに恒久的な建築物が構築される。こうしたいとなみが近世以降、とくに明治時代以来の
都市の盛り場の変化をつらぬいてきた。それは同時に、都心にビジネス・センターが成立
し、都市の人口が増加し、彼らの住居地が郊外にひろがることによって近代都市が空間的
に肥大する過程でもあった。こうした変化にともなって、仕事場と居住地をつなぐ公共交
通機関が発達し、その結節点にターミナルが形成され、それがまた、あたらしい都市の盛
り場を現出させた。その結果、かつて近世都市に盛り場が形成された時点では、都市の周
縁へとおいやられたはずの盛り場が、あたかも「都市の中心＝都市のなかの都市」である
かのような相貌を呈するようになったのである。

盛り場の「現代化」——高度経済成長以後

前項にのべた「盛り場の近代化」は、いわゆる高度経済成長の時代をへて、いよいよ、
そのにぎわいの度合をつよめ、あそびやたのしみにいどられた祝祭性をつよめていく。
こうした時代に、あらたに姿をあらわした盛り場として、たとえば東京の場合なら、渋谷
から原宿・赤坂・六本木・青山などにつながる地域がある。そこでは、近代初期から高度
経済成長期にかけて発展した、浅草・銀座・新宿などとは、相当ことなる状況が現出した。
それらをつぎに列挙してみる。

その第1は、浅草や銀座の老舗にかわって、名称も「ブティック」など、あたらしい雰
囲気をかもすものにかえたファッション性のたかい商店を中心に、レストラン、カフェバ
ー、ディスコ（ティーク）など、時代の気分を表象するあそびやたのしみを提供すること
で人びとの関心を喚起しようとしている点である。その背景には、第1部第2章や第5部
序章で論じた情報（産業社会）化、ファッション化、カジュアル化など、社会全体の変容
がみごとにうつしだされている。

つづいて第2は、盛り場を徘徊する年齢層が、いちじるしく若年化したという点である。むろん大正末期から昭和初期にかけて銀座を闊歩したモボ・モガ¹⁰、高度経済成長期の新宿に蝟集したヒッピーやアイビールックに身をかためた男女もまた、それぞれの時代の若者にほかならない。しかし、渋谷や原宿のにぎわいをささえた若者の文化は、現代日本の文化一般のなかで、サブカルチャー（下位文化）としての地位をたしかなものにしながら、やがてその全体に無視しえない影響をおよぼすひろがりをもつようになった。その点で、それ以前の若者文化とはことなる意味をもっていたといえる。

そして第3は、渋谷を中心に、映画館や劇場、音楽ホールやカルチャーセンターなどがたくさん立地し、その全体が「若者文化の陳列場」であるかのような様相を呈するようになった点である。むろん浅草や銀座にも、複数の劇場や映画館が存在し、訪問者を魅了することで、そのにぎわいの増大におおきな役割をはたした。しかし、それらは基本的に「娯楽施設」とみなされてきた。それにたいして、渋谷とその周辺の盛り場は、それらを一種の「教養と文化」を提供するものとして演出し、その全体を商品化することをビジネスにかえた点で、それ以前の盛り場とは、やや性格を異にしている。

さらに第4は、渋谷とその周辺には、あたらしいマスコミ、すなわちテレビ局に代表される電波メディアの放送拠点が集結した点である。むろん銀座とその周辺にも、新聞社や出版社など、マスコミ関連の企業立地はすくなくない。しかし、第1部第2章で論じた、日本の情報（産業社会）化のきっかけとなったテレビ放送局は、銀座の周辺には存在しない。このちがいはおおきい。なぜなら、その結果、渋谷とその周辺には、日常的に芸能人が姿をあらわすようになったからである。しかも、その芸能人は、銀座の劇場の舞台にたつ芸能人ではなく、テレビ放送をとおして家庭に姿をあらわす芸能人である。そこでは芸能界が「カジュアルな（なにげない）存在」に変化したのである。

にもかかわらず、芸能界やテレビ局は、ある種の疑似宗教性を発散する。そういえば、盛り場としての浅草には浅草寺、上野広小路には湯島天神という宗教施設が隣接していた。こうしてみれば、銀座とその周辺に立地した新聞社や出版社、新宿なら西口に立地した超高層ビルが林立するビジネス街も、一種の疑似的な宗教性を発散していたといえなくもない。さきに、銀座の発散する疑似宗教性は「欧米の近代文明のありがたみ」であり、新宿の発散する疑似宗教性は「高度経済成長期におけるビジネスの成長のありがたみ」だとい

¹⁰ いうまでもなくモダンボーイ、モダンガールを略した当時のスラングのひとつである。

う意味のことをのべたが、新聞社や出版社は、それを活字に託して、新宿西口の超高層ビル街は、それを景観に託して、当時の日本社会とそこにいきる一般生活者に伝達しつづけたのだといえる。そういう意味で、いよいよ本格化する情報（産業社会）化の過程において、テレビ電波を発信しつづけるテレビ局が、その時代の疑似的な宗教性を象徴したとしても、不思議はあるまい。

くわえて第5は、渋谷とその周辺に、あらゆる斬新でファッショナブルなデザインの建築が立地しながら、他方では、そうした建築物から開放された屋外空間が、あそびやたのしみの舞台として使用されるようになったことである。とくにJR原宿駅の周辺では、さまざまな露店が営業をはじめ、あたりの公園や路上では若者たちが、バンド演奏やダンスなど、多様なパフォーマンスを演じるようになった。そこでは、通常の劇場においては明確に区別される演技者（パフォーマー）と観客（スペクテーター）が、ときにいれかわり、あるいは路上のアマチュアからテレビに出演するプロの芸人へと変転するなど、従来の芸能とは相当に性格を異にする動向が観察されたりもしている。

そして最後に、渋谷とその周辺は、鉄道をはじめとする公共交通機関のターミナルを核としながらも、自動車交通にも対応しうる盛り場としての特質をあらわにしめしつつ、さらに郊外の住宅地にまでひろがっていく様相をあらわにしているのである。

こうしてみると、近世から近代へと変転してきた盛り場をめぐる「中心と周縁」の関係は、高度経済成長以後、いくえにも変化しながら、相互の位置と役割を、いっそう錯綜させつつあるといえる。じっさい、すでにみたように、かつては近代の盛り場の理念型であった銀座が、いまでは唯一のモデルではなくなったし、また、浅草や新宿はもとより、渋谷・青山・六本木などに視線をさせても、それらが地理的に都市の中心なのか周縁なのかも、さだかにはきめがたいというのが現状であるようにおもわれる。

あるいは、高度経済成長期までの盛り場は、主として商店、つまりは「みせ」に陳列された商品に付加された情報のマッサージ性に託して、あたらしい魅力にみちた生活と文化のイメージを伝達することによって人びとを吸引してきた。それにたいして、高度経済成長期以降の盛り場は、プロの芸能人やアマチュアのパフォーマンスに託して、おもしろさとたのしさにみちた生活と文化のイメージを発散しているという点で、いわば「劇場」としての資質をあらわにしつつあるということができるようにおもわれる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・ E・K、1961「青春を突っ走れ！——東京・六本木族の内幕」『週刊サンケイ』（5月15日号）
- ・ 二葉生、1905「浅草公園（上）」『中央公論』（2月号）
- ・ 初田亨、1982「建築にあらわれた近代」『日刊工業新聞』（4月19日）（陣内秀信、1985『東京の空間人類学』筑摩書房、pp.156-157より再引用）
- ・ 広津和郎、1926「銀座と浅草」『中央公論』（4月号）
- ・ 久野豊彦、1932「新宿新風景」『新潮』（3月号）
- ・ 稲垣史生、1966『江戸編年事典』青蛙房
- ・ 稲田政吉、1927「五十年前の銀座付近」『サンデー毎日』（10月23日号）
- ・ 加藤秀俊、1979『都市と娯楽』鹿島出版会
- ・ 麴町坊、1910「都会の誘惑物」『太陽』（3月5日号）
- ・ 倉本長治、1947「インフレ繁昌記——新東京盛り場三景」『オール読物』（6月号）
- ・ 松川二郎、1927「東京郊外の新名所」『中央公論』（4月号）
- ・ 三須裕、1922「銀座街 頭を歩く流行」『サンデー毎日』（10月29日号）
- ・ 三宅やす子、1927「デパートメント買物漫談」『中央公論』（4月号）
- ・ 森忠彦、1973「渋谷ルポ——暗く汚れた・体臭のまち・を占領した電光とガラスの城」『週刊朝日』（10月26日号）
- ・ 守屋毅、1985「都市と劇場」『都市化の文明学』中央公論社
- ・ 無署名、1959「銀座と新宿」『サンデー毎日』（5月10日号）
- ・ 無署名、1960「六本木かいわい繁盛記」『サンデー毎日』（4月10日号）
- ・ 無署名、1968「新宿ジャングル」『サンデー毎日』（5月19日）
- ・ 丹羽文雄、1952「渋谷駅前の一週間」『中央公論』（4月号）
- ・ 小汀利得、1932「百貨店論」『婦人サロン』（7月10日号）
- ・ 大宅壮一、1951「歓楽街五十年史」『サンデー毎日』（4月2日号）
- ・ 魯庵生、1929「銀座繁昌記」『中央公論』（5月号）
- ・ 酒井真人、1927「カフェ廻り十二軒」『中央公論』（4月号）
- ・ 佐々醒雪、1902「浅草の繁栄」『新小説』（4月1日号）
- ・ 成城大助、1972「麻布・青山・六本木（上）」『月刊ペン』（12月号）
- ・ 高田康孝、1977「酒縁社会・考」『季刊人類学』（8-4）
- ・ 高田公理、1984「宴の文化史」『季刊はあとびあ』冬

- ・高田公理、1986『都市をあそぶ』講談社
- ・高田公理、1988「都市の盛り場——浅草から渋谷まで」（井上忠司・編）『現代日本文化における伝統と変容④都市のフォークロア』ドメス出版
- ・栃久保昭道ほか、1981「新宿・歌舞伎町」『週刊現代』（6月18日号）
- ・東京都、1979『東京百年史②』ぎょうせい
- ・吉行エイスケ、1931「華やか、新宿繁昌記」『改造』（1月号）
- ・上田篤ほか、1970『フィールドノート——都市の生活空間』日本放送出版協会

第2章 飲酒文化における「泥酔の美学」の退潮¹

第5部第1章で論じた盛り場において、重要な役割をはたしている要素のひとつとして、さまざまなタイプの酒場がある。すでに何度かのべたように、筆者は、かつてそうした酒場のひとつを経営した経験をもっている。そこで第5部第2章においては、その経験と、その後、みずからがおとずれた多様な酒場における「酒のみよう」を観察した結果を議論の俎上にのぼせてみることにした。

はじめに——柳田國男「酒の飲みやうの変遷」とその後

かつて柳田 [1939]²は、その冒頭につきのようにしるした。

酒を飲む風習は日本固有、即ちいつの頃とも知れぬほどの昔から、続いて居るものに相違ないが、其風習の内容に至っては、昔と今との間に大きな変遷がある [p.101]。

このことは、1939（昭和14）年当時と、この論文の初出時期にあたる高度経済成長後の1983（昭和58）年とをくらべたときにも、ほぼ、あてはまるようにおもわれる。そこで、本章においては、主として柳田 [1939] が指摘するところにみちびかれながら、その発表当時から高度経済成長期にいたる、日本人の「酒のみようの変遷」のあとをたどることによって「酒をめぐる美意識の変容」をとらえなおす。

第1節 日本人の飲酒量と日本人がこのむ酒の種類と品質

増加する日本人の飲酒量

「酒の飲みやうの変遷」を論じるまえに、柳田 [1939] は、日本人の飲酒量の推移に言及して、つぎのようにのべている。

¹ 第5部第2章のもととなる論文は、1983（昭和58）2月8日から3日間にわたって開催された国立民族学博物館主催のシンポジウム「生活の美意識」（特別研究「現代日本文化における伝統と変容Ⅰ」に該当する）において発表されたのち、高田 [1984] として公刊されている。

² 柳田 [1939（昭和14）] は、最初「民俗と酒」という表題で『改造』（2月号）誌上で発表され、のちに「酒の飲みやうの変遷」と改題して『木綿以前の事』に収録された。

大体に一人々々の飲む分量が、半世紀前と比べてはよほど減ったかと思はれる。下戸の増加したこともたしかであるが、それよりも大酒飲みといふ人が少なくなり、平均消費は減退の傾向を示して居る [p.101]。

これにくらべると、1939（昭和14）年から高度経済成長期まで、日本人の総飲酒量は、第2次大戦中から終戦直後にかけて、いちじるしく減少したのち、急速に、かつ一貫して増加してきた。じっさい、1939年当時、せいぜい90万キロリットルにすぎなかった、あらゆる酒類の総製成数量が、約40年後の1980（昭和55）年には、その7倍以上にあたる690万キロリットルにまで増加した（表5-2-1）。むろん、その間には酒類をのむことのできる成人人口も増加した。しかし、総製成数量の増加のほうがいちじるしかったため、おなじ時期に日本人成人ひとりあたりの飲酒量は、ほぼ3.9倍に増加した勘定になる。してみれば、ごくおおざっぱにいて、柳田 [1939] の発表にさきだつ半世紀のあいだに、もし柳田 [1939] が指摘するように「日本人の『下戸』化」が進行したのだとすれば、その後の半世紀は、その「『上戸』化」の過程であったといてよい。

それでは、高度経済成長後の日本人は、どんな種類の酒を、どのぐらいの量、のむようになったのか。このことをあきらかにするには、酒の種類と、それにふくまれるアルコールの量を計算しなければならない。そこで現行の「酒税法（昭和28年法律第6号）」をひもとくと、この法律による酒類とは、

「1パーセント以上のエチル・アルコールを含有する飲料の総称」

であることがわかる。そしてそれは、①清酒、②合成清酒、③しょうちゅう、④みりん、⑤ビール、⑥果実酒、⑦ウィスキー類（ブランデーをふくむ）、⑧スピリッツ類、⑨リキュール類、⑩雑酒の合計10種類に分類されている。

これらの条件を前提としたうえで、表5-2-1における1980（昭和55）年の「酒類の総製成数量」を参照すると、

- ① ビールの量が圧倒的におおくて、全体の約3分の2におよぶこと、
- ② 清酒は、全体の4分の1以下であること、
- ③ ウィスキー類、しょうちゅうがこれらにつづくこと、

などがみてとれる。ところで、これらの酒類は、種類ごとに設定した定数を乗じてもとめた「純粋アルコールの含有量」の数値をみると、現代日本人が摂取するアルコールの35.7パーセントが清酒に、17.8パーセントがビールに、21.9パーセントがウィスキー類に、それぞれ由来するとともに、それらが含有する純粋アルコールの総量は、65万4300キロリ

表 5-2-1 1939 (昭和 14) 年と 1980 (昭和 55) 年における酒類の総製成数量とそれに含まれる純粋アルコール量の比較 (資料: 国税庁『統計年報書』)

1939 (昭和 14) 年

名称	アルコール含有量 (%)	総製成数量			純粋アルコール量		
		数量 (千 kl)	構成比 (%)	対 1939 年増加率 (%)	数量 (千 kl)	構成比 (%)	対 1939 年増加率 (%)
清 酒	15	① 443	49.1		① 66.5	58.8	
合成清酒	15	④ 30	3.3		4.5	4.0	
しょうちゅう	25	③ 84	9.3		② 21.0	18.6	
みりん	15	14	1.6		2.1	1.9	
ビール	4	② 311	34.5		③ 12.4	11.0	
果実酒類	12						
ウィスキー類	40						
スピリッツ類	40	20	2.2		④ 6.6	5.8	
リキュール類	40						
雑 種	—						
合 計		902	100.0		113.1	100.1	

1980 (昭和 55) 年

清 酒	15	② 1559	22.6	④ +252	① 233.9	35.7	④ +252
合成清酒	15	21	0.3	-30	3.2	0.5	-29
しょうちゅう	25	④ 242	3.5	+188	④ 60.5	9.2	+188
みりん	15	69	1.0	③	10.4	1.6	③ +395
ビール	4	① 4541	65.9	+1360	② 181.6	27.8	②
果実酒類	12	69	1.0		8.3	1.3	+1365
ウィスキー類	40	③ 359	5.2		③ 143.6	21.9	
スピリッツ類	40	8	0.1		3.2	0.5	
リキュール類	40	24	0.3	①	9.6	1.5	①
雑 酒	—	—	—	+2200	—	—	+2395
合 計		6892	100.0	+664	654.3	100.0	+479

(注: アルコール含有率は概算による。また、○数字は順位をしめす)

ットルにのぼることがあきらかとなる。

では、これらの数値には、どんな意味がかくされているのか。それを、わかりやすくしめすために、1980 (昭和 55) 年における日本の成人人口の総数を、約 7300 万人とみつめて、成人 1 人あたりの平均的な純粋アルコール摂取量を計算してみると、年間およそ 8.96 リットル、1 日あたりに換算してみると、約 24.6 ミリリットルという数値がもとめられる。そこで、これをふたたび清酒、もしくはビールの量に換算しなおしてみると、当時の日本人の成人男女は、上戸であるか、下戸であるかにかかわらず、清酒なら、およそ銚子 1

本弱にあたる約164ミリリットル、ビールなら大びん1本弱にあたる約615ミリリットルを、毎日かかさずのみつづけた勘定になる。そして、この量の清酒、またはビールが、身体の中の血中アルコール濃度を、0.05～0.1パーセントにたかめるのにじゅうぶんな量であることをかんがえると、当時の日本人は毎日、国をあげての「微酔の夕べ」をむかえていたことになる。こうしてみると、高度経済成長後をつうじて、日本人は全体として、たしかに「上戸化」の道をたどってきたといえなくもないことがわかるのである。

酒の味覚の高級化・多様化・洋風化・再日本化

ところで、日本人の平均的な飲酒量の増大の過程には、同時に、

「酒の質がよくなり、その種類が多様化する」

という過程がともなっていた。この点にかんするかぎりは、柳田〔1939〕の発表の以前と以後の趨勢は、連続しているといえそうである。げんに柳田〔1939〕自身も、つぎのようにしるしている。

高くもなったけれども酒の質が、今は前代とは比べものにならぬ程よくなったのである。

其上に味もよくなり、色も愈々美しくなって、幸か不幸か嗜好品としての資格を、段々と具備するようになって来たのである [p.102]。

これと同様の趨勢は、すくなくとも第2次大戦の終結から高度経済成長期までの酒の質の推移にもあてはまる。というのも、たとえば清酒にかんしていえば、精米機の進歩、ホーロー・タンクによる醸造や低温発酵技術の導入、活性炭素による濾過などの新技術があいともなって、その純度と清潔度をたかめてきたからである〔穂積、1968：pp.28-30〕。もっとも、この間の1949（昭和24）年以降、完成した清酒を水でうすめたうえで、醸造用アルコールとぶどう糖を添加することが、法律上もみとめられるようになった。そのため、それいぜんにも進行してきた酒の味の「甘口化」が、さらに進行する³。そのことに関連して、たとえば坂口〔1964〕などは、つぎのような手きびしい批判を展開している。

葡萄酒では、……酸をとまわらない甘味みの酒は決して尊ばれないのであるが、日本酒の近来の甘口には、よくこの点を忘れたものが見うけられるのは、日本酒の墮落である

³ 日本語の「あまい」と「うまい」は同根であるといわれる。第2次大戦直後、生活物資の供給がままならなかった時代には、人びとが「あまみ」のある食物をもとめた。それが「清酒の甘口化」をすすめた要因のひとつだともいわれる。

[p.4]。

しかし、高度経済成長が進行すると、じょじょに食物や飲料の過剰な「あまみ」が敬遠されるようになり、これに健康上もこのましくないという、一種のおもいこみがくわわったためか、1975（昭和50）年あたりをさかいにして、ウィスキーやしょうちゅうなど、辛口の蒸留酒が人びとの人気をあつめるようになった。こうした状況のかたわらで、清酒にかんしても、辛口の純米醸造酒の人气がたかまるなど、製成される酒の味と、それにたいする人びとの反応は流動化していく。

つづいて、日本人にこのまれる酒の種類の推移についてみると、1939（昭和14）年当時には、その総製成数量のなかばをしめていた清酒の地位が相対的に低下し、ビールやウィスキー類など、いわばヨーロッパ由来の酒の地位が急速に上昇してきたことがわかる。この点にかんしては、表5-2-1にくわえて、統計資料が入手しえた4種類の酒類の総製成数量の推移を、1940（昭和15）年を100とする指数でしめた図5-2-1（上図）を参照すれば、いちもく瞭然となる。すなわち、1980（昭和55）年にいたる40年のあいだに、ウィスキー類とビールの製成数量が、それぞれ約26倍と12倍に増大したのにたいして、清酒としょうちゅうの製成数量は、せいぜい3.5倍と3.1倍にとどまっているからである。

しかも、図5-2-1の下図を参照すれば、ウィスキー類とビールは、1945（昭和20）～1950（昭和25）年から1980年まで、一貫した増加傾向をしめしているのにたいして、しょうちゅうは終戦直後に、いちど急速な増加をしめしたのち減少に転じ、清酒もまた1975（昭和50）年いこうは、微減の兆候をあらわにしていることが判明する。このことは、日本人がこののでのむ酒の種類が、伝来の日本酒、すなわち清酒から、ヨーロッパ由来の、いわば「西洋酒」へと推移しつつあることをしめしているといえる。

もっとも、この過程において、ここでいう「西洋酒」は、最初にビール、つづいてウィスキー類という順序で、日本料理との親和性をつよめ、とりわけ日本で製成されるウィスキーは、スコッチやバーボンやカナディアンにたいして「ジャパン・ウィスキー」とよばれるほどに、独自の味と香りを確立し、そののみかたも、ウィスキー本来の「生のまま」でのむ方法とはことなる「水でわる」のみかたが主流をしめるようになった。という意味においては、これら「西洋酒」もまた「日本的に再編成される」ことによって、いよいよその地位をたしかなものにしたのだとかがえてよい。

こうした状況の変化の結果、高度経済成長期以後の日本人の酒にたいする嗜好は、いちじるしく多様化するようになった。げんに、これまでにのべた4種類の酒にかぎらず、

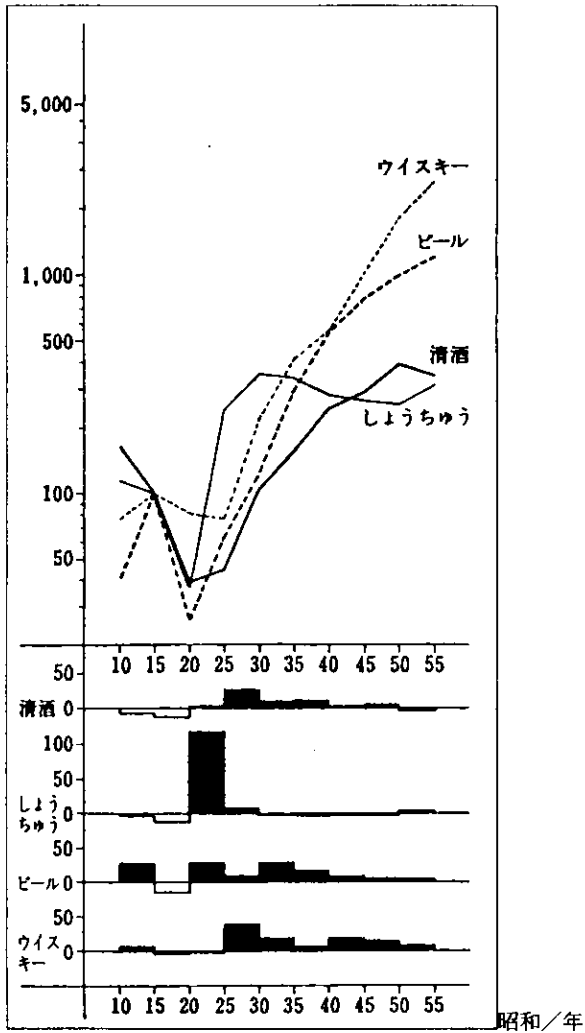


図 5-2-1 4 種類の酒類の総製成数量の推移

(上の部分の指標は「1940 (昭和 15) 年を 100 とした指数で表示」、下の部分は「対前年の伸び率の 5 年ごとの平均値」である) (資料: 国税庁『統計年報書』)

1975 (昭和 50) 年あたりをさかいにして、主としてわかい世代によってしょうちゅうが支持されたり、都市のおしゃれな男女のあいだで、ぶどう酒の^{ブドウ}人気^{ブドウ}がたかまったりしているのは、その一例である。つまり、日本の一般生活者は、酒類のこのみにかんしても、それぞれの個性を表明するようになってきたというわけである。ただ、そうした酒にたいするこのみが、それを供給する酒造メーカーや流通産業によって、あらかじめ設計されて提供される鋳型にはまるよう誘導されているという点もまた、他方における事実であることは閑却されるべきではない。

第2節 日本人が酒をのむ頻度と機会の変化

柳田國男「酒の飲みやうの変遷」から

いまふたたび柳田 [1939] にもどると、

(酒は)嗜好品としての資格を、段々と具備するようになって来た。

という。その結果、一般に酒をのむ頻度は増加し、その機会もまた変化してきた。そこで、こうした変化を考察するまえに、1980年前後の日本人が、平均すると、どの程度の頻度で、どんな場所で、どんな種類の酒を、どんな理由をつけてのんでいたかを、1977(昭和52)年に、広告代理店の博報堂が、首都圏と阪神地区の800人の成人男女を対象に実施したアンケート調査[博報堂、1978]をもとに、箇条がきにしてみる。

- ① 飲用頻度———1位：「毎日のむ」……………54.1パーセント
 2位：「週四日以上のみ」……………12.3パーセント
 1位と2位の合計……………66.4パーセント

まとめ：酒は、文字どおり「日常化された飲料」になっていた。

- ② 酒をのむ場所———1位：「自宅がおおい」……………61.3パーセント
 2位：「外がおおい」……………22.3パーセント
 3位：「両方おなじくらい」……………16.5パーセント

まとめ：「夜毎の晩酌」を中心に「ときに外でのむ」というのが、日本人の多数派の酒のみようである⁴。

- ③ このまれている酒—1位：ビール……………39.9パーセント
 2位：ウィスキー……………29.1パーセント
 3位：清酒……………26.4パーセント

まとめ：全体的にみれば、日本酒よりも西洋酒のほうがこのまれている。この傾向は、高齢者層より若年齢層においていっそういちじるしい。

- ④ 酒をのむ理由———1位：「精神的なつかれをとりたい」……………49.2パーセント
 2位：「肉体的なつかれをとりたい」……………40.8パーセント

⁴ ただし、高田 [1983] の記述によると、量的にいえば、酒類の60パーセントは「家の外でのまれている」というデータもある [P.186]。

4位：「連帯感をもちたい」……………17.0パーセント

まとめ：酒による酩酊にともなう生理的な鎮静作用への要求が主流をしめ、酒の向精神作用の結果としての「酩酊」そのものは、すくなくとも意識のうえでは、副次的にしかもとめられていないことがわかる。

ところで、1980年代における、酒をめぐる日本人の意識のこうした現実は、柳田〔1939〕が指摘した趨勢が、そのまま高度経済成長期にまで受けつがれてきた結果にほかならない。そこで、つぎに柳田〔1932〕〔1939〕を参照しながら、このことを検討してみる。

最初の引用は、つぎのとおりである。

昔の純然たる自給経済の時代には、……酒を飲むべき機会は限定せられ、且つ夙くから予期せられて居た〔1939：P.102〕。

（しかも）正月でも節句でも、乃至は祝儀、年賀元服の場合でも、それぞれ神を祭つた故に酒を飲んだのであります〔柳田、1932：P.444〕。

つまり、もともと酒は「ハレの日だけに」のむべきものだったという。それが、近世なかばから「つくり酒屋の酒」が市中にでまわるようになり、さらに1886（明治19）年、はじめてびんにつめて販売されるようになった結果、ケの日にも酒がのめるようになり、さらに現代の日本では、「ほとんど毎日のむ」ようになってきたというわけである。同時に、その過程では「神をまつて酒をのむ」ことの意味がうすれた。つまり、現代の日本人は、みずからの快樂のためにこそ酒をのむのである。

つぎに柳田〔1939〕は、晩酌、寝酒といい、飲み屋の酒というも、ひとりで酒を飲む機会が増加してきたことを指摘する。すなわち、

昔は酒は必ず集まって飲むものときまつて居た。手酌でちびりちびりなどといふことは、あの時代の者には考えられぬことであつたのみならず、今でも久しぶりの人の顔を見ると酒を思ひ、又は初対面のお近づきというふと飲ませずには居られぬのは、共に無意識なる昔風の継続であつた〔P.104〕。

それにたいして、現代の日本人が「ほとんど毎日のむ」酒は、その頻度にかんするかぎりは「家のなか」でのまれることがおおく、また、酒場でのむ酒も、その酩酊のおもむくさきは、きわめて個人的な快樂の追求に傾斜しているというほかない。その結果、当然「ひとりで飲む」機会は増加せざるをえなくなるのである。

さらに柳田 [1939] は、つぎのような興味ぶかい指摘をおこなう。いわく、

酒屋でも『居酒屋致し候』といふ店はきまつて居て、そこへ立寄る者は、何年にも酒盛りの席などには列なることの出来ぬ人たち、たとへば掛り人とか奉公人とかいふ晴れては飲めない者が、買つては帰らずにそこに居て飲んでしまふから居酒屋であった [pp.106-107]。

こうした傾向は高度経済成長期に、さらにいっそう加速されたようにおもわれる。げんに現代の日本では、酒場でのいわゆる「居酒屋」が、ごくあたりまえのできごとになっている。というのも、現代日本の夜の盛り場に軒をならべる酒場は、かりにその名称が、スナックであろうと、キャバレーであろうと、すべてこれ「今よう居酒屋」にほかならないからである。そして、そこをおとずれる客のおおくは、文字どおり「今よう奉公人」としての、われわれ現代日本のサラリーマンなのである。

「ハレの酒・ケの酒・スキの酒」という仮説

このように 1939 (昭和 14) 年以来、こんにちまでの「酒のみよりの変遷」を、いくつかの視点からふりかえりながら、それを要約してみると、つぎのような変化を指摘することができる。

- ① あらかじめ日時と場所をさだめてのんだ酒が「いつでも、どこでも」のめるようになった。それは、まつりや祝儀など「ハレの時空間」でのみのまれた酒が、晩酌や寝酒や社交の場など「ケの時空間」でものまれるようになったということである。
- ② おなじ共同体に所属する多数の人びとがあつまつてのんだ (集飲した) 酒が、個人的にのまれる (個飲される) 機会がふえた。それは、さきに示唆したところにしたがうと、純粋なあそびのための酒の機会が日常化したということでもある。
- ③ 共同体の連帯感をつよめるためにのまれた酒が、都市の生活者の社交や個人的な酩酊の快楽のためにものまれるようになった。

じっさい、たとえば 1977 (昭和 52) 年 2 月に、余暇開発センターが実施した『日本人の生活時間および余暇活動調査』 [余暇開発センター、1977] の調査結果によると、

「最近の 1 年間におこなった余暇活動」

の第 1 位は「読書」で 55.0 パーセント、第 2 位は「外での食事」で 52.6 パーセントであるが、第 3 位には「喫茶・スナック」の 48.6 パーセントが登場する。また、対象を男にかざると、「喫茶・スナック」は 55.4 パーセントに増大し、さらに「バー、キャバレー」も 30.8 パーセントという、たかい比率をしめしている。それらを、かりに「家の外で酒を

のむこと」と一括すれば、それらが自由時間における、彼らのたのしみとして、かなりの重要性和普遍性をはらんでいるらしいことが推察される。

ところで、ハレの酒が、ハレの時空間を「ハレたらしめる」ためにのまれ、ケの酒が、その味をたのしみながらも「食欲を増進させる晩酌」「ねむけをさそう寝酒」としてのまれることをかんがえると、これらの酒はいずれも、人間の生活にとって、ある種の機能的な効用をもたらすことが期待されているといえる。それにたいして、高度経済成長以降、とりわけ自由時間にあそび、たのしむためにのまれる酒は、そういった性格をいちじるしくうすれさせている。そこで、このような酒のありかたを「スキの酒」と名づけてみることに、多少の意味があるかもしれない。

もちろん現代の日本社会にあっても、結婚式における三々九度の儀礼、その披露宴での酒などには、かつてのハレの酒の属性が濃厚にのこっている。また、晩酌や寝酒などの、いわゆるケの酒が逼塞したという資料があるわけでもない。しかし、いっぽうで、ハレともケともつかない、盛り場のスナックやキャバレー、あるいは、気のおけない仲間があつまるパーティーなどで酒をのむ機会は、いちじるしく増加している。そして、かつて近代以前の日本社会においては、このような機会が、ありはしたものの、比較的すくなかったことをおもうと、それらをまとめて「スキの酒」と名づけることには、それなりの意味がありそうにおもえる。むしろ、それにたいして第5部序章で提起した「ケハレの酒」という名前を付与しても、いっこうに問題はない。

ただ、いうまでもなく「ハレ（晴）とケ（曇）」という概念対立の形式は、伝統的な日本人の生活における対立的側面を説明するために日本民俗学が提起した、一種の2項対立型の概念モデルである。これにたいして、スキ（好き＝数奇）は「風流をこのむ」ことを意味する言葉であり、その出自の領域や歴史性ととも、ほんらいは節疇化（カテゴリゼーション）の位相をも異にしている。したがって、それらを並列して「ハレ・ケ・スキ」と、相互に対立的に使用するの、かなりむちゃな話であるといわねばならない。

しかしながら、いまかりに、これら3つの対立概念を、現代日本人の生活に投影するとともに、相互に二律背反的で、かつ生活現象全体を秩序づける3つの節疇としてもちいるとき、かなりの有効性を発揮しうようにおもわれる。そこでつぎに、ここで「スキ」と名づけた生活の領域がはらんでいる特質を箇条がきにして列挙しておく。

- ① スキは、家庭や職場における日常生活の機能的な必要に由来するものではない。
むしろ家庭や職場における日常生活では体験できない「脱日常性＝脱ケ」をめざす。

- ② ハレが「非日常」でありながら、他方では、社会生活にとって必要不可欠な機能的効用を発揮するのにたいして、スキは生活者個人の内発的な興味や関心に由来しているという点において、「非日常」とは、微妙にニュアンスのことなる「脱日常=非ハレ」をめざす。

このような限定をくわえるならば、現代の日本社会においては「スキの酒」の領域が肥大しつづけているというみかたにも一定の意味があるようにおもわれる。

第3節 酒場における「居酒屋」の諸形態とその変化

前節の最後にのべた「スキの酒」のうけ皿として、もっとも一般的なものが、「ケハレの空間」である夜の盛り場に軒をならべる、さまざまな種類の酒場であることは論をまつまい。ここでいう「酒場」とは、

「不特定多数の顧客にたいして、その場で酒をのませることを主たるサービスとして提供する飲食店」

といった程度の意味である。では酒場には、どのような種類が区別できるのか。あるいは、それらの種類ごとの酒場は、どのような盛衰をたどってきたのか。第3節では、こうした問題を検討の対象としてとりあげる。

「酒場の一般モデル」とその諸類型

前段の問題を検討するまえに、一般に酒場が成立するための要素と条件をかきだしてみる。そのために作成したのが、「酒場の一般モデル」をしめした図5-2-2である。この図にかんする詳細な説明は必要あるまい。つまり、酒場は、①空間（場）、②酒・つまみ、③サービスを提供する人、④客、⑤客が支はらう金、という5つの要素によって、成立しているというだけの話である。ただし、これら5つの要素のうち、どの要素の比重が比較すればおおきいか、あるいは、それらの相互関係をどのように意匠するかによって、さまざまな種類の酒場の特質がきわだっていく。そこで、つぎに客の立場にたって、日本の夜の盛り場に軒をならべる多種多様な酒場を、ごくおおざっぱに類型化してみる。その結果をしめしたのが、つぎの「酒場の諸類型」をしめした図5-2-3である。

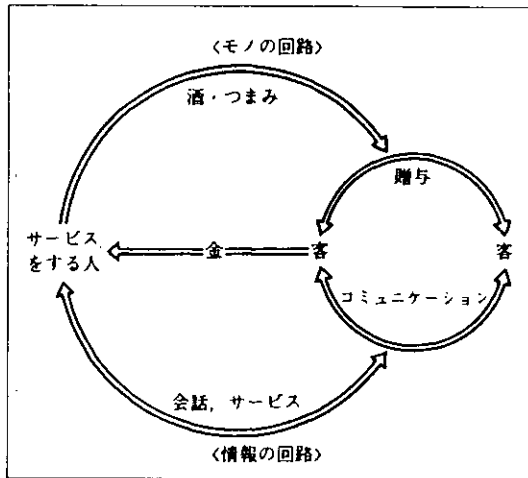


図 5-2-2 酒場の一般モデル (原図：高田)

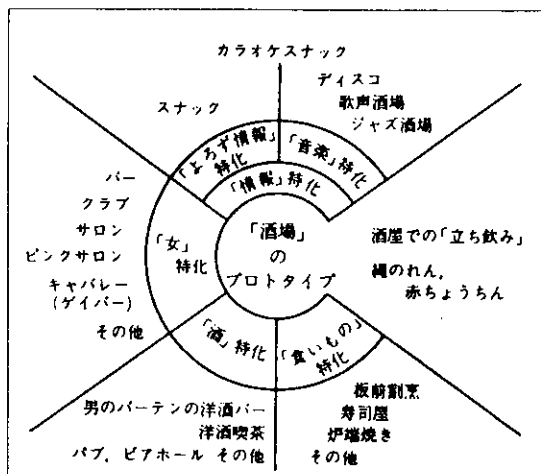


図 5-2-3 酒場の諸類型 (原図：高田)

ただし、ここにことわったとおり、この類型化は文字どおり「客の立場」からこころみたものにほかならない。というのも、酒場の営業を許可し、管理する法律のがわにも、それなりに厳密に、これらの酒場を分類する体系がさだめられているからである。その詳細に立ちいることは、ここではしないが、参考に付するため、それぞれの酒場の営業の許認可を管轄する官庁とその根拠となる法律を、表 5-2-2 に一覧しておく。

⁵ 「酒場」という概念が、法律のなかにさだめられているわけではない。そのことは表 5-2-2 を参照すれば、あきらかであろう。

表 5-2-2 法律に規定された酒場の諸類型

根拠となる法律	許認可を管轄する役所	類型 (カテゴリー)	法律上の制限など
食品衛生法・環境衛生関係業の運営の適正化に関する法律	保健所	喫茶店	・「酒場」ではない。 ・午後11時～午前5時のあいだは営業できない。
		飲食店	・いわゆる「スナック」は、ほとんどが、この営業許可によっている。したがって法的には「酒場」ではない。
風俗営業等取締法	保健所および警察署		・営業は午後11まで。
		キャバレーなど	・飲食・ダンスをさせ、かつ接待行為が許容される店。
		待合・料亭・カフェ・バーなど	・遊興・飲食をさせ、かつ接待行為が許容される店。
		ナイトクラブなど	・飲食・ダンスをさせる店。
		その他	・喫茶店や飲食店でも、客席の照度が10ルクス以下なら風俗営業になる。

(注：ただし1983(昭和58)年とうじの規定による)

キャバレー、バー、そしてスナック

こうして、いちおう酒場の類型がしめされた。では、どんな時代に、どんな種類の酒場が増加したのか。それを参照すれば、それぞれの時代の日本人が、酒場でのむ酒に、いったい何をもちめていたかが示唆されるであろう。ただ、さきに図5-2-3にあげた類型すべてについて、それをおこなうのは煩雑にすぎる。したがって、ここでは時期を第2次大戦後にかぎり、図5-2-3のうちの、主として「女特化」している酒場の趨勢に注目してみる。それというのも、柳田[1932]がしるしているように、

酒の生産はもと女性の専業でありました。それ故に今日に至るまで、尚男子は女に酌をしてもらはぬと、酒を飲んだやうな気持がしないのであります [pp.443-444]。

とすれば、「女特化」した酒場の帰趨を検討することによって、それぞれの時代に酒場にもとめられたものが鮮明にみえてくる可能性がおおきいのではないか。

そこで最初に注目すべきことは、第2次大戦がおわると、戦争中から施行されつづけてきた「高級享楽営業停止令」が、はやくも1946(昭和21)年3月に解除されて以後、東京や大阪を中心に、キャバレーやカフェが乱立したことである。これらの酒場は、それぞれに独特の工夫をこらしてはいたが、その基本型は、比較的ひろいフロアがあって、バンドが音楽を演奏するとともに、当時はまだ「女給」とよばれていた女たちが、客のダンスの相手をしながら、はなし相手になるなどの接待サービスを提供した点にあった。それ

は、ながい戦争のあいだ、禁欲をしいられた男たちには、こたえられないほどのたのしみであった。そのため、いずれもが、かなりの繁盛をとげたといつてよい。

その後、こうした型の酒場は、性風紀上の問題から、一時的にアメリカの進駐軍の命令で閉鎖されたり、1950（昭和25）年以降は、接待サービスに従事する女性をアルバイトの労働力によってまかなう、いわゆる「アルバイトサロン」に変形したりした。ただ、それらが、1960（昭和35）年ごろまでの、日本の夜の盛り場をいろいろ「女性サービスのある酒場」の典型のひとつとなったことは、まちがいのない事実である。

ところが、1960年代に高度経済成長が本格化すると、しばしば巨大な規模をほこったキャバレー型の酒場にかわって、いわゆる「バー（型の酒場）」が多数、出現するようになる。「4種類の酒場の軒数の推移」をしめした図5-2-4は、このことをものがたっている。

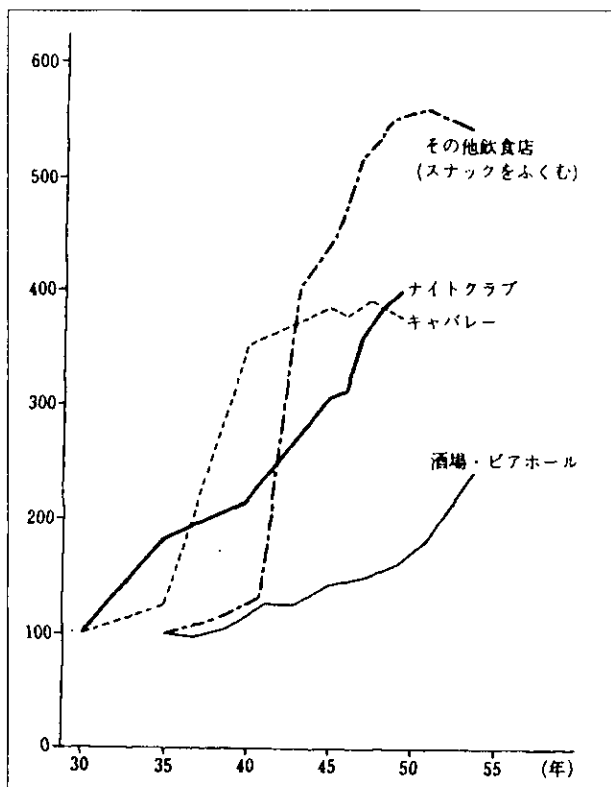


図5-2-4 4種類の酒場の軒数の推移 (1955年または1960年を100とする指数表示)

(資料：通産省『商業統計表』、警察庁防犯少年課資料)

では、ここでいう「バー型の酒場」と「キャバレー型の酒場」のあいだには、どんな相違があるのか。おもいつくままに、それらを列挙してみる。

- ① キャバレーに比べると、バーの面積はずっとちいさいのがふつうである。
- ② バーには、ふつうキャバレーには存在しない「カウンター・バー」⁶がある。
- ③ 客とのダンスを接待サービスの中心とするキャバレーにたいして、バーの接待サービスの中心は、主としてカウンターを間にはさんでの「おしゃべりの相手」である。

こうした、バー型の酒場においては、本章の末尾に掲載する補論で説明するように、おりから本格化しはじめた高度経済成長のさなかに、多忙化しはじめたビジネス世界で活躍する多数のサラリーマンたちの不安や不満やストレスを、たくみにききだすことによって、それを^{カタルシス}昇華させる役割をはたした酒場のママやホステスたちが、おおいに活躍したのであった。

ただ、しかしながら昭和40年代にはいると、これらのバーもまた、すこしずつ姿をかえていく。図5-2-4にそくしていえば、「その他飲食店」のいちじるしい増加が、このことをしめしている。つまり、ここでいう「その他飲食店」のおおくは、店の名称として、いわゆる「スナック〇〇」を名のりながら、高度経済成長期とその後の盛り場における酒場の主流をしめるようになったものである。というのは、1964（昭和39）年に開催された東京オリンピックの直前に、深夜営業をしていた多数のバーが、あらためて制定された東京都の条例のよって営業を禁止されたからである。そのことを、たとえば関根〔1972〕は、つぎのようにつたえている。

東京オリンピック（一九六四）は、深夜族の愉しみを一つ奪った。都条例で、一二時以後の酒類販売が禁止された。……この悪条例の裏をくぐって登場したのが、スナック・バーである〔pp.98-99〕。

それはこういうことである。表5-2-2でみたように、バーとは「遊興・飲食をさせ、かつ接待行為が許容される」酒場であった。そういう酒場が、当時は多数営業していた。そういう事実が、東京オリンピックにさいして日本をおとずれる多数の外国人にしられるの

⁶ もともと「バー（bar）」とは「水平におかれた木」といった程度の意味である。それは最初、16世紀ごろ、イギリスに普及しはじめた宿泊施設に敷設された酒場をかねた飲食スペースの店のまえに、馬をつなぐために設置された「横棒」のことであつたらしい。それが転じて、酒場にいつらえられた「ほそながいテーブル」の意味でもちいられるようになったという。その目的は、ほんらい「酩酊した客と店の人間とをへだてる」ことにあつた。

はこのましくない。こうした思惑から東京都は、関根 [1972] のいう条例を制定・施行して、風俗営業のバーの深夜営業を禁止したのである。ところが、それではバー経営者の生業がたちゆかない。そこで彼らは、飲食店だというタテマエを主張するために「バー」の名称を、「軽食」を意味する「スナック」にかえて深夜営業をつづけたのである⁷。

こうした経緯で出現した多数のスナックは、それ以前のバーとは、やや異なる仕方で客たちをさそった。昭和 40 年代の流行歌にうたわれたように、その「ちいさな」スペースには「レンガ」や「しろい扉」や「ギター」などをそなえられていて、バーよりは容易にしたしめる、瀟洒な雰囲気をかもすことをこころみていた⁸。それだけではない。そこでは、図 5-2-3 において「多様な情報特化」と名づけたように、なにかの共通性を共有する人びとがあつまり、たがいに愚痴や不満をぶつけあい、彼らの関心をひく話題やうわさを交換しあい、さまざまなかたちの劇的な関係を展開したりした⁹。それは、酒をのみながら人びとが、その店を媒介として作りだした、「酒場世界」とでもよぶべき独特の世界であったといえる。

こうしてみると、日本の夜の盛り場は、昭和 20 年代には「キャバレー型の酒場」によって、昭和 30 年代には「バー型の酒場」によって、昭和 40 年代には「スナック型の酒場」によって、それぞれいどられてきたこと、そして、そこをおとずれる人びとは、それらの酒場に勤務する女たちと、あるいは客どうしが、酒によるたがいの酩酊を媒介として、なにか全体性をおびた相互関係をとるむすぼうとしてきたことが、あいまいな点をのこしつつも、おぼろげながらイメージできるのではないかとおもわれる。

カラオケ・ディスコ・ピンクサロン

ところが、昭和 40 年代もおわりにちかい 1973 (昭和 48) 年、第 2 次大戦後の日本の経済と社会の、したがってまた世相と風俗の趨勢を、おおきく方向転換させることになった、

⁷ そのため、当時のスナックで酒を注文すると、からなずスパゲッティやサンドイッチなどの「軽食」を注文することをしいられた。なんのことはない。むしろ客の支はらい額はかえてふえたのである。

⁸ 当時に流行したフォークソングに「ちいさなスナック」があったが、その歌詞には、ここに列挙した要素がふくまれている。

⁹ その詳細については、高田 [1983] のなかで、みずからが経営していた酒場において展開されたドラマの数かずが紹介してある。

いわゆるオイルショックの第1波が顕在化したころから、酒場をめぐる世相と風俗も、いくつかの面で劇的な変化をしめすようになった。ここでは、そうした変化のうちから印象的に目につく現象をとりあげて、それが意味するところをたずねてみる。

そのひとつは、1970年代の後半以降、当時の酒場のもっとも一般的な形式であったスナックのほとんどすべてに、いわゆるカラオケの設備が普及して、客たちが、過剰にエコーのきいたマイクを手にしながらか、あたかも陶然と歌をうたう風景が一般化したことである。その結果、カラオケ以前には日本の夜の盛り場の酒場が提供していた、バーのママやバーテンとの、あるいは客どうしのうちとけた話のやりとりがむつかしくなった。こうした状況の変化のなかで、客のがわも、他者とのかりそめの心の交流に身をゆだねる指向性をうすれさせたのか。カラオケをもちいて演じる、いわば「変身と眩暈めまいのあそび」とでもよべそうな個別の酩酊の快樂に身をゆだねる場合が増加したようにおもわれる。

いまひとつは、1980年代における、いわゆるディスコ（ティック）の増加である。じっさい、個別の酩酊の快樂という点にかんしていえば、前段でのべたスナックよりも、ディスコにおけるそれのほうが顕著である。というのも、ディスコにおける酩酊は、酒によるものと、それを増幅する強烈で軽快なリズムにのっておどるダンスによるものとの相乗作用による酩酊だからである。しかも、そこでは、とくに人と人とのあいだの言葉のやりとりが、カラオケのあるスナックにおけるそれよりも、いっそう希薄化せざるをえない。

そして第3は、「代金は先ばらい、〇千円ポッキリ」という看板をかかげた、いわゆるピンクサロンの隆盛である。これらの酒場においては、性交や手淫をふくむ、きわめて直接的な性的サービスがこころみられた。その点で、かつてのバーやキャバレーにおけるホステス女性の接待が、たとえ最終的には性的関係の完結にいたろうとも、むしろ「女をくどく」プロセスそのものを、疑似恋愛な「社交」としてあそび、たのしむ傾向を濃厚におびていたのとは、明確にことなる面をはらんでいたといえる。

では、これら高度経済成長期のおわりに現出した酒場における、あたらしい世相や風俗を、昭和30年代のバー、昭和40年代のスナックなどと比較してみると、どのような変化が指摘できるのか。それを、つぎに列挙してみる。

その最初は、すくなからざる酒場が、その客たちの「かりそめの連帯」とでもいうべき心理的な作用をはげます機能をうすれさせたことである。しかも、ふたつめは、このことに関連して、かつてはマダムやホステスやバーテンダーの職能のひとつにほかならなかった、客をもてなす話術と話芸が衰退したことである。そして、みつつめは、これらの結果、

かつては酒場のおおくがはらんでいた、ひとつの完結した世界としての全体性を喪失したことである。じじつ、こうした変化がおこったからこそ、こんにち、酒場をおとずれる人びとのおおくが、たとえば、ひたすら人前で歌をうたいたいときにはカラオケ・スナックへ、巨大な音響によいながらダンスの目まいにひたりたいときにはディスコ（ティーク）へ、ホステス女性との社交などぬきにして、より直截に性的な欲望をみたしたいときにはピンク・サロンへ、それぞれ足をはこぶのである。

その過程では、かつてのように「ひたすら泥酔するために酒をのむ」という、ひと昔まえまでの酒ずきの人びとの気もちのなかにはたしかに実在した、筆者にいわせれば、「泥酔の美学」とでもよぶべき、酒にたいする特別な親愛の情がうすれてきた。これは、「酒のみよう」をめぐる、きわめておおきな変化である。そこで、おもいだすべきは柳田〔1939〕の、つぎのような指摘である。すなわち、

（酒を）飲む目的は味よりも主として酔ふ為、むつかしい語で言ふと、酒のもたらす異常心理を経験したい為で、神々にも之をささげ、其氏子も一同で之を飲んだのは、つまりはこの陶然たる心境を共同にしたい望みからであった〔p.108〕。

ところが、高度経済成長以降の日本では、泥酔のはてに「心境を共同にしたい」という願望はうすれ、むしろ人びとの酒場にもとめるものは、個別の酩酊とそれに付随するあそびとたのしみに重点がおかれるようになったようにみうけられる。

第4節 カフェバーの出現と「泥酔の美学」の退潮

前項でのべた「泥酔の美学の退潮」という趨勢を象徴する酒場のひとつとして、1980年代なかばに登場したカフェバーをあげることができる。それは、従来以上に酒と料理の距離をちかづけ、すで第2部第2節でみたように、やや唐突ながら、酒と料理のいずれもを「高度に感覚情報化した」のであった。こうしたみかたを提出する背景には、筆者が1970（昭和45）年前後に経営していた、ちいさな酒場での見聞が作用している。じっさい、高度経済成長まっただなかにあった当時、酒場をおとずれる人びとがもとめたのは、徹底して酒をのんで泥酔することであった。しかも、

「酒はよえるのなら、酒の種類はとわない。酒のさかなはスルメかピーナツでじゅうぶん。背景の音楽は演歌で、店のインテリアなどは、ほとんど関心のらち外……」

そんな酒場をおとずれる女の客はすくなく、「酒をのむなら男どうしで」という客がす

くなくなかった。それに比べると、都市の盛り場や郊外に出現するようになったカフェバーでは、泥酔するまで酒をのむことは、しばしば饜感をかうところとなった。その理由のひとつは、おなじころから客として酒場をおとずれる女の客がふえたからである。こうなると、

「おなじ酒をのむのなら、カップルや気のおけない友人といっしょに、ニューミュージックがながれる、快適なインテリアの酒場で、めずらしいカクテルやワインを、ちょっとおしゃれな地中海料理やおしゃべりとともに、たのしみたい」

こうして高度経済成長期をさかいに「泥酔の美学」は退潮し、さまざまなたのしみを同時に享受したいとかがえる人びとの心と体を「ほろよい」と「こころよい社交の楽しみ」にさそう、そういう「酒のみよう」が、ひろく日本人男女にうけいられるようになってきたのである。

こうした変化の背景には、おそらくは日本の産業と企業の体質の変化が作用している。というのも「少品種大量生産・大量消費」が、時代の精神を代表した高度経済成長期における企業につとめる男たちは、たがいに肚の底までわかりあい、全社一丸となって仕事にはげむことをもとめられた。そんな時代の要請にこたえて、男たちのあいだの紐帯を強固なものにするうえで「ともに徹底して泥酔すること」ことは卓抜の効果をもたらしたのである。

しかしながら、安定成長が時代の趨勢になると、あらゆる企業が「多品種少量生産・個性消費」のスローガンをかかげるようになった。そんな時代の要請にこたえようとおもえば、企業につとめるビジネスマンにも、他人とはひと味ちがう智恵やアイデア、個性にみちた感性がもとめられるようになった。それをたすけたのが、おりから社会進出をはたしはじめた女たちである。このことは、第1部第1章で考察したとおりである。これらの現象が同時に顕在化した時期に、くしくも食事と飲酒をふたつながらにたのしみ、音楽やインテリアやおしゃべりなど、ひろい意味での情報体験をあそばせてくれるフェバーが、文字どおり卓抜の時宜をえて登場したのであった。

「そうか。日本のサラリーマンは、酒場で仕事のつかれをいやし、ストレスを解消して元気を回復する。だからこそ昼間、モーレツにはたらくことができるのであろう」

日本の盛り場にはドンチャンさわぎのできるキャバレー、ひごろの不平や不満に、たくみなあいづちでこたえてくれるママやホステスのいるバー、同僚どうしで心おきなく仕事や上司のグチがこぼせる赤ちょうちんなど、さまざまなタイプの酒場がある。それらが、いわばアメリカのサイコセラピストと、よく似た役割をはたしていたわけである。

それだけではない。リースマンは、

「かれらのなかには、口角アワをとばして、仕事の心配をしている連中がいる。かれらには残業手当が支はられるのかね？」

そういつて片目をつぶったそうである。これをきいて桑原さんは、日本のサラリーマンが、昼間はたらく現場をみせるために、おもだった企業に案内したのであった。

これとはすこし時期がずれるが、1970年の前後に3年あまり、ぼくは京都の場末でちいさな酒場を経営していた。ここには、気のきいたママやホステスはいなかったが、派手なドンチャンさわぎと客どうしの勝手なおしゃべりをゆるす空気があった。客たちは徹底して酒をのみ、酔いにまかせて、たがいの人格が溶解するまで泥酔したものである。

それは、ぼくの店だけの話ではなかったようにおもう。当時の日本には、酒をのむなら泥酔するまでのむという、一種の酒のみの美学が、たしかにあった。それは、日本のむらの伝統的な酒の飲みようでもあった。

つまり日本のむらでは、その共同性をたかめるために、日時と場所をさだめ、たくさんの人があつまり、神をまつり、御馳走をたべ、かたり、うたい、おどり、たのしみながら参加者が、「かりそめのひとつ心」とけあっていくためにこそ酒をのんだのである。

それが高度成長期の企業にうけつがれた。そのころの日本の基幹産業は、製鉄や造船、家電や自動車などであり、それらを製造する企業は、少品種の製品を大量に生産し、大量に販売することで発展した。そこでは、社員や同僚が、たがいに腹の底までわかりあい、ひとつ心にとけあうことが不可欠であった。

ところが1970年代もなかばになると、「多品種少量生産」の時代がやってくる。おなじ自動車であっても、多様なこのみにこたえる色や形の自動車を開発し製造することがもとめられるようになったのである。

しかも、このころまでの企業は専門領域がはっきりしていて、そこにつとめる人も、比較的せまい専門の知識や技術をみがいておけばよかった。ところが、おなじころから、製

鉄会社が遊園地を経営し、造船会社がリゾート経営にのりだすようになった。

こうなると、従来の専門だけでは仕事ができない。それに、社員の誰もが、おなじような知識や気分をもっていたのでは、多様な魅力にみちた製品やサービスの開発に必要な、あたらしい智恵やアイデアがでてこない。

では、どうすればよいか。いろんな方法がありうるが、もっとも基本的なことは、ひと味ちがった知識や気分をもっているはずの、ふだんは関係あらざる人にてあって、新鮮な刺激をうけることである。だからこそ、当時のビジネス社会では、異業種研究会がさかんにおこなわれるようになったのである。

ところで、異業種研究会のあとは、酒場に場所をうつして、おしゃべりをつづけるという場合が、きわめておおい。酒場には、そんな目的に、みごとにこたえてくれるカウンターバーという装置がそなわっている。

それは本来、酔った客が、店の従業者に乱暴狼藉をはたらくのを阻止する障害物（バリア）であった。だが、話のやりとりをかんがえると、それは客とバーテン、客と客をむすびつける、一種のコミュニケーション・メディアとして機能する。そこではバリアとしてのカウンターバーが、いわば「カウンターバリア（反障害物）」に転化するのである。

だからこそ人びとは、酒場にでかけ、ふだんはあまりであうことのない人となら、話をかわし、気分を共有し、そこからおもしろさやたのしさをすくいとり、あたらしい智恵やアイデアをつむぎだそうとこころみる。

ただし、そこで耳目にするのは、すでにできあがった話や気分であって、そのままでは、あたらしい智恵やアイデアになりえない。それを、あたらしい智恵やアイデアにそだてるのは、ほろ酔いにたゆたう心身である。

というのも、ほろ酔いの状態では、覚醒した意識はおざかり、耳目をとおしてうけられた話や気分が、無意識の海に下降していく。そして、意識から閑却され、かつ受容したさいの秩序からも解放されて、自由にうごきまわり、ときに意味のある、あたらしい秩序を発見する。たぶんそれが、智恵やアイデアが創造される深層のしくみなのである。

してみると 1980 年代に、カフェバーと名づけられたものをはじめ、あたらしい型の酒場が姿をあらわしたのは、偶然でなかったような気がする。なぜなら、それらのおおくは、伝統的な「泥酔の美学」を排除し、かわりに「ほろ酔いの社交」という、あたらしいたのしみをうみだしたからである。

当然であろう。いろんな会社の社員がつどう異業種研究会のながれの酒席では、泥酔者

はヒンシュクをかう。しかも、そこでは誰もが、泥酔して「ひとつ心」にとけあうより、他のメンバーの「ひと味ちがう話や気分」から刺激をうけるのをたのしみにしている。

くわえて、このころから、従来はホステスとして酒場に姿をあらわしていた女性たちが、男たちと同様、ゲストとして酒場をおとずれるようになった。そのおおくもまた、ほろ酔いのころよさと社交のたのしみという、あたらしい酒場のありようの支持者であった。

快適なインテリア空間と心地よい音楽、おいしい料理と多種多様のお酒——それらをたのしみながらやすらぎ、ほろ酔いのころよさのなかで、ふだんとはちょっとちがう、おシャレな社交をたのしむ。むろん、ときには、そこにカラオケがあってもよろしい。

ただ最近では、やき鳥やモツ煮こみなど、手がるな酒のサカナがいろいろ用意してあって、亭主みずから厨房にたつような、2、3000円で気楽にたのしめる、ぞくに「居酒屋」とよばれるタイプの酒場がふえていて、わかい女性をふくめて人気をよんでいる。

かつて柳田國男が「酒の飲みやうの変遷」のなかで、「酒屋でも『居酒致し候』といふ店はきまつて居て、そこへ立寄る者は、何年にも酒盛りの席などには列なることの出来ぬ人たち、たとえば掛り人とか奉公人とかいふ晴れては飲めない者が、買つては帰らずにそこに居て飲んでしまふから居酒であった」としたことをおもいだすと、本当はバーもスナックも居酒屋の変形にすぎない。

だが今日、さきのタイプのものだけが「居酒屋」とよばれ、したしまれているのは、そこにこそ、気のおけない仲間と一緒にたのしむ酒の醍醐味があるということなのか。そんな酒席のなかでかわされるおもしろい話題のなかから、つぎなるあそびのプランや、ときにはあたらしいビジネス、よりゆたかなくらしをいろどる智恵やアイデアが芽をふく。

リースマンがやってきた時代とはまるでちがう酒場の文化が、いまどきの日本でははぐくまれつつあるような気がする。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・博報堂マーケティング室、1979『酒の飲み方・飲まされ方』博報堂
- ・穂積忠彦、1968「苦悩する日本酒百年」『酒』（3月号：20-35）
- ・坂口謹一郎、1964『日本の酒』岩波書店
- ・関根 弘、1972「スナック文化——私的新宿体験から」『月刊ペン』（6月号：98-101）
- ・高田公理、1983『酒場の社会学』PHP研究所
- ・高田公理、1984「『酒』をめぐる美意識の変化」（祖父江孝男・杉田繁治・編）『現代

日本文化における伝統と変容①生活の美意識』ドメス出版

- ・高田公理、1995「居酒屋・おはなし・やりとり考——智恵とアイデアは酒場に芽ばえる」『サントリークォーターリー』（48号）サントリー株式会社
- ・柳田國男、1932『女性と民間伝承』岡書院（ただし引用文献は、柳田國男、1969「女性と民間伝承」『柳田國男集』（第8巻）筑摩書房による）
- ・柳田國男、1939「酒の飲みやうの変遷」『改造』（2月号）（ただし引用文献は、柳田國男、1969『柳田國男集（第13巻）』筑摩書房による）
- ・余暇開発センター、1977『日本人の生活時間および余暇活動調査』余暇開発センター

第3章 賭博——その技術革新・制度化・装置化¹

ぞくに、男のあそびを代表するものとして「のむ・うつ・かう」という、よびかたあった。いうまでもなく「酒・賭博・買春」を意味している。そして、これらがあそばれる舞台は、いずれも、おもに都市の盛り場である。そのうち、酒にかんしては第5部第2章で論じた。それにつづく第5部第3章では、賭博に焦点をあてて、その変容の過程を考察する。なお、そこでの時代区分は、①近世、②明治維新から20世紀まで、③第2次大戦以前の20世紀、④高度経済成長期、⑤それ以後、という5つに設定される。

はじめに——「賭博」とはなにか

最初に賭博をめぐる日本の刑法第185条の条文を参照する。

偶然ノ輸贏^{ゆい}²ニ関シ財物ヲ以テ博戯又ハ賭事ヲ為シタル者ハ千円以下ノ罰金又ハ科料ニ処ス 但一時ノ娯楽ニ供スル物ヲ賭シタル者ハ此限りニ在ラズ

よく知られているように賭博は、犯罪行為であるとして、日本の現行刑法によって禁止されている。しかし、他方では、これまたよく知られているように、日本中央競馬会に代表される、全額国庫出資の法人や地方自治体が主催する、いわゆる公営賭博（ギャンブル）は、その対象からはずされている。さらに、都道府県、あるいは政令指定都市が、自治省の許可をうけて発売する宝くじ、年間の売上額が30兆円以上におよぶとされるパチンコなどもまた、みかたによると「公認された賭博」にほかならない。

こうしてみると、現行刑法における賭博罪の規定は、きわめて便宜主義的であるというほかない。そのため、ここではもっとひろく、

「偶然のできごとに、金銭や物品をかけて勝負をあらそうこと」

一般を、かりに「賭博」³の名でよぶことにする。そして、それが日本社会の近代化と現

¹ 第5部第3章のもとになる論文は最初、1987年12月22日から3日間にわたって開催された国立民族学博物館主催のシンポジウム「日本人と遊び」（特別研究「現代日本文化の伝統と変容⑥日本人と遊び」）において発表されたのち、高田 [1989] として公刊されている。

² 「勝負」を意味する。

³ 筆者は第1部第1章においても賭博にふれている。そこでは賭博について（つぎのページにつづく）

代化の過程において、具体的にどのようなかたちで人びとにあそばれ、同時に、それぞれの時代の制度や規範のもとで、どのような運命をたどってきたかを具体的に記述することによって、日本人にとっての賭博というあそびの伝統と変容をえがきだすことにする。

第1節 カルタ伝来の前後——近代以前の賭博

賭博の歴史は、日本人の歴史とともにふるい。たとえば685（天武14）年に、天武天皇は中国からつたわった^{すころく}雙六をもちいて、御衣・袴・獣皮などの下賜をかけた行事をもよおしたとつたえられる。しかも、その4年後には、急速にひろがった賭博が、良風をみだすようになったとして、その禁断令が発令されている。それ以来、賭博の流行と、それを阻止しようとする支配権力とのあいだに、はげしい攻防がくりかえされてきた。

しかし、近世以前の日本社会においては、中国伝来の雙六と、それに端を発する各種のサイコロ賭博のほかには、それほど多様な賭博の遊戯法があったわけではない。それが16世紀の後半以降、画期的な変化に遭遇する。つまり、ヨーロッパからカルタがもたらされたことによって、「斬新な賭博用具として高度な興味と関心を惹く」とともに、「ごく短い期間にわが国に定着し、生まれつきの性格が日本でも損なわれずに賭博用具として発展」するからである〔増川、1983：PP.109-111〕。

こうした状況のなかで、ふるくからおこなわれてきた賭博の遊戯法にも、変化が生じた。たとえば、従来いは雙六にもちいられてきたサイコロが「丁半」「四一半」「七半」などの遊戯法を確立することによって、雙六あそびから独立したあそびになる。また、17世紀もなかばになると、あたえられた連歌形式の^{しも}下の句に適合するように創作した^{かみ}上の句のできばえをきそう、いわゆる「前句附」、それを、より簡略化した「三笠附」や「棒引」などが、景品や賞金をかける賭博に変質し、やがて禁令の「^{とみくじ}富籤」へと発展していく基礎を

概略つぎのようにのべた。

賭博とは「未来の時間のなりゆきにかけるあそび」だという点である。そのさい、賭博はいずれも結果を予測したうえで、なにがしかの金品をかけ、ことなった予測をたてている他人と、その結果の当否をきそうことで成立するあそびである。したがって予測の全責任は、本人自身が背おわなければならない。（いっぽう）未来への関心を問いかたちで他人になげかけ、それにたいする返答をきかせてもらうあそびに「うらない」がある。

うちたてる。さらに、弓矢の技量に金銭をかける「賭的」、福引の一種である「さござい」、独楽をもちいた賭博、いずれの^{こぶし}拳に銭をにぎっているかをあてる「なんこ」など、きわめて多種多様な賭博の遊戯法が出現して広範に普及した。

その背景には、17世紀にはいって急速に加速した都市への人口集中、貨幣経済の発達という社会変化がある。とくに、近世日本の政治の中心となった江戸の街の発展はいちじるしく、火けし人足や大工、旗本や御家人、武家奉公の中間など、都市の流民層が増加し、17世紀のおわりには、その人口が50万人にたっするにいたる。そして、彼らを中心に、おりから本格的に開花しはじめた貨幣経済のなかで、万能にちかい力を発揮する金銭をかけた賭博に耽溺する都市生活者がふえた。それが、やがて都市博徒の予備軍を形成し、これに商人や僧侶、武士までもが参入していく。このことは、賭博に熱中する当時の町人や下男の賭金が、つぎつぎに巨額になっていくありさまを、井原西鶴が活写した『懐硯』（1687：貞享4年）などのなかでえがきされている。

こうした趨勢にたいする徳川幕府の対応が、一貫して「賭博厳禁」であったことはいうまでもない。のみならず、とくに、

金銭を扱う商家の奉公人は、幕令だけでなく家法によってさらに賭博を禁じられていた
[増川、1983：p.171]。

という。にもかかわらず、都市のあらゆる階層をまきこんだ賭博への熱中がおとろえることはなかった。それは、おそらく貨幣経済が支配する社会に普遍的な文化の形式なのだとおもわれる。ただ、江戸時代の日本社会にあっては、これにくわえて当時の幕府の金融政策が、貨幣経済の発展にじゅうぶん適切に対応しえず、その役割が、もっぱら民間の頼母子や無尽や富籤にゆだねられていたという事情が関与している。とはいえ、もちろん頼母子や無尽の許認可は、一定の条件の範囲内にかぎられていた。たとえば、

- ① 火事による類焼や商売上の必要から、緊急に多額の金が必要で、
- ② かつ、おおぜいの人の合力をあおぐほかに借金の方法がないとき、
- ③ そのよりあいの規約が完備していて、
- ④ しかも、落札の順序はことなっても、金銭上の損得が生じない、
- ⑤ そういう場合にかぎって許可された。

などは、その一例である。しかし実際には、クジにあたって落札したのちには、掛金を支はらわなくてもよいという規約によって運営される^{とりのきむじん}取退無尽をはじめとして、きわめて賭博性のたかいものが、しばしばもよおされたようである。

また、ほんらいは寺社の修理の資金調達にかぎって公認されていた富籤も、都市生活者の射倖心をあおることによって、主催者に多額の利益をもたらした。のみならず、こうした富籤は、寺社の修理にかかわる公費の負担を、可能なかぎりすくなくしたいという幕府の要求とも一致した。そのため、のちには発行の年限や回数が緩和され、やがて無許可の富籤の発行を誘発しはじめる。これには、男たちだけでなく、たくさんの町人の女たちが参与して、いよいよ盛況を呈するようになった。

都市だけではない。18世紀になると、発達した商品経済が農村をまきこんでいく。こうなると、しばしば発生する飢饉の影響によって、農村地帯においても無宿者が増加していった。その結果、やがて農村地帯においても農村博徒が形成されるようになる。こうした状況が進行すると、江戸幕府はくりかえし賭博の禁止をこころみる。しかし賭博は、ときに「目あかし」など、権力の末端をになう階層にまで浸透し、しかも博徒の集団が彼らと野合することによって、いよいよ脱規範的な、あそびの世界を確立していった。

第2節 賭博とそのとりしまりの「近代化」

——明治維新から20世紀の到来まで

第1節の最後に紹介した時代から、さらに1世紀、やがて明治維新が勃発する。その結果として成立した明治維新政府もまた、江戸幕府にかわって、賭博はあたらしい近代国家の体制づくりの障害になるという立場から、はやくも1868（明治元）年に、まずは富籤を禁止する法令を施行した。もちろん、博徒や賭博一般にたいしても「仮刑律」をさだめて、

「博突をした物には答を五十回あて、その場にあった財物は官が没収する」

といった規制措置を講じた。

しかしながら、その後の明治政府の賭博にたいする対応策は、しばしば流動的に変化していく。たとえば1873（明治6）年には、フランス刑法の影響をうけて、賭博にかんしては、その現行犯だけを逮捕する方向に方針をやわらげるなど、とりしまりが緩和された。こうなるとすぐに、賭博のおもしろさをそなえた、さまざまなあそびがひろがっていく。たとえば、1880（明治13）年の東京府の統計がしめすところによると、東京市内だけで公認の楊弓場が253軒、大半弓場が70軒、室内射撃場が15軒をかぞえ、それらが急速に一般生活者のあいだに普及していった。

それだけではない。1882、3（明治15、6）年ごろ、地方の実情を把握するために政府

が派遣した巡察使の復命書などを参照すると、従来から賭博がさかんなことで有名であった現在の群馬県などでは、博徒の親分を自称する者が5000人、その子分を名のる者が10万人にもおよんだという〔増川、1983：p.281〕。

こうした賭博の隆盛には、当時の経済と社会の近代化の基礎が、初期的にきずかれる明治10年代にあらわになりはじめた、はげしい階層分化の進行という要因が作用している。というのも、たとえば松方正義がおこなったデフレ政策は、1881（明治14）年から、わずか4年のあいだに4万9000件にもものぼる企業倒産と、多数の自作農の土地喪失による子作人の急増をもたらした。こうした状況のなかで、自由民権運動と農民一揆が続発し、これに「西南戦争以後、最大の武装勢力」をほこったといわれる博徒集団が結合する兆候がきざしはじめるからである。

ところが、いうまでもなく明治維新政府の思惑は、国民の労働意欲をたかめることによって、経済と社会の近代化を推進することにあった。こうした明治政府の意図にとって、賭博の隆盛がのぞましい現象であるはずはない。じっさい、「教育ニ関スル勅語」のもとになる、元田侍補によって1879（明治12）年に執筆された「教学ノ聖旨」のなかには、

酒色遊興博奕等ノ悪弊ハ固ヨリ官員ニシテ商利ヲ營ミ賄賂ヲ受ク等最慎ムヘキ事

という文言がしるされている。しかも、すでに示唆したように、こうしたうごきが、自由民権運動や農民一揆などの反政府運動とあゆみをともしかねないとあっては、適切な規制をこころみることが必要不可欠であった。そこで明治政府は、1884（明治17）年、とつぜん、正当な裁判手つづきによらなくても、3日以内に処分を決定して、しかも上告はいっさいみとめずに懲罰を科すことのできる「賭博犯処分規則」を布告する。この規則は、のちに博徒たちによって「明治十六、七年ノ警察大刈込」とかたりつがれることになる、博徒の全国いっせい検挙の実施につながっていくのである〔長谷川、1977：p.151〕。

にもかかわらず、賭博犯の逮捕人員は、その後も容易に減少することはなかった。そしてかわりに博徒集団が、じょじょに近代的な暴力団としての相貌をあらわにしていく。くわえて1886（明治19）年、花札の製造と販売が解禁されると、メクリ・カブ・花あわせなどとよばれる花札賭博のほかにも、ビリヤードや競馬、ふき矢や闘鶏、麻雀やチーハー賭博⁴など、あたらしい賭博あそびが矢つぎばやに登場して、一般の人びとのあいだにまで

⁴ あらかじめ独特の用紙に35個の文字をかいておいて、そのいずれかにかけてさせる中国系の賭博。日本の三笠附ににている。

普及するとともに、モヤがえしのデンスケ賭博やピース缶のイカサマ賭博など、博徒とはべつの集団であるテキヤのとりしきる賭博が、街頭に進出するようになった。そのありさまを当時のジャーナリズムは、つぎのようにつたえている。

八字髭を蓄へたり金縁の眼鏡でも懸る人は宴会や芸妓の手前では一向知らなくても名人であるかの如く様子振る筈だ。最一つ可笑い証拠は寄席で落語家が八八⁵の役盡しなど洒落に使ふ事があるが一人も吞込めぬ顔附はしない、我先に意を得たる如く笑ひたがる、笑ふ人が残らず名人でもあるまいが多少の心得があるか、さもなくば家族か友人に通が居るのだ。……軍人と御用商人と芸妓屋の内儀と俳優が一座すれば、勅任官と代議士と女郎屋の亭主と帮間が車座にもなる。流石に大臣、貴族中の貴族等で他聞を憚る連中は仲間を撰び場所を定めて自然と城郭を築く、此戦場へは芸妓芸人が面を出す事はあつても普通の武者が馳せ参ずる事は出来ない。他は大抵乗合船で紹介さへあれば加入も随意、出張も苦しからずだ [みよしの、1890 : pp.171-172]。

その後、帝国憲法が公布されたのにもなって、賭博一般にたいする明治政府の対応は変化せざるをえなかった。弁護人なしの処分や上告をみとめない「賭博犯処分規則」は憲法に違反することが明白だったからである。そのため1889（明治22）年、同規則は廃止され、やがて1908（明治41）年にいたって、本章の冒頭にかかげた条文をおさめた、あたらしい刑法が施行されることになる。

第3節 公営賭博としての競馬の萌芽とその解体 ——第2次大戦終結までの20世紀

20世紀にはいると、日清・日露の両戦争、とくに日露戦争における経験から、日本軍の軍馬の能力が、きょくたんに低劣であることが判明した。そこで、「軍馬の改良」を最優先の目的としてかかげる東京競馬会が発足し、1906（明治39）年12月に、政府は勅令をもって「競馬会設立及び監督に関する件」を公布する。

その結果、わずか2年後の1908（明治41）年には、競馬会の数が全国で15か所にまで増加し、年間のべ100日にわたって競馬が開催され、賞金総額も587万円にたっするにいたった。こうした動向にもなって、輸入馬の数も前年の10倍、600頭以上に増加し、そ

⁵ 花札賭博の一種。

のかぎりにおいては、たしかに軍馬の能力の向上にそれなりの役割をはたした。

ところが、競馬の開催と同時に、勝馬投票券の発売が認可されたために、他方において競馬は、まさに公認された賭博として人気をあつめるようになった⁶。こうした事態にたいする当時のジャーナリズムの反応は、いささか皮肉である。

如何に日露戦争で我騎兵がコサツクに蹂躪されてから馬匹改良の急を感じたからとて是程に行く筈はあるまい、馬匹改良と云ふ立派な金看板の裏には金張銀張大きい小さい自由自在の博突が出来るからに極まつて居る、夫も上は華族代議士軍人官吏より然る可き学者実業家などを始めとして大きくどしどしとやるのであるから何の遠慮が要らう〔葦陀天、1907：p.107〕。

こうした論調はさらにたかまり、とうじの雑誌をひもとくと、賭博としての競馬の隆盛を批判する記事が多数みつかると。たとえば、

競馬は一回毎に其の旺盛を増し年々良馬は外国から輸入せられ、地方産馬界も、之れが為めに異常なる活気を帯びて来た。所が吾輩らの最初予期した如く、競馬の本義は今や漸く転倒しつゝある。即ち馬匹改良を目的として興った競馬は、却つて賭博を以て本位とし、根本の馬匹改良は凡て後廻しとせられつゝある。此奇怪千万なる現象が、やがて在野有識の士をして、競馬の悪弊に就て面倒なる物議を醸し、此俟にして置たなら、動揺せる過渡期の人心は何所まで惑乱せらるるか解らぬ〔XYZ、1908：p.101〕。

ただ、賭博の隆盛への批判と馬匹の品質の改良とのあいだには両義的な評価がくだされていたようで、概略つぎのような論評をくわえている記事もある。すなわち、

此の（＝競馬の）盛運の一面には早くも馬券に対する世間の非難攻撃が簇出し（た）。この盛況が今日迄持続して居たならば、我国は或は欧米各国のそれに比して、敢て遜色なき産馬国になつて居たかも知れぬ。（にもかかわらず）遂に政府は公安風俗の維持上、（明治）四十一年十月を以て断然馬券禁止の鉄槌を下（さざるをえなくなった）〔某馬政通、1918：p.197：（ ）内は筆者〕。

ところが、この記事がつたえる「馬券禁止の鉄槌」がくだされた翌年の1909（明治42）年になると、馬券復活運動が澎湃としておこり、競馬法案が衆議院を通過する。板垣退助なども「競馬奨励の必要」という表題の論文〔1909〕を發表し、そのなかで、概略つぎの

⁶ これにさきだって1880（明治13）年、はやくも三田有種場内に興農競馬会が設立され、不忍池を周回する競馬がおこなわれている。しかし、これは「公認された賭博」としての競馬ではなかった。

ような競馬への擁護論を展開する。

立憲自治の世となれる今日に於ては、人民相互の関係広くなり、個人と個人との交際頻繁なるを致し、其交際娯楽の機関の如きも国民的の大規模なるものを要するに至れり。… (また) 馬券の売買は馬相の観察を誤らざれば必然勝利を得べきものたる故に、之を賭博として見るべきものにあらず。…… (しかも) 一方に於ては其利潤若くは種馬の配合によりて馬匹改良の実を挙げ、競馬の功豈没すべけんや [pp.41-45]。

しかし実際には、馬券を復活させる法案は貴族院で否決され、これにかわって、それ以後 20 年のあいだ、競馬施設の設備改善のための補助金として国庫から 46 万円を支出することが決定されて、いちおうのけりがついた。その間、第 1 次大戦が勃発すると、それに刺激されて、ふたたび「馬匹改良論」がさかんになりはしたが、結局は東京競馬会が資金難におちいった 1923 (大正 12)、あらたに競馬法が制定され、ふたたび勝馬投票券が発売されるまで、およそ 17 年間、おおよけには賭博性を廃した競馬がおこなわれることになった。なお、こうして再開された公営賭博としての競馬は、昭和初年になると、公認競馬倶楽部が全国で 11 か所にふえ、馬券の年間売上額も 4000 万円を突破し、その 14 パーセントが政府の財政にくみこまれるようになって政府財政をうるおした。にもかかわらず、当時の競馬が広範な大衆的普及を実現することはなかった。その背景には、つぎの記事がたえるような事情が関与している。

先ず馬券の単価を二十円といふ途方もない値段⁷にしたのは、事実上特殊の階級のもののほか買ってくれるな、といふに等しい。又、一競争一人一枚を限って売るとか、払戻金も十倍までを限度とし、剰余は倶楽部へ没収してしまうとか、……馬券を買はうといふ人々は身分に応じて損をして貰ひたい……といはんばかりに競馬法といふ法律は出来てある [中戸川吉二、1930 : p.197]。

こうした状態のまま、やがて昭和も 10 年代をむかえると、のちに第 2 次大戦に発展していく日中戦争が本格化した。そのため、1943 (昭和 18) 年には、閣議で競馬開催の停止が決定され、一般生活者から軍事費をあつめるための「勝札」⁸をのぞいて、いっさいの賭博が禁止される。こうして日本の賭博は、第 2 次大戦の終結まで逼塞を余儀なくされるこ

⁷ おなじころ、カレーライスが 1 皿 10 銭、日やとい労働者の 1 日の労賃が 1 円 50 銭程度であったことをかんがえると、勝馬投票券の 20 円が、どれぐらい高価であったかがわかる。

⁸ 一種の富くじのようなものである。

とになる。

第4節 賭博の行政的な制度化と装置化——昭和20年代

昭和20年代は、第2次大戦の終結にともなう、社会秩序全般の解体と再編成の時代であった。それをひとことでいうと、

多感な若者が「アカ」になるか「ヤクザ」になるかといわれた、思想の過激な時代でもあった〔正延、1984：p.9〕。

と表現することもできる。そんな時代に、東京や大阪をはじめとする大都市を中心として、各地に「暴力団」と名をかえた博徒集団やテキヤ集団、新興のグレン隊などが簇生する。そして、復興途上の都市のやけ跡に姿をあらわした闇市や盛り場の周辺の街頭には、デンスケ賭博をはじめとして、コリントゲームやパチンコなど、多種多様な賭博あそびが登場した。そこに多数の日本人がむらかった。そうした街頭賭博が、当時の日本の生活者たちの、せっぱつまった射幸心にうったえかける魅力を、終戦直後に長野県の国鉄・追分駅前で見つけた佐々木〔1953〕は、そこでデンスケ賭博を開帳していたテキヤの、つぎのような口上にたくして今日につたえている。

「たつた百円、その百円が五倍の五百円、えッ、五百円になつてくるのに、何をグズグズ迷つてるんだ。ええッ、おつさん、いい年をしてさ、膽ッ玉がまだすわらねえのかよお、膽ッ玉が……」〔p.215〕。

一般生活者だけではない。おりから財政危機におちいった政府自身が、公営賭博の営業をはじめること、終戦後の難局をきりぬけようとする施策を採用しはじめた。それらを順をおって、年表形式でしるすと、つぎのようになる。

1945（昭和20）年：政府が第1回宝籤を発売する。これをきっかけにして、三角籤やクローバー籤や煙草百万円籤など、多様な名称の宝くじが発売される。

1946（昭和21）年：東京と京都において日本競馬会の競馬が再開された。それが、1948（昭和23）年には、政府の農林省畜産局競馬部の直営に転換する。

1948（昭和23）年：「自転車工業の発展と自転車貿易の振興、地方財政の増収と健全化」を目的とする自転車競技法が制定され、小倉市で最初のレースが開催された。これは、競馬をしのぐ人気をあつめ、2年後の1950年には、競馬53億円、宝くじ30億円にたいして、競輪は299億円という莫大な売上額を記録することにな

る。そしてその熱狂は、やきうちや発砲事件を頻発させ、日本のあちこちで家庭崩壊をひきおこし、やがて「離婚病」とあだ名されるようになり、世上に賛否両論をまきおこした。

1950（昭和25）年：小型自動車（いわゆるオートバイ）競争法が制定される。

1951（昭和26）年：モーターボート競争（いわゆる競艇）法が制定される。

1952（昭和27）年：この年から翌1953年にかけて、ハイアライ法案、畜犬競技法案などが議員立法によって提案されたが、いずれもが廃案になる。

こうした経緯をへて、第2次大戦以前は、原則として非合法であった賭博の一部が、国家の法律によって、文字どおり「制度化」された。それは、競馬場をはじめ、公営賭博のための各種競技場としてもちいる巨大な構築物を建設する、いわば「賭博の装置化」の過程でもあった。そして、おりから大衆社会化の進行しはじめた日本社会は、いわば一種の「賭博の大衆化時代」とでもよぶべき様相を呈するようになっていく。そうした当時の雰囲気をつたえる雑誌の記事の表題を、いくつか挙げてみると、

- ・「ギャンブルまかり通る」〔甲斐、1953：pp.184-194〕
- ・「賭博時代」〔佐々木、1953：pp.214-221〕
- ・「東洋のモナコ日本」〔峰島、1954：pp.156-161〕

などがみつかると。しかし、かならずしもそれは、いわゆる世間の良識にとっては、さすがしさを感じさせる風景の日常化ではありえなかった。そのことを佐々木〔1953〕は、

ただこの日（立川競輪で）みた印象を言えば、競輪は追いつめられた者のやるバクチのように深刻陰惨であった〔p.218〕。

と述べている。あるいは、甲斐〔1953〕の記述にみられる、

ギリギリの線まで追いつめられた大衆は一刻のギャンブルに夢を託して吸いつけられていく。血走った幾千幾万の眼々々。奏でられる天国と地獄……〔p.184〕。

といった文言にも、おなじような気分がただよっている。

しかしながら、こうした公営賭博（ギャンブル）が、いよいよ隆盛をほしいままにすることによって、非合法の博徒集団が開催する賽やカルタをもちいた賭博⁹は、いよいよ高度経済成長が本格化する昭和30年代以降、確実に逼塞傾向をたどるようになっていった。

⁹ 筆者自身の伝聞によると、このころのカルタをもちいた賭博の主流は、いわゆる「手本びき」によってしめられていたという。

このことは、もしかすると公営賭博が副次的にもたらしたプラスの作用であったのかもしれない [P・H・Q、1957：pp.64-65]。

第5節 公営賭博の大衆的普及と隆盛——高度経済成長期

おりから日本社会においては、いわゆる高度経済成長の時代がやってきた。それにともなって公営賭博は、さらにいっそうの隆盛をほこるようになる。中央競馬を例にとると、主催団体が1954（昭和29）年に、農林省所轄の中央競馬会に改組されたのち、わずか1年後の1955年には、入場人員で157万人、売上額では111億円を記録するにいたる¹⁰。競輪もまた1954年、全国62か所の競技場において、その開催日数が4354日にたっし、その売上額は610億円におよんだ。

これら公営賭博の隆盛は、都市の盛り場においても、あたらしいよそおいをこらした賭博的なあそびを誘発させる。そのことに関連して、無署名 [1957] は、「番号合わせ、ガチャンコ、百円札博打、電話帳博打、レコードナンバー」など、当時の日本社会で流行し、ひろく普及した新種の賭博を紹介している [pp.100-103]。いずれにしても高度経済成長が本格化するとともに、公営賭博をはじめとする賭博の隆盛は、昭和40年代にむけて、さらに熱をおびはじめた。こうした状況のもとで、評論家の大宅壮一などは、

ボクはかねて「ギャンブルは人生の調味料だ」ということをいっている。ギャンブルはカラシでありコショウなのだ。これをめしの代わりに食うやつがいたらとんでもないこと [無署名、1961：p.35]。

とユーモアをまじえて、賭博に過度に熱中する人びとにかかるい揶揄をとぼしながら、余裕をもってあそぶことをすすめる発言をくりかえす。しかし、じっさいには「カラシやコショウをめしの代わりに食うやつ」がすくなくなかったようで、その弊害は容易には払拭できなかった。そこで、公営賭博の主催者のがわも、開催日を土曜日と日曜日に限定したり、とくに競馬では1963（昭和38）年以降、はらいもどし金の倍率を低下させることをもくろんで、「連勝複式8枠制」を採用するなどの「改革」に着手するようになった。

¹⁰ ここにあげた111億円という金額は、そのわずか5年あまり前の1949年に、戦後の日本経済におおきな影響をおよぼしたシャウブ勧告が、「競馬は国家財政の対象にならない」と主張した年の勝馬投票券の売上額の約5倍に相当する。

しかしながら、他方では1965（昭和40）年以降、中央競馬会は全国14か所におよぶ場外馬券売場を整備して、オンラインでむすばれたコンピューターを駆使しながら、場外馬券の発売を開始した。これが競馬ファンを増加させるとともに、公営賭博一般の入場者と売上額、いずれもの増加を促進する。その結果、ついに1975（昭和50）年には、中央と地方の競馬・競輪・競艇・オートレースのすべてを合計すると、入場者数で1億3500万人、売上額で4兆円を突破するという、公営賭博の黄金時代をむかえたのであった。

もっとも、この間には1973（昭和48）年に東京都が競輪を廃止したのをはじめとして、いくつかの都市で競輪が廃止され、黄金時代の1975年をすぎると、公営賭博への入場者数の減少がきざしはじめる。しかし、それでもなお1987（昭和52）年で、年間のべ1億2000万人ちかくの人びとが、総額で5兆3000億円にのぼる金銭を、公営賭博に「投資」していた。それだけではない。1980（昭和55）年においては、これらの公営賭博にくわえ、売上額で2400億円にのぼった宝くじ、約10兆円とみつもられたパチンコ、営業卓の総数が27万卓をかぞえた麻雀など、賭博的な要素の濃厚なあそびが、文字どおり氾濫していた。そこで、当時の日本の国民総生産を参照してみると、これが約250兆円——それにたいして、かつてジェ・カイヨワが、その著書である『遊びと人間』〔1973〕のなかで、

労働を、忍耐を、儉約を放棄すること〔p.189〕。

と、きめつけた、あらゆる種類の賭博（産業）の市場規模は、そのおよそ10パーセントをしめる25兆円程度にたっていたとみつもることができる。

なお、昭和40年代以降の公営賭博の変化をふりかえてみると、それ以前には主流を始めていた競輪にかわって、競馬の人気が急速にたかまってきた点を指摘することができる。その背景には、高度経済成長にともなって日本人全体が「中流化」してきたという事情があるようにおもわれる。もちろん、実証的な資料にもとづいた議論ではありえないが、ちょうど昭和40年代のはじめに、もと平塚市の市長であった戸川貞夫がのべた、つぎのような言葉をおもいだすと、こうしたとらえかたにも、多少の妥当性がありうるのではないか。すなわち、

競馬のほうは自家用車をもっている人が大多数でしょう。競馬場は中央から離れていますからね。競馬がウイスキーだとすれば、競輪は焼酎みたいなものです〔1966、大宅壮一ほか：p.61〕。

というのである。それにくわえて、1970（昭和45）年以降、おお金もちの個人だけでなく、大手商社が馬主として参入したり、一般の競馬ファンを対象にした共同馬主システ

ムが採用されたりしたことも、競馬ファンの中流化を促進したといえる。もちろん競輪が、競輪学校の近代化や八百長問題の解消をこころみたことなどによって、ファン層の拡充につとめたこともわすれるべきではない。しかし、そのなかでも競馬が、「一家そろってたのしめるレジャー」というイメージを確立するころみにおいて、一步をさきんじたことは否定できない。さらに、やや蛇足めくが、昭和40年代のおわりに、名馬ハイセイコーが大活躍して、女性の競馬ファンを増大させたことも、競馬ファンの中流化に、なにがしかのインパクトをおよぼしたかもしれない。

第6節 日本社会の近代化・現代化と賭博

——むすびにかえて

日本社会の近代化と賭博

こうして、近代初期から高度経済成長期にいたる、日本社会における一般生活者のあそびのひとつとしての賭博をめぐる歴史的な考察が、いちおう終結する。そこでつぎに、そこにはらまれている多少の意味をかんがえてみる。それを尾佐竹〔1921〕は、

一体、すべての物は単純から複雑に進むのでありますが、賭博もその例に洩れず点より線、平面より立体、単数より複数へと進むのであります〔1921：p.20〕。

と、きわめてみじかい記述でとらえる。この記述は、じつは80年以上も昔のものであるが、そこには賭博が、たえまない技術革新とシステム化によって複雑化してきたという、現代にまでつながる趨勢が的確にとらえられている。つまり、近世なかば、従来のサイコロ賭博にかわって、各種のカルタ賭博が登場し、近世末から近代にかけて、そこにさまざまなあたらしい賭博のあそびかたがくわわり、やがて明治時代ともなると、大規模な装置と制度を必要とする競馬がはじまり、さらに第2次大戦後には、競馬のほかに競輪・競艇・オートレースなどをふくむ公営賭博の未曾有の隆盛へとうけつがれてきたことが、そのことを雄弁にものがたる。

それだけではない。賭博を禁じた刑法が有効である社会において、各種の公営賭博はもとより、一種の賭博にほかならないパチンコが公認され、かつまた、麻雀をはじめとするいくつかの賭博が、なかば以上、黙認されているのは、文字どおり「賭博の制度化」が進行した結果であるというほかあるまい。さらに、公営賭博のための巨大な施設整備だけでなく、コンピュータと電話回線を縦横に駆使した、オンライン化された投票券の販売シス

テム、より小規模ながら、コンピュータとそのソフトウェアを最大限に利用することによって多数のファンを魅了しつづけるパチンコなど、現代日本の賭博には、膨大かつ繊細な各種の文明の装置系が、きわめてふかく関与することによって、その隆盛をささえているのである。

ただ、しかしながら賭博は、あそびのひとつであると同時に、その結果、金銭や財物の所有権が移動するという意味において、一種の経済活動としての意味をはらんでいるともいえる。それは、日本社会の近代化をリードしてきた政府の立場からすれば、一般には、つぎのような意味をはらむものと理解されてきたはずである。

賭博は適度に行なわれれば娯楽と射幸という人間の欲求をほどよく満たすが、賭博への耽溺は日常的な勤労意欲を麻痺させ、健全な経済社会運営を混乱させると共に、副次的な犯罪を誘発し、しばしば暴力団の資金源となる性格を持っている〔田中、1985：p.951〕。

だからこそ日本の刑法は、近代的な明治政府が成立した当初から今日まで、本章の冒頭にしるした刑法の条文をもって、賭博を犯罪とみなしてきたのである。

しかしながら、あらためてかんがえてみると、そもそも近代資本主義経済というものは、相互に矛盾する側面をはらんだ2つの価値観のバランスのうえに成立しているともいえる。そのひとつは、いうまでもなく禁欲と勤勉に価値をおく、規範としての労働価値説である。そしてもうひとつは、その成果を凝縮して貯蓄し、資本として運用するために、価値を媒介する貨幣にたいする物神崇拜である。

「資本の蓄積→その事業への投資→労働力の投入→利潤の確保・資本の再生産→……」

という資本主義経済のサイクルは、これら2つの価値観が、均衡をたもちながら社会意識に反映されているときにだけ、順調な成長と発展の過程をたどるといわけである。いわゆる高度経済成長が終焉をむかえるまでの日本社会においては、こうした資本主義経済の規範の範囲内において、一種のあそびとしての賭博が許容されてきたのだといえる。

「遊戯化」社会の到来と賭博——高度経済成長期以後の動向

ところが、貨幣によって支配される市場経済は、そのなかにおいて万能にちかい力を発揮する貨幣への欲望を、ひたすら肥大させる傾向をつねにはらんでいる。それはまた、禁欲と勤勉の規範に対立しながら、人びとの賭博への指向性の増大をもたらす契機ともなりかねない。したがって、近代日本における賭博の「制度化」の歴史は、規範としての労働価値説と、ふたたびカイヨワ〔1953〕の言葉をかりれば、「労働を、忍耐を、儉約を放棄

する」賭博への欲求のあいだの、はげしいせめいぎあいを、みごとにうつつだしてきたといえる。とくに第2次大戦後の日本政府は、たんに賭博を全面的に禁止するのではなく、ある一定の範囲内において、それを「公的に制度化」することによって、一般生活者の欲求を吸収するという方途を選択した。そうであればこそ日本人が、かつてなかったほど勤勉に仕事と労働にはげんだ高度経済成長期に、公営賭博をはじめとする賭博一般が未曾有の隆盛をほしいままにしたのであった。

ところが、高度経済成長の達成によって、ひとえに工業生産性をたかめるという意志につらぬかれた日本社会の近代化という目標が達成されてしまった。その結果、その後の日本人は、ゆたかになった工業の生産物を消費し、そのことによって、あらゆるたのしさやおもしろさやこころよさなどを享受したいとする欲求をあらわにしめしはじめる。じっさい、高度経済成長後の日本社会においては、あらゆるあそびを提供する装置と制度が整備されてきただけでなく、かつてなら、あそびとは明確に区別されたはずの生理的活動や仕事や勉強にまで、あそびの要素が浸透するようになった。こうした現代日本社会の趨勢を、かつて筆者は「遊戯化」という言葉でとらえたことがある〔高田、1987〕。そしてこのことは、当然の結果として、あそびの一分野を形成する賭博一般にも、すくなくからざる影響をおよぼすことになった。

そのことは、やや逆説的ながら、筆者のいう「遊戯化」の趨勢が顕著になりはじめた1980年代をさかいにして、くしくも公営賭博の人気に、かげりがきざすようになったことによってもしめされる。じっさい、競馬をはじめとするあらゆる公営賭博が、1980（昭和55）年をピークとして、入場人員と売上額のいずれにおいても横ばい、ないしは微減の趨勢をたどりはじめるのである。このことは、すでにスポーツ・ライターのひとりが、

「ギャンブル昭和元禄時代は終わった」

と題する評論〔唐沢、1980：pp.180-188〕のなかで予言していたことでもある。ただし、唐沢〔1980〕の指摘は、公営賭博をめぐる現象の指摘としてはただしもの、その根拠としている点にかんしては、かならずしも正鵠をえていない。つまり、

日本人はすでにギャンブルにあきています。それが人気を失っているのは中央競馬会と競馬ジャーナリズムの愚民政策の結果だ。「馬を見る目の確かさを要求されるスポーツとしての競馬」こそが今もとめられている〔p.188〕。

はたして、そのとおりであろうか。むしろ、生活のよりひろい局面に目をはせると、1980（昭和55）年あたりをさかいにして、日本人の、いわば「純粋賭博熱」はいよいよたかま

ってきたのではないか。それというのも、コンピューターを利用したテレビゲームのポーカー賭博が世上をにぎわすようになったのは、ちょうどこのころのできごとであった。さらにまた、資本主義経済の根幹のひとつを形成する、本来が制度化された賭博といってもよい株式投資や為替ディーリングが、財テク、ないしは文字どおり「あそび」を意味するマネーゲームと名をかえて、制度化された経済を専門にあつかう金融・証券業界を席捲するようになったのも、このころのできごとだったからである。

こうした状況のなかでむかえた昭和時代最後の60年代から平成時代にかけて、競馬場にナイター設備がととのえられたり、競輪が電話で車券を購入するシステムを確立したり、公営賭博は、それぞれにファンを獲得するための、さまざまなあたらしい工夫をこころみだ。しかし、それらが目だった効果をおさめたという話はすくない。

それにたいして、昭和時代のおわりから平成時代のはじめにかけて日本社会に現出した、いわゆる「バブル経済」は、文字どおり「カジノ経済」とあだ名されながら、きわめて賭博性のつよい財テクやマネーゲームを一般生活者のあいだにひろめた。とくに1987(昭和62)年には、株式の大暴落がひきおこされたにもかかわらず、それがすぐに逼塞することはなかったのであった。もしかすると、当時の日本社会は、さきにのべたふたつの価値観、すなわち「労働価値説」と「賭博をふくむ金銭フェティシズム」のあらたな均衡を模索する時代をむかえていたのかもしれない。それはあたかも「あそびとしての賭博」が「制度化された経済」の全体をのっとりはじめていたということであろう。そして、ここでふたたびカイヨワ[1958]の言葉を引用すれば、当時の日本の財テクとマネーゲームは「あそびとしての賭博」にたいするカイヨワの評価を、はるかに凌駕しはじめていた。すなわち、

ラス・ヴェガスでは、毎年、七〇〇万の旅行者が六〇〇〇万ドルを落して帰るが、これはネヴァダ州予算のほぼ四〇%にあたる。しかし、彼らがそこで過ごす時間は、やはり彼らの日常生活の中の挿入句のようなものである。文明の様式は、目立った影響は受けていないのである [p.192]。

ただ、その後、1990年代にはいって、日本のバブル経済は急速にしぼんでしまった。その背景には、マネーゲームや財テクだけが過剰に「賭博」化しただけで、その他の人間や企業や行政のいとなみが、社会と経済の全体が着実にたどっている情報産業社会化に、適切に対応しきれていないという問題が潜在しているのだと、筆者はかんがえている。

【参考文献】(著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順)

- ・某馬政通、1918「馬、競馬及び馬券」『太陽』（1月1日号）
- ・長谷川昇、1977『博徒と自由民権——名古屋事件始末記』中央公論社
- ・葦陀天、1907「競馬賭博」『新小説』（9月号）
- ・板垣退助、1909「競馬奨励の必要」『太陽』（9月1日号）
- ・甲斐富士夫、1953「ギャンブルまかり通る」『経済往来』（4月号）
- ・唐沢靖男、—1980「ギャンブル昭和元禄時代は終わった」『月刊ペン』（9月号）
- ・正延哲士、1984『最後の博徒——波谷守之の生涯』三一書房
- ・増川宏一、1983『賭博Ⅲ』法政大学出版会
- ・峰島洋、1954「東洋のモナコ日本」『小説公園』（10月号）
- ・みよしの、1890「花合戦」『太陽』（3月1日号）
- ・無署名、1957「〈賭〉から覗いた現代」『週刊新潮』（1月7日）
- ・無署名、1961「公営ギャンブル狂走曲」『サンデー毎日』（1月22日号）
- ・中戸川吉二、1930「競馬の話」『改造』（1月号）
- ・大宅壮一・宮城音弥・戸川貞雄、1966「座談会・ギャンブルは人生の調味料」『20世紀』（6月号）
- ・尾佐竹猛、1921（1969復刻版）『賭博と掏摸の研究』新泉社
- ・P・H・Q、1957「博徒親分控え帖」『別冊週刊サンケイ』（12月25日号）
- ・カイヨワ、R.、1958（多田道太郎・訳、1973）『遊びと人間』講談社
- ・佐々木基一、1953「賭博時代」『改造』（6月号）
- ・高田公理、1987『〈遊戯化〉社会を探検する』PHP研究所
- ・高田公理、1989「賭博——その技術革新・制度化・装置化」（守屋毅・編）『現代日本文化における伝統と変容⑥日本人と遊び』ドメス出版
- ・田中利幸、1985「とばくざい（賭博罪）」『大百科事典10』平凡社
- ・XYZ、1908「競馬界の暗黒面」『冒険世界』（6月5日号）

第4章 多様な金融商品の誕生と日本人の金銭意識¹

第5部においては、これまで、都市、とりわけ都市の盛り場そのものと、そこでの酒のみ行動や賭博などといった、あそびとたのしみの変容の過程を考察してきた。その結果、あきらかになったことのひとつは、人があそび、たのしむためには、いくつかの条件が必要だということである。たとえば、①あそぶための時間、②あそびのノウハウを身につけていること、③あそぶ場所、④あそぶ相手、そして、⑤あそぶための金銭などが、そのなかでも重要なものだとかんがえられる。それらのうち、①から④までの項目については、それぞれの章において、おりにふれて言及してきた。

それにたいして、⑤の「あそぶための金銭」については、ほとんどふれる機会がなかった。そこで、第5部第4章においては、時期を高度経済成長のおわりから、まさに現在にかけて市場に氾濫するようになった、多様な金融商品との関係に注意をはらいながら、一般生活者の金銭意識の変容のあとを考察する。

はじめに——「カネをかう」ということ

いうまでもなく「カネ」は、常識的には「モノやサービスを購入するための価値の媒体」である。その「カネをかう（購入する）」とは、一体どういうことなのか。

たとえば、きゅうに手もちの金額以上の金銭需要が発生したとする。ひと昔まえなら、親類や友人や知人に借金する以外に、容易な方法はなかった。しかし今日では、クレジット会社や消費者信用企業が、ごく簡単な手つづきで金をかしてくれる²。むろん、手数料や利息を支はらわねばならない。しかし、そのほうが疎遠になった親類に頭をさげたり、友人や知人に窮状をうったえるよりも気らくだ、とかんがえる人びとがふえている。その結果なのであろう。現代日本における消費者信用残高は、約250兆円にのぼる民間最終消費の、30パーセントにちかい70兆円にたっしている（1995年現在）。

ならば当然、それは金銭貸借なのであって「カネをかう」というにはあたらないという

¹ 第5部第4章のもととなる論文は、高田〔1996〕として公刊されている。

² 消費者信用はおおきく、物品の購入にあてる「販売信用」と、用途を特定しない「消費者金融」にわけられる。そこには、住宅ローンをはじめとする大口の金融はふくまないのである。

反論がありうる。そのとおりである。しかし、かりに旅先で現金が必要になったときに、クレジット・カードを提示して金をかりたとする。手数料は、だいたい5パーセントであり、最長で50日、最短なら20日のちには、かりた金額に5パーセントの金額をうわのせして返済しなければならない。そのさい決済が最短の20日後であるとするれば、それを利息に換算したばあい、年利90%以上を支はらっている勘定になる。1996（平成7）年における普通預金の預金金利が、年間0.1パーセントであったことをおもうと、おどろくべき高金利だというほかない。

そこで、実利・実益を重視する人は、クレジット・カードのかわりに、しばしば消費者金融を利用する。その平均金利は1995（平成6）年3月の段階で、年間32.7パーセントであった。したがって、かりいれてから20日後に返済したとすると、元金にうわのせされるのは1.8パーセントということになる。これは、クレジットカードの手数料よりずっとやすい。もっとも、それでも年間になおすと32.7パーセントの金利は、金銭貸借の常識を、おお幅にこえている。こうした金銭をめぐるとりひきは、「金銭の貸借」というよりも、原価に利益をうわのせする、商品やサービスの販売にもいた「金銭の売買」だとかんがえるほうが、むしろ理解しやすいのではないか。

とくに最近になって増加してきた、旅行に関連する消費者金融の利用法には、こうした傾向がいちじるしい。たとえば、ボーナスの直前、航空運賃やホテル代がもっとも安価になる時期に海外旅行をするために、消費者金融から金をかり、一か月のちに、さっさと返済してしまうOLがすくなくない。そもそも旅行という商品が、あとに

「たのしかった、おもしろかった」

という記憶のほかには、ほとんどなにも、痕跡をのこさないという事実をおもいだすと、旅行の購入よりも、むしろ1.8パーセントをうわのせした金銭のかりいれのほうが、売買にちかいとりひきだという気がしないでもない。しかも、これに似た意識と形式でとりひきされている金銭の授受は、消費者金融だけではなく、株式や投資・貸付信託、生命・損害保険や年金など、さまざまな金融商品の周辺におこっている。本章では、あたかも「カネを売買する」かのような、現代日本の一般生活者の金銭行動と金銭感覚を、現代日本における世相の特徴のひとつとして、とらえなおしてみる。

「人びとがカネをかいはじめる」まで

「カネの売買」以前に、むかしの日本の一般生活者が「カネをかりる」ことは、すでに

みたように、かならずしも容易でなかった。むろん都市の随所には、一定の品物を担保物件（＝質草）としてあずけることで、少額の金を用だててくれる「質屋」があった。しかし、質屋に足をはこぶことは、一種のはずかしさをとまなう、奨励されざる行為でもあった。こうした状態が変化するのは、いわゆる高度経済成長が緒につく1960（昭和35）年前後に、各種の消費者信用が登場して以来のことである。そのことに関連して、流通産業研究所〔1983〕は、概略、つぎのようにのべている。

わが国の消費者信用の起源は、思想的には16世紀の頼母子講にさかのぼるが、期間を第2次大戦後に限れば、昭和24（1949）年ごろから徐々に発展への道程がはじまった。しかし、今日の隆盛につながるという意味では、さらにおそく、「クレジット元年」にあたる年は、つぎの出来事がおこった昭和35（1960）年であると考えられる。

- ① 銀行系クレジット・カード会社の日本ダイナースクラブの設立
- ② 銀行のオートローンの開始
- ③ サラリーマン金融のマルイト（現在のアコム）の設立
- ④ 月賦専門店の丸井がクレジット・カードを発行
- ⑤ 西武百貨店が一回払いのカストマーズ・カードを発行

では、なぜ、この時期に各種の消費者信用が登場したのか。それは、1955（昭和30）年に、当時の池田内閣が提唱した「（10年後の）所得倍増計画」が、わずか5年後の1960（昭和35）に、ほぼ達成されてしまい、その後も所得の増大が保障されるとともに、いわゆる「3種の神器（＝電気冷蔵庫、洗濯機、掃除機）」をはじめとして、多様な耐久消費財が市場にでまわりはじめたからである。ただ、当時の1人あたり国民所得は、14万円たらずであって、借金なしに3種の神器を購入することは不可能であった。

そこに、確実に増加する将来の所得を「前だおし」ないしは「先どり」して、現在の金銭需要への充当を可能にする消費者信用が登場する。それは、商品やサービスを供給して利益をあげる企業にとっても、それらを購入してゆたかな生活を享受しようとかんがえる生活者にとっても、必要不可欠なものとみなされた。こうして、

「モノを購入するためにカネをかり、利息をふくめて、すこしずつ返済する」

ことが、ごくあたりまえの消費行動になった。

そこでおもいだすべきは、消費者信用が存在しなくなれば、日本経済の規模は、すくなくとも、その分だけ縮小せざるをえないということである。つまり、消費者信用の登場をきっかけにして、日本の消費経済は、実物経済をこえて肥大する傾向を条件づけられたこ

とになる。それから20年前後、日本経済はいちじるしい経済成長を継続した。このことは、「1人あたり国民所得の推移」をしめした図5-4-1から容易によみとれる。その数値は、1960年代なかばから成長率をたかめながら、1975（昭和50）年には100万円を、さらに10年後の1985（昭和60）年には200万円を突破してしまうのである。

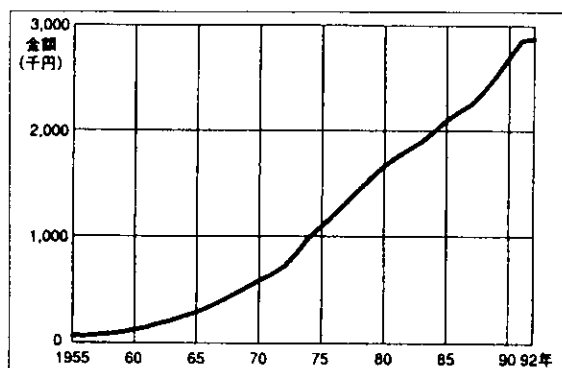


図5-4-1 1人あたり国民所得の推移

(総務庁統計局・編『日本統計年鑑』日本統計協会)

その過程においては、消費の規模がいちじるしく拡大した。しかも、生活や行動が、質的にも変化した。そのひとつが「家計消費における自由裁量性の増大」（図5-4-2）という趨勢である。つまり（エンゲルの）理論どおり、図5-4-1にしめた所得の増大にともなって、家計消費のうち、もっとも必需性のたかい食費の比率が低下し、自由裁量性のたかい雑費の比率が増加した結果、1967（昭和42）年には「広義の雑費」が、1988（昭和63）年には「狭義の雑費」が、それぞれ構成比率で食費比率を凌駕してしまう³。

それは、いいかえれば消費弾力性が増大したということでもある。つまり、やや逆説的であるかのようにみえるかもしれないが、生存に不可欠な消費支出が一定の枠におさまりがちなのにたいし、教育費や教養・娯楽費など広義の雑費の額は、きわめて恣意的に設定されるのがふつうである。それは、これらの支出が、一方において消費の対象となる商品やサービスの非物質性をつよめ、他方において多額であるほどたのしきやおもしろ

³ 図5-4-2における「広義の雑費」には「教育費、教養・娯楽費、保険・医療費、交通通信費、その他の消費支出」が、「狭義の雑費」には「広義の雑費」のうちの「その他の消費支出」だけがふくまれている。

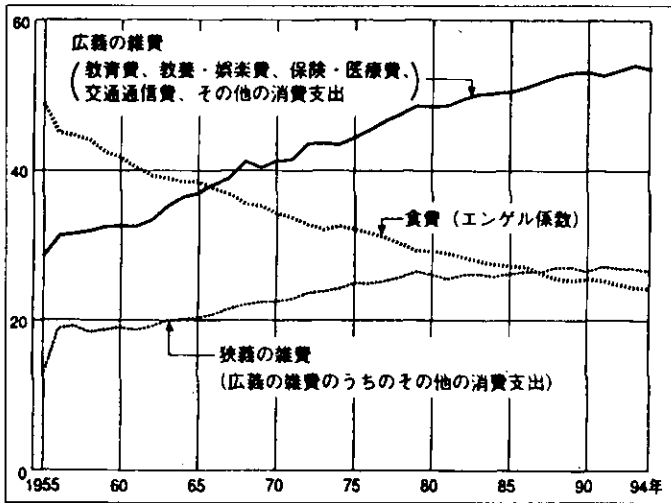


図5-4-2 家計消費の自由裁量性の増大

(日本総合研究所・編、1994『生活と貯蓄関連統計』貯蓄中央委員会)

ろさが増大する傾向をおびるからにはほかならない。消費者信用の普及の契機となった「3種の神器」のあと、ひきつづき消費者信用への需要を増大させつづけた各種の耐久消費財も、その普及率の推移をしめした図5-4-3を参照すれば容易に判明するように、いってみれば嗜好性のつよい、したがって自由裁量性の度合のたかい情報関連商品に、主役の座をゆずりわたしていくことがわかるはずである。

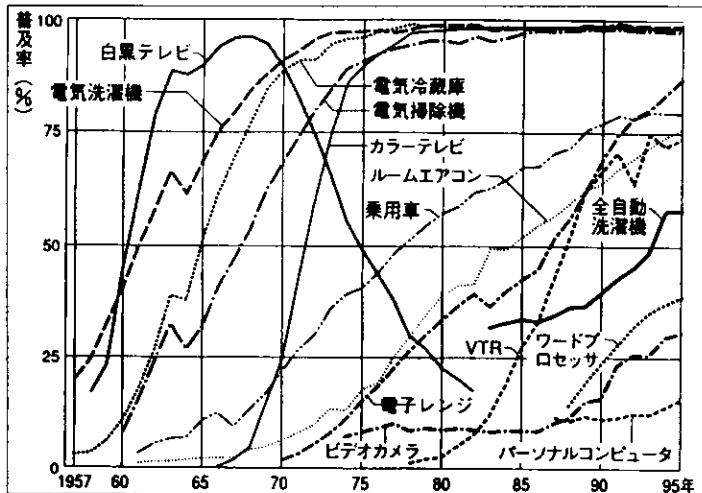


図5-4-3 耐久消費財の普及率の推移

(経済企画庁・編、1995『国民生活白書(平成7年版)』大蔵省印刷局)

こうして、消費における自由裁量性と非物質性がたかまると、家計消費における金銭需要は、むしろ、ぎゃくに際限なく増大する傾向をあらわにしめす。ことにインフレと将来の所得増加が確実に期待された高度経済成長のもとでは、消費者信用への需要がいつそうたかまり、その貸出残高は急増した。時期は前後するが、「通貨流通量と消費者信用の融資残高の推移」をしめした図 5-4-4 によると、1975（昭和 50）年以降も、その両方が増加しつづけ、とくに 1980 年代なかば以降は、通貨流通量を凌駕して貸出残高が増加していったことがわかる。そんな時代がはじまる 1983（昭和 63）年、日本の一般生活者のあいだに、あたかも「カネをかう」かのような消費者金融の利用がひろがりはじめたのであった。

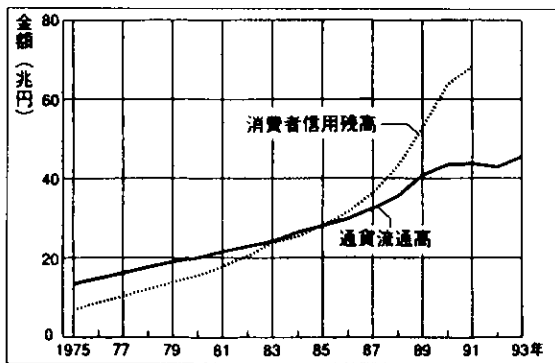


図 5-4-4 通貨流通量と消費者信用融資残高（販売信用と消費者金融の合計）の推移

（日本総合研究所・編、1994『生活と貯蓄関連統計』貯蓄中央委員会）

それは、東京地方裁判所におけるロッキード事件丸紅ルート of 公判によって、田中角栄元首相が「懲役 4 年、追徴金 5 億円の実刑判決」をうけ、その金権体質をマスコミがこぞって批判した年でもあった。くしくも、それとおなじ年に、当時は一般に「サラ金（サラリーマン金融）」の名でよばれていた消費者金融が社会問題化した。そこで、当時のマスコミの「サラ金批判」の論調を、おもいだしながら要約してしてみると、

- ① サラ金は、顧客の返済能力をはるかにこえる現金を、極端にたかい金利で貸与し、回収にあたっては暴力をもいとわず、莫大な利益をほしいままにしている。
- ② その結果、サラ金の利用者や関係者のおおくが、自殺や殺人、横領や窃盗、家庭崩壊や蒸発など、悲劇的で不幸な事件にまきこまれている。
- ③ サラ金を利用すると、借金が加速度的に増加して、家庭経済は深刻な破綻にみま

われる。それは文字どおり「生活破綻者への最短コース」である。

物質的な担保なしに、まるで「カネをかう」かのように消費者金融で「カネをかりた」人びとのなかには、当時の流行語にしたがえば、「サラ金地獄」にまきこまれる者がすくなくなかった。それは、通貨流通量を凌駕する金銭需要が発生する時代に対応した消費者金融をめぐる法律や制度の未整備の結果でもあったといえる。

制度化された「カネをうる行為」

そこで1983（昭和63）年、「貸金業の規制等に関する法律」「出資の受入れ、預り金及び金利等の取締りに関する法律の一部を改正する法律」という2件の、いわゆる貸金業規制法が国会で可決されて11月に施行される。それは、極端な高金利を規制し、貸金業者に、大蔵大臣または都道府県知事への登録のほか、①過剰貸付の防止、②誇大広告の禁止、③とりたて行為の規制などを義務づけた、悪質な貸金業の規制をめざす法律である。ただし、ぎゃくに条件をみたす貸金業者は、制度的に認知され、「カネをうるかのようにかす行為」を、制度的に確立させもしたのであった。

それは当時、あたらしい段階をむかえつつあった「情報産業社会化」の趨勢のもとで、「カネをかうこと」が、さらに一般化するきっかけとなった。ここにいう情報産業社会化とは、①テレビやラジオなどのマスコミ、コンピューターや通信などが発展・普及することによって、②科学・技術の進歩が加速され、③工業生産と商品流通が合理化・効率化され、さらに、④かつては一部の富裕階層だけが享受しえた芸能や芸術、学問や技術やスポーツなどがひろく一般生活者に開放され、⑤それらをつたえる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりなど、ひろい意味における情報が、経済的に重要な意味をもつことだとかんがえてよい。

こうした変化の進行は、同時に、あらゆる物質やエネルギーを、価値ある情報の媒体であるがゆえに価値あるものと評価し、それを消費（ないし体験）するためには、多額の金銭消費もいとわないという生活意識をうみだした。そこでおもいだすべきは、これまた1983年に開業した東京ディズニーランド（TDL）と長崎オランダ村という、2つのテーマパークの成功である。その直前に、日本の新聞は随所に、つぎのような意味内容の経

4 その後、長崎オランダ村は、おなじ経営主体によって長崎ハウステンボスが開業したため、業態を変化させて現在にいたっている。

営学者のコメントを掲載していた。

ディズニー漫画の世界を再現した遊園地に、おとなが興味をもつわけがない。時間がたてば地価があがり、全体としては採算がとれるだろうが、東京ディズニーランドの経常的な経営が順調であるはずはない。

しかし実際には、開業から15年をへたこんにち、いわゆるバブル経済が崩壊して、これ以上の地価上昇は期待できなくなったが、その集客能力は、平成不況のさなかにおいても、基本的には低下せず、それなりに経営は順調に推移している。ふしぎはあるまい。とくに1995（平成7）年以來、阪神大震災をはじめとして、オウム真理教の事件や政治家・官僚の腐敗など、ゆううつな現実に食傷した人びとが、夢のようなおとぎ話、あかるくゆたかな未来を垣間みせてくれる東京ディズニーランドにあそびにいこうとするのは、ある意味で当然である。そしてそれを可能にしているのは、東京ディズニーランドの建築や遊具、商品やサービスなどが、もっぱら人の心身をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる色や形、音や映像、さらには言葉やイメージなど、広範な情報の媒体として演出されているからにほかならない。

いまひとつ注目すべきは、1981（昭和56）年に、本格的に営業をはじめた宅配便である。それ以前のトラック輸送の主たる目的は、農産物や工業原料や工業製品など、大量の貨物輸送にあった。それが、1個30キログラム以下の小口貨物に特化した宅配便が営業をはじめると、特産品を産地から消費者の手元へ、おくりものを友人・知人に直送するケースが急増し、1995（平成7）年の段階において、その取扱個数は、年間10億個をこえるにいたっている。これらの宅配便は、物量そのものではなく、それに付与された特産品のめずらしさやおくり主の気もちなど、いわば情報そのものを人びとの手元にとどけているのである。

そこで話を、前項で示唆した「消費における自由裁量性と非物質性」にもどしてみると、それはじつは「家計消費の情報化」、すなわち「家計消費の主たる対象が広範な情報やその媒体」に推移した結果であることがあらためてあきらかになる。そんな時代には、カネ（金、マネー）もまた情報化せざるをえないということになるのであろう。

「情報化するカネ」と多様化する金融商品

では、「カネが情報化する」とは、どういうことか。この問への答は、「カネ＝貨幣」の本質にかかわる問題でもある。きわめて単純にいうと、太古に貝や塩が、くだっては銀

や金が、それぞれ貨幣として流通しえたのは、これらの物質の稀少性と、それを普遍的な価値の担体とみなす人びとの共同幻想のゆえであった。つまり、もともと貨幣は、それをめぐる人びとの「情報の共有」によってささえられる制度でしかなかった。紙幣に印刷された金額の数字も「情報そのもの」にほかならない。

ただし、1971（昭和46）年に、アメリカのニクソン大統領が「ドルの金への交換停止」を宣言するまで、ドル紙幣は「金という（価値ある）物質」への交換が可能だったのであって、アメリカには、それに相当する金が保管されていた。ところが、それが停止されるとドル紙幣は、たんに「情報を印刷された紙」にすぎなくなる。そして、保管されていた相当量の金の役割を、発行されたドル紙幣に対応する金額の数字をかきこんだコンピュータの磁器テープが代替しはじめた。こうして現代世界に流通する「ドル＝マネー＝金＝貨幣」は、情報そのものになってしまったのである。

こうした状況は、金銭とりひきをコンピューターに託すことによって、人びとの生活意識にもひろく浸透していくことになる。筆者自身が、1983（昭和58）年に実施した、日本人の金銭観調査のさいにも、たくさんの興味ぶかい解答にであったことをおもいだす〔高田、1985：pp.135-218〕。たとえば、ある母親は、つぎのような話を紹介してくれた。

「あるとき、『おまえは誰のおかげで飯がくえるとおもっているのか』と、夫が子どもをしかったんですが、子供はずかしい顔で、『銀行においてある、あの四角形の機械やろ？ お母さんがボタンをおしたら、なんぼでも、お金がでてくるで』。それで夫は、あいた口がふさんがらん、という顔をしてました」

月末ごとに、父が母に現金のはいった給料袋を手わたすかわりに、文字どおり「数字という情報」がコンピューター内部でかきかえられることによって給料のふりこみがおこなわれるようになったからであろう。子どもたちの目には、カネという富の移転が、数字情報の処理にしかみえなくなっているのであるらしい。

子供たちだけではない。おなじ調査の過程で面接した消費者金融のある多重債務者は、
「サラ金の営業店にいったら、自分のものでなくても、健康保険証をみせるだけで、いくらでもカネをくれるんですね」

とうそぶいていた。また、旅行会社の添乗員のなかには、消費者金融でかりた年利50パーセントの金を、旅先で、それ以上の高金利で客にかして利益をえている人物にもであった。

「海外の旅先で、女性をかったために、手もちの現金がなくなる客がいます。ところが

目のまえには、金さえあれば、自分のものにできる女性がいる。こうなると、彼らのおおくは、確実に現金をほしがります。それで、旅行期間中につき 10 パーセントでかしつけるわけです。しっかりもうけることができます」

こうした事例をみてくると、それ以前には支配的であった「労働が価値をうみだす」という労働観や金銭観が、この時期に急速に退潮し、かわって「カネを一種の情報とみなす」金銭観が急速に浮上してきたことがわかる。そしてそれが 1980 年代に、消費者金融という借入型の金融商品だけでなく、貯蓄型の金融商品の多様化とその普及となって、日本社会全体にひろがっていったのである。

その最初のきっかけは、1980（昭和 55）年における「中国（中期国債）ファンド」の発売である。これによって日本の一般生活者は、情報を入手して手もち資金をたくみに運用すれば、銀行預金や郵便貯金よりも、もっと有利にふやせることをまなんだ。そして同年末に外国為替管理法が改正され、外貨預金が自由化されて以来、金融の自由化が進行しはじめる。それらを 1980 年代の前半にかぎって、時系列にそって列挙してみると、

1981（昭和 56）年：ビッグ（収益満期受取型貸付信託）が発売される。

1982（昭和 57）年：銀行のキャッシュカード業務がはじまる。

1983（昭和 58）年：証券会社のハイパック（総合複利口座）が発売される。

1984（昭和 59）年：証券会社の金貯蓄口座が発売される。

1985（昭和 60）年：債券の先物市場が開設される。

などとなる。こうした状況のもとで、1980 年代前半には、企業のはじめた「財テク」が一般生活者のあいだにもひろがり、カネのかわりに「マネー」という語がつかわれ、やがて「マネーゲーム」という名の金銭投資がブームになっていった。無理もない。1983（昭和 58）年を例にとると、低成長経済が定着したため、実収入ののびはわずか 1.6 パーセントにとどまった。それにたいして、日本人全体の貯蓄額は 6.5 パーセントも増加している。つまり、へたに名目賃金がふえて税金を支はらうよりも、たくみに貯蓄を運用してふやすほうが、おおきな利益があげられるという経済の構造が、高度成長から成熟経済への推移の谷間に、一時的に姿をあわらしたのであった。

そこで、「世帯あたり貯蓄種類別構成比率の推移」をしめした図 5-4-5 を参照すると、このころから貯蓄にしめる預貯金の比率が低下する。それにかわって、リスクはたかいが、利得もおおきい株式や債券、将来にそなえる生命保険・損害保険・年金などの比率が、着実に上昇していく。同時に、貯蓄目的のうち、1962（昭和 37）年には、37 パーセントを

しめて極大にたった「土地・建物の購入」が20パーセントをわり、いわゆる「モノばなれ」の世相が顕著になった。人びとが、一種のゲームとして、多様化する（貯蓄型）金融商品を購入するようになったのである。ここにもまた、消費者金融で「（情報としての）カネをかう」ことに、よく似た金銭観や生活観が投影されているとってよい。

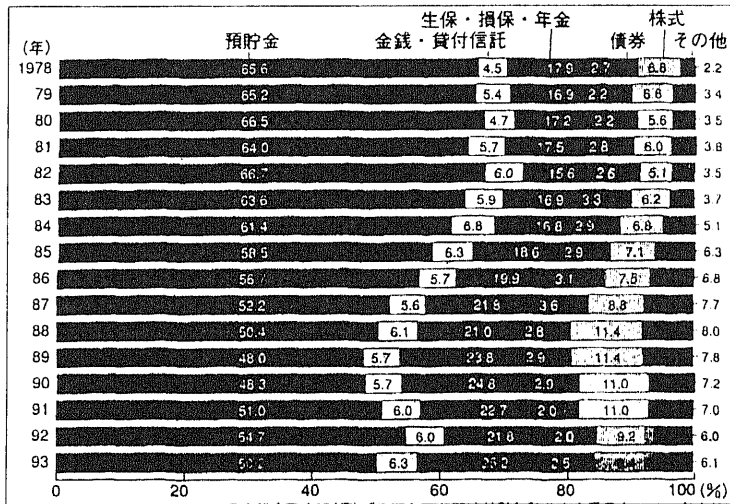


図 5-4-5 世帯あたり貯蓄種類別構成比率の推移

(日本総合研究所・編、1994『生活と貯蓄関連統計』貯蓄中央委員会)

「情報化・記号化」する消費とバブル経済

カネの情報化にともなって、消費市場の商品やサービスもまた情報化した。食物や料理は、カロリー補給という目的から遊離し、そのめずらしさ・うつくしさ・おいしさ、食器のデザインや食事場所のインテリア、そこにながれる音楽やそこでかわわされる会話など、多様な情報をたのしむための媒体になった。衣服も、物理的的刺激から身体を保護する物質であるよりも、流行のファッション情報の媒体、さらにはデザイナーや生産地のありがたみをつたえる記号情報になった。人びとはきそって、記号化された情報とひきかえるカネを手にいれようと、借入型・貯蓄型をとわず、多様な金融商品、つまりは「（情報としての）カネをかう」生活行動を日常化していったのである。

このことは、ふたたび図 5-4-2 を参照するといっそうあきらかになる。1980 年代なかば以降、家計支出から食費・住居費・水道光熱費・家具家事用品費・被服履物費をさしひいた「広義の雑費」から、さらに教育費・教養娯楽費・保険医療費・交通通信費をさしひいた（使途不明の）こずかいや交際費など、自由裁量性そのものにほかならない「狭義の雑

費」の比率が、食費の比率を凌駕してしまう。そのほとんどは、生活のあいまの、人とのつきあいにたのしさやおもしろさをそえるために出費されたのだとかがえてよい。これまた、ひろい意味で「こころよい情報体験」とよべるとかがえてみれば、この時期に家計支出の構造は「極限まで情報化した」ことになる。

そこで、おなじ時期の日本経済に目をうつすと、1986（昭和61）年から1990（平成2）年まで、その規模は順調に拡大しつづけ、なかでも株式市況は1989（平成元）年の年末、日経平均株価で3万8916円を記録するなど、経済の実体をこえて高騰していることがわかる。地価も高騰しつづけ、1990年には、大阪の住宅地が、年間48.2パーセントも暴騰し、そのあおりで「地あげ」が横行し、土地の転売がくりかえされた。そこでは、土地までもが「カネをかう」ことと同様の意味をはらむようになり、いわゆるバブル経済が一世を風靡するにいたったのである。

ところが1990（平成2）年にはいると、まず株価が1～3月と8～9月に大暴落する。おなじ年の10月1日には、日経株価平均が2万222円にまで下落し、前年の末にくらべると、48パーセントという、第2次世界大戦後における最大規模の暴落となった。ただ、このころまで、株式投資に熱心であった主婦のあいだには、いまだ本格的な不況への危機感はなく、電話などで、

「なんかようわかからんけれど、株のバーゲンやってるらしいよ」

といった、文字どおり脳天気な会話がかわされていた。しかし、ほんとうは実体経済をはるかにこえて肥大したバブル経済が崩壊する条件が、そのころすでに醸成されていた。株価の暴落につづいて翌1991年には、東京と大阪をふくむ大都市圏で、これまた第2次大戦後はじめて地価が下落しはじめる。これをきっかけにして、その2年まえに、昭和から平成へと元号が変わったことにちなんで名づけられた「平成不況」がはじまり、それ以来、通算すると100兆円にちかい景気対策が、政府によってこころみられてきたにもかかわらず、1996年4月現在、なお景気の浮揚は顕著なかたちでは確認されていなかった。

そのかわりに、1995（平成7）年以来、さきにふれたように、バブル経済の時期に過剰にふくらんだ不動産投機に、ほとんどなんの展望もなしに投資した不動産業者にたいする銀行や農協や信用金庫、それらが媒介した住宅専門金融会社による、これまた過剰にふくらんだ融資が、地価の低迷をきっかけとして、深刻な不良債権問題をひきおこした。しかも、問題処理にあたる政治家や官僚が、不良債権の相当部分を国庫支出によって補填するなど、無責任きわまりない無為無策が、1998（平成10）年4月までつづけられている。

このことは、あらゆる商品やサービス、さらには貨幣までもが情報化するという状況にたいして、政治や行政、体制化された産業が適応できずにいることをしめしている。つまり、高度経済成長が本格化した 1955（昭和 30）年から今日まで、あらゆる金銭的利得を建設事業によってかすめとり、そのすべてを土地の価格に還元することで維持されてきた「（不動産屋をふくむ）土建屋の土建屋による土建屋のための政治」と、それが支配する戦後日本の体制全体が、本格的に腐食しはじめたのである。

それにくらべると、わずか 15 年まえに「サラ金」とさげすまれ、最悪の評価ときびしい世論の攻撃にさらされていた消費者金融は、それを制度化する貸金業規制法が成立したあと、それなりに経営体質を改善し、やや過剰とおもえる利得をかすめとりながらも、銀行などと比較すれば、まだしも健全なかたちで「カネをうる」事業を推進しているようにみえる。そして、不良債権化や返済の延滞を予防するために、コンピュータを駆使した与信システムを確立し、同時に多重債務者の発生を抑制し、自動契約受付システムをそなえた無人店舗を増加させたほか、各種のサービス水準の高度化を実現したことなどによって、1995（平成 7）年には、貸付残高の対前年比率において 14.7 パーセント、貸付件数において 11.1 パーセントという、おおきな躍進をとげたのであった。

今様「カネのかいかた」と現代世相の行方

とはいうものの、消費者金融業界の周辺に問題がないわけではない。たとえば、「個人破産件数の推移」をしめした図 5-4-6 を参照すると、1986（昭和 61）年をさかいに、減少してきたその件数が、バブル経済の崩壊がきざした 1990 年代にはいって急増し、1993

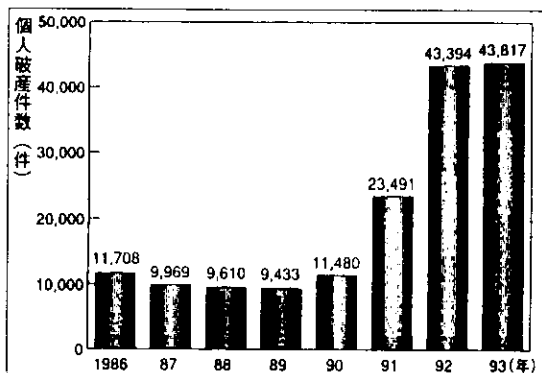


図 5-4-6 個人破産件数の推移

（最高裁判所『司法統計年報』）

(平成5)年には4万3817件にたっている。しかも、その80パーセントにちかい3万4649件は、消費者金融に関連した個人破産であることをおもうと、なお、すくなくならざる人びとが、「カネをかう」かのように「カネをかりる」ことに、的確かつ巧妙には適応しえていないことがわかる。

しかし、「世帯あたりの貯蓄総額の推移」をしめた図5-4-7を参照すると、その額は着実に高額化し、1993(平成5)年には1300万円にたっている。それにくらべると、おなじ年の、借入金のある世帯は、全体の46パーセントにすぎず、その平均借入残高も946万円であって、平均的な貯蓄額よりも低額である。しかも、借入先別の借入残高をみると、90パーセントが住宅金融公庫のほか、各種銀行からの借入であり、なかでも消費者金融からの借入は平均すると、わずか2万円にすぎないことがわかる。また、ふたたび図

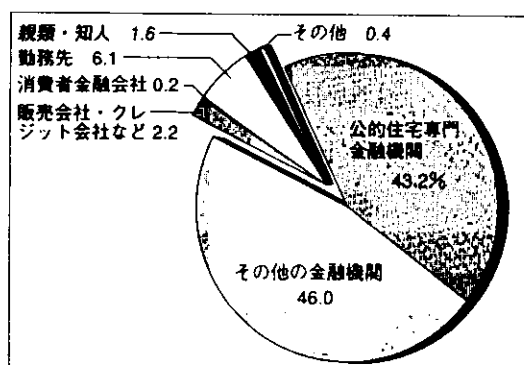


図5-4-7 世帯あたり貯蓄総額の推移

(日本総合研究所・編、1994『生活と貯蓄関連統計』貯蓄中央委員会)

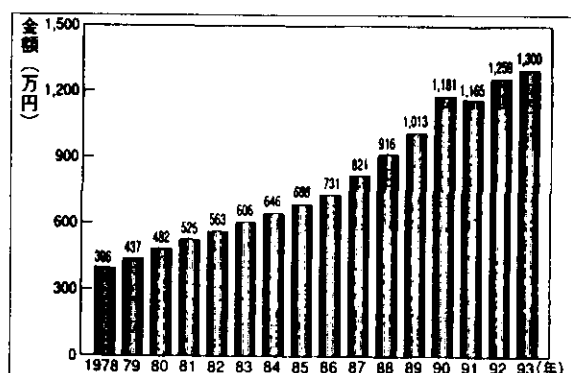


図5-4-8 借入金のある世帯の借入先別借入残高(1993年)

(日本総合研究所・編、1994『生活と貯蓄関連統計』貯蓄中央委員会)

5-4-5 を参照すると、病気・ケガなどの緊急事態や老後にそなえる生命保険・損害保険・年金貯蓄が増加傾向をたどっているほか、総貯蓄額のなかば以上が預貯金である。さらに図 5-4-8 を参照すると、ハイリスク・ハイリターン of 株式投資は着実に減少の傾向をたどっており、日本の一般生活者の「カネのかいかた」は、バブル経済からさめたのか、全体としては堅実に推移しはじめているようにみえる。

にもかかわらず、「家計消費の自由裁量性の増大」をしめした図 5-4-2、「耐久消費財の普及率の推移」をしめした図 5-4-3 でみたように、金銭支出の対象領域は、確実に情報化することによって、非物質性と自由裁量性をたかめつつあった。こうした条件のもとでは、家計消費における金銭需要が、むしろ、ぎゃくに際限なく増大する傾向がいちじるしくなる。ただ、従来はインフレと、将来の所得増加が期待される経済の高度成長という条件があったために、消費者信用への需要がたかまり、その貸出残高が急増しても、注意をばらうべき問題はすくなかったといえる。ところが、現在から将来にかけては、インフレ傾向が逼塞し、所得増加が困難になる。そこでは、非物質的で自由裁量的な金銭消費行動による利得の享受を、的確に個人の充足にむすびつける指向性が自覚的に追求される必要がある。そのことによってのみ、もはや後もどりしえない多様な「カネをかう」行為の一般化が、個人の充足の度合をたかめるプラスの役割をはたすことができる。

こうした可能性は、これとはすこしことなる文脈において、現代日本の生活文化と世相の領域で顕在化しつつある。たとえば今日、

「カネとヒマがあれば、なにがしたいか」

と質問すると、人びとのおおきが、

「国内旅行や海外旅行」

とこたえる。こうした状況のもとで、たのしくておもしろい、いわば情報体験をもとめる旅や観光のありかたが、おおきく変容するようになった。つまり、旅や観光といえば、従来は、

「職場単位の団体で温泉地におもむき、入浴のあとは大宴会をもよおし、やがて歓楽街にくりだして、翌日は二日よいのまま、ありきたりの土産をかってかえる」

というのが、その典型のひとつであった。それにたいして最近では、主として女性を中心に、趣味や嗜好性を共有する小グループや家族が、それぞれのもとめるたのしさやおもしろさを、みずから設計してでかける旅や観光が増加してきた。

それだけではない。ひろい意味での情報体験のあそびやたのしみに、おおきな変化が生

じている。それは、高度経済成長が絶頂をきわめた 1970 年代なかばに、いわゆる「カラオケ」装置が開発され、ひろく普及することによって生じた 3 つの変化に端をはしている。つまり、カラオケが普及したことで、

- ① 人前で歌などうたえない、はずかしがり屋の内気な国民であったはずの日本人が、きそって人前で歌をうたうようになり、その結果、
- ② きいてたのしむものであった歌が、うたってたのしむものに変化し、さらに、
- ③ その形式にかんするかぎり、「人前で歌をうたうというサービス」を提供するために、すすんで金銭を支はらうという、従来からみれば、一種の倒錯した経済行為が一般化した。

しかも、これとよく似た現象が、おなじ 1970 年代なかばに開業した各種カルチャーセンターなどで、絵画や陶芸や文章のかきかたなどをならった人びとのあいだにひろがっている。じっさい、絵画は「みてたのしむものから、えがいてたのしむものへ」、文章は「よんでたのしむものから、かいてたのしむものへ」と、あきらかな変化をしめしている。なかでも、自分史をはじめ、さきへのべた旅や観光の体験を文章につづるおもしろさやたのしさを、人びとのおおくが発見しつつある。そしてその結果、アマチュアが執筆した自分史をはじめ、小説やエッセーの自費出版が急増し、それが出版産業の市場の一部をささえるようになっている。

それは、従来の経済活動の常識からすれば、一種の倒錯だというほかない。なぜなら、プロの著述家にとって文章をかくことは、金銭を獲得する手段であるのに、アマチュアの自費出版の場合は、ときに印刷された書物が市場性をもつ場合も皆無ではないが、通常はたいいてい、それをかいた人自身が、みずから金銭を支はらって購入するからである。そこでひるがえってみると、モノやサービスが情報化する過程においても、ほんらいは「モノやサービスをかうための価値の媒体」であった「カネをかう」という行為が、ひろく一般化するという一種の倒錯が生じていたのであった。つまり情報（産業社会）化は、こうした倒錯を、さまざまなかたちで生じさせるとみるべきであろう。

そういえば今日、急速にひろがるインターネットのワールド・ワイド・ウェブ (WWW) のために、企業や個人がホームページを作成するには、莫大な支出が必要である。にもかかわらず、その金銭のみかえりは、しばしば微々たるものでしかない。それでも、多数の企業や個人がホームページを作成するのは、なにがしかの情報を発信しつづけることが、必要不可欠だとかんがえられているからであろう。ここでもまた、従来の経済活動をめぐ

る常識が、おおきくゆらいでいるのである。

そして最後に、さらにインターネットが普及すると、これまでの紙幣や貨幣を根拠として情報化した「カネ＝マネー」すらもが、あらたに到来しつつある情報化社会における経済上のとりひきには、ものの役にたたなくなることが予測される。その結果、いわゆる「電子マネーの時代」の到来が展望されているが、そうした制度上の整備がすすむと、モノと情報とカネは、これまで以上に情報化することによって、「カネをかう」といった行為そのものが、古典的な情報産業社会化の段階におけるカネをめぐる状況であったということになるかもしれない。こうした趨勢が、今後どんな運命をたどるのか。すでに現実、その将来の方向が垣間みえつつあるようにおもわれるが、この点については、本章の本文中に示唆した以外のことがらについては他日を期すことにしたい。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・流通産業研究所（編）、1983『消費者信用概説——クレジット社会の発展のために』リポート
- ・高田公理、1985『「流行」の社会学』PHP 研究所
- ・高田公理、1996「『カネ』を買う人々——金融商品と庶民」（上野千鶴子・編）『現代の世相①色と欲』小学館

第6部 定着と遊動——その相互関係と生活文化

第1章 定着と遊動の人類史と20世紀

第2章 「移民」という一般生活者の海外体験

第3章 あたらしい交通体系と生活様式の革新

第6部 定着と遊動——その相互関係と生活文化

20世紀という時代の特徴のひとつは、世界でも日本でも、一方において一定の場所への人間の定着生活を促進した近代的工業化が進行するとともに、他方においては人間の空間移動が日常化し、それがいちじるしく高速化した点にある。そこで第6部の主題は「定着と遊動」に設定される。

第1章 定着と遊動の人類史と20世紀¹

第1節 人間——旅行をする動物

現代社会において爆発するツーリズム

現代は、世界でも日本でも、きわめて多数の人びとが旅行をする時代である。たとえば1990年に、世界中で国境をこえて旅行をした人の総数は4億5000人にたった。1955年には、その数が2500人であったから、わずか35年のあいだに、18倍にふえた計算になる。話を日本にかぎると、その増加率はもっといちじるしい。第2次大戦の終結以降の日本において、はじめて海外渡航が自由化された1964（昭和39）年には、わずか13万人であった日本からの海外渡航者の数が、1990（平成2）年には1000万人をこえた。30年たらずのあいだに、じつに80倍以上に増加したのである。

同様のことは、日本国内の旅行にもあてはまる。たとえば、1990年前後に、

「大型休暇がとれたら何をするか」

という質問にたいする解答の第1位は「国内旅行」、第2位は「海外旅行」でしめられていた²。また、1989（平成元）年における、日本人ひとりあたりの平均旅行回数は2.39回で、宿泊数は4.97泊である。これらはいずれも対前年比で11パーセント、13パーセントの増加となっている〔総理府、1990〕。

¹ 第6部第1章のもととなる論文は最初、高田〔1992〕として『中央公論』に掲載され、その後、加筆訂正ののち、高田〔1993〕として公刊された。

² 余暇開発センター、1990「余暇需要に関する調査研究」による。

では、いったい「旅行」とは何なのか。いうまでもなく現代人にとっては、

「日常生活をいとなんでいる時空間をはなれて、どこかべつの場所へでかけること」

を意味する。そのさい、かならずしもふたたび、もとの場所にかえってくるとはかぎらないが、たいていの場合は、そのことが前提条件となっている。第6部第1章においては、もとの生活場所にもどってくる旅行を、主たる関心の対象とする。

それというのも、現代の旅行はしばしば「ツアー tour」の名でよばれるが、その語源をたどると、ラテン語で「回転するロクロ」を意味した *tornus* という語にまでさかのぼるからである。これを日本語に訳すと「周遊旅行」ということになり、もとの生活場所にもどってくるのが前提となっている。

そしてそれは、さらに敷衍されて「ツーリズム tourism」、すなわち、たのしみをもとめてでかける観光旅行、あるいは、それにサービスを提供する観光事業などを意味する概念を派生させる。こんにち、とりわけ日本人の旅行目的のなかば以上が「観光」であることをおもうと、現代とは、まさに「爆発するツーリズムの時代」だということができる。じっさい、さきにあげた日本人の年間の平均旅行回数のうち、51.5 パーセントが「観光目的」であり、これに「観光をかねた業務や帰省」をふくめると、59.0 パーセントにたつする。宿泊数にかんしても、43.5 パーセントが「観光目的」であり、「観光をかねた業務や帰省」をふくめると、51.7 パーセントにたつするのである〔総理府、1990〕。

人間はずっと旅行をしてきた

ではいったい、人間はなぜ旅行をするのか。そこで最初におもいだすべきは、およそ300万年とみつめられる人類史のほとんど、すなわち、およそ1万年まえに農業生産がはじまるまでの、形式的な算術にしたがえば299万年間は狩猟採集社会であった、という事実である。狩猟採集社会にいきる人びとの生活をささえるのは、周囲にひろがる大自然によって供給される野生植物の実や葉や根、野生の獣や鳥や魚、蜂蜜などにかぎられる。彼らは、今日的な意味では、いっさいの生産労働をこころみることなく、採集・狩猟・魚撈によって生活をなりたせていたのである。そして、採集・狩猟・魚撈によって生活をなりたせるには、よほど自然の再生産能力が卓越している場所をのぞき、ながい期間にわたって一定の場所で定着生活をつづけることは不可能である。消費された自然が回復するための時間が必要とされるからである。その結果、彼ら狩猟採集社会にいきる人びとは、自然資源をもとめて、たえることのない遊動をこころみる必要にせまられた。

このことは、現代の地球上にごくわずか、のこっている狩猟採集社会、たとえばボツワナのカラハリ沙漠にすむブッシュマンの社会にかんする知見によってもしめされる。彼らは、複数の核家族が集合した「バンド：band」とよばれる血縁集団を形成しながら、集団ごとに季節移動をくりかえすことによって、食糧をはじめとする生活資源を確保している〔田中、1977〕。

そこでの生活は、「毎日が旅行であるような生活」だというほかない。こうかんがえてみると、人類はまさに、これまた形式的な算術にしたがえば、その歴史の99.7パーセントを、定着ではなく、遊動のうちにすごしてきたということになる。それだけではない。農業生産がはじまったあとも、農業という生業形態に対立する今ひとつの生業形態として、乾燥地帯や草原地帯に成立した牧畜（パストラリズム：pastoralism）は、しばしば家畜の食糧である草をもとめての遊牧を必要不可欠とした。ここに彼らがノマッド（遊動民：nomad）とよばれた理由がある。

こうしてみると、人間は本来的に「旅行をする動物」であるのかもしれない。なにしろ旅行は、人類史のほとんどをしめる、人間の生活様式それ自体だったからである。ならば、定着生活を余儀なくされる現代人の心身の深層に、あらかじめ旅行への衝動がくみこまれていたとしても、不思議はあるまい。ただし、狩猟採集民や遊牧民たちが、自分たちの空間移動を「旅あるいは旅行」として、ましてや「観光旅行」などという概念でとらえていたというわけではない。くどいようだが、現代人の目からみれば「毎日が旅行」だったのだから、それはそのまま、彼らの日常生活そのものにすぎなかったのである。

旅と宗教の同型性——想像力の問題

では、現代人の旅行ずきは、農業革命以前の生活への憧憬がよみがえった結果なのだろうか。その可能性は、すてがたい魅力をもった仮説でありうる。しかし、ここではすこし異なった視点から、現代人の旅行への欲求の解明をこころみしてみる。

それは、人間という動物が、脳という巨大な情報処理器官をもっているがゆえに、際限のない想像力を発揮してしまう、という認識から出発する。はやい話が、人間以外の動物なら、空腹がみたされ、適度に快適であれば、のこりの生涯をほとんどねむることで費消する。それにたいして、それだけなら人間はすぐに退屈し、

「なにか、おもしろいことはないか」

とかんがえてしまう。そして、ゆたかすぎる想像力が、「現在のこの場所以外」への関

心と好奇心をよびおこす。同時に、人間の生につきまとう解決不能の不条理が想起される。無限の想像力は、永遠の時間と無限の空間に飛翔することを希求するのに、人間の生涯は有限の時間と空間のなかにとじこめられざるをえないという不条理である。ここに、有限の生命しかもちえない人間の、時間的永遠性にたいする憧憬が生じる。それは、人類文化にとってもっとも普遍的な要素のひとつである宗教がめざす、もっとも普遍的な目標であり、もっとも本質的な属性でもある。つまり宗教とは、有限の人生を永遠の時間につなぎたいとする人間のいとなみの総称なのである。

いっぽう、有限の空間においてしか生活しえない人間の空間的無限性にたいする憧憬は、かりに旅行と総称される行動様式をうみだす。それはときに、宗教的な行動様式である巡礼という形態をとり、またべつときには、日常生活に切断をもちこむ観光旅行としての形態をあらわにしながら、人びとを未知の時空間にさそう。

こうして宗教と旅が、無限の想像力をもつがゆえに、すぐに退屈してしまわざるをえない人間という動物にとって、もっとも根源的な行動様式のひとつでありつづけてきたことを仮説的に説明できる。ただし、そのためには衣食住をはじめ、生活の物質的基礎と潤沢な自由時間が保証されていることが必要条件である。そこで、現代の日本社会に目をやると、そこには物質的に充足された生活を保証され、よりゆたかな自由時間をあたえられつつある人びとが、大量に出現しつつあることに気づかされる。こうして宗教と旅行が、現代日本人にとって必要不可欠な生活回路のひとつとならざるをえないことが理解されるのである。

第2節 旅行の文化史

旅行の起源と近代以前の旅

ところで、狩猟採集民や遊牧民の遊動とはことなるなる、現代的な意味での旅行という習俗につながる行動様式は、いつごろ、どのようにして成立したのか。いうまでもなく最初の契機は、農業生産の成立の前後における定着生活のはじまりによってもたらされたとかんがえるべきであろう³。そこではじめて定着生活が日常となり、旅行が非日常とみなさ

³ 従来は、農業生産の成立が定着生活をもたらしたとかんがえる人がおおかった。しかし、たとえば日本の縄文時代などの場合、むしろ定着生活がさきに成立し、その結果として(つぎのページにつづく)

れるようになったからである。

しかし、それがそのまま、物質的充足とゆたかな自由時間に保証された、たのしみのためのいとなみとして成立したわけではない。定着生活をはじめた人びとにとって、初期の旅は、むしろ苦勞や苦痛や骨おりにみちた経験とみなされた。このことは、旅行を意味する英語の travel の語源が「勞苦・骨おりにあり、英語の「trouble=面倒なこと」やフランス語の「travail=勞働」などと同根であることからあきらかである。日本語の「旅=たび」⁴もまた、柳田 [1934] がしるしているように、

旅はタベ、即ちたまはれ又は下さいの意味であつて……旅する以上はたべたべと言つて歩かねばならず、乞食に近い生活をして居たものと思はれる。

では、そんな勞苦や骨おりにみちた旅行に人びとをかりたてた要因は、どのようなものであったのか。

その第1は、農業生産の成熟にともなって成立した国家が、国土の拡張や防衛のために派遣した軍隊の旅である。日本では、防人^{まもりびと}として北九州の防衛に派遣された東国の農民たちの旅行がそれにあたる⁵。同様の事例は、アレキサンダーの東方への大遠征をはじめとして、ユーラシア大陸各地の歴史のなかに、多数みいだすことができる。

第2は、それぞれにことなつた商品を交易するための商人の旅である。ふるくは、日本神話のなかの、海産物と農産物を交換する海彦山彦のものがたり、より巨大なスケールの交易としては、中国とローマをむすんだシルクロードなどにしめされるように、商人たちは、ある地域にあって、べつの地域にはない物資を輸送し、交易することによって富を手中におさめたのであった。

第3は、宗教的信仰と結合した旅である。身ぢかなところでは、四国 88 か所の霊場めぐりの旅行があるし、世界的に有名なものとしては、イスラム教徒のメッカ巡礼などがおもいだされる。ここでもまた、宗教は旅行と、不可分にむすびついているようにおもわ

植物栽培が開始されたとかんがえるほうが事実がちかいらしい [西田、1986]。そのため、ここではあえて「農業生産の成立の前後における定着生活のはじまり」という曖昧な表現をもちいた。

⁴ 柳田説にたいして、「たび」は「他火」、つまり「他人の火（で料理したたべものをいただくこと）」を意味したという折口信夫の異説もある。

⁵ 日本最古の和歌集である『万葉集』には、多数の「防人の歌」がふくまれている。それらのおおくは、異郷に旅行をした農民たちの望郷の歌となっている。

れる。のみならず、近世日本の伊勢まいりなどは、のちにのべるように、近代的なバック旅行の前駆的な形態としての役割をはたしたりもした。

第4は、探求のための旅行である。これには多様な動機や形態がある。中世ヨーロッパの職人たちが、すぐれた技術をまなぼうと師匠をたずねた徒弟修業のための旅行、コロンブスにはじまる近代的な探検旅行、日本でも、ことなつた習俗をもとめて、ひろい地方をあるきまわつた菅江真澄、旅に人生の真実をもとめた松尾芭蕉の旅行など、いずれも日常をはなれた異郷に、探検や人格形成をもとめた旅行であると一括できる。

そして第5は、保養や健康をもとめての旅行である。高度経済成長期以前の日本の農民たちが、農閑期を利用してころみた「泥やすめ、骨やすめ」の温泉湯治旅行、現代なら、欧米でさかんになり、最近では日本人のあいだにも、じょじょにひろがりはじめたリゾートでの保養をもとめる旅行、さらには、中国医学やインドのアユルヴェーダ医学の治療をうけるために、わざわざ遠隔地へでかける旅行などがこれにあたる。

しかし、いずれにしても旅行には、日常生活のなかではけっしてであえない自然や風物、人びとの生活や文化などにであいたいとする動機がかくされている。それがおそらく、旅行についてまわるトラブル（労苦や骨おり）をこえた魅力となって、多数の人びとを旅行といういとなみにかりたてる要因になるのである。

観光と近代的なバック旅行の成立

ところで18世紀なかば、イギリスで産業革命が緒につくと、イギリス貴族の御曹子たちが、一種の修学旅行としてフランスとイタリアを周遊する「グランド・ツアー」が普及しはじめる。その目的は

どこに出しても恥かしくない国際人の養成であった。なにしろイギリスは島国であるため、息子を国際的に通用するジェントルマンに仕立てあげるには、文化的先進国であるフランスやイタリアを若いうちに訪れさせることが必要不可欠だ（ったのである）〔本城、1983：pp.5-6〕。

道路事情もわるく、陸上の輸送機関が馬車にかぎられた当時であって、それはかならずしも快適な旅行とはいいがたかった。それに、期間も通常で1、2年、ながい場合には4、5年にもおよんだという。しかし、若者にとっては、みたこともない世界にあそぶ、刺激にみちた体験としてうけいれられたにちがいない。

やがて19世紀に、近代的工業化が本格化すると、イギリスを中心として工業原料や製

品輸送のための鉄道敷設がはじまり、鉄道駅の周辺に、商人のための宿泊施設が姿をあらわしはじめる。そこで今度は、ゆたかになったブルジョア階級のあいだに、鉄道と宿泊施設を利用した、もっぱらたのしみのための周遊旅行がひろがりはじめる。こうして近代的なツーリズムが誕生したのであった。

ところが、おなじころ、イギリスの労働者階級は、苛酷な労働と貧困のただなかで、ひたすら飲酒と賭博にあけくれていた。そんなとき、彼らに健全な娯楽を提供しようとかんがえる人物が登場した。のちに世界にひろくしられるクック旅行社を創立することになる、当時は牧師であったトーマス・クックである。彼は1841年、鉄道や食事や宿泊施設はもとより、旅行中の娯楽まで、あらゆる準備をあらかじめととのえて、労働者が禁酒大会に参加するための団体旅行を募集して、圧倒的な人気を獲得することに成功する。そしてそれは、1855年のパリ万国博に、16万人のイギリス人旅行者をはこぶ一大事業の成功をへて、すべての旅行手つづきをふくめた、あたらしい商品としての「パック旅行＝パッケージ・ツアー」の開発と普及、それにとまなうツーリズムの大衆化につながっていくのである〔荒井、1989〕。

しかし、これとよく似た旅行の形態は、ほんとうはイギリスよりむしろ日本において、より早期に成立したとかんがえるべきなのかもしれない。トーマス・クックより1世紀以上もはやい時期に、伊勢神宮におまいりする農民たちを「伊勢講」と称して組織し、食事や宿泊施設はもとより、神社におけるおはらいから土産物までをもパッケージにして提供する「御師かじ」という名の旅行仲介業者が成立しているからである〔神崎、1991〕。のみならず、17世紀の日本においては、伊勢参宮の農民や東海道を往来する旅人の数が、すでに100万人にたっていたという〔石森、1989〕。国土が250ちかい藩に分割され、交通事情が今日とくらべると極端にわるく、しかも全人口が1500万人程度であった当時の状況をかんがえると、日本こそは大衆的ツーリズムの先進国であったということもできるのである。

周遊と滞在——快楽と快適

このようにして日本では近世、ヨーロッパでは近代のはじまりとともに周遊旅行、あるいはツーリズム（＝観光旅行）という名の習俗が発生し、定着する。その背景には、経済的余剰の成立、交通事情の好転など、いくつもの要因が想定できる。しかし、なによりも大切なことは、近代的な社会意識におけるエキゾチシズム、いいかえれば「異国情緒への

あこがれ」が成立したという要因であろう。それは、こういうことである。経済や社会を近代化させる最大の要因は、工業生産の成立とその経済的比重の増大である。しかし、工業生産を可能にする資本の原始的蓄積は、重商主義経済によって契機をあたえられた。そして重商主義経済とは、ある地域に存在しない商品を、その地域にもたらし商業を重要視する。とすれば、そこでの富は、みしらぬ世界からだけ、もたらさるということになる。

それはいいかえれば、農業生産によって自足する経済社会においては、ある意味ではまったく不要な、

「この世界のかなたには、いったい何があるのか」

という好奇心にみちた関心をよびおこす。たとえばコロンブスが、大西洋の西のはてに香料諸島の存在を夢想したのも、重商主義経済のもたらした想像力だったのである。

ところで、いったん触発された好奇心は、前節の最後にのべた人間の際限のない想像力に作用して、

「この世界のはての、本来なら関係あらざるヒトやモノやコトへの関心」

を、連鎖反動的に発生させる。それが、人間を旅行にかりたてる。そして、旅行にでた人間は、そこでうつくしい風景や未知の風俗などであうことによって、よろこびやたのしみ、めずらしさやおもしろさをあそび享受する。やや図式的にすぎはするが、これこそは、差異化された刺激が人間の心身にもたらし「快楽」にほかならない。そして本論文の第1部第2章(p.67)における、ペイトソン [1979] からの、

(精神内に) 差異を生む差異はすべて「情報」である。

という引用を想起すれば、それはまた、感覚情報体験の1形態であることが判明する。いずれにしろ、さまざまな地域を訪問することを本来の目的とする周遊旅行のおおくは、主としてこうした動機に根ざしているとかんがえてよい。

ただ、他方において、あまり多様な非日常的刺激に過剰にさらされると、人間の心身は、快楽のはての疲労におちいる。そんなとき、それをやわらかにつつんでくれる環境や生活にひたる「快適」⁶がもとめられる。ゆたかな自然、ゆっくりながれる時間、いっさいの刺激を遮断して心身をやすめること——ここに、周遊旅行とは異なる旅行の形式が浮上して

⁶ 快楽と快適は、ある意味で正反対の条件がもたらす心身の状態である。「快楽」は「このましい刺激を極大化」したときに、「快適」は「感覚器官への刺激を極小化」したときに、それぞれもたらされる「心身のこころよさ」であるという作業仮説をたてれば、このことがよくわかるはずである。

くる。じっさい、かつて高度経済成長が本格化する以前の日本の農民たちがころみた、農閑期を利用しての泥やすめや骨やすめの湯治旅行、1930年あたりをさかいに、ひろく欧米人のあいだに定着し、現代の日本人のあいだにもじょじょに普及しはじめているリゾートでの滞在などは、こうした範疇にふくまれる旅行の形態である。

とはいえ、実際にあそびたのしまれる旅行は、これらふたつの理念型のあいだを往還しながら、人びとに快樂と快適のいずれをも提供する。ただ、そこに差異化された刺激とその遮断という、いわば正反対の要素が混在している点はわすれるべきではない。

第3節 日本人の旅行諸形態の変遷

観光旅行の普及と発展

日本では近世に、ヨーロッパでは近代に、それぞれ観光旅行という習俗が成立すると、その普及を促進する多様な現象が、それにもなって発生する。

たとえば日本では、旅行をするのに必要不可欠な道中絵図やガイドブックに相当する名所図絵などが、江戸時代中期あたりから大量に発行され、ひろく大衆に普及した。また、19世紀にはいると、十返舎一九『東海道中膝栗毛』をはじめとする道中記、八隅盧庵の『旅行用心集』など、人びとを旅行にさそい、あるいは人びとにそのノウハウをつたえる出版がさかんになってくる。くわえて、江戸・京・大坂の三都をはじめとする都市、旅行者が通行する街道の要所には、宿泊施設や飲食施設が整備され、彼らに旅の便宜を提供しはじめる。そして、人びとをひきつける社寺の御開帳に代表される各種イベントの開催、温泉場や門前町など観光地の整備が進行していった。

こうした趨勢は、明治から大正・昭和にうけつがれ、国土全体に旧国鉄（現在のJR線）網が、大都市周辺に私鉄網が、それぞれ整備されるとともに、いっそう顕著になっていく。ただし、近代以降に日本が体験した戦争、とくに第2次大戦の期間は、不要不急の旅行がいましめられ、戦後も国民生活に経済的余裕のなかった時代には、観光旅行が逼塞せざるをえなかった。そういう意味において、1955（昭和30）年あたりから本格化する高度経済成長の結果、国民の経済生活がよりゆたかになる過程において、たのしみをもとめる旅行が大衆化したことによってはじめて、今日の「爆発するツーリズムの時代」がきりひらかれたということになる。そしてそれは、鉄道や船舶といった従来の輸送手段が、自動車や

航空機といったあたらしい輸送手段に転換する過程でもあった⁷。

こうした時代の推移を、たとえば当時の新聞は「レジャーブーム」という新語をもちいで、概略つぎのようにつたえている。

今年の〈夏山〉シーズンには、しめて224万7000人の登山客が運ばれた。日航国内線の年間乗客数も今年はじめて(100万の)大台を超え、去年より6割もふえ、〈空かけるレジャー〉時代の幕あけを思わせる〔『朝日新聞』1961年12月23〕。

このようにして1960年代にはじまった観光旅行の大衆化は、その後も逼塞することなく、いよいよさかんになるばかりである。そのことをものがたる事象を、ここでは経年的にいくつか列挙しておく。

1964(昭和39)年:東海道新幹線が開通した。海外渡航が自由化された。東京オリンピックが開催された。この前後に東京を中心に、オークラ、ニューオータニなどのホテルが開業して、第1次ホテルブームとよばれた。

1965(昭和40)年:名神高速道路が開通した。このころ、人員輸送において自動車が鉄道を凌駕する(モータリゼーションの本格化)。ジャルパックの募集がはじまった。

1970(昭和45)年:大阪千里丘陵でエキスポ70が開催された。この前後に、大阪プラザ、東京の京王プラザなどのホテルが開業して、第2次ホテルブームとよばれた。旧国鉄のディスカバージャパン・キャンペーンがはじまった。

1975(昭和50)年:(第1次石油ショックのあと)沖縄で海洋博が開催された。

1980(昭和55)年:「女の時代」が本格化して、女性旅行者が増加した。京都ブーム。

1983(昭和58)年:東京ディズニーランドと長崎オランダ村が営業を開始した(以後東京ディズニーランドには1億人以上が入場した)。

1985(昭和60)年:「円高・ドル安」がはじまり、やがてそれが定着する。それ以後、海外旅行者数が急増した。

1987(昭和62)年:「総合保養地域整備法(=リゾート法)」が成立・施行された。

1990(平成2)年:海外渡航者数が1000万人を突破した。あい前後して地方博覧会が全国各地で開催された。『ガリバー』はじめ、多数の旅行専門雑誌のあらたに発行された。

⁷ この点についての考察は、第5部第3章においておこなわれる。

観光開発がはらんでいる両義性

旅行が大衆的にさかんになると、それは、観光客となる人びとの生活や意識、彼らがおとずれる地域をはじめ、社会全体にさまざまな影響をおよぼす。たとえば、人間が旅行することは、人類学者のファン・ヘネップが研究した「通過儀礼」を体験することに似ている。周知のように通過儀礼は、「分離・移行・再統合」の過程をたどるとされるが、旅行という行為にかかわる「出発・道中・帰宅」は、これと同型のインパクトを旅行者に刻印する可能性がある。また、みしらぬ土地をおとれる旅行者（ゲスト）と、それをうけいれる土地の人びと（ホスト）とのあいだには、財の交換のほか、さまざまな関係が成立する。それはしばしば、観光客をうけいれる地域に、さまざまな影響をおよぼす。

たとえば、観光客がおとずれる地域には、宿泊施設の建設をはじめとする観光開発が、いろんなかたちでこころみられる。そのさい、しばしば多額の資本投下がともなうため、社会資本が整備され、雇用が促進されるなどの結果がもたらされる。そこから、地域経済が活性化することが期待される。しかし、こうした利点とともに、資本を投下した大企業への地域経済の依存度が增大するだけでなく、当初に期待されたほどの経済的利益が生じないばかりか、損失のほうがはるかにおおきいといった場合もおこる可能性がある。

経済だけではない。政治的なインパクトとして、観光開発によって地域の人びとのほこりがたかまり、地域にリーダーシップをつくりだし、国家の中核との政治的関係をふかめるといった利点ももたらされる場合もある。しかし同時に、それはその地域の国家中核、国家経済への従属といったマイナス面を顕在化させる要因ともなる。

よく似たことは、社会的・文化的・生態的な局面にもあてはまる。

たとえば、社会的には、観光客の行動やふるまいの影響をうけることによって、地域の人びとの生活が近代化するといった利点ももたらされる。しかし他方においては、犯罪の増加、人びとの物欲指向の増大、伝統的な宗教の軽視や社会規範の変質、さらには貧富の差の増大にともなう社会的な軋轢の発生などのマイナス面が顕在化したりもする。

文化的には、観光客の到来によって、近代化の過程で軽視され、消滅しつつあった工芸や芸能などの伝統的文化が復活し、さらに観光芸術など、あらたな文化の創出が刺激されるといった利点を期待することができる。しかし他方においては、ココライゼーション（Coca-Colaization）やディズニフィケーション（Disneyfication）などとよばれる、文化の画一化がすすみ、観光客むけの享楽主義がひろがる危険性もある。

さらに生態的には、観光客がすてるゴミの増加、植物相や動物相の破壊、自動車ののりいれにともなう大気汚染、農林業や漁業の変化、観光客がもたらすあたらしい病気の蔓延などのマイナス面が予想される。ただし、これもまた、観光客がゆたかな自然にであい、そこで自然についての知識を身につけることをとおして、地域の環境保全にプラスのインパクトをもたらす可能性をはらんでもいる。

このように観光旅行の普及、観光開発の進行と観光産業の隆盛は、観光地域とそこにすんでいる人びとにたいして、両義性をおびた「双刃の剣」として作用する。ここに、旅行や観光を社会・文化現象として研究する立場の立脚点のひとつがある。

ネオ・トラベリズム——あたらしい旅のかたち

いっぽう、観光旅行の大衆化は、観光旅行そのもののありかたを多様化させ、変質させる。これまで、観光旅行の普及と発展をささえてきたのは、旅行にかかわるいっさいのサービスをパッケージにした、いわゆる「パックスツアー」の開発であった。しかし今日、海外体験をかさねた年輩者、なみのパックスツアーにあきたりない若者などを中心にして、たとえば「秘境への旅」が人気をあつめるようになった。そうしたパックスツアーを主催している旅行社のパンフレットの1事例を紹介すると、「より遠く、より高く、より深く」といったよびかけとともに、つぎのような旅行企画が掲載されている。

「パキスタンから標高五 5000 メートルのクンジェラブ峠をこえてタクラマカン沙漠へぬける 24 日間の旅」

「アルジェリアのサハラ沙漠を 5 日間、自炊しながらテントにとまって、ひたすらあるきつづける旅」

「ワニのいるニューギニア、ジャングルの川を、現地人のガイドをたよりに、ちいさなボートでさかのぼる旅」

そして、かたわらには、それぞれ、

「高山病の危険があるので、健康不安の人はおことわり」

「宿泊はテントか露天です」

「ホテルで、水や湯がでないことがあります」

などという注記がそえられている。そこには、ゆたかで便利になった現代の日本社会では、けしてであえない危険（の感覚）、そこで遭遇する面倒や困難、つまりはさまざまなトラブル、そんな条件のもとに生活している秘境の民族とのであいを、ただ「たんにみる」

だけでなく、みずからの五感をもって「実際に体験してみたい」とかんがえる人びとの欲求の発露がみえかくれする。それは、近代という時代が発明した、すべての手はずを手がけるに便利にはこぶことをめざす、近代的ツーリズムの大衆的普及のはてに、あらたに登場しつつある、かりにネオ・トラベリズムとでもよべそうな旅行の形態を示唆している。

第4節 現代日本における旅行とその周辺

非日常性、自然、文化、そして人間

前節の最後に、現在から将来にかけて、人びとの関心をひきつけることになるかもしれない、あたらしい旅行の形態を展望した。では今日、いったい彼らは旅行に、なにを期待しているのか。それをしめしたのが、つぎの表6-1-1である。この調査は、日本国内における宿泊観光レクリエーションを想定しているようであるが、それでも、ここから人びとが旅行一般に期待しているもののいくつかが感知できるであろう。

表6-1-1 宿泊観光レクリエーションの旅行先での行動の意向

区分 事項	1988 (昭和63年) の調査時点における意向	1986 (昭和61年) の調査時点における意向
	(%)	(%)
・温泉にはいる	52.3	③42.6
・うつくしい自然景観をみる	50.4	①52.0
・のんびりとくつろぐ	45.8	②48.2
・めずらしい料理をたべたり、ショッピングをする	44.9	④40.1
・史跡・文化財(博物館、美術館)などを鑑賞する	32.0	⑤27.4
・家族といっしょにあそぶ	27.2	⑥26.7
・おおぜいでにぎやかにすごす	17.2	⑦17.5
・スポーツ・レクリエーション活動をする	13.6	⑧15.7
・旅行先の土地の郷土色ゆたかな行動(工芸品づくりなど)に参加する	10.3	⑨8.1
・旅行先での、みしらぬ人とのあいや交流	9.0	⑩6.6
・まつりなどのもよおしをみる	8.2	⑪6.5
・その他、わからない	0.7	⑫1.2

注：① 資料：総理府広報室「余暇と旅行に関する世論調査」[1988年11月]

② 複数回答である。

③ ○内の数字は順位をしめす。

そこには、まず「非日常性への期待」がよみとれる。「温泉にはいる」「のんびりとくつろぐ」ことは、ストレスにみちた、現代都市における多忙な日常生活の陰画そのものである。「家族といっしょにあそぶ」「おおぜいでにぎやかにすごす」こともまた、現代日本の都市生活においては、非日常的な色彩をあらわにしめす。そして、こうした非日常性にいどりをそえるのは、これまた現代日本の都市からはうしなわれた「ゆたかな自然」であり、ふだんはであうことのない「文化」である。「うつくしい自然景観をみる」「史跡・文化財（博物館・美術館など）を鑑賞する」などといった選択肢が、そのことをしめしている。

もちろん、かならずしもそれは、モノやコトにだけ関連しているとはかぎらない。もし可能なら、彼らは、そこで土地の人びととふれあい、交流することをねがってもいる。その数値は、それほどおおきくはないが、「旅行先の土地の郷土色ゆたかな行動（工芸品づくりなど）に参加する」「旅行先でみしらぬ人とのあいや交流をする」「まつりなどのもよおしをみる」といった選択肢が、このことを暗示している。

いまひとつ、わすれてはならないのが「食」と「買物」と「スポーツ・レクリエーション」である。こうしてみると、観光旅行とは、旅行のあらゆる要素を、その過程にふくんだ、文字どおり総合的な旅行だとかんがえることができる。本章第2節において、近代以前に人びとを旅行にかりたてた要素を、①戦争、②商業、③宗教、④探求、⑤保養、という5項目に整理したが、観光旅行はこれらのうちの「戦争」をのぞくすべての要素を、なにがしかのかたちではらんでいるからである。

同時に、ここで「戦争」という要素が排除されていることは、ある意味で、きわめて重要である。なぜなら、観光旅行がひろく普及し、発展するためには、世界の「平和」が前提条件として実現されなければならないからである。じっさい、1990（平成2）年における天安門事件のさいに中国への訪問者が激減し、翌1991年における湾岸戦争の影響で、きわめて多数の航空便が欠航したことなどが、このことを陰画的に、しかし雄弁にものごとっている。そのかぎりにおいて、観光産業はまた、平和産業でもあったということになる。

情報産業社会における観光とその意味

その観光産業が、こんにち急速に発展し、おお幅な市場規模の拡大を体験しつつある。

たとえば、WTO（World Tourism Organization：世界観光機関）⁸の推計によると、1990年における世界中の観光産業の市場規模は約2兆ドルにたっしている。これは、同年における世界ちゅうの軍事費の2倍以上にあたる金額なのである。

その結果、かつてILO（国際労働機関）が、1987年の年次報告にしるしたように、
「21世紀の人類の基幹産業は、ひろい意味での観光産業になるであろう」

という予測が、いよいよ現実味をおびつつある。そしてこのことは、航空産業をはじめとする各種輸送業はもとより、旅行を幹旋するサービス業、ホテルやリゾートを経営する多数の宿泊業や飲食業、土産物となるファッション製品や食品などにかかわる製造業や流通業、各種のコンベンションやイベント事業など、ほとんどあらゆる産業分野に、おおきな影響のおよぶことをしめしているのである。

では今日、何故このように、観光関連作業が急速、かつ巨大に成長するようになったのか。その背景には、欧米と日本の先進国を中心として、地球上の相当数の人口が、生存に必要な物質・エネルギー的条件を充足することによって、本章の冒頭ちかくでのべたとおり、みずからの、ある意味でゆたかすぎる想像力をもてあましはじめたからである。そのさい、筆者は、

「ゆたかすぎる想像力が『現在のこの場所以外への関心』をよびおこす」

という意味のことをのべた。それが、人びとを旅行にかりたてるのである。このことにまちがいはないとおもう。しかし、人間は旅行以外にも「ゆたかすぎる想像力」を充足する、芸術・芸能・デザイン、学術・技術、スポーツなど、多様な文化を、そのうけ皿として開発してきた。そしてそれらは、ひろい意味での「情報」として人間にあそばれている。

ただし、かつて衣食住をはじめとして、生存を維持する物質・エネルギー的条件が、かならずしもじゅうぶんでなかった時代には、その確保のための活動が、人間のいとなみの大部分をしめざるをえなかった。そこでは情報もまた、産業社会をささえる装置と制度に作用して、その効率をたかめる機能を発揮することが期待された。

ところが、近代的工業化、とくに日本の場合には、1955（昭和30）年以降に進行した高度経済成長によって、生存を維持する物質・エネルギー的条件が充足され、未曾有の「ありあまる、ゆたかな社会」が現実化した。その結果、さまざまな情報は、すでに本論文の

⁸ ツーリズムの振興、研究・調査などの活動をおこなっている国連機関のひとつで、本部はマドリッドに所在する。

第1部第2章においてくわしく論じたように、産業社会の制度と装置に作用して、その効率をたかめるだけでなく、直接に人間の感覚器官に作用して、その心身を快楽や快適にみちびくことを期待されるようになった。

そこでの食物は、カロリー源としてではなく、みてうつくしい、たべておいしい「情報の媒体」として消費され、衣服は、物理的刺激から心身を保護する物質としてではなく、その表層に付加された「ファッション情報の媒体」として購入される。むろん、あまたある言葉や図柄や映像や音響などの情報メディア、すなわち書籍や絵画やビデオやCDもまた、それらがもたらす心身の充足ゆえに人びとに需要されている。

このように、ひろい意味での情報だけが巨大な市場性をもちうる社会は「情報産業社会」とよばれるにふさわしい。そこでは、つねにあたらしい情報の発見と創造が、政治的・社会的・経済的・文化的にも、きわめて重要な意味と役割を演じる。そして、それを実現するうえで、観光旅行がおおきな役割をはたすのである。

それは、こういうことである。芸術・芸能・デザイン、学術・技術、スポーツなど、あたらしい文化、いいかえれば、あたらしい情報の創出には、創造主体の独創性もさることながら、その固定観念をゆさぶる、異界からの刺激が必要不可欠だからである。だからこそファッション・デザイナーは、しばしば秘境の民族をおとずれ、彼らのコスチュームのデザインに挑発されながら、あたらしいデザインの創出にむかうのである。

これと同様のことは、民族芸術から刺激をうけつづける現代芸術、先端的な科学・技術者の相互刺激のなかからあたらしい知恵とアイデアをつむぎつづける現代の学術や技術にも、そのままあてはまる。しかも今日、それは、かつてのようにごく一部のエリートによってではなく、圧倒的多数の大衆によってになられるようになった。ここに、ひろい意味での観光旅行が普及し、ツーリズムが爆発する理由の一端がある。

ここにきて、あらためて「観光」旅行それ自体の意味がといかえされる。中国の古典『易経』〔高田ほか、1969〕には、つぎのような文言がしるされている。すなわち、

国の光を観る。もって王に賓^{ひん}たるに利^りろし [p.207]。

ここで「国の光」とは、その国の「ゆたかな自然、人びとのゆたかな生活、そこに誕生したすぐれた文化」を意味している。では王は何故、それらを「みて」こななければならないのか。それは、自国にかえったあと、「他国の光をみた」ことでゆたかになった王自身が、今度は、みずから「国の光」を「しめす」ためにほかならない。観光の「観」には「みる」と同時に「しめす」という意味がはらまれていたのである〔高田ほか、1969：p.205〕。

それが今日では、王だけでなく、一般に「大衆」とよばれる多数の人びとのいとなみになってきた。つまり、かつて定着生活を余儀なくされた農業と工業の時代のはてに到来した、情報（産業社会）化が進行する現代という時代は、観光や旅行にともなう「創造的な情報の創出」といういとなみが、広範かつ重要な意味を持つ時代なのである。それは、農業革命以前の、遊動が日常であった人類の生活の記憶と、それへの憧憬の表現であるような気がしないでもない。ただし、かつてのそれは、食糧をはじめとする、物質とエネルギーをもとめての遊動であった。それにたいして現代人の遊動は、さまざまな意味での情報をもとめての遊動である。そういう意味において、現代は、インテリジェント・ノマッド、知恵とアイデアをもとめる「あたらしい遊動民の時代」としてとらえることができる。

適切なる「もうひとつのツーリズム」

こうして、情報生産の重要な装置として浮上してきた多様な電子機器と電子テクノロジー、21世紀の地球社会の命運を左右する「いなおりをはじめた」世界の諸民族文化、そして、人類文明の将来にとって最大の課題のひとつになりつつある地球環境問題などを、いわば統合的にとらえる契機が、旅行ないしは観光という、従来は周縁的であるとかがえられてきた人間行動、あるいは現象によってもたらされる可能性が増大する。

ところが、現実には世界規模で爆発するツーリズム、旅行や観光の隆盛は、いよいよその規模を巨大化させながら、他方においては、経済的・政治的・社会的・文化的・生態的など、さまざまな局面に弊害をもたらしはじめている。そこでは急速に、ともすれば資源浪費的で、「南の諸国」にたいして収奪的で、享楽主義的で、伝統文化や自然生態系にたいして破壊的なマスツーリズム（大規模観光）の現状をみなおし、よりのぞましい旅行や観光、いわば「適切なるツーリズム」のありかたを模索する必要がたかまっている。

こうした要請にこたえるには、純粋に学問的な立場を堅持したツーリズム研究が必要不可欠であるとおもわれる。本論文の第6部第1章は、いっぽうにおいて、こうした要請にこたえる端緒をきりひらこうとするところみのひとつでもあるといえる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・荒井政治、1989『レジャーの社会経済史』東洋経済新報社
- ・本城靖久、1983『グランド・ツアー——良き時代の良き旅』中央公論社
- ・石森秀三、1989「旅から旅行へ」（守屋毅・編）『現代日本文化における伝統と変容⑥』

日本人の遊び』ドメス出版

- ・ 神崎宣武、1991『物見遊山と日本人』講談社
- ・ 西田正規、1986『定住革命』新曜社
- ・ 総理府・編、1990『観光白書（平成2年版）』大蔵省印刷局
- ・ 高田公理、1992「ネオ・ノマド（遊動民）の時代——想像力の復権」『中央公論』（7月号）中央公論社
- ・ 高田公理、1993「旅行文化の発展——人類史的視点から」（井上俊・編）『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社
- ・ 高田真治ほか訳、1969『易経（上）』岩波書店
- ・ 田中二郎、1977『ブッシュマン』思索社
- ・ 柳田國男、1934『文化運搬の問題』（1970「文化運搬の問題」『定本柳田國男集（第24巻）』筑摩書房）

第2章 一般生活者の海外体験——「移民」を中心に¹

第6部第1章においては、人類史における定着と遊動をめぐる、みじかい考察をへたのち、主として観光旅行という形式に注目して、20世紀という時代の世界と日本における、その隆盛の過程と、そのことが現代日本の生活文化と世相にたいしてもつ意味を考察した。これにつづく第2章の課題は、近代いこう今日までの日本の一般生活者の海外体験を、主として「移民」に焦点をしぼって、その変容の過程をえがきだすことにする²。

第1節 日本人にとっての海外体験の諸類型

近世から近代をへて現在にいたるまでのあいだに、みずから外国にわたった日本の一般生活者の海外体験は、おおむね、①漂流、②移民、③植民、④従軍兵士と「からゆき」、⑤観光旅行、⑥若者の放浪、といった要因によるものに類型化することができる。そのうち、この第6部第2章においては、主として「移民」に焦点をあてて、その歴史をたどりながら、そこにうっしだされた日本人の生活文化と世相の変容をとらえなおす。

そこで最初に注目しておくべきは、室町時代から江戸時代初期までの約300年のあいだ、倭寇や南蛮貿易などを背景として、朝鮮半島や東南アジアへの移民がさかんにおこなわれたという事実である。ところが、その後、徳川幕府が鎖国政策を施行したために、日本の一般生活者の海外体験は、漁民や商人などの「漂流」にかぎられることになった。そして彼らは「鎖国の禁」をおかした一種の犯罪者として、幕府のとりしらべとうけることになる。そのさいの調書やききがきの記録が「漂流記」と総称されて、こんにちにつたえられている。なかで代表的なものを列挙すると、つぎのようなものがある。

¹ 第6部第1章のもととなる論文は最初、1988年12月21日から3日間にわたって開催された国立民族学博物館主催のシンポジウム「日本人にとっての外国」（特別研究「現代日本文化における伝統と変容Ⅶ」に該当する）において発表されたのち、高田 [1991] として公刊されている。

² それは、1988年12月21日から3日間にわたって開催された国立民族学博物館主催のシンポジウム「日本人にとっての外国」において筆者にあたえられた課題が「（明治・大正・昭和の3代にわたる）日本人庶民の海外体験」であったからにほかならない。

- ・『^{だつたんひょうりゅうき}韃靼漂流記』：松前への航海のとちゅうに、沿海州から清国へ漂流した越前商人58人の記録である。漂流の時期は1644（正保元）年から翌1645年にかけての1年間である。
- ・『^{ほくさくせんりやく}北槎聞略』：伊勢の漁師であった大黒屋光太夫が、江戸へ廻米を輸送中に漂流し、カムチャッカ半島からロシア各地を漂泊したさいの記録である。時期は1782（天明2）年から1792（寛政4）年にいたる10年余におよんだ。その経験は、桂川甫周の手で全12巻の大冊にまとめられている。
- ・『^{ふなおとにっき}船長日記』：名古屋の督乗丸が江戸からの帰航中に漂流し、北アメリカ沖で救助されたのち、カナダ・アラスカ・カムチャッカ・ウルップ・クナシリ・エトロフをへて帰国した。漂流の時期は1813（文化10）年から1817（文化14）年である。池田寛親によって編集された。
- ・『万次郎漂流記』：土佐の漁師が太平洋上で漂流し、アメリカとメキシコをおとずれたのち帰国した。時期は1841（天保12）年から1852（嘉永5）年である。

これらの、いわゆる漂流記は、きわめて興味ぶかい内容をつたえているが、ここではその内容にはふれない。ただ、鎖国時代にも、かなり多数の一般生活者が外国体験をしたことだけは、たしかな事実なのである。その鎖国令が、1866（慶応2）年にとけた。海外渡航禁止令が廃止されたのである。これにともなって日本人の、近代的移民の歴史が端緒につく。じっさい、わずかその2年後の1868（明治元）年には、「元年組」とよばれた153人の契約移民がハワイにむけて出発した。これを先駆として、南北アメリカをはじめとする諸外国へ、太平洋戦争の勃発にともなって移民それ自体が中断されるまで、合計すると70万人ちかい日本の一般生活者が、海外への移民をこころみることになる。この数字は、1935、6（昭和10、11）年当時の日本の総人口7000万人の、およそ1パーセントに相当する。そして第2次大戦後にも、移民事業が再開されることになり、いよいよ経済の高度成長が本格化しはじめた1966（昭和41）年にいたるまで、ブラジルを中心として、大量の日本人が海外への移住をこころみたのであった。

もちろん、明治時代以降の日本の一般生活者の海外体験は、移民に限定されるわけではない。たとえば、日本の大陸アジアへの帝国主義的侵略がはじまり、植民地にむけての植民が非常にさかんにおこなわれた。その数は、1938（昭和13）年の段階において、千島・樺太、中国東北地方、朝鮮半島などを合計すると、120万人ちかくにおよんでいる。また、20世紀における数度にわたる戦争のさいには、おおくの軍人や軍属、あるいは「からゆき」

の名でよばれた慰安婦など、多数の民間人が外国の地にわたった。その結果、ILO（国際労働機関）の統計資料によると、第2次大戦の終結直後に、いわゆる「ひきあげ」によって帰国した日本人の数は、軍人が311万人、民間人が318万人、これらを合計すると619万人にのぼったという。

それだけではない。第2次大戦後は、すでに第6部第1章でみた海外への観光旅行のほか、若者たちによる海外への放浪などがさかんにおこなわれる。とくに海外渡航が自由化された1964（昭和39）年以降、当初は年間13万人にすぎなかった年間の海外渡航者数が、1990（平成2）年には1000万人をこえた。しかも、そのなかには、1961年に発売されてベストセラーになった小田実『何でも見てやろう』あたりを原型とする、海外での「放浪」や「自由定着」とでもよぶべき体験が、若者を中心に相当数ふくまれている。さらに今日では、すでに「万のオーダー」をはるかにこえる外国への留学生、外国に駐在するビジネスマンや官吏など、日本の一般生活者の外国体験の機会はいちじるしく増大している。

第2節 近代日本の移民たちがたどった道

明治元年のハワイ契約移民から「排日移民法」まで

ところで「移民」とは、いったい何であろうか。日常的な感覚からすれば、「永住するつもりで他国にうつりすむこと」を意味するであろう。しかし、明治維新以降の日本社会における移民は、かならずしも「永住すること」を意味しなかった。そのことを、加賀[1879]は、「移住」という語をもちいながら、つぎのように説明している。

夫れ移住には三種あり、（国籍移動をともなう）帰化移住、（植民地への）殖民移住、及（一時的な）出稼移住なり [p.16:（ ）内は筆者]。

これらのうち、本来の移民を意味するのは「帰化移住」である。ところが、たとえば柳田[1930]が指摘するところによると、近代日本における移民の動機としては、それよりもはるかに「^{でかせがいじゅう}出稼移住」としての性格のほうが濃厚であったという。すなわち、

出稼人が移住者となつて、遂に帰郷する機会が無かつたにしても、故郷は其送金を当てに暮してゐたのである。……故郷は海外で奮闘した人々の安住の場所、墳墓の地であつた故にその汗の結晶は故郷に送られたのであらうが此風は永く真の移住を阻害し勝ちであつた。……移住は出稼ごと全く異り、多くは一家が故郷を離れるので、人家の代替りやその流儀といふ一つの刺激が必ず伴ふ為に人は之を不幸と考へたが、実は多くの移住は亦

事実出稼ぎの心持で行はれたのである [p.348]。

このことは、さきにのべた、いわゆる元年組のハワイ契約移民の場合など、きわめて典型的なかたちであらわれている。というのも、おりから伝来の捕鯨産業が衰退し、かわって砂糖・コーヒー・米など農業がさかんになりはじめたハワイ諸島に、農業労働者としてわたった彼らは、3年後に全員が帰国の途についている。言葉がつうじない、労働条件がきびしいなどの理由があったにしても、全員が帰国した背景には、柳田 [1930] の指摘する「出稼ぎの心持」が作用していたのだとおもわれる。

ところで、ふつう移民は、本国における食糧難や経済的貧困、宗教や政治に関連した迫害、戦乱からの脱出などが、最初のひきがねとなってはじまる場合がおおい。近代の日本における移民もまた、こうした動機を、たしかにその内にはらんでいた。しかしながら、それは同時に、明治維新政府の、いわば国家主義的な政策の一環でもあった。そのことを、つぎの記述がものがたっている。

此時に際して国家の執るべき政策は有余の労力を分かちて海外に働かしめ内は産業と労働者との関係を緩和すると共に外に移民を利用して発展の地歩を占むるにあらざるべからず、即ち移民は通商貿易の蓄積生産したる資本及物資を本国に逆流せしめて経済上に於ける位置は宛も本国に附属するが如き観あらしむべし [平島、1887 : p.12]。

じっさい、政府が主導した第1回官約移民の927人が、ハワイをめざして日本を出発したのは、この文章がしるされる2年前のことである。それはちょうど、今野ほか [1986] の記述によれば、1877 (明治10) 年の西南戦争がもたらしたインフレ経済がこうじて、

商業の不振、税金の多額滞納、失業、破産、夜逃げ、自殺、流浪が激増し……、(農村が) 凶作に見舞われ、「赤貧」を洗うような農民が群れをなし(ていた) [p.68]。

時代のできごとであった。そのかぎりにおいては、国家主義的な移民政策をうけいれた日本の一般生活者がわにも、それをうけいれざるをえない状況が現実に存在していたということになる。そして、こうした状況は、やがて時代が20世紀にうつっても、おおきくは変化しなかった。そのことを吉村 [1902] は、つぎのようにえがきだしている。

広島、山口、熊本地方の細民にして日夜汲々として農業に従事するも一年尚且十円の貯蓄をだも為す能はざる輩は其隣保知友に聞き或は家財を売却し或は高利に負債し漸くにして旅費を整へ全家挙つて渡航を企つるもの(がある)」 [p.219]。

いっぽう、日本国内の経済的貧困とはうらはらに、あるいは、それがきわめて深刻であったがゆえに、日本人移民のおおくは、きわめて勤勉に労働にはげんだ。じじつ、1890

年代ともなると、「ハワイの日本人から内地に送金する金額は、当時毎年二百万円」〔ハワイ日本人移民史刊行委員会、1964：p.145〕にたったというし、渡航を希望する者の数も、ひきつづき増加の一途をたどった。こうした状況のもとで、1894（明治27）年、外務省が「移民保護規則」³を制定する。そして、ハワイ移民のとりあつかい（斡旋）を、すべて民間会社に委譲することになったのである。

こうしてハワイ移民の斡旋が民間会社に委譲された結果、ハワイ諸島に流入する日本人のなかには、売春婦や博徒や新聞記者くずれなどの「不良の徒」の数がふえた。しかも、おりからの日清戦争に勝利をおさめた日本人が、ハワイ在住の中国人と衝突するといった事件が頻発した。そのため、1897（明治30）年にはハワイの税関が、日本人移民の上陸を禁止するにいたる。じょじょに日本人移民への排撃がはじまったのである。それが翌1898（明治31）年、ハワイ諸島がアメリカ合衆国に併合されると、いっそうはげしくなった。こうして1900（明治33）年には、契約移民制度が廃止されるにいたり、それ以後は自由移民だけがおこなわれるようになる。それでも日本人移民にたいする風あたりはつよく、1908（明治41）年になると、日本人の北アメリカへの移民を自粛する「日米紳士協定」の締結をしいられ、すでに移民をはたした日本人が家族や親類縁者をよびよせる、いわゆる「よびよせ移民」をのぞく移民が、ほぼ全面的に禁止されるにいたった。

にもかかわらず1910年代ともなると、ハワイ在住の日本人の数は10万人を突破し、ハワイからの転航組をふくめ、アメリカとカナダの在留邦人も増加する。こうした日本人移民の急増は、アメリカとカナダの両国に、深刻な経済・社会問題をもたらすことになった。それは、日本人移民が、劣悪な環境のもとにおかれながらも、みごとな適応能力を発揮して、たかい出生率を維持し、低賃金のもとでも勤勉さをうしなわなかったことなどによって、労働市場における攪乱要因となったからである。のみならず、彼らヨーロッパ渡来の白人にとって、日本人移民の文化や心理には、理解しがたい側面がすくなくなかった。そのうえ、日本人移民のがわには「でかせぎ」意識がつよく、現地の市民社会になじみにくかった。こうした日本人移民の印象が、人間を人種で差別しがちなアメリカの白人たちの意識を刺激し、かつまた日露戦争を契機に澎湃としておこった、いわゆる「黄禍論」などをとおして増幅されていったのである。

こうした状況のなかで1924（大正13）年、アメリカ合衆国は、日本人の帰化を禁止す

³ この規則は、その2年後の1896（明治29）年には、名をかえて「移民保護法」となる。

る「移民割当法（＝排日移民法）」を制定する。その結果、移民をこころざす日本人のアメリカへの渡航には、きびしい制限がくわえられるようになった。

ハワイ・北米から南米・満蒙・太平洋へ

ただ、それでも当時の日本社会には、なお海外への移民を必要とする要因が存在しつづけていた。そのことをめぐって福島〔1915〕は、つぎのようにのべる。

わが国の人口は一年に就き六十万づゝ増加している。この過剰となりつゝある人口は兎に角、どこかへ排除しなければならない。

ところが、前項でみたように、ハワイ諸島をはじめとして、アメリカやカナダへの移民は、いよいよ困難になりはじめていた。そのため当時のジャーナリズムには、日本人移民の、海外における生活のしかたや適応の方法に省察をうながす論調の記事が多発する。そのなかで、もっともはやい時期のものは、つぎのようにしている。

単に貯蓄の要のみを知りて、起業の利、永住の計を弁へざるの移民は、例へば路頭の岩窟を穿ちて、而かも湧出し来たる玉泉の清きを掬はざるにも比す可きか。……要するに其の成功の根拠とする所は、資本と云はんよりも、教育と云はんよりも、寧ろ永住の念夫れのみ候〔田夫、1903：pp.49-50〕。

1910年代になると、こうした主張は、さらに増加する。たとえば鎌田〔1914〕は、「移民の根本問題」という表題の論文において、

移民先の土地に土着して参政権を持て〔pp.38-42〕。

と論じ、永田〔1918〕は、「失敗せる日本の移民生活」という表題の論文において、概略、つぎのようにのべている。

これまで異民族に接触したことのない日本人は、植民の訓練が少しもないばかりか、権利や義務の観念に乏しく、それがアメリカでは「人間（＝アメリカ人）」と「移民」との喧嘩をもたらしている〔pp.72-76〕。

あるいは、デンバー在住だという茅原〔1919〕などは、

日本人の定住本能は排外本能をもたらし、それが戦争本能から逆上本能、翻っては謙遜本能につながっている〔pp.8-56〕。

といいはなつ。しかしながら、それでも日本人移民の文化的な体質は、その後もほとんど変化しなかったようである。そのため、ハワイ諸島をふくむアメリカやカナダへの日本人の移民は、いよいよ困難の度をました。その結果、移民先を変更する以外に、移民事業

を継続する方途が、ほとんどなくなってしまった。ちょうどそんなとき、ヨーロッパ大陸で第1次大戦が勃発する。その結果、それ以前にはさかんであったヨーロッパ人のブラジルやペルーなど、南アメリカ諸国への移民がきょうに減少した。これをさいわいに、日本人の移民が、今度は南アメリカをめざすことになる。

むろん、それ以前にも、南アメリカをめざす日本人がいなかったわけではない。1899（明治32）年、ペルー移民をめざす日本人が出発したとき、すでに南アメリカには日本人移民が、その足跡をのこしていた。日米紳士協定によって、北アメリカへの移民が制限された1908（明治41）年には、笠戸丸に乗船したブラジルへの最初の移民団791人が到着している。こうしたうごきが、第1次大戦の勃発にともなって、1918（大正7）年に急増した。しかも、その4年後の1923（大正12）年に関東大震災が発生すると、震災の被災者を中心に、外国への移民を希望する日本人の数がさらにふえる。こうして1920年代なかばから1930年代にかけて、移民の数が極大化する時期がやってきた。

しかしながら、これらの、あらたに移民先として浮上した地域は、かならずしも日本からの「でかせぎ移民」に適した地域ではなかった。そのことを柳田〔1925〕は、つぎのように説明している。

国にはそれぞれ生活の標準があって、労働の報酬率の如きもそれに基づいて自然にきまる。外国から来て働いて金を残さうとするには、それより低い暮しを為し得るに限る。早い話が朝鮮人は内地に来て貯蓄を為し得るが、内地から朝鮮に行つても単なる労働では金を残すことが出来ない。従つて今の日本人がそんな国を捜すとなれば、カリフォルニアへでも行くの他はない。……（ところがそれが不可能になったのだから）第二の選択は二つしか無い。自分等よりも生活の低い国に往つて、何か別の方法で金を儲ける工夫をするか、さうでなければ、従来の出稼式を改めて、土着してしまふ気になるかの他はない〔pp.79-80〕。

にもかからず、南アメリカへの移民にさいして、彼ら移民をめざす個々の日本人の意識が劇的に変化したり、政府によってあたらしい施策が講じられたりするということは、ほとんどなかった。その結果、南アメリカへの移民は、従来のハワイや北アメリカ以上に、きびしい状況に直面することになる。この点について詳細な事実を列挙して論じることは、ここではしないが、たとえばブラジルのバルボーザに入植した日本人移民のひとりであった尾関生〔1926〕がのこしている、つぎの一文は、彼らが体験した辛酸を赤裸々にものがたっている。すなわち、

誠に当耕地は付近にも聞へたる不健康なるやにて実に新来者の家族悉く病に犯されざるは無く、死亡者の数亦夥しく一家三四人を亡くしたる者珍しからず、為に耕主よりの前借額も嵩み、償還にも数年の努力を要するを以って、以上の状態例年ならずとするも、而も生活費を補ひ借財を償還し、母国よりの抱負を実現せんには幾歳月を要すべく、結局移民は棄民に終らざるを憂俱さる、殊に年不惑を過ぎたるものは此感最も深し、果たして移民？ 棄民？ [ページ番号消失]。

このように、日本からの南アメリカ移民たちが辛酸をなめている状況のもとで、1941(昭和16)年、太平洋戦争が勃発した。その移民への影響は悲惨なものとならざるをえなかった。つまり、

連合国側のブラジルのなかにあった日本人は敵国人となった。……敵国の日本人移民は、三人以上の集会を禁じられたり、資産凍結されたり、やっと築きあげた土地から追われたりもした [今野・藤崎、1984 : pp.315-316]。

しかし同時に、こうした状況そのものが、日本人移民をして、やむをえずブラジル社会に定着させ、同化させる条件となった。ブラジルの日系人社会は、いってみれば、退路をうしなった日本人移民たちによって形成されたのである。

じっさい、太平洋戦争が勃発すると同時に、日本とブラジルの国交は断絶した。それにともない、ブラジル移民もまた中止される。しかし、それに先だって日本は、1931(昭和6)年の満州事変以来、中国の東北地方と、それに隣接する内モンゴル地方にむけて、「満蒙開拓」という名のもとに、第2次大戦が終結するまでのあいだに、27万人にたつすることになる膨大な数の農業移民をおくりはじめていた。それだけではない。グアム島やサイパン島をはじめとする太平洋諸島、フィリピン、マレー、シンガポールなどの東南アジア諸国へも、すでに明治以来、いわゆる「南進」の名のもとに、すくなからざる移民がおくりこまれていた。ただ、太平洋戦争の勃発によって「南進」は「満蒙開拓」と同様、あきらかに帝国主義的な侵略としての意味をもつようになった。そのかぎりにおいて、ハワイ諸島や南北アメリカへの移民とは、かなり性格の異なるものであったといえる。それは、第2次大戦後にハワイ諸島や南北アメリカへの移民がたどった道をふりかえってみれば、あきらかである。そのことについて今野ほか [1985] は、つぎのようにしている。

「棄民」とよばれた南米移民は、辛酸をなめ犠牲をはらいながらも、いまはしっかりと根をおろした。北米移民もしかりである。しかし、「南洋」とよばれたこの地では、かれらは根をはることなく途絶えた。その要因はいろいろ考えられるが、やはり大きな要因は

太平洋戦争にあったであろう [p.258]。

第3節 移民から海外移住・海外旅行へ ——第2次大戦後の日本における海外体験の変質

食糧難時代からブラジル移民の終焉まで

それから10余年、第2次大戦後の日本の国土は焦土と化していた。産業は疲弊し、大都市のやけ跡には闇市がたった。国民の衣食住生活は、どん底に低迷せざるをえなかったのである。そんな「祖国」にむけて、合計619万人とみつられる「ひきあげ者」のむれが帰国の途についた。その結果、日本社会の食糧事情は、いよいよ逼迫の度合をたかめていく。このように終戦直後から朝鮮戦争が勃発する1951（昭和26）年あたりまでは、国土の復興が、かならずしもはかばかしく進行することはなかった。

そこで、ふたたび移民が話題にのぼるようになる。たとえば1947（昭和22）年には、日本海外移住協会が設立されて、機関紙『海外移住』が創刊されている。その後、1949（昭和24）年には、衆議院の「人口問題に関する決議」の第3項目として、

将来の海外移民に備えてその研究調査の準備を行なうとともに関係各方面にその援助をあらかじめ懇請すること。

という一項がくわえられる。そして1950（昭和25）年には、南アメリカのコロンビアにむけて、戦後第1回目の移民が出発することになった。また、翌1951（昭和26）年には、ブラジルのバルガス大統領が、「5年のあいだに、5000家族の日本人移民の入国を許可する」むねを言明する。これをうけて1952（昭和27）年、サントス号に乗船した第2次大戦後にはじめてのブラジル移民が出発した。その背景には、田原 [1952] がつたえる、当時の日本社会のつぎのような状況があった。

アト十年すると人口は一億をこえるが、今でさえ年々二千万石も主食が不足なのに、一
体十年後はどうして切り抜けるつもりか。（アメリカの考え方によると）、

- 一、工業を復興し、貿易を盛大にし、その利益で主食を輸入して行けば不安はない。
- 二、産児を制限し、ヒニンの道を教え、これを合法化することにより人口をへらせば良い。

だが、皮肉にも最近貿易は不振のどん底になつて倒産相つぎ、（庶民は）たくましくも双生児などを生んでる有様である。……やはり、日本の生きる道は、大量海外移民の急

速実現以外にはない [p.40]。

しかし、こうして海外に移民としておくりだされた一般生活者は、戦前の移民とは微妙に異なる状況に直面することになった。たとえば第2次大戦後、ブラジルの場合には、すでに親類縁者が移民先に定着していて、それをたよって渡航する「よびよせ」移民が、かなりの数にのぼった。あるいは、アジアの諸地域への移民の場合は、これら発展途上地域の開発にともなう、主として農業に関連する技術者として渡航するケースが増加した。そこには、当時の新聞が、

長らく海外への窓を鎖されていた日本人にとって、一条の明るさをもたらすものであろう [『朝日新聞』1951年10月15日]。

とするしたように、戦前の移民にくらべると、多少は将来への希望が繋げる雰囲気はただよっていたようである。というのも、そのわずか5年後には、さらにつぎのような言葉によって、当時の移民がかたられるようになるからである。

「アプレ移民はけしからん。ジャングルを開拓しようというのに、ラジオや蓄音器をさげてくるとは何事だ」

これは日本移民の〈成功者〉といわれる人にわたしが会ったとき、しばしばきいた言葉である。かれらが日本を出るころには、ラジオや蓄音器はまだ大衆の生活に入っていないかったのであるが、今はどこの家でもラジオは生活必需品のようにになっている [大宅、1956: p.97]。

そこには、たしかに戦前の移民が直面した悲壮感はない。しかも戦後は、日本政府が移民の保護と奨励に本格的にのりだそうとする局面もあった。しかし、皮肉なことに、このころからブラジルへの移民希望者は減少傾向をあらわにしめし、それにかわって現地の産業開発に協力する要員の発展途上国への渡航が、おお幅に増加しはじめた。こうした要請にこたえるために1964（昭和39）年、日本政府は海外移住事業団法を制定する。それはちょうど、おりから自由化された海外渡航の波にのって、その最初の年に13万人の日本人が、海外旅行にでかけようとする時代であった。こうして日本の一般生活者の、移民とはことなる海外体験の大衆化に端緒がきりひられる。

そのきっかけのひとつは、フルブライト交流計画の資金をうけて、アメリカに留学していた小田実が、帰国の途上にヨーロッパからアジアをひろく放浪した体験を記録した著書『何でも見てやろう』を上梓し、それがベストセラーになったことにあった。ちょうどそんな時期に、東宝食堂がアメリカに進出するために、それをになう人材として3人のわか

い女性を募集したところ、3000人の希望者が殺到したという。そのことを、女性週刊誌に掲載された無署名〔1961〕の記事は、つぎのようにつたえている。

バラ色の夢を海のかなたにかけて……海外渡航熱は若い女性達の間蔓延し、外国憧憬の嵐は、心の中を吹きまくる〔p.78〕。

こうして明治初期から、えんえんとつづいてきた日本の一般生活者にとっての「海外体験といえば移民か戦争」を意味するほかなかった時代がおわりをむかえた。そして、ブラジルにむけての最後の移民船が出発した1966（昭和41）年をさかいにして、移民は、その名も「海外移住者」とよびかえられるようになり、大量の「海外旅行者」がアメリカやヨーロッパをはじめ、世界各地に旅だつ海外旅行の大衆化の時代がやってきた。

海外渡航の自由化と〈海外体験熱〉時代の始まり

こうした動向を、1960年代と1970年代のジャーナリズムのなかにさぐると、一般生活者が海外体験をめぐるイメージすることがらの変容がみえて、きわめて興味ぶかい。たとえば、無署名〔1967〕は、つぎのような「男の夢」についてしるしている。

「一生に一度でいいから冒険をしてみたい」「学歴なんか関係なく、実力をためす場所
でハダカの生活をするのが、男の夢というもんですよ」

——大正末期の不況時代には、満州、支那へ若者の目は向いたが、天下太平の現在は中南米大陸が絶好の場所とみられている〔p.30〕。

そこには、第2次大戦の終結後、わずか10年余にして、戦前の日本国内のまずしさからの脱却をめざして南アメリカのブラジルや中国大陸をめざした一般生活者の移民とは、あきらかにことなる、高度経済成長が本格化しつつあった時代の日本の若者たちの、きわめて遊戯的な動機と精神がうつしだされている。そして、上記の記述につづけて、こうしたところみを成功裏にはこぶための「5つの条件」がしめされている点が興味ぶかい。それらを列挙すると、①技術を身につける、②土着化する、③現地の日本人社会にとけこむ、④語学を身につける、⑤文化と「血」の交流をする〔無署名、1967：p.31〕ことが大切だということである。

こうした傾向が、1970年代になるといっそう顕著になる。その最初の年は、じつは6年まえの東京オリンピックの開催につづいて、戦後2番目の大規模な国際的イベントである「万国博覧会・エキスポ70」が開催された年であった。これが、当時のわかものをはじめとする日本の一般生活者の海外旅行への憧憬を強烈に刺激する。当時の週刊誌や月刊誌

は「日本脱出」というスローガンをかかげて、彼らの海外移住や海外旅行への欲求を、文字どおり「あおりたてる記事」を掲載しはじめた。その表題のいくつかを紹介すれば、つぎのようになる。

- ・「日本脱出〈耳〉より情報／腕1本で大成功／海外就職求人ガイド」〔無署名、1972a：pp.48-50〕
- ・「私たちは海外で、りっぱに働いてまーす！」〔無署名、1972b：pp.158-163〕
- ・「いま注目の〈日本脱出〉のテクニックを教える」〔無署名、1973〕中とじページ
- ・「年収700万円に殺到したサラリーマンたちの移民願望」〔無署名、1974：pp.12-15〕

さらにその後、1970年代も後半をむかえると、今度は、実際に海外で活躍している日本人を紹介する記事、いちべつしたところでは脳天気きわまりない海外移住をめぐるハウツー記事などが増加していく。煩雑をさけるために、ここでは1978（昭和53）年に刊行された雑誌の記事から、そのタイトルだけを列挙しておく。

- ・「奴隷からブラジルのコットン王にのし上った松原武雄」（初出掲載紙不詳：高田〔1991：p.67〕より再引用）。
- ・「ジャズ・ピアニストから実業家へブラジルで〈人生〉を収穫する慶応ボーイ小沢和義」（『週刊文春』2月16日号）
- ・「アメリカの土壌に根をおろした日本人の心——ハワイ日系人の暮らしに接して」（初出掲載紙不詳：高田〔1991：p.67〕より再引用）。

ところで、ここに引用した表題の記事を掲載した雑誌が発行された1978（昭和53）年とは、じつは最初のブラジル移民をのせた笠戸丸が日本の港を出発してから、ちょうど70年目にあたる記念の年であった。そのため、この年のジャーナリズムには、ブラジルをはじめとする日本人の海外移住の歴史とその明暗をめぐる多数の記事や論考が、たくさん登場する。そのすべてに言及することは不可能だが、なかでひとつ、70年間におよぶブラジル移民の過去と現在をめぐって、きわめて的確な評価をくださった、「われら新世界に参加す」という表題の講演記録〔梅棹、1978〕がのこっている。その内容を、5項目にわたって整理すると、つぎのようになる。

- ① ブラジルへの日本人移民は、そこでの「新文明の形成」に参加した。という意味において日本からの移住者たちは、「お客」でもなければ、「わりこんできた侵入者」でもない。
- ② ブラジルの日系人社会において、1世のしめる比率はしだいにちいさくなり、2

世、3世の活躍がめざましくなりつつある。

- ③ (当時の現状をみると)「多元的なブラジル」から「統合されたブラジル」へと、ゆっくりした、しかし着実な変化が進行している。したがって、当然のことながら日系人は、日本人ではないのであって、ブラジル人にほかならない。
- ④ 日本の文化的伝統のなかに、ブラジルの発展に役だつような部分、たとえば勤勉、知的活動性、緻密な頭脳、科学的合理主義、繊細で優美な芸術的感覚、高度な組織力などがあるとすれば、それらをおおいに役だててこそ「統合」の実がみえる。
- ⑤ (このようにして)現代の問題は「移住者をとおしての日本・ブラジル関係」から「日本・ブラジル関係をとおしての移住者の問題」へと移っている [pp.11-24]。

なお、5項目の最後の⑤の指摘は、現代の世界における移民や海外移住の問題をかんがえるにさいしては、たんに「異文化接触の問題」としてとらえるのではなく、社会の存立それ自体をささえる「装置・制度系としての文明現象全体」を展望する視点からとらえなおすことが大切だということを示唆している。そこで最後に、このことに関連させながら、近代から現代にいたる日本の一般生活者の海外体験の変容を、おおまかに総括しておく。

第4節 日本の一般生活者の海外体験の類型と推移 ——形式・対象となる外国・動機などをめぐって

最初の視点は、海外体験を「定着型」と「遊動型」に類型化することからはじまる。すると、移民や植民は定着型に、漂流や旅行は遊動型にふくまれるとみることができる。そこでひるがえってみると、17世紀における鎖国のはじまり以後の、江戸時代における日本の一般生活者の海外体験は、もっぱら遊動型に限定されていたことがわかる。それが、明治維新以降、第2次大戦の終結までのあいだは、主として定着型に席をゆず

る。このことは、「在外日本人数と出国者数の推移」をしめした図6-2-1のグラフにあきらかにしめされている。すなわち、1935(昭和10)年以降、在外日本人数が100万人をこえるのにたいして、年間の出国者数は、わずか1万2000人でいどにまで減少するからである。

ところが、太平洋戦争が勃発すると、在外日本人数は、いっきょに5分の1以下に減少し、かわって年間の出国者数が急速に増加する。そしてこうした趨勢は、日本の高度経済成長が本格化する1960(昭和35)年まで持続する。ぎゃくにいえば、このころ(1960年)

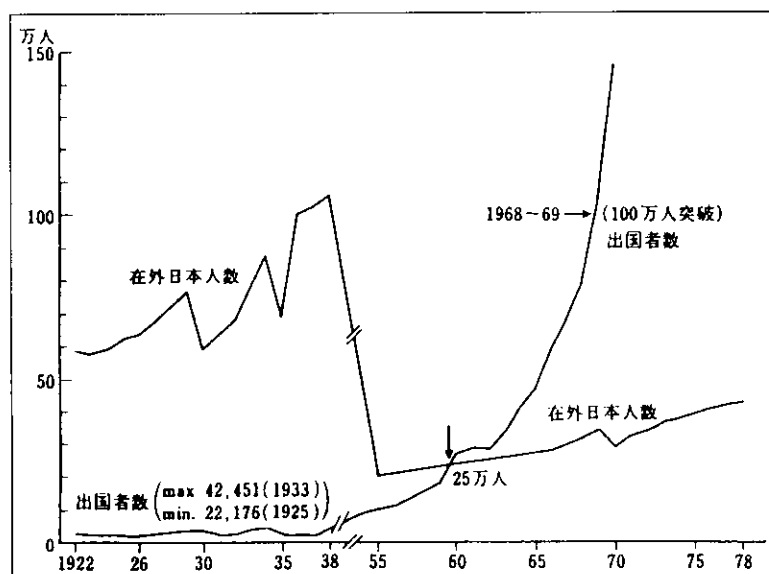


図 6-2-1 在外日本人数と年ごとの出国者数の推移

(資料：『昭和国勢総覧』)

をさかいに、年間の出国者数が急速な増加傾向をしめし、当然、在外日本人数を凌駕するとともに、ついに1990(平成2)年には、1000万人の大台にたつのである。

こうしてみると、第2次大戦と高度経済成長期をさかいにして、日本の一般生活者の海外体験の主流は、すくなくとも比率のうえからいえば、定着型から、きわめて大衆的な遊動型へと推移したのだといえる。ただ今後は、個人にかわって企業が海外への定着をこころみると同時に、すきかってな遊動のはてに、海外の気にいった場所に定着をこころみる個人の数、それなりの増加の傾向をしめすであろうことが予測される。

ところで、これらのうちの定着型だけに注目すると、ひとつの興味ぶかい現象に気づかされる。このことをあきらかにするために、定着型から移民だけを取りだして、移民の対象となった地域ごとの年間の海外渡航者数の推移をしめした図 6-2-2 を参照すると、移民の対象となった地域の中心が、明治時代に最初の日本人移民がめざしたハワイ諸島から、やがてアメリカ本国やカナダにうつり、さらに1920(大正9)年代以降は、ブラジルを中心とした南アメリカ諸国にうつっていったことがわかる。

いっぽう、移民をふくめた、より広範な意味での在外日本人数全体の地域別分布の推移をしめした図 6-2-3 によると、第2次大戦の終結以前は、アジア地域に定着していた在外日本人数が、数量のうえで南北アメリカに定着していた在外日本人数を凌駕していた。ところが、その後、50万人以上をかぞえたその数が、第2次大戦の終結をさかいに、いっきよに

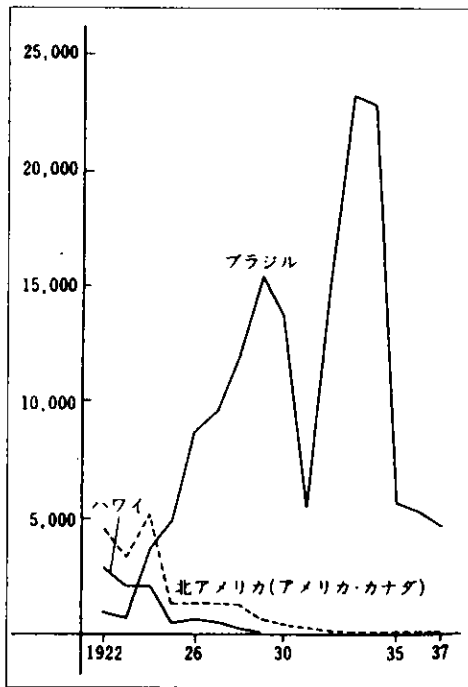


図 6-2-2 地域類型別の移民渡航者数の推移 (資料:『昭和国勢総覧』)

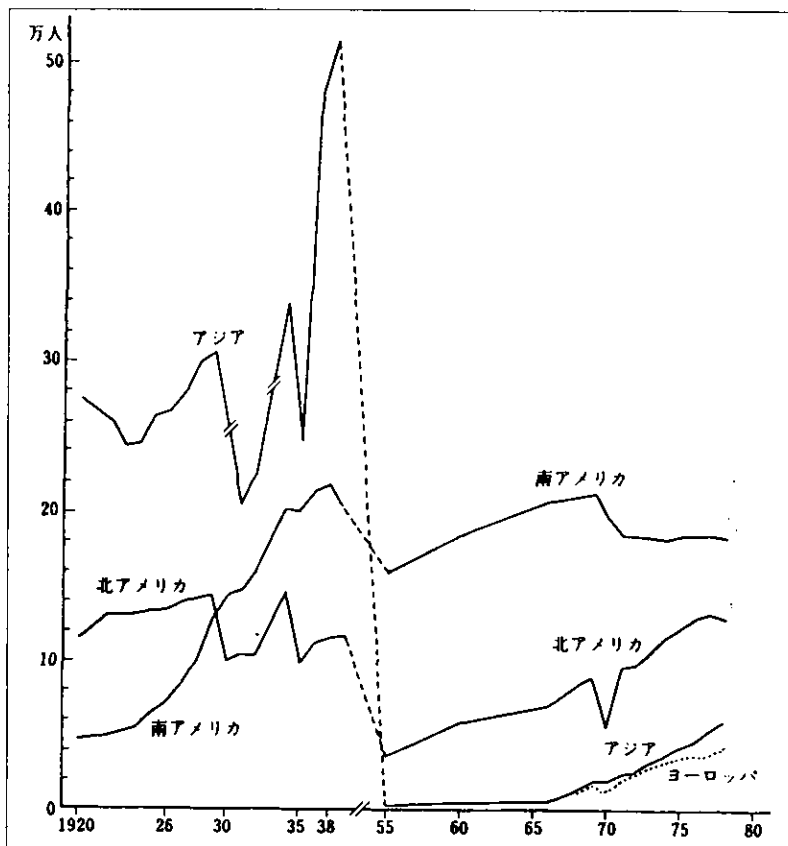


図 6-2-4 在外日本人数の地域別分布の推移 (資料:『日本国勢総覧』)

に数千人にまで激減するのである。

このようにみえてくると、アジアにむけておこなわれた日本の帝国主義的侵略にともなって、そこへの移住と定着をこころみた一般生活者は、その結果である第2次大戦によって、まさに雲散霧消させられたことがわかる。それにたいして南北アメリカへの移民たちは、現地への定着と同化を、それなりに実現したのであった。そして今日、高度経済成長の成功にともなって、ふたたびアジア地域とヨーロッパ地域に定着する在外日本人の数が増加しつつある。こうして日本の一般生活者の海外への定着は、その対象地域を多様化させながら、数量のうえでも増加の傾向をたどりつつけている。

では何故、日本の一般生活者の海外体験は、これまでにみてきたような変転と推移のあとをたどることになったのか。その背景には、日本社会をささえる産業をめぐる条件の変化と、それに関連して海外体験をめざす動機の変化がある。

たとえば江戸時代における、船にのる機会のおおかった漁民や商人を中心とする「漂流」は、たまさか発生する偶発的な事故を契機として余儀なくされた海外体験であった。それにたいして、明治時代の初期から高度経済成長期までつづく「移民」は、まずしい経済状態をしいられた農民層を中心とする日本の一般生活者が、いわば「私的ないきのこり」をかけてこころみた海外体験であった。しかもそれに、最初は国家の人口政策が、くだっては軍事上の必要が、それぞれ関与することによって、大規模な移民と植民が海外にむけておくりだされたのであった。

これにたいして第2次大戦後、とくに経済の高度成長がはじまると、急速に「移民」は「海外移住」へとその名称をかえていった。当然、その動機も、たんなる「私的ないきのこり」から「日本を脱出して異文化を体験したい」という欲求に変化する。そしてその結果として、日本の一般生活者の海外体験は「定着型」から「遊動型」へと、その主流をうつしていった。いうまでもなく、その受け皿は、私的な観光旅行、若者を中心とした放浪の旅などである。ただし、他方において、そこに個人にかわる企業の海外への定着と、放浪のはての個人の自由な定着をともなっていることは、すでにみたとおりである。

こうした日本の一般生活者の海外体験の変容は、それに参与する職業階層や人びとのめざした目的など、さまざまな要因の変化をともなってきた。定着型にそくしていえば、高度成長期以前の海外体験の中心が、農業をささえる労働力を提供することを目的としていたのにたいして、それ以後の中心は、技術提供や技術指導を目的とする移住や海外進出企業の業務に関連した駐在などに变化した。また、遊動型にそくしていえば今日、その目的

のほとんどは、異文化社会にあそび、そこでめずらしい商品を可能なかぎり有利に購入しようとするショッピングなどに集中している。あるいはまた、最近になって、「老後を海外でたのしもう」という動機にささえられた高齢者の海外移住が、すこしずつふえている。しかし、いずれにしろ現代日本の一般生活者がめざす海外体験の背景には、あそびやたのしみを追求する動機が濃厚なのであって、その点において、かつての労働と生産のためにこころみられた移民や植民とは、おおきなちがいがあるといわなければならない。

こうして、近世から近代をへて現在にいたる、日本の一般生活者の海外体験をめぐる考察が、いちおう完結する。そこで最後に、移民として海外をめざし、それぞれの土地に定着し、同化した、それゆえに「日本人」ではなくて「日系人」とよばれるようになった人びとのがわは、いったい、どのような日本文化の変容を体験してきたのか。この問題をかんがえるために、ブラジルの日系人社会についてしるした『外国人になった日本人』〔斎藤、1978〕という書物を参照しながら、彼らの文化的なアイデンティティをめぐる考察の端緒としたい。

そのひとつは、日系人とはいっても、すくなくとも姿かたちをながめるかぎりには、それほど現代の日本人とことなるわけではない。それは遺伝形質がおなじであるという事実によ来する当然の帰結である。ところが、2世から、さらに3世ともなると、身ぶりやしぐさ、衣食住生活や価値観、つまりは文化的特質が、まるで日本人とはことなり、すっかりブラジル人になってしまっているという。斎藤〔1978〕のなかから、いくつかの記述をぬきだすと、「〈日本式+ブラジル式〉食生活」「しなもつくれぬ日系娘」「二世三世はしゃがめない」「酔態をさらすのは無頼の徒」など、文中にちりばめられた表題の文言がおもしろい。それは、もはや文化的には、彼ら日系人が、すでに日本人とはことなる「日本人ダッシュ」とでもよぶべき存在に変化していることを意味する。

いまひとつは、上記の事実とはうらはらに、とくにブラジルにおける日系人の産業別・職業別の人口構成などを参照すると、ブラジルの全体社会にくらべて、その近代化と現代化への適応の度合が、いちじるしく先行的であるという点である。すなわち、移民の当初はほとんどが農業労働者であった日系人が、2世から3世の代になると、主として教育水準のたかさが作用して、その大部分が第3次産業をはじめとする、技術的・管理的な、あるいは情報処理を主たる業務とする知的な職業に進出しているのである。しかもその進出の度合は、ブラジルの全体社会の水準を、おお幅に凌駕するにいたっている〔斎藤、1978：pp.24-27〕。ということは、ブラジルの日系人社会に、高度経済成長以来の本国におけ

る日本社会そのものの変化が、そのまま、うつしだされているということでもある。それは、本国の社会と、その一部が移民して外国で形成した社会とのあいだに「並行進化」とでもよぶべき変化が、同時的におこっているということではないか。日本の一般生活者の海外体験という問題意識から出発した論考は、さらに広範な文明学的な視点からの再検討につながる方向に展開していく可能性を提示しているようにおもわれる。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・茅原華山、1919「教へられざる同胞移民の現実を暴露する」『日本評論』（3月号）
- ・田夫（北米加洲にて）、1903「米国殖民だより」『中央公論』（10月号）
- ・福島安正、1915「海外へ海外へ」『学生』（2月号）
- ・ハワイ日本人移民史刊行委員会『ハワイ日本人移民史』布哇日系人連合協会。
- ・平島吉之助、1887「世界政策上より殖民の必要を論ず」『日本人』（6月5日号）
- ・加賀秀一、1879「移住の利害」『日本人』（5月号）
- ・鎌田栄吉、1914「移民の根本問題」『財政経済時報』（2月号）
- ・今野敏彦・藤崎康夫、1984『移民史Ⅰ』新泉社。
- ・今野敏彦・藤崎康夫、1985『移民史Ⅱ』新泉社
- ・今野敏彦・藤崎康夫、1986『移民史Ⅲ』新泉社
- ・無署名、1967「キミにも海外移住のチャンスがある」『平凡パンチ』（4月17日号）
- ・無署名、1972a「日本脱出・耳より情報／腕一本で大成功／海外就職求人ガイド」『ブレイボーイ』（11月28日号）
- ・無署名、1972b「私たちは海外で、りっぱに働いてまーす！」『女性セブン』（9月6・13日号）
- ・無署名、1973「ま注目の〈日本脱出〉のテクニックを教える」『週刊ポスト』（9月21日号）
- ・無署名、1974「年収七〇〇万円に殺到したサラリーマンたちの移民願望」『週刊サンケイ』（3月1日号）
- ・永田稠、1918「失敗せる日本の移民生活」『日本評論』（7月号）
- ・大宅壮一、1956「移民あれこれ」『地上』（7月号）
- ・尾関生、1926「果たして移民？ 棄民？」『伯刺西爾時報』（3月5日号）（〔今野・藤崎、1986a〕より再引用）。

- ・ 齊藤広志、1978『外国人になった日本人——ブラジル移民の生き方と変り方』サイマル出版会。
- ・ 田原春次（初出年不詳）「移民をどうするか——現状と今後の対策」『経済往来』（12月号）
- ・ 高田公理、1991「日本人庶民の海外体験とその諸類型」（小山修三・編）『現代日本文化における伝統と変容⑦日本人にとっての外国』ドメス出版
- ・ 梅棹忠夫、1978「われら新世界に参加す（ブラジル移住70周年国際シンポジウムでの基調講演）」『われら新世界に参加す』毎日新聞社
- ・ 柳田国男、1930『明治大正史世相篇』（1970『定本柳田国男集（第24巻）』筑摩書房）
- ・ 吉村銀治郎、1902「移民事業に就て所感を陳ふ」『外交時報』（3月号）

第3章 あたらしい交通体系と生活様式の革新¹

20世紀の世界と日本において、人びとの空間移動をさかんにした条件として注目すべきは、あたらしい輸送機関の登場とその高速化である。第6部第3章においては、主として自動車に焦点をあてながら、それらが20世紀の日本における生活文化と世相の変容に、どのような影響をもたらしたかを考察する²。

第1節 昭和時代の新交通——自動車と航空機

柳田 [1930]³は、『明治大正史 世相篇』のなかの、「新交通と文化輸送者」という表題をかかげた第6章の冒頭に、つぎのようにしている。

交通機関の発達に就いては（中略）、特に人力車の盛衰の余りにも急激で、しかも其経過が始から終まで、明治大正の世相を代表して居るやうに見える [p.255]。

柳田 [1930] が指摘するとおり、明治・大正時代の新交通は、人力車の登場によって特徴づけられた。それにたいして昭和時代の新交通の代表は、陸上交通にかんするかぎり、自転車と自動車であるといつてよい。そのことは、これらの乗物の保有台数（全国）の推移をしめした図6-3-1を参照すればあきらかである。

まず、1912（大正元）年に、全国で13万4232台をかぞえた人力車が、その4半世紀のちの1937（昭和12）年には、およそ10分の1の1万3497台に減少している。それにたいして、1912年にはわずかに535台にすぎなかった自動車が、昭和時代の初期に、5万台前後で人力車の台数を凌駕したのち、1937年には、1912年における人力車の台数にちかい12万8753台にまで増加する。いっぽう、これとおなじ時期に自転車も急速に普及し、

¹ 第6部第3章のもととなる論文は最初、1990年12月18日から3日間にわたって開催された、国立民族学博物館主催のシンポジウム「昭和史 世相篇」（特別研究「現代日本文化における伝統と変容Ⅸ」）において発表されたのち、高田 [1993] として公刊されている。

² この点についての詳細は、高田 [1987a] に詳述してある。おりにふれて参照されたい。

³ ただし、ここでの引用テキストとしては、つぎの文献をもちいた。

柳田國男、1970『定本柳田國男集（第24巻）』筑摩書房

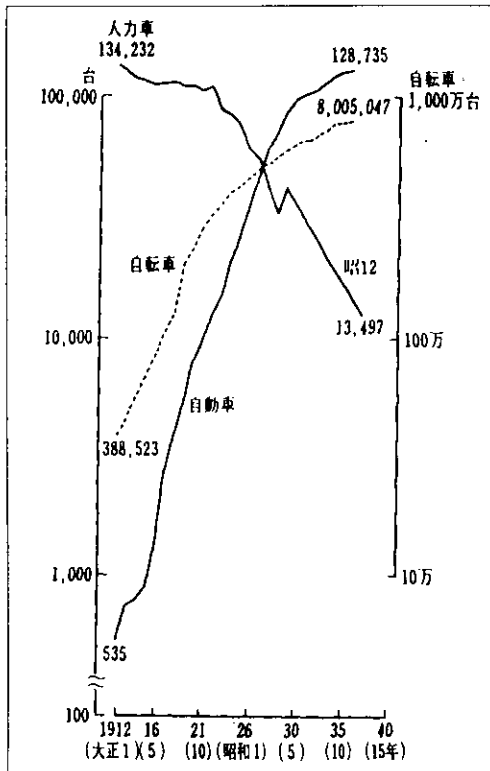


図 6-3-1 人力車・自動車・自転車の保有台数の推移（全国）

（資料：総務庁統計局『日本長期統計総覧（第2巻）』日本統計協会）

1937年には、人口10人あたりに1台にちかい水準に達した。ただし、1990（平成2）年現在において、自動車の保有台数は約6000万台、普及率において人口2人あたりに1台にちかづいている。このことから、その後の昭和時代における自動車の普及が、いかに劇的に進行したかが、あらためてあきらかになる。同時に、人力車にかわる交通機関としてタクシーが想定できるとすれば、自転車は「自家用自動車に先行する乗物」としての意味をもっていたのだといえる。

いまひとつ、わすれてはならない昭和時代の新交通として、空をとぶ高速交通機関としての航空機がある。それは、主として人員の輸送におおきな変化をもたらした。たとえば、航空機による人員と貨物の輸送量の推移をしめした図6-3-2によると、ようやく昭和初年に端緒がきりひらかれた航空機による輸送は、太平洋戦争がはじまったことによって、いったんは逼迫するものの、1951（昭和26）年に再開されるや、急速な増加のあとをたどる。それは、1984（昭和59）年にいたる、わずか33年のあいだに、人員輸送において2800倍、郵便物において4600倍、貨物輸送において3万9000倍に増加したのであった。

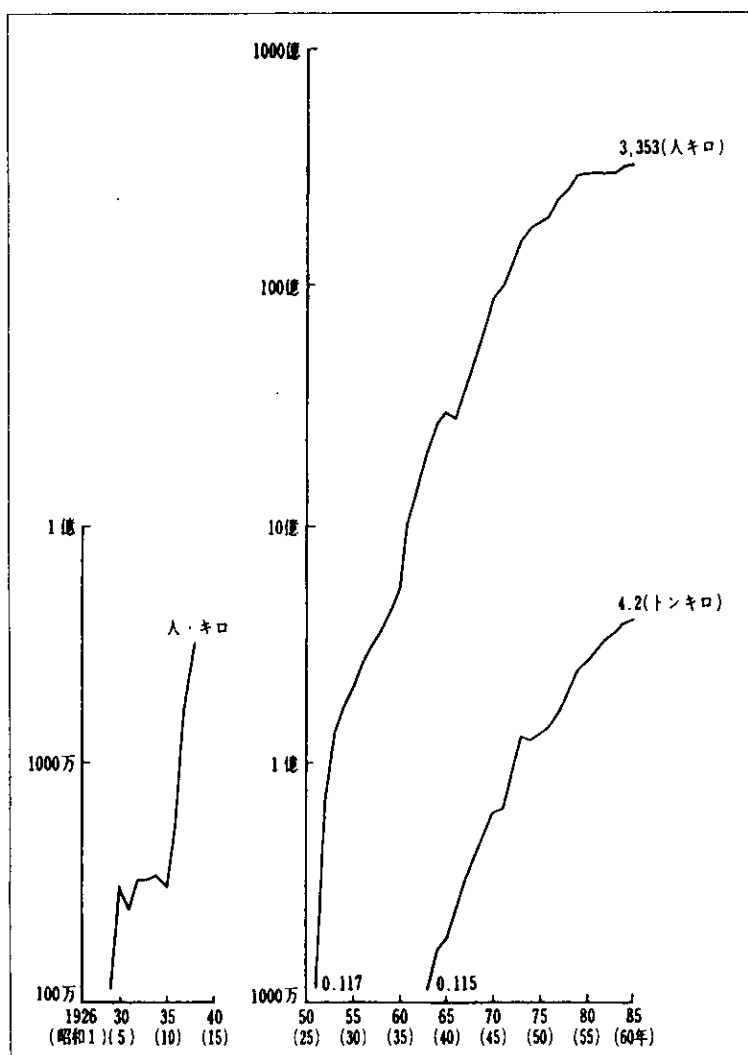


図 6-3-2 航空機による人員と貨物の輸送量の推移

(資料：総務庁統計局『日本長期統計総覧(第2巻)』日本統計学会)

ところで、これらのあたらしい交通機関の出現と発達と普及には、3つの特徴がある。すなわち、①人力から動力へ、②よりいっそうの高速による移動と輸送へ、③個人的で、しかも自由度のたかい移動と輸送へ、といった顕著な傾向がそれである。また、自動車と航空機はいずれも、のちにあらためて論じるように、労働力としての人間や物量としての貨物を、まとめて大量に輸送するというよりは、いわば「情報のにない手である人間や商品」を輸送する交通機関としてとらえたほうが理解しやすい、いくつかの理由がある。このあたりに、昭和時代が交通機関にもとめた、あたらしさの根拠がある。そのうち、本章においては、自動車の普及を中心として、それがもたらした日本人の生活文化と世相の変容について検討する。

第2節 「情報メディア」から「実用的輸送機関」へ

威信の象徴、オモチャ、宣伝媒体

そこで、日本における自動車の普及過程をふりかえるために、最初、日本にはじめて出現した自動車についての記録を参照してみる。この点について、従来から定説とされてきた石井〔1920〕は、つぎのようにしている。

明治三三（＝1900）年二月一日に皇太子（のちの大正天皇）御成婚の慶事あり、在米合衆国^{サンフランシスコ}「桑港」の日本人相協議し何なり奉獻して祝意を表ぜんとの案を得、その献上品の選取方その他を時の総領事陸奥広吉氏に一任せり。陸奥氏は種々考慮の未、近時新発明の自動車こそ未だ日本にあるまじ。これを献上して御召料を願ふにまさる表慶案なしとなし、遙かにこれを輸送し、古河潤吉は機械趣味あり且つ親戚なれば、組立より献納の手続まで一切これを古河氏に委託せり。

さて、その荷の着すると同時に、古河氏は高田商会の技師に委嘱してこれを組み立て、宮内省へ献納せり。宮内省にてはその試運転を命じれば、これが運転を試みたり。然るにブレーキの使用法不十分なれば、麹町区三宅坂を走る時これを見ていた一老婆、馬なき馬車が通るとて関心して見つめ車が近づけども避けようともせず、却て自動車の方にてこれを避けんとせり。その時ブレーキ意の如くならず終にお濠に陥りたり。幸ひに車体にも運転者にも損傷は無かりしも、宮内省にてはこの如き危険なるものはお召料に相成らずとて、そのまま倉庫か何かに仕舞ひおきになりしのみにて、在米邦人の誠意は何の効もなくて止めり。されども、これ本邦に自動車の渡りし嘆矢なり⁴。

ところが実際には、それより2年まえの1898（明治31）年に、すでに日本に1台の自動車が登場している。フランス人画家ピゴアの著作『極東にて』のなかに、もうもうと煙をのこしてはしる自動車がえがかれているのである。カイゼル髭のいかめしい西洋人紳士が運転する自動車のまわりには、驚愕の表情もあらわな多数の日本人がとりまき、かたわらには、あんぐり口をあけたチョビ髭の巡査がぼうぜんとたちつくしている〔清水、1978〕。

それは、当時の『東京朝日新聞』〔1898年2月1日〕の記事によると、テブネというフ

⁴ ただし、石井研堂自身が『明治事物起源（昭和版）』〔1944、春陽堂〕においては、その時期を1909（明治42）年にかきあらためている。

ランス人技師がもちこんだもので、たしかに東京の道路を運行した。ところが、自動車の普及は、その後も容易にすすまず、全国の保有台数が1000台をこえるには、1916（大正5）年まで、20年ちかくを必要としたのであった（図6-3-1参照）。

とはいえ他方では、20世紀がはじまると自動車が必要だという認識が顕在化してくる。このころ、すでに鉄道や市街電車が運行をはじめていたが、自由に都市内をはしれる乗物は人力車にかぎられていたからである。しかも、人力車の労働効率はきわめてわるい。おりからはじまった近代的工業化を達成するには、自動車を導入して労働力を効率的に利用することが、どうしても必要だとかんがえられたのである〔国府、1901〕。にもかかわらず、自動車の価格は、あまりにも高価であった。中古の蒸気自動車にさえ、当時の大学卒の初任給の100倍にもおよぶ3500円の値がついている。のみならず当時の日本には、たとえ自動車を手にいれたとしても、自由にはしれる道路が整備されていなかった。どちらかという、道路の整備状態を意図的におくれさせた江戸時代の徳川幕府の道路行政が、20世紀になってもその発展を阻害していたのである。じっさい、ずっとのちの1927（昭和2）年に東京をおとずれたあるアメリカ人などは、ぬかるみに足をとられながら、

「日本人は食糧問題を解決するために都市の道路に稲を植える積もりか？」

などという、冗談とも本気ともとれる、辛辣な言葉をのこしている〔杉浦、1927〕。

こうした状態のなかで自動車の購入層となったのは、首都・東京をはじめとする大都市の、ハイカラで裕福な人びとであった。明治時代末期から大正時代初期にかけて、皇族や華族、政治家や政府高官や財界人、金もちの外国人などが、主としてみずからの富と威信の象徴として自動車を購入している。

東京以外の地方においても、事情はよく似ていた。たとえば、ふるくから多数のアメリカ移民を輩出した広島県の尾道に、はじめて姿をあらわした自動車は、移民先で成功した彼らのひとりがもちかえたものであった。それは、ガソリンが入手できないという理由もあって、ながいあいだ、広大な屋敷の玄関の置物としてかざってあったという〔高田、1987：p.286〕。

むろん、そのほかにも自動車を購入した人びとがいる。たとえば成金のなかには、自動車に芸者をのせて、そのスピードにおどろく女たちの姿をながめてたのしんだ遊興の徒がすくなくなかった。ふるい日本の遊興都市として有名な京都のタクシーも、草創期には芸者のこのみを反映して、車内に畳をしき、朱と黒のツートンカラーでかざりたてている。地方都市でも、きそって自動車を購入したのは、花柳界や旅館の経営者であった。それら

を、客の目をひきつける一種の広告用の媒体として利用したのである。

こうしてみると、昭和以前の自動車は、実用的な移動と輸送のための交通機関として機能することが、ほとんどなかったといってよい。そうではなくて自動車は、裕福な人びとの威信の象徴、高価なおモチャ、広告・宣伝のための情報媒体——いいかえれば、ひろい意味での「情報メディア」としてもちいられたのである。このことを、明治時代の末に、内山駒之助というわかい技術者が、ほとんど独力で完成し、10数台で製造を中止せざるをえなかった、日本最初の国産ガソリン自動車であるタクリー号のたどった運命が、雄弁にものがたっている。それは、性能試験において、アメリカ製のフォードを凌駕しながらも、

「日本製の小型車はシルクハット姿でのる、と天井につかえるので不細工だ」

という理由によって、市場性をもつことができなかったのである〔尾崎、1965〕。

円タクと乗合バス——昭和初期の自動車

しかしながら、実際に自動車が都市の街路を走行しはじめると、一般生活者も、

「自動車にのってみたい」

とかんがえるようになる。そこで、京都や大阪など、むかしから町人の力がつよかった都市において、明治時代の末期に、乗合形式の自動車輸送事業が芽をふいた。しかし、こうしたところみのほとんどは、時期尚早のために廃業においこまれている。

それにたいして、岩手県や山口県など、むしろ辺鄙な地方では、大正時代も後半になると、乗合自動車が実用性を発揮し始める。こうした動向に、明治時代の末期から普及の速度をはやめはじめていた、都市と都市とのあいだをつなぐ鉄道の普及が拍車をかけた。それというのも、鉄道が都心を通過するのをきらった当時の人びとのおもいから、わざわざ都心からとおくはなれた位置に立地させられた地方都市の鉄道駅と市街地とのあいだをつなぐフィダー交通をになう交通機関として、自動車が重用されるようになったのである。

そのさい注意すべきことは、鉄道の普及が、自動車の普及の必要条件でもあったという事実である。道路事情がわるかったために、自動車それ自身が、地方都市へ自力で走行することは不可能だったのである。1912（明治45）年に長野県の諏訪に登場した自動車は開通後まもない中央本線によって、1919（大正8）年に和歌山県の新宮に登場した自動車は海上を走行する船によって、それぞれの目的地へ輸送されている。

しかしながら、やがて第1次大戦のあとに好景気がやってきたことによって、最初は大阪において、つづいて東京において、「市内どこでも1円」で乗客をはこんでくれる、い

いわゆる「円タク」が出現した。ちょうどそんな時期にあたる1923（大正12）年、関東大震災が発生して、鉄軌道を必要とする東京の交通機関が壊滅的な打撃をうける。このときに人や物資の輸送に大活躍したのが自動車であった。

その結果、それまでは自動車にむしろ冷淡であった東京市当局が800台のT型フォードを緊急輸入して、翌年から運行をはじめた。これがのちに「円太郎バス」というニックネームでよばれ、東京市民にたまはれることになる、日本最初の本格的な乗合バスとして、やがて昭和年間に進行していく自動車普及の第一歩をしるした。

こうなると、道路を建設し整備する必要がでてくる。おもい荷物を大量に輸送し、高速で自由に移動するうえで、自動車ほど便利なものはないことも判明してくる。けっして順序はぎゃくではない。近代工業製品の自動車も、最初は移動と輸送に便利だからではなく、めずらしくて格好がよかったからこそ、人びとにうけいれられた。道路建設や都市整備は、むしろその結果として必要とされるようになったのである。

それからまもなく、1926（昭和元）年には、幅12間という、当時としてはひろびろとした京浜街道が、品川と蒲田のあいだに開通する。その直後に、この道路で12時間にわたって実施された交通機関にかんする調査結果によると、あらゆる交通機関のうち、自動車が1万11台、牛車と馬車が505台、荷車が1308台、人力車が31台という結果がでた。すでに自動車が道路交通の主流をしめていたのである。

こうした趨勢は、第2次大戦以前の日本の高度成長経済⁵のもとで、着実に進行していく。たとえば1927（昭和2）年には、急速に円タクの台数が増加したために、人力車夫の廃業が社会問題となった。その2年後の1929年には、鉄道省が全国に自動車網を完成させる計画をたてている。また、1930（昭和5）年には、台数がふえすぎて過当競争におちいった円タクが、サービス向上のためにラジオを搭載したり、タクシー運転手が払底した大阪では、この仕事に8人の女性が参入したりもした。さらに、その翌年の1931年には、交通事故による年間の死傷者が1万7000人を突破し、1933年には、街路に円タクが氾濫した東京の銀座で、駐車用の場所が指定されたりもするのである。

ただし、これらの自動車のほとんどは外国製であった。しかも、フォードとシボレーが

⁵ 「高度経済成長」というと、1955（昭和30）年あたりから本格化したという認識が一般的である。しかし、じつは対前年の名目の経済成長率が最大の値をしめたのは1937（昭和12）年のことである。日中戦争の勃発によって、この年の経済成長率は名目で23.7パーセントの高率にのぼった。

全体の70パーセント弱をしめていたという⁶。そこで、国内における自動車の製造を産業化することが、ようやく現実の日程にのぼるようになった。

第3節 戦争と「経済戦争」に奉仕した貨物自動車

はじまった自動車の国内生産と第2次大戦

とはいえ、自動車の国内生産それ自体は、なにもこのころになってはじめてこころみられたというわけではない。あたらしい技術や機械がだいすきな現代の日本人を彷彿させるような人物が、ピゴアの漫画にえがかれた日本最初の自動車が登場した年から、わずか4年後の1903（明治35）年に出現している。この人物は、エンジンこそアメリカ製であったが、小型旋盤だけをつかって、ひとりで自動車のくみだてをこころみた。さきに、タクリー号についてのべた箇所で紹介した内山駒之助である。また、その2年後には、岡山において、山羽虎夫という弱冠30歳の技術者が、タイヤ以外はすべて国産の部品でまかなった蒸気自動車の製作に成功している。それ以来、昭和時代の初期まで、自動車の製造は、なんどもわたって断続的にこころみられてきた。

しかし、昭和時代がはじまるまでは、膨大な設備投資を必要とする自動車産業の育成にとって必要不可欠な消費市場が、じゅうぶんには成熟しなかった。それが、昭和時代がはじまると、ようやく成熟のきざしをみせはじめ、高度経済成長期につながる自動車の国内生産のこころみが本格化する。それらを時期をおって列挙すると、つぎのようになる。

- ・1928（昭和3）年：本田宗一郎が、のちのホンダ自動車に発展する自動車の修理と製造のための事業所を開業する。
- ・1931（昭和6）年：のちにマツダ自動車と名称をかえる東洋工業がオート三輪の製造をはじめめる。
- ・1934（昭和9）年：日産自動車が営業を開始する。
- ・1937（昭和12）年：トヨタ自動車が営業を開始する。

しかしながら、これらのできごとのあいだにはさまって、1931（昭和6）年、満州事変が勃発する。こうして、以後およそ15年間にわたって継続する戦争の幕がきっておとされた。その結果、自動車の製造とその利用は、完全に軍事目的に従属させられてしまう。

⁶ 1930年当時の内閣資源局資料による。

じっさい1935（昭和10）年には、

「（自動車の製造を許可された）会社は、政府監督上の命令や軍用自動車の製造についての命令にしたがわなければならない」

という意味の条文をふくんだ「自動車製造事業法」が施行され、1940（昭和15）年には軍用目的に奉仕するもの以外の乗用車製造が禁止された。さらに1944（昭和19）年ともなると、軍用目的に奉仕するもの以外の自動車使用さえもが完全に禁止されるのである。

こうした動向のもとでは、従来の乗用車を中心とする自動車の利用法が、貨物車を中心とした利用法に転換する。こうした趨勢は、じつは、すこし意味をずらせると、第2次大戦後にもひきつがれた。このことは、「保有自動車台数にしめる乗用車と貨物車の推移」をしめした図6-3-3をみるとあきらかである。すなわち、日本の自動車交通は、1937（昭和12）年に、やがて第2次大戦に発展する満州事変をきっかけにして貨物車主導型に転換し、その趨勢がそのまま、1967（昭和42）年にいたるまで、ちょうど30年間にわたって持続した。こうしてみると、この間における自動車は、文字どおり「戦争」と、ときに比喩的に「経済戦争」と称された高度経済成長に、大量の物量を輸送するという、きわめて実用的かつ機能的な役割をとおして貢献したことが判明するのである。

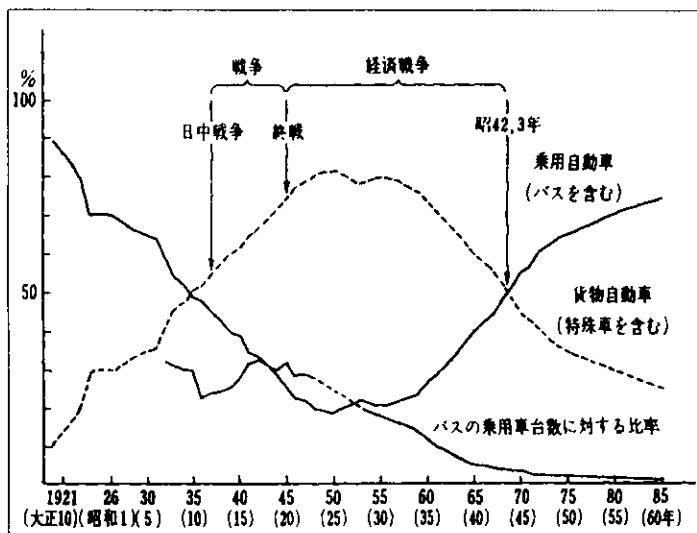


図6-3-3 自動車保有台数にしめる乗用車と貨物車の比率の推移

（資料：内務省・運輸省資料、出典：『昭和国勢総覧』東洋経済新報社、『日本の自動車工業』日本自動車工業会）

自動車輸送が鉄道輸送を凌駕する

ところで、第2次大戦が終結した直後の日本には、わずか15万台の自動車しか存在しなかった。戦前に22万台にまで増加した自動車が、およそ3分の2にまで減少してしまったのである。しかも、自動車をうごかす石油燃料がない。そのために、木炭をいぶしたさいに発生するガスを代替燃料としてもちいたバスやトラックが、都市の市街や郊外を氣息えんえんとはしる風景が日常化した。

こうした状況が、昭和20年代なかばに復旧の緒につく。当時の流行歌にうたわれたように、「田舎のデコボコ道をオンボロバスがガタゴトはしる」ようになり、やけ跡の目だつ都市の街路を、あまりにも急速に台数がふえたために一種の過当競争におちいった「神風タクシー」が、猛烈なスピードで疾走するようになった。

そこでおもいだすべきは、明治・大正時代に、急速に整備された鉄道という交通機関の目的とそれがはたした役割である。まず当初、国鉄は軍事物資と兵力の輸送を、本来の目的として整備された。これにたいして大都市周辺の私鉄は、人口集積地と神社仏閣をはじめとする郊外観光地をむすぶことを目的として整備されたものがおおかった。ところが、やがて国鉄に代表される都市と都市とのあいだをむすぶ鉄道は、その建設と整備がすすむまえには、主として海上交通に依存していた工業原料とその製品の輸送をになうことによって、いっぽう郊外の住宅地と都心をむすぶ大都市周辺の私鉄は、朝夕に大量の労働力を輸送することによって、それぞれ日本の近代的工業化をささえるという重大な使命をはたすようになる。第2次大戦後の国土の復興、それにつづく高度経済成長も、こうした鉄道の輸送力におおくをおっていたといつてよい。

ところが昭和30年代に、あらゆる商品やサービスの、いわゆる「大量生産・大量消費」をめざす経済の高度成長が本格化すると、従来から存在してきた鉄道にすべてを依存していたのでは、あたらしい時代の要請に対応するのがむづかしいという状況が現出する。それは、たんに各種の貨物の輸送需要が急増しただけではなかったからである。たとえば1953（昭和28）年に、日本最初のスーパー・マーケットである「紀ノ国屋」が開業するころから、いわゆる「流通革命」が本格化しはじめたのにもなって、流通経費を削減し、しかも消費市場の多様な欲求に対応するために、鉄道輸送よりも効率的で迅速、かつ、こまわりのきく自動車輸送を駆使することが必要となってくる。

じっさい、こうした状況の変化の過程で、1965（昭和40）年前後には、まず「物の輸送」において、自動車による輸送が鉄道による輸送をうわまわりはじめる（図6-3-4）。しかも高度経済成長のもとで企業のあいだの競走がはげしくなると、それにもなって、さ

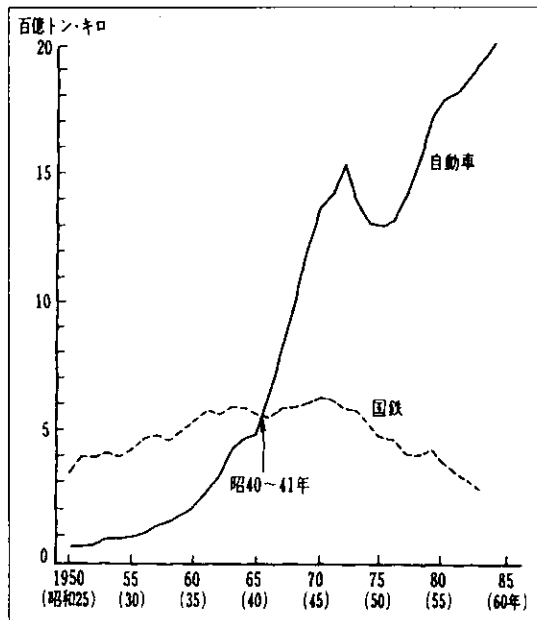


図 6-3-4 国鉄と自動車の貨物輸送量の推移

(資料：『昭和国勢総覧』)

さまざまな型の営業活動が活発化しはじめた。こうなると、どうしても銀行や商事会社では、業務用の自動車を購入することが必要になってくる。しかも、従業員に便益を提供するために、これらの企業が購入した自動車を、休日にはサラリーマンが自家用車のようにつかってもよいという制度が普及しはじめた。こうした状況のなかで、新車よりもずっと安価で購入できる中古車が市場に出まわるようになる。これらの影響が総合的に作用して、じょじょに日本の一般生活者が自動車を保有できる条件がととのっていったのである。

「マイカー時代」から「石油ショック」まで

ちょうど、そんな時期をみさだめていたのであろう。1955 (昭和 30) 年には、通産省が「国民車構想」を提起する。

「価格は 25 万円で 4 人のり、時速 100 キロで、燃費はリッターあたり 30 キロの自動車」を製造し、普及させようというのである。それが、比較のみじかい期間のうちに完成にちかづいた。むろん、通産省の基準をすべてみたしたわけではないが、それにちかい条件を備えた自動車が 1958 (昭和 33) 年に発売される。つまり、トヨタ自動車がコロナを、その翌年には日産自動車がブルーバードを、それぞれ発売して、いわゆる「BC 戦争」の幕がきっておとされるのである。そして、その 2、3 年後には、文字どおり名実ともに「国

民車第1号」を名のる三菱500やトヨタパブリカなどが登場して、広範な自動車の普及に、はずみがついていった。

その結果、昭和40年代がはじまると、それまでの耐久消費財ブームを先導してきた「3種の神器」、すなわちテレビ・冷蔵庫・洗濯器にかわって、クーラー・カラーテレビ、そして自動車（カー）を内容とする「3C=新3種の神器」の時代がやってくる。そして、これらのメーカーは、矢つぎばやにあたらしいモデルを発表し、ユーザーはそれを手にいれたいとかがえるようになる。こうして、戦争と比喩的な意味での「経済戦争」に奉仕した貨物自動車にかわって、乗用自動車がモータリゼーションを先導する時代がやってきたのである。

そのことを裏がきするかのようには、1967（昭和41）年には、自動車の保有台数が1000万台を突破する。そして同時に、1937（昭和12）年以来、ちょうど30年ぶりに、乗用自動車が、その台数において貨物自動車を凌駕し、その後わずか10年のあいだに、その合計台数が3000万台にたっするまで、怒涛のようなモータリゼーションが進行していく。しかしながら、それは同時に自動車の普及にともなう、いくつかの社会問題が顕在化する時代のはじまりでもあった。

その第1は、都市の市街地を中心とする交通麻痺の日常化である。すでに1958（昭和33）年、オリンピックにさきだって東京で開催されたアジア大会のさいに、

「帝国ホテルから国立スタジアムまでいくのに、1時間以上の時間がかかる」

といわれた道路の混雑が、昭和40年代には、いっそういちじるしくなった。そのことを、ある週刊誌の記者は、つぎのような卓抜の表現でかきのこしている。いわく、

東京都内を歩いてみれば文明退化の音がする〔無署名、1966〕。

これにつづくのは、交通事故の増大である。すでに昭和30年代以来「はしる凶器」とあだ名されてきた自動車が原因でおこる交通事故は、その台数の増加を凌駕するいきおいで急増し、1970（昭和45）年には、史上最高の年間1万6765人にのぼる死亡者を記録するにいたった。このころから人びとの口にのぼるようになった「交通戦争」という表現は、あながち荒唐無稽なものではなかったのである。

そして最後は、大気汚染の蔓延である。東京都心の空気が、ガソリンの燃焼にともなうて大気中にはきだされる鉛によって汚染されていることが、最初に指摘されたのは1958（昭和33）年のことであった。それが昭和40年代もなかばになると、さらにオキシダントによる光化学スモッグが多発するようになり、いわゆる公害問題の重大な要因のひとつ

にかぞえられるようになった。

こうした状況に直面した政府は、1972（昭和47）年、当時の世界でもっともきびしい自動車の排ガス規定を制定する。そして世上では、

「マイカーよさようなら、自転車よこんにちわ」

といったスローガンが人びとの気もちをとらえ、自動車にかわって自転車を活用しようという、いわゆるバイコロジー運動がさかんになったりした。こうした世相のなかで、ついに1973（昭和48）年には最初の石油ショックが発生し、高度成長をつづけてきた日本経済と、そこに安住してきた日本人に、いきなり冷水をあびせかける格好になる。こうして自動車は、深刻な苦難の時期をむかえたのであった。

第4節 国土構造と産業構造を変化させた自動車

都市的生活文化を「運搬」する自動車

それでも、猛烈ないきおいで進行するモータリゼーションが完全に逼塞してしまうことは、けしてなかった。さらなるゆたかさをめざす高度経済成長の進展にともなって、ひきつづき都市への人口集中が進行したからである。というのも、こうして都市にうつりすんだ一般生活者のおおくは、従来の職住近接型の都市居住者とはちがって、郊外に住居をもち、朝夕、都心とのあいだを通勤のために移動する俸給生活者となっていった。そうしたスタイルの生活をいとなみつつ、より便利で快適な生活をもとめればもとめるほど、自動車はそのための必需品とみなされざるをえなかったのである。おなじころ、一般にひろがった「マイホーム主義」⁷や「マイ・カー」⁸といった言葉は、こうした時代の生活文化を、それなりに的確に象徴していたとかがえてよい。

都市とその周辺地域だけではない。東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年に、神戸と名古屋のあいだに名神高速道路が開通したのをさかいに、地方にも道路整備がゆきとどくようになる。その結果、従来は交通が不便であるために、農山村地域にはほとんど流通しなかった鮮魚をはじめとする生鮮食糧品のほか、経済の高度成長がうみだした

⁷ 「マイホーム主義」については、本論文の第3部第1章において論じた。

⁸ 「マイカー」という日本語は、1956（昭和31）年に発行された自動車販売会社のPR雑誌『愛知トヨタ』（103号）に掲載された「マイカー族」という表題の記事に初出する新造語である。

多様な近代的生活様式が、農山村地域にも普及するようになった。それは、見た目には、とりたてて従来と異なることのない農山村地域の生活様式を近代化し、都市化するという作用をおよぼした。つまり、本論文の第5部序章で論じたように、「目にみえない都市化」が、国土のあらゆる場所において進行しはじめたのである。そこで、柳田〔1930〕第6章の表題「新交通と文化輸送者」にもどれば、この間の変化は、自動車という「新交通」が「文化輸送者」としての役割をはたしはじめたということにほかならない。

もっとも、自動車の普及はぎゃくに、それが「文化輸送者」であるがゆえに、高度経済成長まっただなかの都市への人口集中を促進することにもなった。なぜなら、都市への大量の人口流出のために、いわゆる「過疎化」が本格化しつつあった農山村地域に、自動車の通行できる道路が整備されると、自家用車を利用すれば容易に都市へでかけるられることに気づいた人びとが、生まれそだった村をすてて都市に移住してしまうケースが増加したからである。そしてこのことは、これらの地域の「過疎化」を、さらにいっそうすすめるという結果をもたらした〔総合研究開発機構、1976〕。

さらにまた、かつては鉄道が海上輸送にとってわかることによって、それまで繁栄していた都市を衰退にみちびいた⁹のとおなじように、自動車輸送の普及が、じゅうらいは河川交通に依存していた、たとえば山林から搬出される木材の集積地として繁栄してきた都市を、衰退にみちびくといった事例も観察されるようになった¹⁰。「和歌山県新宮市における木材取扱量と貨物自動車の保有台数の推移」をしめした図6-3-5は、そのことを雄弁にものがたっている。

⁹ たとえば、鉄道敷設以前の鳥取県・境港は、いわば「海のはて」に位置する海上輸送の拠点として繁栄していた。ところが1900（明治33）年、この港から陸あげされた物資をもちいて建設された国鉄境港線が完成し、それが山陰本線に連結されると、今度は「地のはて」とみなされるようになり、やがてかつての繁栄はかげりを体験せざるをえなくなった。

¹⁰ 昭和30年代に吉野・熊野山地で電源開発が進行し、地域内に縦横に自動車の通行可能な道路が整備された。それにもなって、それ以前は熊野川による筏流送に依存していた木材輸送が、急速に自動車輸送に転換される。その結果、従来は木材筏の集積地として繁栄してきた新宮市の地位もまた急速に低下した。「（和歌山県）新宮市における木材取扱量と貨物自動車保有台数の推移」をしめした図6-2-6は、こうした事情を典型的なかたちでしめしている。

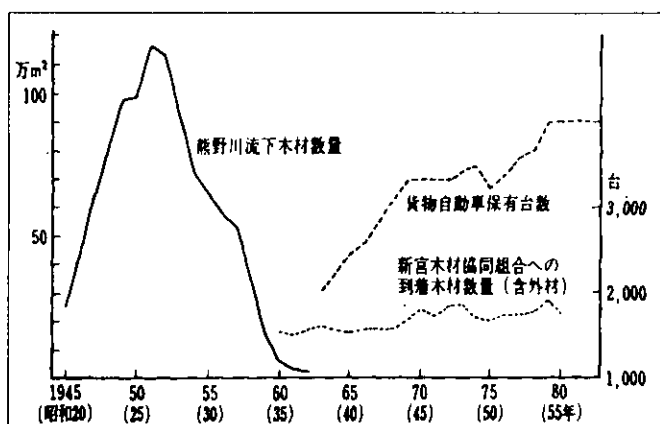


図 6-3-5 和歌山県新宮市における木材取扱量と貨物自動車の保有台数の推移

(資料：新宮木材協同組合および和歌山県自動車販売業協会保有の資料)

情報産業社会の開幕をつける自動車の普及

このような経緯をたどって、昭和 40 年代には、本格的なモータリゼーションが日本全国を席卷することになる。それは同時に、保有自動車台数に占める貨物自動車の比率が減少し、乗用自動車の占める比率が増大することによって、両者の地位が転換する過程でもあった。そしてその結果、1965～1966 (昭和 40～41) 年に、貨物輸送における自動車輸送の比重が鉄道輸送を凌駕したのにつづいて、1970～1971 (昭和 45～46) 年には、図 6-3-6 に示すように、自動車輸送の比重が、私鉄をふくむ鉄道全体の輸送の比重を凌駕してしまうのである。

それは、おりから本格化しはじめた日本の全体社会の、きわめてひろい意味での「情報(産業社会)化」に、みごとに呼応しているといえる。すでに本論文の第 1 部第 2 章、その他の部分において検討したように、情報産業社会化の過程にあっては、工業製品やその原料などの物量輸送もさることながら、そこに生活する人間が移動して多様な「情報」を手にいれ、あるいは相互に交換することが、ビジネスを円滑にはこび、ゆたかな日常生活をおくるうえで、きわめておおきな価値と意味を発揮するようになった。しかも、こうした目的のためには、膨大な量の労働力をまとめて輸送する鉄道よりも、はるかに自由度のたかい、しかも迅速な移動を約束してくれる自動車輸送のほうが、すぐれた適性を発揮することは、あらためてのべるまでもないはずである¹¹。

¹¹ 情報産業社会の含意は多様である。通常はマスコミの発達、コンピュータ (つぎのページにつづく)

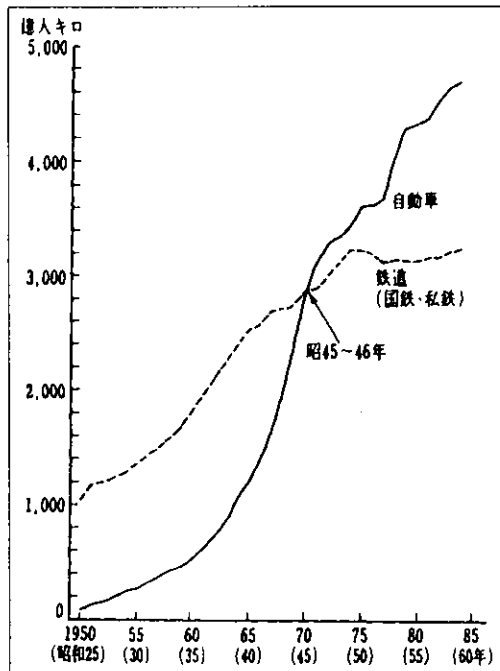


図 6-3-5 鉄道と自動車の旅客輸送量の推移

(資料：『昭和国勢総覧』)

そして、これと同様のことは、じつは貨物輸送にもあてはまる。たとえば今日、かつて

による情報処理の高度化、通信の発達などが、その主な指標とされる。そして、それらが科学・技術の発展を促進し、労働力・原料・エネルギーなどの資源配分を最適化し、生産を自動化することによってその効率をたかめ、かつ、流通経費の削減と迅速化によって物流を合理化するのだと理解される。そこでは、あたらしい「情報」の入手と処理と活用が、きわめておおきな産業的意味をもつ。

ただし、現実に行進している情報産業社会化の趨勢は、さらに広範な意味をはらみはじめていたのであった。衣服に付加価値をそえるファッション・デザイン、食品の付加価値としての味やかおりなどもまた、物質やエネルギーに対立する「情報」という概念によってとらえられるからである。つまり「感覚器官に作用して、人間をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわり」もまた「情報の作用」にほかならない。

そこで筆者は、すでに本論文の第1部第2章でくわしくのべたように、情報のはたす役割一般を、メッセージ性とマッサージ性に分節する提案をおこなったのである。ここでは、情報のメッセージ性とは「文明の装置や制度に作用して、その効率を高める機能」であり、マッサージ性とは「感覚器官に作用して人間の心身に影響をおよぼす機能」であるという意味の規定がなされている。

の鉄道にかわって鮮魚の輸送をになうようになった貨物自動車は、しばしばゆき先をきめずに、生産基地としての漁港を出発する。そして複数の消費地の市場の、きわめて変動しやすい相場を時々刻々、無線通信や電話をとおしてモニターしながら、もっとも相場のたかい市場をめざすのである。

いまひとつ、最初は 1974（昭和 49）年に、「385 貨物自動車グリーン速達便」の名称ではじまり、いったんは挫折したのち、1976（昭和 51）年に「クロネコヤマトの宅急便」によってうけつがれ、その後はいっきょに多数の同業者の参入をよびおこした宅配便の急速な普及にも言及しておく必要がある。これらの宅配便は、それ以前のトラック便のように、たんに「大量の貨物」を輸送しているのではなくて、なにがしかの情動的付加価値を付与された、主として「多品種少量の品物」を輸送しているからである。それは 1985（昭和 60）年までの 10 年間に、貨物のとりあつかい数を約 250 倍に増加させるという驚異的な成長をとげたのであった。なお、宅配便の急成長が、現代日本の農山漁村でさかんになってきた、いわゆる「一村一品運動」とふかく連動していることは、すでに本論文のべつ場所において何度か論じたので、ここではくりかえすことをさしひかえる。

第5節 昭和の新交通と新しい遊動民の時代

「遊戯化」する人の移動・物の輸送と情報産業

モータリゼーションが本格的に進行しはじめた昭和 40 年代は、他方において鉄道と航空機による高速かつ大量の旅客輸送が実現された時代でもあった。1964（昭和 39）年の東京オリンピックに焦点をあわせた東海道新幹線の開通、1970（昭和 45）年の大阪・千里万博公園におけるエキスポ 70 の直後に本格化する大型旅客機の導入は、質量ともに日本人の移動の形態におおきな変化をもたらした。むろん、それらはモータリゼーションとともに、絶頂をきわめる高度成長のもとでの日本人と企業の経済活動を加速し、急速に進行する情報産業社会化に積極的な刺激をあたえた。しかし同時に、それは日本人のあいだに、もっぱらたのしみをもとめるツーリズムへの指向性を芽ばえさせ、大量の人びとを旅行や観光にかりたてる役割をはたしめた。

たとえば、1965（昭和 40）年における日本航空によるジャルパックの発売、その 5 年後の 1970 年における旧国鉄のディスカバー・ジャパン・キャンペーンの展開などをおもいだせば、ここにのべたことの意味が判明するはずである。こうした動向は、一方において、

1964（昭和39）年における海外渡航の自由化から、1990（平成2）年における、いわゆる「テン・ミリオン計画」¹²の達成にいたるまで、膨大な数の日本人を海外観光旅行にさそうとともに、他方においては1987（昭和62）年における総合保養地域整備法の制定にいたる、労働から解放された自由時間の拡大と充足という状況に対応するための、人間の生活全般にわたる「遊戯化」の趨勢¹³を先導してきたといえる。

そのとき、わすれてはならないのは、テレビや雑誌など、マス・メディアをとおしてつたえられる情報の増大とその受容の簡易化である。こうした趨勢は、昭和30年代から一貫しており、自動車をはじめとする交通機関の発展とならんで、あたらしい生活様式を日本の全国にむけてつたえる「文化輸送者」としての役割をはたしつづけてきた。じじつ、高度経済成長期における家庭電化製品の急速な普及も、とくに昭和30年代にアメリカの中産階級のゆたかな家庭生活を素材にしたホームドラマのテレビ放映がもたらしたプレゼンテーション効果をめきにしては、実現されなかったにちがいない。それが、昭和時代のおわりごろから、今度は世界や日本のさまざまな場所の、日常的にはけっして接することのない風景や生活や文化を人びとに伝達する、旅行と観光をテーマにした多様な番組のいちじるしい増加という現象にひきつがれながら、日本の一般生活者を旅行や観光といった移動をともなう行為にかりたてる役割をはたすようになってきたのである。

くわえて、1983（昭和58）年に開業した東京ディズニーランドをはじめとする数おおくのテーマパーク、1988（昭和63）年を中心に全国各地で開催された地方博覧会、このころからいっそう活発になった「一村一品運動」、これらと関連して着実に進行していく村づくりや町づくり、それを実現するための各種イベントや名所づくりなど、旅行と観光を誘

¹² 日本の過剰な貿易黒字を減少させることを目的のひとつとして、1980年代に運輸省が構想した、海外旅行にでかける日本人の数を年間1000万人以上に増大させようとする計画はを「テン・ミリオン計画」と名づけられた。

¹³ かつて筆者は、べつの著書〔高田、1987b〕において、つぎのようにしるした。

（昭和60年代にはいって）ひと言でいうと、「遊び＝まじめ、仕事＝まじめ」という等式の絶対性がゆらぎはじめたのだ。実際、世の中には極めて多様な遊びが氾濫し、人びとは日常的にそれと戯れるようになった。しかも、かつては遊びと画然と区別されたはずの、仕事や勉強や生理的活動といった営みが、遊びと戯れの要素をはらむことなしには成立しえなくなり始めている。ぼくは〈遊び〉をめぐるこれら二つの新しい趨勢を〈遊戯化〉という言葉で捉え直す。

導するうえで必要不可欠な情報発信のこころみはさかんになるばかりである。

こうした状況のなかで、総理府〔1988〕によると、国内における年間の宿泊数はのべ6億泊におよび、その36.5パーセントが「観光目的」で、さらにこれに「業務を兼ねた観光」をくわえると、48.3パーセントにたつるといった状況がもたらされている。こうしてみると、柳田〔1930〕が「新交通と文化輸送者」の章の末尾において指摘した「旅行道の衰退」〔pp.269-272〕は、いまあらためて復興の途上にあるというべきであろう。そしてそれは、まさに自動車と航空機という、動力を利用した、より高速で、自由度の高い「昭和の新交通」を、人びとのおおくが、みずからのあそびとたのしみのために利用できるどころまで普及したことの結果にほかならない。つまり、人間の移動と物資の輸送と情報伝達のいずれもが、こうして「遊戯化」の趨勢をたどりつづけているのである。

これらのことは、近代的工業化が本格化した明治維新以降、経済の高度成長が完成の域にたつた1975（昭和50）年前後までの日本人を支配してきた、一定の場所に住居をさだめて、まいにち勤勉におなじ職場に通勤し、そこで多忙な生産労働に従事するという、いわば近代工業社会の生活文化の規範が、いよいよ相対化されはじめたことをものごとがたっている。

では今後、遊戯化しつつある移動と輸送と情報の伝達が日常化する状況のもとで、日本の産業は、どのようにしてあたらしい価値をうみだすのか。図式的に言えば、日常生活を一時的に切断する旅行や観光をはじめ、日常生活におけるのとは異なる多様な情報体験が、人びとのあたらしい知恵やアイデアの創出、すなわち付加価値にみちた情報生産を活発にすることによって、それを可能にするということになる。この点については、本論文の第1章第2部において、くわしく論じたが、その背景にはじつは、いうところの「昭和の新交通」が、未曾有の発達をとげたことによって、旅行や観光に関連する移動や輸送が、きわめて迅速、かつ容易になったという事情が実在しているのである。

国土全体の「都市化」と「文化の輸送」

それだけではない。昭和時代よりはるか昔、すでに明治時代がはじまって以来の日本社会においては、居住地にかんしても、旅行や観光の目的地にかんしても、人のながれは基本的に「農村から都市へ」という方向をめざしてきた。それは今なお、政治や経済、文化や情報の首都・東京への一極集中というかたちで顕現している。しかしながら昭和時代のおわりごろから、こうした方向性を逆転させる「東京から地方へ」「都市から農村へ」と

いう人のながれが、じょじょに顕在化するようになった。

それはまず、1970（昭和45）年における旧国鉄のディスカバージャパン・キャンペーンによって、地方や農村をみなおそうという関心によって触発された。それ以来、一方で海外旅行にでかける日本人の数が急増するとともに、他方では日本の伝統的な風景と生活文化が、旅行や観光の目的のひとつとして注目されるようになる。のみならず、昭和60年代以降、地価が異常に高騰し、しかも居住環境が悪化した都市の喧騒と多忙な生活からのがれて、田舎に移住する都市生活者が、かならずしも数はおおくないが、目につくようになってきた。しかもその先頭には、文筆家や脚本家や音楽家やデザイナーなど、ある意味ではもっとも先端的な都市生活者がたっていて、そのあとを一般のサラリーマンがおいかけるという構造がみえかくれする〔高田、1989：p.52〕。

こうした現象が現実化する背景には、かつては交通が不便であった田舎にまで、近代的で都市的な生活様式が定着し、しかも自動車の普及によって移動の自由度が飛躍的にたかまり、テレビ・電話・ファックスを利用した情報の、それも双方向の通信が可能になったという事情がある。かつて高度経済成長期には、過疎化が進行する農山村地域から都市にむけて人口が移動するのを促進したのと、ある意味ではおなじ要因が、それ自身をつきぬけることによって、わずかながらも人口移動の方向を逆転させているのである。

このことは、すこし視点をずらせると、現代日本における都市が、かつてのように「所属する集団」ではなくて、「準拠する集団」に変化したことを意味する。そのことを杉浦〔1983〕は、概略つぎのように説明している。

たとえば1982（昭和57）年に創刊された、『ポパイ』をはじめとする若者むけの情報誌は、東京のモノとイベントにかんする詳細かつ克明なデータを掲載する。しかし、その読者層の80パーセントは地方在住者である。つまり彼らは、「東京に所属（居住）すること」によって都市的であろうとするのではなく、「東京に準拠する」ことによって都市的であろうとしているのだと考えられる。

このことは、ひと昔まえまでは画然と区別された「都市と農村」のあいだの生活様式と価値観が、際限もなく均質化されつつあるということでもある。そこが都市であろうと農村であろうと、現代の日本においては、すべての市町村が「わが町や村ににぎわいを」というスローガンを、いわば普遍的な町づくり村づくりの目標にかかげはじめたことが、そのことを雄弁にものがたる。すなわち、現代日本の国土には「都市と農村」ではなくて、従来から存在してきた人口の稠密に集中した「密住の都市」と、あらたに登場しはじめた

人口の希薄な「疎住の都市」とが併存しているにすぎない。

そこで、よたび柳田 [1931] のなかの「新交通と文化輸送者」という表題をおもいだすと、「昭和の新交通」を代表する陸上交通手段としての自動車は、テレビや雑誌をはじめとするマスメディアとならんで、まさに日本の国土の全域に、近代的で都市的な生活様式を「輸送」した「文化輸送者」にはかならなかつたことが、あらためてあきらかになるのである。

よみがえる「情報媒体」としての自動車

そこで最後に、現代の日本人にとって、もっとも身ぢか交通機関のひとつとなった昭和の新交通としての自動車をはらんでいる意味と役割をふりかえておく。

そこで最初に指摘しておくべきは、1937（昭和12）年から1967（昭和42）年まで、自動車の普及を貨物自動車が先導した時代には、その主たる意味と役割が戦争と「経済戦争」に奉仕することにあつたという点である。ところが、この期間がすぎて、さらに自動車の普及がすすむと、自動車の主たる役割は、さまざまな意味における「情報の媒体」、あるいは「情報をにやう人間や商品の輸送」に転化した。それは、ひるがえってかんがえてみると、じつは明治・大正時代において自動車に期待された「権威の象徴」「オモチャ」「広告・宣伝媒体」といった意味をにない、役割をはたした存在に、あらためて自動車が回帰したということでもある。このことは、1963（昭和38）年に、自動車を一種の「^{フューチャリッソ}呪物」としてあつかいがちな自動車所有者を対象として、日本最初の自動車用アクセサリーの店が開店していたことによっても示唆される。このころから自動車所有者たちは、自動車を駆使して、手がるで自由な移動という利便性をみずからのものにすると同時に、それを運転し、それとたわむれること自体を、ふだんの日常生活に一種の非日常的な切断をもちこむ、あそびやたのしみとするようになったということでもある。

じっさい、現代の日本においては、自動車所有者は、自分のこのみの自家用自動車にのって、陽光かがやく海辺や草木のにおいのみちた高原へと、かがやかしい時間をかけぬける。あるいは、新鮮な魚や野菜をもとめて、かなりの長距離をドライブする主婦たちがふえてもいる。大都市郊外に美術館やホールが建設されるようになったのも、自動車をつかって、気がるにでかけられるようになったからにはかならない。若者たちのあいだには、自動車を利用したフォックス・ハンティングという名の鬼ごっこのようなあそびが流行したりもした。さらに、自動車に高級な音響機器をつみこんで、それを住宅のなかでは確保

するのがむつかしい自分だけのカプセルにして、たのしんでいる若者もすくなくない。文芸作品やビジネス書の朗読を録音したカセットテープが定着したのも、自動車をあたかも書斎のようにつかっている人びとが増加したからである。

しかも、人間の生物的な能力をはるかに超越した高速で移動する自動車は、運転者に一種の眩暈めまいの快感をもたらしもする。1975（昭和50）年ごろから急増した暴走族の登場が、このことをしめしている。なぜなら、そのこと自体は一般生活者にとって、きわめて迷惑な現象にはかならないが、他方において2点間の距離をいかに高速で移動するかという交通機関本来の機能的な目的が、高速移動それ自体のなかにある種の快感をみいだす、いわば「遊戯性」に転化しうることをものがたっているからである。

こうしてみると、高度経済成長後の日本においては、草創期の自動車がそうであったように、自動車があらためて「威信の象徴」「高価なおモチャ」としての属性をよみがえらせながら、同時に多面的な「情報の媒体機能」を発揮する、あたらしい生活空間のひとつとしての地位を確立しつつあるとすることができる。ただし今日、その利用者は、ごく一部の富裕階層にかぎられた自動車草創期とちがって、圧倒的多数の大衆にひろがっている。つまり、自動車をはらむ意味とそれがはたす役割は、昭和時代という時代を経験することによって、たしかに一巡した。しかし、それはけっして、たんなるくりかえしにおわったわけではなかったのである。

【参考文献】（著者名のアルファベット順、同一著者の著作は発表順）

- ・石井研堂、1920『明治事物起源』春陽堂。
- ・国府犀東、1901「自動車補論」『太陽』（7月5日号）
- ・無署名、1966「東京都内を歩いてみれば、文明退化の音がする」『週間言論』（8月31日号）
- ・尾崎政久、1965『自動車日本史（上）』自研社
- ・総合研究開発機構、1976『現代日本の農村における生活様式の変化の実態研究』総合研究開発機構
- ・総理府、1988『観光白書（昭和63年版）』大蔵省印刷局
- ・杉浦正和、1983「ポパイ少年たちの見つめるもの」『建築と社会』（8月号）日本建築協会
- ・杉浦宗三郎、1927「道路と自動車、軌道」『経済往来』（9月号）

- ・高田公理、1987a『自動車と人間の百年史』新潮社
- ・高田公理、1987b『〈遊戯化〉社会を探検する——レトロ現象からエスニック気分まで』PHP研究所
- ・高田公理、1989a『〈いまどき〉の世相学』PHP研究所
- ・高田公理、1989b「クルマ社会を生んだ遊び心」『中央公論』（11月号）
- ・高田公理、1992「『情報産業論』の再考」（野村雅一・編）『現代日本文化における伝統と変容⑧情報と日本人』ドメス出版
- ・高田公理、1993「新交通と文化輸送者——新しい遊動民の時代」（石毛直道・編）『現代日本文化における伝統と変容⑨昭和の世相史』ドメス出版
- ・柳田国男、1931『明治大正史 世相篇』朝日新聞社（1970『定本柳田国男集（第24巻）』筑摩書房）

第7部 現代日本における生活文化の課題

第1章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像 ——「好奇心」の進化論によせて

第2章 京都の全域を「世界水準の大学都市」に ——21世紀をひらく「ザ・ユバースティ ・オブ京都」構想

第7部 現代日本における生活文化の課題

第6部にいたるまで、筆者は、20世紀の日本の、主として高度経済成長期に焦点をあてて、そこでの生活文化と世相の変容を、可能なかぎり具体的な事実にそくしてえがきだす作業をつづけてきた。そのなかでとりあげた生活の領域と具体相は、おおむね、つぎのような構図にまとめられる。

1. 食生活と食文化

- ① 昭和戦前期における食生活の欧化と「日本的洋食」の成立・普及
- ② 昭和戦後期における食生活の簡便化と趣味化
- ③ 近世末期におけるコーヒーの到来と、それから現在にいたるまでの、その受容と普及の過程

2. 家庭生活と地域社会

- ① 明治維新政府が演出した「家父長制」と、そのマイホーム主義への転化
- ② 人間の情緒安定の装置・制度系としての役割をはたす「共同体」の諸相

3. 労働と生産の現場における生活文化

- ① 職場の人間関係の変容にみる企業社会の近代化の完成とその再編成
- ② 企業人が吐露した「人生の転機」にみる日本人の社会的性格の変容

4. 「遊戯化」する都市と盛り場

- ① 都市の盛り場が本来的にはらんできた「祝祭性」という属性
- ② 盛り場の祝祭性を演出する装置・制度系の変容——「みせ」から「劇場」へ
- ③ 飲酒文化における「泥酔の美学」の退潮と情報産業社会化の趨勢
- ④ あそびとしての賭博における技術革新・装置化とその制度化の過程
- ⑤ 都市の生活とあそびをささえる多様な金融商品と日本人の金銭意識の変容

5. 定着と遊動——その相互関係と生活文化

- ① 定着と誘導の人類史とそこにおける「20世紀」の意味
- ② 近代日本における「移民」にはじまった一般生活者の海外体験とその変容
- ③ 「昭和時代の新交通」としての自動車と、それが生活の革新にはたした役割

ところで、こうしたさまざまな生活文化と世相の変容の結果、日本人の生活意識や価値観、したがってまた、日本人がもとめる生活と人生のありようにも、おおきな変容がもた

らされた。そのことを筆者は、本論文の第1部において、つぎの3点にまとめて提示しておいた。すなわち、

- ① 生活文化における女と男の役割の変容とその相互浸透
- ② 生活がいとなまれる社会をささえる文明＝装置・制度系の「情報（産業社会）化」
- ③ 情報（産業社会）化に対応する文化、すなわち人間の行動原理がたどった「遊戯化」という趨勢

そしてこのことは、この記述の直前に提示しておいた、生活の5つの領域と、そこに生じた、つごう15項目にわたる生活の具体相におけるさまざまな変容をめぐる考察によって、基本的に実証されたとかんがえてよい。

いっぽう、こうした変容の過程で、じょじょにあたらしい時代に対応し、適応するための文化、すなわち人間の行動原理が、「遊戯化」という趨勢をたどりつつあるが、それを、いわば演繹的、あるいは構築的ににえがきだした価値観は、いまだ未分化である。こうした問題意識を筆者がもちはじめたころ、幸運にも筆者に、アフリカのケニア・タンザニアのサバンナへ野生動物を見物に行くという旅行の機会がおとずれた。1992（平成4）年の夏のことである¹。そこで筆者は、ひとことでいえば「好奇心の進化論」という主題をめぐる、なにほどこかのことをかんがえることになった。それは、情報（産業社会）化という人類社会にとっての文明史的転換が到来しつつある現代という時代に適応するための「文化＝人間の行動原理＝価値観」の構築に、一定の意味と役割をはたしうる可能性を秘めているとかんがえられる。

そこで、第7部第1章は、その内容を素描することによって、「生活文化と世相の変容にかんする研究——20世紀日本における高度経済成長期を中心に」と題した本論文のまとめの一端とする。

第1章 『歴史の終わり』とあたらしい人間像 ——「好奇心」の進化論によせて²

はじめに——野生動物をながめる旅から

¹ 旅行期間は1992（平成4）年7月31日から8月13日までの14日間であった。

² 第7部第1章のもととなる論文は、高田「1992」として公刊されている。

野生動物をテレビ映像に撮影しつづけている友人とケニア、タンザニアにいった。

ケニアのナイロビから自動車以南へ5時間あまり、とちゅうで国境をこえ、タンザニア第2の都市アルーシャに到着する。そこからふたたび3時間、土煙のまいあがる、未舗装のがたがた道を走破したところに、めざすゴロンゴロ・クレーターはあった。

ゴロンゴロは、標高 2000 メートル前後の高地に位置する、日本の阿蘇と同規模のカルデラである。面積およそ 260 平方キロメートルの平坦な火口原を、600 メートル程度のたかさの外輪壁がかこんでいる。その頂上から展望すると、火口原の中央に干あがったソーダ湖が白色にかがやき、そのまわりを草原がとりまき、かつ、ところどころに濃厚な緑の森がみえる。それは、類人猿やキリンなどをのぞく、アフリカの野生動物のほとんどが棲息している、多様な生態系をひとつおろそろえた自然のマイクロコスモスになっているのである。

そこで筆者がであった動物は、肉食獣のライオン、ハイエナ、ジャッカル、草食獣のゾウ、サイ、バッファロ、カバ、シマウマ、ヌウ、ガゼルなど、すぐに 20 種類をこえた。むろん、その姿かたちは、みなちがう。彼らのあいだには、くうか、くわれるか、といった深刻な相互の関係もある。しかし、どの種類の動物の表情にも、飼育動物とはどこか異なる、主体的な意志のようなものが秘められている。また、そのふるまいには、爽快な野性を感じられる。そこには、たしかに人工の世界をこえた優雅さが察知された。同行していたテレビ関係者も、おなじことを感じていたようである。というのも、

「ふたりで……やってくるのは、ゾウさんかな、それともバッファロかな。やっぱりゾウさんだ」

「あのヒト（＝メスライオン）、さっきからずっとゼーさん（ゼブラ＝シマウマ）のほうをながめているよ。どうするのかな」

彼らは野生動物のことを話題にのぼせるとき、まるで人格をもった人間であるかのようににはなす。理由をきくと、最初は「何頭」とかぞえていたのが、いつのまにか自然に、「何人」というかぞえかたに変化したのだという。どうやら野生動物をながめているうちに、その優雅な威厳が、彼らを「人間あつかい」させるようになったらしい。

では、なぜ野生動物には、優雅な威厳がみちているのか。たぶん、食や性など、あらゆる行為を、みずからの身体が命じるままにやっけてのける自由な野性の闊達さのせいである。われわれ現代人が、周囲に氾濫する大量の「体外情報」に過剰に左右されがちなのにたいして、彼らは「体内情報」、つまりは身体がかたりかける声に、あらゆる感覚をむけなが

ら、それにすなおにしたがうのである。そこには、心身に有害なストレスのうまれようがないのであろう。そういえば、いつも餌食にされているバッファロの、ライオンにたいする視線には怨嗟の色が感じられる。ある晩、彼らの集団どうしが偶然にであったさいに、子供のライオンをねらって急襲するバッファロの姿を目にしたことがある。そこには、いわゆる動物の本能をこえた、彼らの心のうごきがうつしだされているような気がした。

それだけではない。ゴロンゴロ・クレーターにすんでいるライオンは、ときにむれをはなれて外輪山をこえ、とおくはなれたセレンゲッティにまで「旅行」をし、ふたたびゴロンゴロにかえってくるという³。しかもそれは、けして食物をもとめての移動なのではない。そこでかんがえられるのは、未知の世界への好奇心である。「現在のこの場所」とはことなる、べつの世界へのそぼくな関心は、かならずしも人間に特有のものではないのかもしれない。そこでおもいだすのは、1991年3月18日から8日間にわたって国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「観光の比較文明学」⁴において、参加者のひとりであった白幡洋三郎氏⁵が「あえて単純化をおそれずに」のべた、「観光とは移動をともなう好奇心の充足である」とする「観光の定義」である。

そこで、本論文の第7部第1章においては、ある意味で手あかにまみれた言葉であるともいえる「好奇心」を鍵概念^{キークンセプト}としてあつかいながら、20世紀日本の高度経済成長期を中心とする生活文化と世相の変容のあとにやってきつつある時代に適応することのできる「生活文化＝人間の行動原理＝価値観」の可能性を構想する。

『歴史の終わり』と「最後の人間」

前項にのべた構想の端緒となったのは、フクヤマ [1992] からうけた刺激である。このフクヤマの著作は、1990年前後をさかいにして、独裁的な社会主義諸国が解体し、自由な民主主義をめざしてうごきはじめたという変化に注目しながら、人類にとっての普遍的な

³ 野生動物を撮影する写真家として世界的に著名な岩合光昭氏からのゴロンゴロでの伝聞による。

⁴ このシンポジウムは、谷口財団の助成のもとで開催されてきた「近代世界における日本文明」の第6回シンポジウムに相当する。なお、本シンポジウムで筆者は、The City and Its Model: A Civilization's Mechanism for Self-Expression as the Object of Tourism と題する発表をおこなった。それはそのまま、のちに Takada [1995] として公刊された。

⁵ 国立国際日本文化研究センター助教授（当時）。

「歴史の終わり」⁶を考察しようとした論文として、世界的なベストセラーになった。ここでいう「歴史の終わり」という観念は、カントやヘーゲルの著述に由来しており、その内容を極端に要約すれば、つぎのようになるところの観念である。すなわち、

人類の文明史には多様な社会体制が出現した。しかし最終的には、もっともすぐれたものがのこる。それはリベラルな民主主義ということになるであろう。

カントもヘーゲルもこのようにかんがえていたという〔フクヤマ（上）、1992〕⁷。

ところで、こうした認識の背景には、人間の魂が「欲望・理性・気概」という3つの要素からなりたっていて、なかでも普遍的な歴史にとっては、「不正にたいして憤慨し、他者からみとめられようとする魂の要素」、すなわち「気概（テューモス）」が、重要な意味をもっているとするプラトンの理解がある〔プラトン、1979〕⁸。

⁶ ここでいう「人類の普遍的な歴史」とは、つぎのような意味である〔フクヤマ、1992（上）〕。

人類の「普遍的な歴史」は、世界の通史とおなじものではない。なぜならそれは、人類について知られているあらゆることがらの百科事典的なカタログではなく、むしろ、広く人間社会全体の中に意味深いパターンを探ろうという試みだからである〔pp.109-110〕

カントは、「人間界に起きた一連の愚かしい事件」が表面上はなんら特定のパターンを示していないように思えること、そして人類史が戦争と残虐行為の連続であるらしいことを十分に悟っていた。にもかかわらず彼は、個人のみから見れば混沌このうえない人類史のなかにも、長期間にわたるゆっくりした進歩の歩みを示すような規則的な動きが存在しているのではないかと考えた〔pp.113-114〕。

やや極端な要約をしめせば、上記の内の「長期間にわたるゆっくりした進歩の歩みを示すような規則的な動き」の描出が、ここでいう「普遍的な歴史」の内容をなすとかんがえてよい。

⁷ この点に関連するものとして、フクヤマ〔1992（上）〕にはつぎのような記述がある。

カントのいう最終目標とは、人間の自由の実現ということであった。なぜなら、「社会的立法のもとで自由のあらがいがたい権力、すなわち公正このうえない市民的機構と不可分に結びついている社会の実現こそ、自然が人類に与えたもっともむずかしい課題」であるからだ〔p.114〕。

またカントと同じくヘーゲルも、歴史のプロセスには終点が存在し、地上での自由の実現がその終点であると考え、「世界史とは、自由という意識の進歩にほかならない」と述べた〔p.117〕。

⁸ プラトン『国家』には、翻訳本のページ番号とはべつに、底本のページ番号が記載されている。以下のページ番号は、この底本のページ番号による。さて、そこでの魂の三分説（つぎのページにつづく）

このような人間の魂への理解を前提にすると、もっともすぐれた社会体制とは、生命の安全と財産の追求によって人間の欲望と理性にこたえると同時に、みずからの尊厳、他者

にかんする議論のうち、「気概」にかんする議論は『国家』375A、375Eにはじまるが、より包括的な議論は435C-441Cにおいて展開される。

そこから、いくつかの記述を以下に引用する。

「われわれは、〈欲望〉というものがあるひとつの種類をなして、そのなかでいちばんはっきりしているのは、われわれが渇きと飢えと呼ぶものであると、こう主張してよいのではないかね？」

「ええ、そう主張するでしょう」と彼は答えた [p.437D]。

「魂がそれによって理^{レグ}を知るところのものは、魂のなかの〈理知的部分〉と呼ばれるべきであり、他方、魂がそれによって恋し、飢え、渇き、その他もろもろの欲望を感じて興奮するところのものは、魂のなかの非理知的な〈欲望的部分〉であり、さまざまの充足と快楽の親しい仲間であると呼ばれるのがふさわしい、と」 [p.439D] (中略)

「それではこれで」とぼくは言った、「こうした二つの働きが魂のなかに内在する二つの種類の要素として確認されたことにしよう。そこでこんどは気概、すなわち、われわれがそれによって憤慨するところのものだが、いったいこれは第三の要素なのだろうか、それとも、先の二つのどちらかと同種類のものなのだろうか？」

「おそらくは」と彼は言った、「その一方、すなわち〈欲望的部分〉と同種類のものでしょう」 [p.439E]

「(しかし)欲望が理知に反して人を強制するとき、その人は自分自身を罵り、自分の内にあって強制しているものに対して憤慨し、そして、あたかも二つの党派が抗争している場合におけるように、そのような人の〈気概〉は、〈理性〉の味方となって戦うのではないかね？」 [p.440B]

「そうとすると、その〈理知的部分〉とも別のものなのだろうか、それとも〈理知的部分〉の一種族であり、したがって魂のなかには三つではなく二つの種類のもの——すなわち〈理知的部分〉と〈欲望的部分〉と——があるだけだ、ということになるのだろうか？ それとも、ちょうど国家において、金儲けを業とするもの、統治者を補助する任をもつもの、政策を審議する任にあたるものという、この三つの種族があって一国をまとめていたのと同じように、魂の内においてもまた、この〈気概の部分〉は第三の種族として区別され、悪しき養育によってだめにされないかぎり、〈理知的部分〉の補助者であることを本性とするものなのであろうか？」 [pp.440E-441A]

との対等なあつかいをもとめる気概にこたえるものでなければならない。リベラルな民主主義は、それらを最終的にみたくことによって、よりすぐれた社会体制をめざす人類の普遍的な歴史に終焉をもたらすというのである。

それだけではない。生命の安全と財産の追求への欲望を肥大させてきた「近代」という時代は、人間の気概が、「理性にみちびかれた欲望に従属する」時代であり、リベラルな民主主義が支配する歴史のおわりには、気概をうしなした「最後の人間」が登場する——ニーチェはこうかんがえたという。そこに深刻な問題が発生する。それをフクヤマ [1992] の訳者である渡辺昇一は、その解説 [1992] において、つぎのように要約している。

リベラルな民主主義社会というのは「対等願望」の社会である。……ここに哲学的かつ理論的な矛盾があるわけである。すなわち、みんな平等でいいというのならば、そこには偉大なる芸術も偉大なる学問もないことになってしまう。みんなが同じでいいというのならば、他に優越しようという気がなくなった社会である。ニーチェの言葉を使えば、奴隷の社会と同じなのである（奴隷というのは、「気概」を失ったために降参した人たちの社会なのである）。……（そして）本物の「優越願望」というのは、威信や尊敬を得るためには命を賭けてもいいというところまでいくのであって、それは戦争においてもっともよくあらわれるわけであるが、平時においてはその贖物、あるいはその代用品しかないというのが問題だとするのである [pp.311-312]。

こうした撞着と困難はどうすれば、克服できるのか。フクヤマ [1992] に、明確な回答はない。ただ、1959（昭和34）年に日本をおとすれ、16世紀以来の日本の平和な社会に「歴史のおわり」を察知しながら、日本人の生活文化に希望をつなごうとしたコジェーブの、つぎのような見解に希望をつなごうとしている。すなわち、

だが日本人は、若い動物のごとく本能的に愛や遊戯を追い求める代わりに——換言すれば「最後の人間」の社会に移行する代わりに——能楽や茶道、華道など永遠に満たされることのない芸術を考案し、それによって人が人間のままとどまっていられることを証明した、というわけだ [p.235]。

しかしながら、それでも結局は「気概」という観念にしばられて、のがれることのできないフクヤマ [1992] は、つぎのようにのべて議論を終結させる。すなわち、

大きな懸案事項をめぐる戦いにほとんど決着がついてしまった世界では、純粹に形式的なスノビズムが「優越願望」の、すなわち同僚よりも優秀だということを認めてもらいたいという人間の主要な表現形態になるというのである。……だが歴史の終わりとは、何に

もまして、社会的に有用だと見なされがちなあらゆる芸術が幕を閉じ、ひいては芸術的活動が伝統的日本芸術の空虚な形式主義に下降していくことを意味している [p.236]。

こうしたとらえかたは、ニーチェが、ツァラトストラの口をかりてのべた、つぎのような言葉に呼応しているとかんがえてよい。

「それゆえに（現代人である）諸君は語る。『われわれはまったく現実的であり、信仰も迷信もたない』と。かくして諸君は胸を張る——ところが、ああ、そこは空っぽなのだ」 [フクヤマ、1992（下）：p.215]

人間の魂のもうひとつの要素

前項の最後に引用したニーチェの言葉は、あたかも「ありあまる社会」を達成し、しかも情報（産業社会）化の過程で、あらゆる生活領域に遊戯化の傾向がいちじるしく、かつそれが多数の大衆によって享受されている現代の日本社会を想定してしるされたかのようなものである。だとすれば、本当に「そこは空っぽ」なのか。「純粹に形式的なスノビズム」だけが「優越願望のはけ口」となっているにすぎないのか。このことをつぎに検討してみる。

そこでおもいだすべきは、さきにかかげた鍵概念としての「好奇心」である。それは、一般に「珍しい物事、未知の事柄に対する興味」 [『広辞苑』] を意味する言葉である。それをそのままうけとるならば、まさに現代の日本社会は、おどろくべきひろがりをもって人びとの好奇心が渦まき、そのことが社会全体をうごかしている社会だということができる。じつは本論文の各部各章は、このことを具体的な事実にもとづいてあきらかにすることをめざしてきたのだといってもよいほどである。

たとえば、矢つぎばやに開発されて市場に氾濫し、人びとの興味と関心をひきつづけるあたらしいファッションデザイン、従来なら「和・洋・中」と比較的簡単に類型化された料理の世界に参入する未知の民族の日常食である多様なエスニック料理、彼ら秘境の民族の生活と文化をたずねては紹介するテレビ番組の隆盛など、本論文の各部各章で記述してきたことは、ほとんどすべて、現代日本の生活者の旺盛な「好奇心」に由来しているとかんがえることができる。

むろん、これとよく似たことは、たんに衣生活と食生活とテレビ放送の世界に限定されるわけではない。おびただしい数の美術館や博物館があらたに開館しても、あるいは、おびただしい数のコンサートや展示イベントなどが開催されても、そこになにかの「あたらしい魅力」が感知できる場合には、きわめて多数の人びとが殺到する。さらにまた、宇宙

論や動・植物、考古学の成果や都市の景観、現代芸術やコンピュータ、俳句や短歌、茶道や華道などの室内芸能にたいする興味と関心はたかまるばかりである。

しかも、たいせつなことは、これらの現象が、経済的な意味での欲望をみたす実用上の目的をはなれ、しばしば、人びとの無償の好奇心に根ざしているという点である。じっさい、かつてなら「なにかの役にたつ」こと、とりわけ「産業社会の発展に貢献する」ことを期待された自然や社会や人間にかんする学術的知見が、最近では「めずらしくて、おもしろい」ことだけを期待されて、人びとに受容されているといるとしかいえないような現象が、さまざまな場面で観察できる⁹。たとえば、やや旧聞に属するが、まるでプロ野球の巨人軍の勝利には役だたなかった外国人選手のトマソンになぞらえて、

「役にはたたないが、都市のなかのおもしろい事物や風景」

を「トマソン」と名づけて、都市空間を探索する路上観察学会の活動などは、その典型のひとつである〔赤瀬川、1986〕。しかも、こうしたあそびが、たんに一部の好事家だけでなく、彼らに共感をよせる相当数の人びとのあいだにひろがっている。

じっさい、このような現象がさらに一般化している事実を示唆するような話を、霊長類学を専攻している友人から耳にする機会があった¹⁰。それは、こういう話である。つまり、アメリカ合衆国にある「野外調査センター（The Center for Field Research）」という名称の機関が、熱帯のジャングルやサバンナで調査活動に従事している専門研究者の仕事を、自分自身の交通費や滞在費のほか、一定の謝礼を支はらって、しかも、ボランティアとして手つだいたいという旅行者のために、彼らをうけいれてくれる専門の研究者をさがしているのだという。つまり一般生活者の好奇心は、ここまで先鋭化するとともに、そこには、あたらしい時代のアマチュアの学問がはらむ可能性がほのみえるような気がする。

こうしてみると、現代日本で活発になりつつけている人びとの、さまざまな文化的欲求にささえられた自由時間をうずめる活動、それをささえる博物館や美術館や劇場・ホールなどの文化施設はもとより、経済社会にとって不可欠な工場や流通施設、交通通信施設などの装置、科学・芸術・芸能・技術・スポーツなどの制度のおおくもまた、人びとの好奇

⁹ 本論文においても、第1部第2章でふれた各種カルチャーセンターの隆盛、第2部補論の冒頭にするした青森県の三内丸山遺跡をはじめとする縄文文化への関心のたかまり、都市と盛り場の遊戯性にむらがる人びとの増加などは、いずれも、このことをうらがきしている。

¹⁰ 1998年4月現在は京都大学理学部自然人類学教室に勤務している山極寿一氏よりの伝聞による。

心をみたくために存在し、機能していることがわかってくるのである。

むろん、これらを見ずからの生活をなりたさせるための「業」としている人びとにとって、それらが彼らの「欲望」にこたえ、かつ「気概」をみたく契機となっていることは否定できない。さらに、こうした「業」を成立させるためには彼らが、なみなみならぬ「理性」の力を発揮することを要求されることもいうまでもない。しかしながら同時に、それが彼ら自身の好奇心にはたらきかけ、それを満足させる魅力がないなら、それらを購入し、消費する人びとの好奇心にこたえることも不可能なのであって、その成果が「商品」となりえないこともまた当然の事実なのである。こうしてみると、未曾有の近代的工業化の成功がもたらした、リベラルな民主主義を奉じる、ゆたかな経済社会にあっては、欲望・理性・気概もさることながら、無償の好奇心としかよびようのない人間の魂の要素を措定せずに、そこでの生活、ひいてはその歴史の動向をとらえることは困難であるようにおもえる。

プラトンにはじまり、近代以降はカント、ヘーゲル、ニーチェ、トックビル、コジェーブなどの思惟のやすりにかけられたのち、今あらためてフクヤマによってかたられる「普遍の歴史」という観念をささえる人間の魂の要素をめぐる仮説は、いうところの「歴史の終わり」をむかえることによって、それらをすこしずつらせたところにイメージされる諸要素を付与してかんがえなおすことが必要になりつつようにおもえるのである。

好奇心は歴史をうごかせるか

こうした問題意識を喚起する契機は、フクヤマ自身の著作〔1992（下）〕のなかにかくされている。たとえば彼は、コジェーブの著作を引用しながら、

（歴史の終わりには）哲学や言説による英知の探求だけでなく、まさに英知そのもの（がうしなわれ、そこには）世界と自己の（言説による）認識など、もはやいっさい存在しない〔p.222：（ ）内筆者〕。

とのべている。しかしながら現代世界、とくに現代の日本社会に氾濫し、流通している広範かつ膨大な情報は、まさに「世界と自己とそのかわり」をとらえようとする人びとの格闘の結果であるのではないか。あるいは彼は、つぎのようにもしるす。

経済成長の結果として、人類の均一化がこれからも進んでいったら、どうだろう。相対主義の理念は、いまよりはるかに奇妙なものに思えてくるかもしれない。なぜなら民族の「善と悪についての言葉（要するに価値観）」の相互の見かけ上の差異は、歴史的発展

の特定の段階における文明の遺物であることがはっきりしていくにちがいないからである [p.262: () 内筆者]。

しかし、それは、つかいふるされた発展段階論の単純な適用であるようにおもわれる。同時に、いわゆる「ボーダレス化」が進行する現代世界にあって、その影響を直接に受けながら、むしろ「ボーダー化」を促進しているイスラム世界の具体的な現状に目をやると、ここに引用したフクヤマの世界のとらえかたは相対化されざるをえない¹¹。そのことを、たとえば大塚 [1992] は、つぎのように説明する。

ボーダレス化の進行にもかかわらずというより、むしろそれゆえにヒトとヒトとの間のボーダーが築かれる可能性 (がある。イスラム圏のエジプトなど) 一部の途上国の都会のショーウィンドーにこれ見よがしに飾られている輸入消費財は、南北間の経済格差のみならず、国内の貧富の差をいやでもみせつけ「階級」対立を激化させる効果をもつ。……そして、そのような先進国からの消費財の洪水を、一部の急進的ムスリムは、西洋的・物質主義的、反イスラーム的価値観の浸透を目指す陰謀と解釈した。(つまり) いわゆるファンダメンタリズムは、ボーダレス化の産物ともいえる側面ももっているのである [p.343: () 内筆者]。

それだけではない。「人類史の数千年にわたる政治という問題は、まさに認知の問題を解決するための努力と見なすことができる」とのべることで、フクヤマのいう歴史は、けして人類史ではなく、たんに国家の歴史でしかないことを自認する。たかだか数千年の歴史とは、穀物生産をとまなう農業にささえられた国家の原初的な成立から、化石燃料の利用をとまなう工業にささえられた地球上の土地の国家による完全な分割にいたる歴史にすぎないからである。そこでの歴史を左右した人間の魂の要素は、たしかに欲望と理性と気概であったとかがえることもできる。じっさい、そのことを最初に指摘したプラトン [1979] は、すでに注8において引用したように、じつは「国家」をモデルとして「人間の魂の構造」を構想したのであった。それを再引用すれば、

¹¹ ここでは、イスラム世界における「ボーダレス化にとまなうボーダー化」の事例をあげるにとどめるが、ひろく世界に視野をひろげると、ヨーロッパ連合という「ボーダレス化」が進行する一方で、スペインのカタルーニア、西仏国境におけるバスク、グレートブリテン島におけるスコットランドやウェールズ、中国におけるチベット、インドにおけるシッキムなどの「ボーダー化」が同時に進行しつつあることが容易におもいだされる。

「それとも、ちょうど国家において、金儲けを業とするもの、統治者を補助する任をもつもの、政策を審議する任にあたるものという、この三つの種族があって一国をまとめていたのと同じように、魂の内においてもまた、この〈気概の部分〉は第三の種族として区別され、悪しき養育によってだめにされないかぎり、〈理知的部分〉の補助者であることを本性とするものなのであろうか？」 [pp.440E-441A]

ところが、このような国家をモデルとした人間解釈によっては解明できない人間類型もまた実在する。やや唐突ではあるが、ここでは、1970年代におこなわれた、友人の人類学者によるアフリカのトングウェ族の研究成果を、極端に要約して、かかげておく¹²。

トングウェ族はアフリカ、タンガニカ湖畔で焼畑を中心とする農業をいとなんでいる人びとである。その社会生活を制御する原理は、富の蓄積や威信の増大のための努力を最小限にとどめることによってそれらを平均化し、相互のあいだの「ねたみ」を排除することにある。では、そこに「世界と自己の認識」が存在しないかということ、そんなことはない。彼らの好奇心は非常に旺盛なのであって、周囲の自然、それを構成する動植物にかんする知識は、実用性の可否にかかわらず、膨大かつ体系的である。そして、訪問者として登場した人類学者の生活や価値観にたいしても好奇心にみちた多様な質問を発した。

すなわち、トングウェ族の世界においては「欲望」や「気概」より、むしろ「(無償の)好奇心」が、彼らの「歴史」をうごかす要因としておおきな役割をはたし、「理性」はそれに奉仕する役まわりを演じているのである。それが、そのまま現代の日本社会に適用できるわけではない。しかし、欲望や気概は、むしろ人びとが「国家に編成されている」という特殊な条件のもとにおいてのみ、歴史をうごかす要因として過剰に顕在化する人間の魂の要素なのだというみかたもできないわけではないようにおもわれる。

こうしてみると、プラトンからフクヤマにいたる人間の普遍的な歴史と、それをささえる人間の魂の構成要素への認識は、「国家の歴史をうごかす要因」としては「好奇心」のはたす役割の比重が相対的にちいさかったがゆえに、それを無視しても、彼らの理解の完結性が維持しえたのだということにならないか。ところが今日、本論文の随所で指摘してきたように、先進工業社会を中心として、人類社会全体においても、近代工業が基幹産業

¹² この人類学者によるトングウェ族の生態人類学的研究の成果は、掛谷 [1975]、その他として公刊されている。ただし、ここでは筆者が、彼じしんからきくことのできた内容をふくめて要約・記述した。

なお、彼は1998(平成10)年現在、京都大学アフリカ地域センター教授の任にある。

としての地位を喪失し、その席を「ひろい意味での情報産業」にゆずるとともに、こうした変化のつよい影響をうけて、国民国家という制度が溶解をはじめ、あるいは、その意味を変質させはじめたことによって、「好奇心」という人間の魂の要素を無視しては、時代のながれが理解できなくなるとかんがえることができるのではなかろうか。

このようにかんがえたうえで、あらためて有史以後の歴史をふりかえってみると、そこにもまた、人間の好奇心が濃厚な影をおとしてきたことがうかがえる。たとえば、地中海世界と西アジアの文物の交流をきりひろくことになるマケドニア王アレクサンドロスの東方遠征のきっかけは、香料の原料が豊富なシバの国を手中におさめたいとする意志に由来していた。文物の東西交渉を媒介したシルクロードがつたえたものも、絹や象牙や真珠やガラスなどの贅沢品ばかりである。そして、ヨーロッパ近代の黎明期において、新世界の発見を触発したのは、ペッパーをはじめとする香辛料であったし、アメリカ独立戦争もまた紅茶にかかる関税をめぐる解発されたのであった。

さらに、人間の自然や社会にたいする知識欲のありかたにおもいをはせれば、ことはいっそう明解になる。じっさい、近代という時代の科学者のおおくがこころみた知的探求もまた、最初から実用上の応用をめざしたのではなくて、自然や社会へのそぼくな好奇心によって触発された。たとえば、結果として近代から現代にかけての物質文明を構築するうえで必要不可欠なエネルギー源となる電気現象も、最初は異種金属の接触によって発生し、それを動物の神経に接触させると、筋肉の運動を触発することの不思議に魅せられたアイザック・ニュートンの手によって知的探索がはじめられたのであった¹³。

このように、国家の時代においても、歴史のおおきな動向を決定した契機は、かならずしも人間の生存に直接に関連する物量やエネルギーそのものではなかった。むしろ結果として、これらの事業を理性のみちびきによって成就させた者は、富を手中に入れて欲望をみだし、みずからの気概にこたえることができた。しかし、それに最初の契機をもたらした要因は、しばしば人間の無償の好奇心をみだす情動的刺激にほかならなかったのである。

好奇心の拡張——表現的好奇心

こうして、人類の歴史は好奇心と無関係でなかったこと、現在から将来にかけては、い

¹³ ニュートン（1642～1727）の時代には、いまだ科学者（Scientist）という概念は存在しなかったが、ここでは便宜上、彼も科学者であったとみなしておく。

よいよ無関係でありえないだろうことが判明する。とはいうものの、さきの事例にあげた香料や香辛料にたいする興味や関心を好奇心と名づけることは許容されるのか。この問題にこたえるために、ここでは「好奇心」を「心から解放」して、かりに「好奇性向」と、より一般的に普遍化してみる。するとそれは、あらゆる生命現象に普遍的にそなわっている重要な属性だということが判明する。

たとえばゾウリムシは、よく知られているように、通常は細胞分裂によって無性的に増殖する。ところが、分裂をくりかえすか、環境条件が悪化したときには、2匹の個体が「セックス」をする¹⁴。生命力のおとろえたゾウリムシは、一時的に他の個体と合体して、自分自身とは異なる他の個体の遺伝情報をとり入れることによって、それを再活性化するのである¹⁵。こうした性行動のもつ意味は、生物一般に敷衍することができる。それを筆者は、かりに遺伝的好奇性向が作用しているのだと解釈しておきたい。

それがやがて、いますこし高等な動物である昆虫や魚や鳥や哺乳類になると、生理的レベルにおいても好奇性向を指定することができるようになる。通常は個体生活者であるのに、あるとき群生相をしめして大移動するアフリカのトビバッタ、誕生ののち大洋を回遊して、ふたたび誕生した河川に回帰するサケ、季節移動をくりかえす多種類のわたり鳥、そして、ときに個体数が過剰に増加したために居住地をはなれて集団自殺をはかるタビネ

¹⁴ ゾウリムシの性は、人間のように2種類ではなくて、6種類が区別されている。その6種類の性のあいだで遺伝子の交換がおこなわれるとかがえてよい。

¹⁵ よく知られているように、生殖のさいには親から子へと遺伝子が複製されてつたえられる。しかし、複製には失敗がつきものである。その事例を、文書複製（コピー）機械に類推的に適用すれば、つぎのような思考実験ができる。いまかりに、あるコピー機械をもちいて文書のコピーを作製し、おなじ機械をもちいて、そのコピーから別のコピーを作製するという作業をつづけると、ノイズが混入することによって、部分的に解読不能のコピーが作製されるようになる。ただし、その場所はコピー機械の個性によって、すこしずつ異なるのが普通である。じっさい、べつのコピー機械をくりかえしもちいて作製したコピーと比較すると、解読不能の場所が異なっている場合がおおい。そんなとき、別べつの機械で作製したコピーを照合することによって、当初のオリジナル原稿を復元することができる。遺伝子のコピーも比喩的にこれと同様なのであって、性の異なる個体のいずれもが、みずからの遺伝子の半分ずつを提供し、たがいにおぎないあいながら、つぎの世代の個体を誕生させることによって、まちがったコピーの機会を減少させることができる。ここに、性という現象ははらんでいる遺伝子の相補作用がある。

ズミなどには、生理的な好奇心向があるのだと解釈するのである。むろん通常、これらの動物の、これらの行動の背景には、食糧の減少やストレスの増大、包括適応度¹⁶などが作用していると説明される。しかし、一定の条件のもとにおいては、環境のことなる世界に移動せざるをえない本能がくみこまれた生理的メカニズムが作用するのだとかがえれば、そこに生理的好奇性向という概念をあてはめることも不可能ではないはずである。

つぎに、高等哺乳類の行動を観察すると、彼らの好奇心向には、なにがしかの心理的要因、つまりは「心」の作用が関与しているとかがえざるをえなくなる。本章の冒頭ちかくにしるした、数百キロにおよぶライオンの「旅行」は、こうした段階にたった、いわば心理的好奇性向の原初的な発露であるとかんがえられる。どうやら彼らは、ときに「現在のこの場所」をはなれて、どこかとおくの世界に足をふみいれたいくなるのであるらしい。ただし、すくなくともライオンの場合のそれは、現段階の観察や研究の結果にかんするかぎり、たんに「現在のこの場所以外」にむかう即物的好奇心にとどまっていると解釈しておくほかないのである。

ところが、それが霊長類のなかでも類人猿¹⁷になると、自己を対象的に認知したうえで、他者と同調して相互関係を構築し、その過程をあらためて自己認識に投射するという、錯綜した様相を呈しはじめる。このことを山極 [1994] は、つぎのように説明する。

チンパンジーとボノボでは、食物の分配は「物乞い行動」によっておこる。……食物をねだられた者はすぐこの要求に応じることはないが、執ように迫られると手や口から相手が食物の一部をとることを許す。食物をねだられた者はなかなかその要求を拒むことはできない。だが面白いことに、優位者が劣位者にねだるより、劣位者が優位者にねだる方が食物を得られる確率が高いという。劣位者は優位者の要求を敢然と拒むことが多いのである [p.156]。

食物が譲渡されることによって、渡されたほうに笑い顔が浮かび、遊びが生じることもあるだろう。それが食物を与えた者への報酬となる。そして、この行為は霊長類がこれまで抱いたことのない感情を生み出す可能性がある。もともと遊びという行為は、相手の力

¹⁶ 個体としての自分自身は死んでも、子孫が自分の遺伝子をひろげてくれれば、それは生物として成功したことになるという仮説にもとづいた適応のしかたを包括適応度とよぶ。

¹⁷ 類人猿に分類される霊長類は通常、ボノボ、チンパンジー、ゴリラ、オランウータン、テナガザルの5種類である。

と行動を読み、相手の変化に応じて自分の行動を組み替えるという能力を必要とする。これは、たんに刺激反応するだけでなく、両者で協力しながら文脈を練りあげていく複雑な作業である。類人猿には、これを巧みにこなし、遊びを長続きさせる能力がある。そして、鏡の実験であきらかなように、自己を認知する（鏡に映った自分を他者でなく、自分の姿として理解する）能力がある [pp.164-165]

そこには、あきらかに同種の他個体にたいして「相互におなじ類に所属する存在である」という認識を投射しながら、おなじ行動を交換しあう双方向的な同調を「あそびとしてのたのしむ」と同時に、自己が他者とは「ことなった存在でもある」という認識をとおして、その過程そのものを、好奇心をもってたのしむ能力が存在するということになる。いいかえればそこには、ライオンを具体的な素材として想定した哺乳類段階の即物的好奇心を、いったん自分自身にてりかえすことによってはじめて可能となる知的な探求と、それをとおした発見のたのしみといった心理作用が想定できる。だとすれば、彼らの好奇心は「対自的好奇心」、あるいは「発見的好奇心」とでも名づけるのが適切であろう。ただし、彼らの好奇心はそこまであって、それを何がしかの「表現」として外在化する方法は、いまだ保有していない。というのも、

ふたたび山極 [1994] を引用すると、

人類の（食物）分配行動の特徴は、相手に乞われなくても与えることにある [p.165]。

からである。つまり、ぎゃくにいうと人類以外、いかに類人猿といえども、「相手に乞われなくても与える」という行為は存在しないのである。その行為を、かりに「自発的な意思の表現行動」と解釈すれば、その存在と非在が、人類と類人猿をわけへだてているといえる¹⁸。とくに、自己と他者¹⁹とのあいだの類似性と差異性に刺激されて他者に接近し、それを探求し、そこに類似性と差異性を発見し、しかるのちに、その結果を文字や図柄や音響など、各種の情報に託して「表現」しようとするのは、現段階の知見の範囲内では、人類に特有の行動様式にほかならないからである。それは、かりにヘーゲルの用語をつかえば、「即自的かつ対自的な好奇心」とよべるかもしれない。そしてそれらが、各種の学問や芸術、芸能や技術やスポーツなどの名でよばれるところの、さまざまな文化を分泌す

¹⁸ いうまでもなく食物それ自体は「物質」である。しかし、それを他者にあたえるさいには、あたえるがわの「心」をつたえる「情報メディア」ともなる。こうした論法は本論文の随所でもちいられてきた。

¹⁹ ここでいう「他者」は、人間にかぎらず、「自己以外の存在」のすべてを意味している。

ることになる。

こうしてみると、動物の好奇心向は、その進化の段階を想定しながら、かりにつきのよう整理することができる。

身体的好奇心向

- ・ 遺伝的好奇性向（生命一般の原初的好奇性向）
- ・ 生理的好奇性向（昆虫・魚類・鳥類・哺乳類段階の好奇心向）

心理的好奇性向

- ・ 即物的な好奇心（先験的好奇心。高等哺乳類段階の好奇心向）
- ・ 対自的な好奇心（発見的好奇心。類人猿段階の好奇心向）
- ・ 即自的かつ対自的な好奇心（表現的好奇心。人間段階の好奇心向）

なお、好奇心向は、どの段階においても、はじめから相互に矛盾する正反対の契機を、そのうちにはらんでいる。というのも、ゾウリムシのセックスが、みずからの遺伝子を子孫につたえ、同時に他個体の遺伝子をとりこむことによって生命力を再活性化することをめざすのと同様、好奇心向は一般に、自己同一性（アイデンティティ）の貫徹と他者との遭遇による変身（メタモルフォーゼ）を、つねにふたつながらに結果としてもたらすからである。

カラオケナイゼーション（自己表現遊戯）

一方において、好奇心を拡張して好奇心向ととらえ、他方において好奇心に触発された発見や表現活動までもその範疇にふくめることによって、いよいよ好奇心が現代社会の動向を左右する要因として無視しえない地位をしめることになる。このことは本論文の第1部第2章、あるいは第6部第1章において、すでに示唆したところである。

じっさい、目や耳や鼻や舌や肌に作用して、人間の心身をよろこばせ、たのませ、めずらしがらせ、おもしろがらせる言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわり——これらを一括して「情報」という概念でとらえなおしてみると、現代という時代は、それらがもたらす心と体の充足のゆえに、情報が人びとに需要される時代なのであった。また、このように、ひろい意味で情報だけが巨大な市場性をもつ社会は「情報産業社会」とよばれるのがふさわしいのであった。

それは、地球上における地理的探検がひととおり完結し、稠密に秩序化された産業社会が姿をあらわすことによってうしなわれた人間生活のフロンティアを、無限の多様性と重

層性をおびた情報の世界に、いわば人工的に回復しようとするところみでもある。現代とは、そうした情報の世界と対峙しようとする人間の心と体、それらを媒介する、さまざまな情報メディアが、あたらしい人間生活のフロンティアを形成することによって、ありあまる人間の生命のエネルギーを吸収し、さきにたってみちびいていく時代なのである。

しかも現代の日本人は、そうして受容した情報を、みずからの内部において咀嚼・変形し、なにがしかのかたちをとおして表現しようとする指向性をあらわにしめす。このことは、1974（昭和49）年に開発され、現在なお隆盛の途上にある、いわゆる「カラオケ」において顕著である。それが日本人の性格を劇的に変化させ、あるいは歌をはじめとする多様な文化とのかかわりかたに、おおきな変容をもたらしたことは、すでに本論文の第1部第2章においてくわしく論じたとおりである。

しかも、それは歌の世界の話だけではなかった。現代の日本においては、多数のアマチュアバンドが輩出し、年配の主婦が「自分史」を執筆し、自費を投じて出版する。新聞や雑誌の読者投稿欄もふえる一方である。現代の日本人は、みずから身銭をきってでも人前でみずからを表現し、それを他者にサービスとして提供するという行為一般のたのしさとおもしろさに目ざめはじめたのであった。それはカラオケにちなんで、ひろく「カラオケナイゼーション」とでもよぶべき、あたらしい現象であるといえる。

こういうふうにかんがえながら、現代日本の消費社会を展望してみると、そこで巨大な市場性をもつ商品やサービスのほとんどは、個々の生活者がさまざまな情報を摂取し、それらを処理し、それぞれの自発性のままに表現することのできる情報メディアとしての機能をはらんでいることが判明する。さまざまなファッションに関連した商品、各種の映像音響機器、パーソナルコンピュータやワードプロセッサ、さらには飲食物やそれを提供する各種の商店や飲食店、それに住宅や自動車までもが、人びとの表現的好奇心をみたすことによって市場性を確保しているのであった。

ところで、ひろい意味での好奇心と、かつて『国家』においてプラトンが措定した人間の魂の3要素とは、相互にどのような関係を取りむすぶのか。そこで想起すべきは、第1部第2章において論じた、「あたらしい情報がうみだされるさいの3つの条件」である。それらを、あらためて列挙すると、

- ① 農業と工業の生産物である物質とエネルギーの消費
- ② 日常生活のなかでは、けしてであうことのない情報体験
- ③ あらゆる情報刺激の意図的な断絶

ここでいう①の条件は、リベラルな民主主義が実現した「ありあまる社会」における人びとの生活行動そのものである。これにつづく②は、そういう社会にいきる人びとの好奇心がつよくもとめるところのものにはかならない。さらに③は、多忙化する喧噪とストレスの現代社会において、人びとがもとめはじめた「いやし=ニルヴァーナ=涅槃願望」にこたえるという課題とふかく関連している。そして人びとは、こうした条件をみたされることによって、なにがしかの自己表出、自己表現を実現するというわけである。

こうかんがえてみると、じつは現代の情報産業社会にいきる人びとの魂の3つの要素は、プラトンの措定した「欲望・理性・気概」を、すこしずらせたところに位置していることがわかる。それらをたがいに対応させてみると、

欲望……………好奇心
 理性……………「いやし（≡ニルヴァーナ）」願望
 気概（テューモス）……………みずからを「ものがたる」表現欲求

といった配置図を想定することができるのではなかろうか。

主導的産業としての旅と観光

では、このような属性をあらわにしめす情報産業社会において、もっとも主導的な役割をはたす産業は一体なになのか。いまだ、近代工業社会の色彩が濃厚であった昭和戦後期には、容易にそれが特定できた。たとえば昭和20年代なら炭坑や鉄鋼、昭和30年代なら造船や重軽いずれもの電機・化学工業、昭和40年代なら自動車産業などが、巨大な市場を支配し、広範な産業分野を牽引することによって、高度成長まっただなかの経済社会全体を活性化する主導的な役割をはたした。

しかし今日、そんな産業はなかなかみあたらない。いかに情報産業社会化が進行しても、マスコミや通信、ファッションや音響機器、コンピュータ産業などが、かつての造船や自動車産業と同様の主導的役割を背おえるわけがない。かといって、ひと昔まえの主導的産業が、往時の地位を回復するわけでもない。そこでは、べつの範疇の人間のいとなみが経済社会を主導することになる。

そこでおもいだすべきは、アメリカのコンサルタント会社PPHファンタスが、全米の企業の幹部800人を対象として、

「国際企業の本社所在地として、もっとも理想的な都市」

を質問したアンケート調査の結果である。それによると、

シンガポールが1位。以下ロンドン、ニューヨーク、ワシントン、トロント、フランクフルト、ブリュッセル、香港、ダラス、シカゴの順。最下位はワルシャワで、マンチェスター、ヘルシンキなども下位だった〔『朝日新聞』1992年9月5日〕。

という。この結果は、なにをものがたっているのか。おそらくは産業の形態、それが提供する商品やサービス、さらに産業の波及効果までもが多様化し、分節化しながら複合化せざるをえない情報産業社会においては、多数の企業が立地を希望する都市経営のありかただけが、その都市と、それが所属する社会に経済的文化的な活性をもたらすことができる。いいかえれば、単一の主導的産業にかわって、都市や地域の経営が経済社会を主導する役割をはたすのが、現代という時代なのである。

ならば、現代の都市や地域の経営は、いったい何をめざすのか。政治的安定と治安のよさ、交通・通信や金融機関、住居・ホテル・会議場・文化施設などの充実、おだやかな気候、景観のうつくしさ、多種類の消費財が安価に入手できることなど、そこには、さまざまな条件が想定できる。しかし、「国際企業の本社の立地」という当初の設定をおもいだせば、それが、長期滞在型の訪問者がよるこんでおとずれる都市の条件と、かなりの部分が重複するであろうことが予測される。その点において、従来から、やや過剰な秩序維持や清潔ずきなど、いくつかの欠点をのこしながらも、もっぱら「観光客によるこぼれる快適な都市」をめざしてきたシンガポールが第1位にランクされたことは示唆的である。

このことは、本論文の第5部序章において展開した、都市と盛り場が発揮する魅力とも密接に関連する。すなわち、現在から将来にかけての経済社会の活性を主導する人間のいとなみは、単一の産業の活性化という課題から、魅力ある総合的な都市や地域の経営に推移せざるをえない。そしてそれがめざすところは、即物的・発見的であると同時に、表現的でもある現代人の好奇心にはたらきかけ、それを充足させる装置と制度を創出することにあると整理することができる。

こうした目標を実現するための知恵やアイデアの源泉は、おそらくは旅行や観光といった人間行動と、それに関連する産業に蓄積されていくほかあるまい。なぜなら、それこそがまさに人びとがなれしたしんでいる日常の生活に、時間的な、あるいは空間的な切断をもちこみ、それを成立させている境界を越境することによって、彼らの総合的な意味での好奇心を充足させる社会基盤の整備とサービスの提供を可能にするからである。

観光現象から人類文明をとらえなおす可能性

野生動物を見物することを目的としたアフリカのサバンナへの旅行と、F.フクヤマの著作『世界の終わり』に刺激されてしるしてきた本論文の第7部第1章は、いちおうこれで完結する。しかし同時に、それはあたらしい問題の発掘の過程でもあった。

その第1は、好奇心とあそびの関係である。かりに「好奇心の進化」という課題が設定できるとすれば、それは自由で自発的なあそびのなかで達成されたにちがいない。そのあそびを、たとえばカイヨワ [1973] は20世紀なかばに「アゴン（競走）・アレア（運）・ミミクリ（物真似）・イリンクス（眩暈）」に分節化した。ところが今日、20世紀も最後をむかえた段階において「あそびというカテゴリー」は、人間の表現的好奇心とであることによって、あらたな統合の過程をたどっているのではないかとおもわれる²⁰。

第2は、やや唐突ながら、梅棹 [1957] が提起した「文明の生態史観」でさえもがのこした、つぎのような問題である。すなわち、

「なにゆえに、ユーラシア大陸の中央部に発生した牧畜文明は、周囲の農業文明にたいして、あれほど破壊的な作用をおよぼすことになったのか」

つねに遊動をつづけざるをえなかった牧畜社会の過激な好奇心は、もしかすると、着実に一步步地歩をかためていく農業社会の想像力のまどろっこしさを許容できなかったのかもしれない。そういう妄想が、現代という雄大な遊動の時代にはよみがえってくるような気がするのである。

そして第3は、おなじく梅棹 [1963] が提起した「情報産業論」にかかわる問題である。「好奇心」といい、「いやし」願望といい、「表現欲求」というも、それらは「想像力」や「情報」というカテゴリーと不可分ではありえないからである。一種の文明の発展段階論として展開された「情報産業論」を、こんどは、欲望や理性や気概をこえた地平において、もしかすると「表現的好奇心」そのものの自己運動の過程としてとらえなおすことができるかもしれない。

それは、第6部第1章で論じた「観光」における「光」、すなわち価値ある情報にであり、ひるがえって、みずから「光」をしめそうとする「観光」という人類のいとなみを

²⁰ きわめて下世話な事例で恐縮だが、たとえば「カラオケで歌をうたう」というあそびには、すくなくとも3つの要素がふくまれている。①プロの歌手のものまねをする＝ミミクリ、②他人よりじょうずにうたいたい＝アゴン、③これら2つが達成されたら「天にもものぼる心地＝イリンクス」が味わえる。こうした思考実験をかさねると、カイヨワの類型化が、過渡的に解体される必要が痛感される。

媒介にして、人類文明の歴史と現在の姿を、あたらしいかたちでえがきだす、そういう知性と感性のいとなみに発展していくような気がする。どうやら旅行や観光は、たんに現在から将来にかけての経済社会を、さきにたってみちびいていく産業であるだけではなくて、人間とその文明を総合的にかんがえなおす好奇心の焦点ともなりはじめているようにおもわれるのである。

【参考文献】

- ・ 赤瀬川源平ほか、1986『路上観察学入門』筑摩書房
- ・ カイヨフ、R.、1958（多田道太郎・訳、1973）『遊びと人間』講談社
- ・ Fukuyama, Francis、1992、The End of History and the Last Man、フクヤマ・F、
（渡辺昇一・訳）1992『歴史の終わり（上下）』三笠書房
- ・ 掛谷誠、1975「トングウェ族の生計維持機構」『季刊人類学』（6-2）
- ・ 大塚和夫、1992「ホーダレス時代のボーダー」『中央公論』（11月号）
- ・ プラトン・著、藤沢令夫・訳、1979『国家（上）』岩波書店
- ・ 高田公理、1992「ネオ・ノマド（遊動民）の時代」『中央公論』（7月号）
- ・ 高田公理、1992「観光対象としての都市——文明の自己表現装置」『中央公論』（9月号）
- ・ 高田公理、1992「『好奇心』の進化論——経済社会を主導する観光産業」『中央公論』（12月号）
- ・ 梅棹忠夫、1957「文明の生態史観序説」『中央公論』（2月号）
- ・ 梅棹忠夫、1963「情報産業論」『放送朝日』（1月号）
- ・ Takada, Masatoshi、1997、The City and Its Model: A Civilization's Mechanism for Self-Expression as the Object of Tourism、Japanese Civilization in the Modern World IX Tourism、*Senri Ethnology Studies no.38*、National Museum of Ethnology
- ・ 渡辺昇一、1992「訳者解説（これからの日本人にきわめて貴重な「指導原理」を与えてくれる歴史的名著）」（フクヤマ・F、渡辺昇一・訳、1992『歴史の終わり（下）』三笠書房
- ・ 山極寿一、1994『家族の起源——父性の登場』東京大学出版会

第2章 京都の全域を「世界水準の大学都市」に

——21世紀をひらく「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想

学術研究が、実用上の効用には貢献しなければならないという理由は存在しない。しかし、ときに学術研究の成果が、実用上の効用を発揮する場合があってもよい。これが筆者のかんがえかたである。

本論文の第7部第1章においては、情報（産業社会）化という人類社会にとっての文明的転換が到来しつつある現代という時代に適応するための「文化＝人間の行動原理＝価値観」の可能性のひとつを検討した。そこに展開した仮説的考察は、そのまま現代日本の都市の将来的発展に一定の示唆を提供しうる可能性をはらんでいると筆者はかんがえる。そこで第7部第2章においては、そうした仮説的考察を、高度経済成長期以降、どちらかという活力を低下させつつある、むかしの日本の首都であった京都¹に適用しながら、その将来的発展の方向性をさしめず構想を提示しておきたい。

なお、さしあたりここでは、京都という具体的な1都市を想定した構想を提示するが、京都という都市の特殊性を捨象して、それを他の都市の特質に代替すれば、その基本をささえる思想は、現代日本の都市一般に敷衍して適用できる面がすくなくないと、筆者はかんがえている。

第1節 本構想の全体像

「京都の未来」を構想するにあたって

794（延暦13）年における平安遷都から1100年ちかく、天皇の居住地と中央政府が東京に移転するまで、京都は日本の「みやこ」であった。それ以降も京都は、第4回内国勧業博覧会の開催などを契機にして、近代産業の移入と、その日本的再編成の先頭にたち、山紫水明の自然と歴史都市の風格を保全しながら、ゆたかな近代的市民生活の基盤整備に力をそそいできた。つまり京都は、つねにあたらしさをめざす「永遠のみやこ」であろう

¹ 京都という都市は、筆者自身が生まれ、そだった都市でもある。その都市の将来のために、筆者の研究が多少なりとも貢献しうるとしたら、それは望外のよろこびである。

としてきた。そして、そのために必要不可欠な知識や技術を子弟につたえる近代的な教育事業に注目し、全国にさきがけて、市民みずからの力で小学校を建設し、さらに中学・高校・大学の誘致にもつとめた。

その結果、多数の国・公・私立の大学が設立され、古来「学問の府」とみなされてきた都市にふさわしい機能をにないながら、現代につながる「京都文化」をそだてることに成功した。げんに日本全国からあつまる大学生数は、いまなお京都市の人口の10パーセントをしめており、この数値は日本の13大都市のなかで第1位の高率となっている。

ところが近年、よりひろいキャンパスをもとめて、大学が「市外へ流出」するようになった。このことが、京都の都市としての活力を全体的に低下させつつある。なぜなら今後、きわめてひろい意味での「情報産業社会化」が進行していく時代に、学問・芸術・芸能・技術・スポーツなど、あたらしい知的・情緒的・意志的な創造活動が、そのまま都市の文化をはじめ、産業や経済、品格や政治上の「力」の源泉とならざるをえないからである。

そこで本構想は「京都の全域を世界水準の大学都市」として再開発することを提案する。それは、すでに活動している「京都・大学センター」の先進性に触発されながらも、たんに「既存の大学の活力をたかめ、共同事業を推進する」という事業をはるかにこえた「あたらしい都市創造のこころみ」である。そこで本構想には、オックスフォードやケンブリッジに代表される「総合的な大学都市」になぞらえて、あえてカタカナがきの「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」という副題をかかげた。

それは、「広く世界と文化的に交わることによって、優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市でなければならない」という理想をうたいあげた「世界文化自由都市宣言」の思想を京都において実現する、もっとも具体的、かつ現実的な構想でもある。その骨子を、第1部においては「10項目の命題」に整理して提示する。

命題① 日本には「本格的な総合大学（University）」が存在しない。

京都大学の英語名称「Kyoto University」が、このことを象徴している。本来なら、東京大学（The University of Tokyo）と同様、「The University of Kyoto」を名のるべきであった。もっとも、世界の水準にてらせば、芸術・芸能系、スポーツ系などの学部・学科の存在しない東京大学それ自体が、本格的な総合大学にはあたいしない。いまこそ日本は、その国土のどこかに、本格的かつ総合的な大学都市を創出する必要にせまられている。

なぜなら今後、国土や都市のデザイン、いわゆるマルチメディアのコンテンツなど、科

学・技術と芸術・芸能が融合することで、人間の心と体のいずれをも充足させることへの欲求がたかまる時代に、本格的な総合大学のはたす役割は、いちじるしくおおきなものとならざるをえないからである。そうした本格的な総合大学の役割を、京都という都市の全域を最大限に活用してはたさせようというのが、本構想の基本的なかんがえかたである。

命題② 京都全体の大学をみわたせば、あらゆる分野の学部・学科がそろっている。

本格的な総合大学の名にあたいするだけの学部・学科をそろえた単一の大学は、京都にも存在しない。しかし、京都に所在する国・公・私立、すべての大学を一覧すると、自然・社会・人文科学、芸術、芸能、スポーツなど、あらゆる学部・学科がそろっている。

いっぽう、山にかこまれた盆地都市である京都の中心市街地は、およそ東西 10 キロメートル、南北 15 キロメートルというぐあいに、コンパクトにまとまっている。これを中核にして山科や伏見や亀岡盆地をくわえ、「関西文化学術研究都市」の建設がすすむ京阪奈丘陵、さらに最近、大学の立地がさかんな滋賀県の湖南地区までを視野にいれば、そこに「世界水準の総合的な大学都市」のイメージをえがきだすことは困難ではない。

もっとも、本構想と、すでに建設が進行している「関西文化学術研究都市」とのあいだには、たがいに屋上屋をかさねるかのような関係がイメージされるかもしれない。しかし命題③でふれるように、歴史と伝統のあつい層におおわれた京都の中心市街地を「学術と文化」の中核として再開発しないかぎり、関西文化学術研究都市もまた、あつみとふかみを欠落させたものとならざるをえない。

命題③ 企業や市民生活に視野をひろげれば、京都の文化蓄積は、さらに広範囲にわたる。

学問や技術、芸術や芸能は、ただ大学にだけ局在しているわけではない。とくに音楽や演劇、絵画や彫刻、陶芸や漆芸、染織や金工、茶道や華道などにかかわる伝統的な知識や技術や技能は、それを生業とする人びとを中心にして、ひろく市民生活に定着し、伝承されてきた。あたらしい科学・技術の蓄積が、先端的な企業の内部においてなされる場合もおおい。さらに、宗教が提供しうる思想への影響も無視することはむづかしい。

その点で、歴史都市であり、同時に近代産業都市でもある京都には、これらに関連する膨大な装置と制度と人材の蓄積がある。それらを、諸大学の蓄積とむすびつけることによ

って、京都は「総合的な大学都市」としての能力を、いっそう拡張することができる。このことは、あらゆる学術や文化の創造が、既存の権威や伝統との血みどろのたたかいによって実現されてきた歴史的事実にてらしてもあきらかである。

命題④ 閉校した小学校のほか、工場や町家や寺院など、潜在する空間資源が積極的に活用できる。

じゅうらい、大学とそれ以外の機関や個人との接触や交流は限定されてきた。とくに大学は、みずからをキャンパス内にかこいこもうとし、学術の専門性は自閉的になりがちである。それを克服するには、あらゆる組織や機関、人と人の交流を促進し、異質な知性と感性がであり、相互にこのましい影響をあたえあえる場所と機会を創出することが、きわめて重要である。この点でも京都は、閉校した小学校をはじめ、工場や町家や寺院など、広大な空間資源を潜在させている。これらを既存の大学の学部・学科とは別の学術・文化施設として再開発・整備していく。

命題⑤ 既存の「学部 (faculties) 」にくわえて「学寮 (colleges=『教授団』)」を整備する。

「大学の学部・学科とはべつの学術・文化施設」とは何か。想起すべきは、オックスフォードやケンブリッジの「カレッジ」である。日本語でカレッジといえは、一般に「単科大学」を意味する。しかし英語の語源にさかのぼると、ほんらい、それは「学者 (がすむ学寮)」であった。

京都には、多数の学部・学科をそなえた大学がある。これらの大学の共同利用施設として、また、命題④でのべた多様な人材が交流できる場として、教授や学生が適切な価格で居住できる施設として、さらにはひろく一般市民にひらかれた「まなびの施設」として、これら複数の「学寮」を整備する。それはアジア太平洋地域をはじめ、世界中から日本にまなびにくる、わかい知性や才能の留学・滞在施設としても活用できる。

命題⑥ 世界最高水準の「京都高等学芸院 (コレージュ・ド京都)」を創設する。

活力ある学術・技術・芸術・芸能の創出には、異質な人材のであいに象徴される「ひろがり」がもとめられると同時に、世界最高水準の「たかみ」を構築することが必要不可

欠である。この点では、1530年に設立され、現在なおフランスの学術の最高水準をほこっている「コレージュ・ド・フランス」が参考になる。

日本と世界から、分野ごとに最高水準をきわめている学者・芸術家・芸能者を招聘し、その研究・制作・研鑽の活動を奨励し、蓄積し、おりにふれて公開の講演や公演などをおして社会に還元してもらおう。それはそのまま、京都の学術や芸術の蓄積と国際的ネットワークの形成におおきな役割をはたす。

命題⑦ 以上の事業を、市民トラストと企業メセナを誘導しながら展開する。

こうして「京都の全域を世界水準の大学都市」として再開発する「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想が、いちおう完結する。では、それに必要な、相当の高額にのぼる財源をどうするか。そこでおもいだすべきは、つぎの3点である。

- ① 市民による小学校建設の歴史的経験：かつて京都市民は、身銭をきって小学校を建設・整備した経験をもっている。それが今日そのまま適用できるわけではない。しかし、最近の財政危機、世界各地における「国家をこえた統合」と「国家内部の地域自治」いずれもの進行、阪神大震災以来のボランティアの活躍などをおもうと、環境や文化をめぐる事業の相当部分が、今後は一般生活者にゆだねられていく。すぐれた町家の保存と活用、自然環境の保全などの分野で、京都市域をこえた「市民トラスト運動」のはたす役割は、けしてちいさなものではない。なお、そのためには特別の財団を設立するなど、税法上の優遇措置を講じる必要がある。
- ② 企業の興味と関心を引くメセナ活動の可能性：いわゆる「バブル経済の崩壊」以来、企業の社会貢献（メセナ）活動は急速にしぼんだ。しかし今後、ヨーロッパ諸国でみられるように、企業の社会貢献の度合が消費者の商品選好を、ひいては企業の経営力を左右することで、ぎゃくに企業の社会貢献を喚起する可能性がある。しかも、あたらしい知識や技術、それを供給する人材への企業の関心は確実にたかまる。だとすれば、命題⑤の「学寮 (colleges)」、命題⑥の「京都高等学芸院」をはじめ、「京都の全域を世界水準の大学都市に」という本構想が企業の関心をひき、その資金提供を誘発することも期待できないわけではない。
- ③ 中央政府の役割と地域自治への展望：京都市が本構想を採用するなら、適切な財政措置が必要となる。また、いかに財政危機が深刻であれ、京都のみならず、関西と日本全体の将来とその国際的地位の向上に資する本構想は、中央政府の関心をひ

かねばならない。ただ現状では、中央政府の政治家や官僚が本構想の重要性を理解しない可能性もある。そこで命題⑧に留意する必要がある。

命題⑧ 京都市は「独立自治体」をめざし、地域自治拡充の先頭につ。

「その全域を世界水準の大学都市に」という構想は、既存の大都市を対象とするかぎり、日本で最初に提起される構想である（注：筑波大学都市は「新都市」として構想された）。しかもそれは、近代的工業化に成功した日本が、21世紀にむけて、あらたな国家と都市のデザインを先どりしようとするところみでもある。

という意味において、京都は、①徴税権、②立法権（予算の執行権）、③産業政策の立案権をもつ実験的な「独立自治体」としての地位の確立をめざしながら、本構想の実現に着手すべきである。いわゆる従来の「3割自治」の範囲内においては、ここにのべた大胆な都市の改造、あるいは創造は困難だからである。京都・大学センターに、京都市内において枢要な位置をしめる京都大学が参画していない背景にも、こうした事情が関与しているようにおもわれる。

それは荒唐無稽な話ではない。こんにち、近代的工業化を達成する過程においては、効率的、かつ有効であった明治維新以来の中央集権的な国家体制に変更をくわえようとする、いわゆる「地方分権＝地域自治」への関心が、日本全国でたかまりつつあることが、そのことをものがたっている。

命題⑨ 言葉の本来の意味での「観光都市」をめざす。

本構想が緒につけば、ながい歴史と物心両面の文化蓄積をもつ大都市がめざす、あらたな方向性が、日本と世界にむけて提示できる。そこでは、歴史性をふまえつつ、日々あらたに自然・社会・人文諸科学だけでなく、芸術や芸能やスポーツなど、広範な文化創造がこころみられる。こうして京都は、「あたらしい文明の磁力」とでもよばれるのがふさわしい活力を発揮する都市に生まれかわっていく。

これこそが、言葉の本来の意味での「観光都市」にほかならない。周知のように、「観光」の語源は『易経』にある。そこでは、

「観光は王に賓たるによろし」

すなわち「観光は一国の王たるものの仕事」とみなされていたのである。敷衍すれば、

「一国の王たるものは諸国をめぐる『国の光』を『みて』こななければならない」

ここで「国の光」とは、その国の、

「ゆたかな自然、人びとのゆたかな生活、そこでうみだされたすぐれた文化」

を意味している。では王は、何故それを「みて」こななければならないのか。

「自国にかえったあと、『他国の光をみる』ことでゆたかになった王自身が、今度は自ら『国の光』を『しめす』ためである」

観光の「観」には「みる」と同時に「しめす」という意味がはらまれていたのである。それが今日、ひろく大衆と呼ばれる人びとのもとめるところとなりつつある。

もとより京都は、従来から日本を代表する観光都市であった。ただ、その魅力のおおくは、寺社をはじめ、歴史遺産と名所に依存している。ところが、最近の都市観光は、博物館や美術館の見物、芸能鑑賞やテーマパーク訪問、ショッピングや美食体験、さらにはビジネスや学術と結合したコンベンションなど、きわめてひろい範囲にわたる。

こうした時代に京都が「世界水準の大学都市」に生まれかわり、つねに多様であたらしい文化をうみだしつつけるなら、内外の人びとをひきつける「壮大な文明の磁力」を発揮する、言葉の本来の意味での「観光都市」になることができる。

命題⑩ 「21世紀」をこえる「あたらしい千年紀^{ミレニアム}」への想像力を。

ここにきて話題は、「21世紀の人類社会と京都の21世紀」という壮大な課題にであう。それは同時に、冒頭の問題意識への回帰でもある。つまり、

「なぜ京都の全域を世界水準の大学都市として再開発しなければならないのか。それは、どのような条件を基盤として実現されるのか」

この問にこたえるには、まちかにせまった21世紀の到来を展望しながら、20世紀の意味をかんがえる必要がある。そのとき注意すべきは、21世紀が深刻な課題にみちた時代とならざるをえないがゆえに、それを「あたらしい千年紀^{ミレニアム}」のはじまりととらえる、より壮大な想像力がもとめられるという点である。

第2節 本構想の背景と実現可能性

(1) 本格化する情報産業社会における都市活性化の戦略課題

20世紀人類文明の3つの矛盾と2つの課題

20世紀は世界全体をまきこむ「激動の世紀」であった。未曾有の科学・技術の進歩と経済発展が進行し、人口が爆発的にふえ、そのおおくが都市に集中した。2度の世界大戦が勃発し、大量の血がながされ、それが広大な版図を支配する帝国を解体させる。それ以来、国民国家が簇生し、東西対立の時代が到来し、人類は核戦争の危機におびえた。

こうした世界秩序が、20世紀末に崩壊する。いまだ、あたらしい秩序は姿をあらわしていない。そこでおもいだすべきは「20世紀の3つの矛盾」²と「21世紀の2つの課題」である。

まず、20世紀の人類は、原子力に象徴される「巨大な力」を手にいれた。しかし、それは巨大すぎて、適切に利用するのが、いちじるしくむつかしい。第1の矛盾である。

ついで現代の人類は、生産や輸送に役だつ「多様な利便」と「ゆたかな生活」を手にいれた。しかし、ぎゃくに人間の体力はおとろえ、おおくの人びとが過剰栄養と飢餓という、まったく正反対の恐怖におびえている。第2の矛盾である。

こうした結果をもたらした要因のひとつは、専門化して高度に発達した科学・技術である。ところが、あまりに先鋭的な専門化が異分野間の対話を困難、というより、ほとんど不可能にした。その結果、自然と人間、科学と技術、社会と文化、経済と政治を総合的にとらえて、のぞましい未来を展望することができないでいる。第3の矛盾である。

これらの矛盾は21世紀に尾をひいて、人類社会に2つの課題をもたらす。

まず、文明が地球を破滅させる可能性がたかまる。地球環境の制約のもとで、節度あるゆたかさ、持続可能な開発は実現可能なのか。ここに第1の課題がある。

ついで地域ごとに、そこにすむ人びとの文化（生活様式と価値観）のちがいがあり、ゆたかさに格差があるという問題がある。それを20世紀という時代は、東西対立と国民国家の秩序によっておさえこんできた。しかし今日、文化を共有する「われわれ意識」にむすばれた諸民族は、依然として際限のないゆたかさをとめつづけながら、世界各地に紛争の種をまいている。ここに第2の課題がある。

これら2つの課題が、日本国内では、つぎのように姿をかえる。

ひとつは、ゆたかさの増進に役たたず、環境に破壊的に作用し、かつ財政を破綻させる不要不急の公共事業に制限がくわえられないという問題に象徴的にあらわれている。

それがそのまま第2の問題につながる。未来への展望をきりひらく思想・文化は未成

² 京都大学人文科学研究所・横山俊夫助教授からの伝聞による。ただし以下の文責は筆者にある。

熟のまま、社会があたらしい時代への対応を明確にしめしえないでいる。

しかも、工業化とともに発展してきた近代日本の経済社会は、すでに最盛期をすぎた。成熟した産業の競争力は低下しつつある。やがて人口の減少がはじまれば、日本の衰退はさげがたい。そのとき、政治や行政、経済や文化のどのような展開が快適な生活を保障するのか。かんがえるべきは、これらの問題である。

『歴史の終わり』と「情報産業社会」

そこで2つの重要な論考を参照する。『歴史の終わり』（フクヤマ、F、1992、三笠書房）と「情報産業論」（梅棹忠夫、1963『中央公論』2月号）である。そのうち前者『歴史の終わり』の論点を、極端に要約すると、つぎのようになる。

プラトン『国家論』は人間の魂を「欲望・理性・気概（テューモス=不正にたいして憤慨し、他者からみとめられようとする心的傾向）」という3つの要素でとらえた。それ以来、人類文明の歴史は、それらを充足させる社会体制を模索してきた。ところが社会主義体制の崩壊とともに、もっともすぐれた社会体制として最終的に「リベラルな民主主義」がのこった。その結果、人類の「(普遍的な)歴史は終わり」をむかえる。同時に「理性にみちびかれた欲望」に従属する「近代」の時代精神になじんだ人類は「気概」をうしない、結果として偉大な学問や芸術がそだたなくなり、純粋に形式的なスノビズムだけが「優越願望」のはけ口となる「からっぽの時代」がやってくる。

それは一種の「終末論」である。そういえば、たしかに地球の環境容量の制約を無視して、際限のないゆたかさをもとめる現代の人類、世界各地で紛争を勃発させる現代の諸民族の姿には、「歴史の終わり」が感じられもする。しかし、すこし視点をかえることで、「あたらしい歴史のはじまり」を展望することも不可能ではあるまい。そこでつぎに、後者の論考「情報産業論」の論点を、これまた極端に要約してみる。

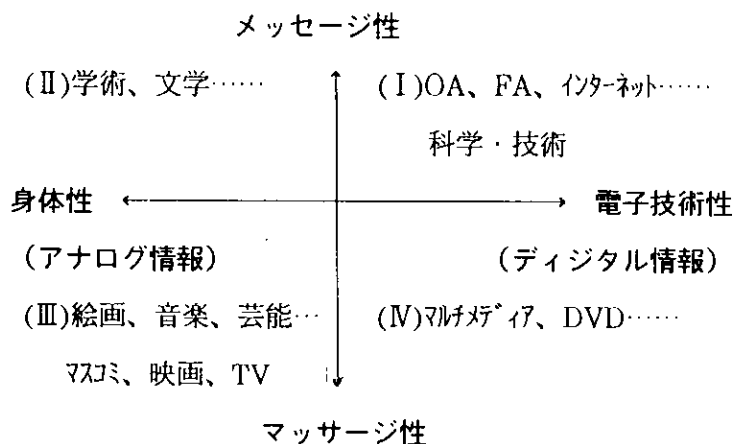
これまで人類文明史は2つの革命を体験し、いま第3の革命を体験しつつある。第1は農業革命、第2は工業革命、第3は情報産業革命である。それは動物の発生学とのアナロジー（類推）をもちいると、つぎのように解釈できる。ここでいう「発生」とは、受精した卵細胞が分裂をくりかえし、内胚葉・中胚葉・外胚葉と名づけられた、3つの部分からなる胚を形成し、やがて成体になるまでの過程を意味する。その過程を単純化していえば、内胚葉からは消化器官系が、中胚葉からは筋肉・骨格系が、外胚葉からは脳神経系と感覚諸器官が、それぞれ形成される。ならば、農業革命で達成された農業の時

代は人間の腹のたし、すなわち内胚葉に由来する消化器官系の機能を充足させるという意味で、この段階の産業は「内胚葉産業」と名づけられる。同様に、工業は中胚葉に由来する筋肉や骨格の機能を充足させるという意味で「中胚葉産業」とよぶのがふさわしい。そして、最後に出現した情報産業の時代は脳神経系・感覚諸器官の機能を充足させる時代である。この段階の産業は、外胚葉に由来する器官の機能充足をめざすので「外胚葉産業」だといえる。

ところで、情報には、ふたつの機能がある。その第1は、生産や流通、知的探求や事務処理など、人間の身体外の装置と制度に作用して、その機能や効率をあげるはたらきである。これをかりに「情報のメッセージ性」と名づけておく。つづいて第2は、人間の感覚器官に作用して、心身をよろこばせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせるはたらきである。これをかりに「情報のマッサージ性」と名づけておく。

いっぽう、人間の身体にはたらきかける情報は、基本的に言葉やイメージ、色や形、音や映像、味やかおりや肌ざわりなど、多様なアナログ情報の形式をとる。それにたいして、こんにち急速に発達しつつある電子テクノロジーは、その蓄積・処理・伝達などをデジタル情報に変換することによって、容易かつ効率的におこなうことを可能にする。

してみると、情報をめぐる今日的課題は、つぎの4象限グラフに表示できる。



これらのうち、現代の日本社会において「情報化」のながれとふかく関連していると認知されやすいのは第I象限、つづいて第IV象限の課題である。それにたいして、第II、III象限の課題は考察の対象になる場合がすくない。しかし、とくに第IV象限の課題の将来的展開をかんがえれば、じつは第II、III象限の課題に、よりふかい関心がはられる必要が

ある。そのことを「コンテンツ」という言葉への関心のたかまりが象徴する。

ここでコンテンツとは、デジタル情報処理を可能にするハードウェアとソフトウェアを駆使して伝達される、映画やアニメをはじめとする音響や映像を意味する。つまり今後、これらを制作する能力が、産業や経済、社会や文化、さらには政治や行政の局面をもふくめて、おおきな意味と役割をはらむことになる。

ここに、情報産業社会の本格的到来がもたらす産業経済上の重大な意味がある。

「あたらしい歴史」のうけ皿としての「文化」

前項でのべた「コンテンツ」をうみだすのは、多様かつ広範な学術・技術・芸術・デザイン・芸能・スポーツなど「文化（の力）」である。むろん今後、食料やエネルギーの供給が逼迫し、諸民族のあいだの軋轢と葛藤が深刻な問題になりはする。しかし、情報産業社会においては、確実に文化、なかでも絵画や音楽など、芸術と芸能のはたす役割がおおきくなる。その背景には、つぎのような事情がある。

まず、「衣食たりて礼節をしる」という言葉が象徴するように、消化機能系と運動機能系が充足された人間は、つぎに脳・神経系の充足をもとめはじめる。つまり、

「なにか、おもしろくて、たのしいことはないか」

こうした人びとの欲求にこたえるのが、多様な「文化」一般のはたす、もっとも基本的な役割にほかならない。そのさい、最初は既成の文化の「受容」が要求される。快適な音楽、おもしろい映画を鑑賞したいといった欲求が、それを代表する。しかし、文化的情報のシャワーをあびつづけた人間は、今度は一時的にそれを遮断し、静謐のうちに心身を「いやし」、さらに、あたらしい文化の「創造＝表現」に、みずからをゆだねたいとかがえはじめる。現代の、とくに日本社会で「いやし」が流行語になり、自分史をはじめとする「創造＝表現」活動がさかんになりつつあるのは、そのためである。

本格的な情報産業社会においては、人びとが「受容」したいとおもう文化の創造と流通、そのシャワーをあびつづけた人びとを「いやす」となみ、さらに人びとが文化を「創造＝表現」することで「ものがたる」ことを可能にする装置・制度系の構築が、産業や経済、社会や文化、政治や行政のおおきな課題として浮上する。

それが、フクヤマのいう『歴史の終わり』のあとの人間の心身のエネルギーを吸収する役割をはたす。そんな時代の人間の魂は、プラトンの『国家論』がのべた「欲望・理性・気概（テューモス）」を、すこしづらせた要素、たとえば、

- ① なにかを受容したいとかがえる「好奇心」
- ② 心身の「いやしへの欲求」
- ③ あたらしい文化の創造と表現に託して「ものがたること」

によって充足される。

むろん人びとの「好奇心」は文化だけでなく、自然にもむけられる。そこに、博物学や生態学などの学問や思想があたらしい芽をふく。それはそのまま、21世紀の人類社会が
であう2つの課題、すなわち、

- ① 地球の環境容量の制約のもとでの節度あるゆたかさと持続可能な開発
- ② ことなつた文化を共有する「われわれ意識」にむすばれた諸民族の軋轢と葛藤の
緩解への隘路を提示する可能性

を示唆してもいる。

なぜなら、第1に、あらたな文化を受容し、創造することをあそび、たのしむために
必要な地球資源の消費は、近代工業社会で卓越した物質的欲望の充足にくらべると、はる
かにすくなくてすむ。

第2に、文化、とりわけあたらしい科学・技術の創出が「効果／資源消費」の値をよ
りおおきくし、あたらしい思想と倫理の創出が価値観のことなる人びとのあいだの軋轢と
葛藤を、多少なりとも軽減させる可能性が期待できるからである。

しかも、あたらしい文化が創出されるさいの条件そのものが、地球的自然と人間、こと
なつた文化を共有する人びとの集団のあいだの関係に、のぞましい影響をおよぼす。とい
うのも、人間は基本的に「異質なる存在とのであい」を契機にして、あたらしい文化をう
みだす。未知なる自然現象、異質なる価値観や文化、圧倒的な伝統の蓄積、専門領域を異
にする才能などとのであいが、あたらしい学問や芸術や芸能、デザインやスポーツの創出
の契機となってきたことが、このことをものがたる。

こうして「欲望・理性・気概（テューモス）」を、すこしづらせた「好奇心、『癒し』
への欲求、文化の創造と表現に託して『ものがたること』」を、人間の魂の要素とみて、
それらを全面的に開放する情報産業社会の本格的展開というあたらしい歴史がはじまる。

「京都の全域を世界水準の大学都市として再開発しようという構想」は、こうした壮大な
人類史的な課題にこたえつつ、みずからの都市活性をとりもどそうとするころみにほか
ならない。

(2) 「京都＝世界水準の大学都市」がみたすべき条件

文化創出の力動性——伝統への挑戦と異質性のであい

つぎに検討すべきは、あたらしい文化の創出に必要な条件と京都の現状である。

文化を創出する唯一の存在は、それにふさわしい能力をもった人間である。そこで、このんで彼らが京都をおとすれようとする環境整備が要請される。

研究者なら、ととのった研究施設とゆたかな研究費、すぐれた指導者と自由な雰囲気などをもとめるであろう。快適な気候、うつくしい都市景観、交通の便、ゆたかな食材と美味な料理、やすい物価と安全性などもプラス要因となる。同様のことは、芸術家や芸能者、デザイナーやスポーツ選手にもあてはまる。

ところで、上記の条件のほとんどは、そこに居住する市民が快適に生活できる条件にかさなる。すぐれた文化の創造者がこのむ都市とは、なによりも一般的にゆたかで快適な環境をそなえた都市だということになる。これにくわえて、特殊に彼らが要求する条件がある。それは彼らの創造意欲を触発し、創造活動をはげます歴史と文化の存在である。それらをランダムに列挙してみる。

- ① あたらしい文化は、つねに既存の権威や伝統との血みどろのたたかいによって創造される。それにふさわしい才能をひきつけるのは、打倒の対象として挑戦するにあたいする権威と伝統の実在である。
- ② あたらしい文化の創造は、しばしば「みずからとはことなる存在」とのであいによって触発される。それにふさわしい才能をひきつけるのは、価値観や専門分野のことなる才能そのものと同時に、その共存を許容する自由な風土である。
- ③ あたらしい文化の創造者は、達成した業績への正確な評価を要求する。それにこたえるのは「的確な鑑識眼をもつ批評者＝目きき」の存在である。
- ④ あたらしい文化の創造者は、達成した業績がひろく世界の人びとに認知されることを要求する。それにこたえるのは、多様な形式での発表や公演などを可能にする多様な施設や媒体の存在である。
- ⑤ あたらしい文化の創造者は、分野ごとにことなる研究・制作・研修などのための施設と経費、すぐれた指導者や競争相手や友人・同僚などを要求する。

京都がはらむ「世界水準の大学都市」への可能性

京都は、これらの条件をみたしているか。答は、こうなる。すなわち、

「現在の京都は、これらの条件をみたしてはいない。しかし、日本の都市のなかで、これらの条件を満たす資質を潜在させている都市は京都をのぞいて存在しない」

まず上記のうち、④や⑤の条件は、資金を投入して施設を整備し、人材を誘致すれば、どの都市でもみたせる。しかし、①②③の条件は、その都市の歴史と不可分である。それをみたせる都市は、何度かの廃都の危機にであいなながらも、つねにあたらしさを指向する「永遠のみやこ」であろうとしてきた京都のほかには存在しない。

京都には 1994（平成 6）年、ユネスコ世界遺産委員会において「世界遺産条約」にもとづく世界文化遺産に登録された清水寺・金閣寺・二条城など、17 箇所の社寺や城がある。日本を代表する歌舞伎、能、狂言、舞踊、茶の湯、いけ花、和歌、日本画などの伝統文化、それをささえる日本建築や庭園、西陣織・友禅などの染織や陶芸や漆芸をはじめ、伝統工芸のおおくが、京都を発祥・発展の地としてきた。日本料理の粋をあつめた京料理、それを提供する質のたかい料亭、町衆のすむ独特の町家建築、彼らが文化と産業をそだてるためにつどい、たのしみながら想をねった社交のルール、それを可能にする施設など、他都市には存在しえない文化の蓄積が京都にはある。

それだけではない。明治時代に政都が東京へ移転したあとも、京都は琵琶湖疎水の建設という大土木事業、それを利用した水力発電と市街電車の運行など、日本最初の近代都市施設を整備した。産業もまた、ジャカード機を導入した繊維産業、高度な科学・技術を応用した精密機械工業など、最先端を疾走してきた。

その伝統は、現代にもいきている。日本最初の女性ファッション産業、陶芸技術をいかしたセラミックス生産、人間の心身にこころよいマン・マシン・システムの開発、電子技術の娯楽化を先導した遊具産業など、先端技術で未来をひらく多数の企業が立地している。こんにち、便宜上それらは「製造業」に分類されている。しかし、そこで生産される付加価値は、高度な科学や技術、芸術性や芸能性に由来している。という意味においては、もはや「情報産業」だとみなすほうが、むしろ適切である。また、文化資源としての大学・短期大学、博物館、国宝・重要文化財、宗教法法人などの単位人口あたりの集積でも、京都市は大都市のなかで、いずれも第 1 位をしめている。

これらの全体が形成する京都文化の蓄積は、①にいう「文化の創造者が打倒の対象として挑戦するにあたいする権威と伝統」としての役割をはたす。

それは、②の「あたらしい文化創造のにない手をひきつける価値観、専門分野のことな

る才能をひきつけ、その共存を許容する自由な風土」、③の「彼らが達成した業績を正確に評価する的確な鑑識眼をもつ『批評者＝目きき』の存在」という条件にもつながる。じつ、平安時代の昔から、京都には中国大陸から染織や陶芸などの技術者や知識人が渡来し、くだっては日本各地から多様な才能があつまり、切磋琢磨しながら京都文化をそだて、革新してきた。そうしたいとなみを目のあたりにしながら、高度な付加価値を秘めた商品やサービスを開発・販売し、みずから消費してきたのが京都の町衆である。こうして京都は、②と③の条件をみたすことになる。

ただ、④と⑤にかんしては、潜在的に条件をみたしつつも、とくに近年、大学が市外に流出するなど、困難な事態に直面している。それを克服するのが「京都の全域を世界水準の大学都市に」という本構想にほかならない。

第3節 本構想実現のための諸条件と補足的提言

その全域が「世界水準の大学都市」にうまれかわる条件を、京都は潜在させている。それを現実化するのが「第1節 本構想の全体像」の10項目の命題である。ただし、第1節の記述には、説明不足の部分がある。それを第3節において補足する。

(1) 「本格的な総合大学（ユニバーシティ）」のイメージ

ある教授が、仮想的な都市建設プランを作成するために、国立大学工学部の建築専攻の学生と、私立芸術系大学の建築専攻の学生からなるプロジェクト・チームを発足させた。当初は、工学系学生が芸術系学生の「工学上の無能力」を軽蔑し、芸術系学生が工学系学生の「美的センスと描画能力の貧困」を揶揄した。しかし、やがて双方が能力をみとめあうと、予期した以上のプランが完成したという。

マサチューセッツ工科大学（MIT）やアメリカ航空宇宙局（NASA）など、本来は科学・技術の先端的開発をめざしながら、芸術家を擁している研究・開発機関はすくなくない。

もともとヨーロッパの大学が神学・法学・医学・学芸の4学部をあわせもつことを基本としたように、

- ① 学術・文化の保存・継承・再生産・創造

② その専門的従事者の育成

③ 自然、人間、社会にかんする知識の社会への普及

に寄与すべき大学は、人間のうみだした、あらゆる知的・情緒的・意志的達成を、その内部にはらむ必要がある。

(2) 京都に所在する大学がはらむ総合的な潜在力

京都市の南、京阪奈丘陵で「関西文化学術研究都市」の建設がすすんでいる。大学や国際高等研究所のほか、企業の研究開発施設などが相当数すでに活動している。しかし国会図書館関西館（仮称）や総合芸術センター（仮称）など、芸術・文化系の施設の建設は日程にのぼらず、市街地の形成もおくれている。

そのため、同地域の同志社大学の学生のおおくが、わざわざ京都の市街地に下宿をかまえる。学生生活をたのしみ、よりひろい視野で学問を身につけるには、都市の生活体験が不可欠だからである。都市計画や社会学、芸能や芸術などの研究者や創造者もまた、歴史都市の文化からおおくをまなぶ。郊外にキャンパスをうつした大学が、あらためて市街地にサロンの空間やサテライト・ラボを確保しようとするのは、そのためである。京都の市街地の大学の学生や研究者が享受している都市の恩恵には、他にかえがたい、おおきな価値がある。

(3) 京都に潜在する文化的蓄積とその可能性

京都の文化的蓄積といえば、まず寺社がおもいだされがちである。しかし、この都市では、美術や工芸、学問や芸能が、富裕な町衆の日常生活のなかであそばれ、たのまれてきた。げんに祇園祭の鉾や山、茶室や料亭や町家には、有形・無形の文化的蓄積がある。ただ、税法や現代の生活慣習などの影響で、そのおおくが人目にふれにくい状態におかれている。

ところが最近、京都市が明倫小学校の跡地を「芸術文化振興の拠点となる『アートセンター』」として、民間の芸術家らが立誠小学校の跡地を「アーティストや市民が芸術活動で交流する『動のアートセンター』」として利用する構想をうちだすなど、民間の文化的蓄積を活用しようとするうごきが活発になってきた。それは、近代という時代に「鑑賞の

対象」として厳格に隔離されがちであった芸術と文化を、あらためて「市民の日常生活にいかす」方向に展開されていくはずである。

いっぽう、やや意味はことなるが、京都にはふるくから、映画や出版などの情報産業があった。それが高度経済成長にともなう東京への一極集中の過程で衰退した。ただ、太秦の「東映映画村」、京都文化博物館の映画コレクション、小規模ながら独特の企画力を秘めた出版社などがのこっている。それらが「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想を契機に再活性化する可能性はちいさなものではない。

(4) 閉校した小学校と宗教施設の積極的利用

京都都心部の小学校のうち、1996（平成8）年段階において閉校したものは18校、その面積は約9万5000平方メートル、甲子園球場の2.4倍にのぼっている。

それらを第3節(3)においてのべた「京都市アートセンター」「動のアートセンター」に再活用する案のほか、「新中央図書館」「幼児教育センター」「坂本龍馬記念館」「高齢者施設」「多目的ホール」などに活用する案が提起され、一部では国際学校やフランス学校などへの供用がはじまってもいる。もとより、閉校した小学校のおおくは、地元の町衆が私財を投じて建設したものであった。当然、その再活用は、これらの人びとの生活に役だつよう、彼らの智恵と意志によって構想されるべきである。

しかし、すでに構想がかたまっているものをはじめとして、再活用の方途のおおくは「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想の重要な一翼をしめるものとして位置づけられるか、「学寮（colleges＝『教授団』）」と共存することができる。こうした可能性は今後も留保されなければならない。

いっぽう、仏寺をはじめとする京都の宗教施設は、従来型の観光対象として利用されているものがおおい。それに行政が関与するのは現行法のもとではむづかしい。しかし、元来が空海の東寺、最澄の延暦寺をはじめ、寺院は神社とならんで学術と文化の中心であった。そこに蓄積された建築や彫刻、文献や伝承や慣習は、学術・文化上の重要な資産であり、施設自体が空間資源でもある。

のみならず、第2節(1)において提示した「20世紀人類文明の3つの矛盾と2つの課題」をおもいだせば、その克服の隘路をきりひらくうえで、仏教と神道には相当の役割が期待される。キリスト教やイスラム教とならぶ、世界の3大宗教のひとつである仏教

の循環的な世界観は、ゆきづまる現代の人類文明の線形性を批判的に検討する契機を提供する可能性をはらんでいる。あらゆる存在に超自然的な生命力を想定するアニミズムの傾向をおびた日本の神道は、自然認識に変革の契機をもたらす可能性を秘めてもいる。

「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」構想は、こうした視野から、宗教とその施設の再評価をこころみる必要がある。

(5) 「カレッジ=学寮」がはらむ文化創造力

現代の学術は自然・社会・人文科学など、すべて「科学」の体裁をととのえる。その方法は、

- ① 分析への指向性と原子論
- ② 物質主義
- ③ 因果関係の追求

などといった特徴をしめす。むろん、近代科学と、それに基礎をおく近代技術が大成功をおさめたのは、これらの特徴によってであった。しかし、その結果、

「あまりに先鋭的な専門化が、異分野間の対話をほとんど不可能にした」

こともまた、他方における事実である。

現代の学術や文化は、こうした問題の克服を要請されている。しかし、既存の学術は一般に、専門領域ごとの閉鎖性がいちじるしい。従来大学の学部制度に準拠するかぎり、その変革はむつかしい。そこで、専門性のみならず、年齢や性別や職業などの垣根をとりはらい、学術・芸術・技術・デザイン・スポーツなど、あらゆる分野のすぐれた人材が相互にのりいれ、理想的には可能なかぎり日常生活をともにし、異分野の知識や技能がやりとりできる施設として「カレッジ=学寮」を整備する。

それは、研究室・実験室・^{フクトリ}工房であると同時に、商品やサービスの開発現場であり、かつまたその評価フィールドでもあるような役割をはたす。そして、学界のみならず、産業界、官界、さらに一般の市民をまきこみ、一定の範囲で独立採算を実現する、学術・文化・産業・経済などの機能を融合した、あたらしい型の自律的セクターをめざす。

また、「カレッジ=学寮」には、地球規模ですぐれた人材を誘致し、ここに滞在して活動の成果をあげてもらおう「アカデミシャン（アーティスト、ビジネスマン）イン・レジデンス」を積極的に誘導する。

(6) コレージュ・ド・フランスと京都高等学芸院

コレージュ・ド・フランスは、1530年、「中世以来のスコラ学に対抗する新進の学問をつかさどる機関＝王立教授団」として設立された。以来その精神は、フランス革命をへて現代にうけつがれ、

「すでにしられていることではなく、現在まさに探求されつつあることを研究し、すべてをおしえる使命」

をうたいあげる。そのため文科、理科をとわぬ広範な学問分野を対象とし、その成果は、だれもが聴講できる「公開講義」とおして常時、社会に「中間的に報告」される。

現在、そこには52名の専任教授団と数百名の併任研究協力者が在籍している。その点において、国立民族学博物館や国際日本文化研究センターや国立分子学研究所など、既存の大学共同利用機関に類似している。ただ、

- ① 専門性をこえた学者・研究者を一同に会する。
- ② いっさいの資格取得にむすびつかない一般社会にむけての公開講義をおこなう。などの点に特異性がある。

学術と文化の栄光をほこり、その産業化をめざす「ザ・ユニバーシティ・オブ京都」は、そのたかみを象徴する機関として、これに類した「京都高等学芸院（コレージュ・ド京都）」を設立する。それは、近世大坂の町人が、みずからの栄光のために学術と文化をたのしんだ「懐徳堂」を、やや性格を異にししながら、京都によみがえらせるころみでもある。

(7) 無理のない「町家」の保全と利用

京都の都心に集積する町家は、重要な文化財である。そこには、

- ① すぐれた木造建築の技術と美学
- ② 歴史的な行政制度や都市的生活様式
- ③ 京都盆地の自然環境に適合する環境制御技術

などが濃厚に投影されている。ただ、明治・大正期に建設された町家のおおくは老朽化し、生活上の安全性にも問題がある。これらは現在から未来に適応するあたらしい型の

「町家」にたてかえざるをえない。

ただ、高級かつ堅牢な町家には、適切な補修によって、京都という都市の「過去からのこだま」を未来につたえる役割が期待される。すでに美術館やギャラリー、料亭や着物店、芸術家の工房などとして活用されている例もおおい。こうした動きを促進するために、一定の地区や建築を指定し、京都市域をこえたトラスト制度を運用して、その保全をはかる。それはそのまま観光資源としての意味をはらむとともに、(5)の「アカデミシャン（アーティスト、ビジネスマン）イン・レジデンス」にも活用できる。

(8) 京都の自由な都市的生活と市民自治の伝統

京都は近代まで、権力の興亡を目のあたりにしながら、自由な都市的生活様式を日本でもっともふるくから、長期にわたって維持してきた都市である。その結果、ここには都市特有の生活意識と価値観がそだった。

- ① 市民としての自由な自律性
- ② 多様な価値観の共存を許容する相対感
- ③ 学術や文化にたいする鑑識眼

などは、その一例である。くわえて、江戸幕府直轄の天領であった京都の人びとは、軍事と外交と通貨の発行をのぞく「市民自治の訓練」をうけてきた。町組ごとに（「市議員」に相当する）年寄りを、その互選で（「市長」に相当する）総年寄りを選出し、都市の保安や教育や産業政策などを策定し、みずからの手で都市を経営してきたのである。

この資質は、そのまま世界的な普遍性をはらむと同時に、京都をあたらしい学術と文化を創出する世界水準の大学都市として再開発するのに好適である。明治維新以降、とくに高度経済成長期に急速に肥大した日本の都市のおおくには、農村地域から移住した都市生活の経験のすくない人びとが多数すんでいる。そうした地域に、すぐれて都市的な学術や文化の創出を期待するのは困難だからである。

(9) 歴史都市の都市改造と景観保全

歴史都市・京都がかかえる最大の問題に、「古都保存法」の指定に関連する建築のたかさ制限がある。おおくの大学が京都の市街から流出するのも、盆地ゆえに用地の確保が

むずかしいうえ、高層建築が許可されないという問題がおおきい。あたらしい京都駅が、市街地を南北に分断する巨大な障害壁になったのも、建築のたかさ制限の弊害のひとつである。

背景には「高層建築は古都の景観を破壊する」とする、頑迷な固定観念がある。しかし、実際の京都は150万人ちかい人口が生活する、つねに「新都であろうとしつづけてきた近代都市」である。それを「文化遺跡・遺物・名所見物型観光都市」として封じこめるのは言語道断である。げんに、そこにのこる「文化遺跡・遺物・名所」は、京都が「永遠のみやこ」として活力を発揮した時代の記念物にほかならない。ならば京都は、今こそ「未来の文化遺産・遺物・名所」をうみだす学術と文化、それらにささえられる、あたらしい産業と経済の活力を回復すべきである。

そのためには、先端技術を駆使した超高層建築、地上に快適な空間をのこすための大深度地下開発など、大規模な都市改造をこころみ、そこにあたらしい学術と文化をうみ、しかも産業化する「世界水準の大学都市」の広大な空間を現出させなければならない。

とはいえ、それはなにも、京都の全域を超高層のコンクリート・ジャングルに変化させることを意味しない。周囲の山やまや緑地、ユネスコ世界文化遺産指定の寺社をはじめ、すぐれた木造建築や庭園、市街地でも町家とそれが形成する街区の歴史的美観は保全すべきである。「ふるい価値」と「あたらしい価値」とをせめぎあわせることによって始めて、京都はあたらしい魅力にみちた学術と文化を開花させることができる。

このことは「京都観光」のイメージを、よりのぞましいものに一新するうえでも、おおきな意味をもつ。たしかに今日、観光は「世俗化したあそび」の様相を呈し、自然や文化に破壊的に作用する場合もおおい。しかし最近、その観光を、多様な「まなび」や「いやし」の機会ととらえる人びとがふえ、従来の大衆観光（mass tourism）にかわる「もうひとつの観光（alternative tourism）」への関心がたかまっている。文化遺産観光（heritage tourism）、生態観光（eco-tourism）、民族文化観光（ethnic tourism）など、「持続可能な観光（sustainable tourism）」の可能性の追求は、地球社会全体にとっても重要な課題となりつつある。

それだけではない。国際観光の隆盛は、世界平和に貢献する可能性を秘めている。天安門事件（1990）や湾岸戦争（1991）が、国際観光を一時的に逼塞させたことが、このことを陰画的に、しかし雄弁にものがたっている。しかも、世界観光機構（WTO：World Tourism Organization）の推計によると、1995年における観光産業の市場規模は世界

中で3兆ドルにたった。これは8500億ドルと推計された同時期の世界中の軍事費の4倍弱にあたる。観光産業は、1987年に国際労働機関（ILO）が指摘したとおり、21世紀の人類社会の基幹産業になりつつある。観光をめぐる、こうした状況の劇的変化を先導する役割を京都ははたすべきである。

(10) 「あたらしい千年紀」への想像力につながる事業

ところで、あたらしい魅力にみちた学術と文化とは一体なになるのか。

第1は、いよいよ本格化する情報産業の時代にむけ、感覚器官をとおして人間の身体と精神を、きわめて直截によるこぼせ、たのしませ、めずらしがらせ、おもしろがらせることのできる美術や音楽、芸能やデザイン、あたらしいマルチメディアのコンテンツなどである。この分野における京都の人材や作品の蓄積はおおきい。それらを体系的に研究・整理し展示する機能をあわせもった施設、それらを打倒の対象とみなして、あたらしい創造につながすぐれた才能を京都に集結させうる事業が、最初にこころみられるべきである。

第2は、21世紀の人類社会が直面する2つの課題、つまり、

- ① 地球の環境容量の制約
- ② 諸民族のあいだの軋轢と葛藤の増大

といった問題に関連する学術・技術・文化の活性化である。ただし、けして短絡的に直接の効果が期待できるものだけに興味を集中すべきではない。そのクライテリアを以下に、おもいつくままの課題を列挙することで示唆しておく。

- ① 生物の多様性に関する博物学のおよび生態学的研究
- ② 炭酸ガスの固定に役立つ木造建築技術の伝承と再活性化
- ③ 自然環境ごとに特異な伝統的生活様式の未来的可能性の検討
- ④ 人口が高密度に集積する都市にふさわしい自動車と交通システムの開発
- ⑤ 新しい世界秩序とそれに対応する人権意識と政治思想
- ⑥ 無規範化が進行する都市の大衆社会における宗教と信仰がはたす役割
- ⑦ 21世紀の基幹産業としての国際観光に対応する自然保全と文化開発
- ⑧ その他さまざまな学術・芸術・文化に関する研究・開発

つまりは、時代のながれる方向を的確にとらえながら、しかも個々の研究者・芸術家・芸能者・ビジネスマン・一般生活者がたのしむことができ、かつまた、その能力が最大限

に発揮される課題と方法が検討されなければならない。

むすびにかえて

これまでののべた芸術作品の制作や芸能の公演、学術研究や文化開発、そのための施設整備などが本格化し、京都の全域が、

「あたらしい学術と文化を創出しつづける本格的かつ総合的な大学都市」

になりうる可能性が展望できたでしょう。そのとき、京都の産業・経済的な意味での基盤は何によってささえられるのか。おそらく、きたるべき本格的な情報産業の時代には、そうして姿をあらわした都市の全体が、巨大な産業・経済のインフラストラクチャーとして機能するはずである。

そうのべたところで、唐突ながらおもいだすのは、1997年7月の末に、たまたまおとずれた霊峰・白山のふもとの平泉寺である。その周辺の発掘調査によると、中世末期、白山信仰にささえられた平泉寺の南側の谷に3600房、北側の谷に2400房という壮大な宿舎があって、すくなくとも1万人ちかい僧たちが、そこにすんでいたという。彼らは日夜、いわば当時の先端の学術と文化をあらたにつむぎだす営為に邁進していたのであり、したがって、そこは、

「中世日本に成立した情報産業都市」

にほかならなかったのである。ならば、未曾有の工業化とゆたかな経済社会の建設に成功した現代日本の京都が、

「人類文明の未来につながる情報産業都市＝世界水準の本格的な大学都市＝ザ・ユニバーシティ・オブ京都」

を実現できないわけがない。本論文の第7部第2章は、そんな「現実的な夢」をえがきだそうとした構想にほかならない。